

秋田県文化財調査報告書第167集

一般国道7号八竜能代道路建設事業
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

——寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡——

1988・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財発掘調査報告書

一般国道7号八竜能代道路建設事業
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

——^{さむかわ}寒川Ⅰ遺跡・^{さむかわ}寒川Ⅱ遺跡——

1988・3

秋田県教育委員会



巻頭カラー図版1

寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡航空写真



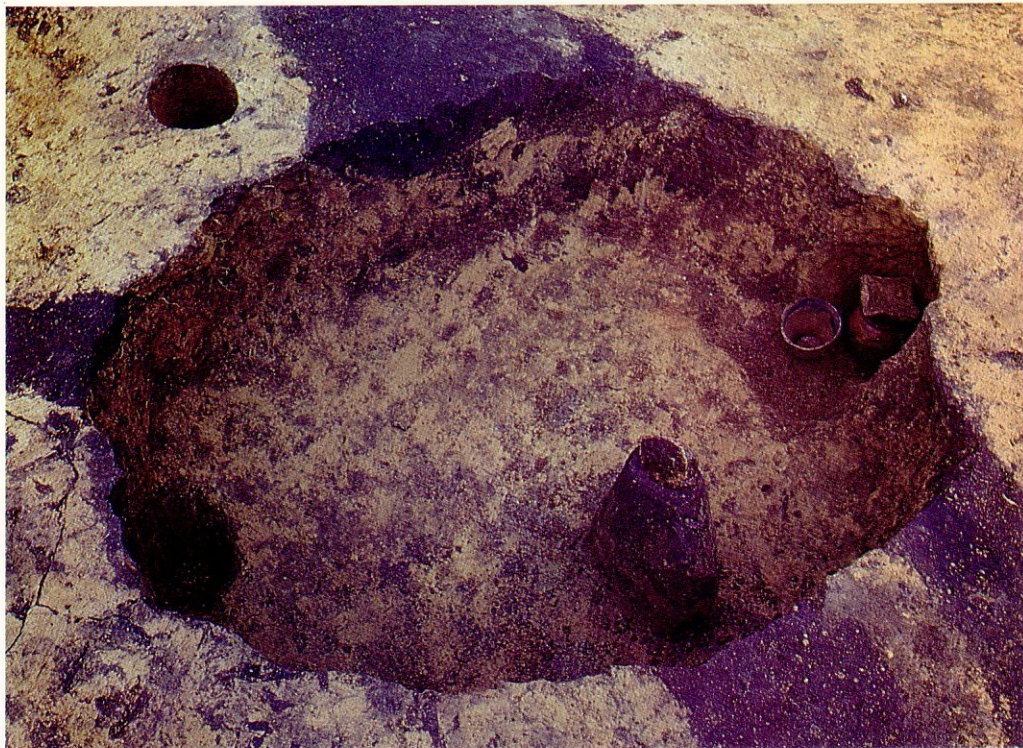
1. 第4号竖穴住居跡(東→)



2. 第4号竖穴住居跡土坑内遺物出土状況(南→)



3. 第1号捨場(南→)



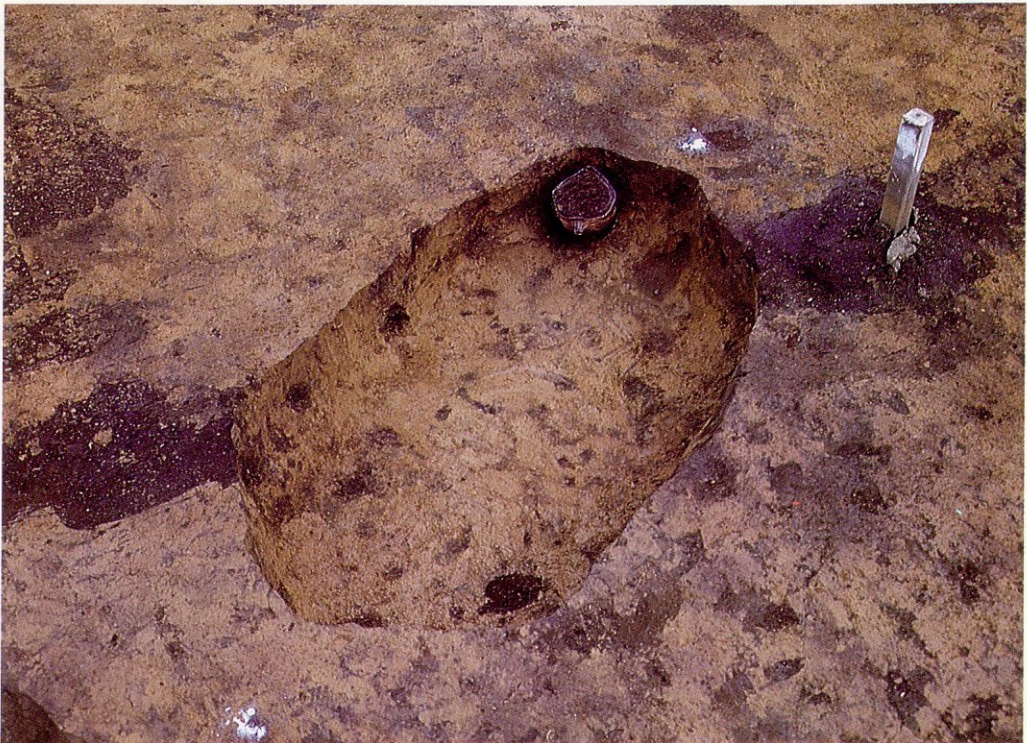
1. 第2号土壇墓(西→)



2. 第2号土壇墓東壁土器出土状況(西→)



1. 第2号土壙墓出土土器、刀子



巻頭カラー図版4

2. 第3号土壙墓(西→)



1. 第3号土壙墓東壁土器出土状況(南西→)

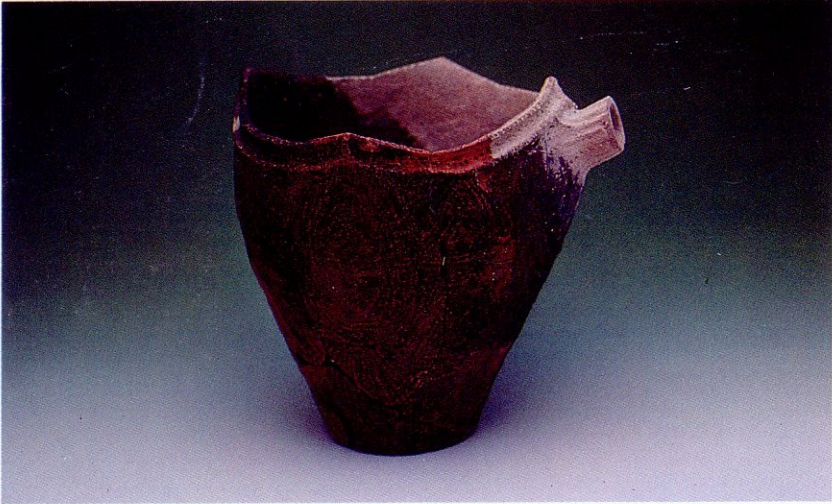


巻頭カラー図版5

2. 第3号土壙墓出土土器



1. 第4号土壙墓(西→)

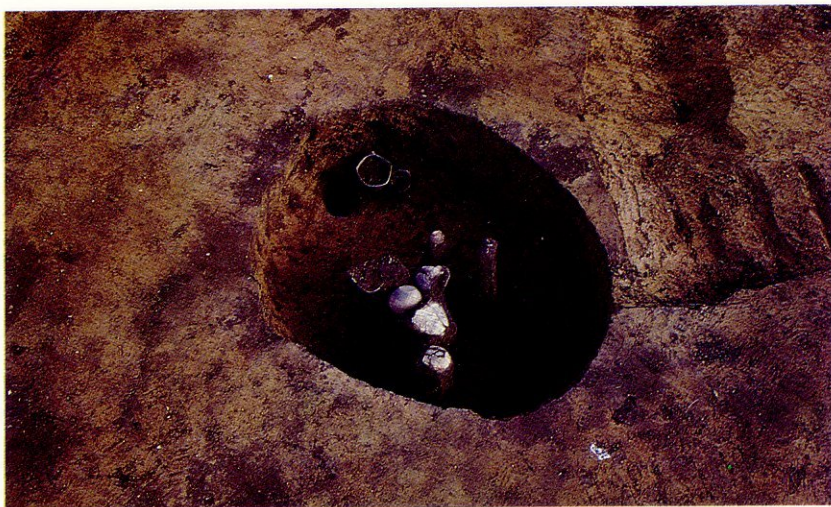


2. 第4号土壙墓出土土器



巻頭カラー図版6

3. 第4号土壙墓出土鉄斧



1. 第5号土壙墓(北西→)



2. 第5号土壙墓東壁土器出土状況(北西→)



巻頭カラー図版7

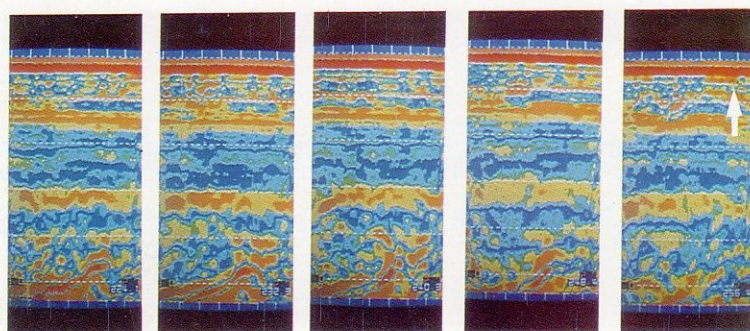
3. 第5号土壙墓出土土器



1. 第6号土壙墓(北西→)



2. 第1号製鉄炉(南→)



序

能代山本地方は古くから遺跡の発掘調査が行われた地域として知られ、柏子所貝塚、萱刈沢貝塚は県の指定史跡に、また杉沢台遺跡は国の指定史跡になっております。昭和51年に刊行しました『秋田県遺跡地図』には、能代市及び山本郡内に所在する 278箇所の遺跡が登録されており、その数の多さでも県内屈指の地域に数え上げられます。

このたび、この能代山本地方の地域活性化の役割を担う道路として一般国道7号八竜能代道路の建設が計画され、その路線の一部が寒川Ⅰ・寒川Ⅱ遺跡を通過することになりました。このため、秋田県教育委員会は昨年度この2箇所の遺跡の発掘調査を実施いたしました。

その結果、寒川Ⅰ遺跡では県内で最も古い縄文時代早期から前期の竪穴住居跡群を、寒川Ⅱ遺跡では続縄文文化期の土壙墓群と平安時代の竪穴住居跡群を検出することができました。いずれの遺跡も学術上貴重な遺跡であるとの評価を得るに至っております。

本書はこの2遺跡の発掘調査記録をまとめたものであります。

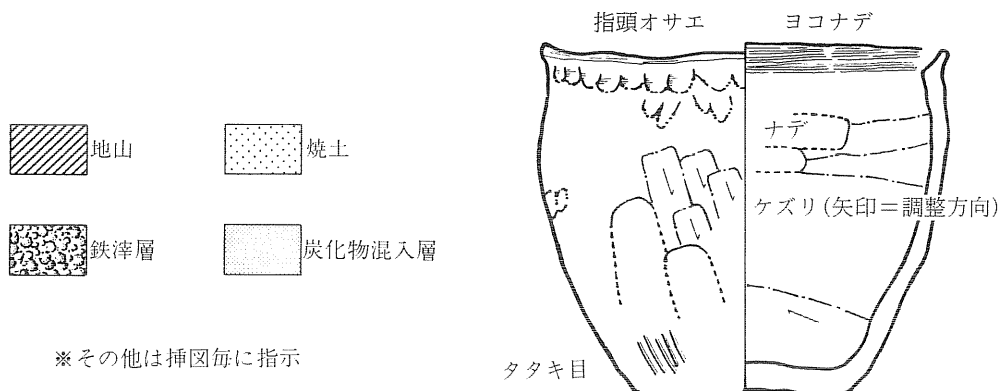
本書を上梓するにあたり、調査に際して種々御便誼いただいた建設省東北建設局能代工事事務所をはじめとする関係機関、各位に深く感謝の意を表します。

昭和62年11月30日

秋田県教育委員会
教育長 齋藤 長

例 言

- 1、本報告書は一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る寒川Ⅰ遺跡、寒川Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、本報告書の執筆分担は以下のとおりである。
利部 修…第3章第2節、第4章第1節、第2節の石器を除く項、第3節の1、3
三嶋隆儀…第5章第1節、第2節の縄文時代と平安時代の遺構、第3節の2、4
小林 克…第1章～第3章第1節、第4章第2節の2、遺物の項、第3節、第5章の縄文時代と平安時代の遺物、続縄文文化期の遺構と遺物、第3節の1、3
能登谷宣康…第4章第2節の石器の項、第3節の2
- 3、本報告書の編集は利部、三嶋、小林が行い、横山伸司の協力を得た。
- 4、本報告書の作成にあたり、以下の方々から助言を得た。記して謝意を表する。
穴澤義功、阿部義平、大沼忠春、及川研一郎、岡田茂弘、岡田康博、菊池徹夫、興野義一、河野本道、桜井清彦、佐藤信行、高橋信雄、高橋龍三郎、種市幸生、藤沼邦彦、藤原妃敏、
- 5、別編「自然科学的分析」のうち、
第1章～第3章はパリノ・サーヴェイ株式会社、第4章は学習院大学年代測定室に依頼した結果である。第5章「寒川Ⅱ遺跡出土鉄器の金属学的解析結果について」は岩手県立博物館、赤沼英男氏による。また巻頭カラー図版8の地下遺構のレーダー探査画面写真は、(有)桜小路電機、工藤博司氏の提供による。
- 6、土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に従った。
- 7、挿図中に使用したスクリーントーンと土師器甕実測図の凡例は下図に示すとおりである。



8、本文中の遺構名には、調査時に付した遺構登録番号と整理事業段階で付け替えた遺構番号とが記してある。両者の対応関係は次の第1表、第2表に示すとおりである。

第1表 寒川Ⅰ遺跡遺構番号対応表

遺構番号	登録番号	遺構番号	登録番号	遺構番号	登録番号	遺構番号	登録番号
第1号住居跡	S I 04	第8号土坑	S K 32	第2号土壙墓	S K 52	第4号炭焼遺構	S N 25
第2号住居跡	S I 10	第9号土坑	S K 38	第3号土壙墓	S K 60	第5号炭焼遺構	S N 27
第3号住居跡	S I 12	第10号土坑	S K 47	第1号土器埋設遺構	S R 63	第6号炭焼遺構	S N 28
第4号住居跡	S I 37	第11号土坑	S K 57	第2号土器埋設遺構	S R 65	第7号炭焼遺構	S N 46
第5号住居跡	S I 56	第12号土坑	S K 57	第1号焼土遺構	S N 78	第1号炭窯	S N 22
第6号住居跡	S I 72	第13号土坑	S K 76	第2号焼土遺構	S N 79		
第7号住居跡	S K 48	第14号土坑	S K 86	第3号焼土遺構	S N 80		
第8号住居跡	S I 14	第15号土坑	S K 87	第4号焼土遺構	S N 81		
第9号住居跡	S I 18	第16号土坑	S K 42	第5号焼土遺構	S N 82		
第10号住居跡	S I 21	第17号土坑	S K 26	第6号焼土遺構	S N 83		
第11号住居跡	S I 45	第18号土坑	S K 33	第7号焼土遺構	S N 84		
第12号住居跡	S I 75	第19号土坑	S K 31	第8号焼土遺構	S N 88		
第13号住居跡	S I 20	第20号土坑	S K 36	第1号溝跡	S D 61		
第1号土坑	S K 15	第21号土坑	S K 41	第2号溝跡	S D 03		
第2号土坑	S K 30	第22号土坑	S K 66	第3号溝跡	S D 09		
第3号土坑	S K 40	第23号土坑	S K 70	第4号溝跡	S D 19		
第4号土坑	S K 53	第24号土坑	S K 68	第5号溝跡	S D 02		
第5号土坑	S K 06	第1号捨場	S X R 54	第1号炭焼遺構	S N 05		
第6号土坑	S K 07	第2号捨場	S X R 77	第2号炭焼遺構	S N 16		
第7号土坑	S K 13	第1号土壙墓	S K 51	第3号炭焼遺構	S N 24		

第2表 寒川Ⅱ遺跡遺構番号対応表

遺構番号	登録番号	遺構番号	登録番号	遺構番号	登録番号	遺構番号	登録番号
第1号住居跡	S I 27	第3号土坑	S K 18	第23号土坑	S K 22	第1号土器埋設遺構	S R 16
第2号住居跡	S I 57	第4号土坑	S K 50	第24号土坑	S K 23	第1号炭窯	S N 47
第3号住居跡	S I 06	第5号土坑	S K 51	第25号土坑	S K 24	第2号炭窯	S N 48
第4号住居跡	S I 15	第6号土坑	S K 52	第26号土坑	S K 34	第3号炭窯	S N 49
第5号住居跡	S I 31	第7号土坑	S K 58	第27号土坑	S K 37	第1号製鉄炉	S N 14
第6号住居跡	S I 26	第8号土坑	S K 59	第28号土坑	S K 38		
第7号住居跡	S I 43	第9号土坑	S K 60	第29号土坑	S K 39		
第8号住居跡	S I 44	第10号土坑	S K 61	第30号土坑	S K 45		
第9号住居跡	S I 88	第11号土坑	S K 62	第31号土坑	S K 46		
第10号住居跡	S I 89	第12号土坑	S K 63	第32号土坑	S K 56		
第11号住居跡	S I 87	第13号土坑	S K 64	第33号土坑	S K 75		
第12号住居跡	S I 67	第14号土坑	S K 65	第34号土坑	S K 76		
第13号住居跡	S I 82	第15号土坑	S K 57	第35号土坑	S K 78		
第14号住居跡	S I 77	第16号土坑	S K 01	第36号土坑	S K 92		
第15号住居跡	S I 66	第17号土坑	S K 03	第1号土壙墓	S K 68		
第16号住居跡	S I 91	第18号土坑	S K 07	第2号土壙墓	S K 69		
第17号住居跡	S I 90	第19号土坑	S K 08	第3号土壙墓	S K 70		
第18号住居跡	S I 74	第20号土坑	S K 09	第4号土壙墓	S K 79		
第1号土坑	S K 11	第21号土坑	S K 10	第5号土壙墓	S K 80		
第2号土坑	S I 12	第22号土坑	S K 17	第6号土壙墓	S K 81		

目 次

序

例 言

目 次

図版目次

第1章 はじめに……………1	第5章 寒川Ⅱ遺跡—調査の記録—…………185
第1節 調査に至るまで……………1	第1節 遺跡の層位……………185
第2節 調査の組織と構成……………3	第2節 検出された遺構と遺物…………186
	第3節 まとめ……………285
第2章 立地と環境……………5	
第1節 遺跡の位置と地形……………5	図版1～図版106
第2節 能代平野の気候……………7	
第3節 遺跡周辺の土壌と植生……………8	別編 自然科学的分析……………405
第4節 能代平野南部の地形と地質…9	第1章 テフラ分析……………407
第5節 周辺の遺跡……………13	第2章 花粉分析……………412
第3章 発掘調査の概要……………17	第3章 炭化材同定……………416
第1節 調査の経過……………17	第4章 ¹⁴ C年代測定……………417
第2節 調査の方法……………19	第5章 寒川Ⅱ遺跡出土鉄器の 金属学的解析結果について 418
第4章 寒川Ⅰ遺跡—調査の記録—…………21	
第1節 遺跡の層位……………21	
第2節 検出された遺構と遺物…………22	
第3節 まとめ……………175	

図 版 目 次

巻頭カラー図版 1	寒川 I・II 遺跡航空写真
巻頭カラー図版 2 (寒川 I)	1、第 4 号竪穴住居跡 (東→) 2、第 4 号竪穴住居跡土坑内遺物出土状況 (南→) 3、第 1 号捨場 (南→)
巻頭カラー図版 3 (寒川 II)	1、第 2 号土壙墓 (西→) 2、第 2 号土壙墓東壁土器出土状況 (西→)
巻頭カラー図版 4 (寒川 II)	1、第 2 号土壙墓出土土器、刀子 2、第 3 号土壙墓 (西→)
巻頭カラー図版 5 (寒川 II)	1、第 3 号土壙墓東壁土器出土状況 (南西→) 2、第 3 号土壙墓出土土器
巻頭カラー図版 6 (寒川 II)	1、第 4 号土壙墓 (西→) 2、第 4 号土壙墓出土土器 3、第 4 号土壙墓出土鉄斧
巻頭カラー図版 7 (寒川 II)	1、第 5 号土壙墓 (北西→) 2、第 5 号土壙墓東壁土器出土状況 (北西→) 3、第 5 号土壙墓出土土器
巻頭カラー図版 8 (寒川 II)	1、第 6 号土壙墓 (北西→) 2、第 1 号製鉄炉 (南→) 3、レーダー探査画面
寒川 I 図版 1	1、遺跡全景 (南→) 2、寒川 I・II 遺跡の位置 (東→)
図版 2	1、第 1 号竪穴住居跡 (東→) 2、第 1 号竪穴住居跡 (東→) 3、第 1 号竪穴住居跡 (南→) 4、第 3 号竪穴住居跡 (南→) 5、第 4 号竪穴住居跡 (東→) 6、第 5 号竪穴住居跡 (南西→) 7、第 6 号竪穴住居跡 (南東→) 8、第 7 号竪穴住居跡 (南西→)

- 図版 3
- 1、第1号土坑（西→）
 - 2、第2号土坑（西→）
 - 3、第3号土坑（南西→）
 - 4、第4号土坑（北東→）
 - 5、第5号土坑（北→）
 - 6、第6号土坑（東→）
 - 7、第10号土坑（南東→）
 - 8、第9号土坑と周辺の遺物（南東→）
- 図版 4
- 1、第11号土坑（北東→）
 - 2、第12号土坑（北→）
 - 3、第14号土坑（南西→）
 - 4、MF49グリッド遺物出土状況（東→）
 - 5、第1号捨場（南→）
 - 6、第16号土坑（西→）
 - 7、第17号土坑（北東→）
 - 8、MB48グリッド遺物出土状況（南→）
- 図版 5
- 1、第8号竪穴住居跡（南東→）
 - 2、第9号竪穴住居跡（南東→）
 - 3、第9号竪穴住居跡炉（東→）
 - 4、第10号竪穴住居跡（東→）
 - 5、第10号竪穴住居跡炉（南→）
 - 6、第10号竪穴住居跡炉（西→）
 - 7、第11号竪穴住居跡（北東→）
 - 8、第11号竪穴住居跡炉（西→）
- 図版 6
- 1、第18号土坑（南→）
 - 2、第1号土壙墓（南→）
 - 3、第2号土壙墓（西→）
 - 4、第3号土壙墓（南西→）
 - 5、第1号土器埋設遺構（南東→）
 - 6、第2号土器埋設遺構（南→）
 - 7、第19号土坑（西→）
 - 8、第20号土坑（西→）

図版 7	1、第21号土坑（東→） 2、第22号土坑（南西→） 3、第23号土坑（南→） 4、第24号土坑（南→） 5、第2号捨場（東→） 6、第13号豎穴住居跡（南→） 7、第13号豎穴住居跡遺物出土狀況（北→） 8、第3号・第5号溝（北西→） 9、第1号炭燒窯（東→）
図版 8	炭燒遺構
図版 9	第1号豎穴住居跡出土遺物（1）表面
図版 10	第1号豎穴住居跡出土遺物（2）表面
図版 11	第2号・第3号豎穴住居跡出土遺物 表面
図版 12	第4号豎穴住居跡出土遺物（1）表面
図版 13	第4号豎穴住居跡出土遺物（1）裏面
図版 14	第4号豎穴住居跡出土遺物（2）表面
図版 15	第4号豎穴住居跡出土遺物（3）表面
図版 16	第4号豎穴住居跡出土遺物（4）
図版 17	第5号・第6号豎穴住居跡出土遺物 表面
図版 18	第4号土坑出土遺物 表面
図版 19	第5号・第8号～第11号土坑出土遺物 表面
図版 20	第7号豎穴住居跡、第12号・第14号土坑出土遺物 表面
図版 21	第5号・第6号・第10号・第11号・第14号土坑出土遺物 表面
図版 22	第8号・第9号豎穴住居跡、第16号土坑出土遺物
図版 23	1、第2号豎穴住居跡出土遺物 2、第17号土坑出土遺物 3、第1号土器埋設遺構蓋石 4、第10号豎穴住居跡出土遺物（1） 5、第9号豎穴住居跡出土遺物（2） 6、第9号豎穴住居跡出土遺物（3）
図版 24	第10号豎穴住居跡出土遺物
図版 25	第11号豎穴住居跡、第20号土坑、第2号土墳墓出土遺物

図版 26	1、第11号竪穴住居跡出土遺物		
	2、第12号竪穴住居跡出土遺物		
	3、第18号土坑出土遺物(1)		
	4、第1号土器埋設遺構・土器		
	5、第2号土器埋設遺構・土器		
図版 27	1、第1号土壙墓出土遺物		
	2、第2号土壙墓出土遺物		
	3、第3号土壙墓出土遺物(1)		
	4、第3号土壙墓出土遺物(2)		
	5、第18号土坑出土遺物(2)		
	6、MB48グリッド出土土器		
図版 28	第13号竪穴住居跡出土遺物		
図版 29	遺構外出土の縄文土器(1)	早期～前期	表面
図版 30	遺構外出土の縄文土器(2)	早期～前期	表面
図版 31	遺構外出土の縄文土器(3)	早期～前期	表面
図版 32	遺構外出土の縄文土器(3)	早期～前期	裏面
図版 33	遺構外出土の縄文土器(4)	早期～前期	表面
図版 34	遺構外出土の縄文土器(4)	早期～前期	裏面
図版 35	遺構外出土の縄文土器(5)	早期～前期	表面
図版 36	遺構外出土の縄文土器(5)	早期～前期	裏面
図版 37	遺構外出土の縄文土器(6)	早期～前期	表面
図版 38	遺構外出土の縄文土器(6)	早期～前期	裏面
図版 39	遺構外出土の縄文土器(7)	早期～前期	表面
図版 40	遺構外出土の縄文土器(8)	早期～前期	表面
図版 41	遺構外出土の縄文土器(9)	早期～前期	表面
図版 42	遺構外出土の縄文土器(9)	早期～前期	裏面
図版 43	遺構外出土の縄文土器(10)	早期～前期	表面
図版 44	遺構外出土の縄文土器(11)	早期～前期	表面
図版 45	遺構外出土の縄文土器(12)	早期～前期	表面
図版 46	遺構外出土の縄文土器(13)	早期～前期	表面
図版 47	遺構外出土の縄文土器(13)	早期～前期	裏面
図版 48	遺構外出土の縄文土器(14)	早期～前期	表面

図版 49	遺構外出土の縄文土器 (15)	早期～前期	表面
図版 50	縄文時代早期末葉～前期初頭土器細部		
図版 51	遺構外出土の縄文土器 (16)	前期・中期	
図版 52	遺構外出土の縄文土器 (17)	中期	
図版 53	遺構外出土の縄文土器 (18)	中期・後期	
図版 54	遺構外出土の縄文土器 (19) 後期		
図版 55	1、遺構外出土の縄文土器 (20)	後期	
	2、第24号土坑出土土器		
	3、遺構外出土の弥生土器 (1)		
図版 56	遺構外出土の弥生土器 (2)		
図版 57	遺構外出土の弥生土器 (3)		
図版 58	遺構外出土の弥生土器 (4)		
図版 59	遺構外出土の弥生土器 (5)		
図版 60	遺構外出土の弥生土器 (6)		
図版 61	遺構外出土の石器 (1)	トランシェ様石器	
図版 62	遺構外出土の石器 (2)	石筥	
図版 63	遺構外出土の石器 (3)	石筥	
図版 64	遺構外出土の石器 (4)	石筥	上；表面 下；裏面
図版 65	遺構外出土の石器 (5)	石鎌・石槍・削器	
図版 66	遺構外出土の石器 (6)	石錐	
図版 67	遺構外出土の石器 (7)	石匙他	
図版 68	遺構外出土の石器 (8)	搔器	
図版 69	遺構外出土の石器 (9)	石核	
図版 70	遺構外出土の石器 (10)	磨製石斧	
図版 71	遺構外出土の石器 (11)	石錘	
図版 72	遺構外出土の石器 (12)	石錘	
図版 73	遺構外出土の石器 (13)	石錘	
寒川Ⅱ 図版 74	1、道路北側調査区全景 (北→)		
	2、付替え道路部分 (西→)		
図版 75	1、第1号竪穴住居跡 (西→)		
	2、第2号竪穴住居跡土層 (北→)		
	3、第2号竪穴住居跡 (北→)		

- 4、第2号竖穴住居跡床面下の土坑（西→）
- 5、第1号土坑（西→）
- 6、第2号土坑（北→）
- 7、第3号土坑（西→）
- 8、第4号土坑（東→）
- 図版 76 1、第5号土坑（東→）
- 2、第6号土坑（南東→）
- 3、第6号土坑土層（南→）
- 4、第7号土坑（東→）
- 5、第11号土坑（東→）
- 6、第5号・第7号・第11号土坑（北→）
- 7、第1号土器埋設遺構（西→）
- 8、OB46グリッド円筒下層d1式土器出土地点（北東→）
- 図版 77 1、続縄文文化土壙墓の配置（南西→）
- 2、第1号土壙墓（南→）
- 図版 78 1、第2号土壙墓確認状況（西→）
- 2、第2号土壙墓埋土堆積状況（南→）
- 3、第2号土壙墓埋土内遺物出土状況（南→）
- 図版 79 1、第2号土壙墓埋土内遺物出土状況（南→）
- 2、第2号土壙墓東壁土器出土状況（西→）
- 3、第2号土壙墓完掘状況（南→）
- 図版 80 1、第3号土壙墓確認状況（南西→）
- 2、第3号土壙墓完掘状況（南→）
- 3、第3号土壙墓東壁土器出土状況（南→）
- 図版 81 1、第4号土壙墓完掘状況（南西→）
- 2、第4号土壙墓東壁土器、鉄斧出土状況（西→）
- 図版 82 1、第5号土壙墓確認状況（南西→）
- 2、第5号土壙墓埋土堆積状況（南東→）
- 3、第5号土壙墓遺物出土状況（西→）
- 図版 83 1、第6号土壙墓確認状況（西→）
- 2、第6号土壙墓埋土堆積状況（南東→）
- 3、第6号土壙墓完掘状況（北西→）

図版 84

- 1、第3号竪穴住居跡（北→）
- 2、第4号竪穴住居跡（北→）
- 3、第5号竪穴住居跡（西→）
- 4、第5号竪穴住居跡カマド（西→）
- 5、第6号竪穴住居跡（西→）
- 6、第6号竪穴住居跡カマド（西→）
- 7、第7号竪穴住居跡（西→）
- 8、第7号竪穴住居跡カマド（西→）

図版 85

- 1、第7号竪穴住居跡カマド覆土断面（西→）
- 2、第7号竪穴住居跡土師器皿出土状況（南西→）
- 3、第8号竪穴住居跡（西→）
- 4、第10号竪穴住居跡（北東→）
- 5、第12号竪穴住居跡（北西→）
- 6、第13号竪穴住居跡（西→）
- 7、第14号竪穴住居跡（西→）
- 8、第15号竪穴住居跡（西→）

図版 86

- 1、第15号竪穴住居跡カマド（西→）
- 2、第15号竪穴住居跡土師器坏出土状況（北東→）
- 3、第1号製鉄炉確認状況（南→）
- 4、第1号製鉄炉前庭部土坑覆土断面（東→）
- 5、第1号製鉄炉完掘状況（南→）
- 6、第1号製鉄炉（炉）壁（南→）
- 7、第1号製鉄炉（炉）壁（西→）
- 8、粘土採掘坑（南→）

図版 87

- 1、第1号～第3号炭焼窯（北→）
- 2、第2号炭焼窯（南→）
- 3、第1号炭焼窯（東→）
- 4、第3号炭焼窯（南→）
- 5、第17号土坑（北西→）
- 6、第18号土坑（北西→）
- 7、第19号土坑（南→）
- 8、第20号土坑（西→）

- 図版 88 1、第22号土坑（北→）
 2、第27号土坑（南→）
 3、第33号土坑覆土断面（北→）
 4、第34号土坑（レーダー探査地区）確認状況（西→）
 5、斜面側調査区南東部（南西→）
- 図版 89 遺構内出土縄文土器
- 図版 90 1、遺構内出土石器
 2、遺構外出土縄文土器・石器
- 図版 91 第2号土壙墓出土土器（1）
- 図版 92 第2号土壙墓出土土器（2）
- 図版 93 第2号土壙墓出土刀子
- 図版 94 第3号土壙墓出土土器
- 図版 95 第4号土壙墓出土土器
- 図版 96 第4号土壙墓出土鉄斧
- 図版 97 第5号土壙墓出土土器（1）
- 図版 98 第5号土壙墓出土土器（2）
- 図版 99 第5号土壙墓出土土器（3）
- 図版 100 第5号土壙墓出土土器（4）、第6号土壙墓出土土器、
 続縄文文化期土壙墓周辺出土石器
- 図版 101 平安時代遺構内出土遺物（1）
- 図版 102 平安時代遺構内出土遺物（2）
- 図版 103 平安時代遺構内出土遺物（3）
- 図版 104 平安時代遺構内出土遺物（4）
- 図版 105 平安時代遺構内出土遺物（5）
- 図版 106 平安時代遺構内出土遺物（6）、
 遺構外出土平安時代以降の遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

秋田県の日本海沿岸部に沿って縦走し、県の北部を米代川沿いに横断しながら青森県側へ抜ける一般国道7号は、新潟、山形、秋田、青森を結ぶ日本海側の重要な幹線道路である。秋田県内にあっては、秋田市を中継して本荘・由利の県南部と能代・山本・南秋田の県北部を、また県北の能代・山本の沿岸部と大館・北秋田の内陸部とをそれぞれ連絡し、地域産業の根幹としても民生の動脈としても重要な役割を果たしている。この一般国道7号の能代市―八竜町間のバイパスである八竜能代道路は、現在の一般国道7号が果たす機能を拡大・強化し、高速大量輸送時代の到来にさらに適合するよう、幾つかの問題点を解消する目的で計画された。

八竜能代道路の建設は次第に過密化を増す県北部沿岸地域の交通を緩和・円滑化し、従来の国道沿道の安全、生活環境の保全、冬期交通の安全等々を達成するものとされている。さらに将来的構想として現在建設中の東北横断自動車道に接続することも考えられており、高速交通体系の一端をも担い得ることを想定している。八竜能代道路が完成した場合、能代山本地方からの農産物の市場拡大、工場立地の促進など第一次産業、第二次産業の活性化が図られることも予想され、この地方への経済的波及効果が大きいと期待される。

建設工事の計画概要は、八竜町大曲から能代市浅内まで区間延長7,000m、幅員22m、設計速度80kmであり、第1種第3級の構造規格をもつ自動車専用道路^(註1)である。

この八竜能代道路の建設事業は昭和58年度からその一部が着手されたが、当初から計画路線上に寒川遺跡、萱刈沢遺跡などの周知遺跡の範囲の一部に係ることが知られていた。そのため、建設省東北建設局能代工事事務所は文化財保護法に基づいて、路線上の埋蔵文化財埋蔵地を確認するための遺跡分布調査と、工事によって失われる範囲の記録保存を目的とした発掘調査を秋田県教育委員会に依頼した。

昭和60年度に行われた路線上の遺跡分布調査では、八竜町側から館ノ上、萱刈沢Ⅰ、萱刈沢Ⅱ、福田、石丁、十二林、寒川Ⅰ、寒川Ⅱの8箇所^(註2)の遺跡の存在が判明した。これをうけて秋田県教育委員会と建設省東北建設局能代工事事務所は、協議の結果、昭和59、60年度に用地買収の完了した寒川Ⅰ、寒川Ⅱの両遺跡を昭和61年度調査実施遺跡として選定した。また、これとは別に昭和62年度以降に調査の予定される他の6箇所^(註3)の遺跡のうち、十二林遺跡、石丁遺跡、福田遺跡については、昭和61年度中に調査対象範囲を決定するための遺跡範囲確認調査を実施す

ることとした。

今次の発掘調査の直接的な契機と調査に至るまでの経過は概略以上の通りであるが、寒川遺跡の台帳登録のための踏査は昭和41年度に、遺跡の範囲確認調査は昭和57年度に行われている。^(註2)^(註3)

昭和52年度刊行の『秋田県遺跡地図』には、登録番号67『寒川遺跡』として平安時代の須恵器、土師器を出土する集落遺跡、と記載されている。これは昭和41年度の踏査を基にした記載であるが、表面採集その他によって得られた資料は浅内中学校に保管、とも記されている。昭和57年度の遺跡範囲確認調査は、能代市南部浅内地区一帯に計画された国営開拓建設事業に対応するため、同地区の横長根、福田、頭無上、成合などの各遺跡とともに実施された。寒川遺跡では、平安時代の須恵器、土師器片の散布する箇所が、昭和30年代終り頃からの自己開田によって部分的な削平を受けていたため、包含層保存の状態を確認し、その範囲をみきわめることに主眼が置かれた。調査の結果、A、B、Cの3地区において、縄文時代から平安時代にかけての遺物包含層が開墾時の影響を被ることなく保存されていることが確かめられた。さらに、このA、B、Cの3地区のうち、最も広い面積を有するA地区では、平安時代の堅穴住居跡の存在が認められた他、地点内の沢を隔てた北半部と南半部では出土遺物に差があり、北半部は平安時代を中心とする時代、南半部は縄文時代前期を中心とする時代に営まれた遺跡であることも明らかになっている。

寒川遺跡内を通過する八竜能代道路はちょうどこのA地区の中央部を縦断するように設計されている。したがって発掘調査を必要とする範囲は、間に入る沢によって2つに分けられている。すなわち、南側の舌状台地中央部、北側の台地平坦部とそれに続く斜面である。八竜能代道路の路線にある遺跡は、発掘調査に係る区域が路線内で分かれてある場合には、異なる遺跡として扱うことが遺跡分布調査時からの慣行であったため、今回の発掘調査に際しても、前者を寒川Ⅰ遺跡、後者を寒川Ⅱ遺跡としている。

なお、寒川Ⅰ・寒川Ⅱ遺跡という遺跡名称は、昭和57年度の『能代山本地方史研究 第2号』^(註4)に掲載された能代山本地方の遺跡分布図、並びに遺跡地名表中で既に用いられている。この中では寒川Ⅰ遺跡として現在の一般国道7号脇の地点が、寒川Ⅱ遺跡として昭和52年度の『秋田県遺跡地図』で寒川遺跡として採り上げた地点があげられている。したがって、昭和57年度の遺跡範囲確認調査と『能代山本地方史研究 第2号』掲載の分布調査の成果から、旧来「寒川遺跡」として呼称された地点は少なくとも4地点に分かれて存在することが知られる。

(註1) 建設省能代工事事務所「一般国道7号八竜能代道路」パンフレット 昭和60(1985)年

(註2) 村木悦也他「秋田県遺跡地図」秋田県教育委員会 昭和51(1976)年

この記述の中に面積約0.5haとされているが、これは昭和57年実施の範囲確認調査でA地

区～C地区の3地区を包括した区域の面積と思われる。

(註3) 橋本高史「寒川遺跡」『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県教育委員会 昭和58(1983)年

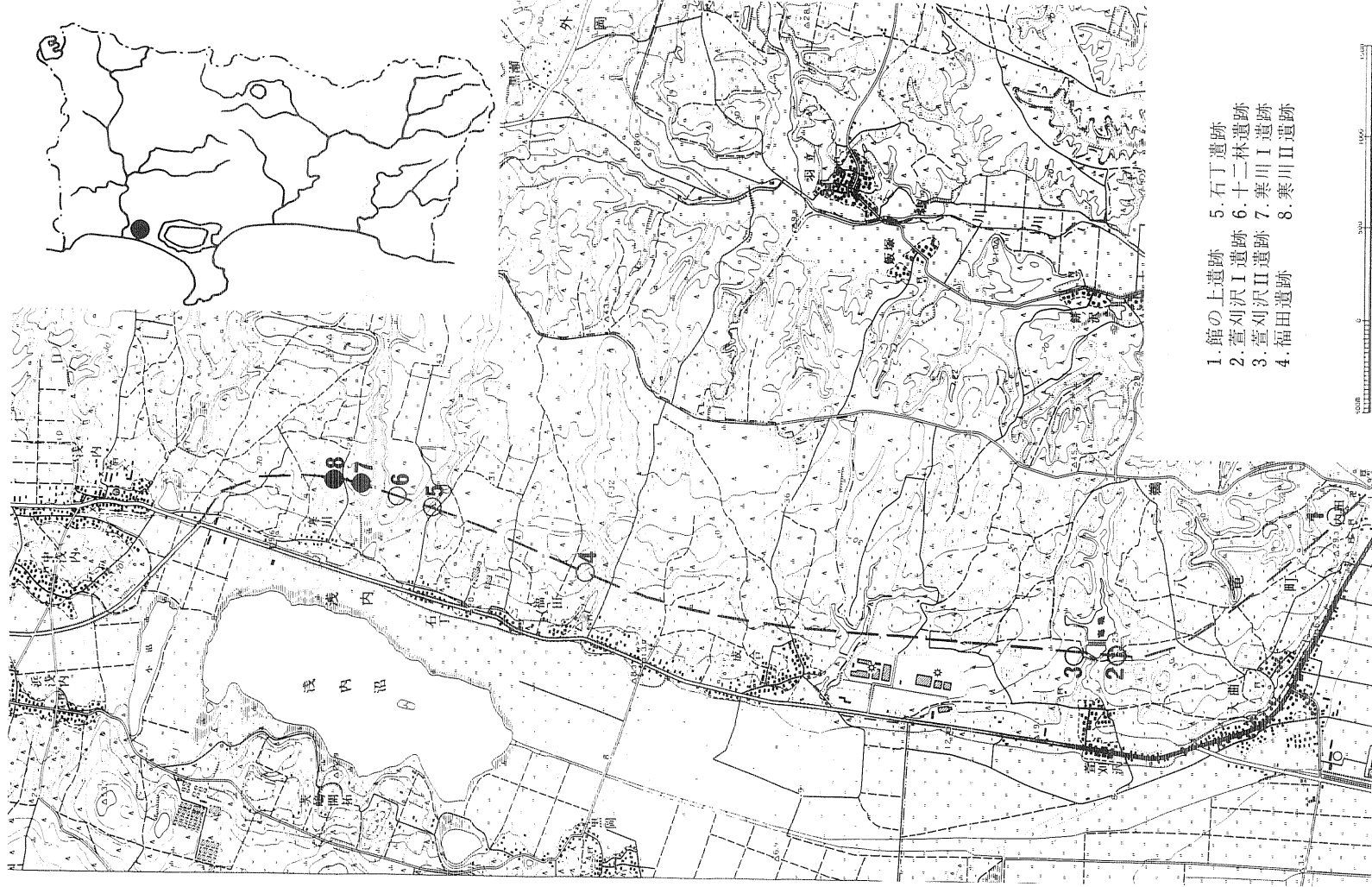
(註4) 武田孝義「現場からの報告；遺跡破壊の現状」『能代山本地方史研究 第2号』

能代山本地方史研究会

昭和58(1983)年

第2節 調査の組織と構成

遺跡所在地	寒川Ⅰ遺跡；秋田県能代市浅内字十二林6番地 寒川Ⅱ遺跡；秋田県能代市浅内字寒川家の上48番地
調査期間	昭和61年8月18日～12月5日
調査面積	寒川Ⅰ遺跡；3,000㎡ 寒川Ⅱ遺跡；3,900㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	小林 克（秋田県埋蔵文化財センター 文化財主事） 利部 修（同 学芸主事） 三嶋隆儀（秋田県立博物館 派遣職員）
調査事務担当者	加藤 進（秋田県埋蔵文化財センター 主 査） 高橋忠太郎（同 主 事）
調査協力機関	建設省東北建設局能代工事事務所 能代市教育委員会 能代市浅内地区自治会 能代山本地方史研究会



1. 館の上遺跡
2. 萱刈沢I遺跡
3. 萱刈沢II遺跡
4. 福田遺跡
5. 石丁遺跡
6. 十二林遺跡
7. 寒川I遺跡
8. 寒川II遺跡

第1図 一般国道7号八電能代道路関係遺跡位置図

第2章 立地と環境

第1節 遺跡の位置と地形

秋田県の北部を東西に流れる米代川は、その河口に広大な低平地を形成している。秋田県の北西一隅を占めるこの能代平野は、奥羽脊梁山脈北部の十和田湖あたりから分岐して青森県津軽平野との間に横たわる白神山地をその北縁にもち、脊梁山脈中、駒ヶ岳付近から西へ塊状に突出した太平山地の西麓がその東側を限っている。また南では、山形県境付近から北へのびる出羽丘陵の北側、雄物川河口に広がる秋田平野と連続し、さらに西側は、米代川北部の峰浜村から男鹿半島北部の若美町まで延長35kmの長大な砂丘を介して日本海へ開いている。

寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡は、この能代平野の中央からやや南寄りの北緯40度9分、東経140度2分の地点にある。遺跡のある地点は、JR五能線能代駅から6km、米代川の河口からは8km南に離れた位置にあたる。寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡に至るために、現在の一般国道7号を能代市街地から秋田市方面へ上ると、八竜町に達するまでの間に浅内、寒川、石丁、福田、成合と5つの集落を通る。これらの集落は、米代川の旧河道でもある砂丘後背部の低湿地に臨む標高15～30m程の台地の縁に、間にいくつかの沼沢地をはさみながら点在するが、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡はこのうち、能代砂丘の伏流水が低湿地上につくった浅内沼の北東岸に臨む、寒川集落の東側にある。遺跡のある地点から現在の日本海汀線までは3.3kmの距離を隔てている。

寒川集落の東側の台地は、北側は小沼をその西端にもつ沢で、南側を寒川堤に繋がる沢によって区切られた、上面の面積約80haの台地である。現在、その面積のほとんどが昭和30年代終り頃から断続的に進められた周辺農家による自己開田と、昭和60年度に実施された大規模国営開拓事業とによって平坦な耕作地と化している。寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡のある地点は、十二林遺跡に面した台地の南側縁部分である。寒川集落の位置する台地とその南側石丁集落のある台地との間の沢は、十二林遺跡の立地する舌状台地の先端部を分岐点として、2つの支谷に分かれている。北側の沢は分岐したところで、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡のある台地南縁を開折する小支谷をつくっている。今回の調査で寒川Ⅰ遺跡とした箇所は、この小支谷南側の小舌状台地部折であり、寒川Ⅱ遺跡とした箇所はその北側の台地平坦部と寒川Ⅰ遺跡側に面した緩斜面である。

寒川Ⅰ遺跡はその上面での標高約18mを測り、寒川Ⅱ遺跡との間にある沢との比高は約6mである。西側へ突き出した舌状台地の上面の北側半分が尾根状の高まりを呈し、南側半分は緩く傾斜しながら、十二林遺跡との間の沢へ降りている。舌状台地の東の付け根にあたる部分は

第2図 寒川I・II遺跡の位置と周辺地形 (A, B, Cは昭和57年度範囲確認調査時の遺跡範囲)



既に開墾されて畑地となっているが、調査の対象となった台地中央部およびその先端部はその残地であり、コナラ、ミズナラ、クリなどの低木と、その周囲を埋めるクマザサとによって覆われている。

寒川Ⅱ遺跡は、台地上面での標高が約24mを測り、寒川Ⅰ遺跡との間にある沢との比高は12mである。寒川Ⅰ遺跡との間にある沢は、その沢頭のあたりで台地を大きく削って急崖をなすが、調査区の設定された西側では、斜度13度～16度の比較的緩い斜面をつくる。また、台地上面は耕作地造成のための天地返しをうけて現在は平坦な畑地となっているが、本来の自然地形はややうねりをもっていたらしく、調査区の北側では調査区内よりも1m近くも低い。地形図上の等高線も台地南縁に沿って西へ突き出した曲線を描いている。

寒川集落から台地の南縁を東に走る道路が、寒川Ⅱ遺跡の調査区を台地上面側と斜面側とに分けているが、現在台地上面は陸稲、杉の苗圃などの耕作地で、斜面側はクロマツとその間に生える低木による雑木林となっている。

第2節 能代平野の気候

気候区分上、日本列島北部に位置する秋田県は亜寒帯に属しているが、日本海沿岸部と内陸部では季節風の影響により、その気候条件に差がある。

能代平野南部山本町での昭和57年度の調査によれば、年間の降水量は1,176mm、冬季の最深積雪量は30cm、年平均気温10.2℃、最高気温30.5℃、最低気温-5.8℃という観測値が得られている^(註1)。

これは、ほぼ同じ緯度の内陸部に位置する鷹巣盆地での観測値と比較すると、降水量では60%程度、最深積雪量で65%程度の値しかなく、最高気温、最低気温は5℃前後低く、また高くなっている^(註2)。また、年間を通しての日照時間は1,834.5時間で、太平洋側の久慈市の日照時間が1,872.5時間であるのと比べると、いくぶん短い時間である^(註3)。これは、11月下旬～4月上旬までの降雪日数が67日間(昭和57年度)を占めるという日本海側特有の気象条件による。風向は冬季に偏西風が強く、平野部からやや山間部に入れば内陸の気候に属することになり、積雪量が3mに達する年もある。

(註1) 関喜四郎他「森岳・羽後浜田」『土地分類基本調査』秋田県 昭和59(1984)年

(註2) 関喜四郎他「鷹巣」『土地分類基本調査』秋田県 昭和60(1985)年

(註3) 昭和61年度、能代消防署、久慈消防署の観測記録データ

第3節 遺跡周辺の土壌と植生

遺跡を含む能代平野南部の土壌は、砂丘地、沖積地、台地上でそれぞれ異なっている。

海浜の砂丘地では風積による砂丘未熟土壌（内灘統）が占め、砂丘後背部の沖積地では集積による黒泥土壌（井川統、烏帽子統）と水積による細粒・粗粒グライ土壌（幡野統、琴浜統）とに分かれる。また沖積地の西側にある浅内台地、成合台地上には、風積の黒ボク土壌（野々村統、大川口統）、および淡色黒ボク土壌（根岸統）、粗粒黒ボク土壌（切明統）などが堆積して^(註1)いる。

これらの土壌は、台地上の淡色黒ボク土壌である根岸統が林野性土壌である他は、全て農地性の土壌である。したがって、遺跡周辺では自然のままの植生が観察されることはほとんどない。林野性土壌である根岸統上ではクロマツ、杉などの人工林が生育し、その隙間をコナラ、ミズナラ、クリ、ヤマザクラなどが埋めている。台地上は現在その大部分が農地として利用されているために、こうした植生も次第に減少する傾向にあり、僅かに沢に面した箇所であるとか、台地上で小丘状に突出した部分で見られるに過ぎない。また林地が耕作地と接する箇所では徐々に草本類の繁茂へと植生も移行しているようである。林野性の植性を示す部分を取り囲むように分布する黒ボク土は、主に果樹園、畑地などの耕作土として利用されているが、部分的には近年の大規模な開拓によって水田化されている箇所もある。

台地下の黒泥土壌、グライ土壌の分布する沖積低湿地は、水田として利用されている。近世末期に開田されたといわれ、以来、水はけの悪い湿地帯に盛砂したり、また軽石粒を含む泥土を除いたりすることにより水田化が進められてきた。現在では、能代市、八竜町、山本町、琴丘町、八郎湯町などの米代川左岸から南へのびる広大な地域一帯が、ほぼ全域水田によって埋め尽されている。昭和58年5月26日に発生した日本海中部地震の際には、遺跡のある地点の西北側の低湿地や低湿地と砂丘地が接する部分で、盛土された砂層を破って水が噴き出す液状化現象が多発し、水稻にも大きな被害がでた。これも含水率の高い土壌性質と、砂丘砂によって盛土しながら造成した水田下部の軟弱な地盤構造に原因するとされている。

砂丘地はクロマツの人工林が防風林としての役割を果たしている他、溜地を造っての灌漑により、農地として利用されている部分もある。日射量の多い南側に面した斜面は気温が高いため、夏季野菜の栽培に適している。また一部では水田として利用されている。

(註1) 関喜四郎他「森岳・羽後浜田」『土地分類基本調査』秋田県 昭和59(1984)年

第4節 能代平野南部の地形と地質

土地分類基本調査『森岳・羽後浜田』によれば、能代平野南部の地形は山地、丘陵地、台地、低地と大きく4つに区分されている。このうち、遺跡の立地と関わる台地および低地について、この土地分類基本調査の説明を中心に記述する。

能代平野は日本海側の平野の中では例外的に更新世の海成段丘の発達の良い地域で、平野南部に広がる台地群は下末吉海進時に伴う海成層からなる、^(註1)といわれている。米代川の左岸から八郎潟東岸まで続くこの台地群は、房住山の南から琴丘町、山本町の山地・丘陵地を通過して八郎潟東部承水路北端に注ぐ三種川により、南北2つの区域に分かれる。三種川の北ではその支流である鶴川川の低地とその支谷の周囲に広く分布しているが、三種川より南では山本町森岳付近でやや広い分布が認められるものの、琴丘町鯉川付近に至っては八郎潟東岸まで迫る丘陵地との間に僅かに狭在する程度である。

三種川以北の台地群の西縁は能代市浅内から八竜町大曲に至るまで直線的にのびている。その方向はおおよそN-15°-Eで、約3km西にある現在の海岸線とも、また約8km東にある丘陵地との境界線とも平行している。この三種川以北の台地群は、それぞれの標式となる地域名で志戸橋野、豊岡、金光寺野、成合、大曲と5つの台地に呼び分けられ、関東平野の下末吉～武蔵野～立川面に対比されている。

この台地群のうち西側にあって、東西約25km、南北約7.7kmで細長くのびる成合台地は武蔵野面相当の堆積面とされ、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡もこの台地面に立地する。南北に長い成合台地の東西両側縁はそれぞれ侵食谷によって開析されているのであるが、きわめて対照的な地形を呈している。浅内低地側に面した西縁は直線的で、これと直角に1~1.5km程の間隔をおいて5つの谷が東西に開析している。それぞれの長さは1.5km程で、また各々平行しているために、成合台地はこれら西縁からのびる谷によって6つのブロックに分割された景観をみせる。これに対して鶴川川低地に面する東縁は、長さ1km未満の谷が櫛歯状にその全縁にわたって開析しているため、細かく入り組んだものとなっている。このような地形の差は成合台地東西両縁の開析過程の違いに起因すると推測される。すなわち、西縁の開析谷は武蔵野面相当の成合台地が形成された後に直接海へ注ぐ侵食谷としてできあがったが、東縁はその頭部で下末吉面相当の志戸橋野台地と、その下位の成合台地の境に沿って開析した鶴川川形成後に侵食を始めたものと思われる。

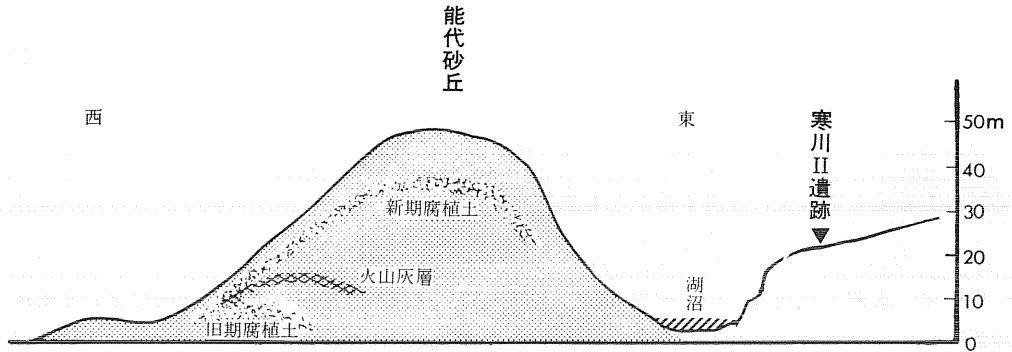
成合台地の表層地質は基盤層として固結堆積物である天徳寺層があり、その上を半固結堆積物である潟西層が覆い、さらにその上に未固結堆積物である砂がち堆積物が載るとされる。天徳寺層は泥岩、シルト岩を主とする鮮新世の堆積物で構成され、成合台地の東縁では一部に露出する箇所も認められる。潟西層は礫、砂および粘土、泥を主体とする更新世の堆積物で構成さ

れ、最上位は風化土壌、下位は穿孔貝の穿孔を持った泥質岩、また場所によっては分級の悪い亜角礫様の礫が分布するとされる。そうした特徴から潟西層の堆積環境は、海岸から陸域へと変化する時期の、潮間帯のような極く陸域に近いところと推定されている。潟西層堆積後に起った下末吉海進は、その面を侵食して広い海成段丘を形成したとされる。最上層として台地全面に載る砂がち堆積物は、日本海沿岸の砂丘砂と同じ中粒砂からなり、あるいは一万年前までに堆積を終えた古砂丘に該当するかとも思われる。

成合台地の西縁には浅内低地面との比高10mの大曲台地面が、幅100m未満の帯となってめぐっている。大曲台地面は立川面相当の侵食面であるとされ、基盤はやはり潟西層によって構成される。成合台地の北東側には下末吉面相当面、武蔵野面相当面の志戸橋野台地面が広がっている。成合台地とはその北部山本町逆川付近で繋がっているが、この逆川付近は、米代川へ下る水系、鶴川川を介して八郎潟へ注ぐ水系、成合台地を東西に開析する水系の3方向の水系頭部が集って、文字通りの分水源点となっている。志戸橋野台地の南には武蔵野面相当の金剛寺野台地、下末吉面、武蔵野面相当の豊岡台地がある。

低地のうち、成合台地の西側に広がる浅内海岸低地は、その西側の日本海岸砂丘（能代砂丘）との間に幅1,100～1,500mで南北に長く続く海岸低地である。土壌統は黒泥土壌、グライ土壌であるが、それらは海水面が上昇するのと、成合台地の中央を南北に走る断層の西側が下降することによる集積作用で形成されたと説明されている。浅内海岸低地は、能代市街地の載る砂丘地を北の縁として南は八郎潟まで続いている。そのため低地面を流れる水系も砂丘地を迂回し米代川へ下るものと八郎潟へ注ぎ込むものがあり、その分水界線は浅内沼の北側にあるとされる。浅内低地内を流れる水系は、その西側にある砂丘地からの伏流水、東側成合台地からの沢水などが集まってできるが、浅内沼をはじめとする低地上に点在する沼は、この砂丘地からの地下水面が露出したものと説明されている。

日本海岸砂丘は、北から八森沢目砂丘地、落合砂丘地、能代砂丘地と続くが、米代川河口の南からのびる能代砂丘は、最大幅1.7km、延長は若美町玉の池付近まで25km程ある。またその高さは浅内沼の南の黒岡付近で標高62mにも達する。日本海岸砂丘は弥生時代頃を境として区分される旧砂丘、新砂丘が積み重なって堆積した累重砂丘であり、砂丘の構成層は上位から新期砂丘砂Ⅰ、新期腐植土層、新期砂丘砂Ⅱ、旧期腐植土層、旧期砂丘と細分(註2)されている。砂丘砂と腐植土層の堆積状態は、米代川河口付近を境として異なる砂丘形態に応じて違いが認められている。米代川河口北側の砂丘形態は、水沢川、竹生川などの小河川が砂丘を分断して日本海へ直接流れ込んでいること、米代川河口付近では日本海に面した外列砂丘の他に現在能代市街地が立地する内列砂丘が存在すること、河口の南側では切れ目のない砂丘が続くが、その南部では外列砂丘の後背部、浅内低地や八郎潟に面した側に外列砂丘と直交する縦列砂丘、所謂「楠



第4図 能代砂丘南部地形断面図
(工藤英美;1987に加筆)

「歯形砂丘」が形成されていることと、それぞれの特徴があげられている。このうち砂丘砂中に新期腐植土と旧期腐植土が確認できるのは河口の北側と南側であり、河口付近では新期腐植土層のみが確認されるという。

日本海岸砂丘上では縄文時代後期前葉から平安時代までの計9箇所の遺跡が、北部の峰浜村と南部の男鹿市五里合に集中して確認されている。これらの遺跡のうち峰浜村蝦夷倉遺跡では縄文時代後期前葉と平安時代の土器が旧期腐植土中から出土したとされる。また八森町土井遺跡や能代市上ノ山Ⅱ遺跡の平安時代末葉の竪穴住居跡の覆土中に検出された苦小牧火山灰が、能代砂丘中、黒岡付近の露頭にあらわれた新期砂丘砂Ⅱの中にも検出されており、考古学的にはこの2つの事実が鍵となって、砂丘構成層の編年が組み立てられている。すなわち砂丘をつくった飛砂の休止期、砂丘の安定期を示す旧期腐植土層、新期腐植土層は各々縄文時代後期～平安時代、鎌倉時代～室町時代頃と推定されている。^(註4)

(註1) 藤本幸雄「能代沖積平野の地史」『能代山本地方史研究』第4号 昭和62(1987)年

(註2) 工藤英美「能代砂丘について」『能代山本地方史研究』第4号 昭和62(1987)年

(註3) 永瀬福男「古環境の復元」『能代山本地方史研究』第4号 昭和62(1987)年

(註4) (註2)に同じ

第5節 周辺の遺跡

寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡の立地する成合台地とその東側に位置する志戸橋野台地、金剛寺野台地には多くの遺跡が存在し、既に調査の行われた遺跡もいくつかある。

旧石器時代の遺跡としては昭和58年に発掘調査された此掛沢Ⅱ遺跡が、本遺跡の北北東1.25kmの地点にある。この遺跡では、仙北郡協和町米ヶ森遺跡を標式とする米ヶ森型台形石器やナイフ形石器、局部磨製石斧などからなる石器集中箇所が検出されている。米ヶ森型台形石器は昭和50年の米ヶ森遺跡の発掘調査で確認され、その特徴ある形態、製作技法から後期旧石器文化の一型式として認められた。東北地方の後期旧石器文化のなかでの編年的位置についてはその後の研究によって次第に明確にされている。此掛沢Ⅱ遺跡から出土した資料は、その翌年調査された秋田市下堤G遺跡、河辺町七曲台遺跡群からの資料とともに、秋田県内のナイフ形石器文化の背景を知る大きな手掛りとなるものである。

また昭和56年此掛沢Ⅱ遺跡の調査と相前後して、能代市南部の浅内地区で行われた国営能代開拓建設事業に伴う遺跡分布調査、範囲確認調査で、本遺跡の東1.8kmにある逆川遺跡(渡道遺跡)から旧石器時代のもので判断された石刃、石核等が出土している。Toolとして加工、使用されたものを含んでいないが、地山面との漸移層である暗褐色土中から出土したとされ、此掛沢Ⅱ遺跡同様、成合台地上に立地する旧石器時代遺跡に数え上げられる。

その他米代川の右岸になるが、成合台地と同じ海岸段丘である東雲開拓台地上に立地する館下Ⅰ遺跡からの、杉久保型ナイフ1点が出土している。

能代山本地方の縄文時代前期から中期の遺跡では、東雲開拓台地上の杉沢台遺跡、館下Ⅰ遺跡、成合台地上の萱刈沢貝塚などが、調査の行われた遺跡として著名である。また米代川左岸の段丘上、能代市鶴形にある上ノ山遺跡からは、前期初頭に編年される貝殻条痕文を施した土器や円筒下層式直前におかれる土器などが、開田工事に際して採集されている。

このうち、山本郡八竜町に所在する萱刈沢貝塚は、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡と同じ成合台地上、南へ約4.2km離れた地点に位置する。縄文時代前期末の円筒下層d式から中期中葉の円筒上層d式までの時期に営まれた遺跡であり、昭和33年から48年まで発掘調査が行われた。調査の結果、竪穴住居跡16軒、フラスコ状土坑14基が検出されている。萱刈沢貝塚は日本海沿岸北部の汽水性貝塚として、そのデータも比較的早い時期に紹介されている。また杉沢台遺跡の調査で全国的に注目されて以来、北日本の縄文時代前期から中期中葉の住居形態として定着した認識になりつつあるロング・ハウスも、その中形のものには既にこの萱刈沢貝塚の調査によって知られていた。近年では東北地方北部の円筒土器文化の住居形態を知るための資料としても扱われている。この他、成合台地上には縄文時代中期のフラスコ状土坑の存在で知られる相染森遺跡があ



第5図 周辺遺跡分布図

る。

縄文時代後・晩期の遺跡としては、能代市ユズリ葉遺跡^(註13)、柏子所貝塚^(註14)、琴丘町高石野遺跡^(註15)などがある。

柏子所貝塚は成合台地の北縁、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡の北東3.2kmの地点に位置する。昭和30年から31年にわたって3回の発掘調査が行われ、昭和30年には県の史跡指定もうけている。縄文時代晩期大洞B～C式期に形成された貝塚で、調査によって幼児骨を含む8体分の屈葬人骨が見つかっている。秋田県内では鷹巣町藤株遺跡、秋田市上新城中学校遺跡、地方遺跡、東由利町湯出野遺跡、平鹿町梨ノ木塚遺跡、平鹿遺跡など、近年、縄文時代晩期の墓址調査例が増加している。柏子所貝塚の調査はこうした最近の調査例の魁であり、かつより広く東日本一円に広がる亀ヶ岡文化の葬制を語る上でも欠くことのできない資料である。

高石野遺跡は三種川をはさんだ成合台地の対岸、森岳・寒城台地、横長根台地上に立地する縄文時代晩期の遺跡で、昭和57年に発掘調査された。主に大洞B～BC式を中心とした時期の遺跡で豊富な土製品が出土し、ことに3点の土笛は広く一般にも紹介され話題を集めた。

能代山本地方での弥生時代の遺跡については不明な部分が多い。弥生時代の遺跡とされる場合でも、当該時期の遺物が遺構に伴わず単独で出土する例である。米代川右岸の杉沢野遺跡^(註16)、金山館遺跡^(註17)、左岸の真壁地遺跡^(註18)などがそうした遺跡例としてあげられる。

現在までのところ、能代山本地方全域をみても、弥生時代以降奈良時代までの間におくことのできる確実な遺跡はなく、遺跡の数が増えるのは平安時代になってからである。寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡の北東1kmには平安時代の集落跡である上の山Ⅱ遺跡^(註19)がある。昭和58年と60年の2箇年にわたる調査の結果、竪穴住居跡20軒、土坑23基が検出されている。上の山Ⅱ遺跡の調査では竪穴住居跡の覆土中から、朝鮮半島の白頭山起源の苦小牧火山灰^(註20)が検出されている。苦小牧火山灰の命名者である町田洋氏は、その降下年代を11世紀から13世紀の間とした。この年代幅は地質学的にも考古学的にもかなり広い間隔であるが、工藤英美氏はこれに対し独自の調査結果を加えた上で12世紀後半という降下年代を与えている。この他『野代営』擬定地である大館遺跡^(註21)は本遺跡の北東8kmにあり、昭和46年から51年までの発掘調査で竪穴住居跡32軒、土坑21基などを検出している。この中には金属生産遺構1基が含まれ、本遺跡の北8.5kmにあって昭和52年に調査された中台遺跡^(註22)の製鉄炉とともに、県内では早くから金属精錬址の確認された例として特筆される。また米代川右岸東雲開拓台地上にあるサシトリ台遺跡^(註23)は昭和50年に発掘調査され、土器焼成遺構と推定される土坑1基が検出されている。

中世の遺跡としては、檜山安東氏の居城檜山城^(註24)が本遺跡の東北東9kmにある他、米代川右岸では昭和54年に調査され、掘立柱建物跡群が検出された峰浜村中田面遺跡^(註25)、昭和31年、昭和59・60年に調査された金山館遺跡がある。

第2章 立地と環境

- (註1) 柴田陽一郎「此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会
昭和59(1984)年
- (註2) 藤原妃敏「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」協和町教育委員会 昭和52(1977)年
- (註3) 菅原俊行「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会
昭和59(1984)年
- (註4) 大野憲司「七曲台遺跡群」秋田県教育委員会 昭和60(1985)年
- (註5) 柴田陽一郎「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県教育委員会 昭和57(1982)年
- (註6) 岩見誠夫「館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和54(1979)年
- (註7) 永瀬福男「杉沢台・竹生遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和56(1981)年
- (註8) 鍋倉勝夫「萱刈沢遺跡発掘調査報告書」八竜町教育委員会 昭和54(1979)年
- (註9) 若松鉄四郎氏採集、資料の一部は県立博物館に展示されている。
- (註10) 金子浩昌「貝塚」『日本の考古学Ⅱ』河出書房 昭和40(1975)年
- (註11) 永瀬福男「秋田県の円筒土器文化」『考古風土記』第9号 昭和59(1984)年
- (註12) 庄内昭男「相染森遺跡のフラスコ状ピットについて」『秋田考古学』第32号
昭和50(1975)年
- (註13) 永瀬福男「ユズリ葉遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和53(1978)年
- (註14) 大和久震平『柏子所貝塚発掘調査報告書』能代市教育委員会 昭和47(1972)年
- (註15) 桜田 隆「高石野遺跡発掘調査概報」琴丘町教育委員会 昭和58(1983)年
- (註16) 永瀬福男「杉沢野遺跡採集の弥生式土器について」『能代山本地方史研究』第1号
昭和56(1981)年
- (註17) 奈良修介「秋田県史考古篇」秋田県 昭和35(1960)年
永瀬福男「金山館遺跡発掘調査報告書」能代市教育委員会 昭和61(1986)年
- (註18) 熊谷太郎「真壁地遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和58(1983)年
- (註19) (註1) 文献
児玉 準「上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和61(1986)年
- (註20) 工藤英美「能代砂丘について」『能代山本地方史研究』第4号 能代山本地方史研究会
昭和62(1987)年
- (註21) 川村 正「大館遺跡発掘調査報告書」能代市教育委員会 昭和53(1978)年
- (註22) 永瀬福男「中台遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和53(1978)年
- (註23) 岩見誠夫「能代・山本地区広域農道建設に伴う発掘調査報告書」秋田県教育委員会
昭和51(1976)年
- (註24) 県指定史跡 昭和48年3月公示。
- (註25) 永瀬福男「中田面、重兵衛台Ⅰ・Ⅱ、根洗場遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会
昭和55(1980)年

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査の経過

寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査は昭和61年8月18日に開始し、12月5日に終了している。この期間、調査に費した日数は延62.5日である。以下に調査日誌から抜粋して概略の経過を記す。

8月18日、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡調査開始。午前10時、浅内地区自治会館で発掘調査作業員への説明会を行う。当初の作業員数は両遺跡合わせ33名で開始。午後、寒川Ⅰ遺跡、寒川Ⅱ遺跡の斜面側調査区の刈払い作業を行い、重機による表土除去の範囲を確定させる。

8月19日、寒川Ⅰ遺跡で重機による表土除去開始。使用機械は0.7³m³バケット付のバックホー、40Dのブルドーザー各1台。寒川Ⅰ遺跡では、重機による表土除去を行う前にトレンチを設定して、基本層序、遺物散布範囲を確認する。調査用プレハブ・ハウス建設。発掘用資材到着。

8月20日、寒川Ⅱ遺跡の斜面側調査区については、重機による除土を終える。重機で除去した面で製鉄炉(S N14)のプランを検出。寒川Ⅰ遺跡のトレンチ調査を終える。

8月22日、寒川Ⅱ遺跡の付替え道路予定区の粗掘作業を開始。土器埋設遺構(S R16)を検出。寒川Ⅰ遺跡では重機の除土作業が終わり、方眼杭打設作業に入る。

8月25日、寒川Ⅰ遺跡で石錘が多く出土し始める。寒川Ⅱ遺跡では付替え道路部分遺構精査開始する。縄文時代フラスコ状土坑、平安時代土坑、溝などが重複している。

8月27日、寒川Ⅰ遺跡で石錘と尖底土器底部が近接して出土。

9月2日、寒川Ⅰ遺跡MD51グリッドで長軸の長さ5m程の楕円形の黒色土プラン(S I04)を検出する。寒川Ⅱ遺跡斜面側調査区の中央部で平安時代の竪穴住居跡(S I31)を検出。

9月3日、寒川Ⅱ遺跡の製鉄炉の精査を開始する。

9月5日、寒川Ⅰ遺跡S I04の覆土の掘り下げを始める。覆土内から繊維を含み厚手のつくりの土器片が出土する。寒川Ⅱ遺跡の製鉄炉の東側に平安時代の竪穴住居跡(S I26)を検出する。

9月9日、寒川Ⅰ遺跡MC54グリッドで、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡(S I18)を検出する。寒川Ⅱ遺跡の土器埋設遺構を断ち割る。内部から扁平打製石器2点出土。

9月12日、寒川Ⅰ遺跡の平安時代竪穴住居跡(S I20)の精査を開始する。LH55グリッドからは近代の炭窯に関係するレンガ、土管などが出土。

9月16日、寒川Ⅱ遺跡斜面下部が階段状に作られていることを確認。寒川Ⅰ遺跡S I18で炉に使用された埋設土器を確認。S I20から土師器坏1、須恵器坏3の遺物が出土。

第3章 発掘調査の概要

9月25日、寒川Ⅰ遺跡近代の炭焼窯(S N22)の精査開始。寒川Ⅱ遺跡の斜面東側で検出した平安時代の竪穴住居跡(S I43・44)の覆土を掘り始める。山本町小中学校社会科研究会一行来跡。

9月26日、寒川Ⅱ遺跡で3基の炭焼遺構(S N47・48・49)を確認。

10月1日、寒川Ⅱ遺跡の道路北側、台地平坦部の調査を開始する。

10月3日、寒川Ⅰ遺跡調査区の南側M B48～M E48グリッドの縄文時代早期～前期の遺物包含層を調査する。寒川Ⅱ遺跡斜面側調査区の竪穴住居跡(S I43)のカマドを調査する。東京工業大学高塚秀治氏、西村亮治氏来跡。製鉄炉についての教示を乞う。

10月9日、寒川Ⅱ遺跡の土器焼成遺構(S K37)を検出。寒川Ⅰ遺跡の溝の精査を終える。

10月23日、寒川Ⅰ遺跡調査区の南西側斜面を精査。縄文時代晩期末葉から弥生時代前期の土器片が多量に出土、その時期の土器捨場と認められた。寒川Ⅱ遺跡では道路北側のL J53グリッドで平安時代の竪穴住居跡(S I66)を検出。

10月24日、盛岡市桜小路電機、工藤、柳沢両氏来跡。寒川Ⅱ遺跡で地下遺構の探査を行う。

10月26日、寒川Ⅱ遺跡道路北側調査区で後北C₂式土器を出土する土壙プラン(S K69)を検出。

10月27日、寒川Ⅱ遺跡のS K69とその西側に検出されたS K68を掘り込む。S K69の東壁際から無文鉢形土器が出土。寒川Ⅰ遺跡の縄文時代早期末～前期初頭の竪穴住居跡S I04、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡S I18、S I21については精査を終了する。

11月6日、寒川Ⅰ遺跡の縄文時代早期竪穴住居跡(S I37)を精査。中央部の土坑から頁岩のチップが多く出土している。寒川Ⅱ遺跡のS K68、S K69は続縄文文化期の土壙墓と判断。さらにその南側でS K70、S K79の2基を検出し半截する。穴澤義功氏来跡。製鉄炉について教示を乞う。11月7日、寒川Ⅱ遺跡のS K70、S K79の両土壙墓からそれぞれ1個ずつの後北C₂式土器が出土。また、斜面側調査区の平安時代竪穴住居跡S I31、S I26のカマド部分の精査を行う。

11月8日、寒川Ⅱ遺跡でさらに2基の続縄文文化期の土壙墓(S K80、S K81)を検出、調査。

11月11日、寒川Ⅰ遺跡の南側斜面を精査。縄文時代早期末～前期初頭の遺物包含層が確認され、尖底土器底部、トランシェ様石器などが出土している。この時期の土器捨場と判断する。

11月14日、寒川Ⅰ遺跡で縄文時代後期の土壙墓2基(S K51、S K52)を確認。復元可能な土器1個体分ずつを出土している。

11月15日、寒川Ⅰ遺跡の南側斜面土器捨場の精査をほぼ終了する。寒川Ⅱ遺跡道路北側調査区の平安時代竪穴住居跡(S I77、S I82、S I89、S I66)を精査する。

12月3日、寒川Ⅰ・Ⅱ両遺跡の航空写真撮影。

12月5日、調査用プレハブを解体・撤去し、調査を全て終了する。

第2節 調査の方法

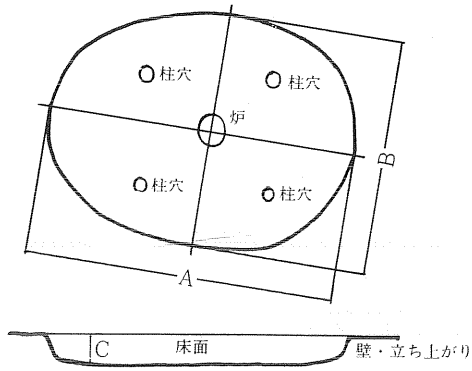
調査は調査対象区域を網羅するように4 mの碁盤状の格子を組むグリッド方式によった。すなわち、調査区内の基準点から磁北方向に設定された基準線と、それと直交する東西方向の線を二次元の座標軸の各々とした。4 m毎に設定されるそれぞれの線には、東から西へMA・MB・MCのように2桁のアルファベットを付し、南から北にかけては51・52・53・・・のように算用数字を振り当てた。グリッドの呼称はこのアルファベットと算用数字の組合せによって表わされる各交点のうち、南東部の杭の呼称で代表させている。また、東西に付されるアルファベット2桁のうち、1桁目はAからJまでの10刻み(40m)で繰り返し、2桁目は40m毎に変わる大区画を表わしている。表土除去時の採集遺物はこのグリッド毎にとりまとめた。

調査区中央の基準点は、調査区に隣接する地域が将来調査されることを予測して、MA50としてある。一般国道7号八竜能代道路に関係する調査では、路線中央に20m間隔の中心杭が打設されており、基準点はこのうち調査区の中央に位置するものを選んでいく。寒川Ⅰ遺跡ではNo.304+80、寒川Ⅱ遺跡ではNo.310の杭をそれぞれの基準点とした。

遺構名は、平面プランの検出された順番に01、02、03・・・と算用数字による番号を付けていった。その際、遺構の番号の前には、その種別をあらわすアルファベットの遺構略号を冠している。すなわち、遺構略号と番号の組合せが、各々の遺構の名称となる。これらの中には調査が進むにつれて、自然地形のくぼみであるとか、植物の根による“しみ”であるとかといったことが後に判明し、抹消されて欠番となるものもある。本書においてはこれらの遺構番号を整理し、遺構の種類毎に通し番号を付けて、第1号堅穴住居跡のような表現方法をとっている。寒川Ⅰ遺跡、寒川Ⅱ遺跡の遺構名称の対応は第1表、第2表に示した通りである。

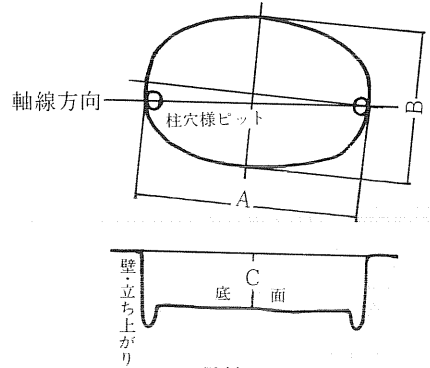
調査記録の方法としては、主として図面作成・写真撮影・筆記録を段階ごとにとり入れていった。図面作成では平面図・断面図が主で、必要に応じてエレベーション図、地形図などを作成している。遺構についての実測図は1/20の縮尺を原則とした。写真撮影は1つの被写体についてモノクロとリバーサルフィルムの2種類のライカ版フィルムで撮影することを原則とし、適宜ブロー版フィルムによる撮影を加えている。筆記録では、日誌や遺構カードを活用した。各遺構の記述や規模の計測は第6図に従って行っている。

寒川Ⅰ遺跡、寒川Ⅱ遺跡とも耕作地部分を除いては雑木林であったため、調査前に地表に残る切株を除去する必要がある。寒川Ⅰ遺跡では調査区の全域で、寒川Ⅱ遺跡では南側斜面の調査区で、人力による表土除去を行う前に、抜根を兼ねた重機による除土を行っている。



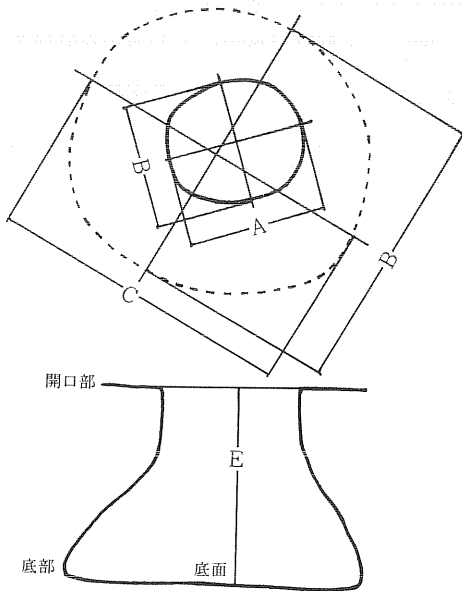
長軸 A cm
短軸 B cm
壁高 C cm

縄文時代竪穴住居跡



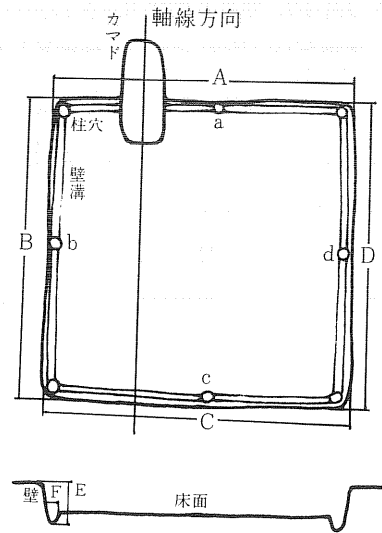
長軸 A cm
短軸 B cm
深さ C cm

続縄文文化期土墳墓



開口部 長軸 A cm
短軸 B cm
底面 長軸 C cm
短軸 D cm
深さ E cm

フラスコ状土坑



壁長 a 壁 A cm 壁高 E cm
b 壁 B cm 壁溝幅 F cm
c 壁 C cm 壁溝深 G cm
d 壁 D cm

平安時代竪穴住居跡

第6図 遺構規模計測部位模式図

第4章 寒川Ⅰ遺跡 — 調査の記録 —

第1節 遺跡の層位

本遺跡の基本層位は平坦地と斜面地とに分けてとらえられたが、ここでは層の安定している平坦地での基本層序の層ごとに説明を行う。(第7図)

I層…10Y R 2/1黒色を呈する。植物根が多く、耕作土に当たる層である。層厚は10cm前後である。

II層…10Y R 2/2黒色を呈する。炭化物や礫、および褐色土(10Y R 4/4)を僅かに含有している。粘性は弱く軟かい。層厚は10~20cmである。縄文時代中・後期の遺物包含層ととらえられた。

III層…10Y R 3/4暗褐色を呈する。炭化物を少量含有する。粘性は弱いだが、比較的しまっている。層厚は30cm前後である。縄文時代早期末葉~前期初頭の土器を多量に検出した。

IV層…10Y R 5/6黄褐色を呈する。炭化物・小石を僅かに含有している。粘性は強く、固くしまっている。層厚は20~30cmである。

V層…10Y R 5/8黄褐色を呈する。砂利を含み固くしまっている。層厚は20~30cmである。

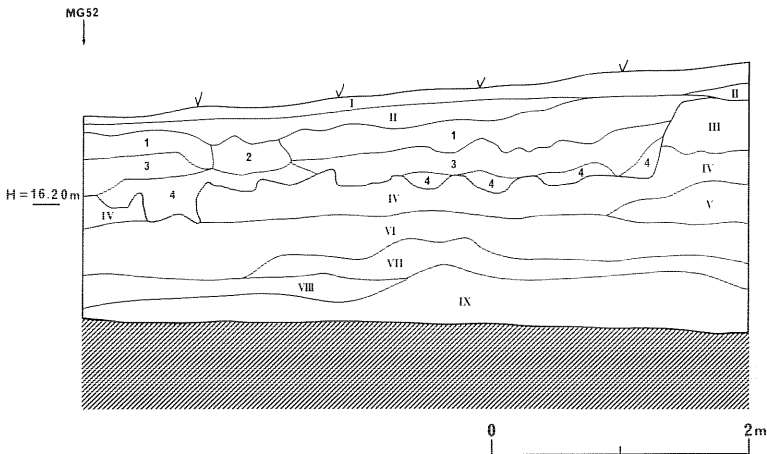
VI層…2.5Y 5/6黄褐色を呈する。粘質土と砂質土が混じり合う。層厚は20~40cmである。

VII層…10Y R 5/8黄褐色を呈する。砂質土で非常に固くしまっている。層厚は10~20cmである。

VIII層…2.5Y 5/6黄褐色を呈する。礫を多量に含む砂質土である。層厚は10~20cmである。

IX層…2.5Y 5/6黄褐色を呈する。礫を含み、赤褐色の砂質土を層状に含む。

I~III層は遺物の包含する層で、IV層以下は、いわゆる地山土である。



第7図 第6号竪穴住居跡および基本土層図

第2節 検出された遺構と遺物

1、縄文時代早期～前期の遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構のうち、縄文時代早期末葉から前期初頭に位置づけられると判断した遺構は、竪穴住居跡7軒、土坑16基である。これらの遺構は調査区内の舌状台地中央から南西側にかけて検出された。また、この他に台地南側斜面から、今回の調査区内にあって最も集積度の高い早期末葉～前期初頭の土器包含層が検出され、直接人為的に地面に構築された遺構ではないにしても、台地上面からの生活廃棄物が捨てられた「土器捨場」であると判断した。本項ではこれも含めて扱うこととする。

竪穴住居跡とした遺構は、主に①規模・形態、②かゝの存在、の2つの条件から認定した。すなわち、ある一定規模の面積を有し、かつその形態から上屋構造が想定し得ること、また遺構内での火の使用の痕跡が認められること、この2つの条件の少なくともどちらかを備えたものを、竪穴住居跡とした。

竪穴住居跡として認められたものには3つの形態がある。1つは広い床面積をもつ楕円形プランの遺構で、床面中央に土坑状のピットをもつもの（第1号竪穴住居跡、第4号竪穴住居跡）、2つ目はこれより規模の小さい楕円形プランの遺構（第2号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡、第7号竪穴住居跡）で、床面中央に焼土が形成される例（第5号竪穴住居跡、第7号竪穴住居跡）が含まれる。3つ目は小形の円形プランを呈し、やはり床面中央に焼土が形成されるもの（第3号竪穴住居跡）である。

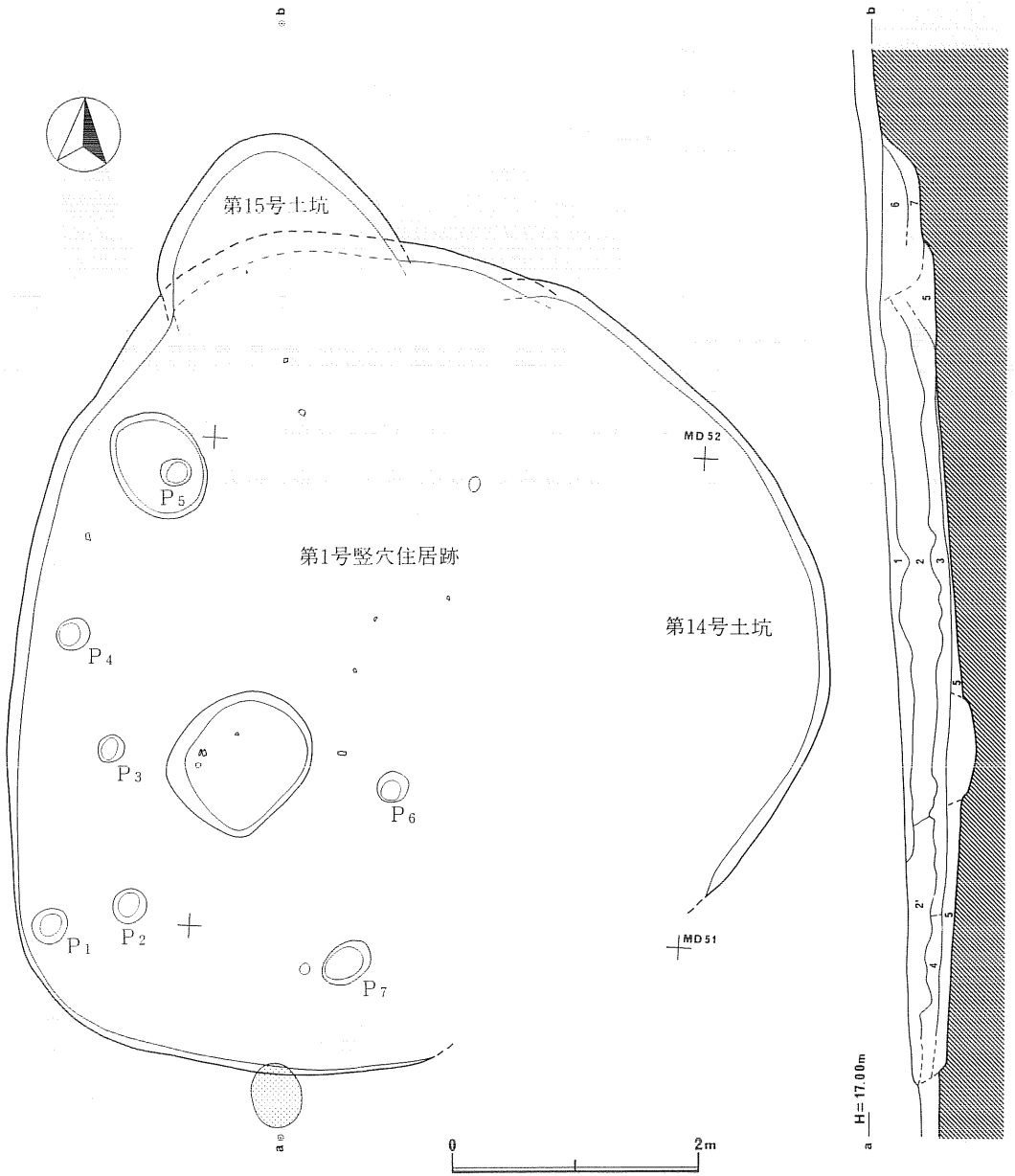
竪穴住居跡の認定条件を2つとも欠いた遺構を土坑としたが、16基検出された土坑は2つの形態に分けられる。1つは開口部が径1m前後の円形プランをもち、開口部と同程度かそれ以上の深さのあるもので、底面中央に径20cm前後、深さ20～30cm前後のピットをもつ（第1号～第4号土坑）。他は円形～楕円形のプランをもち、浅い鍋底状か摺鉢形の断面形をもつもの（第5号～第16号土坑）である。

これら遺構群のうち竪穴住居跡は、中央部から南西側へ緩く降りる斜面上で検出された。広い床面積をもつ2軒が隣り合って位置し、その周辺にやや小規模の楕円形プランの住居跡、小形の円形プランの住居跡が配置する。また、土坑はこれらの竪穴住居跡の間に散在するが、底面にピットをもつ土坑4基は、他の遺構群の分布する区域からはずれた、台地北縁と南縁に2基ずつ分かれて点在する。

縄文時代早期末葉～前期初頭の時期に位置づけられた遺構群の概略は以上である。次に各遺構について、観察された結果を記述する。

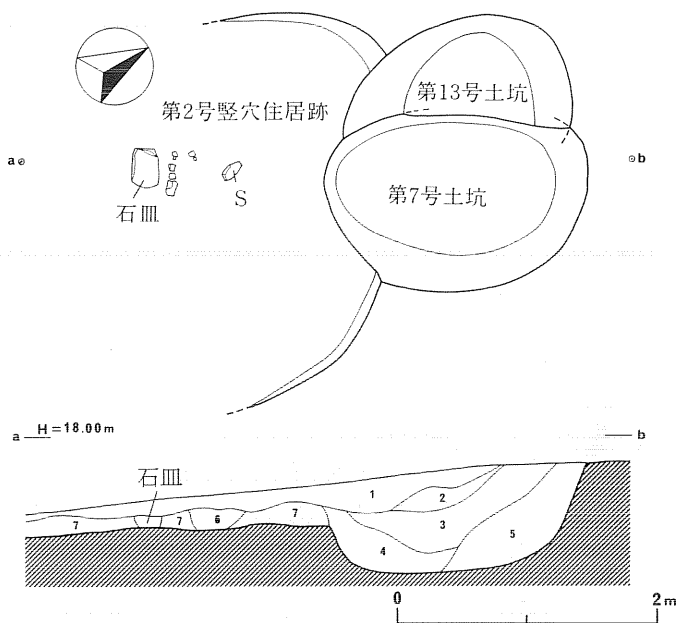
第1号竪穴住居跡（第8図、図版2-1・2・3）

緩斜面のほぼ中央、MD50~52、ME50~52グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土の楕円形プランとして確認した。北壁は、16号土坑に切られ、東壁では15号土坑を切っている。壁高は南側では5cm前後、北側では40cm前後である。平面形態は楕円形で、規模は長軸675cm×短軸推定450cm、面積28㎡である。長軸はN-20~25°-Eを指す。床面中央部は粘性の強い黒褐色土を斑状に含み、明確な床はとらえられなかった。床面は壁際にゆくにしがたい、緩い上向きの傾斜を示す。柱



第8図 第1号竪穴住居跡、第14号・第15号土坑

穴はP₁；30×25cm、P₂；径25cm、P₃；径20cm、P₄；28×25cm、P₅；25×22cm、P₆；径25cm、P₇；42×32cmあり、深さはすべて10cm内外である。住居跡の中央やや南側には略方形の土坑があり、北西壁際にも楕円形の土坑が存在する。前者は長軸120cm×短軸100cm、深さが25cmで挿鉢状を呈し、後者も長軸95cm×短軸70cmで深さ15cmの挿鉢形を呈する。遺物は覆土全般に多いが、北西部に集中する傾向があり、土製円盤もそこから出土している。



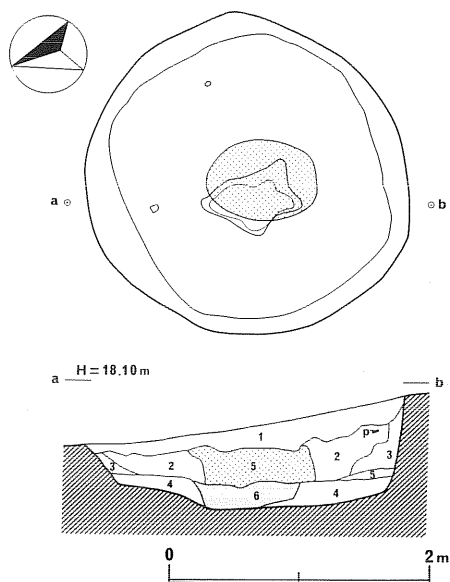
第9図 第2号竪穴住居跡、第7号・第13号土坑

床面中央部の土坑の東側からは

石甕が、土坑底面からは未加工礫、剥片が出土している。石器には他に、トランシェ様石器、尖頭器、石錐、石匙、石錘などが、土器には縄文—縄文、縄文—条痕、縄文—無文などの種類がある(第17図～第19図)。

第2号竪穴住居跡(第9図)

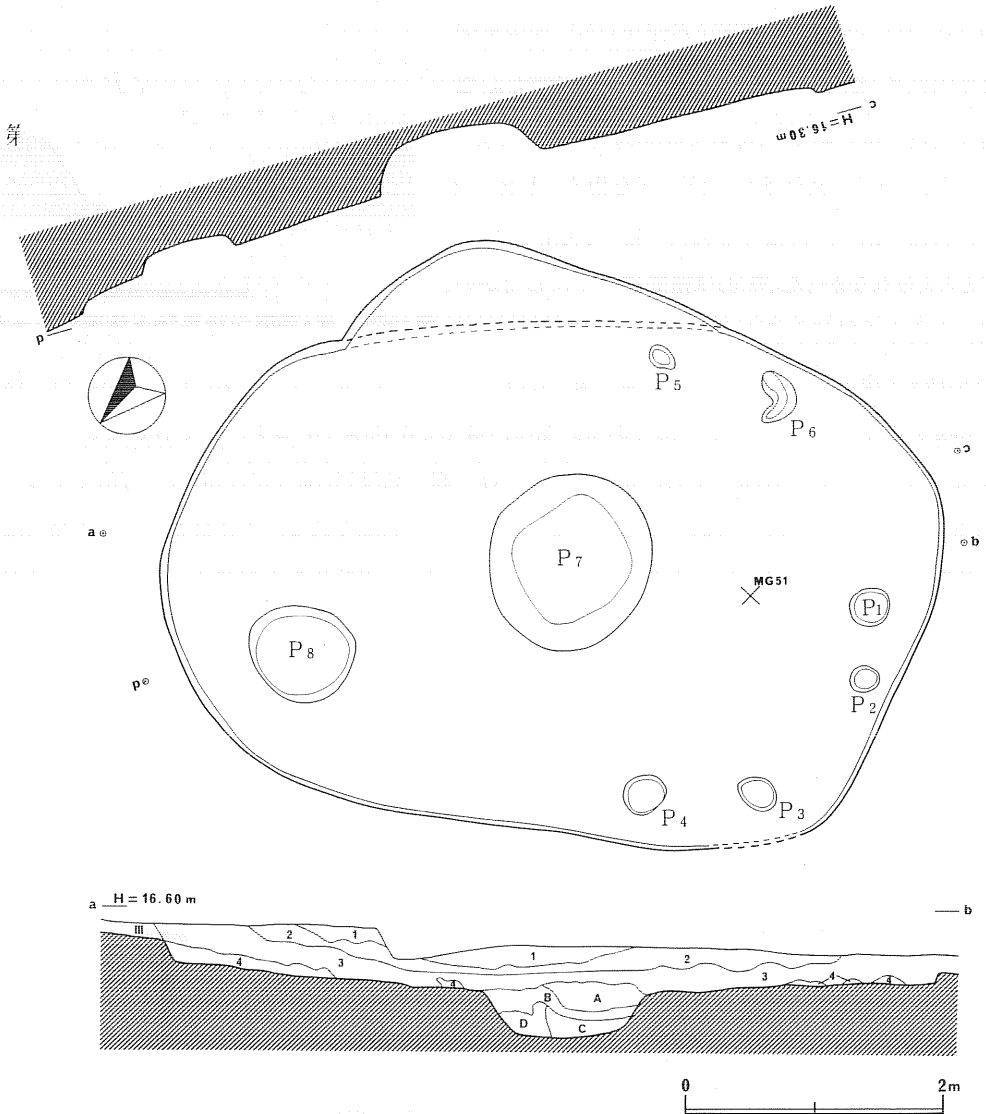
緩斜面の上位、MA～MB52グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土の楕円形プランとして確認した。北壁は第7号・第14号土坑によって切られ、南西部の壁は検出されなかった。平面形態は楕円形と推定され、長軸は磁北から20～30度前後西に傾くものと思われる。壁高は高い部分で約20cmであり、面積は6.8m²である。床面はほぼ平坦で比較的軟かい。炉や柱穴は確認できなかった。床面中央西寄りからは、石皿、扁平打製石器、土器片が近接して出土している。土器片は粘土に繊維を混入した表裏面とも無文の土器である(第20図、第21図)。



第10図 第3号竪穴住居跡

第3号竪穴住居跡（第10図、図版2-4）

緩斜面の上位、LT51・52、MA51・52グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土の円形プランとして確認した。平面形態は上端で円形、下端で略方形を呈し、径は約250cm、壁高は32～75cm、面積は4.8㎡である。床は約20cmの厚さの貼り床で、床面は平坦で比較的しっかりしている。柱穴はない。炉の平面形態は長軸約85cm×短軸約60cmの楕円形を示すが、底面は南から北へ緩い傾斜を示す。炉の焼土は粘性が強く、ほとんど褐色土に近い色を呈している。この炉と接するように、床面近くの覆土にはより赤褐色に近い別の焼土層が広がっている。遺物は覆土中から縄文



第11図 第4号竪穴住居跡

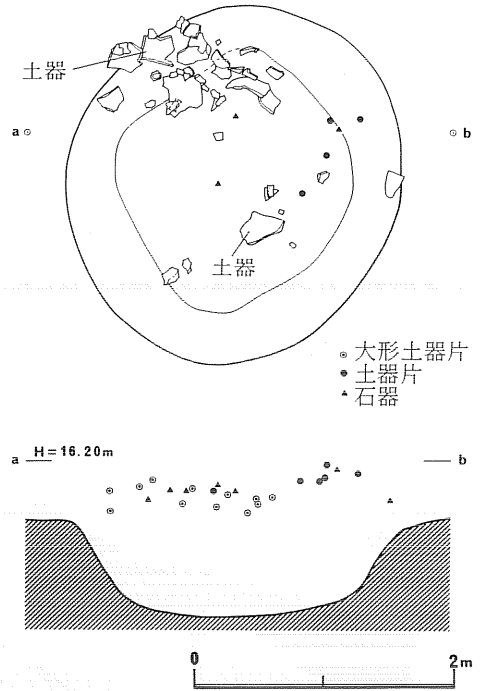
一縄文、縄文—無文、縄文—条痕の土器片を検出している他に、床面下より縄文—縄文の小片を確認している（第20図）。

第4号竪穴住居跡（第11図、図版2—5）

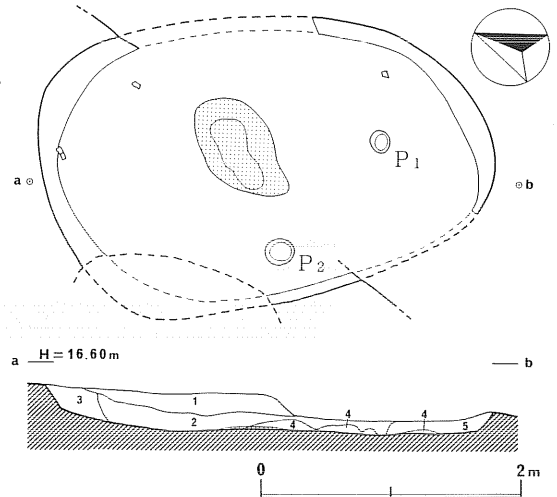
緩斜面のほぼ中央MF50・51, MG50・51グリッドにあり、調査区の西端に位置する。東壁の張り出している部分は古い時代の攪乱と考えられる。第Ⅲ層で楕円形の黒褐色土プランを確認した。平面形態は楕円形で、規模は長軸約600cm×短軸推定390cm、壁高は南側では5cm内外、北東では25cmである。面積は20.41㎡である。長軸はN—45°—Eを指す。床面中央部は粘性の強い黒褐色土を斑状に含み、明確な面としてとらえられなかった。床面は壁際にゆくにしたがい、緩い上向きの傾斜を示す。柱穴は5個確認でき、P₁；

30×30cm・深さ17cm、P₂；20×22cm・深さ12cm、P₃；30×25cm・深さ8cm、P₄；32×30cm・深さ15cm、P₅；2×15cm・深さ10cmである。他にP₆は深さが10cmであるが、不定形を呈しており、柱穴とはいえない。床面中央部に設けられたP₇は上端で長軸140cm×短軸130cmの方形を呈し、底面では1辺80～85cmの方形を呈している。深さは40～45cmである。P₈は長軸80cm×短軸70cmの楕円形で、深さは10～15cmである。P₇、P₈ともに摺鉢状の断面形を呈する。P₇の土坑は底面から壁に沿って30～40cmの範囲で焼土の塊りが確認され、また5mm前後の炭化物を多量に含んでいたことから、炉の機能を有していたと考えられる。P₇内部の土は粘性が強く、非常にしまりのある堅い土である。

遺物は覆土全般から出土しているが、P₇の土坑からは特にまとまって検出された。石器にはトランシェ様石器、石鏡、石錘などがあり、土器には尖底—丸底の深鉢形土器の破片がある。特にP₇の土坑内覆土から出土した土器片には大形の破片があるが、それらは覆土上位に集中する傾向にあった。また土坑内の土を洗浄して篩にかけたところ、約1,100点のチップが検出された。（第12図、第20図、第22図～第24図）



第12図 第4号竪穴住居跡土坑遺物出土状態



第13図 第5号竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡（第13図、図版2-6）

調査区のほぼ中央MC49・50グリッドにあり、東側は平安時代の竪穴住居跡、第13号住居跡に切られている。北西側は第Ⅲ層で暗褐色土のプランとして確認し、南東側は第13号竪穴住居跡の覆土を除去した段階で褐色土のプランとして検出した。平面形態は楕円形で、規模は長軸350cm×短軸220cm、壁高は15～20cm、面積は6.57m²である。長軸はN-28°-Wを指す。床面は僅かにしまる程度で、やや凹凸している。柱穴は2個で、P₁；径約14cm、P₂；径約20cmの円形を呈し、両柱穴とも深さは10cm内外である。床面中央部分の覆土には、長軸約100cm×短軸55cmの範囲で焼土が認められた。焼土は最も厚い部分で約20cmであるが、床面と密着しているのでその一部が炉として機能していた可能性がある。焼土は2層に分かれるが、上層は暗赤褐色土、下層は褐色土である。遺物は少なく、床上約10cmの覆土の南側から石篋が、また北側から土器片が出土している（第25図）。

第6号竪穴住居跡（第7図、図版2-7）

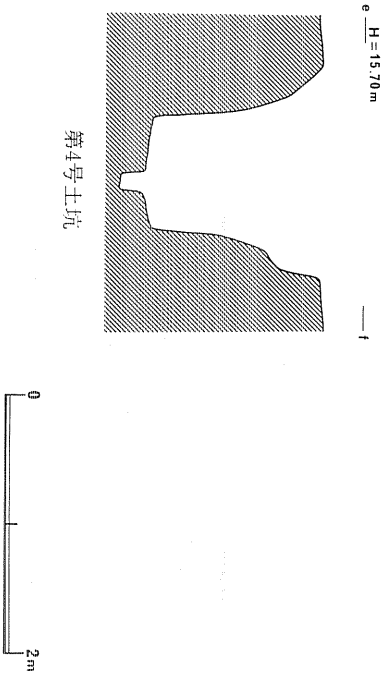
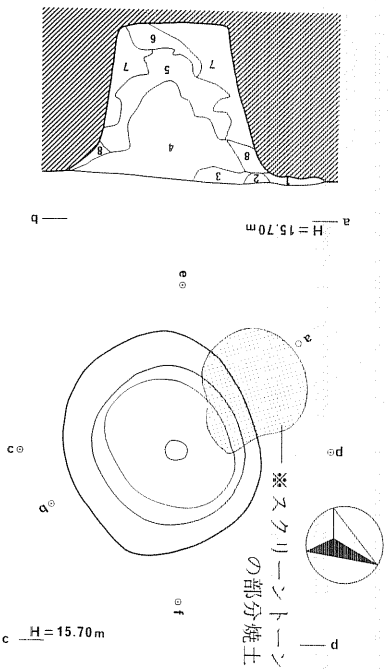
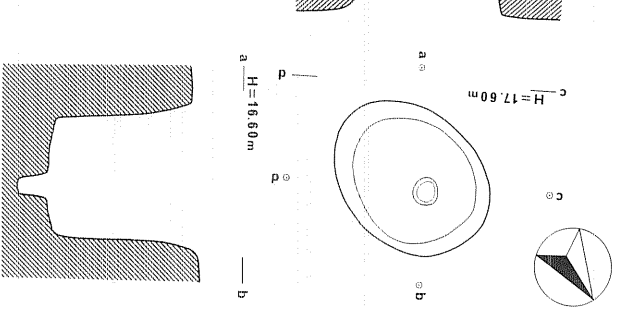
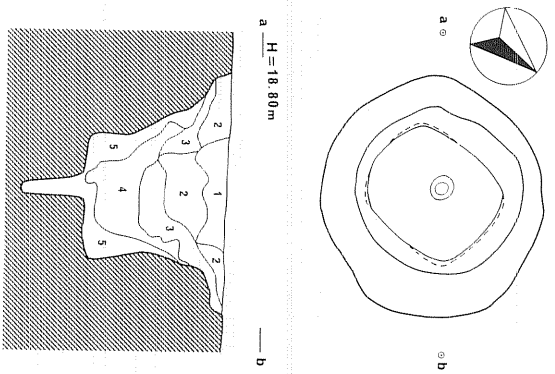
調査区の中央西端、MF52グリッドにある。基本土層観察を行った結果、地山面が北側で約35cm落ち、そのまま水平な面を南へ約4m保つことがわかった。また土層観察のために入れたトレンチの東側にも褐色土の落ち込みが確認され、トレンチ西壁にあらわれた地山面の立ち上りと連続することが判明した。以上の事実と出土遺物から竪穴住居跡と判断した。床面は現状で約4m確認でき、北側の壁高は約80cmである。南側には断面にあらわれた幅が45cm、深さが20cmの土坑がある。床面には大きな凹凸が部分的に認められる。遺物は覆土の中位から、縄文-縄文の施された土器片、胎土に繊維を含む縄文-無文の土器片が出土している（第25図）。

第7号竪穴住居跡（第16図、図版2-8）

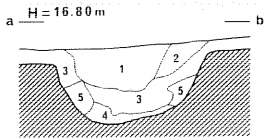
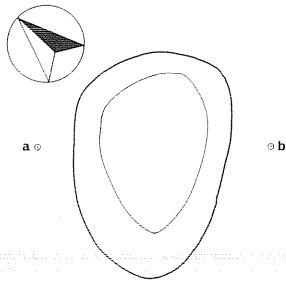
調査区北西部、MC～MD53グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土の大形プランを確認した。南隅は攪乱を受けている。長軸はN-43°-Wを指す。平面形態は略楕円形で、規模は長軸370cm×短軸235cm、深さは20～25cmである。面積は7.2m²で、床面は平坦である。住居跡の中央の床面から10cm上位の覆土中には、約10cmの厚さをもつ焼土が径75cmの範囲で広がっている。遺物は南東部覆土上層から、縄文-縄文の土器片がまとまって出土している（第26図）。

第1号土坑（第14図、図版3-1）

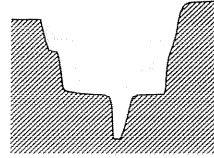
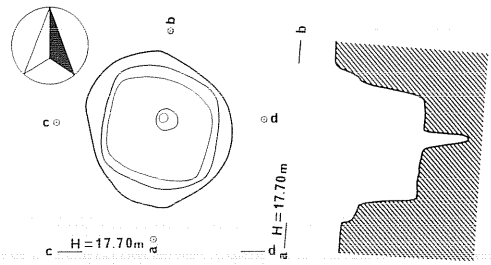
調査区北側の中央部LJ53グリッドにあり、最も高い場所に位置する。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形態は上面で径約170～190cmの不整形円形、下面では長軸100cm×短軸80cmの長方形であり、深さは110cmである。平坦な底面の中央やや西寄りの部分に、径20cm、深さ50



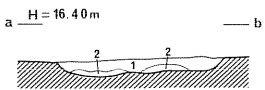
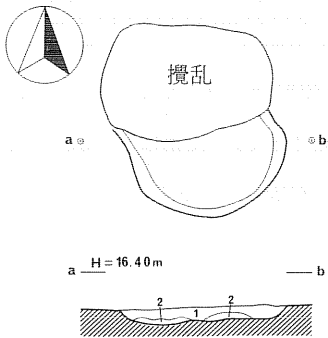
第14図 第1号・第2号・第4号土坑



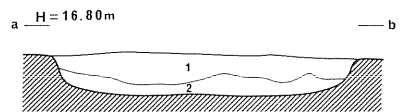
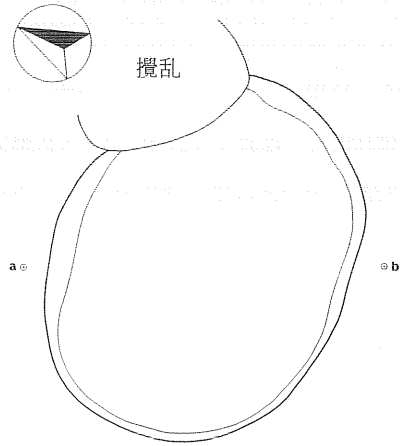
第9号土坑



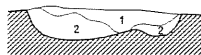
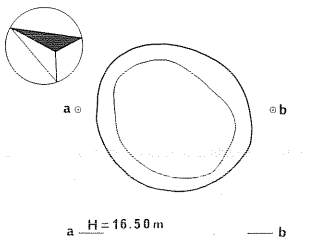
第3号土坑



第5号土坑



第6号土坑



第8号土坑



第15図 第3号・第5号・第6号・第8号・第9号土坑

第4章 寒川 I 遺跡

cmのピットがある。遺物は覆土中位から、縄文—縄文の土器片を出土している。

第2号土坑（第14図、図版3-2）

調査区中央西寄り、MF49グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形態は楕円形で、上面は長軸135cm×短軸105cm、下面は長軸105cm×短軸90cm、深さは110cmである。長軸はN-13°-Wを指す。底面の中央やや北寄りに、径20cm、深さ20cmのピットがある。

第3号土坑（第15図、図版3-3）

調査区中央東端、LH~LI48グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形態は上面において長軸120cm×短軸110cmの楕円形を呈し、底面では80×80cmの方形で、深さは60~70cmである。長軸はN-33°-Wを指す。底面の中央やや北寄りに長軸24cm×短軸15cm、深さが35cmのピットがある。

第4号土坑（第14図、図版3-4）

調査区北側の西端、ME53・54グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土のプランを確認した。本遺構を一部覆って、100cm×80cmの焼土の広がりがある。平面形態は楕円形で上面は長軸170cm×短軸150cm、底面では長軸110cm×短軸90cmで深さは110cmである。長軸はN-50°-Eを指す。底面の中央部には、径15cm、深さ20cmのピットがある（第25図・第91図）

第5号土坑（第15図、図版3-5）

調査区中央西寄り、ME47グリッドにある。北側攪乱部分を除去した結果、暗褐色土の落ち込みを確認した。平面形態は楕円形と推定され、短軸は110cmである。底面は浅い鍋底状を呈している（第26図、第27図）。

第6号土坑（第15図、図版3-6）

調査区中央西寄り、MD49・50、ME49・50グリッドにある。北側は攪乱を受けている。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形態は、長軸280cm×短軸230cmの楕円形で深さは20cmである。底面は平坦でしっかりしている。長軸はN-85°-Wを指す。遺物は西壁際の床面から石筥が、北壁際の床面から土器の小片が出土している（第27図）。

第7号土坑（第9図）

調査区中央やや北側、MA52・53グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土のプランを確認した。

本遺構は第2号竪穴住居跡、第14号土坑と切り合い関係にあるが、この2者を切った最も新しい時期に構築されたものである。平面形態は楕円形で上面は長軸250cm×短軸推定140cm、下面は長軸170cm×短軸100cm、深さは70cmである。長軸はN-32°-Wを指す。底面は摺鉢状を呈する。遺物は覆土上層で土器小片を数点確認している。

第8号土坑（第15図）

調査区中央やや南側、MB47グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形態は楕円形で、長軸125cm×短軸110cm、深さは30cmである。長軸はほぼ北を指す。遺物は覆土上位から縄文-縄文の土器片を少量の礫が出土している（第26図）。

第9号土坑（第15図、図版3-8）

調査区西端、MF53グリッドにある。第Ⅲ層で黒色土のプランを確認した。本遺構は第6号竪穴住居跡と重複するが、これを切った構築されている。平面形態は楕円形で、上面は長軸170cm×短軸120cm、下面は長軸130cm×短軸85cm、深さは約60cmである。底面はしっかりとしており、断面形は緩い摺鉢状を呈する。長軸はN-55°-Eを指す。遺物は覆土中位から縄文-縄文の土器片数点が検出されている（第26図）。

第10号土坑（第16図、図版3-7）

調査区のほぼ中央、MA~MB51グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土のプランを確認した。平面形態は上面で長軸155cm×短軸130cmの楕円形、底面では長い方の対角線が75cmの不整形を呈し、深さは20~30cmである。底面は摺鉢状を呈する。長軸はN-47°-Eを指す。遺物は覆土から縄文-縄文の土器片と石筥・石錐などの石器を検出している（第21図・第26図・第27図）。

第11号土坑（第16図、図版4-1）

調査区中央やや西寄り、MD・ME47グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土のプランを確認した。北西部は第5号溝に切られている。平面形態は不整楕円形で、上面は長軸205cm×短軸155cm、底面は長軸205cm×短軸150cm、深さ20cmである。底面はやや凹凸があり、浅い鍋底状の断面形を呈する。底面には3個のピットがあるが、P₁；35×30cm、P₂；52×32cm、P₃；4×20cmで、深さはそれぞれ約10cmである。長軸はN-38°-Wを指す。遺物は覆土上層を中心に、縄文-縄文の土器片と石筥などの石器を多く検出している（第26図、第27図）。

第4章 寒川I遺跡

第12号土坑（第16図、図版4-2）

調査区中央やや西、MD49グリッドの杭付近にある。東端は第3号溝に切られている。長軸N-80~85°-Eを指す。平面形態は楕円形で、長軸180cm×短軸140cm、深さ20cmである。底面は少々凸凹している。立ち上りは摺鉢形を呈する。遺物は覆土上層から縄文-縄文の土器片がまとまって出土している。（第26図）。

第13号土坑（第9図）

調査区の中央北側、MB53グリッドの杭付近にある。本土坑は第7号土坑、第2号竪穴住居跡と重複するが、第7号土坑より古く第2号竪穴住居跡よりも新しい。平面形態は楕円形と考えられる。深さは約80cmである。

第14号土坑（第8図、図版4-3）

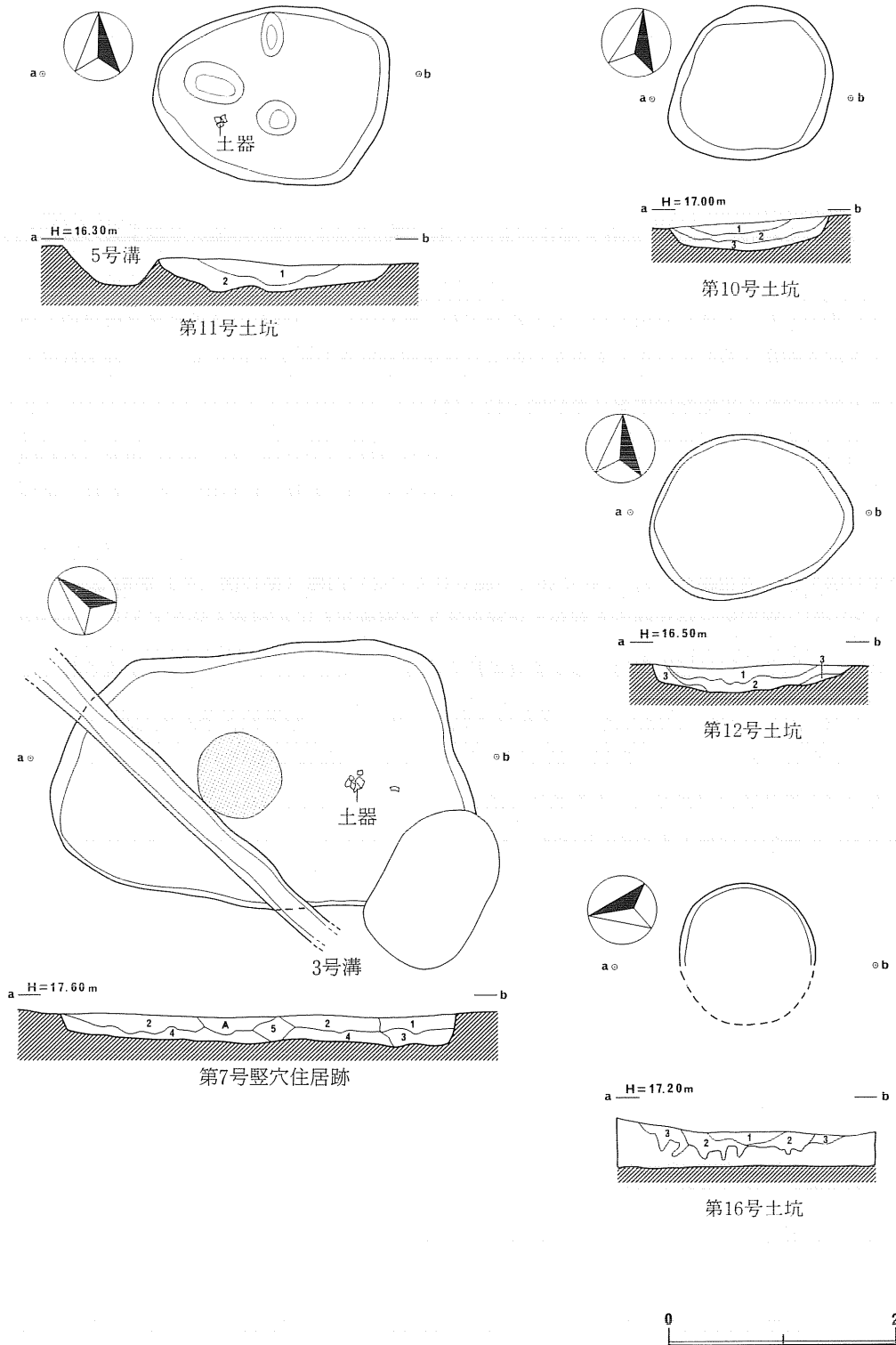
調査区中央やや西寄りMC51、MD50~51グリッドにある。第1号竪穴住居跡の北壁を検出していった結果、北東部分で本土坑を検出した。第1号竪穴住居跡は本土坑よりも新しく、黒色土がレンズ状に堆積していた。規模は第1号竪穴住居跡に切れ不明。深さは北東側にかけて20~30cmである。少し凹凸のある床面は北側で観察する限り、壁に向かって緩やかに上る。遺物は底面から5cm上位で縄文-縄文の土器片や石錐を検出している（第26図・第27図）。

第15号土坑（第8図）

調査区の北西MD~ME51グリッドにあり、第1号竪穴住居跡を切っている。平面形態は径約100cmの不整形と推定される。底面は摺鉢形を呈している。

第16号土坑（第16図、図版4-6）

調査区の南東LH46グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土のプランを確認した。平面形は径120cmの円形で、深さは10cmである。断ち割った結果、底面にはかなり凹凸が激しく、深さ5cm程の窪みが多く確められた。覆土中から繊維を含む薄手の土器片を出土している（第89図）。



第16図 第7号竖穴住居跡、第10号～第12号・第16号土坑

遺構内出土の遺物

第1号竪穴住居跡出土遺物（第17図～第19図、図版9、図版10）

土器片には口縁部～底部の各資料があるが、いずれも小片である。口縁部資料では口縁上端に粘土紐を貼り付け口唇部も含めてR L原体を横位に回転施文したもの（第17図-1）や、口唇部に篋状の工具により刻目を施したもの（第17図-7）がある。胴部資料ではL R原体を用いるもの（第17図-4・8・12）、R L原体のもの（第17図-2・3・5・6・9）の他、0段多条の原体を用いた例（第17図-11）や、その回転方向を90度ずらしたもの（第17図-10）がある。裏面の施文に用いられる原体は表面と同じものが多いが、第17図-2の資料ではアナダラ属貝殻で横位の条痕文が施文されている。また第17図-9は裏面が無文となるものである。底部資料は2片あるがいずれも平底を呈する（第17図-13・14）。

石器ではトランシェ様石器（第17図-16～18・20）、石篋（第17図-19・21）、搔器（第18図-1～4）、尖頭器（第18図-5）、石匙（第18図-6・7）、石錐（第18図-8）、石核（第18図-9）、石錘（第19図-3・4・6）、断面が三角形となる擦石（第19図-5・8）、剥片（第17図-15、第19図-1）、それと加工の施されていない円礫（第19図-7）がある。

トランシェ様石器は縦長剥片を利用して側縁のみに調整のための剥離を加えたもの（第17図-16）と、同じく縦長剥片を用いるが素材剥片の表面の形状を整えるための剥離が施されるもの（第17図-18）、素材の両面とも形状を整えた上で刃部のみ古い剥離面を残すもの（第17図-17）がある。石篋は素材剥片の表面側に整形のための剥離を全周加えるが、うち1例（第17図-21）は素材の主要剥離面の側縁にも調整剥離を加えている。搔器も縦長の剥片を素材としているが、明らかに片面のみの加工のもの（第18図-1・4）と、両面が加工されるが刃部は素材の一方の側縁に設けられる例（第18図-2・3）がある。第18図-5の尖頭器の素材は、石核から剥ぎ取る際にその途中で通常とは逆の側、すなわち石核に接した方向に力が抜けたヒンジフラクチャーをなしている。そして尖頭器として仕上げるための剥離は、このヒンジフラクチャー部分から先端部に施され、打面および主要剥離面はそのまま残されている。石匙は幅広の剥片の打面側につまみを作り出しただけのもの（第18図-6）と、横長の剥片の打面を除き下側縁と合わせて刃部を設け、つまみは素材剥片の下側縁の一端に設けているもの（第18図-7）がある。第18図-8の石錐は素材剥片の一部に表裏面から粗い剥離を加えて太い錐部を作り出し、本体は剥片を折断して仕上げたものである。第18図-9は上面に礫皮を残す石核である。中央部での断面は四角形を呈する。以上の石材は頁岩。石錘は小形の扁平な楕円礫を用いたもの2点（第19図-3・4）と大形の扁平な円礫を用いたもの1点（第19図-6）が出土している。小形のものはその長軸端を打ち欠くが、4では一方のみ打ち欠いており他方には手が増えられていない。大形の6はその短軸端を打ち欠いている。第19図-5・8の、断面形が三角形を呈すると

思われる擦石は、いづれも破片であるが、8の先端部破片は、3面とその間の稜に擦られた痕跡を残す。以上は安山岩質の石材を用いる。

以上の土器片、石器の他に、第19図-2に示す土器片利用の円盤が出土している。0段多条の原体を用いた土器片の周囲を丹念に磨き、全体としては小判形に仕上げたものと推定される。

第2号竪穴住居跡出土遺物（第20図、第21図、図版11、図版23）

土器片では表裏面とも無文の尖底～丸底の底部近くの破片が出土している（第20図-1～3）。石器には石皿（第21図-2）、扁平打製石器（第21図-3）がある。石皿は長方形の扁平な砂岩の両面に擦面が残されるものであるが、擦面はセットで使用された擦石の大きさおよびその摩擦範囲に対応して、径10cm程の面が重なり合っていてでき上っている。扁平打製石器は楕円形の扁平礫の周囲を打ち欠いて作られ、側縁には打ち欠いた後に擦った痕跡が残されている。さらに片面中央に径2cm程度の凹みが3箇所あり、凹石としても使用されたことがわかる。石材は安山岩質の礫を用いる。

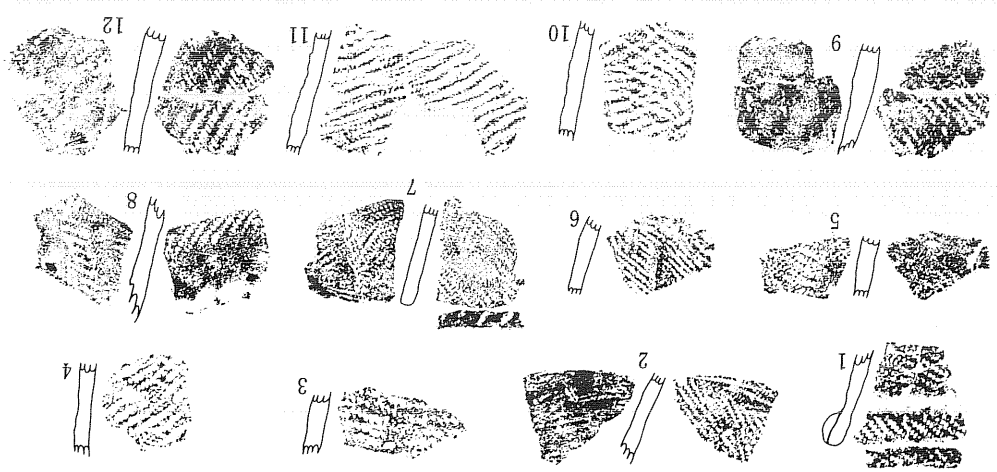
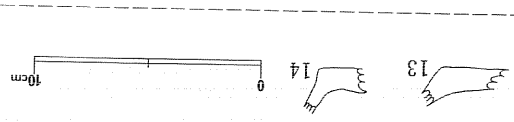
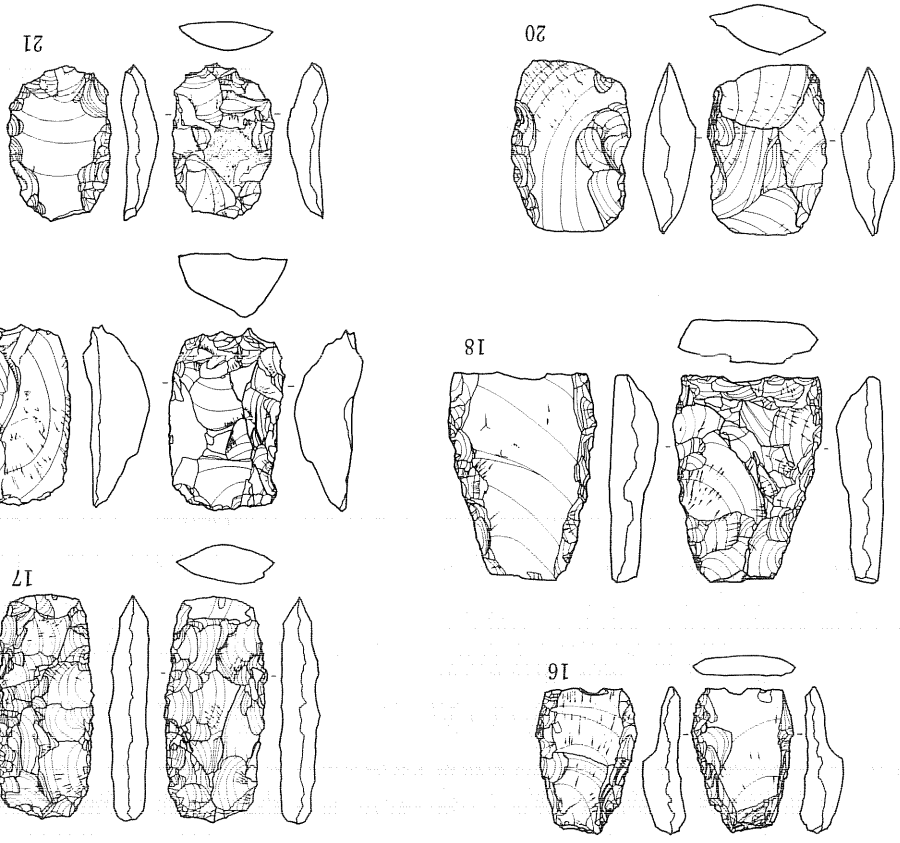
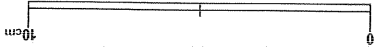
第3号竪穴住居跡出土遺物（第20図、図版11）

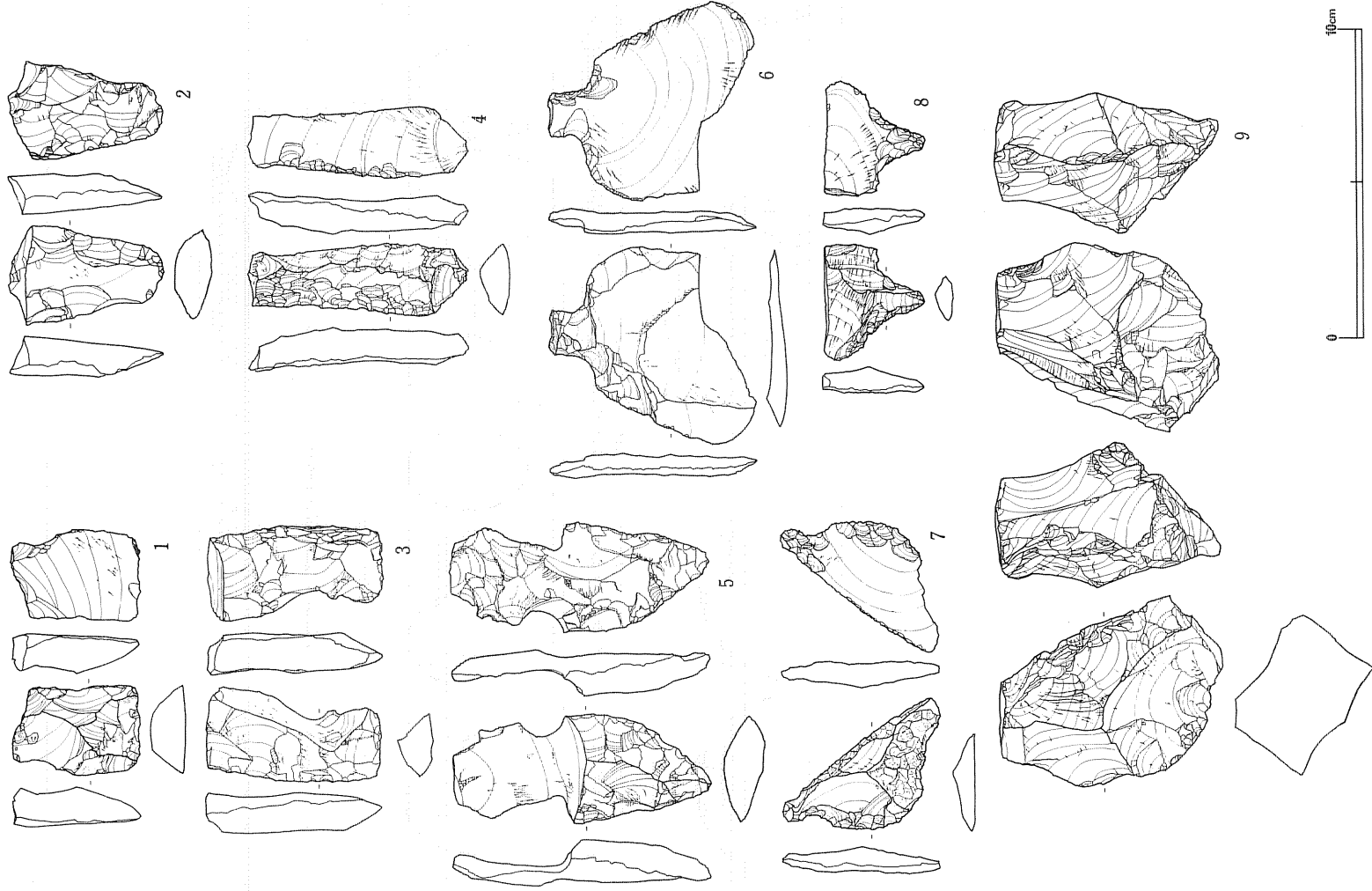
第20図-4～10、11～15はそれぞれ同一個体の破片である。第20図4～10の土器は僅かに肥厚する口唇部をもつ。表面にはL R原体を施文し裏面は上部が指頭による調整で無文とされるが、下部には条痕が残る。第20図-11～15は、縄文の条の間隔が幾分あいており、条に対して節が左上りとなることから、1段の撚紐R $\left\{ \frac{1}{1} \right\}$ の附加条原体の回転施文と判断される。11、15の破片ではL $\left\{ \frac{r}{r} \right\}$ の撚紐を軸とした繊維束あるいは撚紐に、右巻きに巻いた原体が器面上で左上～右下の方向で回転施文されている。裏面は粗い指頭による調整が行われ、かなり凹凸したものとなっている。16の破片では緻密な撚りのR L原体が横位に回転施文されている。胎土には砂粒が多く含まれる。第20図-17は肉厚な頁岩剥片を利用した石錐である。片方の側縁の主要剥離面から表面の側へ調整剥離が施される。錐部は表面側からの剥離も加えている。

第4号竪穴住居跡出土遺物（第20図、第22図～第24図、図版12～図版16）

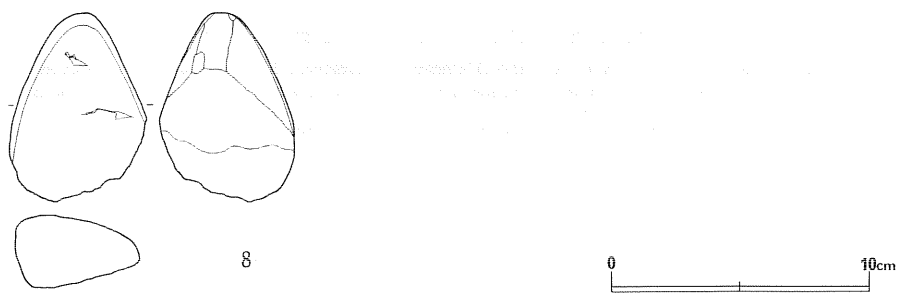
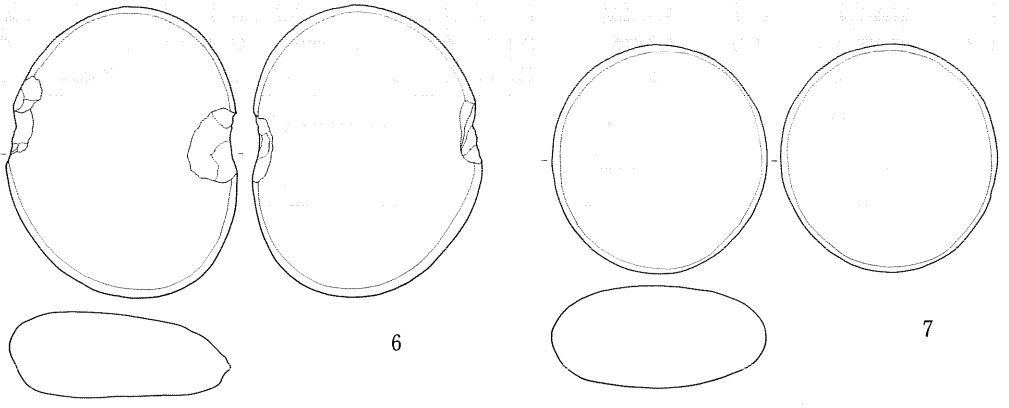
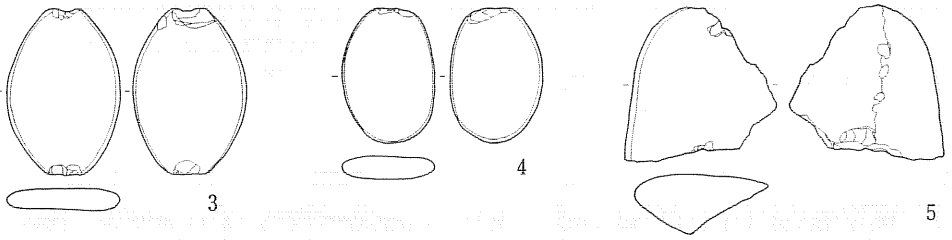
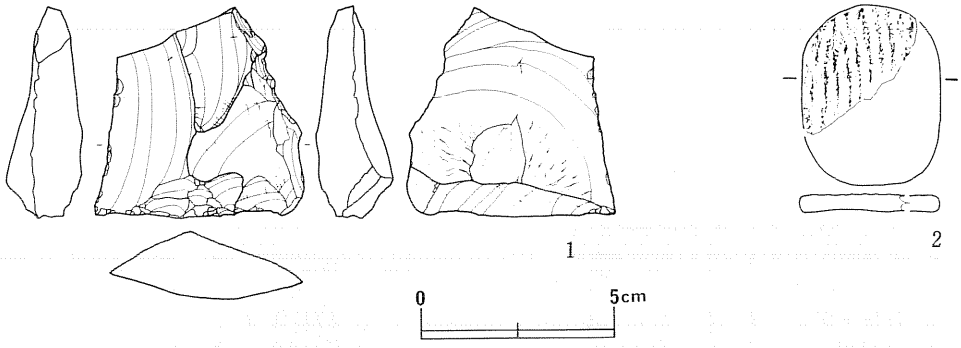
第20図-18は折り返し口縁の深鉢形土器口縁部破片である。表裏面、口唇上に0段多条のR L原体が回転施文されるが、表面では横位、裏面では縦位の方向に回転している。裏面での縄文施文は指頭によるナデ調整を行った後行われている。胎土に繊維を含み軽い。19～21は口縁上端が僅かに膨らむ深鉢形土器の破片である。19・21はL Rの撚紐を用いて表面では横位に、裏面では縦位に回転して縄文を施文している。20は表面ではR L、裏面ではL Rの撚紐を、それぞれ横位、縦位に回転して縄文を施している。また19・20の裏面では縄文施文前に条痕文を施すことで器面の調整を行っている。第22図-1は磨滅が著しいが、0段多条のR L原体を施文した破片、裏面にもごく部分的ながら同一原体が施文されているのが観察される。2も0段多条のR L原体を表面横位、裏面縦位に回転施文した土器である。3・5・6は同一個体の破

第17图 第1号竖穴住居出土遗物(1)





第18図 第1号竖穴住居跡出土遺物(2)



第19図 第1号竖穴住居跡出土遺物(3)

片。表面にはRL原体を横位回転施文し、裏面は縦位に回転施文している。裏面には煤状炭化物の付着が著しい。4・7～12もRL原体を表面横位、裏面縦位に回転施文している。第23図中、1・12・17はLR原体、7はR $\left\{ \begin{array}{l} R \\ L \end{array} \right.$ の直前段合摺の原体、8はRRの反摺りの原体を、それぞれ用いる。他は全てRL原体を施文したものである。また、9の土器の表面にはRL原体を横位に回転施文した後、浅い沈線文が描かれている。石器では石筥1点、石槍1点、トランシェ様石器1点、石錘4点、擦石3点が出土している。第23図-19の石筥は縦長の剥片を用いて両面に加工を施すが、図の表面側に原礫の礫皮の部分が残される。20は素材剥片の稜を表面に残し、主に主要剥離両側に加工を施した石槍基部である。21は素材剥片の先端の縁辺をそのまま刃部として残したトランシェ様石器である。いずれも石質は頁岩である。第23図-22～24の小形の石錘は、それぞれ36g、37g、65gを、第24図-1の比較的大形の石錘は227gを測る。

第5号堅穴住居跡出土遺物（第25図-1～8、図版17）

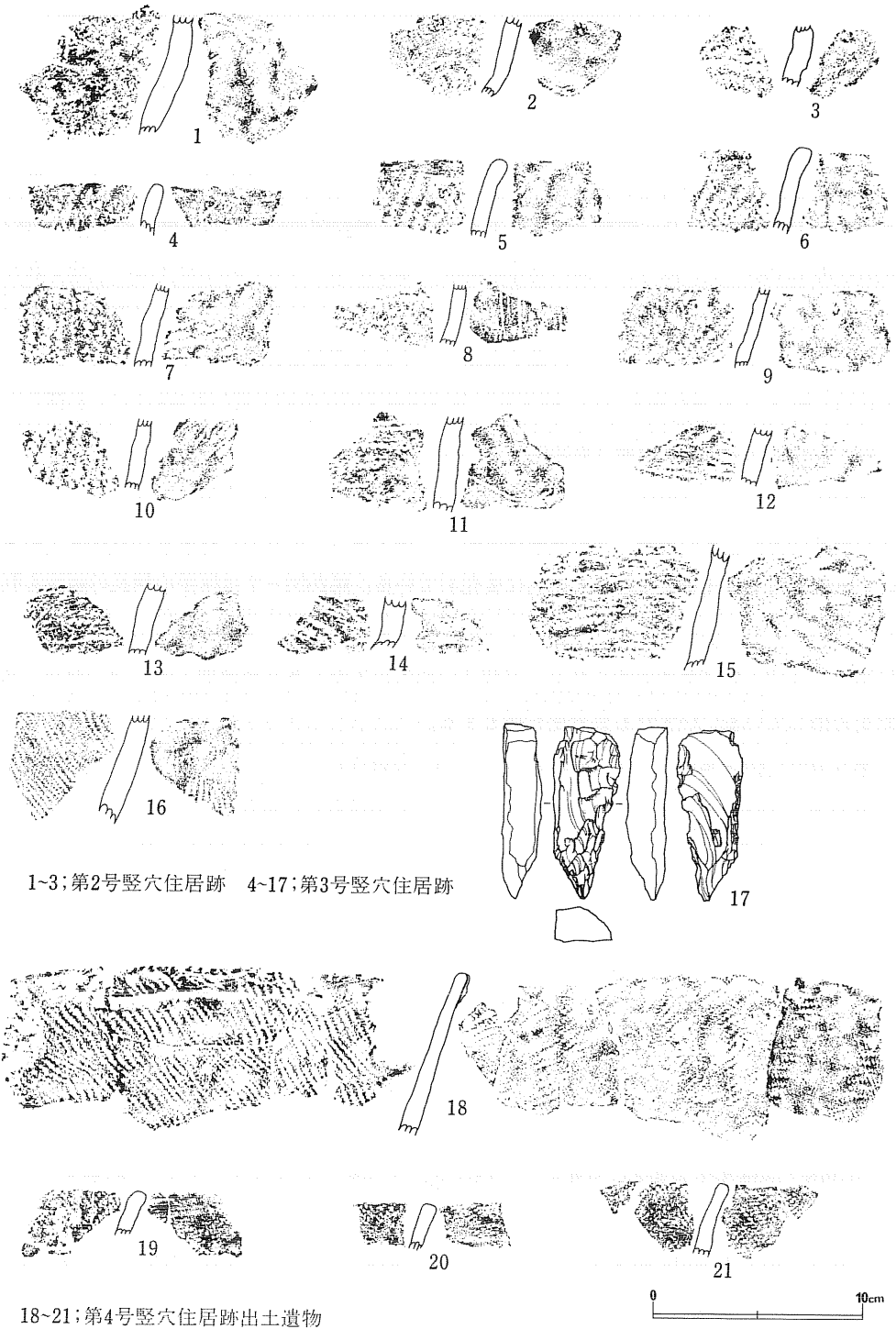
第25図-1～6は表裏面にR $\left\{ \begin{array}{l} 1 \\ 1 \end{array} \right.$ の1段の撚紐を回転させて無節の縄文を施文している。縄文の施文は浅く、1の裏面、5の表面は摩滅し、縄文はごく部分的に観察できる程度である。いずれの裏面も炭化物を吸着して黒色に変化している。第25図-7は厚手の横長の剥片を利用した石筥である。図の裏面側は両側縁からの調整剥離が施され、基部から刃部にかけての中央は素材剥片の主要剥離面が残される。刃部は一部欠損する。8も両面加工の石筥である。基部側を折損している。いずれも頁岩を石材とする。

第6号堅穴住居跡出土遺物（第25図-9～16、図版17）

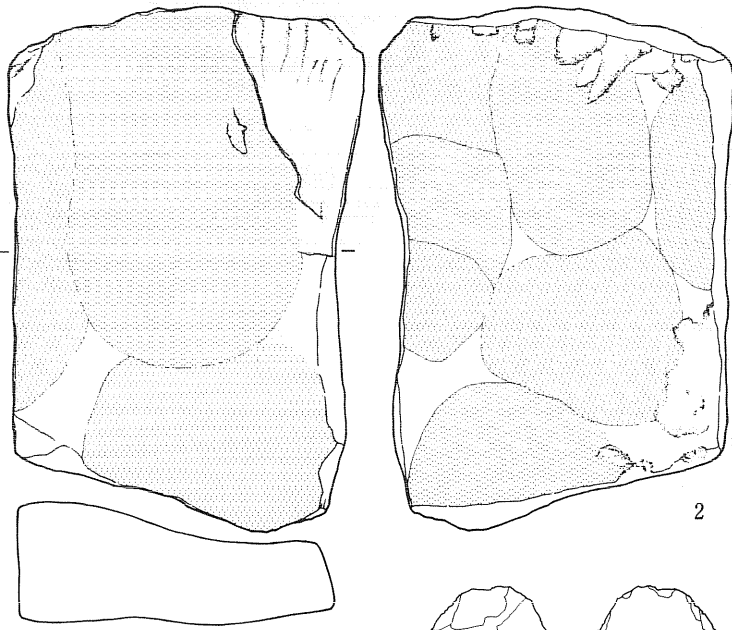
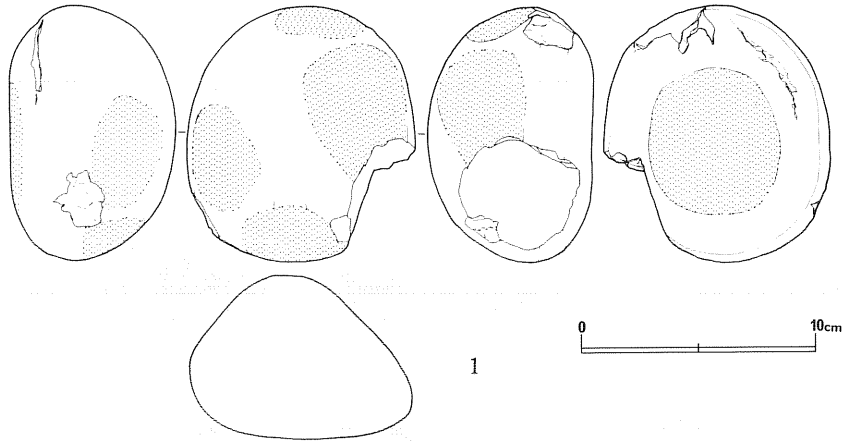
第25図-9は口縁上端に幅1cm弱で粘土帯が貼り付けられた折り返し口縁の土器である。表面には結節部をもったLRの撚紐が横位に回転施文され、綾絡文と斜縄文が表わされている。10～13はいずれも繊維を含んだ破片である。10・11の表面にはそれぞれRL、LRの撚紐が横位に回転され、裏面はナデ調整が行われている。12・13の表面には結束第1種の原体によって羽状縄文が施され、裏面はナデ調整で無文となっている。14・16は表裏面ともLRの原体による縄文が施された破片、15は表面にRL原体の回転方向を変えて羽状縄文を施し、裏面はナデ調整を施した破片である。

第7号堅穴住居跡出土遺物（第26図-22～28、図版20）

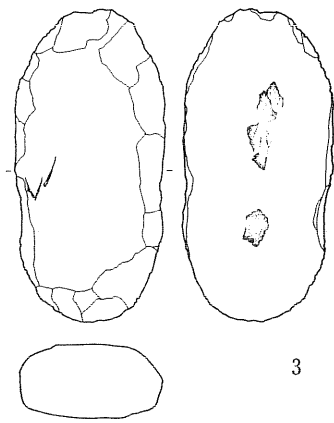
第26図-22は丸味を帯びた断面形の口縁部破片である。表面、裏面ともRLの撚紐を左上-右下の方向で回転し、縦に走る縄文を施文している。23・24・27・28はいずれも0段多条のRLの撚紐を用いて表裏面に縄文を施文している。表面は4片とも横位に、裏面は23・27では右上-左下、24・28では左上-右下の方向で回転施文している。25・26は表面にRLの撚紐を左上-右下の方向で回転し、縦走る縄文を表わし、裏面はナデ調整の行われた破片である。



第20図 第2号竖穴住居跡出土遺物(1)、第3号竖穴住居跡出土遺物、第4号竖穴住居跡出土遺物(1)

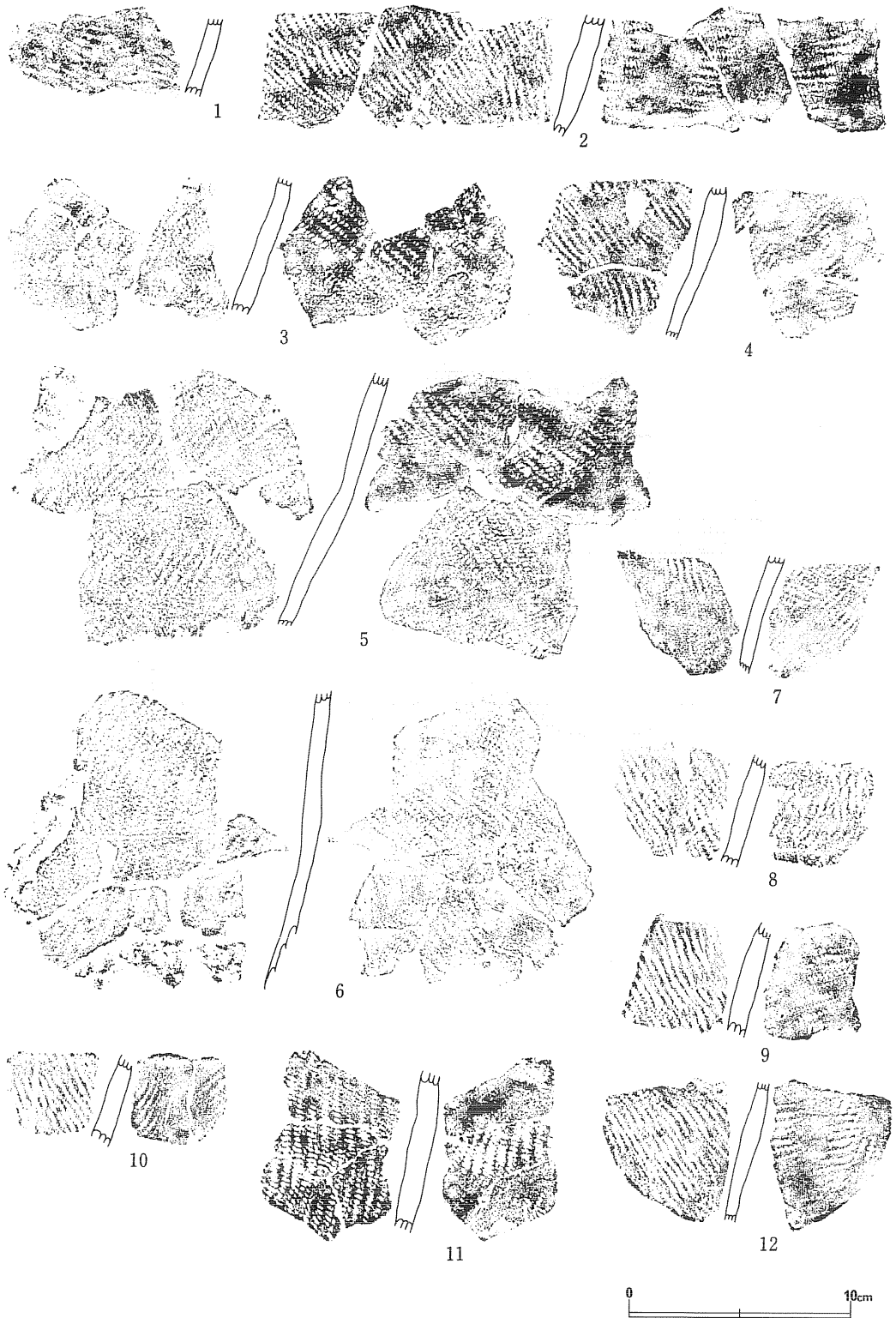


※スクリーントーン部分は擦面



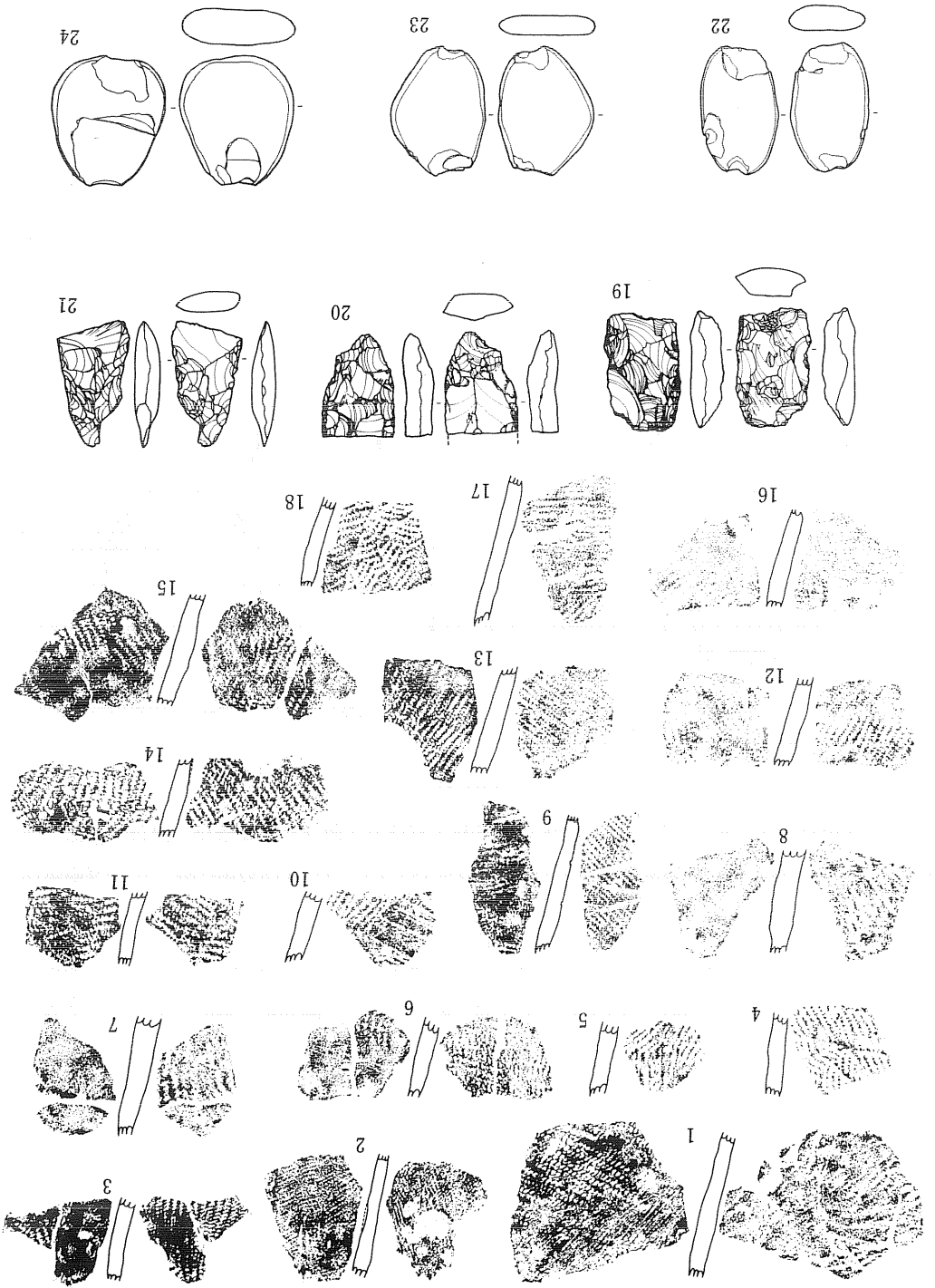
1 ; 第10号土坑
2・3 ; 第2号竪穴住居跡

第21図 第2号竪穴住居跡出土遺物(2)、第10号土坑出土遺物



第22図 第4号竪穴住居跡出土遺物(2)

第23図 第4号竪穴住居跡出土遺物(3)



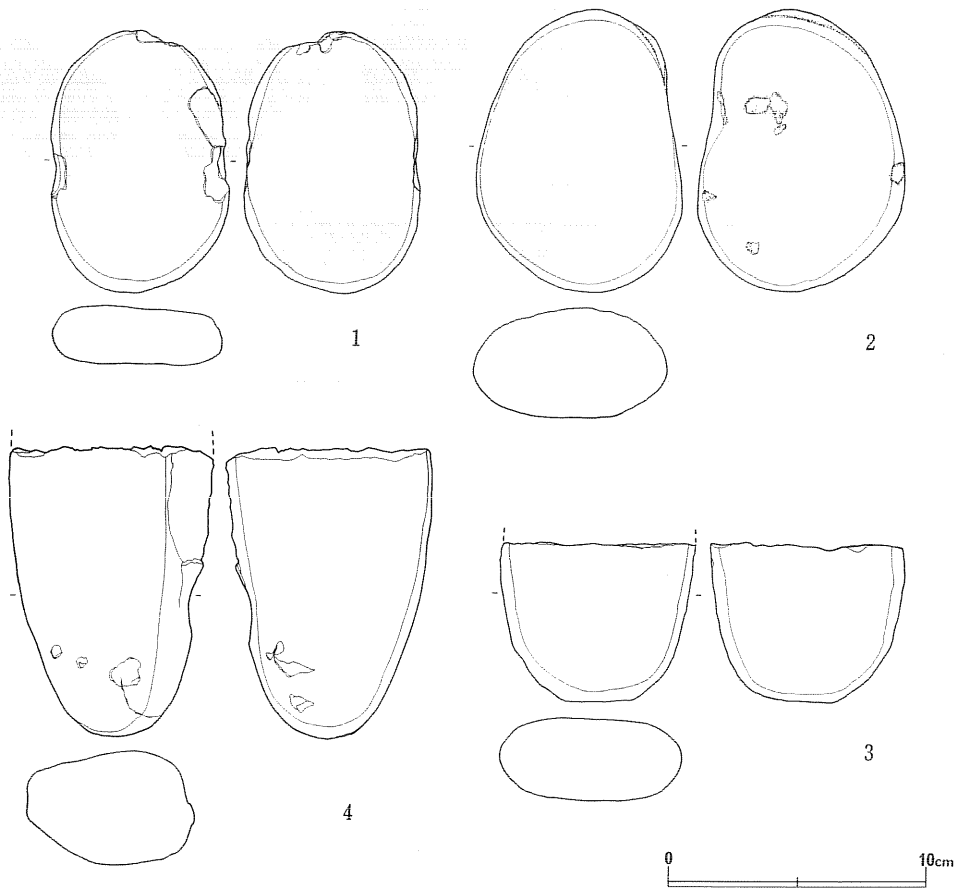
第2節 検出された遺構と遺物

第4号土坑出土遺物（第25図-17~28、図版18）

第25図-17は表面が摩滅して判然としないが、裏面にはR Lの撚紐を左上-右下の方向で回転し、ほぼ縦走する縄文を施している。18~28は表面に0段多条のR Lの撚紐を交錯させて施文し、裏面はヘラ状工具によって丹念なナデ調整が行われた破片である。20は外反する口縁部で、原体は横位に回転されている。27・28の破片では、原体は同じ箇所でも縦位、横位、斜位に回転され、交錯した状態が明瞭にわかる。いずれの破片も胎土に繊維を多く含んでいる。

第5号土坑出土遺物（第26図-1・2、第27図-1、図版19、図版21）

第26図-1・2は、表裏面ともR Lの撚紐による縄文を施した破片である。第27図-1は頁岩の縦長の剥片を利用した搔器である。図の右側縁は素材剥片の表面側、主要剥離面側両方向からの剥離によって緩い弧状の刃縁に作り上げられている。反対側の側縁はほぼ直線をなす。図の上部、素材の打面、打瘤のあった部分を折って除かれたものと思われる。下半分は折損している。



第24図 第4号竪穴住居跡出土遺物(4)

第6号土坑出土遺物（第27図-2、図版21）

中軸線に対し、刃縁が斜めになるトランシェ様石器である。図の表面側下端に素材剥片をとり出した際の縁辺が刃縁となって残る。素材剥片の主要剥離面は全面調整される。石材は黒耀石。

第8号土坑出土遺物（第26図-3～6、図版19）

いずれもR Lの撚紐による縄文を表裏面に施した土器片である。3は縄文と同時に結節部を回転した綾絡文が表わされている。6では口唇上にも縄文が施されている。

第9号土坑出土遺物（第26図-7～11、図版19）

第26図-7・8・10・11は0段多条のL Rの撚紐による縄文を表裏面に施文している。また、9は表面側が磨滅し不明であるが、裏面には0段多条のR Lの撚紐による縄文が施されている。

第10号土坑出土遺物（第21図-1、第26図-12、第27図-3・4・10、図版19、図版21）

第26図-12は表裏面に0段多条のL Rの撚紐で縄文を施した土器片である。第27図-3は横長の剥片を素材としたトランシェ様石器で、図の下端に第1次剥離の際の縁辺が刃縁として残る。厚さを調整するため基部側が表裏面とも大きく剥ぎ取られている。4は基部両面に素材剥片の面を残した石篋である。側縁から刃部にかけては丸味を帯びて連続する。これらは頁岩を石材とする。10は重量33gの小形石錘であり、安山岩質の石を石材とする。第21図-1の擦石は断面三角形の安山岩質円礫を利用したものである。

第11号土坑出土遺物（第26図-13～21、第27図-5～8、図版19、図版21）

第26図-13～21はいずれも0段多条の撚紐を用いて、表裏面に縄文が施されている。ただし16～20の裏面では縄文施文後ナデ調整が行われている。また17の表面は磨滅し不明。第27図-5・7は横長の剥片を素材として短冊形、撥形に仕上げられたトランシェ様石器である。両者とも素材剥片の主要剥離面が一部残される。第27図-6・8は基部の尖る石篋である。6は素材の主要剥離面が残る。また8は刃部を折損している。これらの石器は頁岩を石材としている。

第12号土坑出土遺物（第26図-29～36、図版20）

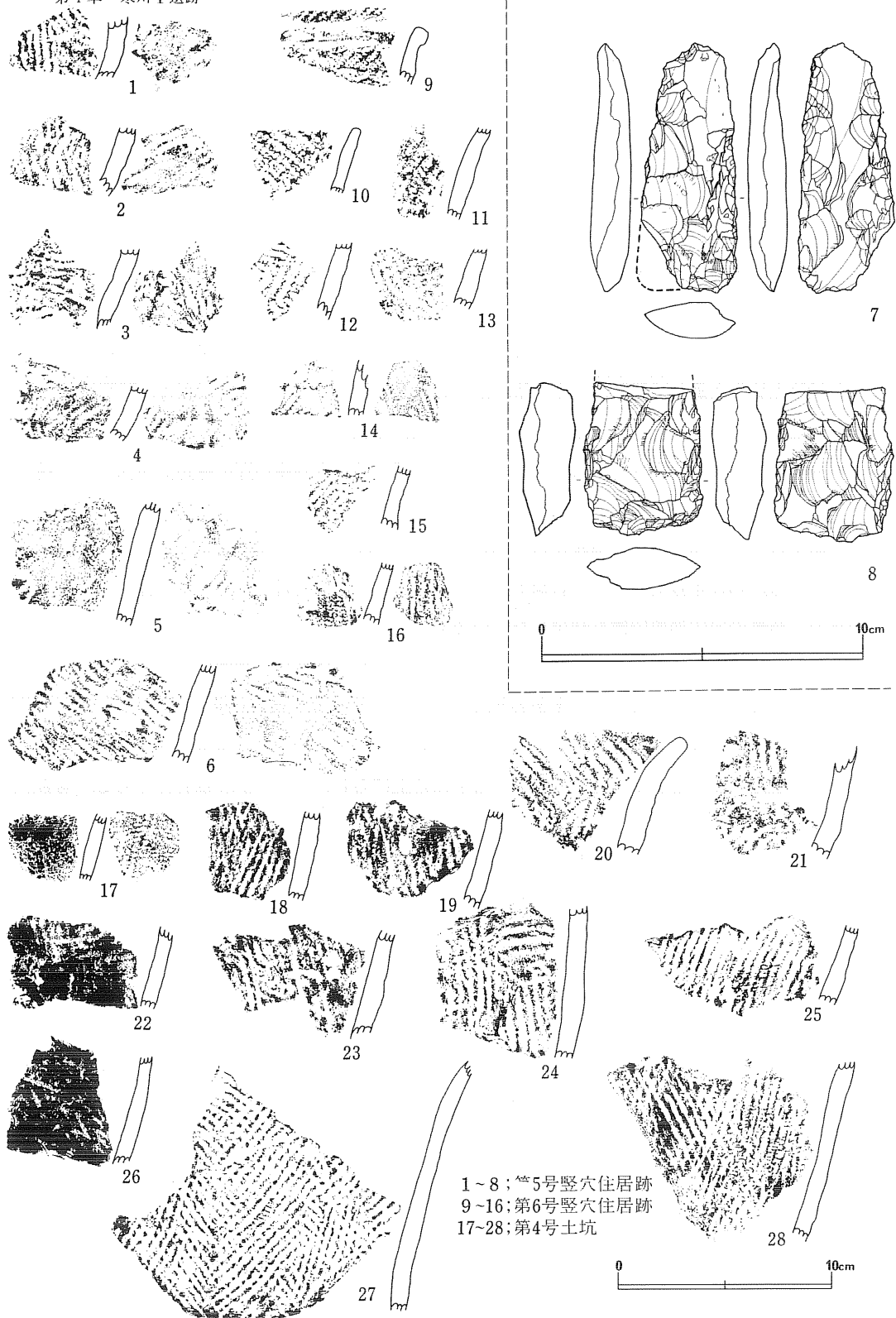
第26図-29・33・34は表面に0段多条のR Lの撚紐を用いた縄文を施し、裏面はナデ調整。31・32・36は表面無文で、裏面が0段多条のR Lの撚紐による縄文が施されたもの。32・35はそれぞれ0段多条のL R、R Lの撚紐によって縄文が施された破片である。36の胎土には繊維を含む。

第14号土坑出土遺物（第26図-37、第27図-9、図版20、図版21）

第26図-37は表裏面に0段多条のL Rの撚紐による縄文が施文された破片である。裏面の縄文は条痕文施文後に施されている。第27図-9は扁平な楕円礫の短軸側を打ち欠いた大形の石錘である。重量517gを測る。石材は安山岩質の石を用いている。

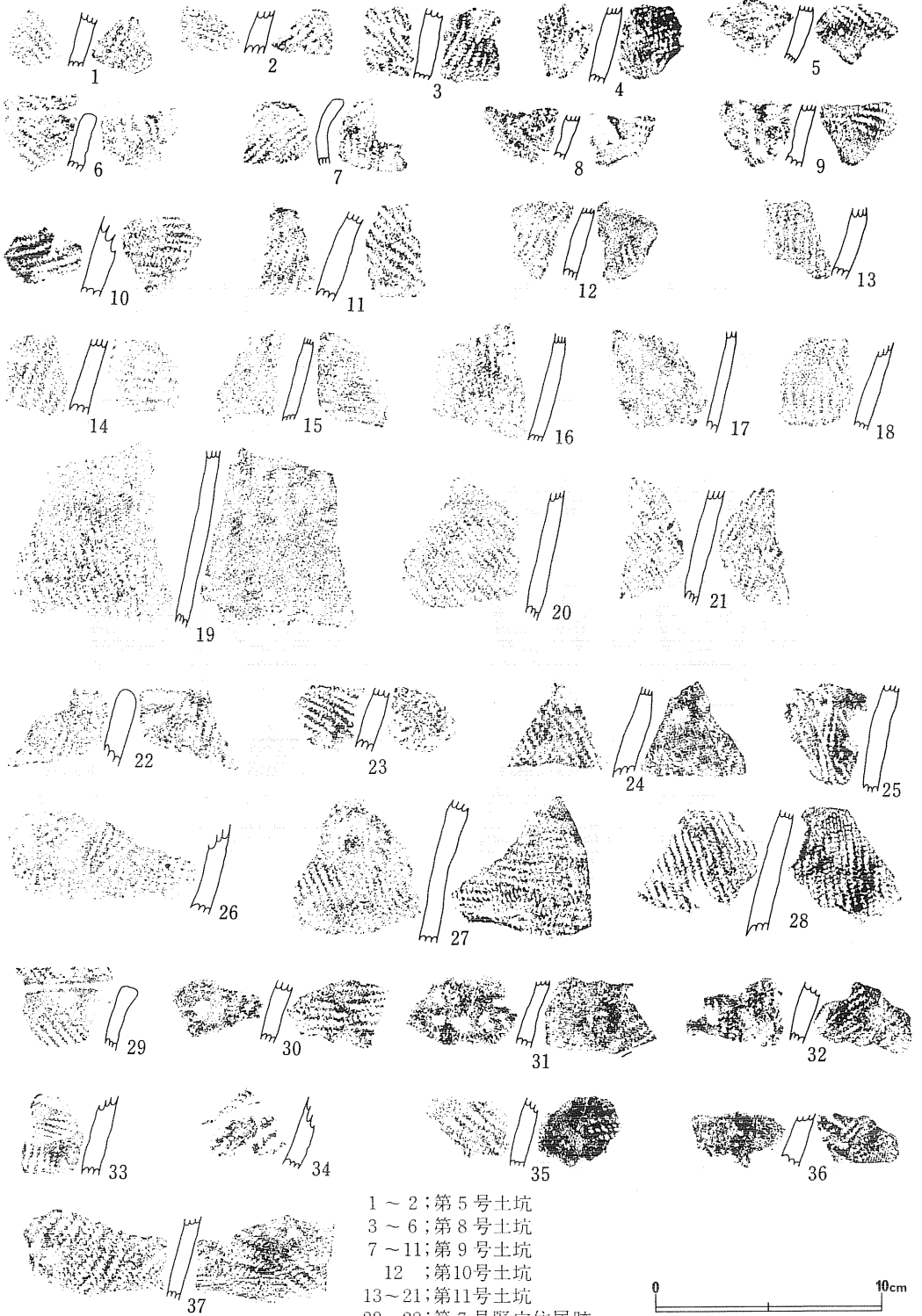
第16号土坑出土遺物（第89図-1・2、図版22）

1は表面にR Lの撚紐による縄文を施文した破片である。裏面はナデ調整が行われる。2は径のきわめて小さな平底底部である。胎土に繊維を含む。



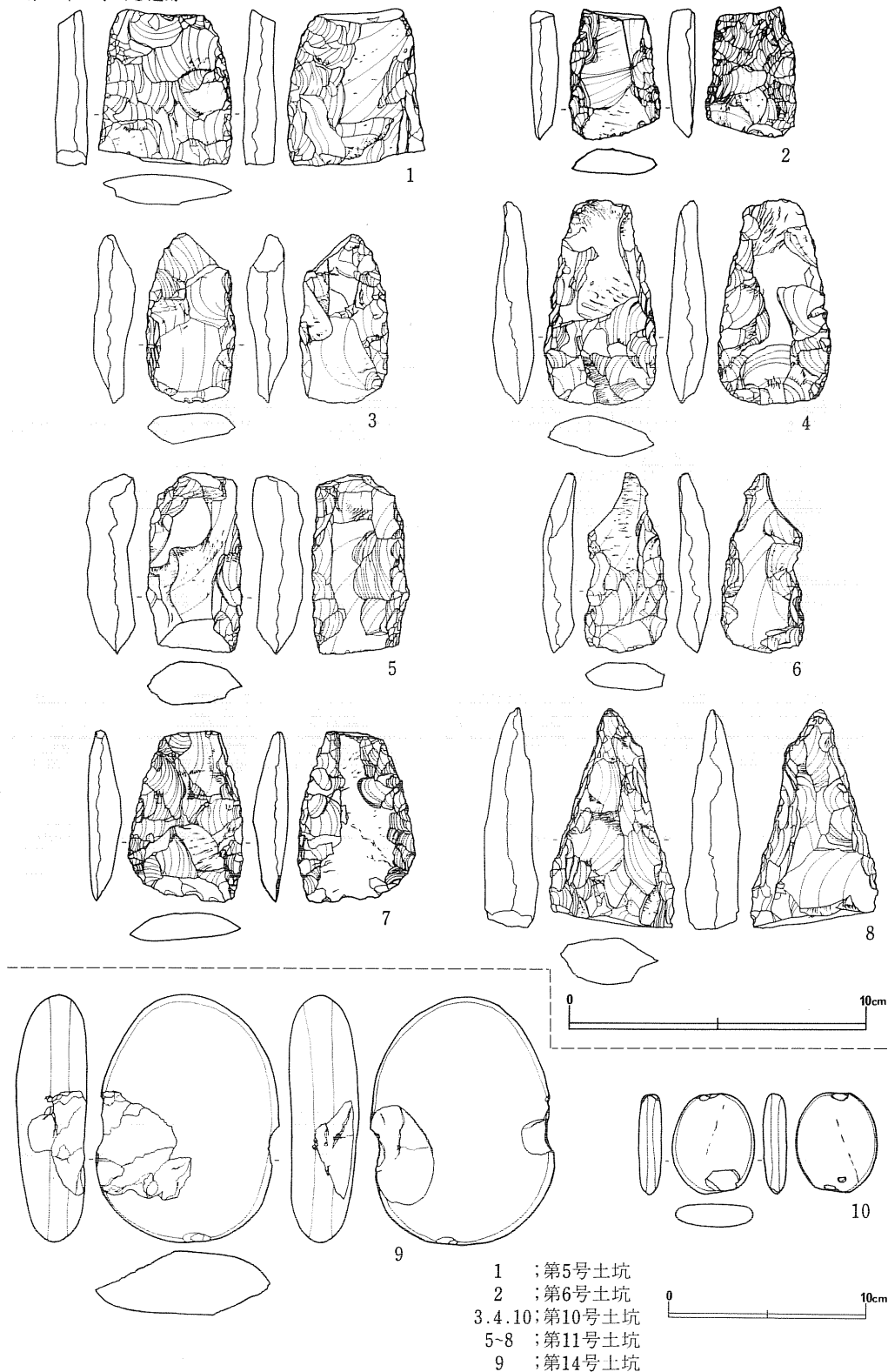
1~8; 第5号竖穴住居跡
9~16; 第6号竖穴住居跡
17~28; 第4号土坑

第25図 第5号・第6号竖穴住居跡出土遺物、第4号土坑出土遺物



1 ~ 2 ; 第5号土坑
 3 ~ 6 ; 第8号土坑
 7 ~ 11 ; 第9号土坑
 12 ; 第10号土坑
 13 ~ 21 ; 第11号土坑
 22 ~ 28 ; 第7号竖穴住居跡
 29 ~ 36 ; 第12号土坑
 37 ; 第14号土坑

第26図 第7号竖穴住居跡出土遺物、第5号・第8号～第12号・第14号土坑出土遺物



第27图 第5号·第6号·第10号·第11号·第14号土坑出土遺物

土器捨て場と遺構外出土の遺物

第1号捨て場（第28図、図版4-5）

調査区中央南斜面にあり、遺物の分布する広がりにはMB44-46とMC44-46の6グリッドにわたる。捨て場は、谷頭部分の摺鉢状の地形を利用している。標高は11-16mである。南北13.5m、東西8mの範囲中、MC45・46区が遺物の最も集中する箇所である。

遺物の大半は斜面中央に集中し、地山面に近い黒褐色土に包含される。この土層は砂利や小石を顕著に含む粘質土の極度にしまった土だが、急斜面の地山では直上の軟かい土層からも遺物が出土した。遺物は大部分が土器片で、石器はごく僅かしか出土していない。捨て場の石器は緩斜面における出土量とは比較にならないほど僅小である。これは捨て場の形成に際し、選択的に土器が捨てられた結果と考えられる。

早期末葉から前期初頭の土器分類とその基準

寒川Ⅰ遺跡では縄文時代早期から平安時代までの土器が検出されている。出土した土器は各時代毎に群として把え得るまとまりをもっている。この中でも、早期末葉から前期初頭の土器は本遺跡を特徴づける時期の土器であり、かつ量もきわめて多い。ここでは、詳細に検討するために、他の時代の土器群とは異なる扱いで記述することとする。

さて、縄文時代早期末葉から前期初頭に編年される土器は、その表裏面に施される文様の特徴を把えて、縄文-縄文、縄文-条痕、条痕-条痕などの名をもって呼ばれる。器面の表裏に施されるこの種の文様は、他の時期でいえば、粗製土器や精製土器に施される所謂地文である。他の時期の土器では地文である以上、その上にさらに加えられる文様の特徴や、器形上の特徴、そしてそれらを総合した上での形態分類が行われるのであり、1個の土器がもつ種々の属性のうち、地文の果す役割は相対的に小さいものとなる。したがってそれらの文様を弁別する施文法の違いや原体の違いによる差異、例えば縄文であれば反撚りの縄の圧痕だとか、羽状縄文だとかといった特徴は、型式の設定を目指す分類にあっては副次的な要素として採り上げられる場合が多い。ところが、早期末葉から前期初頭の土器の特徴を如実に表わし、いわば型式的な本質ともいふべきものを体現するのは、とりもなおさずこの地文の特徴である。器面にある種の素材を用いて文様が施されるかどうか、素材の種類は何か、さらに素材の加工によって作られる原体は何かなどといったことが、段階的に組み合わせさせて1つの類型を形づくっている。

寒川Ⅰ遺跡から出土した縄文時代早期末葉から前期初頭の土器の分類作業は、以上のような事柄を先ずもって念頭に置いて行った。ところで、上述したことでも明らかだが、一般的に土器分類を行うためのいわば道具である基準は、対象のもつ属性と不可分に結びついている。し

たがって基準としては対象を必要かつ十分に識別するものが選ばれるが、本遺跡の場合には、対象が破片であるため、その表裏面に施文される縄文あるいは条痕文を識別し得るだけのものでは十分満足できる。しかし、逆に言えば対象の可知的属性はその破片の程度に大きく制限される。すなわち、本遺跡のような小破片の多い場合には、それらを類型化しても、それは実際の土器のもつ特徴的な側面がいくつか捨象されたものであることも考えておく必要がある。

実際の分類について述べる前にきわめて概念的ではあるが、土器の表裏面と地文施文の関係について見ておきたい。まず対象となる土器面は表裏2面、これに文様が施文されるか否かで4通りの組み合わせができる。すなわち、

(A)有文-有文 (B)有文-無文 (C)無文-有文 (D)無文-無文

の各種である。さらに施文に用いられる工具を撚紐と貝殻とするなら、この2通りを組み合わせた結果は、

(A₁)縄文-縄文 (B₁)縄文-無文 (C₁)無文-縄文 (D₁)無文-無文

(A₂)条痕文-条痕文 (B₂)条痕文-無文 (C₂)無文-条痕文

の7つである。

この中で寒川Ⅰ遺跡の資料の分類に有効と判断されたのは

(A₁)縄文-縄文 (B₁)縄文-無文 (C₁)無文-縄文

の3つである。また条痕文が施されるものは存在するが数が少なく、その施されることをもって1群として包括することが妥当であると判断した。また、これらの文様上の特徴とは別に、胎土に繊維を含むまとまりがあり、この特徴も1群を設定するのに有意と判断した。即ち寒川Ⅰ遺跡の早期末葉から前期初頭の土器は、以下の5つの群に大分類される。

I群 土器の表面と裏面に縄文を施している群

II群 土器の表面には文様が施されているが、裏面が無文となる群

III群 土器の表面が無文で、裏面に縄文を施している群

IV群 土器に条痕文を施している群

V群 土器に繊維を含んでいる群

そしてこれらの土器は、表裏面における文様の種類とバラエティーによってさらに類型化することができる。また、I～V群の土器には口縁部の破片が割合に多く、それに表わされる特徴を形態上の特徴として抽出することも可能なため、〈種〉として口縁部だけの分類を付加した。以上のように分類の最大を〈群〉として扱いI～V群とし、表裏両面における文様によってアルファベットの類型化を行った。そして口縁部に関する分類は、口縁部貼付文の有無によって1・2とし、1の場合は口縁部の貼付けが無く、a；外反すること、b；直線的であること、c；波状であることとし、2の場合は貼り付けの有る土器で、d；折返し口縁であるこ

と、e；1本の隆帯をもつこと、f；2本の隆帯をもつことの6種に分けてある。また、d～fの中にはア；折り返し口縁上に縄文の施されるもの、イ；隆帯上に指頭圧痕の施されるもの、ウ；隆帯上に縄文の施されるものがある。この〈種〉の分類では、口縁部のつくりや特徴が〈群〉や、〈類〉別の基準に反映されるように試みた。

以上の分類基準で寒川Ⅰ遺跡出土土器の類型化を行う。

Ⅰ群における類型（表裏両面に斜縄文を施す。）

Ⅰ群における類型はA～Jの10種類を数えることができる。Ⅰ群A類（以下、Ⅰ群A類1a種などの表記はⅠ-A-1aとする。）は、表裏両面に斜縄文だけがある。Ⅰ-Bはさらに表面だけに綾絡文を施す。Ⅰ-Cは、さらに裏面だけに綾絡文を施す。Ⅰ-Dは、さらに両面に綾絡文を施す。Ⅰ-Eは、さらに表面だけに原体側面圧痕文を施す。Ⅰ-Fは、さらに表面に綾絡文と原体側面圧痕文を施す。Ⅰ-Gは、さらに表面に浅い沈線文を施す。Ⅰ-Hは表裏両面に無節の斜縄文を施す。Ⅰ-Iは表裏両面に撚合、反撚りの縄文を施す。そしてこれらの口縁部の変異型には、Ⅰ-A-1a、Ⅰ-A-1b、Ⅰ-A-2d、Ⅰ-A-2e、Ⅰ-A-2f、Ⅰ-D-1a、Ⅰ-F-2e、の種類がある。

Ⅱ群における類型（表面には文様を有し裏面は無文である。）

Ⅱ群における類型は、A～Fの6種類を数えることができる。Ⅱ-Aは表面に斜縄文を施す。Ⅱ-Bは表面に無節の縄文を施す。Ⅱ-Cは表面に斜縄文と綾絡文を施す。Ⅱ-Dは表面に撚糸文を施す。Ⅱ-Eは表面に羽状縄文を施す。Ⅱ-Fは撚合、反撚の斜縄文を施す。そして口縁部の変異型には、Ⅱ-A-1a、Ⅱ-C-1a、の種類がある。

Ⅲ群における類型（表面が無文で裏面は縄文を施す。）

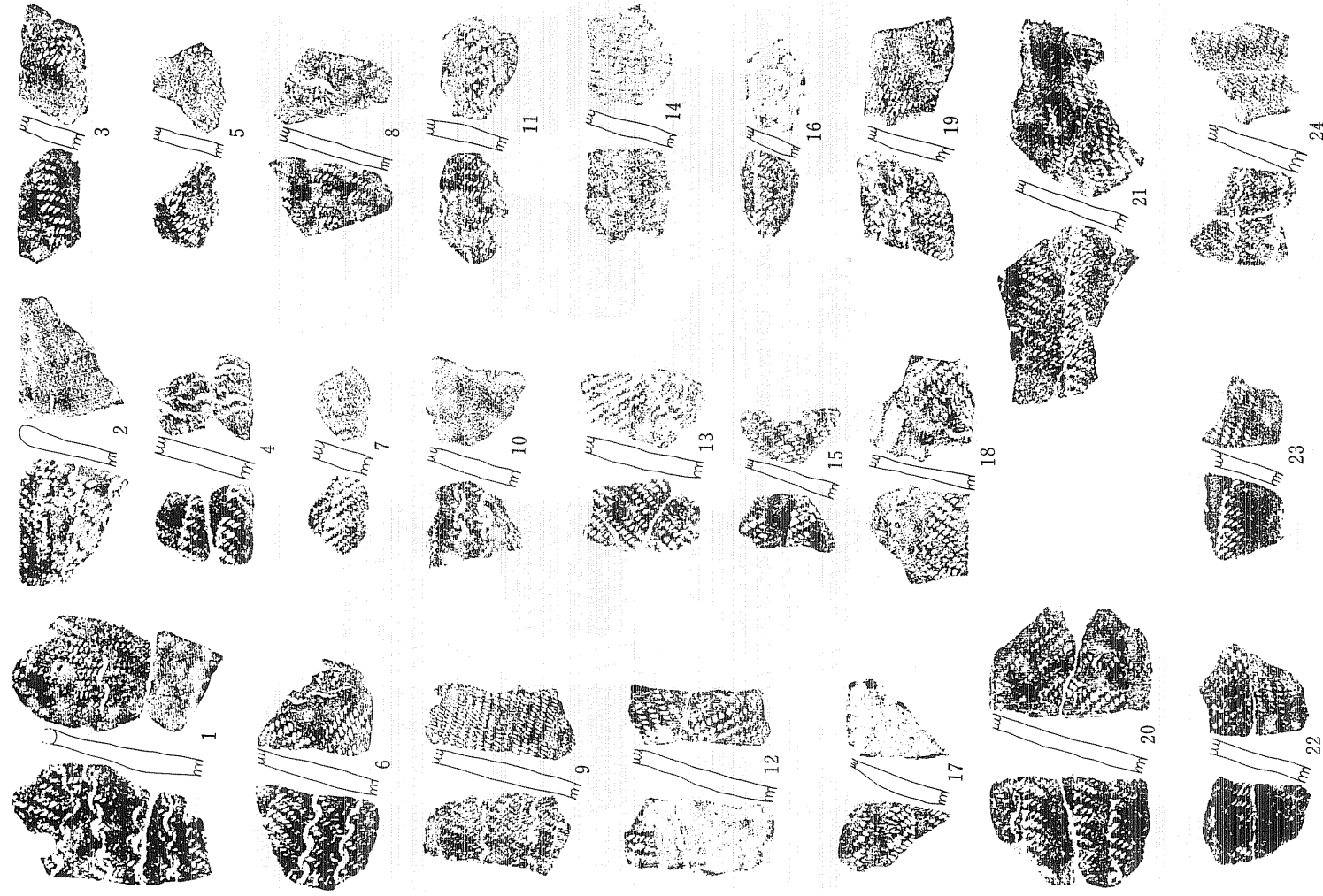
Ⅲ群における類型は、A・Bの2種類を数えることができる。Ⅲ-Aは、表面が無文で裏面に斜縄文を施す。Ⅲ-Bは表裏面が無文となる。口縁部の変異型には、Ⅲ-B-1bがある。

Ⅳ群における類型（条痕文を有する。）

Ⅳ群における類型は、A～C類の3種類を数えることができる。Ⅳ-A類は表裏両面に条痕文を施す。Ⅳ-Bは、表面には斜縄文を裏面には条痕文を施す。そして口縁部の変異型には、Ⅳ-B-1a、Ⅳ-B-1b、の種類がある。

Ⅴ群における類型（繊維を含んでいる。）

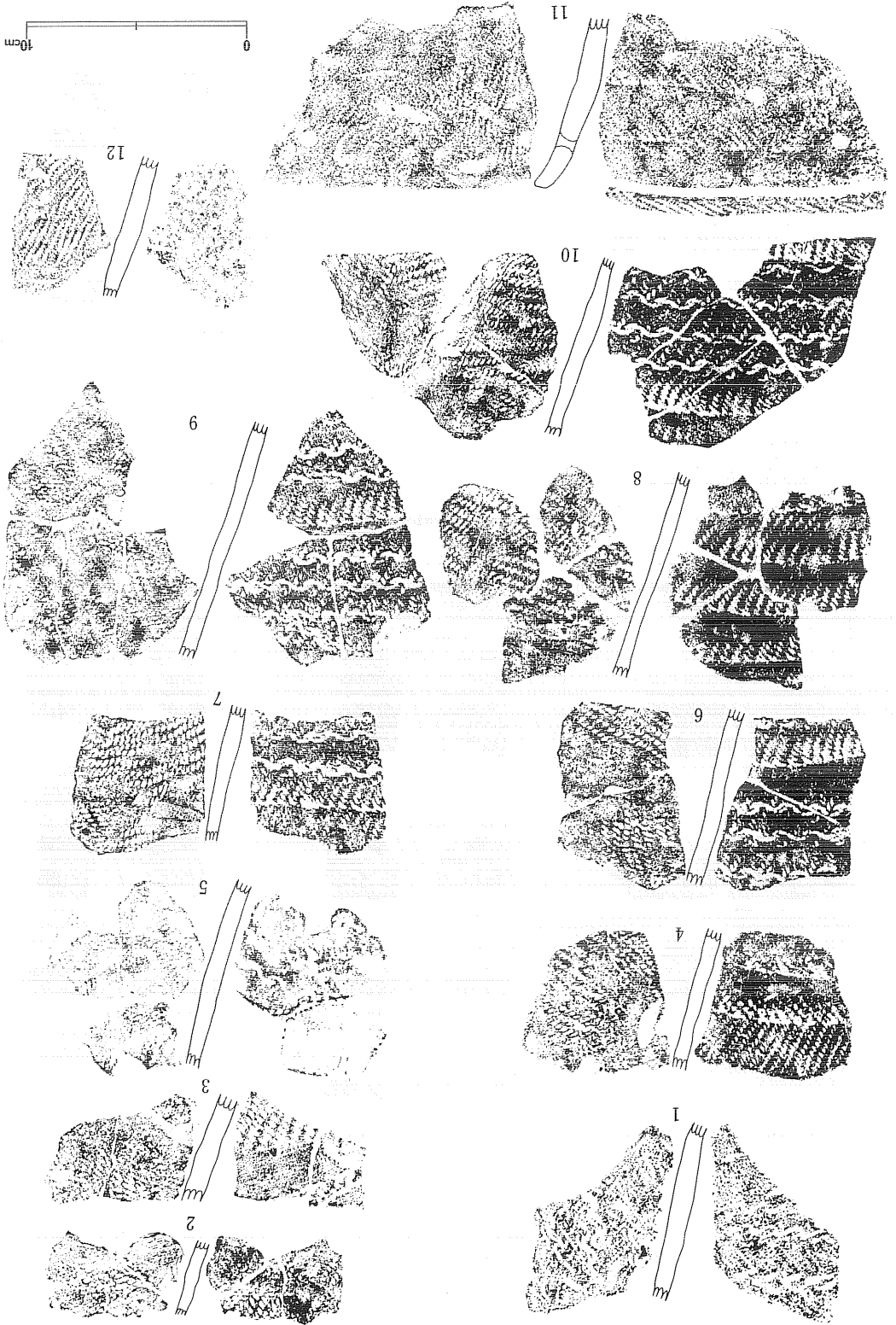
Ⅴ群における類型は、A～Gの7種類を数えることができる。Ⅴ-Aは、表面が斜縄文で裏面は無文である。Ⅴ-Bは表裏両面に斜縄文を施す。Ⅴ-Cは、表面は羽状縄文で裏面は無文である。Ⅴ-Dは表面に無節の斜縄文を施す。Ⅴ-Eは、表面は押引文を施し裏面は無文である。Ⅴ-Fは表裏両面が無文である。そして、口縁部の変異型には、Ⅴ-A-1a、Ⅴ-A-1b、Ⅴ-A-1c、Ⅴ-E-1a、Ⅴ-F-1bの種類がある。以上の分類を行った。



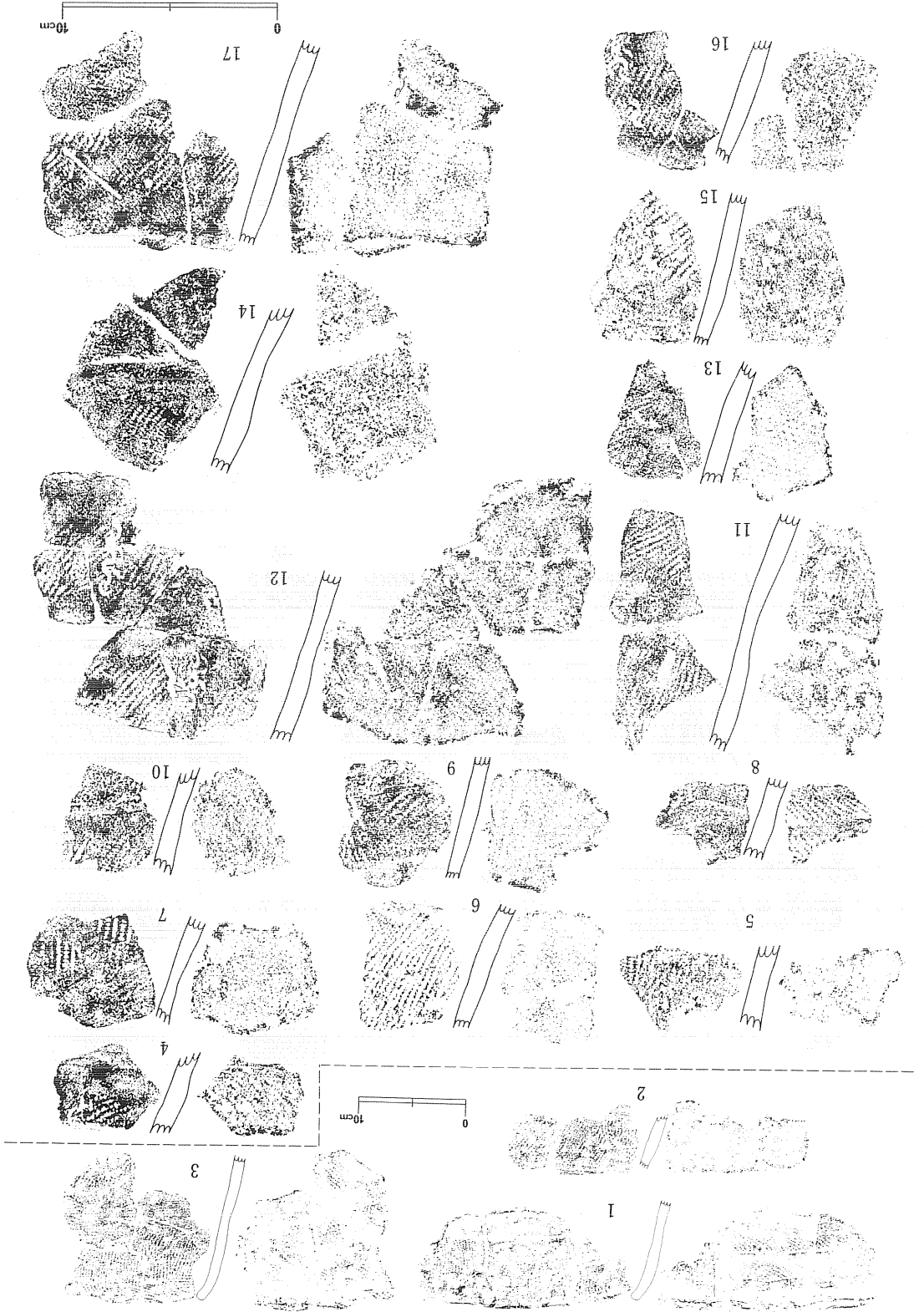
第29図 遺構外出土の縄文土器(1)

早期～前期

第30図 遺構外出土の縄文土器(2) 早期～前期

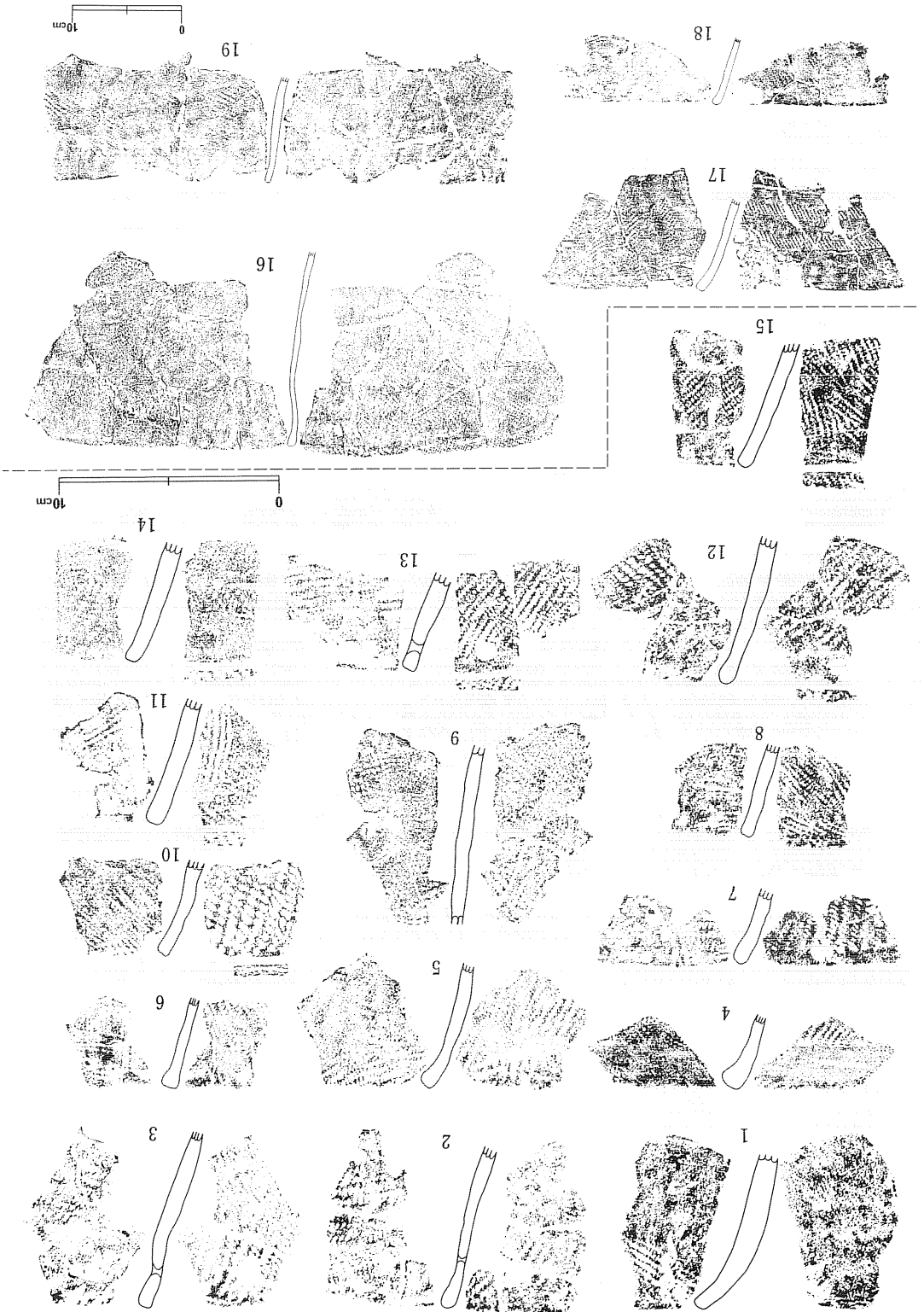


第31図 遺構外出土の縄文土器(3) 早期～前期

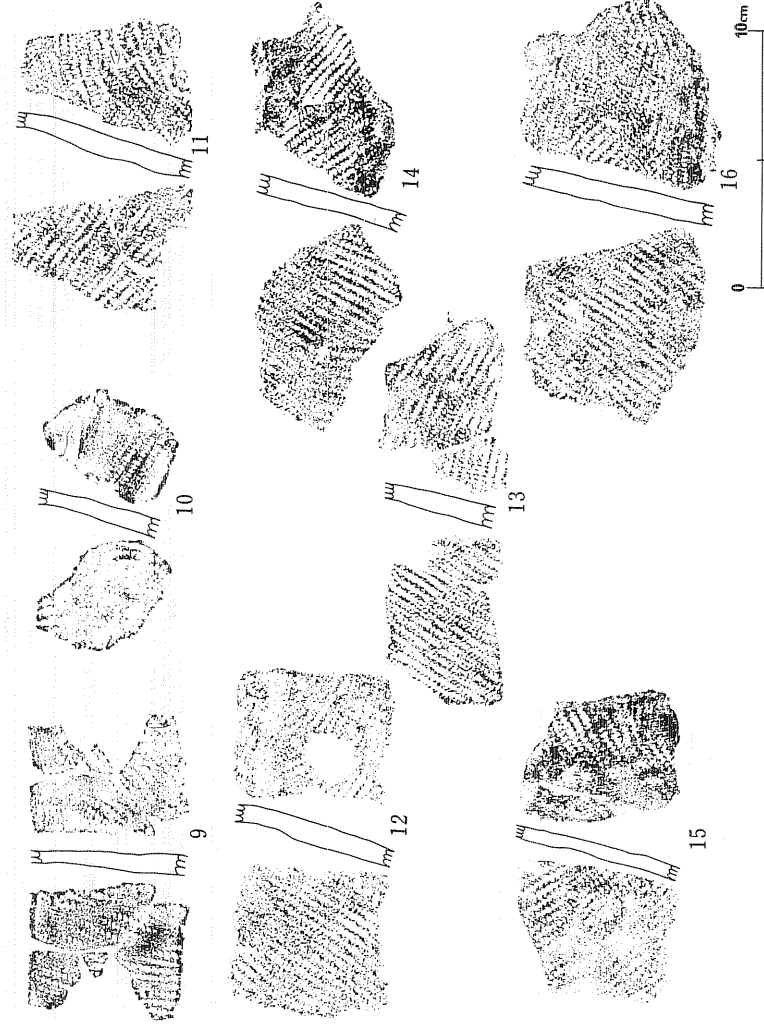
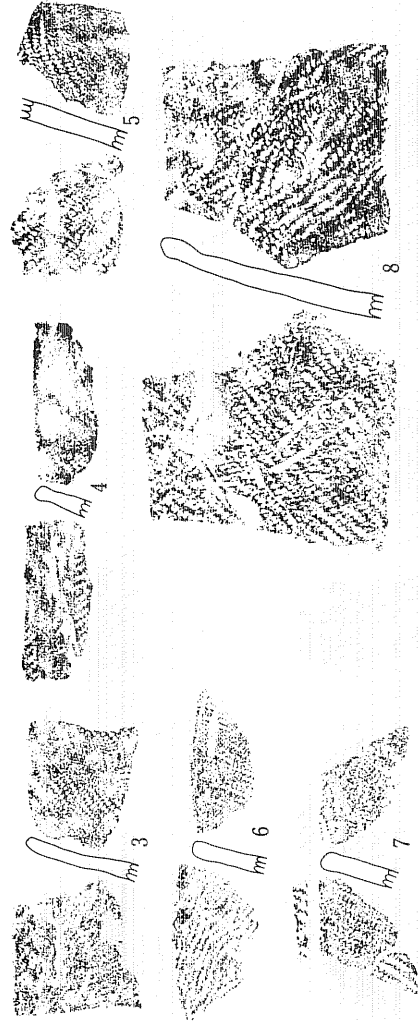


第2節 検出された遺構と遺物

第32図 遺構外出土の縄文土器(4) 早期～前期

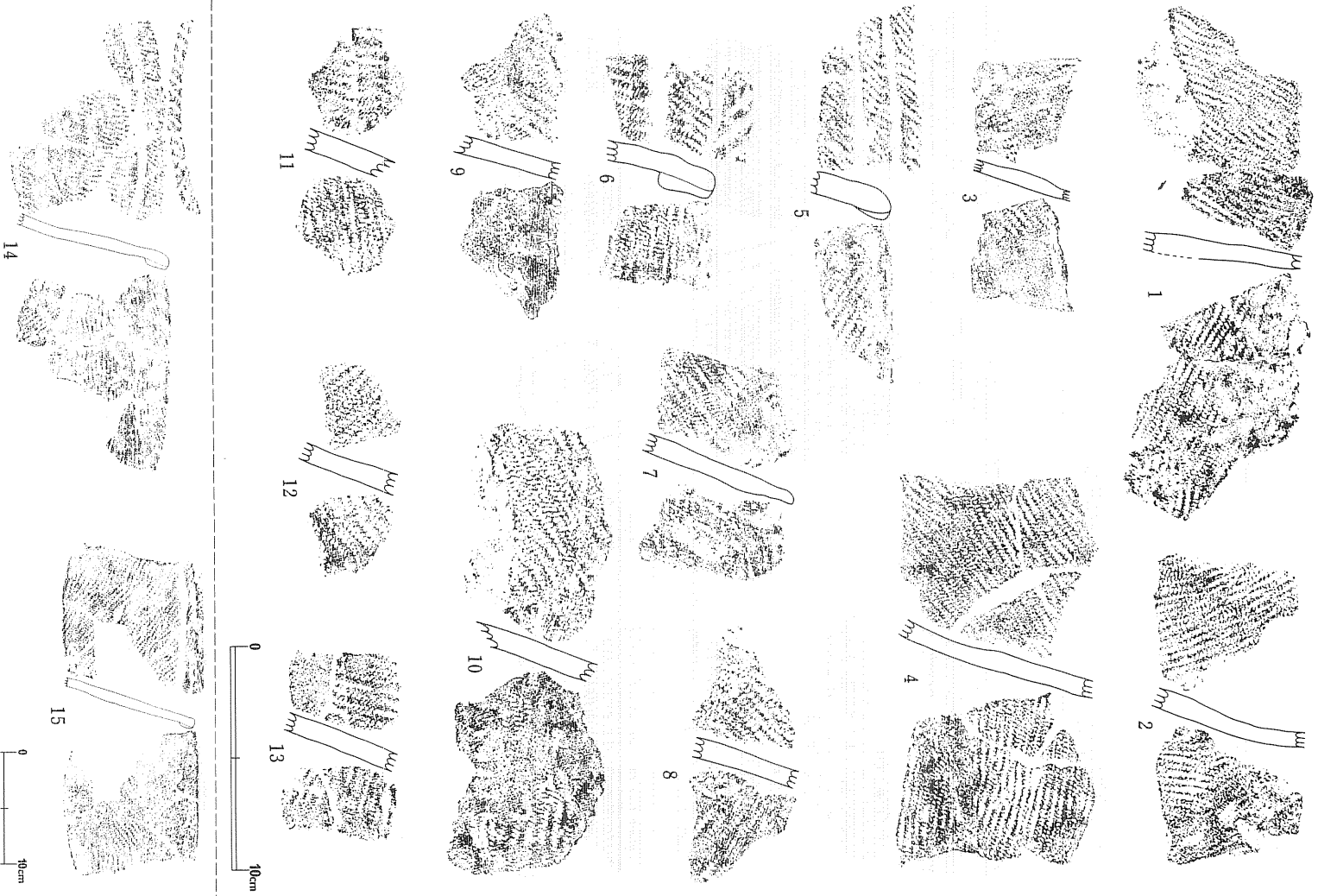


第2節 検出された遺構と遺物



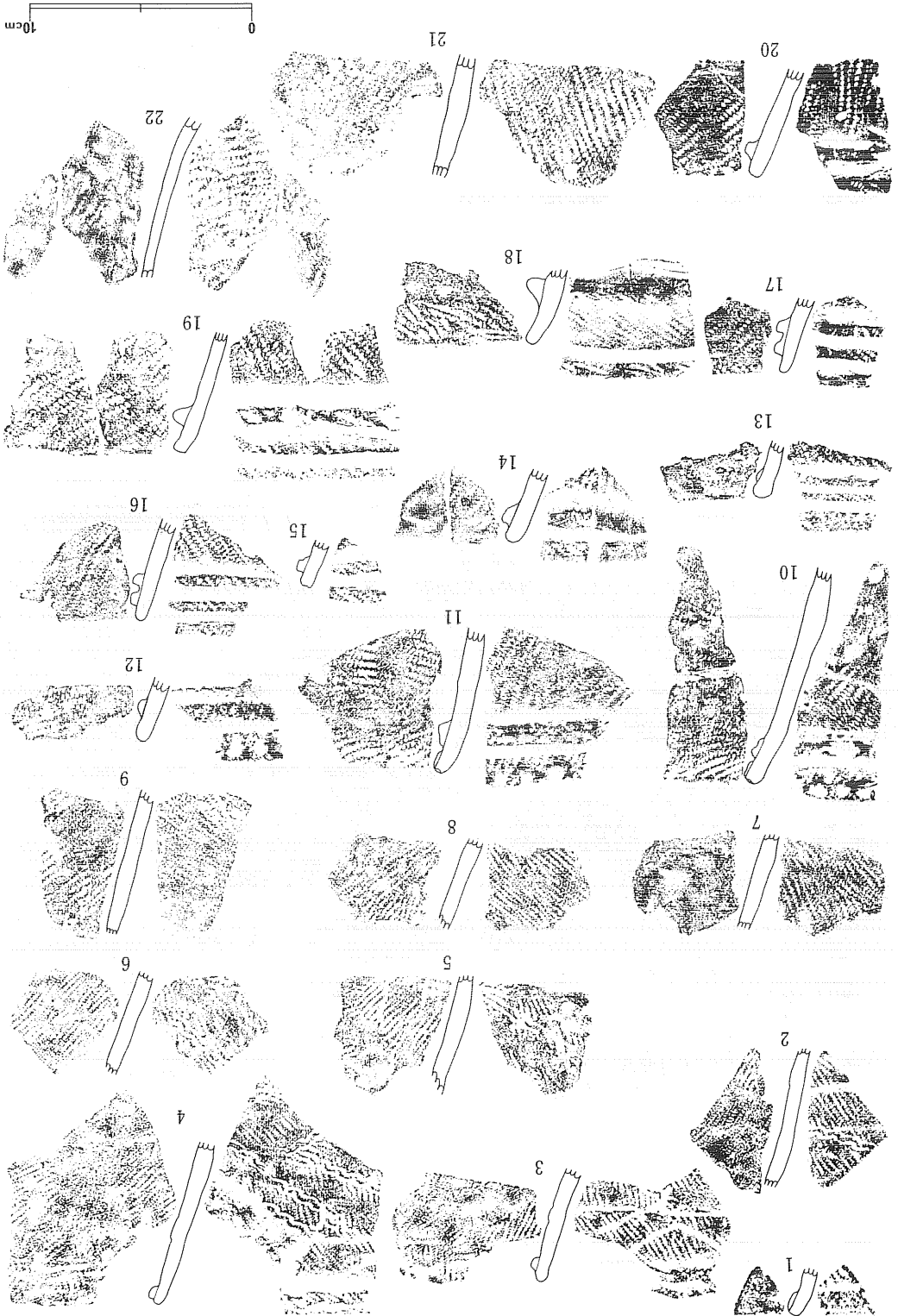
第33図 遺構外出土の縄文土器(5)

早期～前期



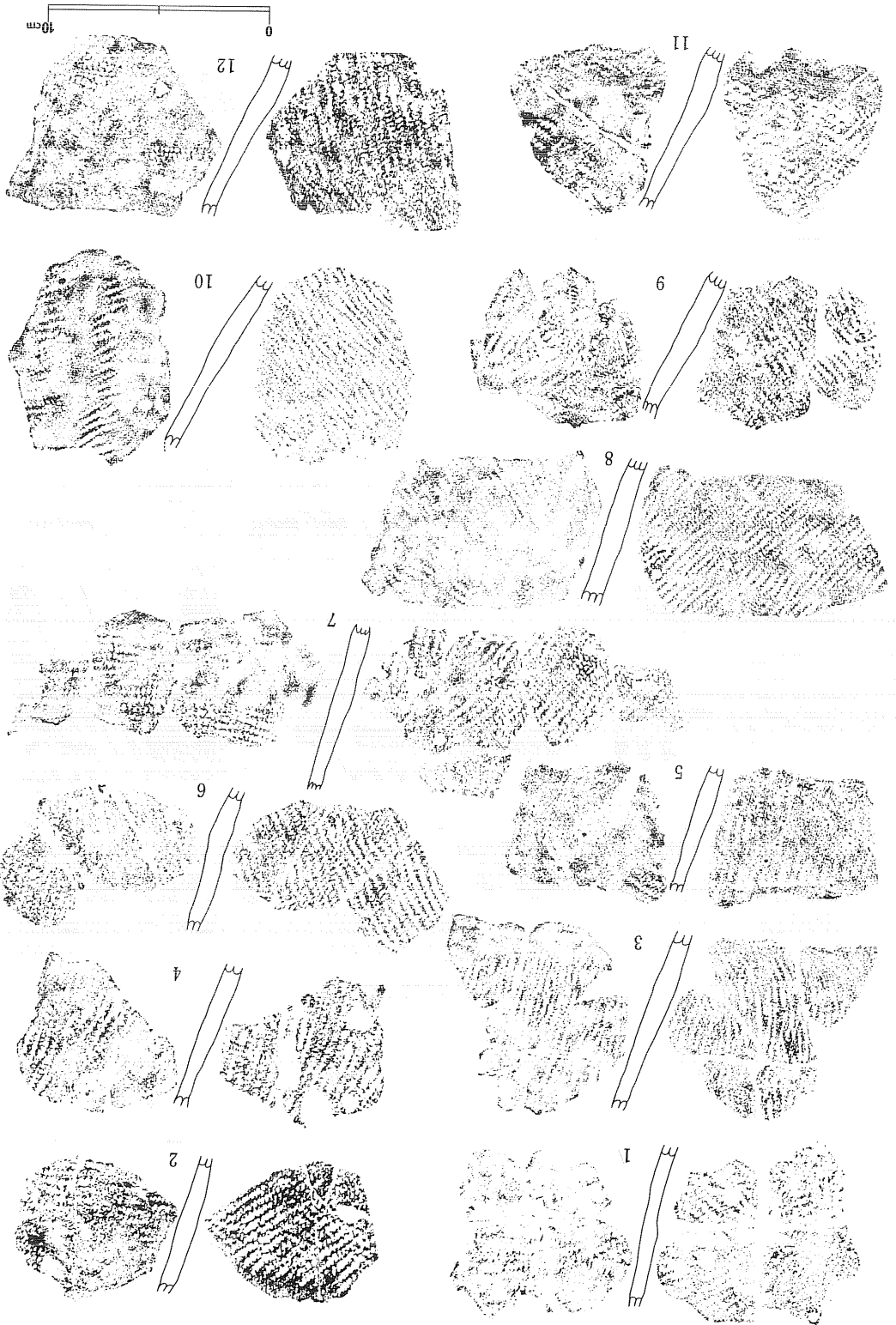
第34図 遺構外出土の縄文土器(6) 早期～前期

第35図 遺構外出土の縄文土器(7) 早期～前期

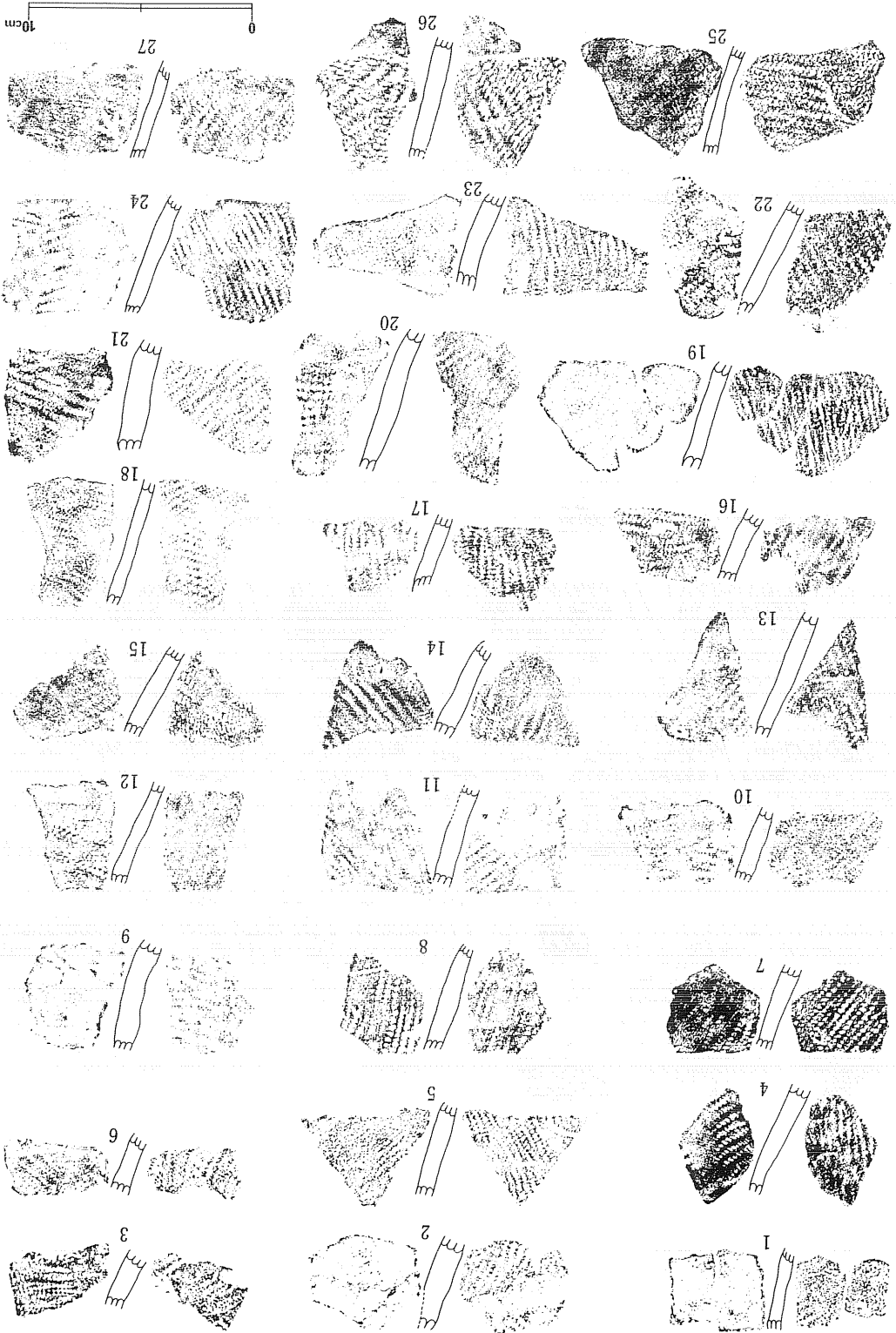


第2節 検出された遺構と遺物

第36図 遺構外出土の縄文土器(8) 早期～前期

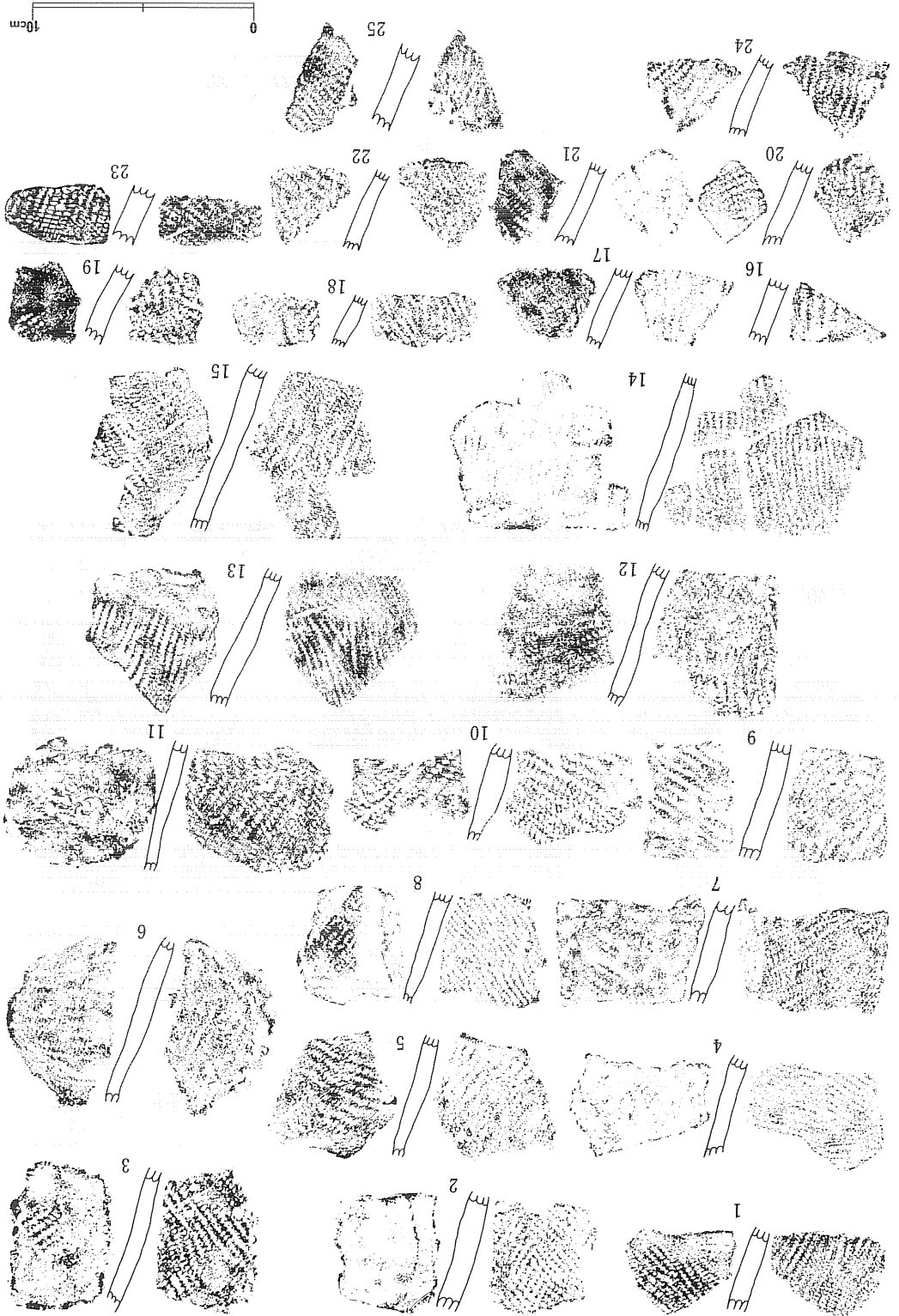


第37図 遺構外出土の縄文土器(9) 早期～前期

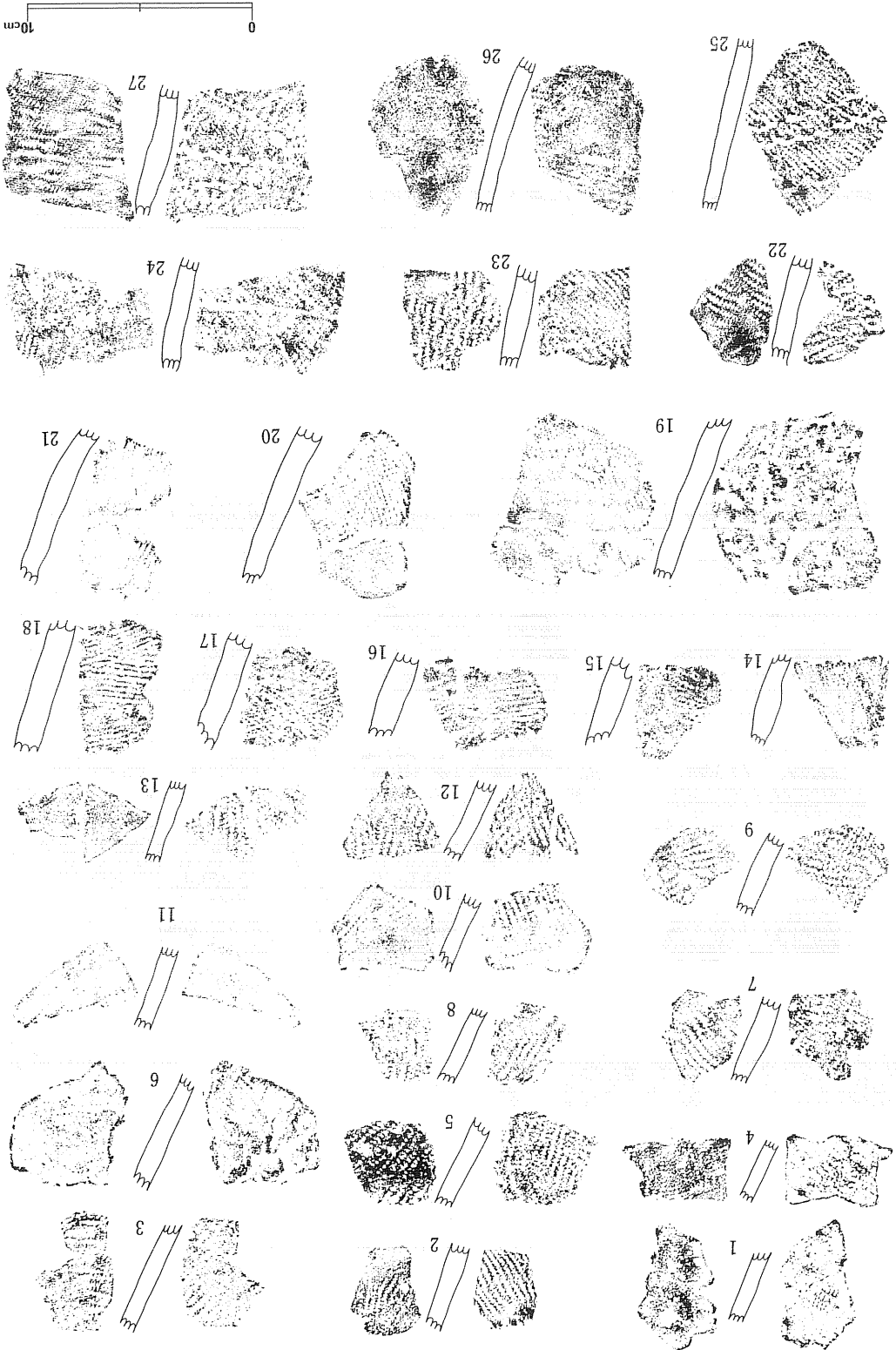


第2節 検出された遺構と遺物

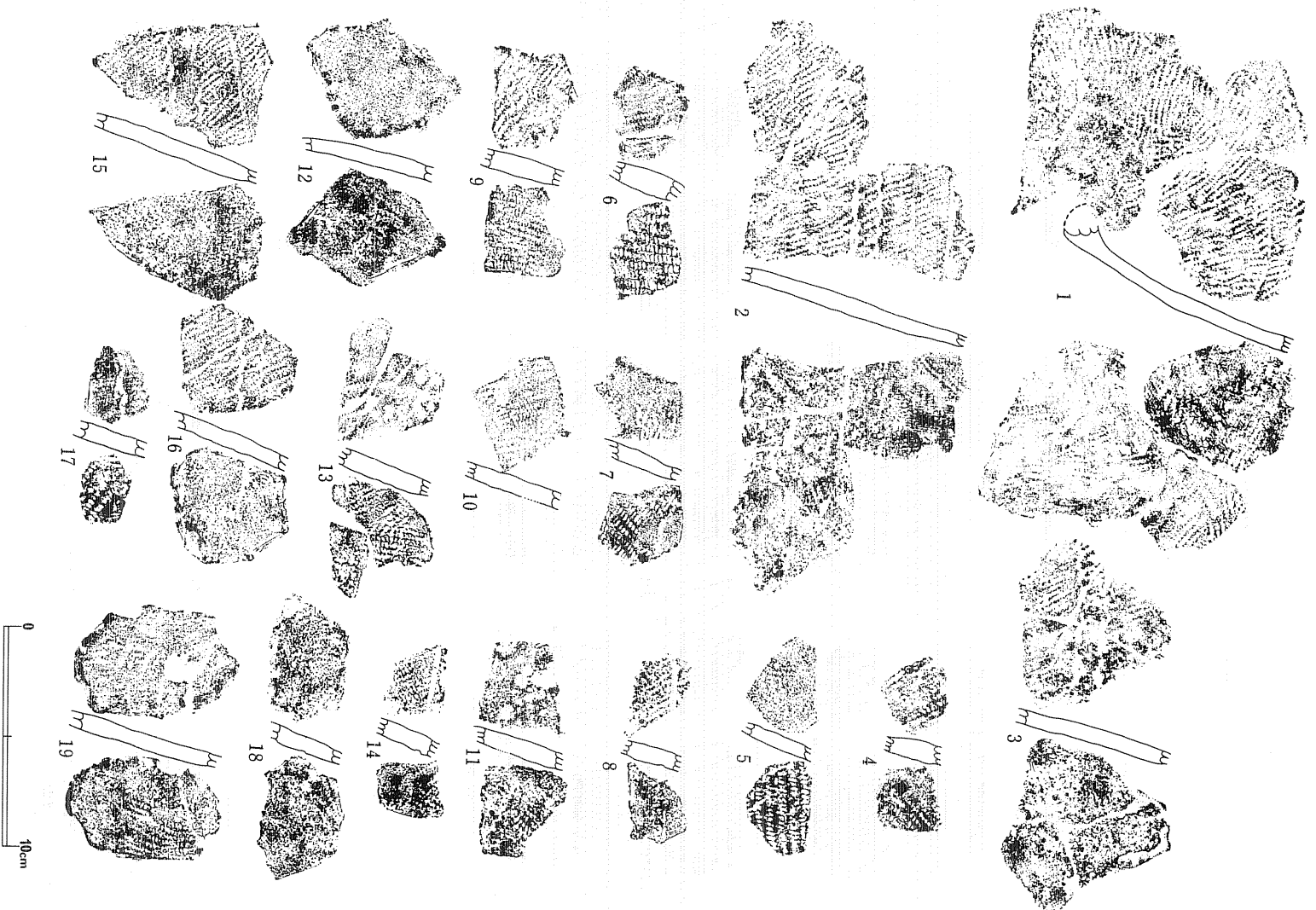
第38図 遺構外出土の縄文土器(1) 早期～前期



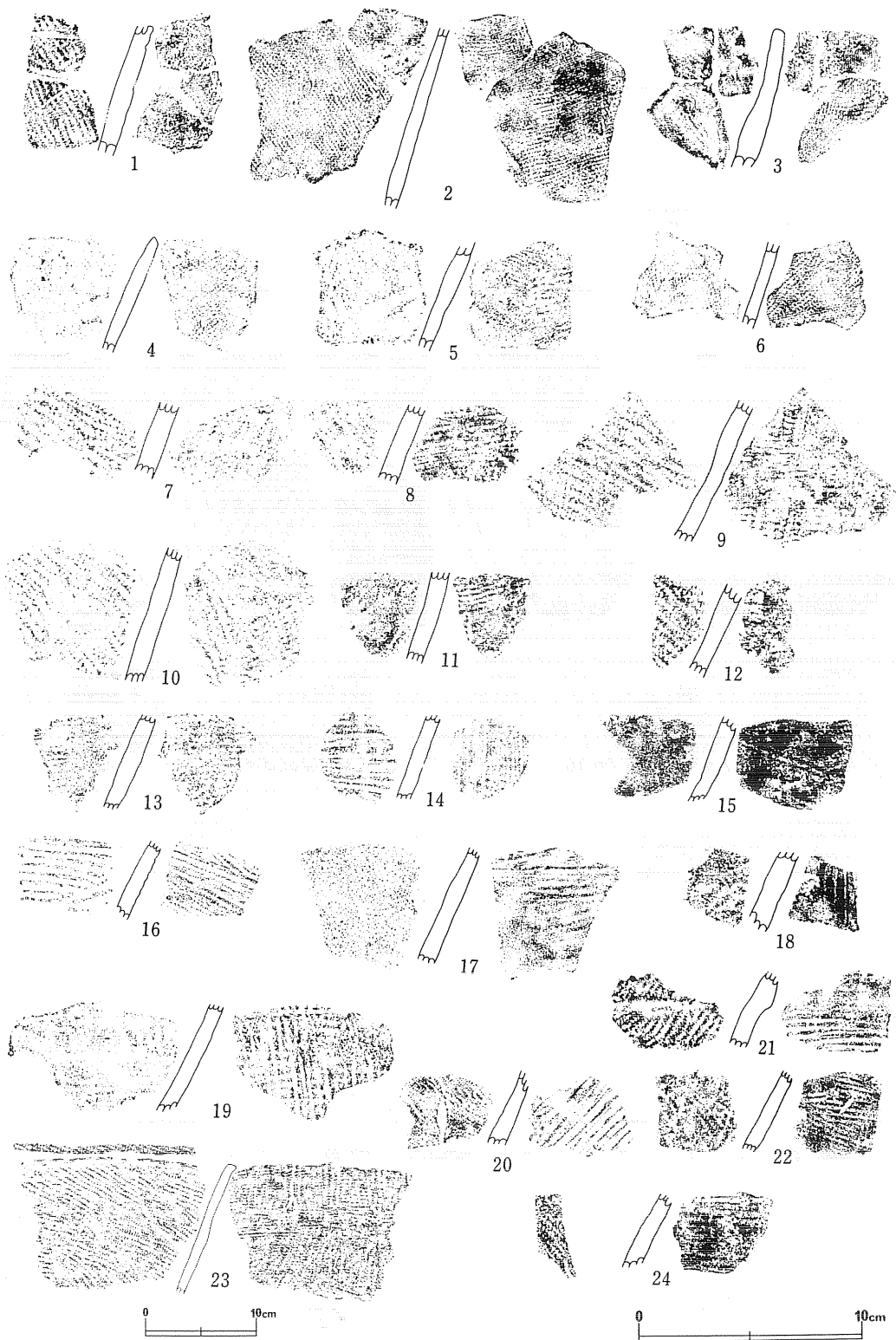
第39図 遺構外出土の縄文土器(1) 早期～前期



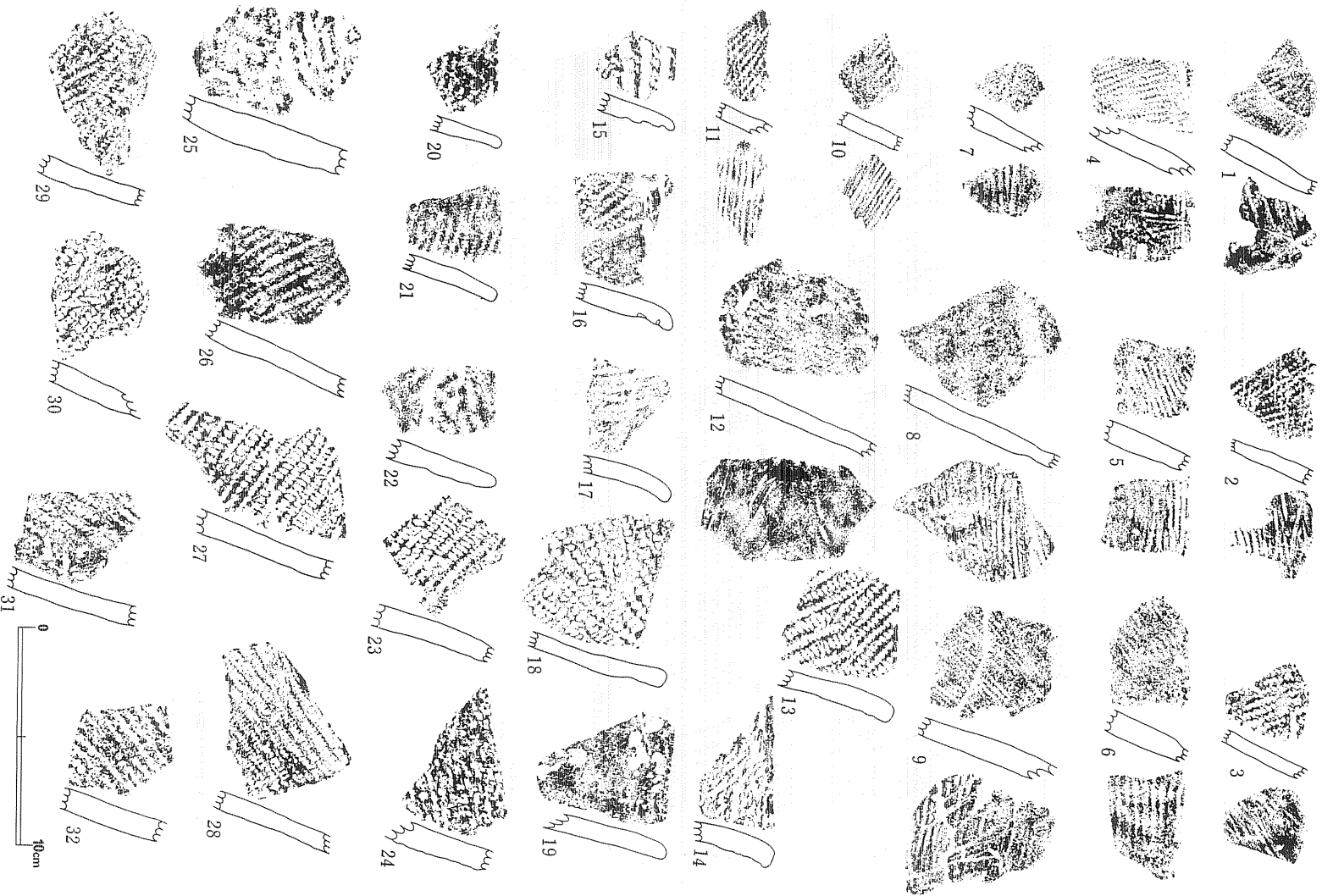
第2節 検出された遺構と遺物



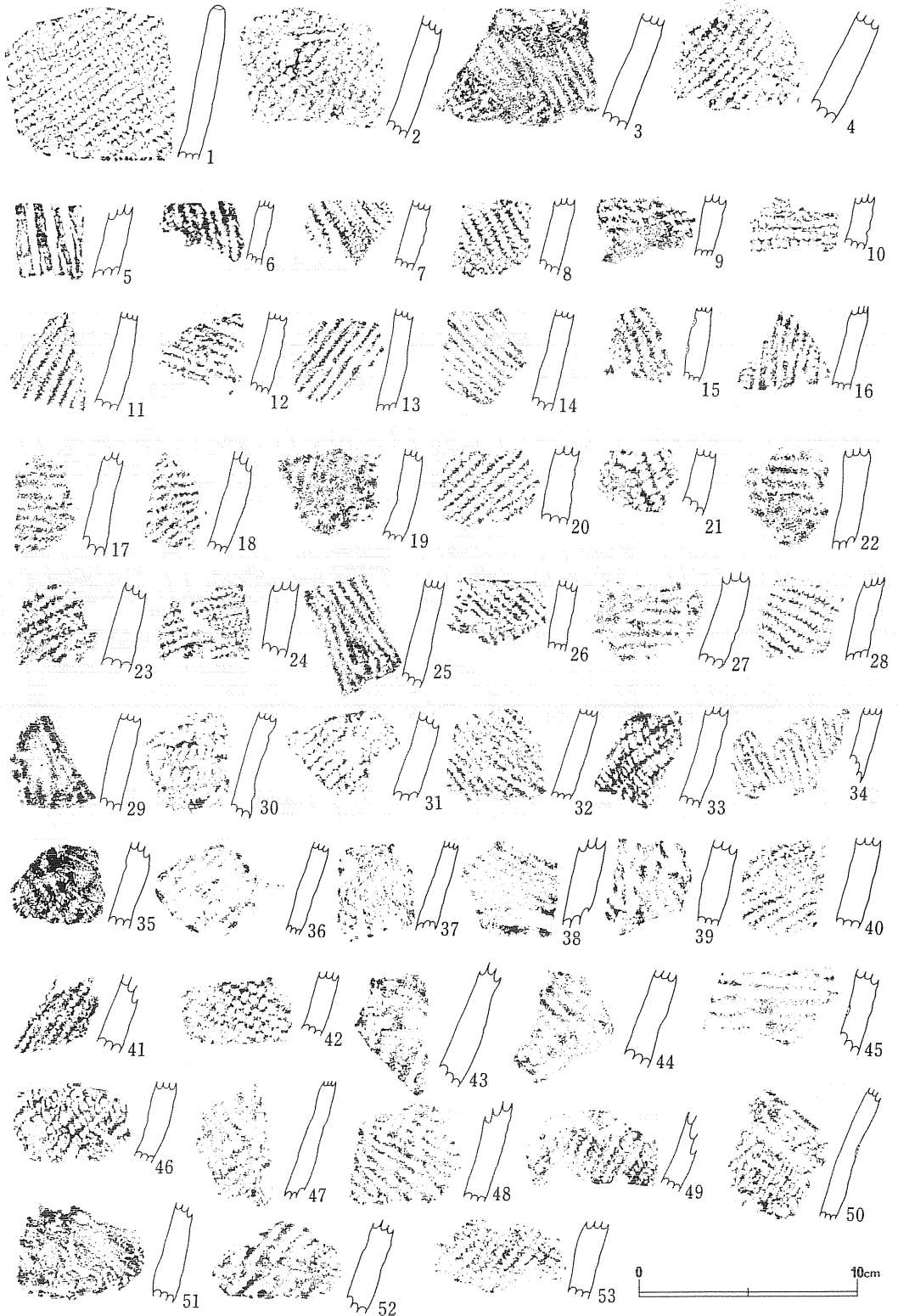
第40図 遺構外出土の縄文土器(2) 早期～前期



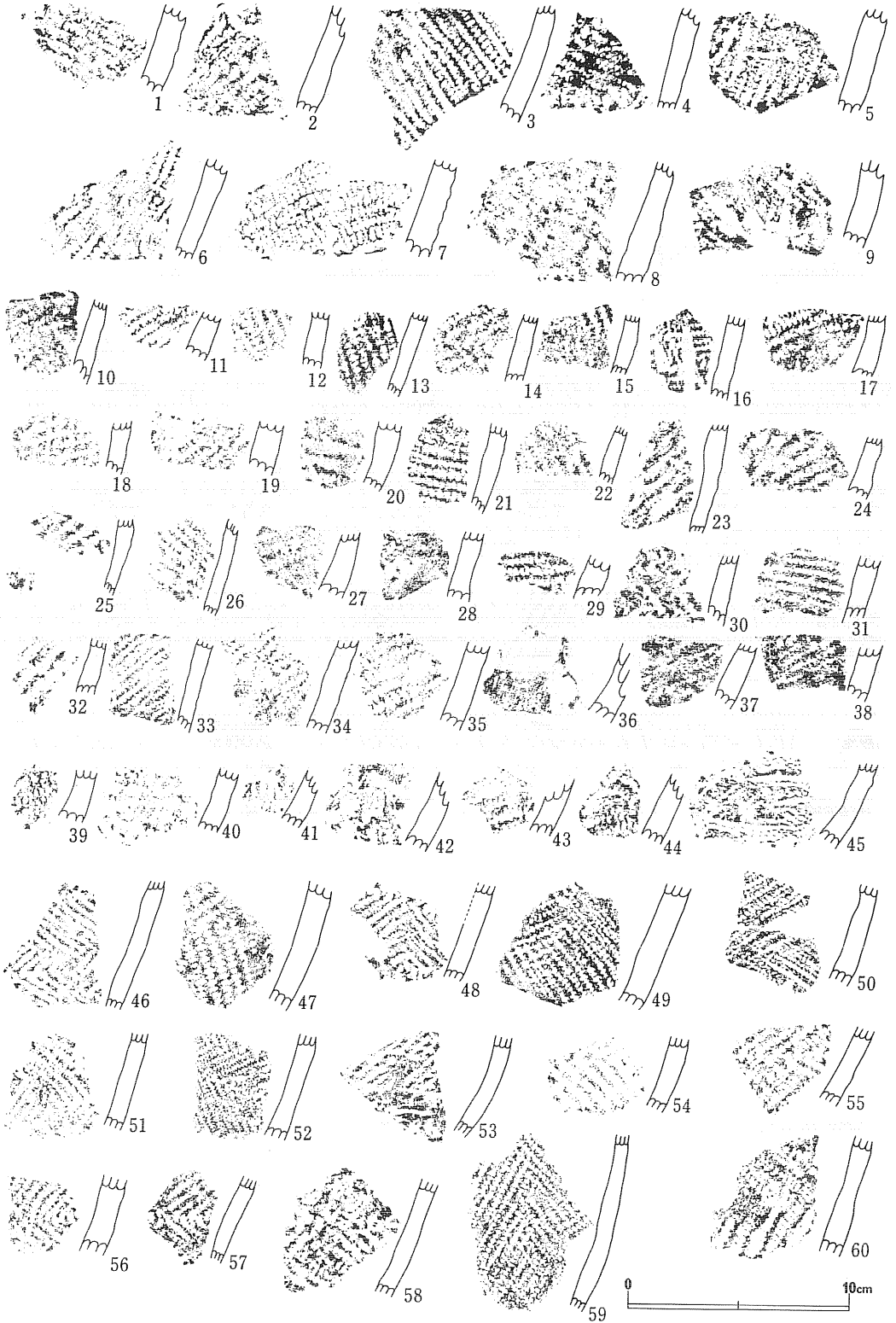
第41図 遺構外出土の縄文土器(13) 早期～前期



第42図 遺構外出土の縄文土器(4) 早期～前期



第43図 遺構外出土の縄文土器(15) 早期～前期

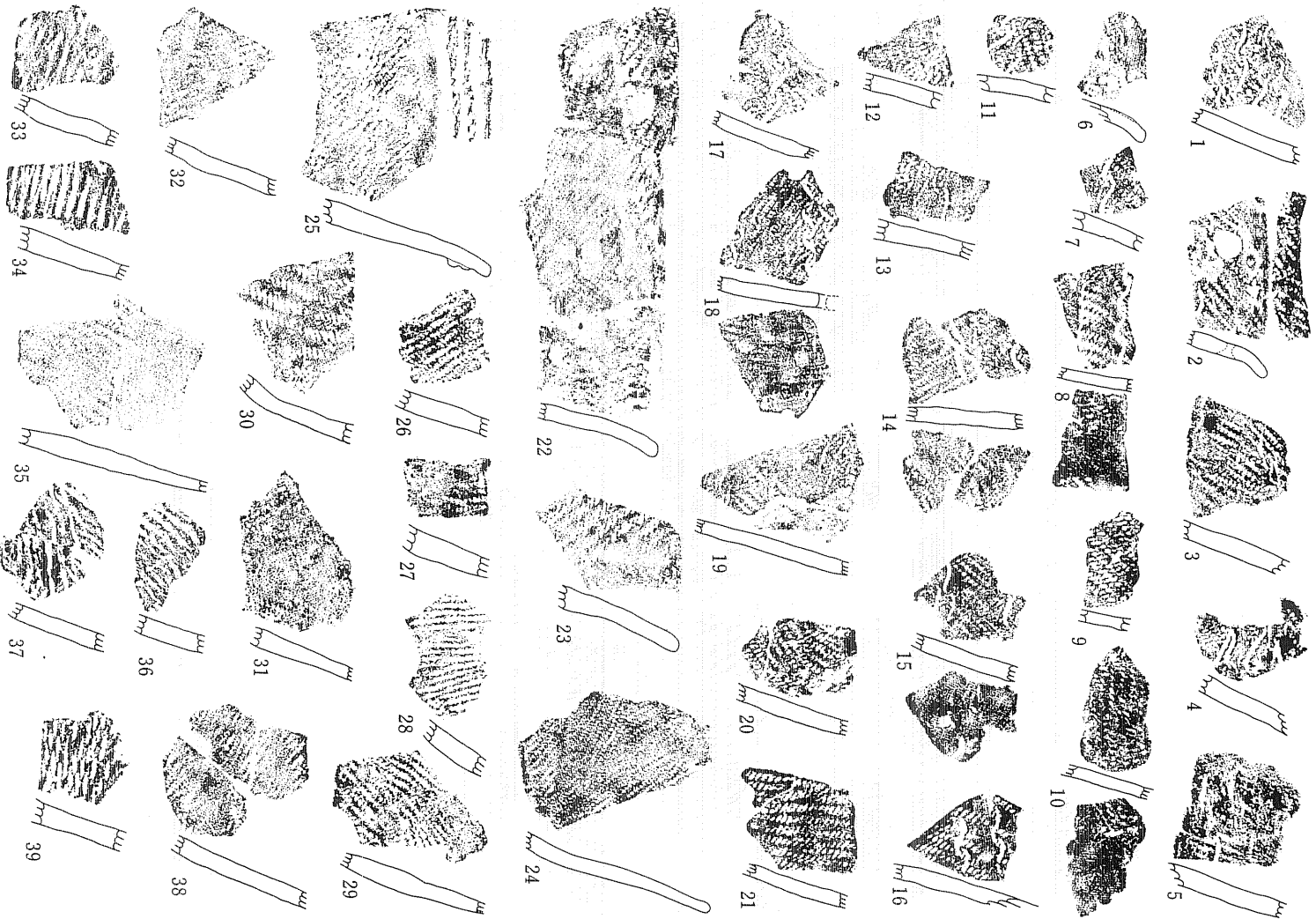


第44図 遺構外出土の縄文土器(16) 早期～前期

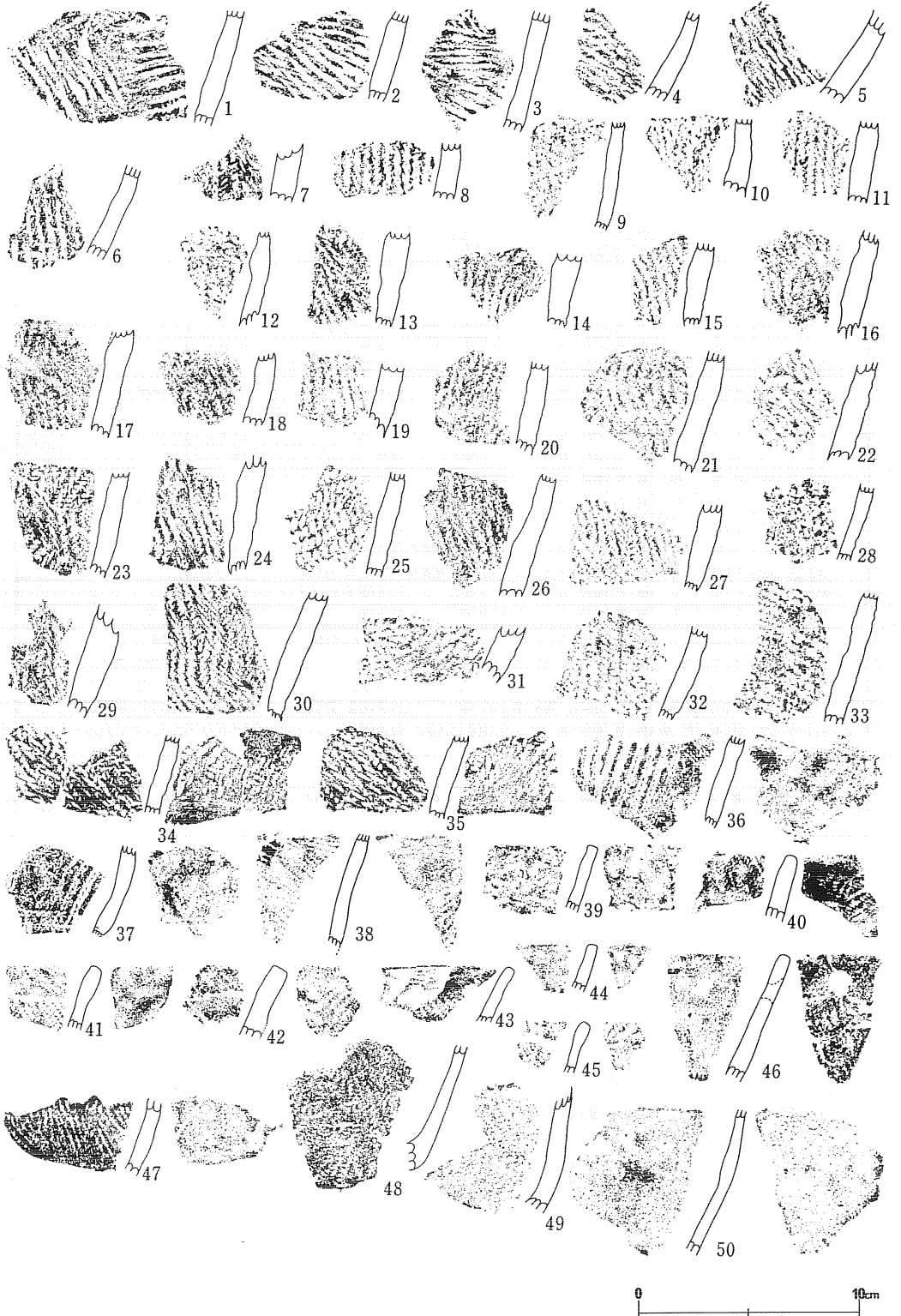


第45図 遺構外出土の縄文土器(17)

早期～前期



第46図 遺構外出土の縄文土器(8) 早期～前期



第47図 遺構外出土の縄文土器(19) 早期～前期

第3表 遺構外出土早期～前期土器観察表(1)

棟号番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面文様(調整)	分類	備考
29-1	29-1	MC45	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(右上-左下)・綾絡文	I-D	補修孔、表裏吸炭
2	2	ME48	Ⅲ	口縁部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C-1a	口唇部に縄文
3	3	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	裏吸炭
4	4	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)・綾絡文	I-C	
5	5	表土		胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	炭化物
6	6	ME48	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-D	
7	7	MF52	Ⅱ-Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(左上-右下)	I-A	
8	8	表土		胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	
9	9	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	^{0段多条} L R(横)・綾絡文	0段多条L R(左上-右下)	I-B	炭化物
10	10	MC45	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(縦)	I-B	裏吸炭、I-Dの可能性大
11	11	表土		胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(縦)	I-A	
12	13	MC45	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦、左上-右下)	I-A	
13	14	MC45	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	裏炭化物
14	15	MH50	不	胴部	細砂・普	綾絡文?	R L(左上-右下)・綾絡文	不明	
15	17	表土		胴部	細砂・良	R L(横)	L R(横)	I-A	
16	18	MC40	不	胴部	細砂・良	L R(横)	不明	不明	
17	16	捨場	Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(横)	L R(横)	I-A	
18	12	捨場	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)・綾絡文	I-C	裏炭化物
19	19	MC48	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(右上-左下)	I-B	裏吸炭
20	20	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(縦)	I-B	
21	21	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(左上-右下)	I-B	
22	22	不明	不	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦、左上-右下)	I-A	
23	23	表土		胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	裏吸炭
24	24	MC45	不	胴部	細砂・普	^{0段多条} L R(横)・綾絡文	0段多条L R(縦)	I-B	裏吸炭
30-1	25	MC46	暗Ⅲ	胴部	小砂利・粗砂・普	綾絡文	綾絡文	不明	表炭化物、裏吸炭
2	26	MC46	暗Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	裏炭化物
3	27	ME52	Ⅲ	胴部	小砂利・粗砂・普	L R(横)	L R(右上-左下)	I-A	節大きい、裏炭化物
4	28	MC46	暗Ⅲ	胴部	細砂・良	^{0段多条L R・R L結果51種(横)}	L R(縦)	I-A	
5	29	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(縦、左上-右下)	I-B	裏炭化物
6	30	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	^{0段多条} L R(横)・綾絡文	L R(縦)	I-B	裏炭化物
7	31	捨場	不	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(左上-右下)	I-B	堅緻
8	32	MC46	暗Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	裏炭化物
9	34	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(縦)	I-B	裏炭化物
10	33	MC46	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(左上-右下、縦)	I-B	裏炭化物
11	30-3	MH49	Ⅲ	口縁部	細砂・良	R L(横)	R L(左上-右下)	I-A-1a	口唇部縄文(R L)、補修孔あり
12	4	MH48	Ⅲ	胴部	細砂・良	不明	R L(左上-右下)	不明	
31-1	1	MH46	Ⅲ	口縁部	細砂・良	R L(横)	R L(左上-右下)	I-A-1a	小波状口縁、口唇部縄文(R L)
2	5	MH49	Ⅲ	胴部	細砂・普	R L(横)	R L(横、左上-右下)	I-A	裏炭化物
3	2	MH49	Ⅲ	口縁部	細砂・良	不明	ナデ、R L(縦)	不明	裏炭化物
4	6	MG49	Ⅱ	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(横)	I-A	
5	7	MH49	Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(左上-右下)	I-A	表炭化物
6	8	MF49	Ⅱ	胴部	粗砂・良	不明	L R(横)	不明	裏炭化物
7	9	MC49	不	胴部	粗砂・良	ナデ	L R(横)	Ⅲ-A	裏炭化物
8	11	MC48	不	胴部	粗砂・良	R L(横)	不明	不明	裏炭化物
9	10	表土		胴部	細砂・普	ナデ	L R(縦、横)	Ⅲ-A	裏炭化物
10	12	MH44	Ⅲ	胴部	細砂・良	ナデ	L R(縦)	Ⅲ-A	
11	13	MH49	Ⅲ	胴部	細砂・普	不明	R L(縦)	不明	表裏炭化物、補修孔あり
12	14	MH49	Ⅲ	胴部	細砂・普	不明	R L(縦)・綾絡文	不明	裏炭化物
13	15	MH49	不	胴部	細砂・良	R L(右上-左下)	L R(横、左上-右下)	I-A	裏吸炭
14	16	MH49	不	胴部	細砂・良	不明	L R(横)	不明	
15	17	MH50	Ⅱ	胴部	粗砂・普	不明	R L(縦)	不明	
16	18	MH49	Ⅲ	胴部	細砂・良	不明	R L(左上-右下)・綾絡文	不明	
17	19	MH49	Ⅲ	胴部	細砂・良	不明	L R(横)	不明	裏炭化物
32-1	31-32-1	MG49	Ⅱ	口縁部	細砂・普	綾絡文	L R(縦)・綾絡文	I-D-1a	

第4表 遺構外出土早期～前期土器観察表(2)

挿図番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
2	31・32-4	MC46	不	口縁部	細砂・普	LR(横)	LR(左上-右下)	I-A-1a	表裏炭化物、口唇部縄文、補修孔
3	5	MC46	不	口縁部	細砂・良	0段多条LR(横)	LR(縦)	I-A-1a	表裏炭化物、口唇部縄文、補修孔
4	7	捨場	不	口縁部	細砂・普	LR(横)	ナデ	不明	口唇部縄文
5	8	ME48	不	口縁部	細砂・普	0段多条LR(横)	0段多条LR(左上-右下)	I-A-1a	裏面吸炭、口唇部縄文
6	9	ME45	不	口縁部	細砂・良	RL(横)	条痕?	IV-B-1b	表吸炭、口唇部縄文、裏炭化物
7	10	MC46	不	口縁部	細砂・普	0段多条LR(横)	LR(左上-右下)	I-A-1a	口唇部縄文
8	14	表土	不	口縁部	細砂・良	RL(横)	RL(右上-左下)	I-A-1b	口唇部縄文
9	12	MC46	不	胴部	細砂・普	不明	RL(左上-右下)	不明	裏炭化物
10	13	ME53	不	口縁部	細砂・良	LR(横)	RR(反捻り・横)	I-J-1a	口唇部内面に縄文原体の朝面圧痕
11	19	MC45	不	口縁部	小石・粗砂・良	RL(横・縦)	RL(横)、条痕?	IV-B-1b	口唇部に縄文、裏炭化物
12	15	MC45	不	口縁部	細砂・良	LR(横)	RL(縦)、ナデ	I-A-1a	裏炭化物
13	16	MF52	不	口縁部	小石・細砂・良	LR(横)	LR(左上-右下)、ナデ	I-A-1b	口唇部縄文
14	18	MG50	不	口縁部	細砂・普	RL(横)	RL(縦)	I-A-1a	口唇部縄文
15	19	捨場	不	口縁部	細砂・普	RL(横・左上-右下)	RL(縦)	I-A-1a	口唇部縄文
16	6	MC46	不	口縁部	細砂・普	RL(横)	RL(縦)	I-A-1a	表裏炭化物、口唇部縄文
17	2	MC45	不	口縁部	砂利・粗砂・良	RL(横)、 原住細面圧痕	RL(縦)	I-E-1a	口唇部縄文、裏炭化物
18	3	MC46	不	口縁部	細砂・普	RL(横)	RL(縦)	I-A-1a	裏炭化物、口唇部縄文
19	11	MF51	不	口縁部	小石・粗砂・普	LR(横)	RL(縦)	I-A-1a	裏炭化物
33-1	33-34-1	MF52	Ⅱ~Ⅲ	口縁部	砂利・粗砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A-1b	口唇部縄文、折り返し口縁?
2	13	MC45	不	口縁部	細砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A-1b	表裏炭化物、補修孔
3	2	捨場	不	口縁部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A-1a	口唇部縄文、補修孔
4	3	MC45	不	口縁部	細砂・普	RL(横)	ナデ	Ⅱ-A-1a	口唇部縄文
5	4	ME48	Ⅱ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	
6	5	MH49	不	口縁部	細砂・良	LR(右上-左下)	RL(左上-右下)	I-A-1b	口唇部縄文
7	6	MC46	不	口縁部	細砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A-1b	33-2と同一個体
8	7	捨場	不	口縁部	砂利・粗砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A-1a	口唇部縄文、折り返し口縁
9	8	MG49	Ⅱ	口縁部	細砂・良	RL(左上-右下)	RL(縦)・ナデ	I-A	口唇部縄文
10	9	MF52	Ⅱ~Ⅲ	胴部	砂利・粗砂・良	LR(横)	LR(縦)・ナデ	I-A	
11	10	MF51	不	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦、左上-右下)	I-A	裏炭化物
12	11	MC45	不	胴部	粗砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A	33-2と同一個体
13	14	MC45	不	胴部	細砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A	33-2と同一個体
14	12	MC46	不	胴部	粗砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A	33-2と同一個体
15	15	MC46	不	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	表裏炭化物
16	16	表土	不	胴部	細砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A	33-2と同一個体
34-1	17	MC45	暗褐	胴部	細砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A	33-2と同一個体
2	18	MC45	不	胴部	細砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A	33-2と同一個体
3	19	捨場	不	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	表吸炭、裏炭化物
4	20	MC45	不	胴部	細砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(右上-左下)	I-A	33-2と同一個体
欠	35・36-1	MF51	不	口縁部	粗砂・良			I-A-1a	口唇部に刻目
欠	2	MB52	不	口縁部	粗砂・良			I-A-1bア	口唇部に刻目、裏吸炭
5	3	MH47	不	口縁部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A-2dア	口唇部縄文、折り返し口縁
欠	4	S137	土坑	口縁部	細砂・良			I-A-1bア	口唇部縄文、裏炭化物
6	5	捨場	不	口縁部	砂利・粗砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(左上-右下)	I-A-2dア	口唇部に斜位の原体朝面圧痕、折返し口縁
7	6	MC45	Ⅲ	口縁部	砂利・粗砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(左上-右下)	I-A-1bア	同一個体
8	8	ME49	Ⅲ	胴部	砂利・粗砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏面炭化物
9	9	MG50	Ⅲ	胴部	砂利・粗砂・良	LR(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏面炭化物
10	10	MG52	不	胴部	砂利・粗砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏面炭化物
11	11	MD53	不	胴部	砂利・粗砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(左上-右下)	I-A	34-6と同一個体
12	12	MG51	不	胴部	砂利・粗砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	
13	13	MC46	暗褐	胴部	砂利・粗砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(左上-右下)	I-A	34-6と同一個体
14	7	MC45	褐	口縁部	砂利・粗砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(左上-右下)	I-A-2dア	34-6と同一個体
15	15	MF51	不	口縁部	細砂・良	LR(横)	RL(縦)	I-A-2dア	口唇部縄文、裏炭化物
35-1	14	MF50	不	口縁部	粗砂・良	LR(横)	不明	不明	口唇部縄文
2	16	MC46	Ⅳ	胴部	細砂・普	RL(横)、 縁部文 原住細面圧痕	RL(縦)	I-F	裏炭化物

第5表 遺構外出土早期～前期土器観察表(3)

挿入番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
35-3	35-36-17	MC45	暗褐色	口縁部	粗砂・良	L R(横)・綾絡文 原体前面直取	R L(縦)	I-F-2eウ	口縁に降帯貼付・35-2と同一個体
4	18	MC45	暗褐色	口縁部	細砂・良	R L(横)・綾絡文 原体前面直取	R L(縦)	I-A-2eウ	35-2と同一個体
5	19	MB46	暗褐色	胴部	細砂・良	R L(横)・綾絡文	R L(縦)	I-B	35-2と同一個体
6	20	MC46	不	胴部	粗砂・良	R L(横)・綾絡文	R L(縦)	I-B	35-2と同一個体
7	21	MC46	暗褐色	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	35-2と同一個体
8	22	MF49	Ⅱ	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏炭化物
9	23	MG50	不	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏炭化物
10	37-38-1	S137	床付近	口縁部	砂利・普	L R(横)・降帯貼付	L R(左上-右下)	I-A-2fイ	口唇部刺突文・裏炭化物
11	2	MF51	不	口縁部	粗砂・良	L R(横)・降帯貼付	L R(左上-右下)	I-A-2fイ	35-10と同一個体
12	3	ME49	不	口縁部	砂利・良	L R(横)・降帯貼付	L R(左上-右下)	I-A-2fイ	35-10と同一個体
13	4	MH49	不	口縁部	砂利・悪	R L(横)・降帯貼付	ナデ	I-A-2eイ	
14	5	MG50	不	口縁部	細砂・良	R L(横)・降帯貼付	ナデ	I-A-2eイ	口唇部縄文
15	6	MG49	Ⅱ	口縁部	細砂・良	降帯貼付	ナデ	I-A-2eウ	口唇部縄文
16	7	MG49	Ⅱ	口縁部	細砂・良	R L(横)・降帯貼付	R L(縦)	I-A-2fウ	口唇部縄文・裏炭化物
17	11	MG49	Ⅱ	口縁部	細砂・良	R L(横)・降帯貼付	R L(縦)	I-A-2fウ	35-17と同一個体
18	8	MF52	Ⅲ	口縁部	細砂・良	R L(横)・降帯貼付	R L(横)	I-A-2eイ	口唇部縄文・表裏吸炭
19	9	MF47	Ⅲ	口縁部	細砂・良	R L(横)・降帯貼付	R L(縦)	I-A-2eイ	降帯上に斜位の刻目
20	10	MG49	Ⅱ	口縁部	細砂・良	R L(左上-右下) ・降帯貼付	R L(縦)	I-A-2eイ	口唇部縄文
21	12	MC45	不	胴部	粗砂・良	L R(横)	R L(縦)	I-A	裏面炭化物
22	13	MC45	暗褐色	胴部	粗砂・良	L R(左上-右下)	L R(横)	I-A	底部に近い
36-1	14	MF52	不	胴部	小石・粗砂・良	L R(縦)	L R(左上-右下)	I-A	底部に近い
2	15	MC45	不	胴部	粗砂・良	L R(横)	R L(左上-右下)	I-A	裏面炭化物
3	16	捨場	不	胴部	細砂・良	R L(左上-右下)	R L(縦)	I-A	裏面炭化物
4	17	MC45	不	胴部	細砂・良	R L(左上-右下)	R L(縦)	I-A	裏面炭化物
5	18	MC46	暗褐色	胴部	砂利・粗砂・悪	L R(横)	L R(縦)	I-A	
6	19	MC45	不	胴部	粗砂・普	R L(横)	R L(左上-右下)	I-A	裏炭化物
7	20	MF52	Ⅱ-Ⅲ	胴部	粗砂・良	L R(横)	L R(左上-右下)	I-A	裏炭化物
8	21	ME52	不	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	裏炭化物
9	23	MF51	不	胴部	砂利・粗砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏炭化物
10	22	MF51	不	胴部	細砂・良	0段多条R L(横)	0段多条R L(縦)	I-A	
11	24	MC45	不	胴部	砂利・粗砂・良	L R(横・縦)	L R(縦)	I-A	裏炭化物
12	25	MC46	不	胴部	砂利・粗砂・良	R L(横)	R L(右上-左下)	I-A	裏炭化物
37-1	39-1	MG52	Ⅲ	胴部	粗砂・良	L R(横)	L R(左上-右下)	I-A	
2	2	MF46	不	胴部	粗砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	
3	3	MF50	不	胴部	粗砂・良	不明	R L(右上-左下)	不明	裏炭化物
4	4	MF50	Ⅱ-Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(左上-右下)	R L(縦)	I-A	表裏吸炭
5	5	MB47	Ⅱ-Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏炭化物
6	6	MB48	不	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	
7	7	MG49	不	胴部	細砂・良	R L(縦)	R L(縦)	I-A	
8	8	MG49	Ⅱ	胴部	細砂・良	R L(左上-右下)	R L(縦)	I-A	
9	9	MF52	Ⅲ	胴部	細砂・良	不明	不明	不明	裏吸炭
10	10	ME40	不	胴部	粗砂	L R(横)	L R(縦)	I-A	裏炭化物
11	11	ME52	Ⅲ	胴部	砂・細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	
12	12	捨場	不	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(縦)	I-A	裏吸炭
13	13	MB46	暗褐色	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏炭化物
14	14	MH47	Ⅱ	胴部	細砂・良	0段多条L R(横)	0段多条L R(縦)	I-A	裏炭化物
15	15	ME48	不	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏吸炭
16	16	捨場	不	胴部	粗砂・良	L R(横)	L R(左上-右下)	I-A	裏炭化物
17	17	MH48	不	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	
18	18	ME52	不	胴部	細砂・良	0段多条L R(横・縦)	0段多条L R(縦)	I-A	裏炭化物
19	19	MC45	不	胴部	細砂・良	R L(左上-右下)	R L(縦)	I-A	裏吸炭
20	20	MG52	不	胴部	細砂・良	L R(横)	L R(左上-右下)	I-A	
21	21	MH47	不	胴部	細砂・良	0段多条L R(横)	0段多条L R(左上-右下)	I-A	裏炭化物
22	22	確-17	不	胴部	砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏吸炭

第6表 遺構外出土早期～前期土器観察表(4)

種図番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
37-23	39-23	MF56	Ⅱ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(左上-右下)	I-A	裏炭化物
24	24	MF51	不	胴部	細砂・良	0段多条RL(横)	0段多条RL(縦)	I-A	裏炭化物
25	25	MC46	Ⅵ	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏吸炭
26	26	MC46	不	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	
27	27	MD52	Ⅱ	胴部	細砂・良	0段多条LR(横)	0段多条LR(左上-右下)	I-A	裏炭化物
38-1	28	MC52	不	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏炭化物
2	29	確16	不	胴部	細砂・良	RL(縦、横)	RL(左上-右下)	I-A	
3	30	表土	不	胴部	粗砂・普	RL(横)	RL(縦)	I-A	裏炭化物
4	31	MF50	Ⅱ	胴部	細砂・良	RL(右上-左下)	RL(縦)	I-A	裏炭化物
5	32	MC46	暗褐色	胴部	砂・粗砂・普	0段多条LR(横)	0段多条LR(縦)	I-A	
6	33	捨場	不	胴部	砂・粗砂・普	LR(横)	LR(左上-右下)	I-A	
7	34	MC45	暗褐色	胴部	粗砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏炭化物
8	35	確17	不	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	裏炭化物
9	36	MH47	不	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏炭化物
10	37	MC46	不	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	
11	38	MC46	不	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏炭化物
12	39	MC46	不	胴部	粗砂・良	RL(左上-右下)	RL(縦)	I-A	裏炭化物
13	40	MC46	不	胴部	粗砂・良	RL(横)	RL(左上-右下)	I-A	裏炭化物
14	41	捨場	不	胴部	粗砂・良	RL(左上-右下)	RL(左上-右下)	I-A	裏炭化物
15	42	MC45	不	胴部	粗砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	
16	40-1	MD40	不	胴部	粗砂・良	LR(右上-左下)	LR(縦)	不明	裏炭化物
17	2	MG52	不	胴部	粗砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏炭化物
18	3	ME49	不	胴部	粗砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	裏吸炭
19	4	ME52	Ⅲ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	裏吸炭
20	5	MG49	Ⅱ	胴部	細砂・良	RL(左上-右下)	RL(縦)	I-A	
21	6	ME46	Ⅱ	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	
22	7	ME49	Ⅲ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	表吸炭、底部に近い
23	8	MF52	Ⅱ～Ⅲ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(左上-右下)	I-A	裏炭化物
24	9	MF48	Ⅲ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	
25	10	MF52	Ⅱ	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	
39-1	11	MC45	Ⅲ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(右上-左下)	I-A	裏吸炭
2	12	MB48	Ⅱ～Ⅲ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	表吸炭
3	13	M147	不	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	裏吸炭
4	14	MG50	Ⅱ～Ⅲ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	表吸炭
5	15	MF48	Ⅱ	胴部	細砂・良	RL(左上-右下)	RL(縦)	I-A	
6	16	MC48	暗褐色	胴部	細砂・良	RL(横)	不明	不明	裏炭化物
7	17	MC45	不	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(縦)	I-A	
8	18	MF48	Ⅲ	胴部	細砂・良	LR(横)	LR(右上-左下)	I-A	
9	20	MF47	Ⅱ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	裏吸炭
10	21	ME48	不	胴部	粗砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	
11	19	MF47	Ⅱ	胴部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	裏吸炭
12	22	MF49	不	胴部	粗砂・良	RL(横)	RL(左上-右下)	I-A	裏炭化物
13	23	MG49	Ⅱ	胴部	粗砂・良	RL(横)	RL(右上-左下)	I-A	裏吸炭
14	24	MC48	不	胴部	細砂・良	RL・?	ナデ	Ⅱ-A	39-17と同一個体?
15	25	MC48	Ⅱ～Ⅲ	胴部	細砂・良	RL・?	ナデ	Ⅱ-A	
16	26	MG50	不	胴部	細砂・良	RL・?	ナデ	Ⅱ-A	裏炭化物、39-17と同一個体?
17	27	MG50	不	胴部	細砂・良	RL(横、縦)	ナデ	Ⅱ-A	裏炭化物
18	28	MC48	Ⅱ～Ⅲ	胴部	細砂・良	RL(横、縦)	ナデ	Ⅱ-A	39-17と同一個体?
19	29	MC48	Ⅱ～Ⅲ	胴部	細砂・良	不明	RL(横)	不明	
20	30	MC48	Ⅱ～Ⅲ	胴部	粗砂・良	RL(横、縦)	ナデ	Ⅱ-A	裏吸炭、39-17と同一個体?
21	31	MC48	Ⅱ～Ⅲ	胴部	粗砂・良	RL(左上-右下)	ナデ	Ⅱ-A	裏吸炭、39-17と同一個体?
22	32	MF51	Ⅱ～Ⅲ	胴部	細砂・良	LR(横)、綾絡文	LR(縦)	I-B	裏炭化物
23	33	MF49	不	胴部	粗砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	
24	34	表土	不	胴部	白色粗砂・普	RL(横)、浅い沈 澱	RL(縦)	I-G	裏炭化物

第7表 遺構外出土早期～前期土器観察表(5)

坪面番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
25	40-35	MF49	不	胴部	白色粗砂・普	R L(横)・綾絡文	不明	不明	裏炭化物
26	36	S I 37	不	胴部	白色粗砂・普	R L(右上-左下)	R L(縦)	I-G	裏炭化物
27	37	MF49	不	胴部	細砂・良	綾絡文	0段多条LR(左上-右下)	I-B	堅緻
40-1	38	MB-C46	暗褐色	底部	細砂・良	R L(横)・綾絡文	R L(縦)	I-B	裏炭化物
2	39	MF50	Ⅱ	胴部	白色粗砂・普	R L(横)・綾絡文	不明	I-B	裏炭化物
3	40	MF50	Ⅱ	胴部	白色粗砂・普	R L(横)・綾絡文 浅い沈線	R L(縦)	I-G	裏炭化物
4	41-42-1	表上	不	胴部	粗砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	
5	2	MF49	Ⅱ-Ⅲ	胴部	細砂・普	不明	R L(縦)	I-B	裏炭化物
6	3	MF51	Ⅱ-Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(横)・綾絡文	R L(左上-右下)	I-B	裏炭化物
7	4	ME52	Ⅱ-Ⅲ	胴部	細砂・良	綾絡文	R L(縦)	I-B	裏吸炭
欠	5	MF50	Ⅱ	胴部	白色粗砂・普			不明	裏吸炭
8	6	MF50	Ⅱ・Ⅲ	胴部	白色粗砂・普	R L(横)・浅い沈線	不明	I-G	裏炭化物
9	7	ME49	不	胴部	白色粗砂・良	R L(横)・綾絡文	R L(左上-右下)	I-B	裏吸炭
10	8	MF47	Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	裏炭化物
11	9	MF50	Ⅱ	胴部	白色粗砂・普	不明	R L(縦)	不明	裏炭化物
12	10	MC45	暗褐色	胴部	粗砂・普	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏炭化物
13	11	MF50	Ⅱ	胴部	白色粗砂・普	不明	R L(横・縦)	不明	40-11と同一個体
14	12	MF50	Ⅱ・Ⅲ	胴部	白色粗砂・普	R L(横)・浅い沈線	R L(縦)	I-G	40-8と同一個体
15	13	MF50	Ⅱ・Ⅲ	胴部	白色粗砂・良	R L(横)・綾絡文 浅い沈線	R L(縦)	I-G	裏炭化物
16	14	MF52	Ⅱ	胴部	白色粗砂・良	R L(横)・綾絡文	R L(縦)	I-B	裏炭化物
17	16	MF48	Ⅲ	胴部	細砂・普	綾絡文	R L(横)	I-B	裏炭化物
18	15	MF50	Ⅱ・Ⅲ	胴部	白色粗砂・良	浅い沈線	R L(横)	I-G	40-8と同一個体
19	17	MF50	Ⅱ	胴部	白色粗砂・普	不明	R L(左上-右下)	不明	40-11と同一個体
41-1	18	MF50	不	胴部	白色粗砂・良	R L(横)・浅い沈線	R L(縦)	I-G	40-8と同一個体
2	19	MF51	Ⅱ・Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏炭化物
3	20	MC46	Ⅱ・Ⅲ	胴部	粗砂・普	R L(横)	R L(縦)	I-A	
4	21	MF51	Ⅱ・Ⅲ	胴部	粗砂・普	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏炭化物
5	22	MF48	Ⅱ	胴部	粗砂・普	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏吸炭
6	23	MF48	Ⅱ	胴部	細砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	
7	24	MB47	Ⅱ・Ⅲ	胴部	小石・粗砂・良	R L(横)	R L(縦)	I-A	裏吸炭
8	25	MC46	Ⅳ	胴部	小石・粗砂・良	R L(横)	条痕	Ⅳ-B	41-23と同一個体
9	26	MB46	暗褐色	胴部	小石・粗砂・良	R L(横)	R L(縦)・条痕	Ⅳ-B	41-23と同一個体
10	27	MB47	Ⅱ	胴部	小石・粗砂・良	R L(横)	R L(縦)・条痕	Ⅳ-B	4-23と同一個体
11	28	MB46	不	胴部	細砂・良	不明	条痕	Ⅳ-B	裏炭化物
12	30	MB47	Ⅱ	胴部	粗砂・良	R L(横)	条痕	Ⅳ-B	41-23と同一個体
13	31	MF47	Ⅲ	胴部	粗砂・良	条痕	条痕	Ⅳ-A	裏炭化物
14	32	ME47	Ⅱ	胴部	細砂・良	条痕	条痕	Ⅳ-A	
15	33	MC46	暗褐色	胴部	細砂・良	不明	R L(縦)	不明	裏炭化物
16	34	MC45	Ⅳ	胴部	細砂・普	条痕	条痕	Ⅳ-A	裏炭化物
17	35	MC45	Ⅲ	胴部	細砂・普	不明	条痕	不明	裏吸炭
18	36	MG49	Ⅲ	胴部	細砂・普	綾絡文	条痕?	不明	
19	37	MC45	暗褐色	胴部	小石・普	条痕	条痕	Ⅳ-A	裏炭化物
20	43-1	MH48	Ⅲ	胴部	粗砂・良	R L(横)	条痕	Ⅳ-B?	裏吸炭
21	41-42-38	MH48	Ⅲ	口縁部	細砂・良	L R(横)	条痕	Ⅳ-B	折り返し口縁
22	43-2	MC45	Ⅱ・Ⅲ	胴部	細砂・普	不明	条痕?	不明	
23	41-42-29	MB46	暗褐色	口縁部	小石・粗砂・良	R L(横)	R L(右上-左下・縦)・条痕	Ⅳ-B-1a	口唇部細文・裏炭化物
24	43-3	MC45	Ⅱ・Ⅲ	胴部	細砂・普	R L(横)	条痕	Ⅳ-B	裏炭化物
42-1	4	MC46	不	胴部	細砂・良	L R(縦)	条痕?	不明	裏炭化物
2	5	ME49	不	胴部	細砂・良	R L(横)	条痕	Ⅳ-B	裏炭化物
3	6	ME49	Ⅲ	胴部	粗砂・良	R L(横)	条痕	Ⅳ-B	
4	7	MC48	Ⅱ・Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(左上-右下)	条痕	Ⅳ-B	裏炭化物
5	8	MH48	Ⅲ	胴部	細砂・良	R L(縦)	条痕	Ⅳ-B	裏炭化物
6	9	MH48	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)	条痕	Ⅳ-B	裏炭化物
7	10	MH49	Ⅱ・Ⅲ	胴部	粗砂・良	L R(横)	条痕	Ⅳ-B	裏炭化物

第8表 遺構外出土早期～前期土器観察表(6)

挿入番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
8	43-13	MC45	暗褐色	胴部	細砂・良	不明	条痕	不明	裏炭化物
9	14	MC45	暗褐色	胴部	細砂・普	LR(横)	条痕	IV-B	
10	11	ME49	II・III	胴部	粗砂・良	RL(横)	条痕	IV-B	裏吸炭
11	12	ME48	II	胴部	細砂・良	RL(横)	条痕	IV-B	
12	15	捨場	不	胴部	細砂・普	不明	条痕?	不明	
13	16	MB52	不	口縁部	珉雑・粗砂・良	RL(縦)	ナデ	V-A-1a	
14	17	MC45	不	口縁部	珉雑・細砂・良	RR L(縦)	ナデ	V-A-1a	
15	18	ME47	II	口縁部	珉雑・細砂・良	RL(横)・押し花 程	ナデ	V-E-1a	裏炭化物
16	19	LH50	II	口縁部	珉雑・細砂・良	RL(横)・押し文	ナデ	V-E-1a	
17	20	MC45	不	口縁部	珉雑・細砂・良	L(横)	ナデ	V-A-1c	裏吸炭
18	21	表土	不	口縁部	珉雑・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A-1c	表裏吸炭
19	22	LH52	II	口縁部	珉雑・細砂・良	ナデ	ナデ	V-F-1b	表面斑状に剥落
20	23	MA51	III	口縁部	珉雑・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A-1b	
21	24	MC46	不	口縁部	珉雑・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A-1b	
22	25	LF56	不	口縁部	珉雑・細砂・良	LR(横)	不明	V-A-1b	表面斑状に剥落
23	26	ME53	不	胴部	珉雑・細砂・良	0段多条RL(横)	ナデ	V-A	
24	27	表土	不	胴部	珉雑・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
25	28	MF49	不	胴部	珉雑・細砂・普	LR(横)?	ナデ	V-A	表裏吸炭
26	29	MB52	II・III	胴部	珉雑・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
27	30	MB52	II・III	胴部	珉雑・細砂・普	0段多条RL(横)	ナデ	V-A	42-23と同一個体
28	31	LH50	II	胴部	珉雑・細砂・普	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	
29	32	MF47	II~III	胴部	珉雑・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
30	33	不明	不明	胴部	粗砂・良	LR(縦)	ナデ	V-A	中期土器片の可能性あり
31	34	表土	不	胴部	珉雑・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	42-24と同一個体
32	35	表土	不	胴部	珉雑・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	42-24と同一個体
43-1	36	MC45	不	口縁部	珉雑・粗砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	口唇部指頭(爪先)圧痕
2	37	表土	不	胴部	珉雑・粗砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
3	38	確B	不	胴部	珉雑・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
4	39	MD48	不	胴部	珉雑・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	
5	44-1	MC45	不	胴部	珉雑・細砂・良	Rの絡条体回転文	ナデ	V-A	表裏吸炭
6	2	MB13	II・III	胴部	珉雑・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	表炭化物・補修孔
7	3	ME48	II・III	胴部	珉雑・粗砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	
8	4	MH52	II・III	胴部	珉雑・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	
9	5	LJ50	III	胴部	珉雑・細砂・良	RL(縦)?	ナデ	V-A	
10	6	MC45	不	胴部	珉雑・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
11	7	確B	不	胴部	珉雑・細砂・良	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	
12	8	MH46	II~III	胴部	珉雑・細砂・良	RL(横)?	ナデ	V-A	
13	9	MC53	II	胴部	珉雑・細砂・良	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	
14	10	確C	不	胴部	珉雑・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	
15	11	LH50	II	胴部	珉雑・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	表吸炭
16	12	MB52	II	胴部	珉雑・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
17	13	MD48	III	胴部	珉雑・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
18	14	MA52	II	胴部	珉雑・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
19	15	LJ49	II	胴部	珉雑・粗砂・悪	不明	ナデ	不明	
20	16	MD48	II	胴部	珉雑・粗砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	表炭化物
21	17	表土	不	胴部	珉雑・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	
22	18	LE56	II	胴部	珉雑・粗砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	
23	19	MC47	不	胴部	珉雑・粗砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	
24	20	MD48	II	胴部	珉雑・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
25	21	ME47	II	胴部	珉雑・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
26	22	ME49	不	胴部	珉雑・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
27	23	MG48	III	胴部	珉雑・細砂・良	0段多条RL(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
28	24	MA52	不	胴部	珉雑・細砂・良	0段多条RL(横)	ナデ	V-A	
29	25	MB52	不	胴部	珉雑・細砂・普	不明	ナデ	不明	

第9表 遺構外出土早期～前期土器観察表(7)

挿入番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
30	44-26	LE56	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・普	0段多条LR (左上下右下)	ナデ	V-A	
31	27	MH48	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
32	28	MA52	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
33	29	表土	不	胴部	珉維・細砂・普	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	
34	30	MC45	不	胴部	珉維・細砂・普	R(横)	ナデ	V-D	
35	31	M147	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	
36	32	L148	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・普	L(横)	ナデ	V-D	裏吸炭
37	33	MC48	不	胴部	珉維・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
38	34	MA53	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
39	35	M147	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	不明	ナデ	不明	裏吸炭
40	36	MD48	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
41	37	MD48	不	胴部	珉維・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	表吸炭
42	38	MC45	不	胴部	珉維・細砂・普	細紐回転文	ナデ	V-A	
43	39	M147	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
44	40	M147	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	0段多条RL(横)	ナデ	V-A	表吸炭
45	41	M147	Ⅱ	胴部	珉維・粗砂・良	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
46	42	表土	不	胴部	珉維・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
47	43	MA50	不	胴部	珉維・細砂・良	不明	ナデ	不明	
48	44	M147	不	胴部	珉維・細砂・良	0段多条RL(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
49	45	表土	不	胴部	珉維・小石・良	LR(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
50	46	L148	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	0段多条LR (横・縦)	ナデ	V-A	
51	47	MG46	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・粗砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
52	48	M147	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
53	49	MB50	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
44-1	50	MB48	不	胴部	珉維・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
2	51	L149	不	胴部	珉維・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
3	52	ME53	不	胴部	珉維・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	
4	53	MB48	不	胴部	珉維・細砂・良	LR(横・縦)	ナデ	V-C	羽状縄文
5	54	MD48	不	胴部	珉維・粗砂・普	RL(横・縦)	ナデ	V-C	羽状縄文
6	55	MC45	不	胴部	珉維・細砂・良	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	
7	56	MC45	不	胴部	珉維・粗砂・良	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
8	57	M147	不	胴部	珉維・粗砂・良	不明	ナデ	V	裏吸炭
9	58	MC52	不	胴部	珉維・粗砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
10	45-1	MC45	不	胴部	珉維・細砂・悪	LR(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
11	2	MD48	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	
12	3	MB52	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
13	4	MB52	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	
14	5	M150	Ⅲ	胴部	珉維・細砂・良	RL(横・縦)	ナデ	V-C	羽状縄文
15	6	MD48	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
16	7	ME47	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	RL(横・縦)	ナデ	V-A	
17	8	MH48	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	
18	9	MP47	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・良	附加条縄文	ナデ	V-A	
19	10	MD48	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
20	11	M147	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
21	12	MF49	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	RL(横)	ナデ	V-A	
22	13	ME48	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
23	14	LF56	Ⅱ	胴部	珉維・粗砂・悪	LR(横)	ナデ	V-A	
24	15	M147	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
25	16	MF48	Ⅲ	胴部	珉維・粗砂・良	LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
26	17	MJ44	Ⅲ	胴部	珉維・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
27	18	M147	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・粗砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
28	19	M147	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
29	20	MD48	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉維・粗砂・普	LR(横)	ナデ	V-A	
30	21	MA48	Ⅱ	胴部	珉維・細砂・普	RL(横)	ナデ	V-A	

第10表 遺構外出土早期～前期土器観察表(8)

挿入番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
31	45-22	M B 52	不	胴部	珉雑・細砂・普	R L(右上-左下)	ナデ	V-A	
32	23	M J 46	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	0段多条LR(横)	ナデ	V-A	
33	24	確 B	不	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
34	25	M D 48	不	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横)	ナデ	V-A	
35	26	M C 45	不	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横)	ナデ	V-A	表裏吸炭
36	27	L F 52	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・良	不明	ナデ	不明	
37	28	M D 48	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横)	ナデ	V-A	
38	29	M D 48	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	L R(横)	ナデ	V-A	
39	30	M H 48	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横)	ナデ	V-A	裏吸炭
40	31	M H 48	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・良	L R(左上-右下)	L R(左上-右下)	V-B	裏吸炭
41	32	M C 52	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・良	R L(左上-右下)	R L(左上-右下)	V-B	裏吸炭
42	33	M H 48	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横)	0段多条LR(縦)	V-B	裏吸炭
43	34	M H 48	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横)	0段多条LR(縦)	V-B	44-42と同一個体
44	35	M H 48	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横)	0段多条LR(縦)	V-B	44-42と同一個体
45	36	表土	不	胴部	珉雑・細砂・良	附加条縄文	附加条縄文	V-B	裏吸炭
46	37	M F 51	不	胴部	珉雑・細砂・普	R L・L R結束1種(横)	ナデ	V-C	裏吸炭・羽状縄文
47	38	M F 52	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・普	R L(横、縦)	ナデ	V-C	羽状縄文
48	39	L 147	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	L R(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
49	40	M C 45	暗褐色	胴部	珉雑・細砂・普	L R(横、縦)	ナデ	V-C	羽状縄文・裏吸炭
50	41	M C 55	不	胴部	細砂・良	R L(横、縦)	ナデ	Ⅱ-E	羽状縄文
51	42	M P 52	不	胴部	珉雑・細砂・良	R L(横、縦)	ナデ	V-C	羽状縄文
52	43	表土	不	胴部	珉雑・細砂・良	R L・L R結束1種(横)	ナデ	V-C	裏吸炭・羽状縄文
53	44	S K 53	覆土	胴部	珉雑・細砂・普	網目状擦紋(R、L)	ナデ	V-C	裏吸炭・羽状縄文
54	45	M A 52	Ⅱ	胴部	珉雑・砂利・普	R L・L R結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
55	46	L J 50	Ⅲ	胴部	珉雑・砂利・良	L R・R L結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
56	47	L J 54	Ⅱ	胴部	珉雑・砂利・普	L R・R L結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
57	48	M F 49	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	L R・R L結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
58	49	M T 49	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	L R・R L結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
59	50	M A 52	不	胴部	珉雑・細砂・良	L R(横、縦)	ナデ	V-C	裏吸炭・羽状縄文
60	51	M 147	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・良	R L(横)・0段多条LR(横)	ナデ	V-C	裏吸炭・羽状縄文
45-1	52	M 147	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・良	0段多条LR(横)・R L(横)	ナデ	V-C	裏吸炭・羽状縄文
2	53	M C 45	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・普	0段多条LR(横)・R L(横)	ナデ	V-C	裏吸炭・羽状縄文
3	54	L F 52	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	R L・L R結束1種(横)	ナデ	V-C	裏吸炭・羽状縄文
4	55	M J 44	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・良	R L・L R結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
5	56	M C 45	暗褐色	胴部	珉雑・砂利・普	0段多条LR・L R結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
6	57	M 147	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・良	0段多条LR・単筋R L結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
7	58	確 B	不	胴部	珉雑・細砂・普	L R・R L結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
8	59	M F 48	不	胴部	珉雑・細砂・普	L R・R L結束1種(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
9	60	M C 45	暗褐色	胴部	珉雑・細砂・普	R L(横)	ナデ	V-C	羽状縄文
10	46-47-1	M 147	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	0段多条LR(横、縦)	ナデ	V-A	
11	2	M A 47	Ⅱ・Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・普	R L(横)	ナデ	V-A	
12	3	M C 45	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・普	L R(横)?	ナデ?	不明	
13	4	L H 51	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	R(縦)	ナデ	V-D	裏吸炭
14	5	M A 51	不	胴部	珉雑・細砂・普	L(縦)	ナデ	V-D	
15	6	M C 45	Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・普	不明	ナデ	不明	
16	7	L 147	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	0段多条LR(横、縦)	ナデ	V-A	羽状縄文
17	8	M C 53	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	L R(横)	ナデ	V-A	
18	9	M G 49	Ⅱ	胴部	珉雑・細砂・普	L R(横)	ナデ	V-A	裏炭化物
19	11	M C 48	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・普	R(横)	ナデ	V-D	
20	13	M C 45	暗褐色	胴部	珉雑・細砂・普	R(横)	ナデ	V-D	
21	10	M C 45	暗褐色	胴部	珉雑・細砂・普	R(横)	ナデ	V-D	
22	12	M C 45	Ⅱ-Ⅲ	胴部	珉雑・細砂・普	R(横)	ナデ	V-D	
23	14	表土	不	胴部	珉雑・細砂・普	R(横)	ナデ	V-D	
24	15	表土	不	胴部	珉雑・細砂・普	不明	ナデ	不明	表吸炭

第11表 遺構外出土早期～前期土器観察表(9)

挿図番号	図版番号	出土地区	層	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
25	46-47-16	MC45	Ⅲ	胴部	挟雑・細砂・普	R(横)?	ナデ	V-D	
26	17	MA53	Ⅱ	胴部	挟雑・細砂・良	L(縦)	ナデ	V-D	表炭化物
27	18	MC45	暗掲	胴部	挟雑・細砂・良	R(横)	ナデ	V-D	
28	20	MB48	Ⅲ	胴部	挟雑・細砂・良	押し引き文	ナデ	V-E	裏吸炭
29	19	ME48	Ⅲ	胴部	挟雑・細砂・良	R(横)・押し引き文	ナデ	V-E	裏吸炭
30	21	MC46	暗掲	口縁部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	上端LR(横)・ナデ	I-B-la	裏炭化物・口唇部に縄文
31	22	MC46	不	口縁部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	上端LR(横)・ナデ	I-B-la	45-30と同一個体
32	25	MB46	暗掲	口縁部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C-la	45-30と同一個体
33	26	MC46	暗掲	胴部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	上端LR(横)・ナデ	Ⅱ-C	45-30と同一個体
34	24	MC46	Ⅳ	胴部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	45-30と同一個体
35	23	MC46	Ⅳ	口縁部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	上端LR(横)・ナデ	Ⅱ-C-la	45-30と同一個体
46-1	27	捨場	暗掲	胴部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C-la	45-30と同一個体
2	28	MC46	暗掲	口縁部	細砂・普	L R(横)	上端LR(横)・ナデ	Ⅱ-A-la	45-30と同一個体・補修孔
3	29	MC45	暗掲	胴部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	45-30と同一個体
4	30	捨場	暗掲	胴部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	45-30と同一個体
5	31	MC46	暗掲	胴部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	45-30と同一個体
6	48-1	MC46	不	口縁部	細砂・普	L R(横)	ナデ	Ⅱ-C	45-30と同一個体
7	3	MC45	暗掲	胴部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	
8	4	ME48	Ⅲ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(横)	Ⅱ-E	裏炭化物
9	5	MB46	不	胴部	細砂・良	L R(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏炭化物
10	6	MC46	不	胴部	細砂・良	L R(横)・左上一右下	L R(横)	Ⅱ-A	裏炭化物
11	2	MC46	暗掲	胴部	細砂・普	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	裏炭化物
12	7	捨場	不	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	裏炭化物
13	8	ME48	Ⅱ	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	
14	9	MG50	不	胴部	細砂・良	R L(横)・綾絡文	R L(縦)	I-B	裏炭化物
15	10	MC46	不	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	
16	11	MC45	不	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	L R(縦)	I-B	
17	12	MC45	不	胴部	細砂・良	L R(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	裏炭化物
18	13	ME54	Ⅱ	胴部	細砂・良	R L(横)・綾絡文	ナデ	Ⅱ-C	表裏炭化物・補修孔
19	14	MC45	暗掲	胴部	細砂・良	L R(横)	ナデ	Ⅱ-A	
20	15	MC46	Ⅳ	胴部	細砂・良	L R(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏炭化物
21	16	MC46	不	胴部	細砂・普	0段多条LR(横)	ナデ	Ⅱ-A	表裏炭化物
22	17	MC46	不	胴部	粗砂・悪	R L(横)	ナデ	Ⅱ-A	口唇部縄文・裏炭化物
23	18	MC45	暗掲	口縁部	粗砂・普	反燃RR(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏炭化物
24	19	MC45	暗掲	口縁部	細砂・良	R L(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏炭化物
25	21	MG58	Ⅲ	口縁部	粗砂・良	R L(横)・隆帯貼付	ナデ	Ⅱ-A-2fウ	裏吸炭・口唇部縄文
26	22	MF48	Ⅲ	胴部	粗砂・良	R L(横)	ナデ	Ⅱ-A	
27	23	MF48	Ⅲ	胴部	粗砂・良	R L(横)	ナデ	Ⅱ-A	
28	24	確17	不	底部分置	粗砂・良	R L(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏吸炭
29	25	確17	不	胴部	粗砂・良	L R(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏炭化物
30	26	表土	不	底部分置	粗砂・良	0段多条LR(左上一右下)	ナデ	Ⅱ-A	表裏吸炭
31	27	MF48	Ⅲ	胴部	砂利・普	R L(左上一右下)	ナデ	Ⅱ-A	
32	29	MC45	不	胴部	細砂・良	R L(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏吸炭
33	34	MB52	不	胴部	細砂・普	不明	ナデ	不明	裏吸炭
34	35	MB52	不	胴部	細砂・普	反燃RR(横)	ナデ	Ⅱ-B	裏吸炭
35	30	MG50	不	胴部	粗砂・良	L R(横)	ナデ	Ⅱ-A	
36	31	MB57	不	胴部	粗砂・良	R(横)	ナデ	Ⅱ-B	表吸炭
37	32	MB57	不	胴部	細砂・良	R(縦・横)	ナデ	Ⅱ-B	
38	28	MG50	不	胴部	粗砂・普	R L(横)	ナデ	Ⅱ-A	裏炭化物
39	33	確B	不	胴部	細砂・良	反燃RR(横)	ナデ	Ⅱ-B	裏吸炭
47-1	36	MB53	Ⅱ	胴部	細砂・普	L(横・縦)	ナデ	Ⅱ-B	裏吸炭
2	37	MB52	不	胴部	細砂・普	L(横)	ナデ	Ⅱ-B	
3	38	MB52	不	胴部	細砂・良	L(縦)	ナデ	Ⅱ-B	表吸炭

第12表 遺構外出土早期～前期土器観察表(10)

挿図番号	図版番号	出土地区	唇	部位	胎土・焼成	外面施文文様	内面調整	分類	備考
4	48-39	MA52	不	胴	細砂・良	L(横)	ナデ	II-B	
5	40	確 B	不	胴	細砂・良	反燃RR(横)	ナデ	II-F	裏吸炭
6	41	ME53	不	胴	細砂・良	L(横)	ナデ	II-B	裏炭化物
7	49-1	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	
8	2	MA53	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
9	3	MF47	Ⅲ	胴	細砂・良	LR(横,縦)	ナデ	II-A	
10	4	MC55	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	裏吸炭・47-7と同一個体
11	5	MA52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
12	6	MA52	不	胴	細砂・良	LR(左上-右下)	ナデ	II-A	
13	7	MA53	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
14	8	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	
15	9	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
16	10	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
17	11	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
18	12	MA53	II	胴	細砂・良	不明	ナデ	不明	
19	13	ME53	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
20	14	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
21	15	MA53	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
22	16	MA51	II	胴	細砂・良	反燃RR(横)	ナデ	II-F	裏吸炭
23	17	MB51	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
24	18	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
25	19	MC55	不	胴	細砂・良	LR(横)	ナデ	II-A	裏吸炭
26	20	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
27	21	MA53	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
28	22	ME49	不	胴	細砂・良	LR(横)	ナデ	II-A	裏吸炭・47-7と同一個体
29	23	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
30	24	MB52	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	ナデ	II-F	47-7と同一個体
31	25	MA51	II	胴	細砂・良	反燃RR?	ナデ	II-F	裏吸炭
32	26	MF47	不	胴	細砂・良	LR(横)	ナデ	II-A	
33	27	MB52	不	胴	細砂・良	RL(横)	ナデ	II-A	
34	28	MC55	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	燃合R[RRL]	I-I	裏吸炭
35	29	確 B	不	胴	細砂・良	燃合R[RRL]	燃合R[RRL]	I-I	裏炭化物・47-34と同一個体
36	30	ME53	不	胴	粗砂・良	絡条体回転文	ナデ	II-D	裏炭化物
37	31	ME53	不	胴	粗砂・良	絡条体回転文	ナデ	II-D	裏炭化物
38	32	MH49	不	口縁部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	口唇部縄文
39	33	表土	不	口縁部	粗砂・良	綾絡文	ナデ	II-C	
40	34	MH49	不	口縁部	細砂・良	RL(横)	RL(縦)	I-A	裏炭化物
41	35	MF47	不	口縁部	細砂・良	RL(横)	ナデ	II-A-2b7	
42	36	MF37	Ⅲ	口縁部	粗砂・普	RL(横)	ナデ	II-A-1a	裏炭化物
43	37	MC46	不	口縁部	細砂・普	RL(横)	ナデ	II-A-1a	口唇部縄文
44	38	MF51	不	口縁部	細砂・良	ナデ	ナデ	III-B-1b	表裏吸炭
45	39	MF52	不	口縁部	細砂・良	LR(横)	LR(横)	I-A-1b7	口唇部刻目、裏面吸炭
46	40	MC45	不	口縁部	粗砂・悪	不明	ナデ	不明	補修孔
47	41	MC46	不	底部付蓋	粗砂・悪	RL(横)	ナデ	II-A	
48	42	MB52	不	底部	細砂・良	RL(縦)	ナデ	II-A	
49	43	MF49	II~III	底部	細砂・良	RL(横)	ナデ	II-A	表吸炭
50	44	MC46	II	底部付蓋	粗砂	不明	ナデ	不明	表裏吸炭

石器

遺構外から出土した石器は剥片石器、磨製石器、礫石器に分けられる。これらの石器はおもに調査区の南西側から出土しており、縄文時代早期～前期の遺構の分布と重なる。以下に各石器についての観察結果を分類・記述する。

トランシェ様石器（第48図～第50図、図版61）

31点出土した。刃部に第一次剝離面ないし自然面をとどめ、素材となる剥片を取り出す際の剝離によって生じた鋭い縁辺をそのまま刃部として使用しているものである。形態・刃部等の違いから以下のように分類した。なお石質はすべて頁岩である。

I類 刃部に対し、主軸が垂直であるもの

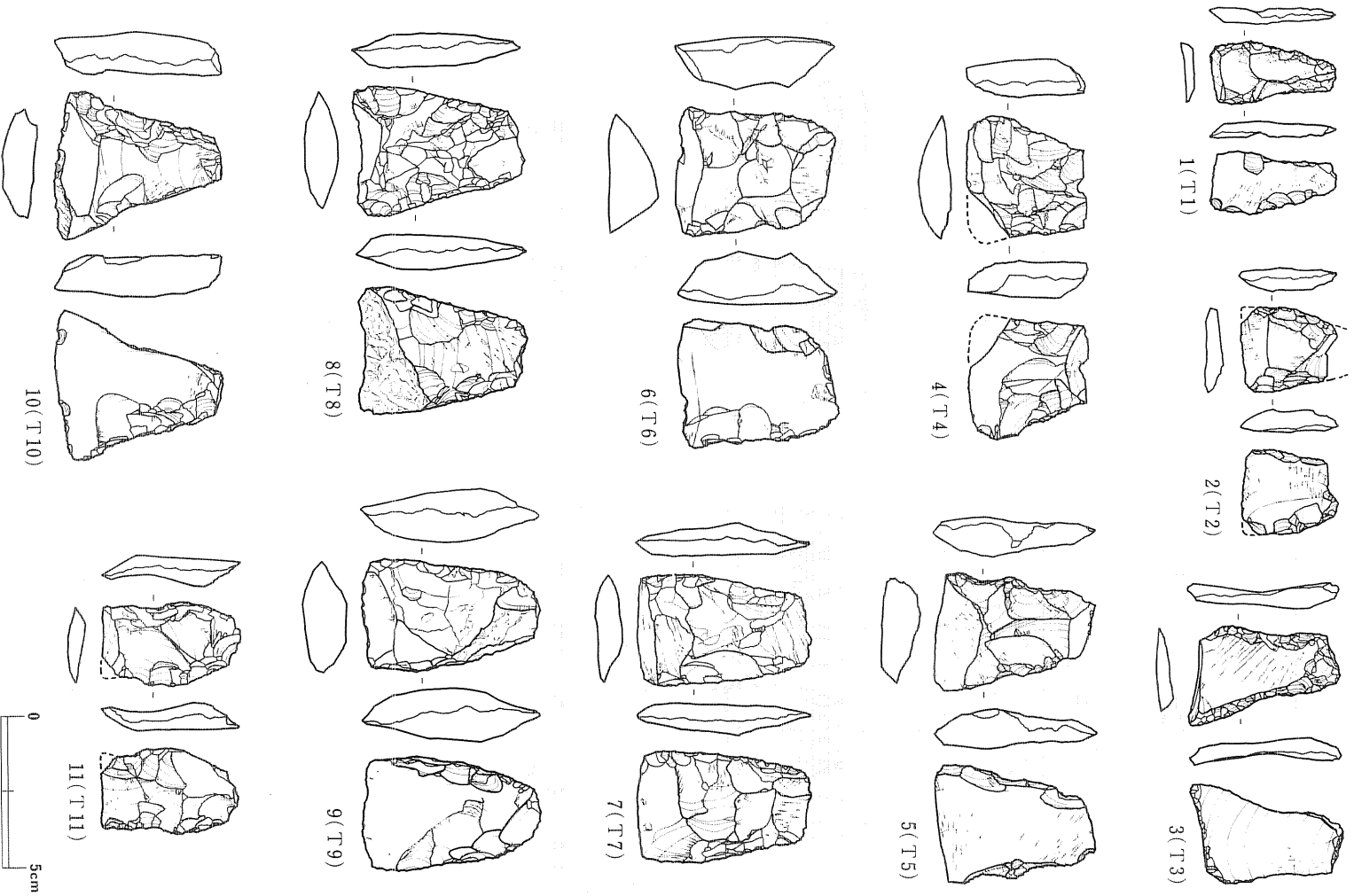
A 台形のもの

- (頂部) a. 平坦で刃部と平行するもの (T 2、T 4、T 6、T 7、T 8)
- b. 丸味をもつもの (T 9)
- (刃縁) a. 直線的なもの (T 2、T 4、T 6)
- b. 丸味をもつもの (T 7、T 9)
- c. 抉れるもの (T 8)

T 2 は刃部を基部方向からの第一次剝離によって作り出した後、側縁方向から打撃して、素材となる剥片を取り出している。つまり、横長の剥片を利用したものである。背面・主要剝離面とも両側面に二次調整剝離が施されている。T 4 はおそらく、第1段階として横長の剥片を取り出し、第2段階において、背面から加撃して折ることによって刃部を作り出したのであろう。刃部を除く全ての背面を二次調整し、主要剝離面では両側縁に二次調整を施している。基部は折損している。T 6 は刃部に自然面をとどめ、横長の剥片を利用したものである。背面は基部と刃部を除いて二次調整され、主要剝離面は両側縁が部分的に二次調整されている。T 7 は第一次剝離の打点と素材を取り出す際の剝離の打点が同じ側面にあるもので、背面、主要剝離面とも基部・刃部を除いて二次調整されている。主要剝離面の打痕は完全に取り去られていない。T 8 は第一次剝離の打点と素材を取り出す際の剝離の打点がそれぞれ刃縁方向にあるもので、剝離の際の影響か刃縁が抉れている。背面は基部と刃部を除いた全ての面に、主要剝離面は両側縁に二次調整が施されている。T 9 は第一次剝離の打点を刃縁方向にもち、横長の剥片を利用したものである。背面・主要剝離面とも両側面に二次調整が施されている。刃縁には、主要剝離面から細かい剝離が施されている(第48図)。

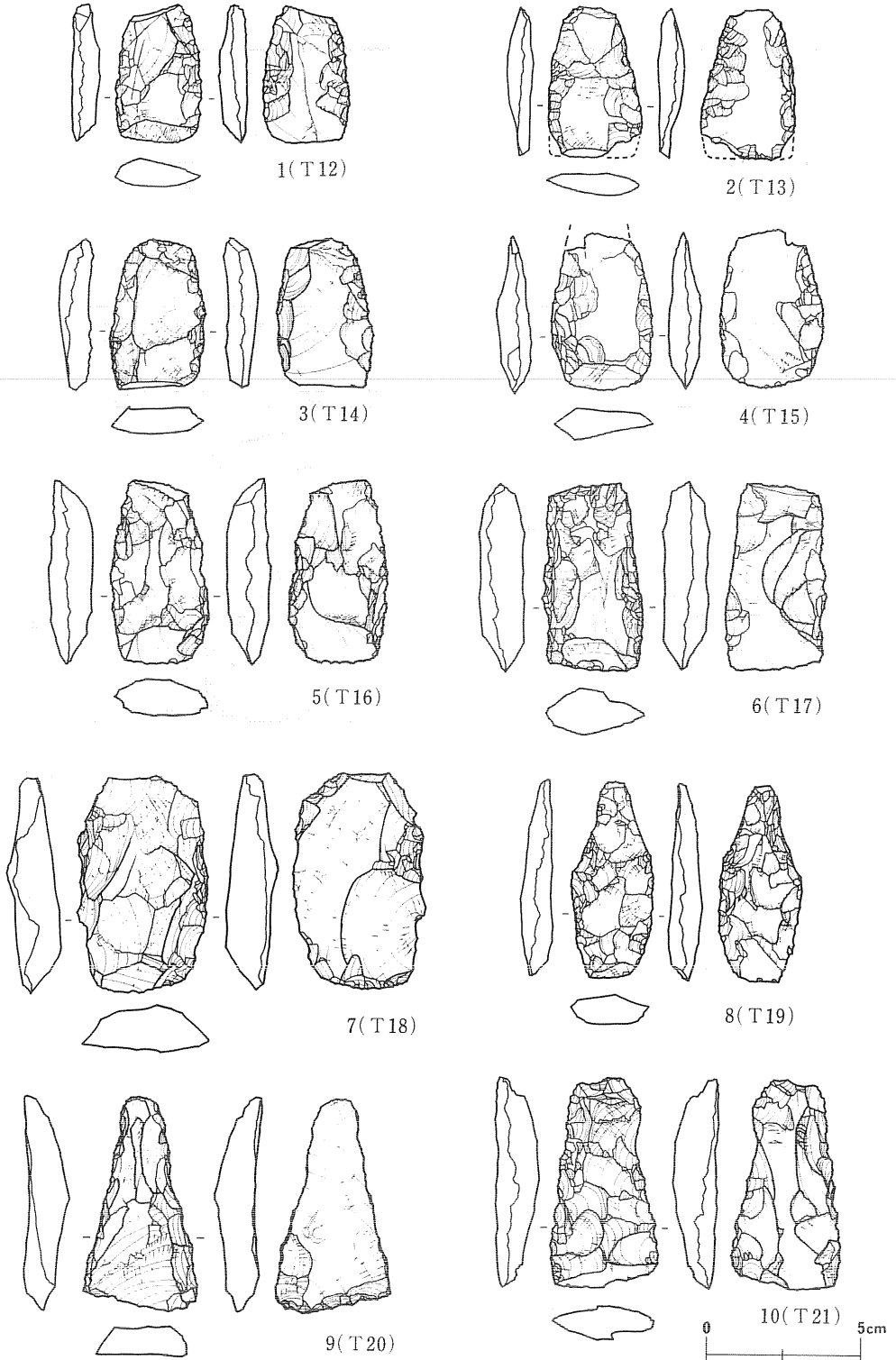
B 長方形のもの

- (刃縁) a. 直線的なもの (T 11～T 14、T 17)



第48図 遺構外出土の石器(1)

トランシェ様石器

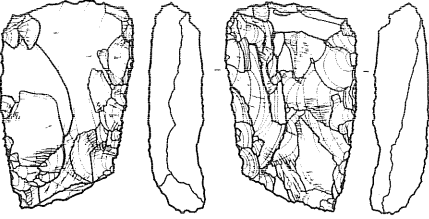


第49図 遺構外出土の石器(2) トランシェ様石器

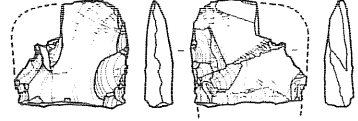
第50図 遺構外出土の石器(3) トライクエール石器



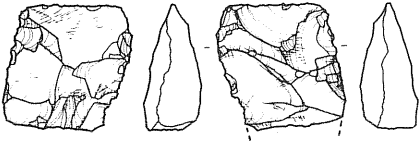
10 (T 31)



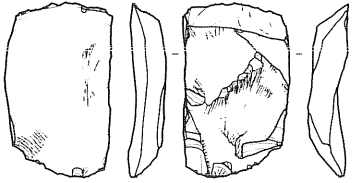
9 (T 30)



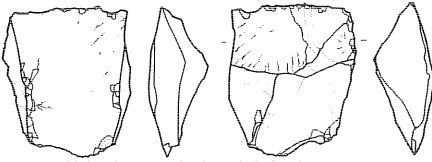
8 (T 29)



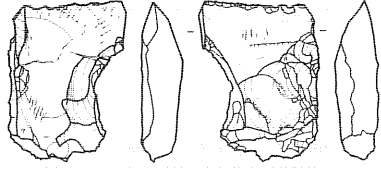
7 (T 28)



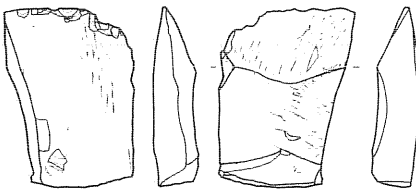
6 (T 27)



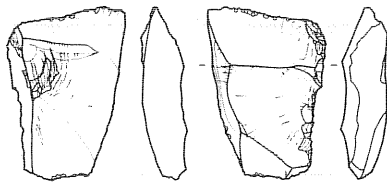
5 (T 26)



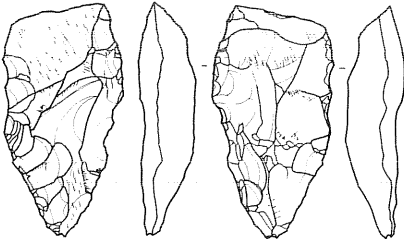
4 (T 25)



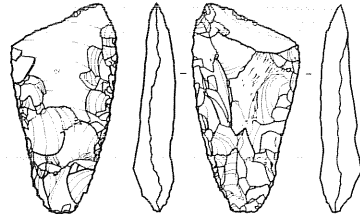
3 (T 24)



2 (T 23)



1 (T 22)



第13表 トランシェ様石器観察表

器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	格	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
トランシェ 1	48-1	61-1	ME48		4.2	1.9	0.4	4	頁岩	ⅡB	横長剥片
2	48-2	61-2	ME49	Ⅲ	(3.2)	(2.4)	0.5	(7)	頁岩	ⅡA	横長剥片
3	48-3	61-3	ME49		4.8	2.9	0.7	10	頁岩	ⅡB	縦長剥片
4	48-4	61-4	MA52	Ⅱ	(4.0)	(4.3)	1.0	(19)	頁岩	ⅠA	横長剥片
5	48-5	61-5	LJ47	Ⅲ	5.1	3.9	1.3	24	頁岩	ⅡA	横長剥片
6	48-6	61-6	MD47	Ⅱ	5.1	4.3	1.6	37	頁岩	ⅠA	横長剥片
7	48-7	61-7	MC45・46		5.8	3.7	0.9	21	頁岩	ⅠA	横長剥片
8	48-8	61-8	MJ45	Ⅱ~Ⅲ	5.6	4.3	1.1	26	頁岩	ⅠA	縦長剥片
9	48-9	61-9	ME47	Ⅱ	5.9	3.6	1.6	39	頁岩	ⅠA	横長剥片
10	48-10	61-10	MB49	Ⅲ	5.6	5.0	1.2	29	頁岩	ⅡB	横長剥片
11	48-11	61-11	不明		4.6	(2.4)	0.8	10	頁岩	ⅠB	横長剥片
12	49-1	61-12	MF49	Ⅲ	4.5	2.6	0.8	14	頁岩	ⅠB	横長剥片
13	49-2	61-13	MD51	Ⅱ	4.9	(2.8)	0.8	10	頁岩	ⅠB	横長剥片
14	49-3	61-14	MB54	Ⅱ	4.9	2.6	0.9	18	頁岩	ⅠB	縦長剥片
15	49-4	61-15	MA47		5.2	2.7	1.0	15	頁岩	ⅠB	横長剥片
16	49-5	61-16	ME47	Ⅱ	6.0	3.0	1.4	30	頁岩	ⅠB	横長剥片
17	49-6	61-17	MF48	Ⅲ	6.1	3.0	1.4	32	頁岩	ⅠB	横長剥片
18	49-7	61-18	MG49	Ⅰ	7.1	3.3	1.4	47	頁岩	ⅠB	横長剥片
19	49-8	61-19	MH48		6.5	1.5	0.9	17	頁岩	ⅠC	横長剥片
20	49-9	61-20	LG49	Ⅱ	6.7	3.7	1.3	23	頁岩	ⅡB	縦長剥片
21	49-10	61-21	MH47	S DOZ 覆土	6.9	3.4	1.4	32	頁岩	ⅡB	横長剥片
22	50-1	61-22	MF48		6.9	3.3	1.3	28	頁岩	ⅡC	縦長剥片
23	50-2	61-23	MH47		7.4	3.2	1.8	50	頁岩	ⅡC	横長剥片
24	50-3	61-24	MH48	Ⅱ	5.4	3.6	1.3	32	頁岩	Ⅲ	横長剥片
25	50-4	61-25	MC45	Ⅵ	5.8	4.1	1.4	44	頁岩	Ⅲ	横長剥片
26	50-5	61-26	L147	Ⅱ	5.0	3.3	1.3	29	頁岩	Ⅲ	横長剥片
27	50-6	61-27	MB46		5.0	3.9	1.8	36	頁岩	Ⅲ	横長剥片
28	50-7	61-28	MB49	Ⅱ	5.7	3.0	0.9	26	頁岩	Ⅲ	縦長剥片
29	50-8	61-29	MD46	Ⅱ	(4.2)	3.6	1.8	(29)	頁岩	Ⅳ	横長剥片
30	50-9	61-30	MF53	Ⅱ~Ⅲ	(3.5)	(3.8)	0.9	(13)	頁岩	Ⅳ	横長剥片
31	50-10	61-31	ME46	Ⅱ	6.9	4.3	1.7	57	頁岩	ⅡA	横長剥片

T11は、刃部の第一次剥離は刃縁方向から行い、横長の剥片を利用したものである。両面とも刃部を残して二次調整されている。T12は第一次剥離は刃縁斜方向からで、横長の剥片を利用している。背面は基部と刃部を除いた面に、主要剥離面は両側縁のみに二次調整が施されている。T13の刃部は折って作り出されたものであろう。横長の剥片を利用したものである。背面には基部と両側縁に二次調整が施され、主要剥離面には両側縁の他、刃部に対しても細かい調整が施されている。T14の刃部も折って作り出されたものであろう。素材を取り出す際の打点が基部に残っていることにより、縦長の剥片を利用したと判断される。背面は刃部を除いた全ての面に、主要剥離面は両側縁に二次調整が施されている。T15は刃縁斜方向からの第一次剥離の後、側縁方向から打撃して、素材となる剥片を取り出したものである。両面とも両側縁のみが二次調整されており、背面には自然面が広く残存している。T16は第一次剥離と素材を取り出す際の打点が相対する側縁にあり、両面とも基部・刃部を除く全ての面に二次調整が施されている。基部付近は灰オリーブを呈しているが、中央部から刃部にかけては褐灰色を呈しており、基部と刃部では色調の違いが認められる。これは単に石質の違い、風

化の違いなどと言うものではなく、おそらく、柄に装着した際の痕跡と見るべきであろう。T 17の刃部は主要剥離面に加撃して折って作り出されたものであろう。横長の剥片を利用しており、一側縁には打瘤を取り除く粗い二次調整が施され、他側縁には粗い剥離が部分的に施されている。背面の二次調整は主要剥離面に比べていねいに施されている。刃部は主要剥離面からのみ加撃された細かい剥離が施されている。T 18は刃縁方向からの第一次剥離の後、側縁方向から素材を取り出すための剥離を施したものである。背面の二次調整は両側縁に施され、主要剥離面では打瘤を取り除く粗い調整と、側縁への部分的な調整が施されている。また、刃部は背面から加撃して細かい調整を行っている（第48図・第49図）。

C 最大幅を側縁ほぼ中央にもち、基部と刃部の幅が比較的小さいもの（T 19）

刃部に対する第一次剥離の打点と素材となる剥片を取り出す際の打点が、同側縁方向にあるもので、両面とも刃部を除いた全面に二次調整剥離が施されている。基部から中央部にかけては二次調整が終了後、背面からのみ加撃して細身に仕上げられている。刃縁は丸味をもっている（第49図）。

II類 刃部に対し、主軸が左右に振れるもの

A 側縁が直線的で台形のもの

(刃縁) a. 直線的なもの（T 5）

b. 丸味をもつもの（T 31）

T 5は刃部に対する第一次剥離が刃縁斜方向からのもので、素材を取り出す際の打点は側縁刃部付近にある。背面は基部・刃部を除いた全ての面に、主要剥離面は両側縁のみに二次調整が施されている。T 31は横長の剥片を利用したもので、刃部は折って作り出されている。二次調整は、背面では刃部を除く全ての面に施され、主要剥離面では両側縁に施されている。刃縁に見られる剥離は使用中における刃こぼれと解したい（第48図・第50図）。

B 側縁が抉れ、撥形であるもの

(刃縁) a. 直線的なもの（T 1、T 3、T 20）

b. 丸味をもつもの（T 10、T 21）

T 1は刃部に対する第一次剥離が刃縁斜方向から行われ、横長の剥片を利用したものである。二次調整は背面では刃部を除く全ての面に施されているが、主要剥離面では側縁に部分的に施されている。3つの刃部は折って作り出されているが、主要剥離面に刃部に対する細かい調整が見られる。素材を取り出す際の打点は基部にある。二次調整は背面の基部と両側縁のみに施され、主要剥離面の側縁には施されていない。T 10は刃部に対する第一次剥離が刃縁方向から行われ、横長の剥片を利用したものである。一側縁がヒンジフラクチャーをなす。この側縁では二次調整はさほど施されていないが、一方の側縁には両面に調整が施されている。T 20の刃

部に対する第一次剝離は刃縁方向からのものである。素材を取り出す際の打点は刃部の一端にあり、主要剝離面は斜めに長い。側縁は主要剝離面からのみ加撃調整され、刃部は背部からのみ加撃調整されている。この刃部に対する二次調整は、素材となる剝片を取り出した際に刃縁が鋭くなく、刃としての用をなさなかったために施されたものであろう。二次調整の加撃が側縁は主要剝離面からのみ、刃部は背面からのみという特徴が見られるのはT20の他、T3である。T21は横長の剝片を利用し、背面は刃部を除く全ての面を、主要剝離面は両側縁を二次調整している（第48図、第49図）。

C 頂部が尖り、側縁の一方が弧状をなし、他方が直線的なもの（T22、T23）
（刃縁） いずれも直線的である。

T22は縦長の剝片を利用し、刃部の第一次剝離は刃縁方向から行われたものである。両面とも基部と両側縁に二次調整が施されている。刃縁中央部に細かい調整が施されているが、これは刃部を直線的にしようとしたためのものであろう。しかし、刃縁の一端に凸部が残存していることから、刃縁の直線化という作業は完結しなかったと思われる。T23は横長の剝片を利用し、刃部の第一次剝離は刃縁斜方向から行われている。両面とも刃部を除いた全ての面に二次調整が施されている。刃縁中央部に細かい剝離がみられるが、これは使用中における刃こぼれと解したい（第50図）。

Ⅲ類 未成品

T24～T27は横長の剝片である。基部及び側縁に対する二次調整はほとんど施されていないが、刃部には細かい調整が施されている。形態的にトランシェ様石器に似ているので、トランシェ様石器の未成品として分類したが、このまま使用して、搔器的役割を果していたとも考えられるし、さらに二次剝離が施されて石筥となったとも考えられる。T28は縦長の剝片である。二次調整は施されておらず、刃部に相当する面は自然面をとどめている（第50図）。

Ⅳ類 半欠品

いずれも基部を欠損している。横長の剝片を利用したもので、刃縁が直線的なもの（T29）と丸味のあるもの（T30）とがある。

石筥（第50図～第59図、図版62～図版64）

80点出土した。形態的にはトランシェ様石器に類似したものがあるが、刃部に一次剝離面をとどめないものや、刃部に一次剝離面は有するが、トランシェ様石器と認めがたいものは石筥とした。形態・刃部等の形状の違いから以下のように分類した。なお、石質はすべて頁岩である。

I類 長さに対して刃部幅が大きいもの

A 台形のもの

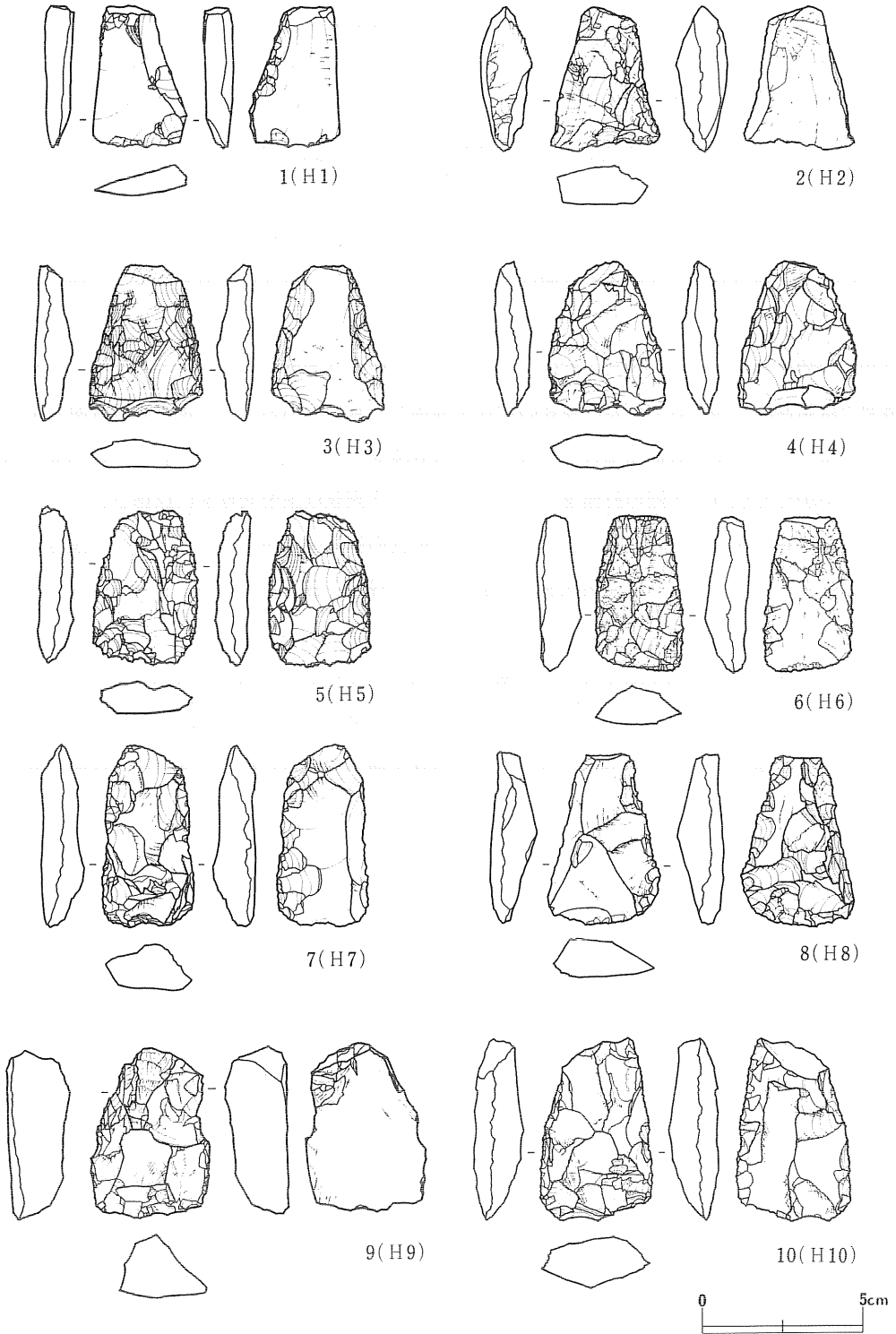
- (刃縁) a. 直線的であるもの (H 1、H 5、H 26、H 27、H 30)
 b. 丸味をもつもの (H 8、H 9、H 11、H 12、H 25、H 29)
 c. 凹凸が激しいもの (H 2～H 4、H 28、H 32、H 33)

H 1は横長の剥片の刃部と一側縁に調整を施したものである。他側縁はヒンジフラクチャーをなす。H 2は一側縁に、素材となる剥片を取り出した際の打面をとどめる。他側縁は素材となる剥片を折って形成されている。刃部は当初、ヒンジフラクチャーをなしていたらしく、二次調整によって作り出された刃縁の一端にヒンジフラクチャーが残存している。主要剥離面には二次調整が施されていないが、背面は全面に施されている。H 3は本来トランシェ様石器であったものが、刃部再生により石筥の形態をもつに至ったと思われる。刃部の第一次剥離面は僅かしか残存していない。刃部以外の二次調整は、背面では基部を除いた全ての面に、主要剥離面では両側縁に施されている。横長の剥片を利用したものである。H 8は主要剥離面を全面二次調整しているが、背面には自然面及び第一次剥離面が広く残存している。H 9は基部に素材となる剥片を取り出す際の打面をとどめている。二次調整は主要剥離面には施されておらず、背面の両側縁と刃部にのみ施されている。H 11は横長の剥片を利用したもので、二次調整が背面は基部を除いた全面に、主要剥離面は刃部を除いた縁辺に施されている。H 12も横長の剥片を利用している。背面の二次調整は基部を除いた全ての縁辺に施され、主要剥離面には素材を取り出した際の打瘤を取り除くための剥離のみが施されている。側縁は調整によって決まっている。H 25は横長の剥片を利用したもので、僅かに主要剥離面をとどめる程度に二次調整されている。H 26も横長の剥片を利用したもので、背面は全面二次調整され、主要剥離面は両側縁のみ調整されている。H 29も横長の剥片を利用したものである。背面は第一次剥離面を僅かに残して二次調整され、刃部にも施してある。主要剥離面は両側縁のみ調整されている。H 30も横長の剥片を利用したもので二次調整が基部を除いた縁辺に施されている。H 32は横長の剥片を利用したものでトランシェ様石器とも考えられる。背面は基部に自然面を、刃部に第一次剥離面をそれぞれ僅かに残して全面二次調整され、主要剥離面には素材となる剥片を取り出した際の打瘤を取り除く剥離と側縁に対する調整が施されている。H 4・H 5・H 27・H 28・H 33は背面・主要剥離面の全面に二次調整を施したものである(第51図～第54図)。

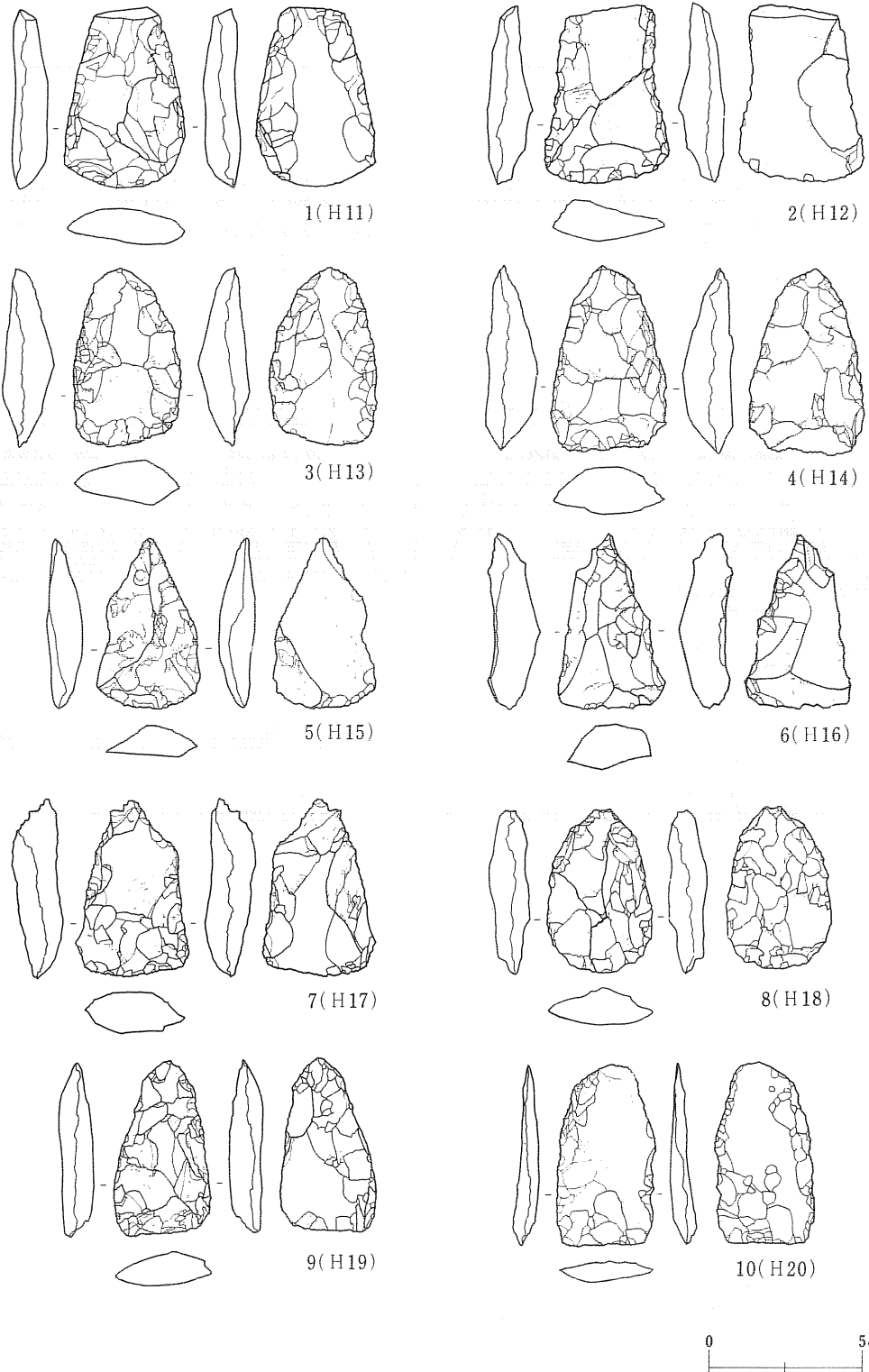
B 二等辺三角形のもの

- (頂部) a. 尖るもの (H 14～H 17、H 24)
 b. 丸味をもつもの (H 13、H 18、H 20、H 31)
 (刃部) a. 直線的なもの (H 14、H 16、H 20)
 b. 丸味をもつもの (H 13、H 15、H 17、H 18、H 24、H 31)

H 13は横長の剥片を利用したもので、二次調整は背面では基部を除いた縁辺に、主要剥離面で

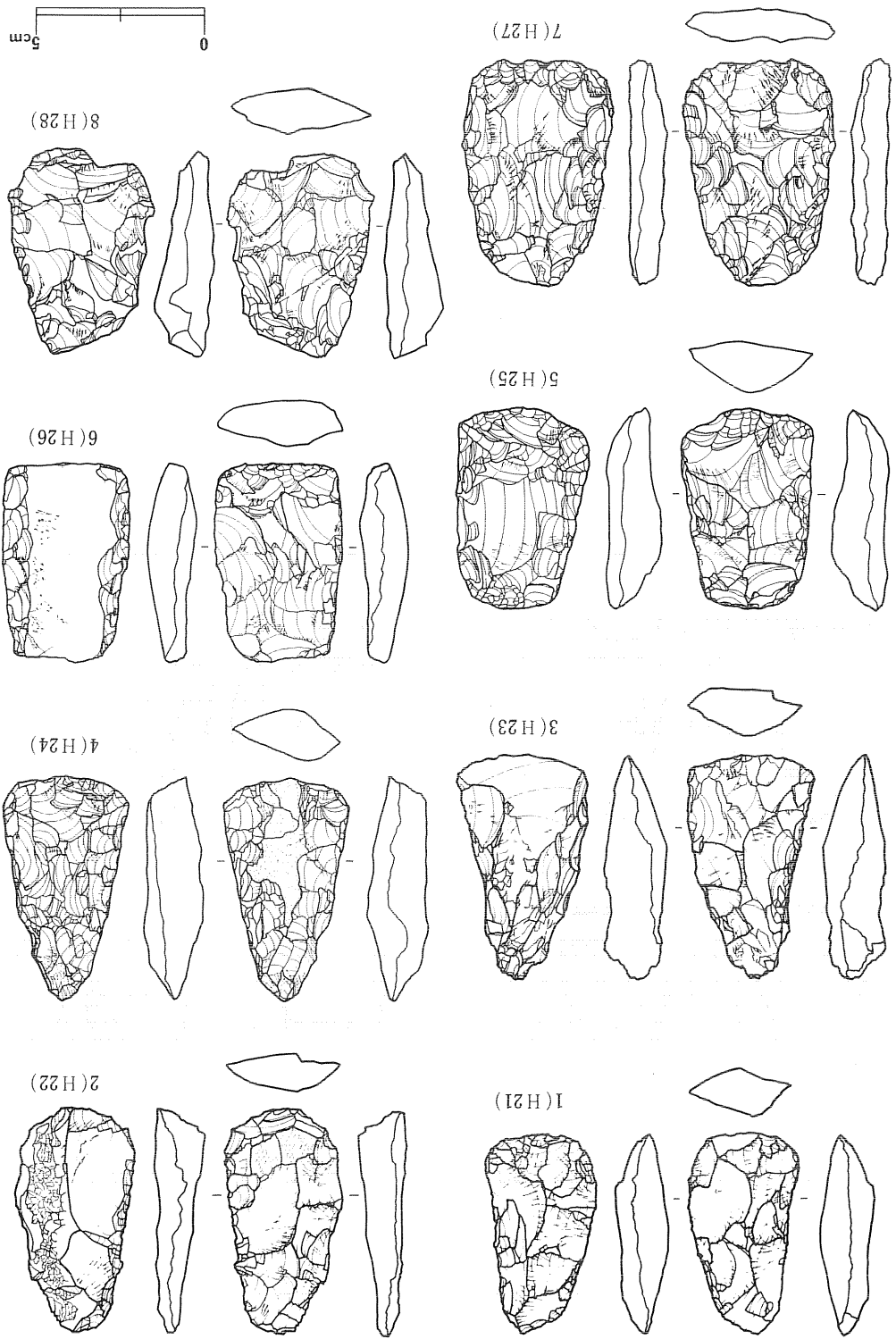


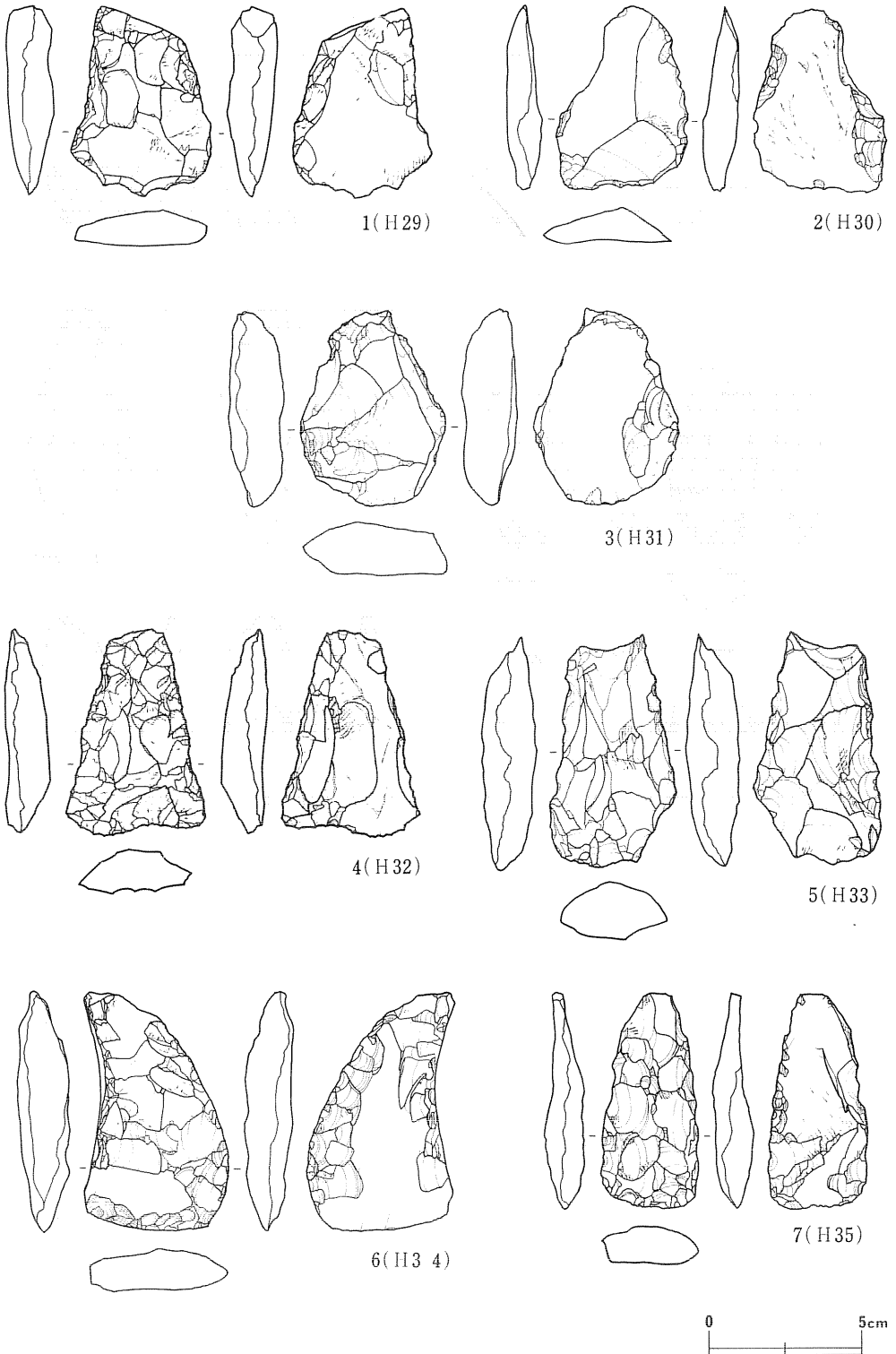
第51図 遺構外出土の石器(4) 石筥



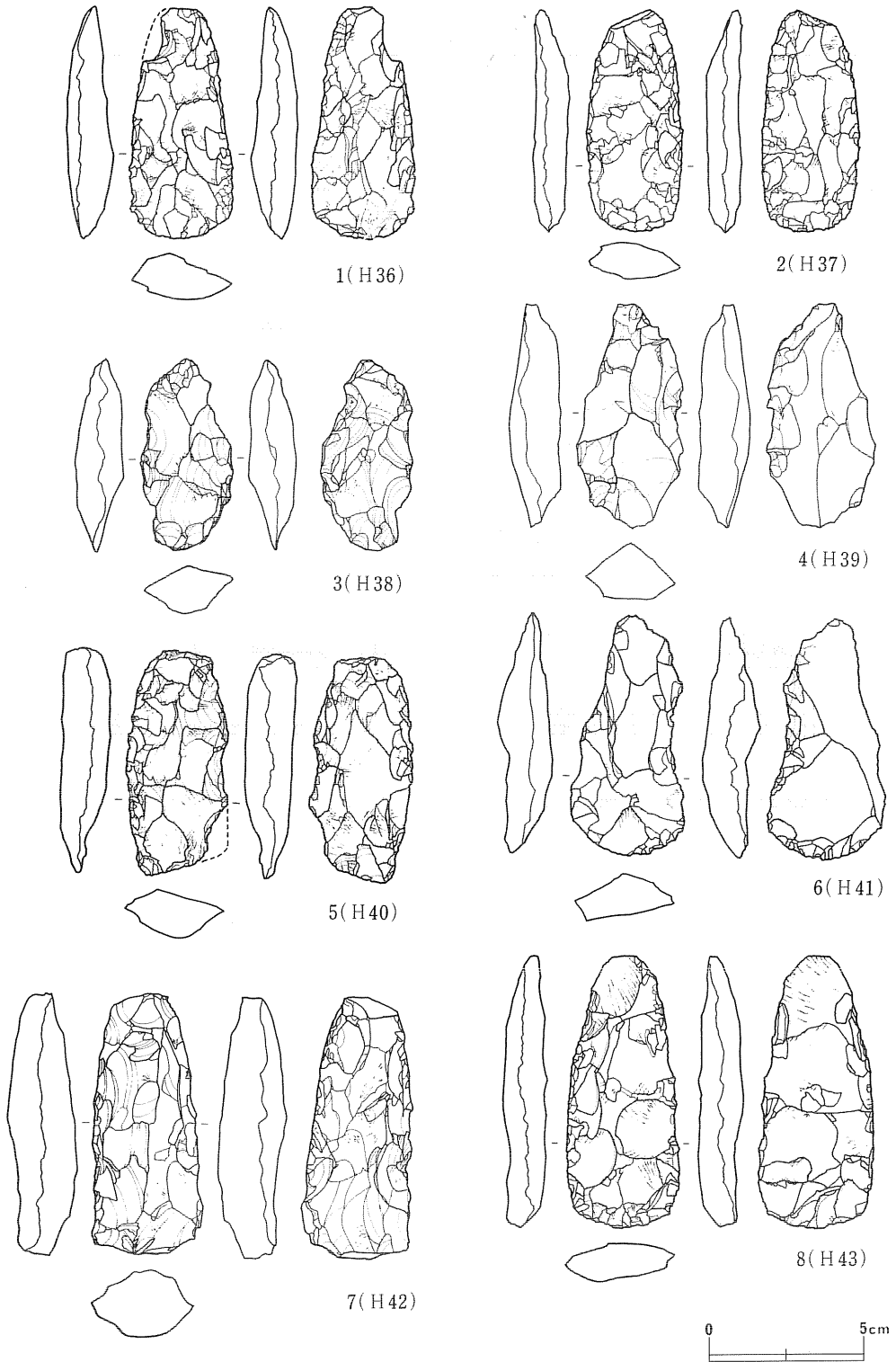
第52図 遺構外出土の石器(5) 石筥

第53図 遺構外出土の石器(6) 石鏃

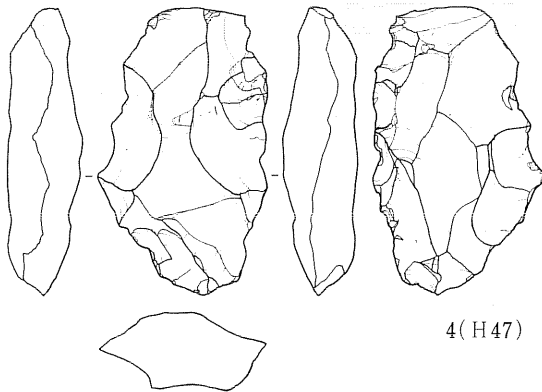
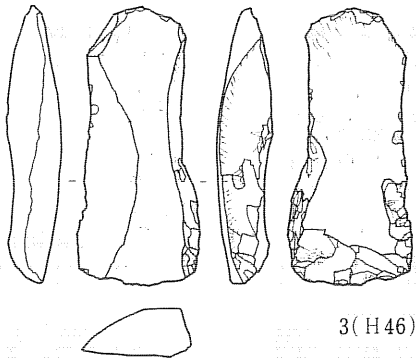
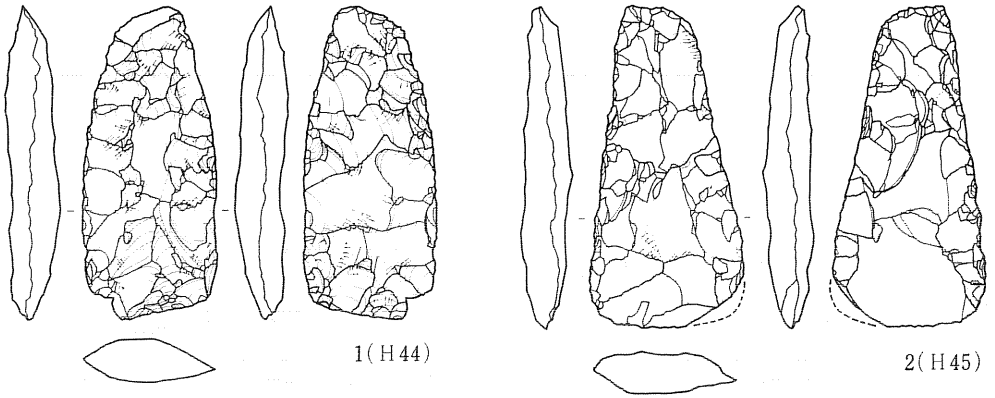




第54図 遺構外出土の石器(7) 石筥

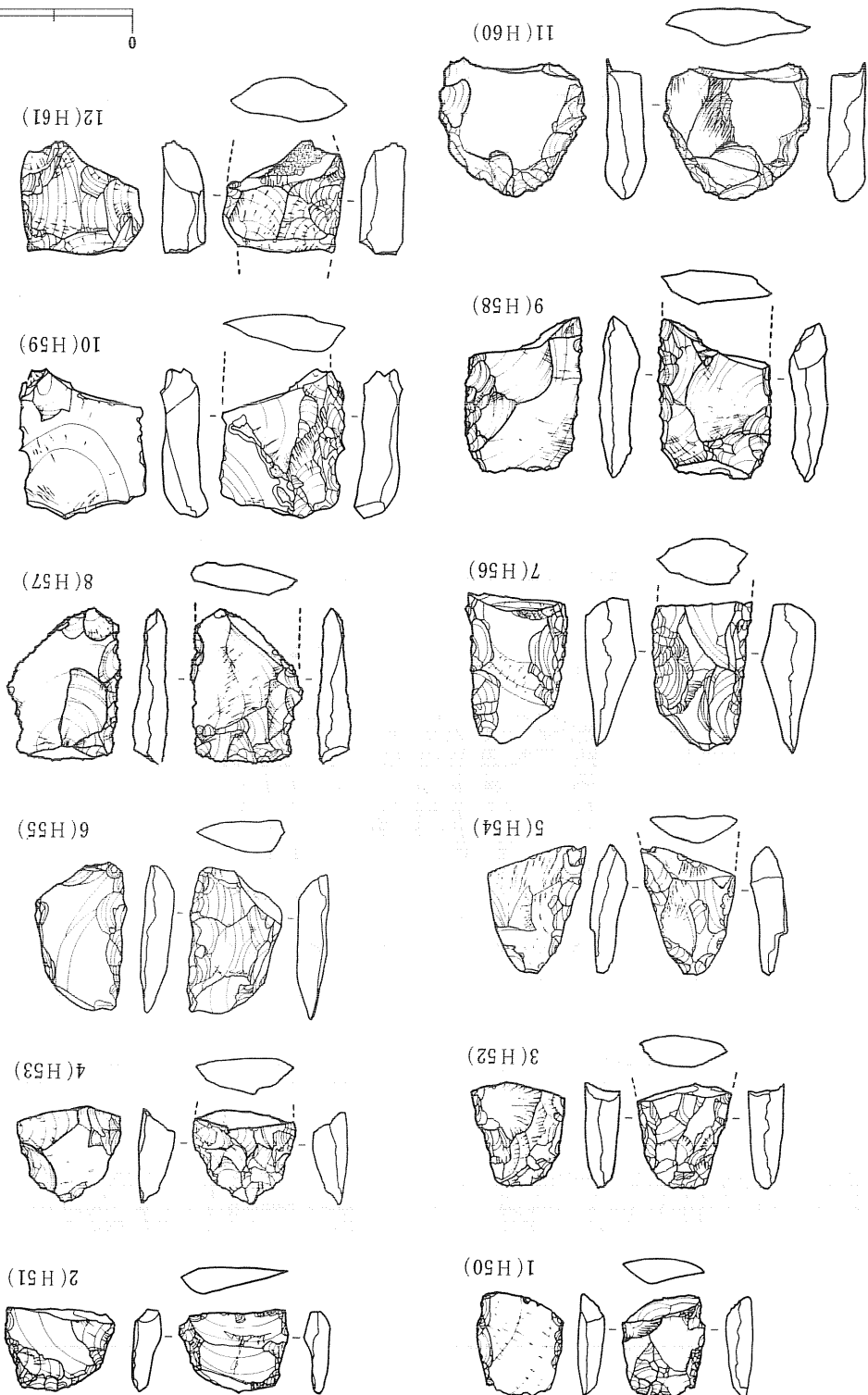


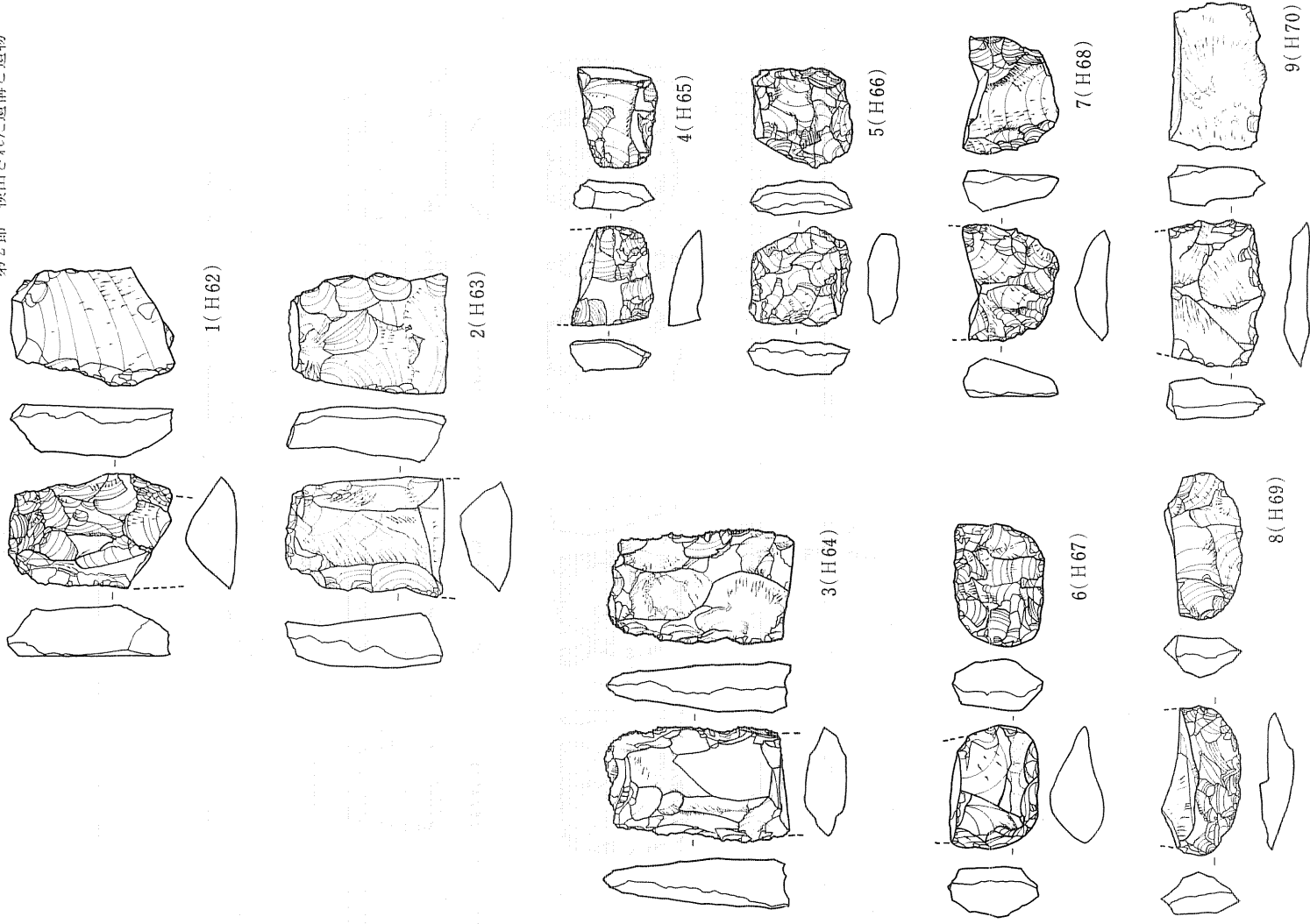
第55図 遺構外出土の石器(8) 石筥



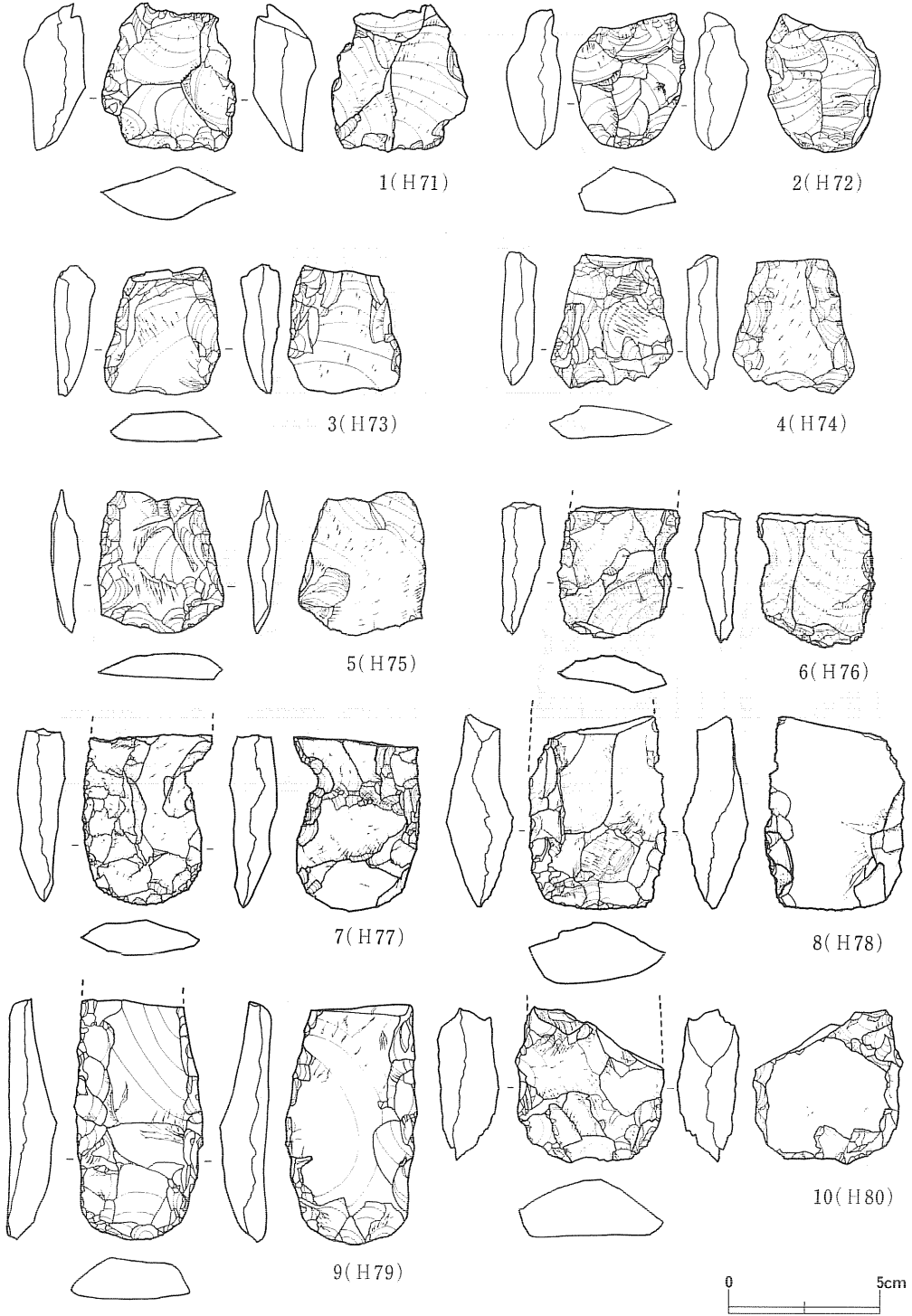
第56図 遺構外出土の石器(9) 石筥

第57図 遺構外出土の石器⑩ 石鏡





第58図 遺構外出土の石器(1) 石筴



第59図 遺構外出土の石器(12) 石筥

は両側縁に施されている。H14は横長の剥片を利用したもので、背面はほぼ全面にわたって二次調整され、主要剥離面では刃部に古い面をとどめている。H15は縦長の剥片を利用したもので、刃部には両面に細かい二次調整が施されている。刃部以外の二次調整は背面の全面に施されている。H16は横長の剥片を利用したもので、二次調整は全体的に粗い。一側縁は、素材となる剥片を取り出した際に形成された鋭い直線的な縁辺であり、おそらく刃部として使用されたであろうか。H17も横長の剥片を利用したものである。背面は基部付近に第一次剥離面をとどめるが、それを除いて全面二次調整が施されている。主要剥離面では基部と両側縁に施されている。H18は両面とも全面に二次調整が施されている。H20は縦長の剥片を利用しており、両面とも縁辺に二次調整が施されている。H24はおそらく縦長の剥片を利用したものであろう。両面とも細かい二次調整が施されているが、背面には若干古い面が残存している。H31は横長の剥片を利用しているが、二次調整があまり進行しておらず、未成品と考えられる(第52図～第54図)。

C 側縁の一方が弧状をなし、他方が直線的なもの

(刃縁) a. 直線的なもの (H19)

b. 丸味をもつもの (H21～H23)
c. 凹凸が激しいもの (H10)

H10は縦長の剥片を利用したもので、主要剥離面をわずかに残して全面が二次調整されている。基部には折面をとどめている。H19は横長の剥片を利用している。二次調整は背面では僅かに第一次剥離面を残してほぼ全面にわたって施され、主要剥離面では弧状をなす側縁と基部に施されている。H21はおそらく横長の剥片を利用したものであろう。両面とも全面にわたって二次調整されている。なお、刃部には若干、古い面が残存している。H22は横長の剥片を利用している。背面はすべての縁辺に二次調整が施されているが、主要剥離面では、直線的な側縁のみに施されている。この直線的な側縁を刃部として使用したのであろう。H23は縦長の剥片を利用したものである。二次調整は背面では基部を除いた全ての面に、主要剥離面では刃部を除いた全ての面に施されている(第51図～第53図)。

D サイの角状のもの (H34)

横長の剥片を利用したものである。素材となる剥片を取り出す際の打点は外弯した側縁方向にある。外弯した方の側縁は両面から加撃調整され鋭くなっているが、反対側の内弯した側縁は平坦な自然面をとどめ、二次調整の際の打面になっている。刃部は背面のみが二次調整されている(第54図)。

E 長方形のもの (H47)

粗い剥離を施したものであるが、長い方の側縁には比較的細かい調整が施してあり、おそらく、この側縁が刃部として使用されたのであろう(第56図)。

Ⅱ類 長さに対して刃部幅が小さいもの

A 台形のもの

- (刃縁) a. 直線的なもの (H 6、H 35、H 44、H 45)
b. 丸味をもつもの (H 36、H 41、H 43、H 46)
c. 凹凸が激しいもの (H 7)
- (側縁) a. 直線的なもの (H 7、H 36、H 42、H 45)
b. わずかに外弯するもの (H 6、H 35、H 43、H 44)
c. 挟れるもの (H 41、H 46)

H 6は縦長の剥片を利用しており、二次調整は背面では全面に、主要剥離面では基部と両側縁に施されている。H 7は縦長の剥片を利用したもので、背面は全面を、主要剥離面では両側縁を二次調整している。刃縁中央部は使用によるものなのか、挟れている。また、背面にはアスファルトと思われるものが少量付着している。H 35・H 36・H 44は基部に自然面をとどめているが両面とも全面にわたって二次調整されている。H 45は主要剥離面の刃部に古い面をとどめているが、H 43には古い面は残っていない。両者とも全面にわたって細かい二次調整が施されている。H 41は粗い剥離の後、一側縁と刃部に対して両面から調整剥離を施している。調整の施された側縁は挟れている。H 42は両面の両側縁に二次調整が施されているもので、両端は折られている。H 46は縦長の素材剥片に調整剥離を施している。背面には自然面が広く残存している。側縁は素材となる剥片を取り出した段階において、ある程度鋭かったようだが、刃部付近においては二次調整剥離が施されている。刃部の調整は背面からのみ加撃して行ったものである(第51図・第54図～第56図)。

B 長方形のもの (H 37、H 40)

両面とも全面にわたって二次調整されている。H 37は刃縁が丸味をもつものである。H 40は一側縁を刃部として使用したものと考えられる(第55図)。

C 両端が尖るもの (H 38・H 39)

横長の素材剥片を取り出した後、粗い剥離を施したものである。細かい調整剥離を局部的に見てとれる(第55図)。

Ⅲ類 半欠品・未成品

石鏝の基部及び刃部と思われる半欠品をここに分類した。また、H 78のような未成品と思われるものもここに含めた。H 78は横長の剥片を利用したものであるが、主要剥離面に剥片を取り出した際の打瘤が残存しており、打瘤を取り除く剥離の終了が、横長剥片利用の石鏝の完成と理解したい。H 80は打製石斧とも考えられる(第57図～第59図)。

第14表 石筥観察表(1)

器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	柄	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
石筥 1	51-1	106-1	MH48	Ⅲ	4.4	2.6	0.9	12	頁岩	IA	
2	51-2	106-2	ME47	Ⅱ	4.5	3.3	1.5	20	頁岩	IA	
3	51-3	106-3	MD50	Ⅲ	4.8	3.5	1.1	19	頁岩	IA	トランシェ様石器
4	51-4	106-4	MA49		4.8	3.5	1.0	19	頁岩	IA	
5	51-5	106-5	MG46		4.9	3.7	0.9	19	頁岩	IA	
6	51-6	106-6	M147	Ⅱ	4.6	2.5	1.2	18	頁岩	IIA	
7	51-7	106-7	MA49	Ⅱ	5.6	2.7	1.4	22	頁岩	IIA	刃部にアスファルト付着
8	51-8	106-8	LH53	Ⅱ	5.2	3.3	1.4	25	頁岩	IA	
9	51-9	106-9	ME47	S D ⁰² 覆土	5.2	3.3	1.7	37	頁岩	IA	
10	51-10	106-10	MG48	Ⅱ	5.4	3.5	1.4	31	頁岩	IC	
11	52-1	106-11	MD48	Ⅱ	5.7	3.8	1.1	26	頁岩	IA	
12	52-2	106-12	MF49	Ⅲ	5.5	3.9	1.4	30	頁岩	IA	
13	52-3	106-13	ME49	Ⅲ	5.6	3.2	1.6	31	頁岩	IB	
14	52-4	106-14	MF48	Ⅱ	6.0	3.4	1.5	34	頁岩	IB	
15	52-5	106-15	ME47	Ⅱ	5.5	3.1	0.9	12	頁岩	IB	
16	52-6	106-16	MH48	Ⅲ	5.7	3.3	1.4	21	頁岩	IB	
17	52-7	106-17	LJ48	Ⅱ	5.5	3.5	1.5	30	頁岩	IB	
18	52-8	106-18	LJ54	Ⅱ	5.2	3.4	1.2	21	頁岩	IB	
19	52-9	106-19	表採		5.6	3.1	1.0	19	頁岩	IC	
20	52-10	106-20	表採		5.9	3.1	0.5	12	頁岩	IB	
21	53-1	106-21	ME47	Ⅱ	5.9	3.3	1.5	22	頁岩	IC	
22	53-2	106-22	MC49	Ⅱ	6.1	3.3	1.3	27	頁岩	IC	
23	53-3	106-23	ME48		6.5	3.7	1.7	38	頁岩	IC	
24	53-4	106-24	MB48		6.5	3.7	1.5	36	頁岩	IB	
25	53-5	106-25	ME47	S D ⁰² 覆土	6.0	3.7	1.5	38	頁岩	IA	
26	53-6	106-26	MF52	Ⅱ~Ⅲ	5.9	3.5	1.4	34	頁岩	IA	
27	53-7	106-27	MG46		6.7	4.4	1.0	38	頁岩	IA	
28	53-8	106-28	LH53	Ⅱ	5.9	4.2	1.6	39	頁岩	IA	
29	54-1	106-29	MD51		6.0	4.2	1.5	41	頁岩	IA	
30	54-2	106-30	MG51		5.8	3.8	1.1	(26)	頁岩	IA	
31	54-3	106-31	LJ50	Ⅱ	6.3	4.7	1.7	60	頁岩	IB	
32	54-4	106-32	ME53	Ⅱ~Ⅲ	6.7	4.6	1.3	37	頁岩	IA	トランシェ様石器
33	54-5	106-33	MF47	S D ⁰² 覆土	7.1	(4.5)	1.6	(53)	頁岩	IA	
34	54-6	106-34	MF50	Ⅱ	7.5	4.5	1.6	56	頁岩	ID	
35	54-7	106-35	MA51	Ⅱ	6.9	2.8	1.1	28	頁岩	IIA	
36	55-1	106-36	MF49	Ⅱ~Ⅲ	7.5	3.1	1.4	(36)	頁岩	IIA	
37	55-2	107-1	MF49	Ⅲ	7.2	2.4	1.0	32	頁岩	II B	
38	55-3	107-2	LF56	Ⅱ	6.1	2.9	1.5	24	頁岩	II C	
39	55-4	107-3	LF49	Ⅱ	7.1	3.4	1.6	33	頁岩	II C	
40	55-5	107-4	表採		7.3	2.3	1.6	38	頁岩	II B	
41	55-6	107-5	MH46	Ⅱ	7.8	3.5	1.6	38	頁岩	II A	
42	55-7	107-6	MF49	Ⅲ	8.3	3.4	2.1	62	頁岩	II A	
43	55-8	107-7	MF50	Ⅱ	8.7	3.2	1.3	49	頁岩	II A	
44	56-1	107-8	ME54	Ⅱ	9.1	3.5	1.4	57	頁岩	II A	
45	56-2	107-9	MD47	Ⅱ	9.3	(4.5)	1.3	(55)	頁岩	II A	
46	56-3	107-10	ME47	Ⅱ	8.2	3.5	1.6	50	頁岩	II A	
47	56-4	107-11	MG50	Ⅱ	8.3	5.0	2.0	81	頁岩	IE	
48	56-5	107-12	ME54	Ⅱ	(2.0)	(2.6)	0.7	(4)	頁岩	Ⅲ	
49	56-6	107-13	MH49		(2.4)	(3.0)	0.9	(6)	頁岩	Ⅲ	
50	57-1	107-14	MD48	Ⅱ	(3.2)	(2.6)	0.8	(7)	頁岩	Ⅲ	
51	57-2	107-15	MG46	Ⅱ~Ⅲ	(2.5)	(3.5)	0.8	(8)	頁岩	Ⅲ	
52	57-3	107-16	表採		(3.3)	(3.0)	1.0	(10)	頁岩	Ⅲ	
53	57-4	107-17	MF51	Ⅱ	(2.9)	(3.2)	1.0	(10)	頁岩	Ⅲ	
54	57-5	107-18	MD48	Ⅱ	(4.1)	(3.0)	0.9	(9)	頁岩	Ⅲ	
55	57-6	107-19	MH49	Ⅲ~Ⅳ	4.7	(2.8)	0.9	(15)	頁岩	Ⅲ	

第15表 石筥観察表(2)

器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	磨	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
石筥	56	57-7	63-20	ME46	Ⅱ	(4.7)	(3.1)	1.4	(22)	頁岩	Ⅲ
	57	57-8	63-21	ME49		(4.9)	(3.5)	0.9	(17)	頁岩	Ⅲ
	58	57-9	63-22	ME53	Ⅱ-Ⅲ	(5.0)	(3.5)	1.1	(22)	頁岩	Ⅲ
	59	57-10	63-23	MB49	Ⅱ	(4.8)	(3.9)	1.2	(24)	頁岩	Ⅲ
	60	57-11	63-24	MH48	Ⅱ	(4.4)	4.6	1.1	(23)	頁岩	Ⅲ
	61	57-12	63-25	MF51・52	Ⅱ	(3.5)	(3.9)	1.4	(21)	頁岩	Ⅲ
	62	58-1	63-26	MB49	Ⅱ	(5.6)	3.9	1.6	(43)	頁岩	Ⅲ
	63	58-2	63-27	MD52		(5.5)	(4.2)	1.6	(44)	頁岩	Ⅲ
	64	58-3	63-28	ME48	Ⅱ	(6.3)	(3.6)	1.5	(40)	頁岩	Ⅲ
	65	58-4	63-29	MG49	Ⅱ-Ⅲ	(2.8)	3.4	0.9	(12)	頁岩	Ⅲ
	66	58-5	63-30	MB52	落ち込み	(3.4)	3.3	1.0	(15)	頁岩	Ⅲ
	67	58-6	64-1	MF49	Ⅱ-Ⅲ	(3.0)	4.0	1.6	(24)	頁岩	Ⅲ
	68	58-7	64-2	MH47	Ⅱ	(3.3)	4.0	1.2	(15)	頁岩	Ⅲ
	69	58-8	64-3	MG46	Ⅱ-Ⅲ	(2.7)	5.0	1.3	(15)	頁岩	Ⅲ
	70	58-9	64-4	MD48	Ⅱ	(3.2)	5.0	1.3	(23)	頁岩	Ⅲ
	71	59-1	64-5	MG46	Ⅱ-Ⅲ	(4.6)	4.2	1.6	(33)	頁岩	Ⅲ
	72	59-2	64-6	MB47	Ⅱ	(4.7)	3.7	1.7	(28)	頁岩	Ⅲ
	73	59-3	64-7	MC45		(4.2)	3.0	1.1	(23)	頁岩	Ⅲ
	74	59-4	64-8	MB52	落ち込み	(4.5)	4.0	1.0	(22)	頁岩	Ⅲ
	75	59-5	64-9	LH53	Ⅱ	(4.8)	4.0	0.9	(19)	頁岩	Ⅲ
	76	59-6	64-10	MI47	Ⅱ	(4.4)	3.2	1.2	(23)	頁岩	Ⅲ
	77	59-7	64-11	LJ51	Ⅱ	(5.7)	4.5	1.4	(35)	頁岩	Ⅲ
	78	59-8	64-12	ME46	Ⅱ	6.3	3.4	2.0	61	頁岩	Ⅲ
	79	59-9	64-13	MH48		(8.1)	4.2	1.5	(61)	頁岩	Ⅲ
	80	59-10	64-14	LJ50	Ⅱ	(5.1)	4.6	1.8	(51)	頁岩	Ⅲ

石鏃(第60図、図版65)

4点出土した。二等辺三角形を基調とし、基部が凹基である。Z1は面々とも全面にわたって調整され、尖端と基部の一端を欠損する。Z2は縁辺のみに調整が施されているものである。基部が欠損しているためその形態は不明である。Z3は石錐とも考えられる。Z4は背面を全面、主要剝離面は縁辺を調整している。基部の一端を欠損している。石質はいずれも頁岩である。

石槍(第60図、第61図、図版65)

13点出土した。石質はすべて頁岩である。全体的な形態、基部の形態等の違いによって以下のように分類した。

Ⅰ類 槍身が細身であるもの

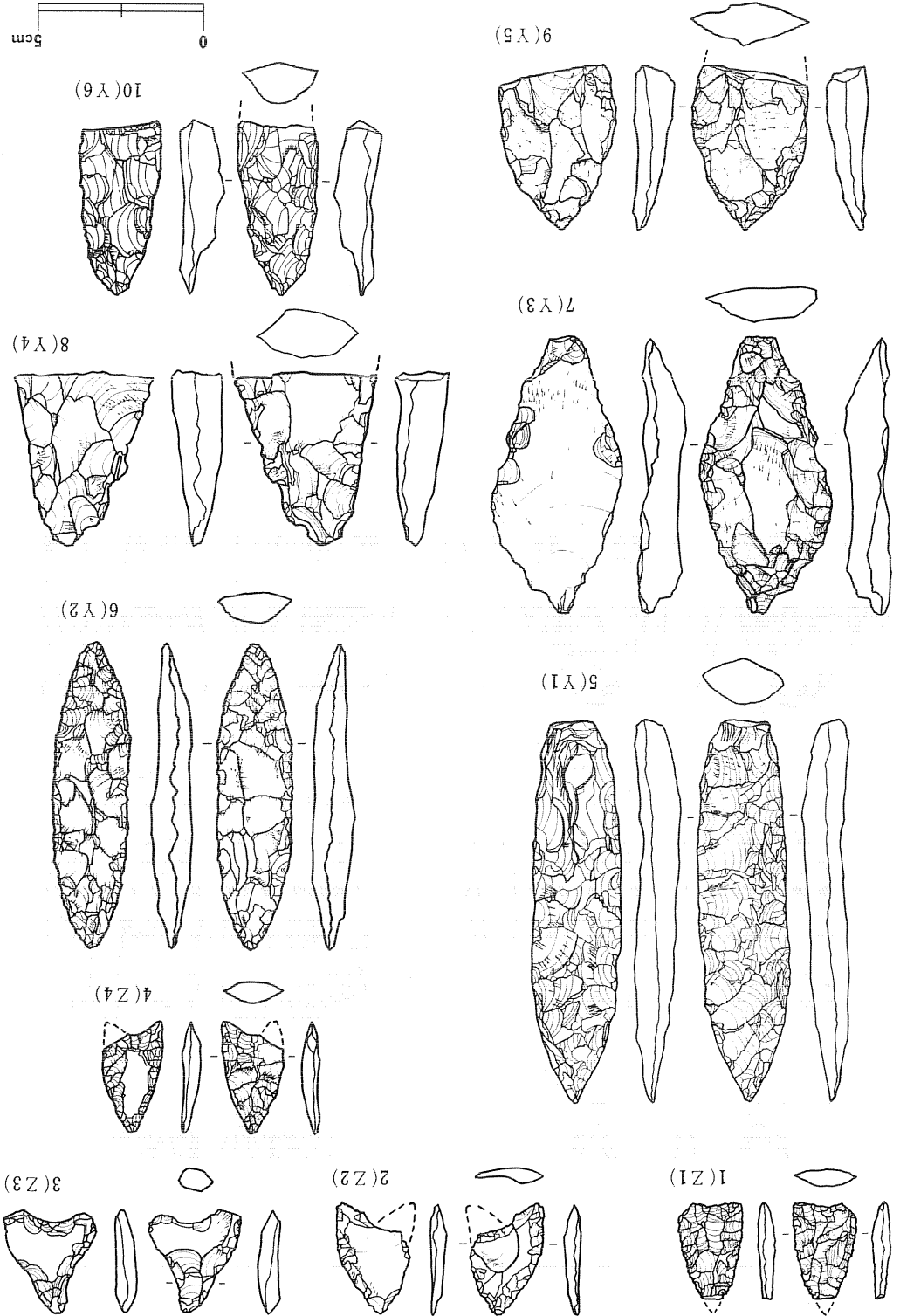
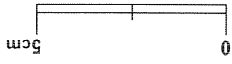
- (基部) a. 平基または丸基であるもの(Y1、Y8~Y11)
 b. 尖基であるもの(Y2、Y7)
 c. 基部を損失しているもの(Y6)

いずれも両面が全面にわたって二次調整されている。Y1の切先を除く両側縁は直線的ではほぼ平行である。基部には自然面が残存する。Y10は先端部を欠損しており全容を知ることはできないが、おそらく、Y1と同様に両側縁はほぼ平行すると思われ、基部には自然面が残存している。これに対して、両端が尖っている石槍側縁は緩やかな弧状をなしている(第60図・第61図)。

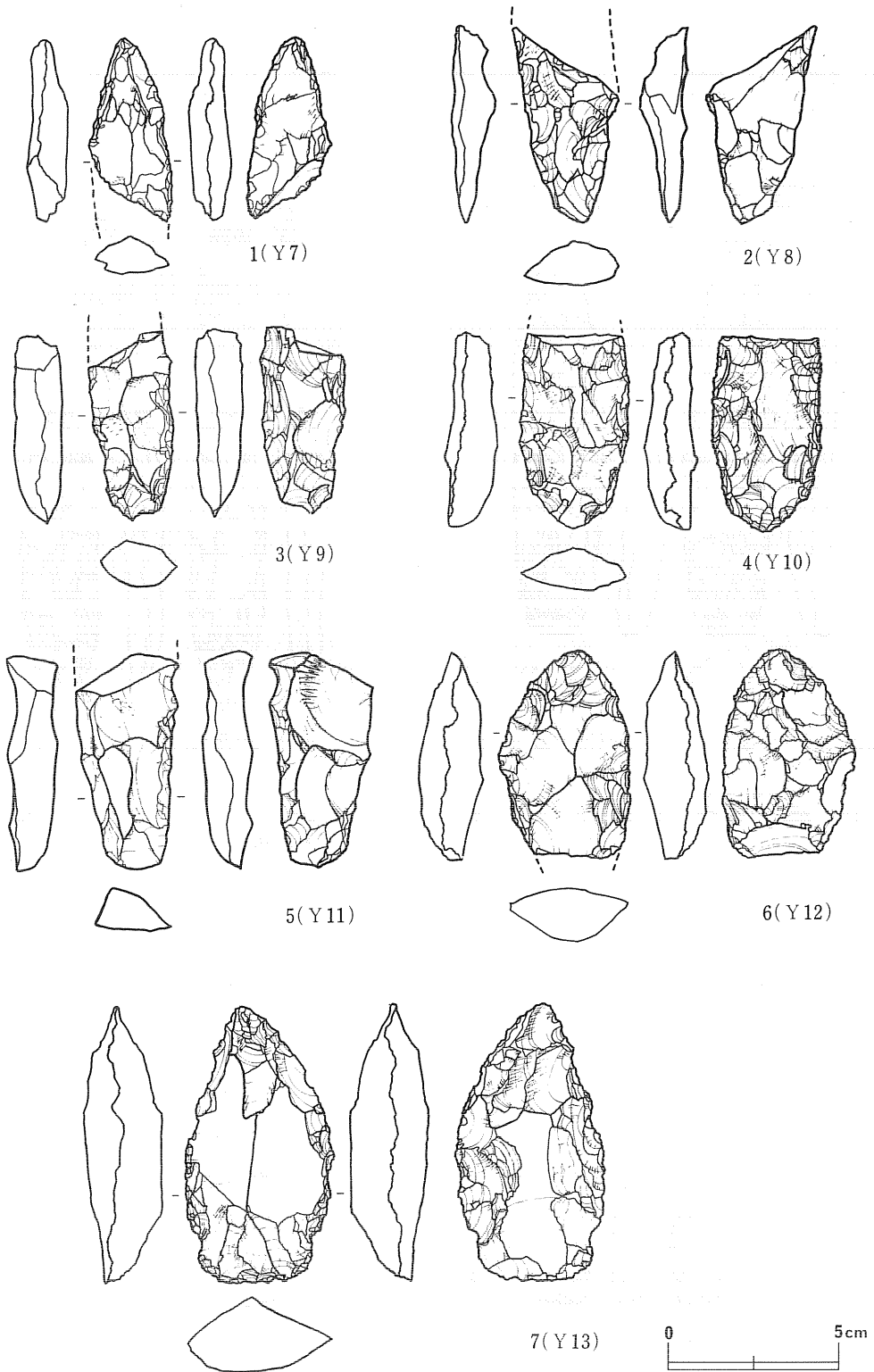
Ⅱ類 槍身の幅が広いもの(Y3~Y5、Y12)

Y3の背面は全面にわたって調整が施されているが、主要剝離面には部分的にしか調整が施されていない。これは形態的には石槍に類似しているが、搔器の部類に入れられる可能性もある。

第60図 遺構外出土の石器(3) 石鏃・石槍



第2節 検出された遺構と遺物



第61図 遺構外出土の石器(14) 石槍

第16表 石鏃・石槍観察表

器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	層	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
石鏃	1	60-1	65-1	MD48	Ⅲ	(3.0)	(1.9)	0.5	(3)	頁岩	
	2	60-2	65-2	MB48	Ⅱ	(3.4)	(2.1)	0.4	(3)	頁岩	
	3	60-3	65-3	MG46		3.1	2.8	0.5	4	頁岩	石鏃
	4	60-4	65-4	MD48		3.5	(1.8)	0.5	(3)	頁岩	
石槍	1	60-5	65-5	MC48		11.2	2.7	1.2	45	頁岩	I a
	2	60-6	65-6	LJ49	Ⅱ	9.3	2.3	1.2	24	頁岩	I b
	3	60-7	65-7	MC48	Ⅱ-Ⅲ	8.4	4.0	1.2	35	頁岩	Ⅱ
	4	60-8	65-8	不明		(5.3)	(3.2)	1.5	(30)	頁岩	Ⅱ
	5	60-9	65-9	L152	Ⅱ	(4.8)	3.5	1.1	(17)	頁岩	Ⅱ
	6	60-10	65-10	表採		(5.2)	2.5	1.1	(15)	頁岩	I c
	7	61-1	65-11	MA49	Ⅱ	(5.4)	2.4	1.0	(11)	頁岩	I b
	8	61-2	65-12	ME49		(5.9)	(3.0)	1.1	(13)	頁岩	I a
	9	61-3	65-13	MJ46	Ⅱ-Ⅲ	(5.5)	2.5	1.3	(19)	頁岩	I a
	10	61-4	65-14	MD47	Ⅱ-Ⅲ	(5.8)	3.2	1.4	(29)	頁岩	I a
	11	61-5	65-15	MB48	I-Ⅱ	(6.3)	(3.2)	1.2	(26)	頁岩	I a
	12	61-6	65-16	MF51		(6.2)	3.9	1.7	(41)	頁岩	Ⅱ
	13	61-7	65-17	MG49	Ⅱ	8.2	4.4	2.2	73	頁岩	Ⅲ

Y4・Y5・Y12は両面とも全面にわたって二次調整されるが、基部はいずれも欠損しており、その形態を知ることはできない(第60図・第61図)。

Ⅲ類 背面に第一次剝離による縦方向の一条の稜を残し、基部付近の両側縁には抉りが入っているもの(Y13)

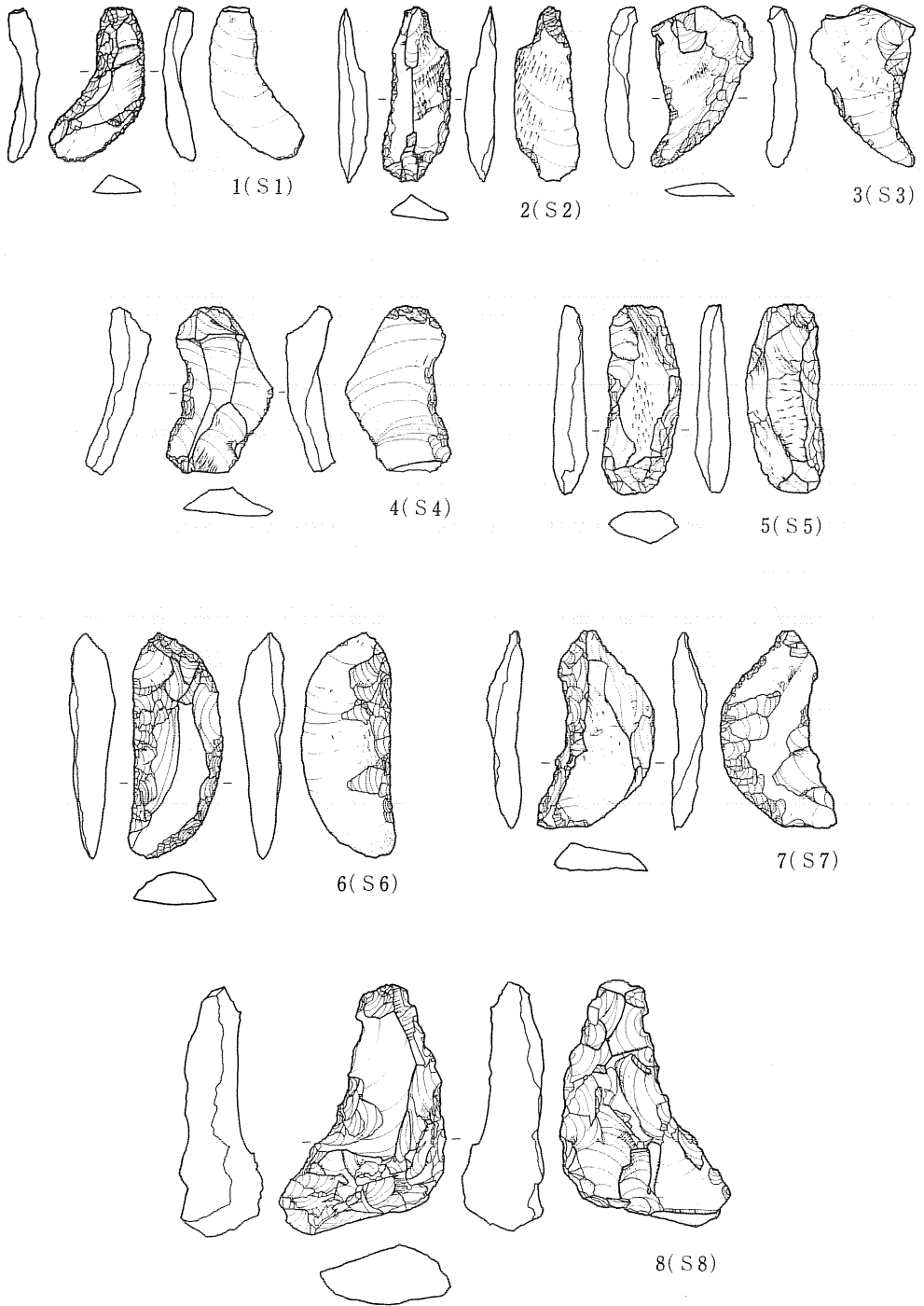
両面から加撃して縁辺に調整を施しているもので、先端は尖らせてある。背面の基部付近は調整によって第一次剝離による縦方向の高い稜を取り去ってあり、基部付近の両側縁の抉りは第一次剝離面からのみ加撃して施されている。しかし、Y13は尖端の作り出しにさほど重点をおいていないという、積極的に石槍であるとは言いがたい面も併せ持っている。基部に対する調整が尖端部よりは丁寧に施されており、これを刃部の作り出しと解した場合、これは石鏃とも考えられる(第61図)。

削器(第62図、図版65)

8点出土した。縦長の剥片に調整を施し、一側縁を弧状、他側縁を内湾ないし直線的に作り出したものである。弧状をなす側縁に対する側縁の形態によって以下のように分類される。

- a. 一方の側縁が内湾するもの(S1、S3、S4、S7、S8)
- b. 一方の側縁が直線的なもの(S2、S5、S6)

S1は主要剝離面からのみ加撃して、縁辺に細かい調整を施している。S2はつまみ様のものが作り出されていることより、石匙とも考えられる。背面には第一次剝離による縦方向の稜が残存し、縁辺は主要剝離面からの加撃によって細かい調整が施されている。S3の内湾する側縁は主に背面から加撃調整され、弧状をなす側縁は主に主要剝離面から加撃調整されている。S4は内湾する側縁に二次剝離が集中するものである。調整剝離はおそらく背面からのみ加撃して行ったと考えられ、背面に見られる剝離痕は使用によってできたものと解したい。S5は縁



0 5cm

第62図 遺構外出土の石器(15) 削器

辺のみに調整を施している。S 6の直線的な側縁は両面から加撃調整され、弧状をなす側縁は主要剥離面からのみ加撃調整されている。背面には自然面が広く残存している。S 7の内湾する側縁には両面からの加撃調整の後、主要剥離面からの加撃による細かい調整が施されている。弧状をなす側縁には背面からのみの加撃によって、細かい調整が施されている。S 8は大形の剥片を利用したものである。内湾する側縁には使用によると思われる刃毀れが見られる。なお石質はいずれも頁岩である。

搔器（第63図～第65図、図版68）

22点出土した。不定形の剥片に調整剥離を施して、縁辺に刃部を作り出している。石質はC 3の黒曜石を除いてすべて頁岩である。以下、4類に分類してみた。

I類 調整剥離によって一端が尖り気味のもの（C 1、C 2、C 15～C 17、C 19～C 21）

C 1とC 20は表面に第一次剥離による縦方向の稜を残している。C 1は両側縁に調整が施されているが、C 20は一側縁のみに施されている。C 15は両側縁の尖端付近に特に細かい調整が施され、また基部は直線的に調整されている。C 16は縁辺にあまり調整が施されていないが、尖頭器状に仕上げている。C 17は両側縁に細かい調整を施し、背面・基部に自然面をとどめており、C 19は一側縁を全て、他側縁を尖端から途中まで調整している。C 21は両側縁を調整している。

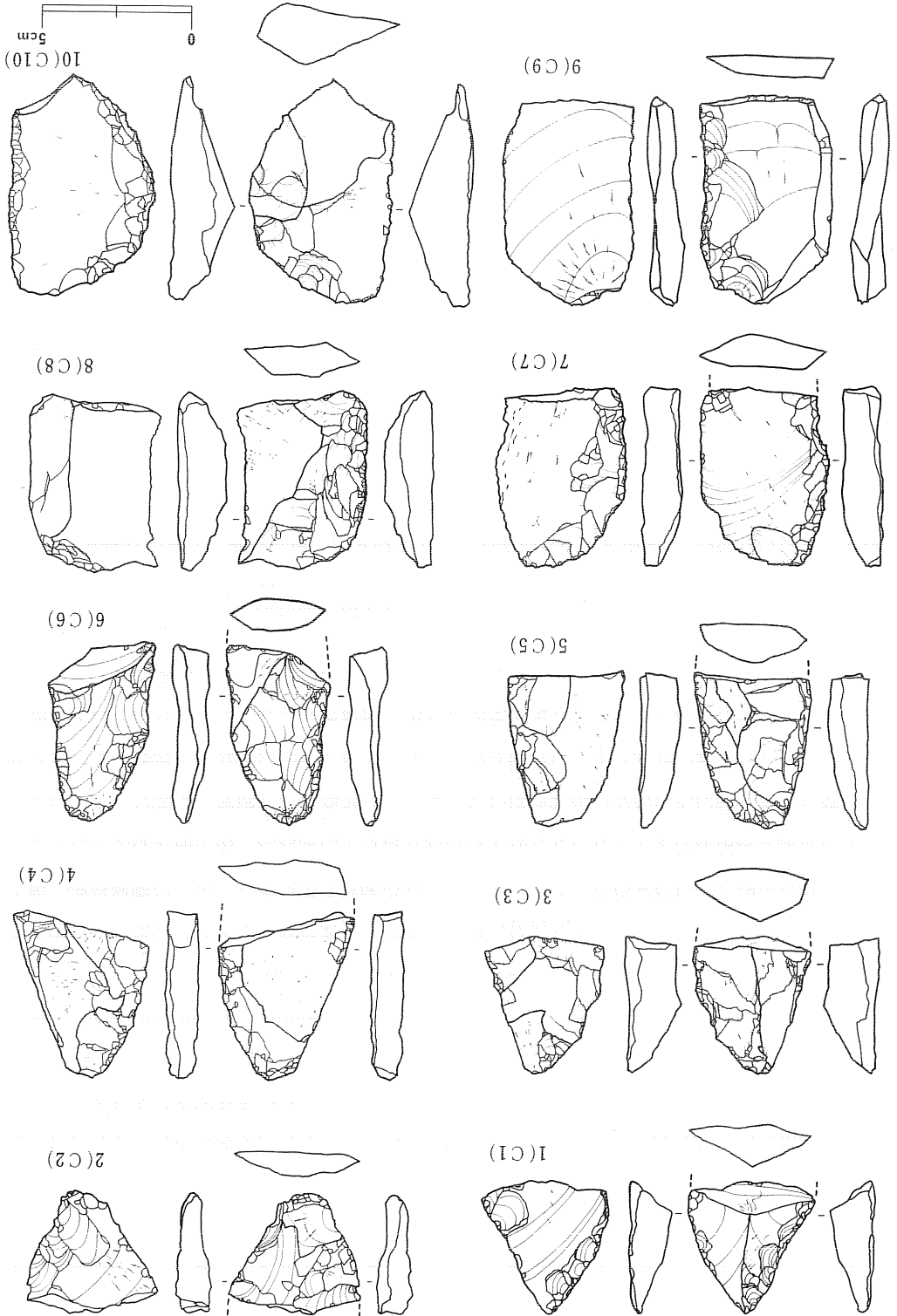
II類 調整剥離によって一端が丸味のもの（C 3～C 8、C 10、C 11、C 13、C 18、C 22）

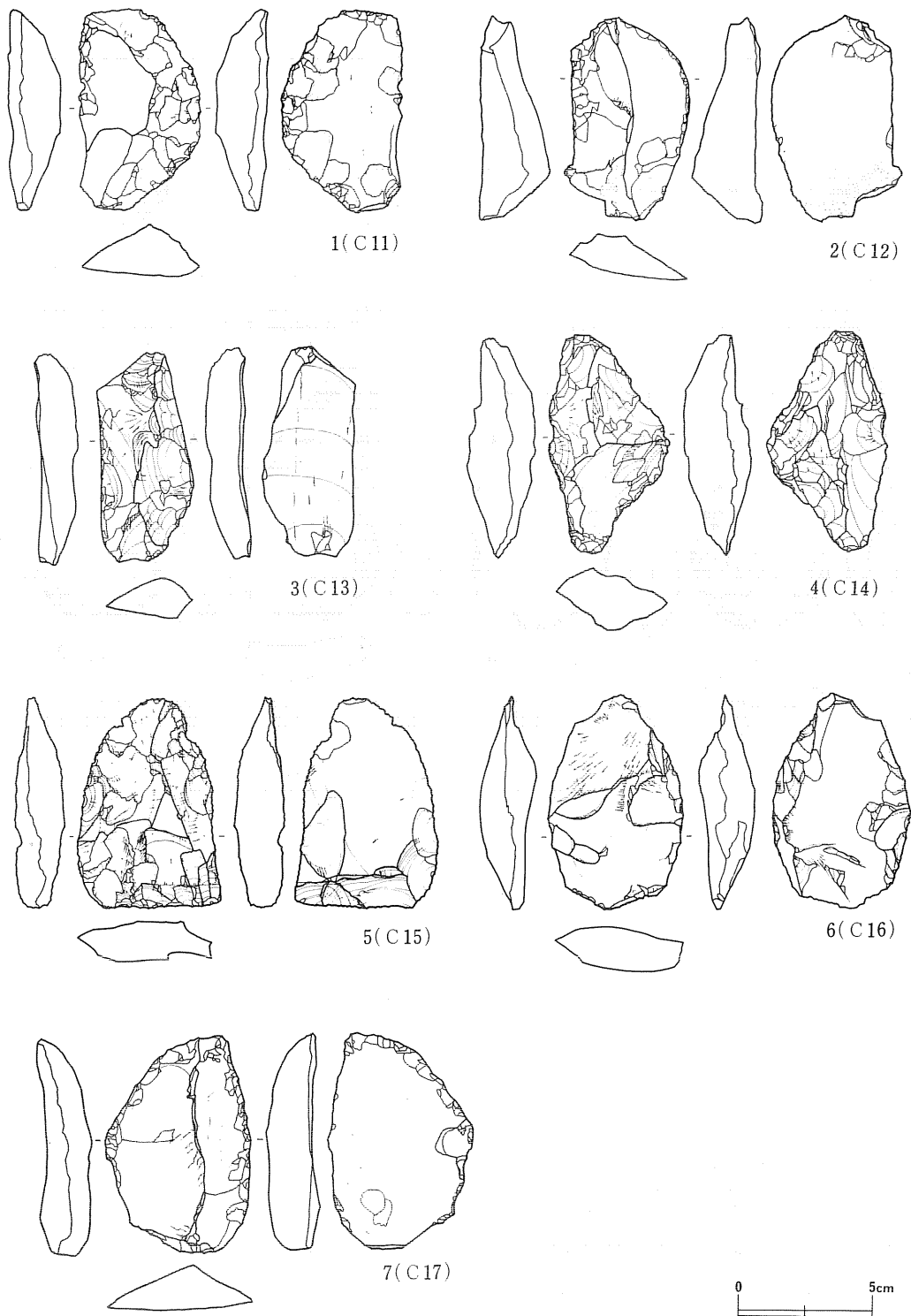
C 3は黒曜石の剥片に調整を施したものである。石槍の半欠品とも考えられる。C 4は一側縁のみに両面から加撃調整を施している。C 5は一側縁を両面から、他側縁を主要剥離面からそれぞれ加撃調整したものである。C 6はおそらく一側縁が直線的になるものであろう。削器の半欠品とも考えられる。C 7の一側縁は背面から、他側縁は主要剥離面からそれぞれ加撃調整したものである。つまり、一面には一方の側縁にしか剥離が存在しない。C 8の一側縁は剥片を打ち出した段階で鋭くなっており、調整は他側縁のみに施されている。C 10の一側縁は背面から加撃され直線的に作り出されている。C 11は半月状を呈するもので、弧状の側縁は全て調整が施されているが、直線的な側縁は先端部から中央部までに限られている。C 13は主要剥離面

第17表 削器観察表

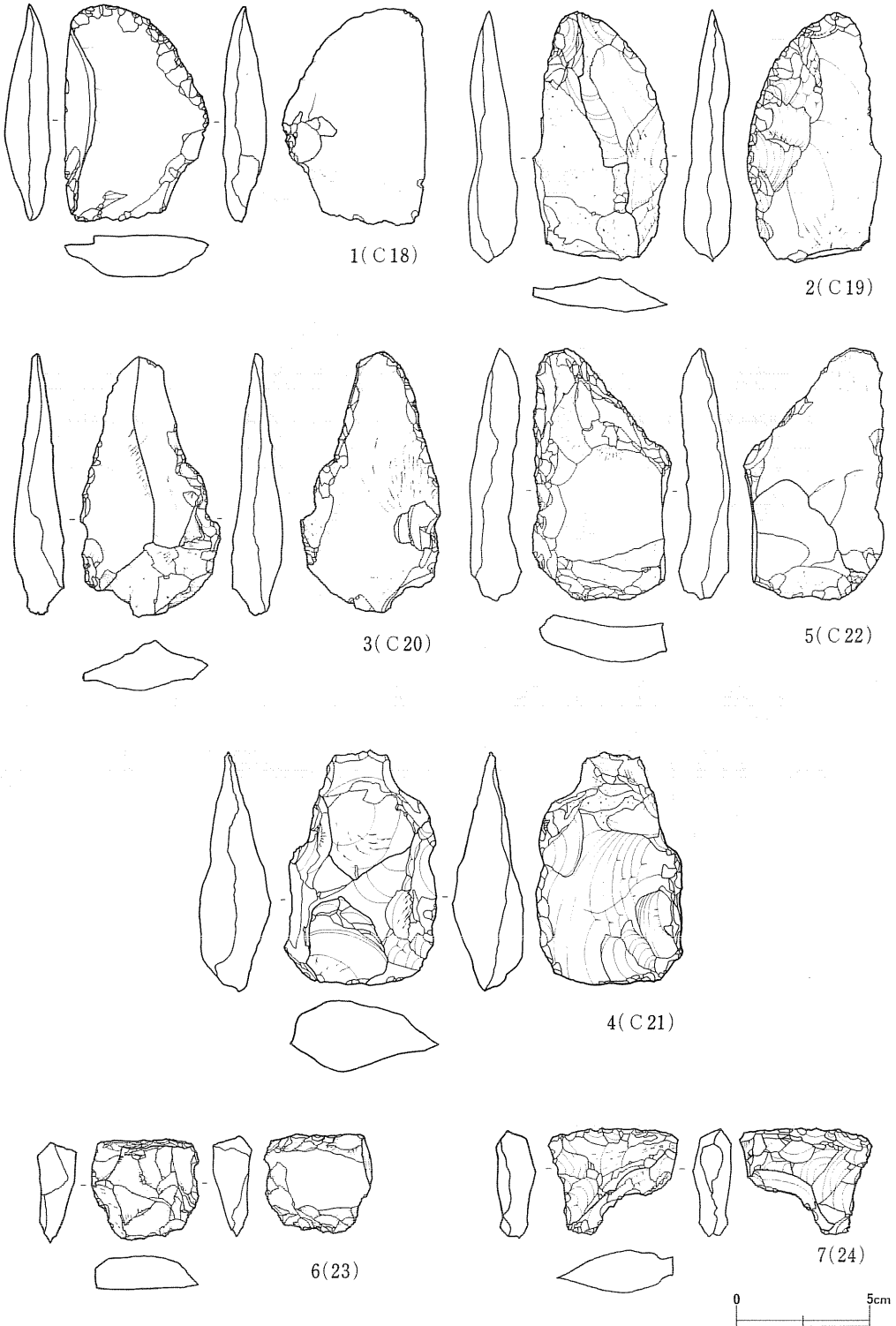
器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	層	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
削器 1	62-1	109-18	L H 49	II	5.9	2.2	0.6	12	頁岩	a	
2	62-2	109-19	M E 49		6.7	2.3	1.1	13	頁岩	b	
3	62-3	109-20	M F 51・52	II	6.2	3.8	0.6	17	頁岩	a	
4	62-4	109-21	M J 45	II	6.4	3.5	1.4	31	頁岩	a	
5	62-5	109-22	M H 46	II	7.2	2.8	1.4	28	頁岩	b	
6	62-6	109-23	M E 54	II	8.7	3.4	1.8	46	頁岩	b	
7	62-7	109-24	L J 48	II	7.5	3.4	1.1	30	頁岩	a	
8	62-8	109-25	M J 45	II～III	9.6	4.5	2.7	122	頁岩	a	

第63図 遺跡外出土の石器(6) 撿器





第64図 遺構外出土の石器(17) 搔器



第65図 遺構外出土の石器(10) 搔器、その他の石器

からのみ加撃調整したものである。C18の一側縁はヒンジフラクチャーをなし、他側縁は主要剥離面からの加撃によって調整されている。C22は大形の剥片の縁辺に調整を施している。背面には自然面をとどめ、縁辺には剥片をとりだす際の打点が残存している。

Ⅲ類 両端に調整剥離が施されておらず、平坦なもの（C9、C12）

C9の一側縁は剥片を取り出した段階で鋭くなっており、他側縁のみに調整が施されている。調整は、主要剥離面からのみ加撃して施してある。一端は折ってできた面である。C12の一端は自然面をとどめ、他端は剥片をとりだした際の打面である。両側縁には主要剥離面からのみ加撃して調整を施している。

Ⅳ類 「ト」の字のもの（C14）

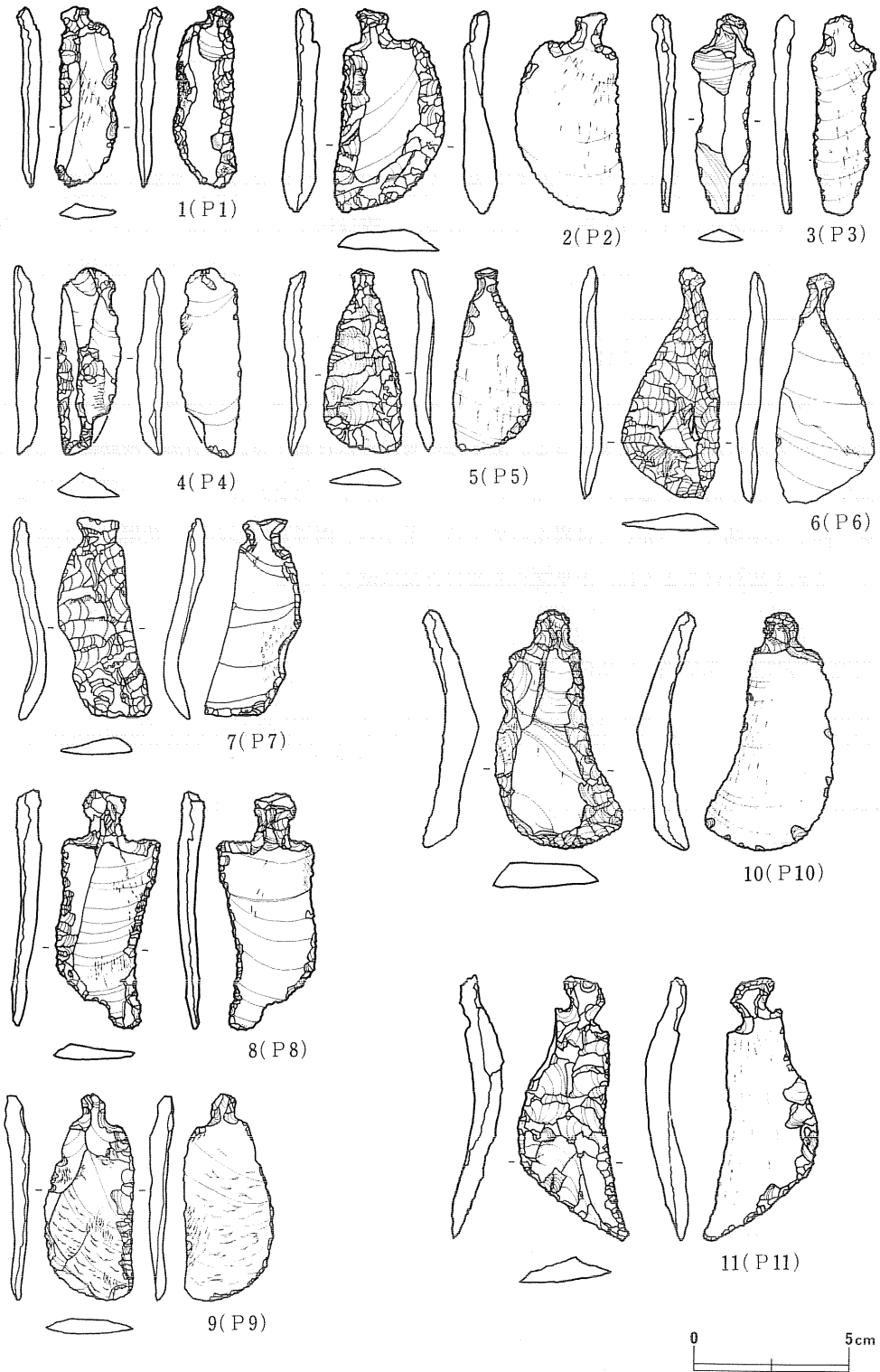
全面に調整が施され、「ト」の字状を呈している。自然面が残存している面を背面とし、この石器を「ト」の字に置いて特徴をみると、上半部の両側縁は背面から、下半部の両側縁は主要剥離面から主に加撃調整が施され、両端には両面からの調整が施されている。この石器は側縁の調整方向が上半部と下半部とは異なっていることから、両端を中心にした使用方法が考えられる。それを裏付けるように、上半部の先端付近は摩滅している。

石匙（第66図、第67図、図版67）

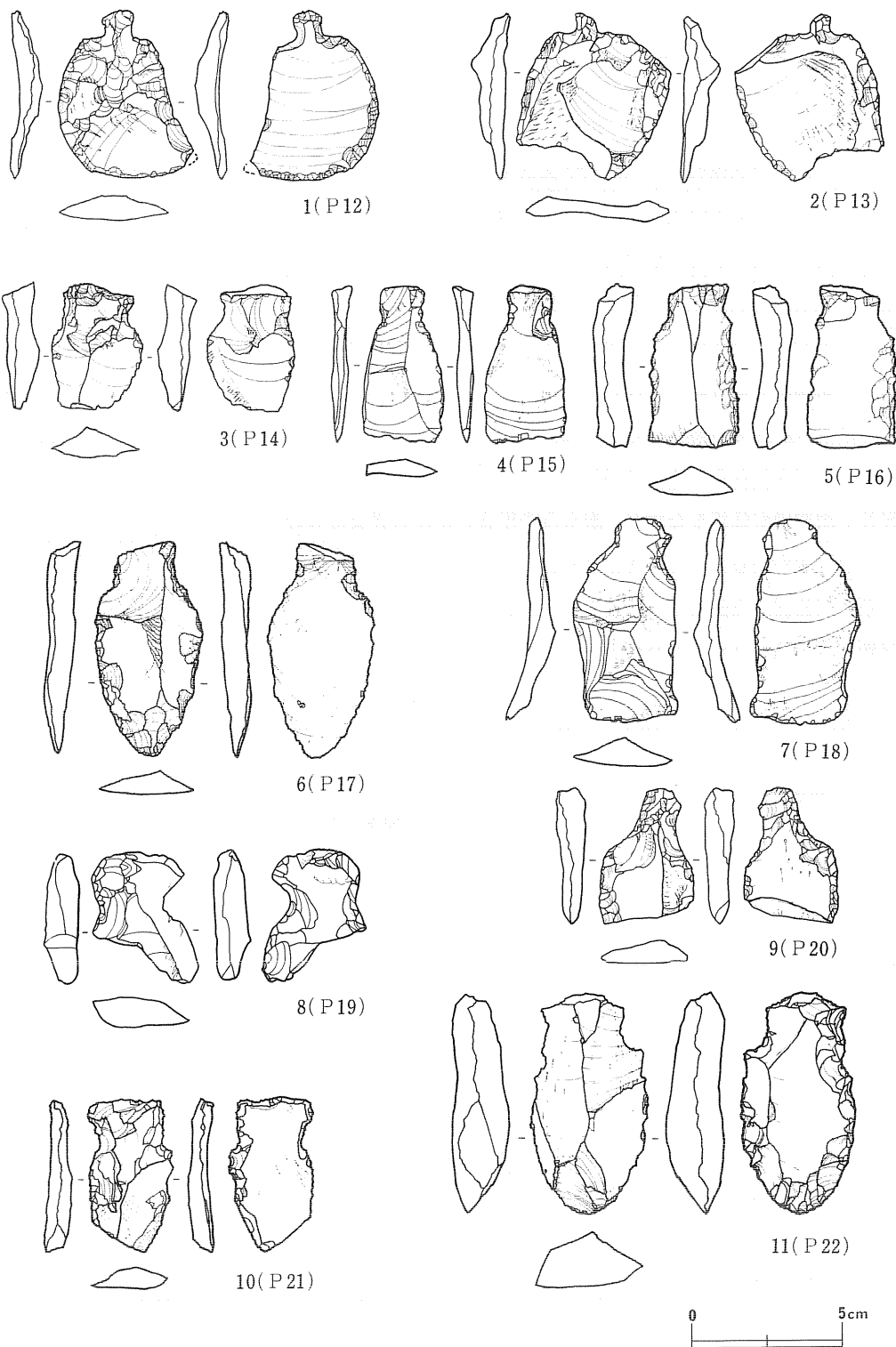
22点出土した。すべて縦型の石匙であり、側縁と先端の形状により分類した。なお、P2、P8、P13のつまみ部にはアスファルトと思われる付着物がある。石質は頁岩が主体的だが、瑪瑙のもの（P16）もある。

第18表 搔器観察表

器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	柄	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
スクレーパー	1	63-1	68-1	ME52	Ⅱ	(4.5)	(4.2)	1.3	(15)	頁岩	I
	2	63-2	68-2	MD52	Ⅱ	(4.6)	(4.0)	1.7	(28)	頁岩	I
	3	63-3	68-3	MH45	表採	(4.1)	(4.5)	0.9	14	黒輝石	Ⅱ
	4	63-4	68-4	MG48	Ⅱ	(5.7)	(4.6)	1.0	(26)	頁岩	Ⅱ
	5	63-5	68-5	MG46	Ⅱ~Ⅲ	(5.2)	(3.9)	1.3	(29)	頁岩	Ⅱ
	6	63-6	68-6	確認トレン		(6.0)	(3.6)	1.0	(22)	頁岩	Ⅱ
	7	63-7	68-7	表採		(6.1)	4.4	1.2	(39)	頁岩	Ⅱ
	8	63-8	68-8	MJ48	Ⅱ	(6.0)	4.4	1.6	(40)	頁岩	Ⅱ
	9	63-9	68-9	MF51		7.0	4.4	0.7	33	頁岩	Ⅲ
	10	63-10	68-10	MF49	Ⅱ	7.5	4.8	1.7	53	頁岩	Ⅱ
	11	64-1	68-11	ME52	Ⅱ	7.5	4.5	1.8	61	頁岩	Ⅱ
	12	64-2	68-12	MD47	Ⅱ	7.6	4.7	1.5	55	頁岩	Ⅲ
	13	64-3	68-13	ME54	Ⅱ	7.9	3.6	1.3	42	頁岩	Ⅱ
	14	64-4	68-14	MC51	Ⅱ	8.2	4.5	2.3	56	頁岩	Ⅳ
	15	64-5	68-15	JH46	Ⅱ	7.9	5.4	1.7	72	頁岩	I
	16	64-6	68-16	MH48	Ⅱ	8.1	5.1	1.8	74	頁岩	I
	17	64-7	68-17	LJ45	Ⅱ	8.1	5.6	1.9	73	頁岩	I
	18	65-1	68-18	不明		8.1	5.4	1.6	60	頁岩	Ⅱ
	19	64-2	68-19	MC49		9.4	5.1	1.7	65	頁岩	I
	20	64-3	68-20	MG46	Ⅱ~Ⅲ	9.8	5.2	1.9	59	頁岩	I
	21	64-4	68-21	EM54	Ⅱ	9.4	5.2	1.6	78	頁岩	I
	22	64-5	68-22	MD52	Ⅱ	8.8	5.7	2.6	105	頁岩	Ⅱ



第66図 遺構外出土の石器(19) 石匙



第67図 遺構外出土の石器(20) 石匙

I類 一側縁が内弯し、他側縁が弧状をなすもの

- a. 先端が尖るもの (P11、P12)
- b. 先端が丸味をもつもの (P1、P8、P10)
- c. 先端が平坦なもの (P7)

II類 一側縁が直線的で、他側縁が弧状をなすもの

- a. 先端が尖るもの (P2、P4、P14)
- b. 先端が丸味をもつもの (P9)
- c. 先端が平坦なもの (P15、P18)

III類 両側縁が弧状をなし、膨らみが左右対称となるもの

- a. 先端が尖るもの (P17)
- b. 先端が丸味のあるもの (P22)
- c. 先端が抉れるもの (P13)

IV類 両側縁が弧状をなすが、膨らみの度合いが左右異なるもの

- a. 先端が尖るもの (P5、P6)

V類 両側縁が直線的なもの (P3、P16)

VI類 半欠品 (P19~P21)

第19表 石匙観察表

器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	層	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
石匙 1	66-1	111-1	MD48	II	5.9	1.8	0.6	6	頁岩	I b	
2	66-2	111-2	MD48	II	6.6	3.5	0.7	16	頁岩	II a	つまみにアスファルト
3	66-3	111-3	MD50	II	6.5	2.0	0.5	6	頁岩	V	
4	66-4	111-4	LF56	II	6.1	2.1	0.8	9	頁岩	II a	
5	66-5	111-5	ME48	III	5.9	2.5	0.5	8	頁岩	IV	
6	66-6	111-6	確認トレン		7.5	3.2	0.7	13	頁岩	IV	
7	66-7	111-7	ME47	II	6.5	3.0	0.5	11	頁岩	I c	
8	66-8	111-8	MJ45	II-III	7.7	3.3	0.7	12	頁岩	I b	つまみにアスファルト
9	66-9	111-9	MB54	II	6.7	2.9	0.6	12	頁岩	II b	
10	66-10	111-10	LI48	II	6.8	4.1	1.1	29	頁岩	I b	
11	66-11	111-11	表採		8.6	3.6	0.8	18	頁岩	I a	
12	67-1	111-12	MH46	II	5.5	4.6	0.7	14	頁岩	I a	
13	67-2	111-13	NA45	II	4.9	4.6	1.0	16	頁岩	III c	つまみにアスファルト
14	67-3	111-14	MH50	II	(4.1)	3.0	1.0	(12)	頁岩	II a	
15	67-4	111-15	MF42	II-III	5.2	2.7	0.6	7	頁岩	II b	
16	67-5	111-16	MG49	II	(5.4)	3.0	1.1	(22)	瑪瑙	V	
17	67-6	111-17	MC46	S ₄ X ₂ R ₇ 5 ⁴	7.1	3.6	0.8	18	頁岩	III a	
18	67-7	111-18	MD47	II-III	6.8	3.5	0.9	13	頁岩	II a	
19	67-8	111-19	MH48	II	(4.3)	(3.5)	1.0	(14)	頁岩	IV	
20	67-9	111-20	確認トレン		(4.5)	3.2	0.8	(12)	頁岩	IV	
21	67-10	111-21	表採		(5.1)	2.8	0.6	(11)	頁岩	IV	
22	67-11	111-22	MG48	II	7.3	3.9	1.8	47	頁岩	III b	

石錐（第68図、第69図、図版66）

21点出土した。不定形の剥片の一端に調整剥離を施して錐部を作り出したものが大半を占める。形態により以下のように分類した。石質はすべて頁岩である。

I類 逆三角形のもの（D5～D7、D11、D17、D18、D20、D21）

D5・D6・D20は片面からのみ加撃して錐部を作り出したもので、そのうちD5・D6の尖端は使用によって摩滅している。D7・D11・D17・D18・D21の錐部は両面から加撃して作り出したもので、尖端の摩滅はD7・D17に見られる。

II類 細長いもの（D4、D12）

D4は片面からのみ加撃調整して錐部を作り出したものである。尖端には使用による摩滅が見られる。D12は両面から加撃して錐部を作り出したもので、尖端は摩滅している。

III類 不定形のもの（D1～D3、D8～D10、D13～D16、D19）

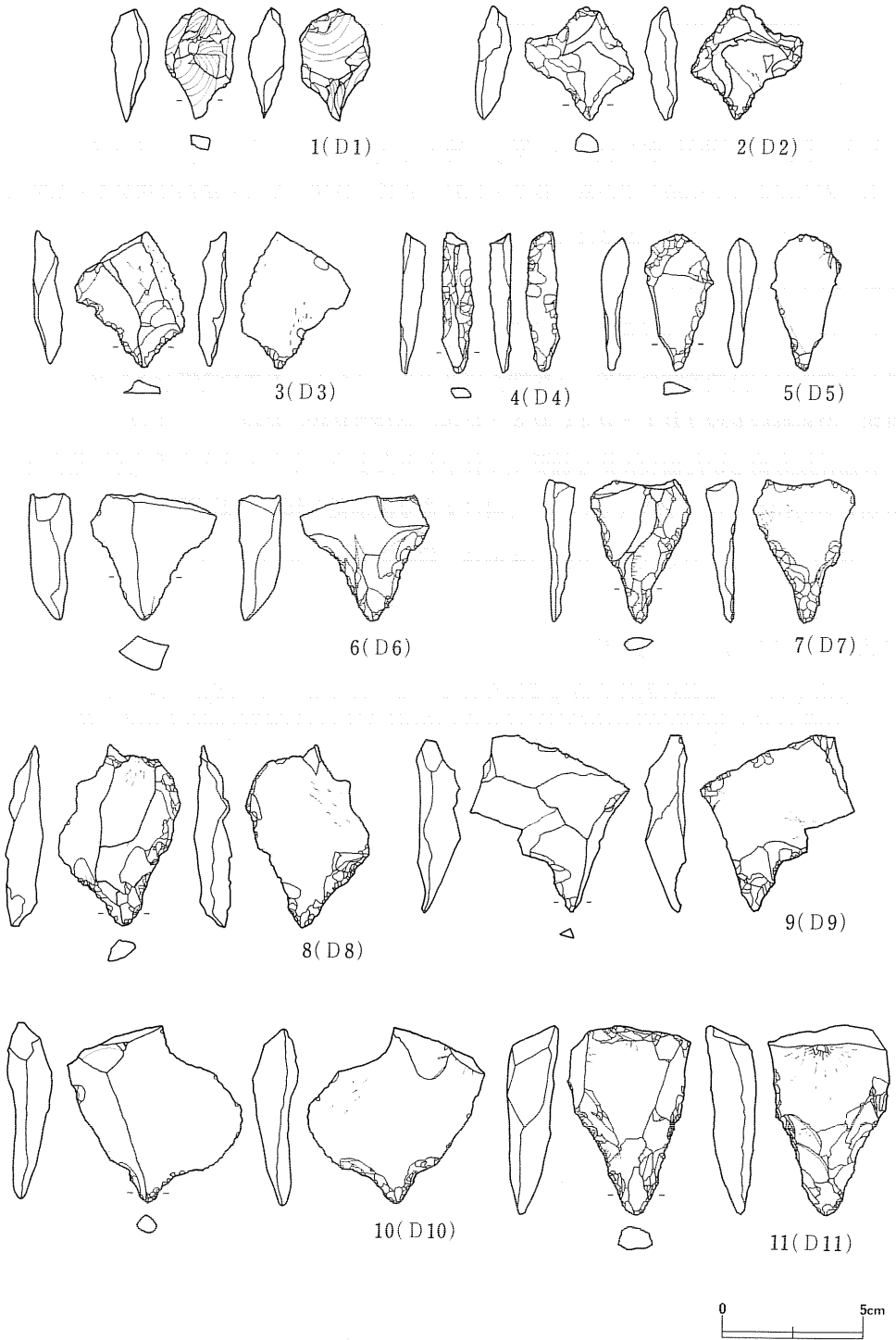
錐部の作り出しが片面のみから加撃して行なわれたものはD1・D3・D14で、他はすべて両面からの加撃で作出されている。使用による摩滅が見られるのは、D2・D3・D10・D13～D15である。なお、D2とD14の錐部は二箇所あるものと思われる。

楔状石器（第65図-6、図版67）

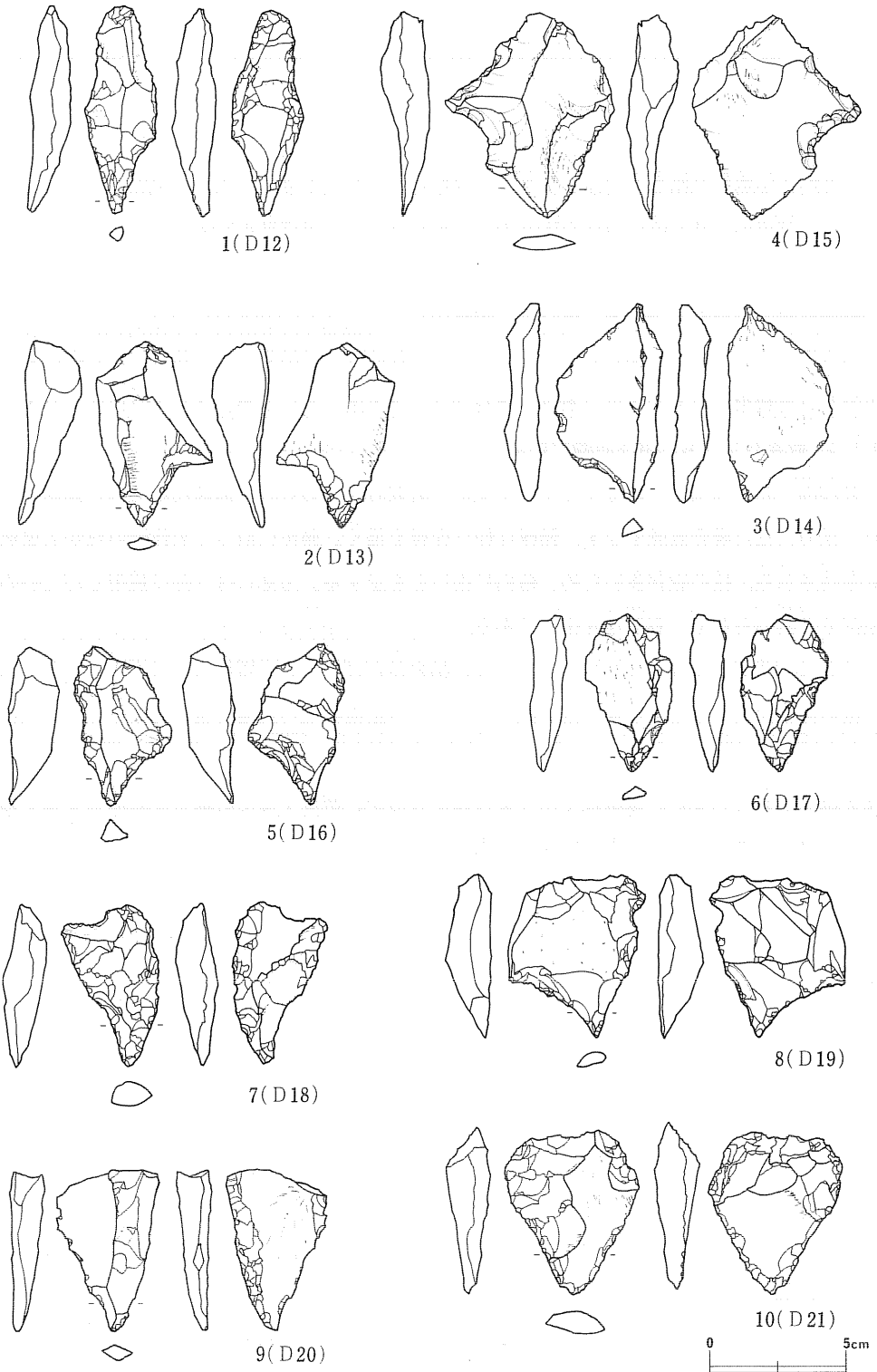
1点出土した。横長の剥片を折って作られている。打ち込み面は使用により潰れて平坦になっている。刃部は数箇所まで刃こぼれをおこし、凸凹である。石質は頁岩である。

第20表 石錐観察表

器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	層	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考	
石錐	1	68-1	66-1	ME49	II	4.0	2.5	1.1	10	頁岩	III	
	2	68-2	66-2	MC48	III	4.1	3.9	1.1	10	頁岩	III	錐部が2箇所
	3	68-3	66-3	MF51	II	4.8	3.9	0.8	12	頁岩	III	
	4	68-4	66-4	確認トレンチ		5.0	1.1	0.8	6	頁岩	II	
	5	68-5	66-5	MC47	II～III	4.9	2.5	0.9	7	頁岩	I	
	6	68-6	66-6	MH49	II～III	4.5	4.6	1.4	19	頁岩	I	
	7	68-7	66-7	ME49	II	5.1	3.6	0.7	11	頁岩	I	
	8	68-8	66-8	MF52	II～III	6.5	4.3	1.0	21	頁岩	III	
	9	68-9	66-9	MG48	II	6.3	5.7	1.3	26	頁岩	III	
	10	68-10	66-10	MD49	II	6.3	6.3	1.55	35	頁岩	III	
	11	68-11	66-11	MF49	II	6.7	4.4	1.4	42	頁岩	I	
	12	69-1	66-12	MC48		7.6	2.6	1.4	21	頁岩	II	
	13	69-2	66-13	MG49	II	6.7	4.3	2.0	34	頁岩	III	
	14	69-3	66-14	MH47	II～III	7.2	3.9	1.1	24	頁岩	III	錐部が2箇所
	15	69-4	66-15	ME46	II	6.2	7.5	1.5	41	頁岩	III	
	16	69-5	66-16	不明		5.8	3.5	1.6	25	頁岩	III	
	17	69-6	66-17	MD48	II	5.8	3.2	1.3	19	頁岩	I	
	18	69-7	66-18	不明		5.9	3.6	1.3	22	頁岩	I	
	19	69-8	66-19	MG48	II	5.9	5.0	1.4	36	頁岩	III	
	20	69-9	66-20	L154	II	5.9	3.8	1.0	19	頁岩	I	
	21	69-10	66-21	MG48	II	6.0	4.9	1.6	33	頁岩	I	



第68図 遺構外出土の石器(2) 石錐



第69図 遺構外出土の石器(22) 石錐

第21表 楔状石器・その他の石器観察表

器種・番号	挿図番号	写真図版	出土地点	層	最大長 (cm)	刃部幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
楔状石器	1	65-6	67-23	ME48	II	3.8	4.1	1.3	24	頁岩	
その他の石器	2	65-7	67-24	MG48	II	4.0	4.9	1.3	23	頁岩	

その他の剥片石器 (第65図-7、図版67)

形態的には横型石匙と類似しているが、積極的にそれとすることができないので、ここに分類した。縁辺には部分的に刃部の作り出しが見られる。石質は頁岩である。

磨製石斧、礫石斧 (第70図、第71図、図版70)

14点出土している。磨製石斧は完形品2点、刃部の残る折損品1点、基部の残る折損品8点、折損品を再利用したもの1点である。礫石斧は3点出土しているが、うち1点はアンピル・ストーン(敲き石)ともし得る石器である。

第70図-F1は基部の幾分小さくなる撥形の磨製石斧である。刃部は比較的強い弧状に作られ、正面に見た場合直線をなす。側縁は緩い曲線を描く。側縁に沿って製作時の稜が表裏面に9条残される。稜の数が多いため、断面は楕円形を呈する。刃部には一部に使用したための欠損部分が認められる。石質は安山岩である。

F2は、基部が直線をなし、刃部と基部の幅の差がごく小さい短冊形を呈する。刃部は側縁に近い両端が緩い弧となる他は直線的になり、かつ正面に置いた場合緩く弯曲する。基部は表裏両面、両側面にスリットを入れた後折断したもので、その後折断面を平滑に調整するような作業は施されていない。側縁近くに8条の稜が残るが、密接するため扁平な断面形を呈する。刃部が僅かに破損する。石質は安山岩である。

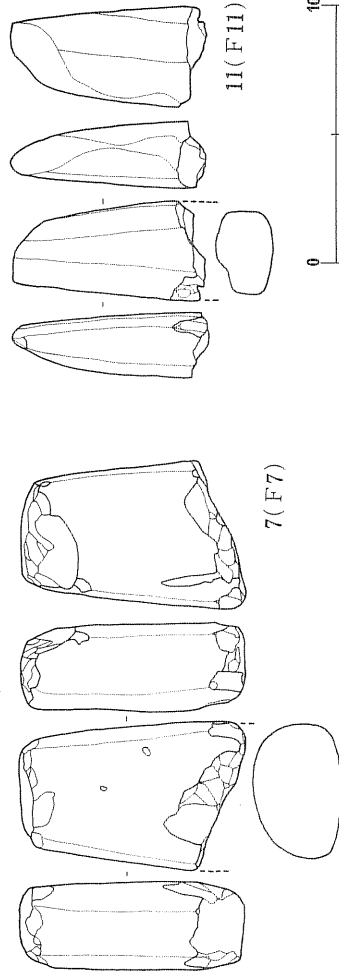
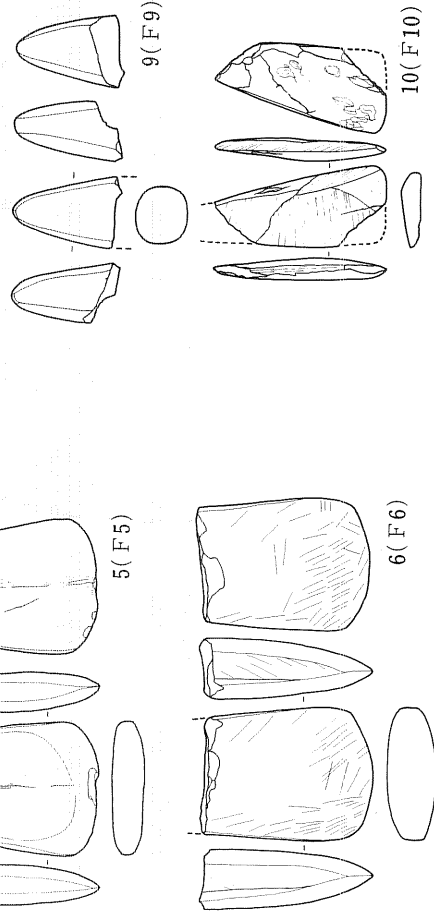
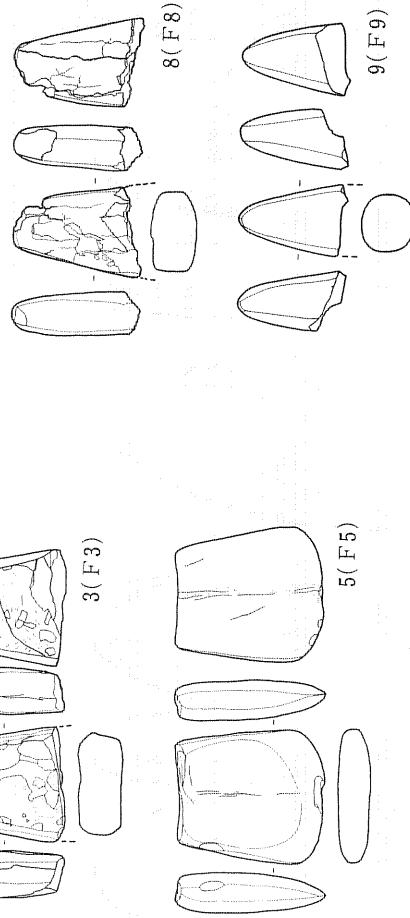
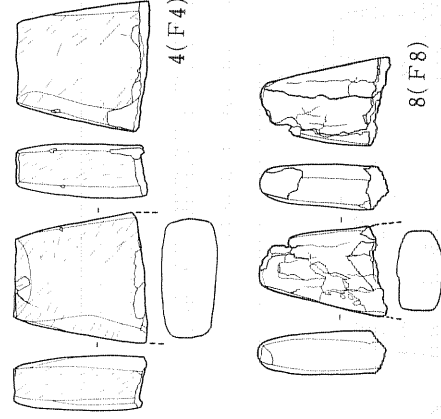
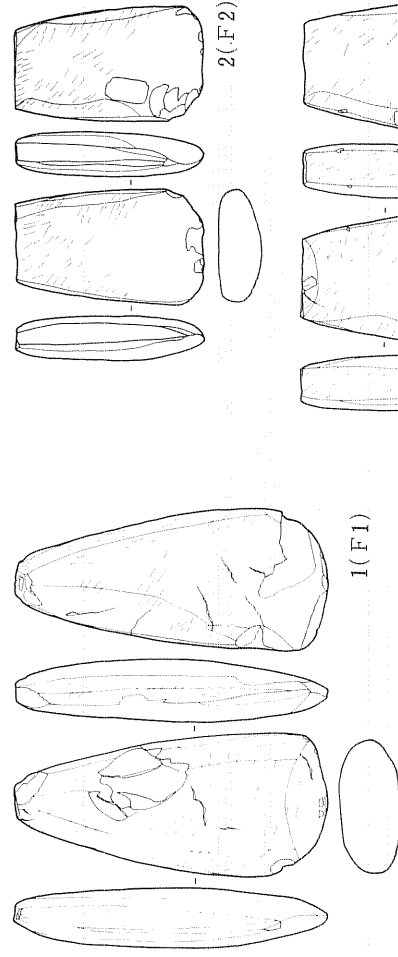
F3、F4は2と同様、基部に折断面の残る折損品である。両者とも稜が側縁に密接し、断面は長方形を呈する。また平面的には縦長の台形に復原される。石質は安山岩である。

F5は折損して残った刃部側の部分を石錘として再利用したものである。石斧としての本来の形状はF2に近い形のもので推定される。石錘に再利用するにあたっては刃部の中央を小さく打ち欠き、中軸線に沿った表裏面に頁岩などの剥片を用いて、浅い一条ずつの溝を切っている。実際に使用されたため、刃部や折損部分は摩滅して丸味を帯びている。石質は安山岩である。

F6は刃部の残る折損品である。刃部は比較的強い弧状を呈し、正面に置いた場合に直線的となる。F1に似た平面形を呈すると推定される。石質は安山岩である。

F7は基部側の折損品であるが、折損した部分を再加工しようとしたものか、敲打痕が残される。断面は半円状に厚く、大形の石斧であったことがうかがわれる。石質は安山岩である。

F8、F9、F11も小さく尖る基部側の折損部である。F8 琉紋岩、F9 安山岩、F11 硅岩を用いる。F11には鎬がある。F10は小形の扁平な石斧で、刃部の片側を折損する。片岩を用いている。



7(F7)



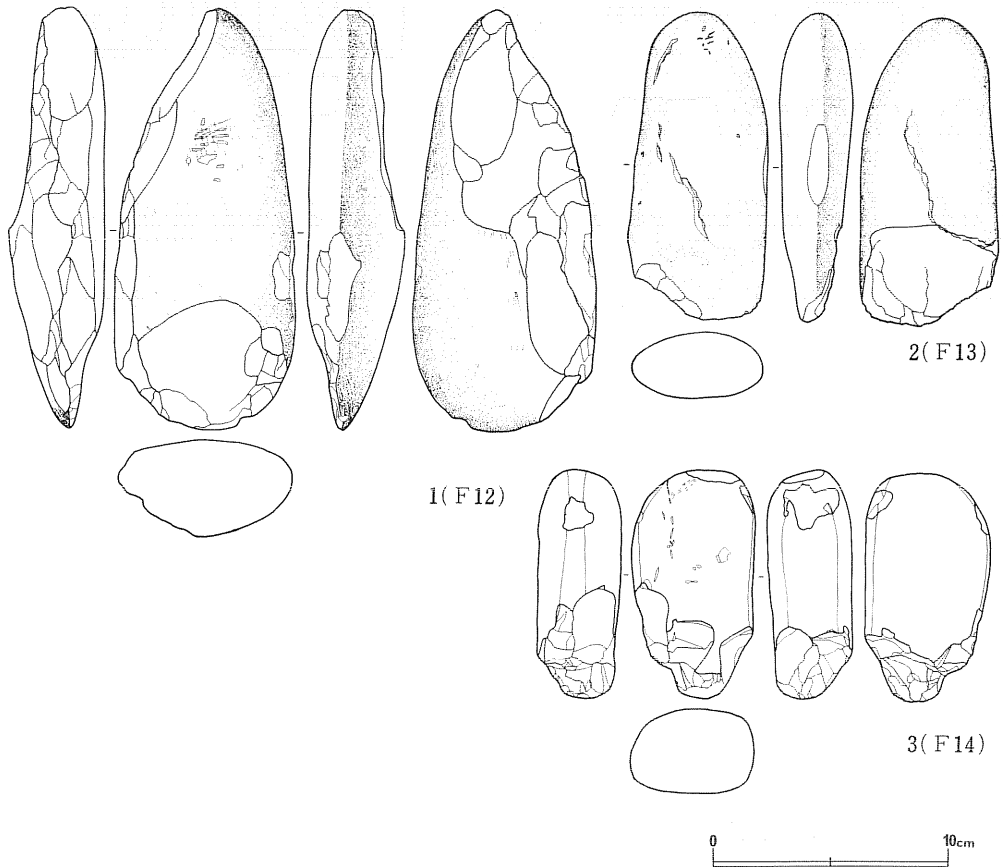
第70図 遺構外出土の石器(23) 石斧

第71図-F12は、やや扁平な楕円礫を利用して作られた礫石斧である。原礫の一侧縁からの加撃によって片面を大きく取り除き、全体を薄くした上で、基部はさらに側面からの加撃によって小さく尖るものに仕上げている。刃部は原礫長軸端から片面を大きく打ち欠いて作るが、原礫の曲線をそのまま残して刃縁としている。

F13も扁平な楕円礫を用いて、長軸一端に刃部を設けた礫石斧である。刃部は原礫の片面を打ち欠いた後、さらに片側を逆方向に小さく打ち欠いている。基部側には加工が施されていない。

F12、F13とも安山岩質の原礫が用いられている。

F14はやや厚手の楕円礫を用いて、その一方の長軸端中央を打面として何回か加撃し、使用部分を作り出している。敲打痕はこの使用部分を作り出すときの打面に残されている。石材は安山岩質のものを利用している。

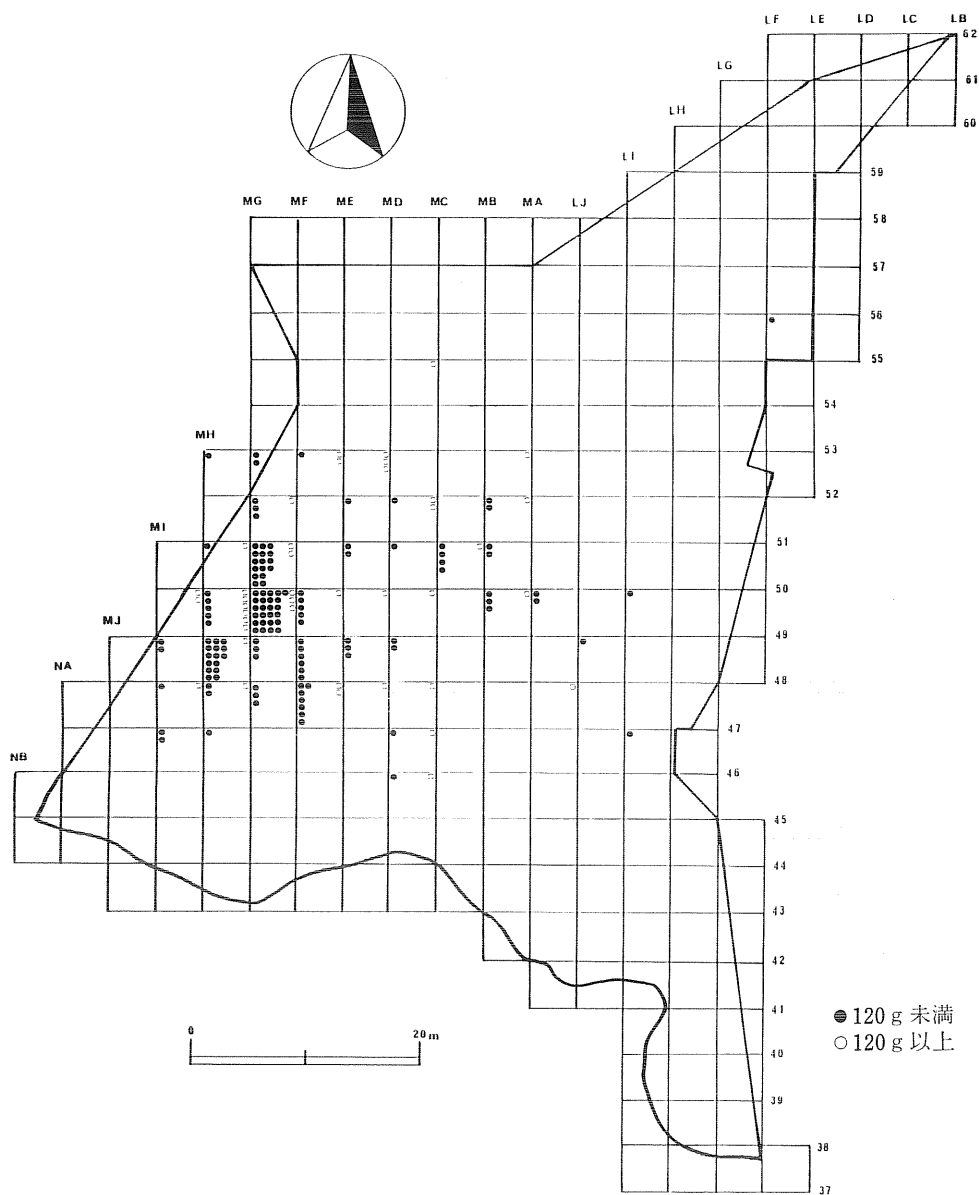


第71図 遺構外出土の石器(24) 石斧

石錘（第72図～第81図、図版71～図版73）

完形、半欠品を合せて192点が出土した。

第72図に各グリッド毎の出土点数を数えた結果を図示する。この図からも、縄文時代早期～前期として位置づけた土器と同様、その分布が調査区の南西側に多いことがうかがわれる。ことに第1号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡などが位置する区域に濃密である。第22表、第23表に各石錘の計測値を示す。



第72図 グリッド別石錘分布図

192点の石錘のうち181点の完形品があるが、それらの重量はおよそ10g程度から600gまでの値を示す。値の小さいものから順に追ってゆくと、およそ110g程度まではその重量も漸移的に推移するが、200g前後のものまでの間に空白ができる。200g台から500g台までは、その数は少ないものの再び漸移的に値を増す。なお、No187の825gという重量はきわめて突出した値であり、これと同程度の重量を示すものは他にない。

重量の計測によって分かるのは、およそ100g前後から200g前後までの値を空白として、それより軽い小形の石錘と、重い大形の石錘とはそれぞれ平均化した重量分布を示すことである。したがって石錘の重量分布の点からは、この100gから200gまでの間を境 — 便宜的にその値を小形の石錘がきれる120gにおく — として、小形の石錘と大形の石錘に分類できる。

石錘の形状を規制する原礫には、円形に近い平面形をもつものと、楕円形に近いものとの2者がある。大形の石錘では原礫の縦横比率が1.2~2.2程度の範囲にあり、小形石錘では(図示する関係上、打ち欠かれた凹部を上下に配置したまま、縦、横の長さを計測している)、0.85~2.3の値の範囲にある。仮に縦横比率が1.3の値をもって、それ未満を円形、それ以上を縦長とするならば、小形石錘では円形となるものが99例、縦長となるものが47例あり、大形石錘では円形が4例、縦長が31例となる。

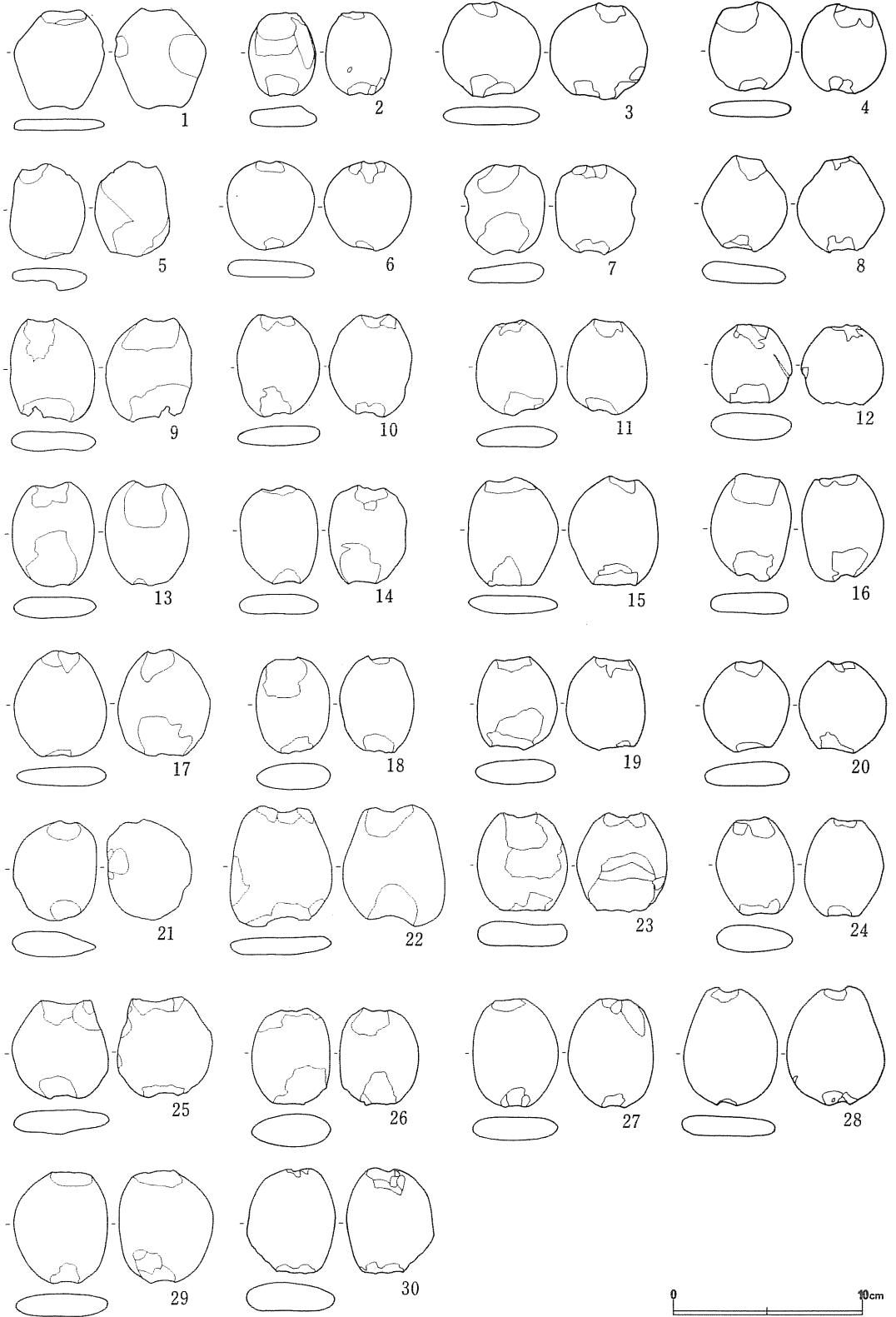
次に結縛のために打ち欠かれる原礫の部位であるが、小形石錘のうち縦長の原礫を用いるものはその長軸端に限られるのに対し、大形石錘では長軸端を打ち欠くものと、短軸側を打ち欠くものがある。(第77図~第80図)。

以上、本遺跡で出土した石錘については、

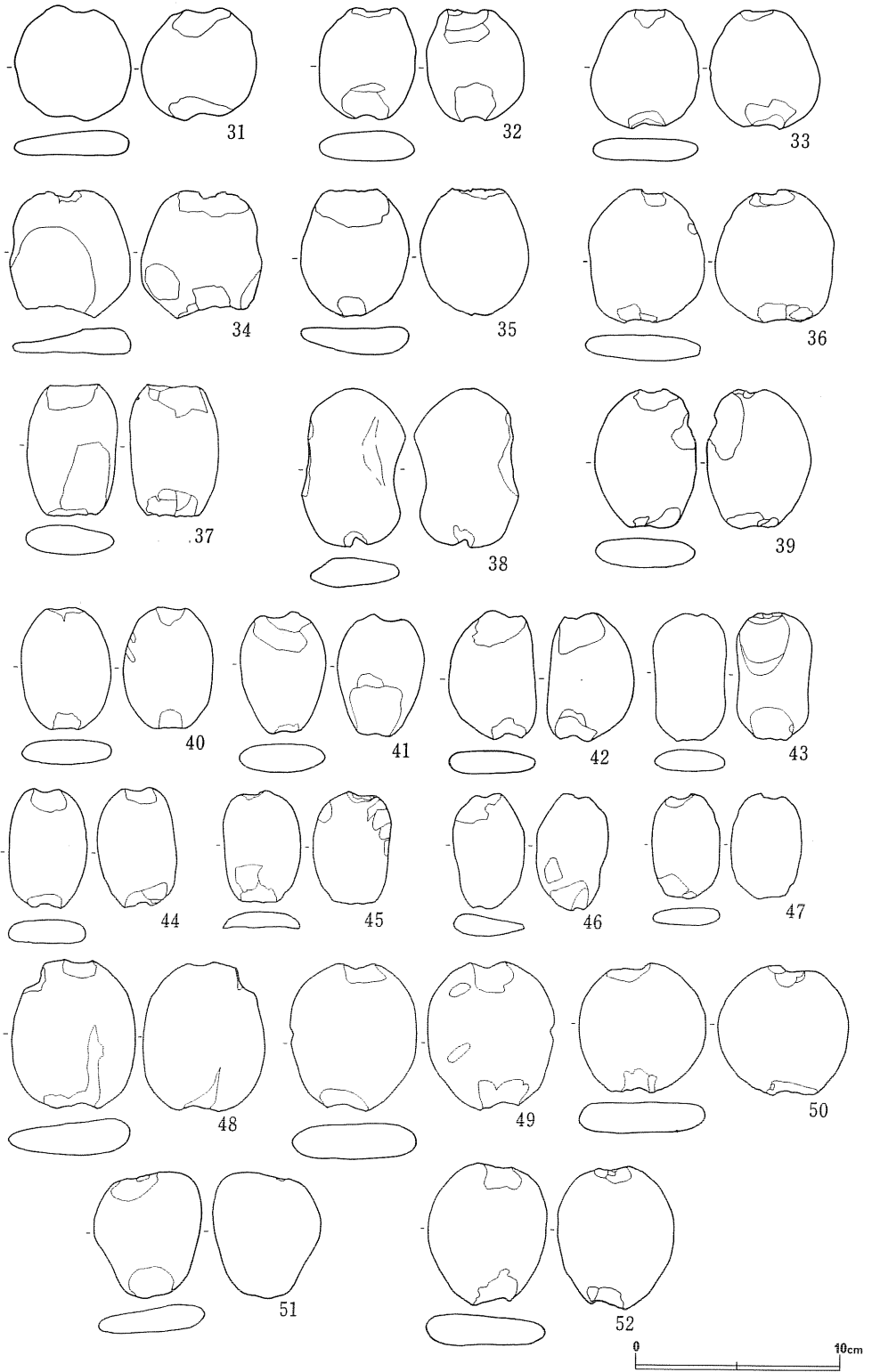
- 1)、重量100~200gを間において小形石錘と大形石錘に分類できる。
- 2)、小形石錘では円形の扁平礫を用い、大形石錘では縦長の扁平礫を用いて製作される割合が大きい。
- 3)、大形石錘では原礫の長軸端を打ち欠いて結縛のための凹部を設けるものと、短軸側を打ち欠いて凹部を設けるもの2者がある。

とその特徴を要約できる。

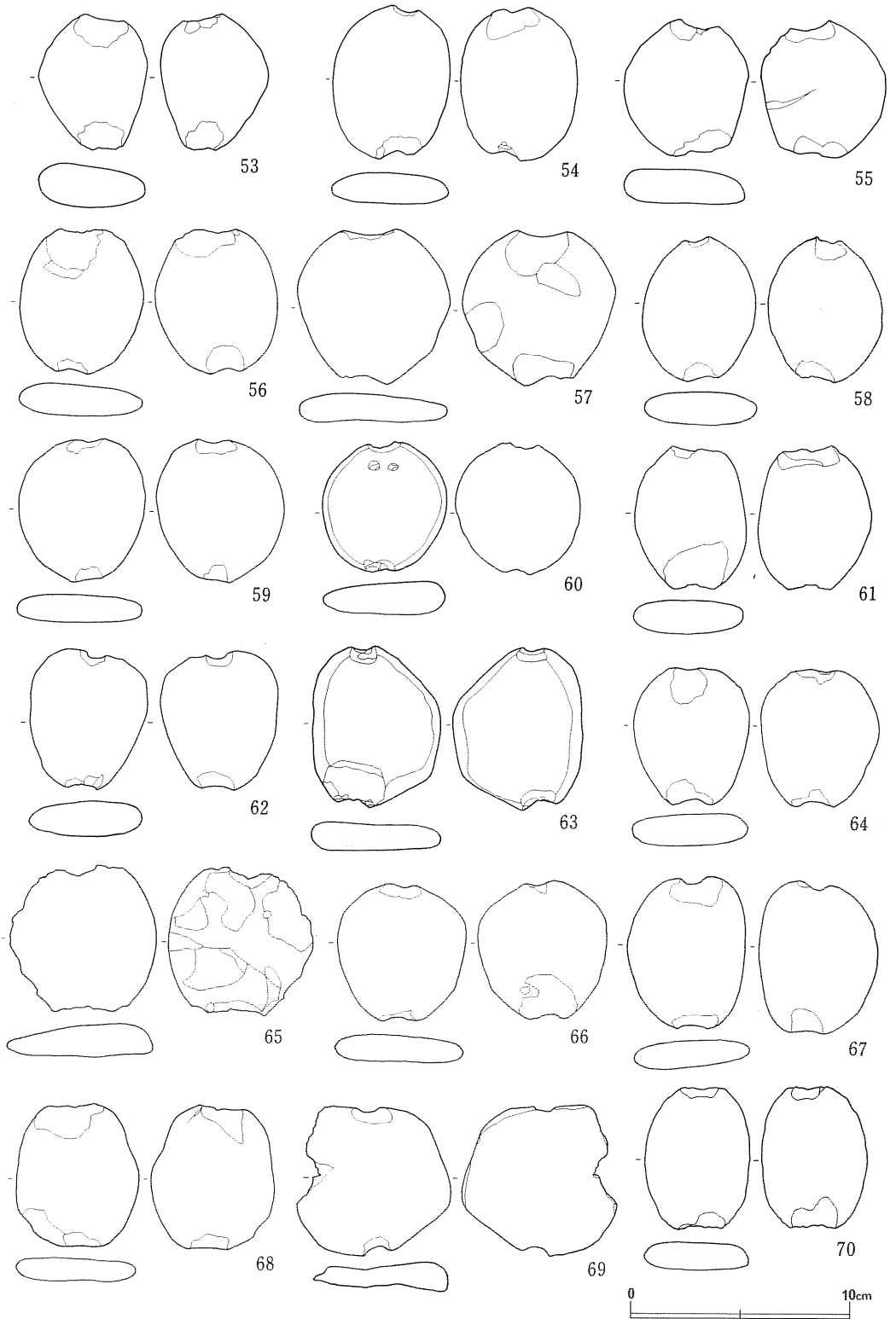
さて、大形と小形の2つに分類できる石錘を、再び調査区内での各グリッドに戻してみると、両者とも調査区南西に分布するが、ことに小形石錘に偏在する傾向が顕著である。これに対し大形石錘は、分布範囲の中では比較的均一に出土している。小形石錘の集中するグリッドはM D47~49、M E49・50、M F48・49の各グリッドで、冒頭にあげた3基の遺構に囲まれた南側の空間である。このことから、石錘のうち小形のものに関しては、竪穴住居跡に隣接した箇所で使用、廃棄されたことがうかがわれ、その場所が住居に付随した小形石錘に関しての何らかの作業場の存在であったことが推定される。



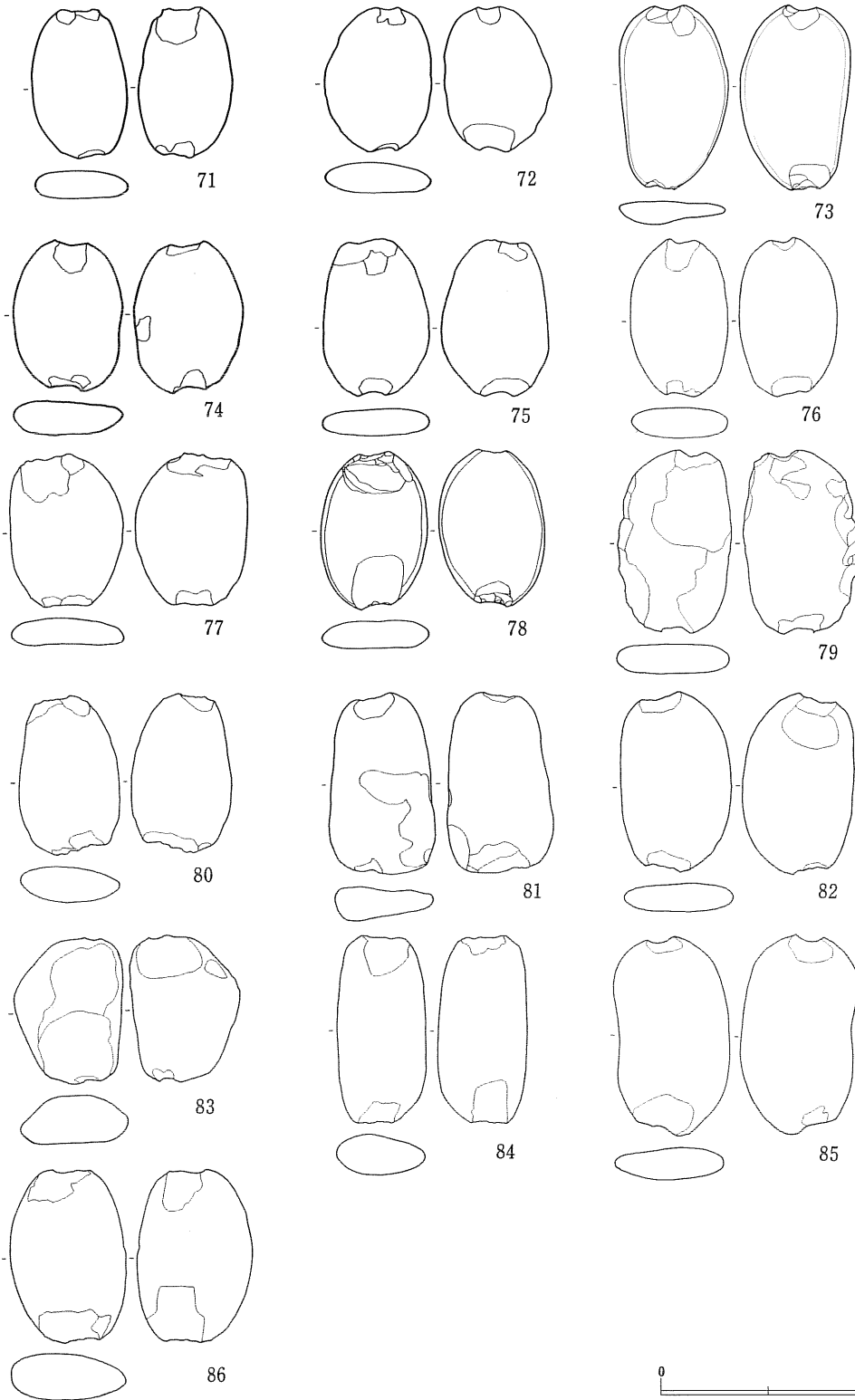
第73図 遺構外出土の石器(25) 石錘



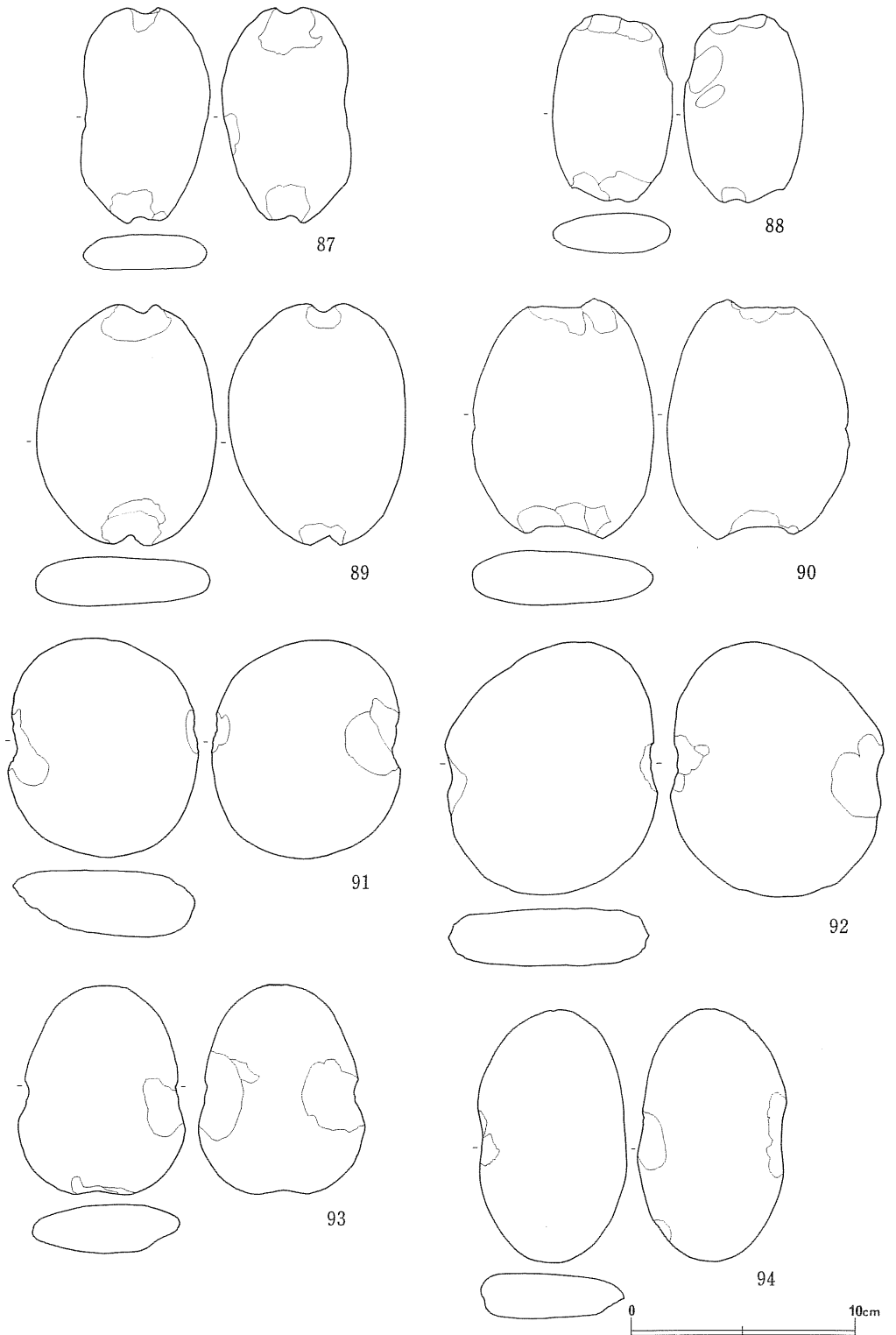
第74図 遺構外出土の石器(26) 石錘



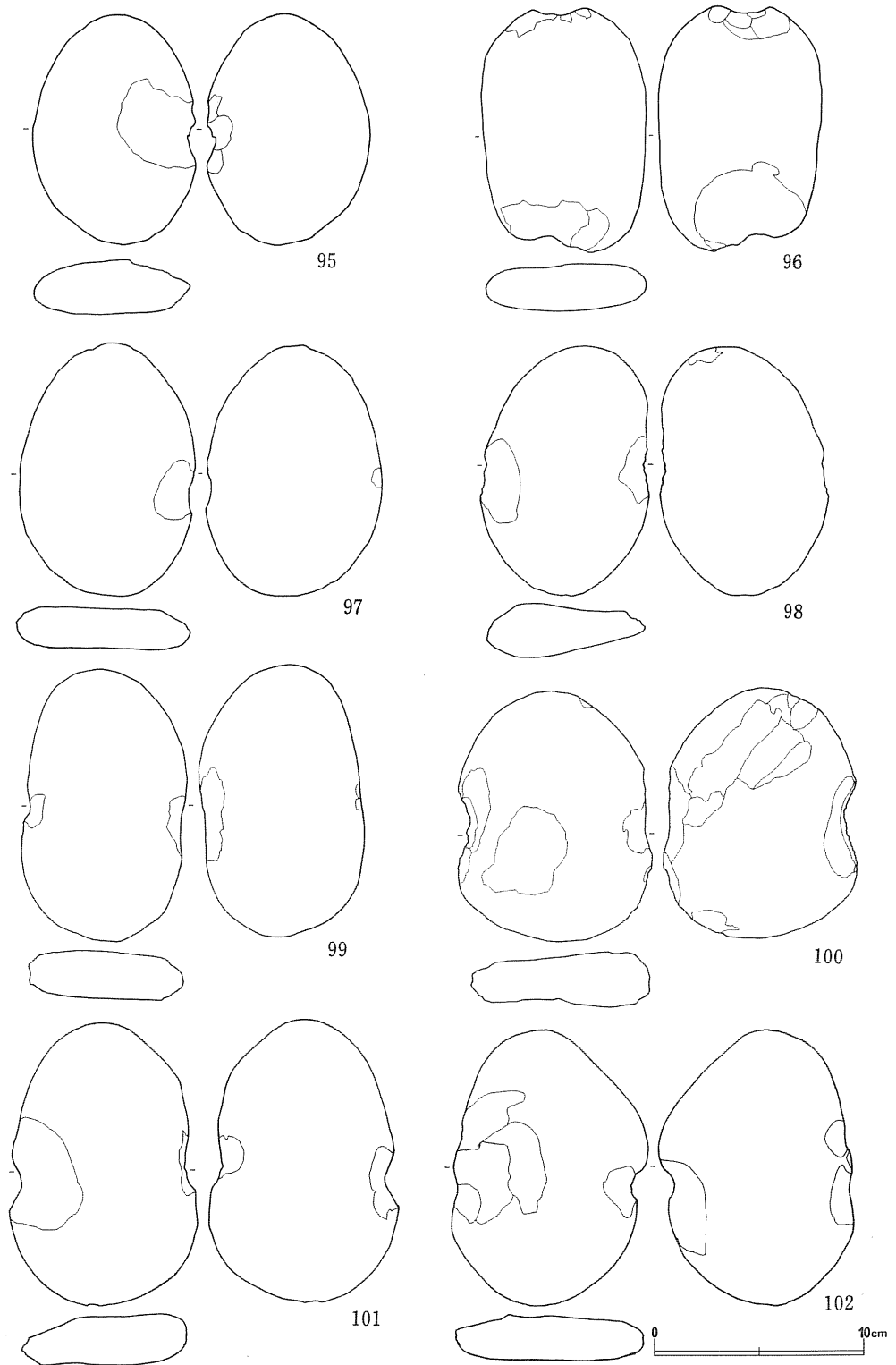
第75図 遺構外出土の石器(27) 石錘



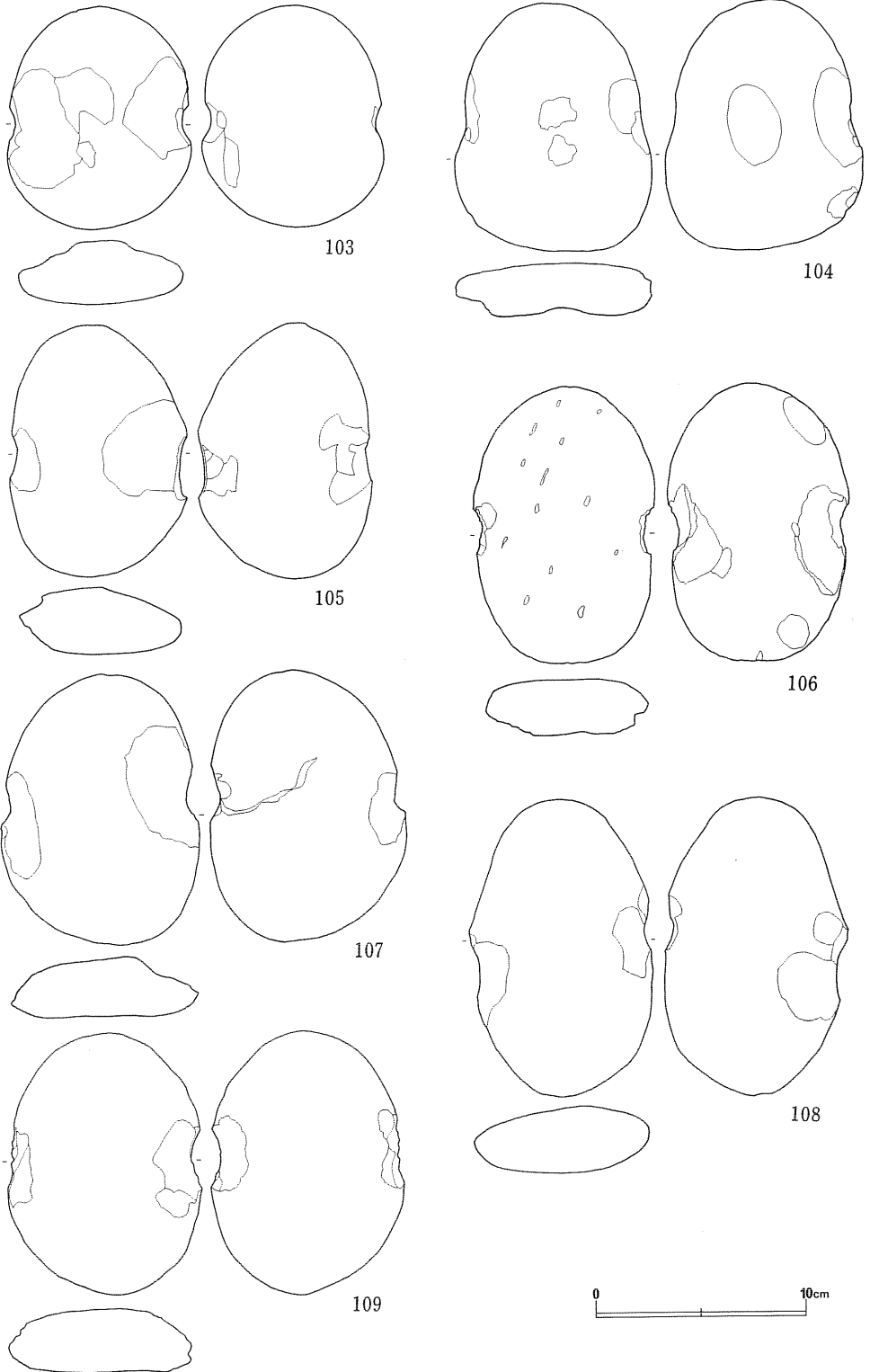
第76図 遺構外出土の石器(28) 石錘



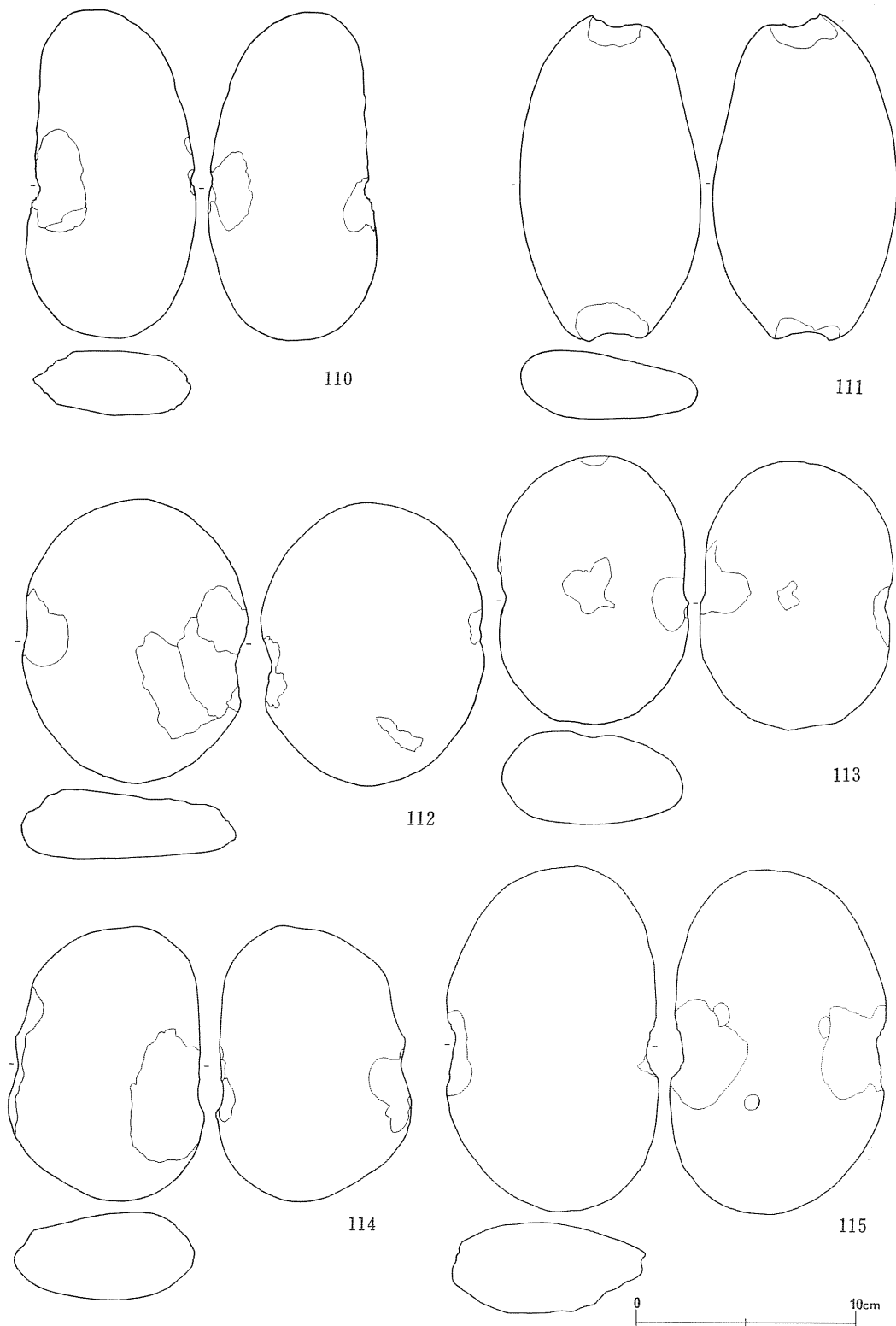
第77図 遺構外出土の石器(29) 石錘



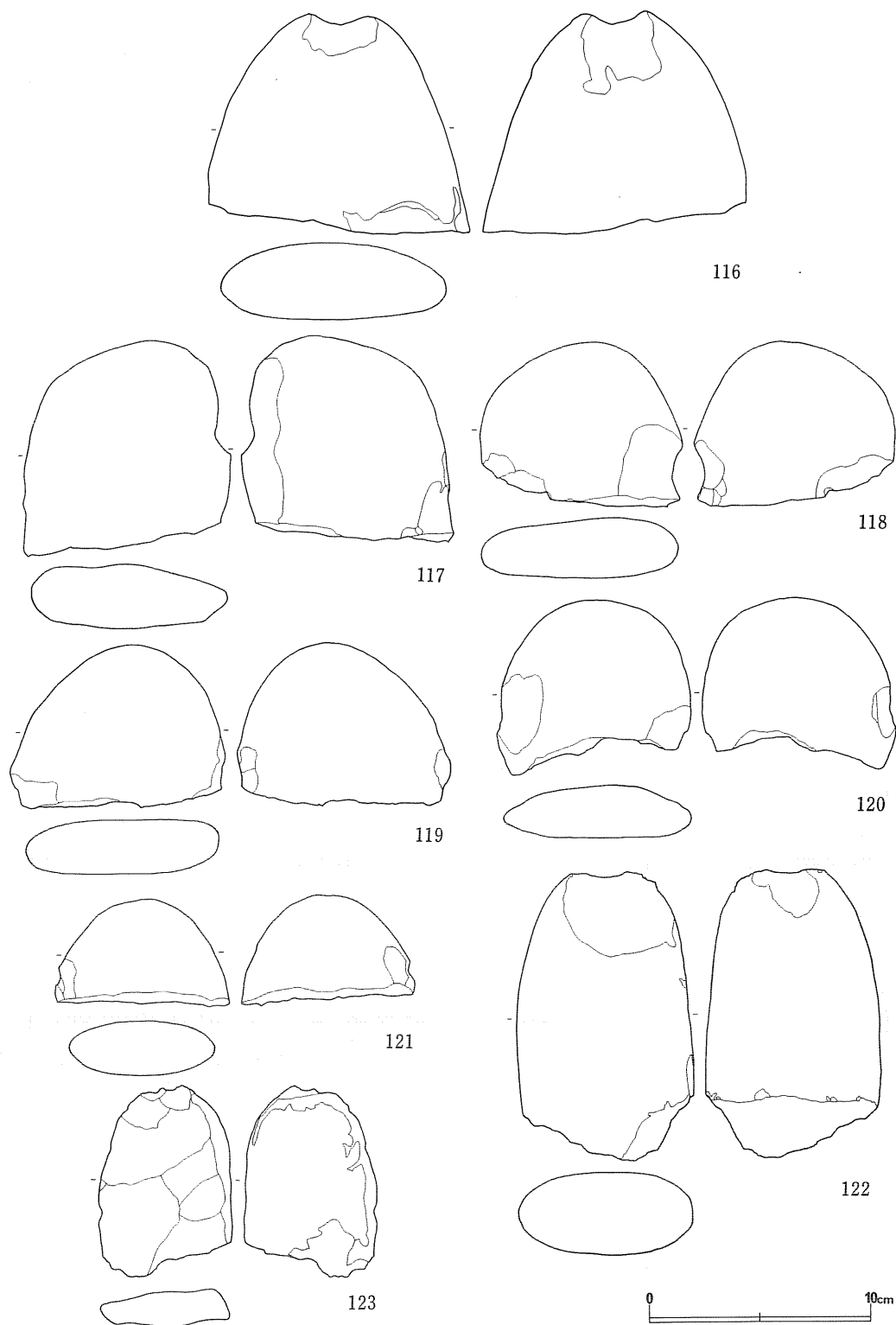
第78図 遺構外出土の石器(30) 石錘



第79図 遺構外出土の石器(31) 石錘



第80図 遺構外出土の石器(32) 石錘



第81図 遺構外出土の石器(33) 石錘

第22表 石錘計測表(1)

番号	図版	挿入	番号	縦	横	厚さ	縦横比率	重量	出土地点
1	71			37	30	9	1.23	13	MF48
2	71			40	37	8	1.08	16	MF50
3	71	73図	1	49	46	4	1.06	18	LE55
4		74図	47	49	33	8	1.48	20	MB48
5				54	32	8	1.68	21	MF49
6	71	73図	2	42	34	10	1.23	21	MG48
7	71			43	36	9	1.19	23	MF50
8	71			48	41	8	1.17	23	MF49
9	71			48	37	9	1.29	23	MF49
10	71	73図	4	44	43	8	1.02	24	MF49
11				54	34	9	1.58	24	MF49
12	71			47	40	12	1.17	24	MF49
13		74図	46	53	34	9	1.55	24	MF50
14	71	73図	5	46	38	9	1.21	26	MG48
15				49	37	10	1.32	27	MF50
16	71	73図	6	44	45	9	0.97	28	MF49
17	71	73図	7	44	42	10	1.04	28	MG46
18		74図	45	53	37	9	1.43	29	MG48
19	71			49	48	7	1.02	29	MF50
20				52	40	9	1.30	29	MF50
21	71	73図	8	47	44	10	1.06	30	MF49
22	71	73図	9	50	44	9	1.13	30	MF49
23				43	--	12	--	30	MF50
24	71			41	45	10	0.91	30	MF48
25				54	39	9	1.38	30	ME47
26	71	73図	10	50	43	9	1.16	31	MF49
27				53	40	10	1.325	31	MF49
28	71	73図	11	46	43	11	1.06	32	MF49
29	71			51	42	10	1.25	32	MF49
30		74図	44	55	38	11	1.44	32	MD51
31	71	73図	12	40	41	13	0.97	32	MG49
32	71	73図	13	50	43	9	1.16	32	MF49
33				53	37	11	1.43	32	MH47
34	71			51	40	10	1.27	32	MF47
35		74図	43	60	33	10	1.81	33	ME47
36	71			43	38	13	1.21	33	確認トレンチ
37	71			45	47	10	0.95	33	MF50
38	71			45	47	9	0.95	33	MF50
39	71			47	50	9	0.94	33	MF49
40	71			57	37	12	1.54	33	MC48
41	71	73図	14	48	41	10	1.17	34	MG48
42	71	73図	15	50	47	10	1.06	34	ME47
43				50	--	9	--	34	ME49
44	71	73図	16	55	46	9	1.19	34	MF49
45	71	73図	3	48	50	11	0.98	35	ME48
46	71			54	43	10	1.25	35	MF50
47	71			50	41	10	1.21	35	MF50
48	71	73図	17	53	45	9	1.17	35	MF50
49	71			51	42	10	1.21	36	MF47
50	71			53	58	8	0.91	36	MG52
51	71			48	50	8	0.96	36	MF49
52	71	73図	19	45	41	13	1.09	37	MG48
53				57	33	13	1.72	37	確認トレンチ
54	71	73図	18	48	38	14	1.26	37	MG48
55				56	38	13	1.47	38	MA49
56				57	43	10	1.32	38	MF49
57	71	73図	20	45	44	12	1.02	39	ME47
58				62	38	11	1.63	39	MF41
59	71			56	49	9	1.14	39	MF49
60	71	73図	23	48	46	11	0.97	40	確認トレンチ
61		74図	42	54	53	9	1.01	40	MH48
62	71	73図	22	57	42	10	1.35	40	ME48
63	71	73図	24	49	43	13	1.13	40	MG48
64	71			57	48	10	1.18	40	MF49
65				54	39	13	1.38	40	確認トレンチ
66	71	73図	21	52	41	13	1.26	41	ME47
67	71			50	39	13	1.28	41	確認トレンチ
68	71	73図	25	42	49	12	0.85	42	ME47
69	71			47	46	14	1.02	42	MC48
70	71	73図	26	48	40	17	1.20	43	MC51

番号	図版	挿入	番号	縦	横	厚さ	縦横比率	重量	出土地点
71	71			53	46	11	1.15	43	MF49
72	71	73図	27	55	44	12	1.25	44	MF49
73	71	73図	28	57	49	10	1.16	45	MG48
74	71			57	49	11	1.16	46	確認トレンチ
75	71			54	52	10	1.03	47	ME49
76	71			56	50	10	1.12	47	MF49
77		74図	41	56	40	14	1.40	47	MG48
78		74図	40	58	43	11	1.34	47	MG48
79	71			54	47	11	1.14	48	確認トレンチ
80	71			53	52	10	1.01	49	MF49
81				74	38	10	1.94	49	表 採
82	71	73図	30	52	45	14	1.15	50	ME47
83	71	73図	29	57	48	13	1.18	50	MG49
84	71	74図	31	50	56	11	0.89	51	MG48
85	71	74図	32	51	46	14	1.10	51	MC50
86	71	74図	33	55	50	10	1.10	51	MH46
87	71			57	51	11	1.11	52	確認トレンチ
88	71			55	44	14	1.25	52	MD48
89				67	38	14	1.76	52	MG50
90	71	74図	34	53	59	9	0.89	52	ME48
91	71	74図	35	65	48	13	1.35	52	MC45
92	71			59	49	14	1.20	53	MF49
93		74図	38	73	41	12	1.78	53	ME52
94		74図	51	58	48	13	1.20	55	ME49
95	71			61	51	12	1.19	56	MF50
96				56	53	12	1.05	56	MF47
97		74図	37	63	43	13	1.46	56	MA51
98	71	74図	36	61	57	11	1.07	57	確認トレンチ
99		75図	70	61	47	10	1.29	57	ME49
100		75図	68	63	54	10	1.16	59	MB50
101		75図	69	60	68	7	0.88	59	MA50
102	72	76図	71	67	42	12	1.59	60	MD50
103	72			64	48	13	1.33	60	MB50
104	72	76図	72	65	47	13	1.38	60	ME48
105	72			72	39	14	1.84	60	MD48
106		75図	67	64	52	11	1.23	61	MG49
107		75図	66	59	58	12	1.01	63	MG49
108		75図	65	59	66	12	0.89	64	MF50
109		74図	39	64	50	13	1.28	64	MG47
110	72	76図	73	83	49	11	1.69	64	確認トレンチ
111	72	76図	74	68	48	12	1.41	66	MA51
112				65	49	13	1.32	66	MF49
113		75図	64	58	51	14	1.13	66	MF49
114		75図	63	67	58	10	1.15	67	確認トレンチ
115	72	76図	76	69	44	14	1.56	67	MG48
116	72	76図	75	70	50	13	1.40	68	MG49
117	72	76図	77	68	51	12	1.33	68	MF50
118	72	76図	78	58	52	13	1.11	68	確認トレンチ
119		75図	62	60	49	14	1.22	69	MG48
120		75図	60	55	57	14	0.96	69	確認トレンチ
121		75図	59	63	55	13	1.12	70	MG47
122				59	55	13	1.07	70	確認トレンチ
123	72	76図	79	79	51	12	1.54	70	MF51
124		75図	61	59	49	15	1.204	70	MG48
125				59	49	15	1.20	71	ME48
126		75図	53	57	46	18	1.23	73	MF52
127		75図	57	62	67	10	0.92	73	ME49
128		75図	56	63	54	15	1.16	74	MF50
129		75図	55	55	54	16	1.01	74	MD58
130		75図	54	63	52	14	1.21	75	確認トレンチ
131	72	76図	80	68	45	16	1.51	75	MH46
132	72	76図	81	79	45	11	1.75	75	LJ49
133	72	76図	82	78	50	13	1.56	77	MA49
134	72			90	39	12	2.30	80	確認トレンチ
135		74図	52	64	56	14	1.14	83	MG48
136		75図	58	58	51	12	1.13	86	MF48
137	72	76図	83	65	49	22	1.32	86	LJ48
138		81図	123	--	58	13	--	87	MB50
139				69	57	14	1.21	89	確認トレンチ
140		74図	50	58	62	15	0.93	90	確認トレンチ

※縦・横・厚さの単位はmm、重量の単位はg

第23表 石錐計測表(2)

登録番号	図版	挿図	番号	縦	横	厚さ	縦横比率	重量	出土地点
141	72	76図	84	85	40	16	2.12	90	L J 49
142		74図	49	65	60	16	1.08	100	M D 50
143		74図	48	67	59	16	1.13	100	M H 48
144	72	76図	85	85	50	14	1.70	102	M B 50
145	72			80	53	17	1.50	104	M F 51
146	72	76図	86	77	52	20	1.48	105	L H 49
147	72	77図	87	89	53	13	1.67	110	確認トレンチ
148	72	77図	88	79	51	17	1.54	110	M A 50
149				87	73	13	1.19	113	L H 46
150	72	77図	93	88	63	20	1.39	192	M H 47
151	72	77図	94	112	62	20	1.80	204	M C 47
152	72			90	69	25	1.15	228	L J 47
153	72	77図	89	99	77	20	1.28	245	M F 52
154		81図	119	--	90	22	--	250	M C 51
155				--	88	23	--	226	M G 48
156	72	78図	95	107	71	25	1.50	279	M G 49
157	72	78図	96	103	74	22	1.39	279	M F 51・52
158				--	86	33	--	286	M E 48
159	72	77図	90	93	77	24	1.20	294	M F 51・52
160	72	78図	97	118	79	17	1.49	297	M C 46
161	72			121	63	26	1.77	297	M F 49
162	72			100	78	23	1.28	298	M A 49
163	72	78図	98	121	75	25	1.61	325	M D 49
164	72	77図	91	96	77	27	1.24	328	M C 46
165	72			117	73	22	1.60	332	M F 49
166	72	77図	99	129	72	20	1.79	352	M E 47

登録番号	図版	挿図	番号	縦	横	厚さ	縦横比率	重量	出土地点
167	73	78図	100	73	81	21	1.45	360	M D 47
168	73			136	68	21	2.00	367	M A 49
169	73	78図	101	131	75	24	1.74	373	M C 45
170	73	78図	102	128	81	20	1.58	374	M G 49
171	73	79図	103	106	78	29	1.35	378	M G 50
172	73	79図	104	118	81	26	1.45	395	M E 52
173	73	79図	105	116	73	31	1.58	399	M G 49
174	72	77図	92	108	85	26	1.27	404	M G 49
175	73	79図	106	132	76	26	1.73	415	M C 49
176	73			118	78	24	1.51	435	M H 49
177	73	79図	107	123	80	26	1.53	447	M G 47
178	73			140	73	25	1.71	455	M G 49
179	73	79図	108	132	76	30	1.73	469	M C 51
180	73	79図	109	124	81	31	1.53	504	M C 54
181	73	80図	110	151	69	29	2.18	519	M C 54
182	73	80図	111	135	80	30	1.68	523	M A 52
183	73			131	83	30	1.57	529	M F 50
184	73	80図	112	127	94	28	1.35	544	M F 50
185	73	80図	113	121	81	38	1.49	562	M G 42
186	73	80図	114	117	78	40	1.50	576	M D 52
187	73	80図	115	157	85	40	1.84	825	M E 47
188		81図	121	--	77	25	--	(112)	M D 52
189		81図	120	--	78	20	--	(174)	M E 52
190		81図	118	--	76	23	--	(227)	M D 52
191		81図	117	--	87	28	--	(346)	M A 51
192		81図	116	111	36	--	--	(535)	M G 49

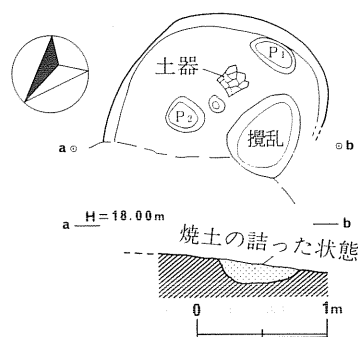
2、縄文時代前期～後期の遺構と遺物

縄文時代前期～後期としてとり上げるのは、縄文時代前期中葉から後期前葉までの遺構、遺物である。これらの中には縄文時代前期中葉～後葉の土坑一基、中期後葉の竪穴住居跡3軒、後期前葉の竪穴住居跡3軒、土坑1基、土壙墓3基、土器埋設遺構2基がある。その他にこれらの遺構群とともに検出され、該期のいずれかの時期に帰属させることが可能と判断された土坑5基、焼土遺構8基があるが、伴出する遺物がないため、細別時期の特定やその性格を明らかにすることはできなかった。

以上の遺構のうち中期後葉に属するものと後期前葉に属するものとは、遺跡のなかにおいて比較的まとまった規模で営まれた時期の遺構であるが、前者は台地の北側に、後者は南側に分布する傾向にある。

第8号竪穴住居跡(第82図、図版5-1)

縄文時代中期後葉に属する。調査区の北東LJ51・52グリッドにあり、第Ⅲ層で炭化物を含む黒色土のプランとして確認された。北側と西側での攪乱がひどく、残存状態は悪い。平面形態は径160cmの円形で深さ10~20cm、面積は2.15㎡である。中央西寄りに60×50cmの範囲で地床炉があり、中央の底面が特に赤く焼けている。柱穴は2箇所でP₁; 28×20cm、P₂; 30×24cm、深さはいずれも5cm内外である。床面は凸凹するが、全体的には平坦で堅い。床面から数点の土器片が出土している(第89図)。

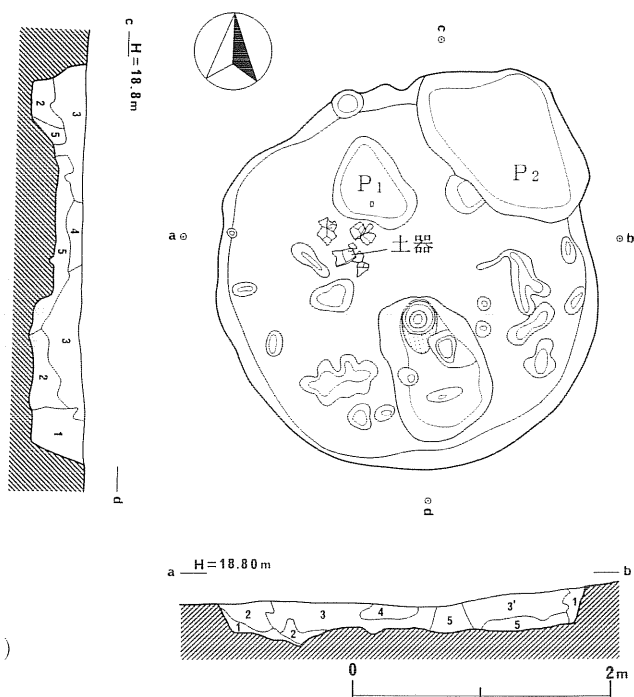


第82図 第8号竪穴住居跡

第9号竪穴住居跡(第83図、図版5-2・3)

縄文時代中期後葉に属する。調査区の北東LG~LH52グリッドで、第Ⅲ層にあらわれた暗褐色土の円形プランとして確認した。平面形態は径3mの円形で面積は7.28㎡である。北東部に貯蔵用と考えられる土坑(P₂)が張り出している。P₁は75×60cmの不整形で底面は起伏があり深さは約10cmである。P₂も150×100cmの不整形で底面は凸凹し、深さは30cmである。住居跡の床面は堅くしまり全体的には平坦であるが、凸凹した不整形のピットが随所に認められる。住居跡の南側は炉の施設となっており、長軸115cm×短軸80cmの掘り方北側に深鉢形土器が埋設してある。深鉢の周囲は堅い焼土で囲まれている。掘り方の底面には石が抜かれたようなピットがある。

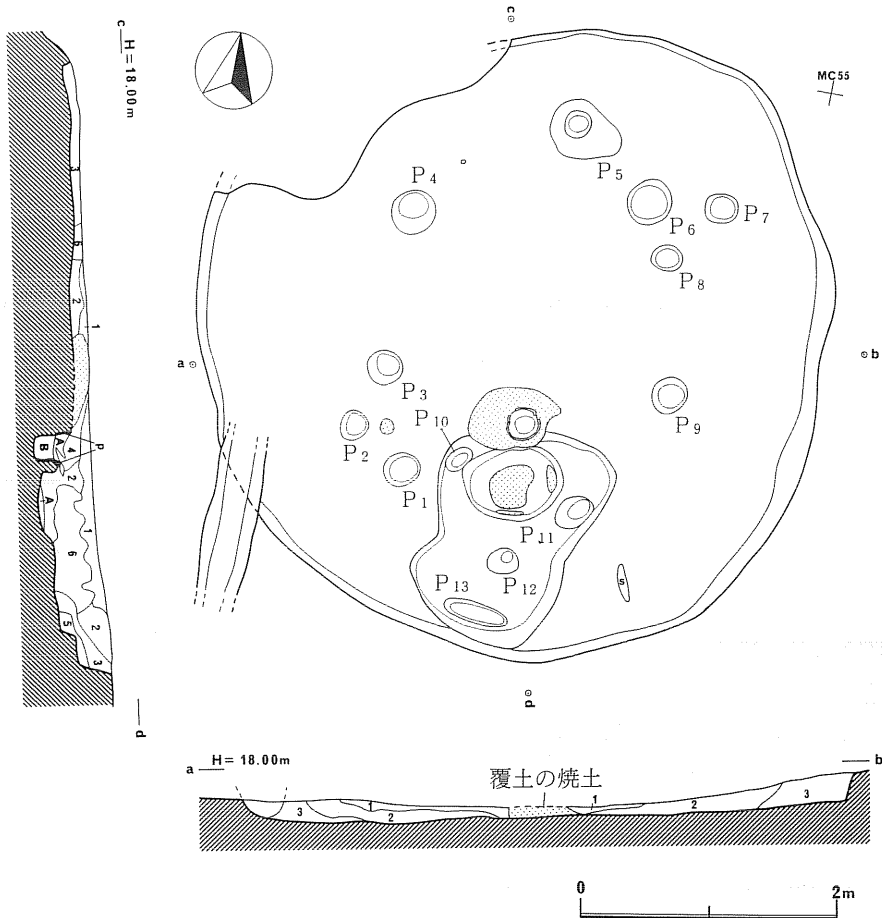
覆土には炭化物が顕著に含まれ、北西壁際には炭化材が遺存していた。このことから本住居跡は火災住居であったと考えられる。覆土中央の上位には、床面から10cm浮いて厚さ10cm程の焼土が検出された。西側の床面直上からは深鉢形土器の破片が出土している(第89図、第92図)。



第83図 第9号竪穴住居跡

第10号住居跡(第84図、図版5-4~6)

縄文時代中期後葉に属する。調

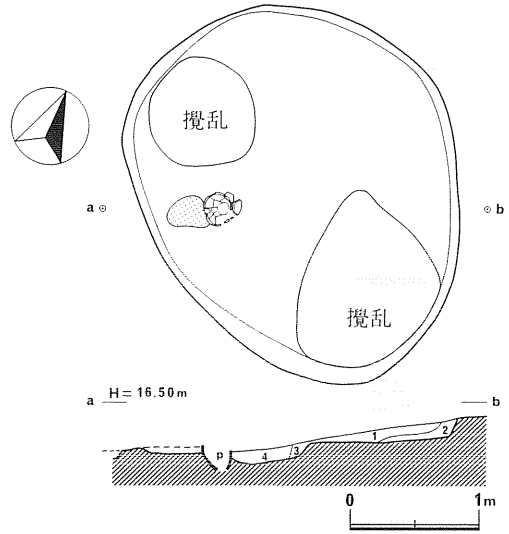


第84図 第10号竪穴住居跡

査区の北西MC53・54グリッドにあり、第Ⅲ層で黒褐色土を主体とするプランとして確認された。西側は4号溝に切られ、北側は寒川Ⅱ遺跡との間の沢へ降りる斜面となって崩れている。平面形態は径約480cmの円形で、深さは30cm、面積は19.45㎡である。住居跡の南側は炉の施設となっており、長軸180cm×短軸110cm、深さ30cmの「だるま」形に落ち込んでいる。この落ち込みの北端、住居跡床面中央からやや南寄りに、深鉢形土器が埋設してあり、堅い焼土で取り囲まれている。「だるま」形に落ち込んだ炉の施設内北側は78cm×58cm、深さ10cmで窪んでおり底面は赤く焼けている。柱穴は12箇所あり、P₁；30×28cm・深さ20cm、P₂；径20cm・深さ24cm、P₃；30×28cm・深さ35cm、P₄；36×34cm・深さ42cm、P₅；24×22cm・深さ21cm、P₆；36×34cm深さ17cm、P₇；26×22cm・深さ27cm、P₈；25×20cm・深さ38cm、P₉；30×26cm・深さ40cm、P₁₀；24×14cm・深さ4cm、P₁₁；32×24cm・深さ11cm、P₁₂；24×20cm・深さ7cmである。炉内に長軸50cm×短軸16cm・深さ8cmのピット(P₁₃)がある。また炉施設東側の住居跡床面には、長さ30cm×幅6

cmの礫が埋め込んだ状態で検出されている。遺物は炉の埋設土器の他に床面や覆土から少量の土器片が出土している(第90図、第92図)。

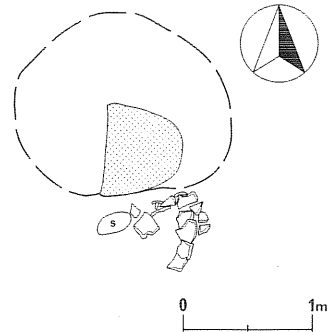
第11号竪穴住居跡(第85図、図版5-7)
 縄文時代後期前葉に属する。L I・L J 45グリッドにあり、第Ⅲ層で暗褐色土のプラン中に1個体分の埋設土器が確認され、遺構としてとらえられた。南側は斜面にさしかかるため壁を確認できず、床面の東西両側にも大きな攪乱がある。平面形態は長軸約300cmの楕円形と推定され、北壁での深さは15cm、面積は5.88㎡である。床面南西部には焼土面に伴って深鉢形土器が埋設してある。床面は凸凹し柱穴は確認されていない。住居外西側、炉から約1m離れた箇所でも土器片が出土しているが、本住居跡に伴うものかどうか不明である(第91図、第92図)。



第85図 第11号竪穴住居跡

第12号竪穴住居跡(第86図、図版5-8)
 縄文時代後期前葉に属する。調査区南東M F 46グリッドにあり、第Ⅲ層で1個体分の土器とともに堅く焼土面を検出したため、竪穴住居跡と推定した。壁面、柱穴とも確認されなかったが、80×70cmの焼土の広がりを取り囲むように径150cm程の範囲が強くしまっている。焼土の南側に隣合って横倒しになって潰れた土器1個体と25×15cm程の礫が検出された(第92図)。

第17号土坑(第87図、図版4-7)
 縄文時代前期中葉に属する。調査区南東L I 44グリッドにあり、第Ⅲ層で暗褐色土のプランとして確認した。南側の一部は第5号炭焼遺構によって切られている。平面形態は楕円形で、長軸260cm×短軸200cm、深さ30cmである。底面は凸凹しているが、全体的には平坦である(第92図)。



第86図 第12号竪穴住居跡

第18号土坑(第87図、図版6-1)
 縄文時代後期前葉に属する。調査区やや南M B 48グリ

ッドにあり、第Ⅲ層で暗褐色土のプランとしてとらえられた。本土坑は第19号土坑を切っている。平面形態は楕円形で長軸130cm、短軸は推定で約70cmと考えられる。確認できる部分での深さは40cmである。長軸はほぼ北を指している。土坑北側の覆土中から土器片が出土している(第92図)。

第1号土壙墓(第87図、図版6-2)

調査区の北西MD54グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランとして確認した。平面形態は楕円形で長軸120cm×短軸100cm、深さは30cmである。長軸はN-5°-Wを指す。底面は平坦で、立ち上りは摺鉢状を呈する。遺物は底面から20cm程上位の埋土中、土坑内北東側に偏って横倒しとなって潰れた深鉢形土器1個が出土した(第93図)。

第2号土壙墓(第87図、図版6-3)

調査区の北西ME54グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形は楕円形で上面は長軸175cm×短軸125cmで、深さは30cmである。長軸はN-5°-Eを指す。底面は多少凸凹しており北側が低くなっている。確認面で土壙墓プランのやや北部に礫1個が検出された。底面から約30cm程上位の埋土中、確認面直下で深鉢形土器1個体分の破片が出土した(第93図)。

第3号土壙墓(第87図、図版6-4)

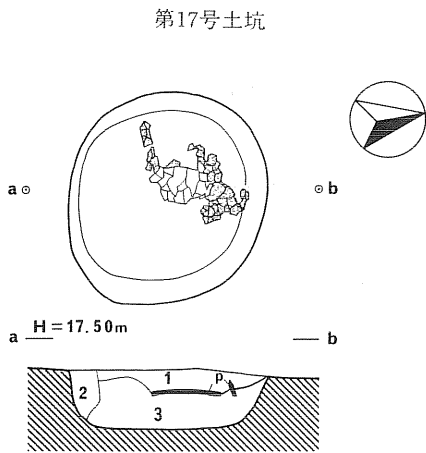
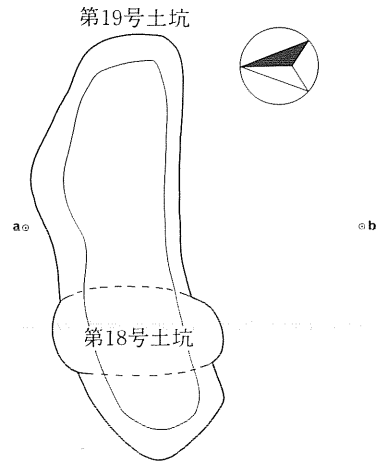
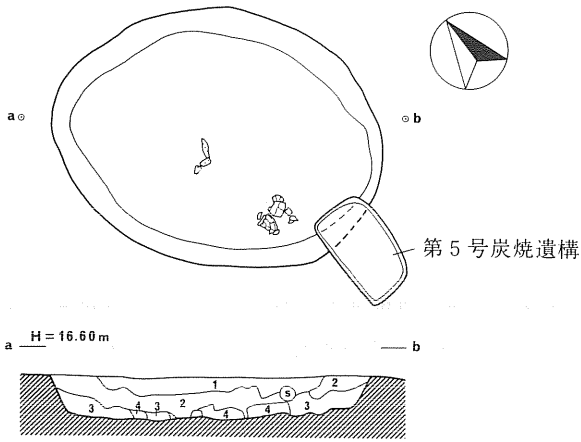
調査区の南西NA47グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。土壙の平面形は円形で上面での規模径130cm、下面で径90cm、深さは55cmである。土壙の北壁には径40cm程の円形のピットが付設されている。底面は僅かに焼け、土坑の底面に比べて20cm高い。土壙の底面は平坦で立ち上りは摺鉢状を呈する。底面付近より大形の深鉢形土器破片が出土した(第93図)。

第1号土器埋設遺構(第88図、図版6-5)

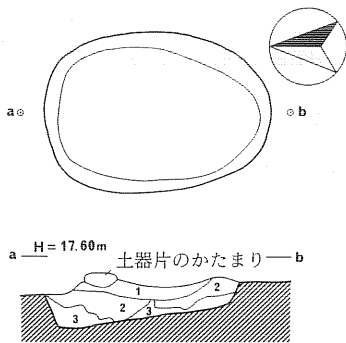
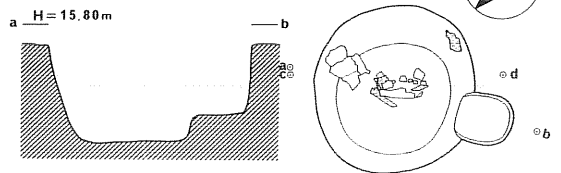
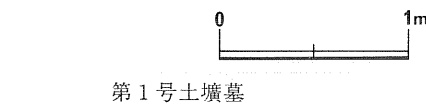
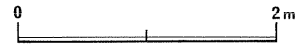
調査区の南西MG46グリッドにある。第Ⅲ層で確認した。深鉢形土器が口縁部をN-12°-W方向に向け、正位から約45°傾いた状態で埋設してある。土器の北側には板状の蓋石が置かれている。遺構の掘り方は確認面では不明であったものの断面にはあらわれ、それによれば長さ130cm、深さ25cmに掘り込んでいる(第93図)。

第2号土器埋設遺構(第88図、図版6-6)

調査区の南西MG46グリッドにある。第Ⅲ層で確認した。深鉢形土器が正位に埋設している状態で、西側には土器に接して数個の礫が組んだように置いてある。また、これらの礫が赤変



第18号・第19号土坑



第3号土坑墓



第87図 第17号～第19号土坑、第1号～第3号土坑墓

していること、土器の南側には礫と同じレベルで焼土の広がりが認められることから、本遺構は火を受けていたと考えられる。断面によって確認した遺構掘り方は長さ75cm、深さ15cmである（第93図）。

第19号土坑（第87図、図版6-7）

調査区中央やや南側MA-MB48グリッドにある。第5号溝調査中に暗褐色土を主体とするプランを確認した。平面形はやや弓なりになった楕円形を呈し、長軸330cm×短軸95cm、深さ60cmである。長軸はN-85°-Eを指す。遺物の出土はなく時期は不明だが、第18号土坑より古い。

第20号土坑（第88図、図版6-8）

調査区の南西部MH46グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形態は円形で、上面径160cm、下面径110cm、深さは40cmである。底面はほぼ平坦で、中央やや西寄りに径20cm、深さ15cmのピットがある。底面の立ち上がりは摺鉢状を呈する（第91図）。

第21号土坑（第88図、図版7-1）

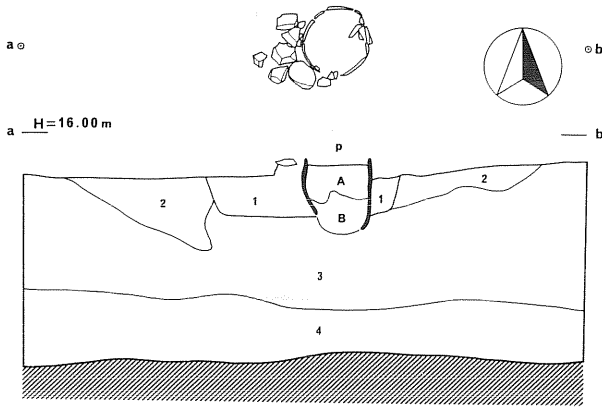
調査区の中央東側LF51グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形態は長軸190cm×短軸150cmの楕円形を呈し、深さは40cmである。底面は凸凹が激しく小穴が多い。中央部には、長軸80cm×短軸46cm、深さ5cmのピットがある。中央のピットから礫が一点出土。

第22号土坑（第88図、図版7-2）

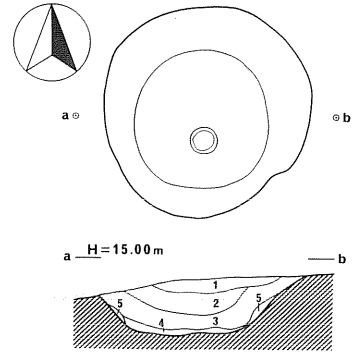
調査区の南西MG47グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土のプランを確認した。平面形は楕円形で、長軸205cm×短軸105cm、深さは25~30cmである。長軸はほぼ東西方向に沿っている。底面は起伏があり、立ち上がりは摺鉢形を呈している。覆土上位の西側には30~70cmの焼土層があるが、遺物は検出されていない。

第23号土坑（第110図、図版7-3）

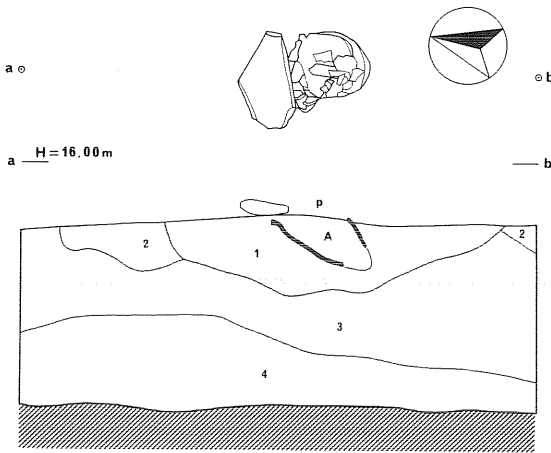
調査区の中央西端MG50グリッドにある。第Ⅲ層で暗褐色土プランとして確認した。平面形態は楕円形で、長軸160cm×短軸100cm、深さは30cmである。長軸はN-93°-Wの方向である。立ち上りは摺鉢状を呈する。西壁には径15cmのピットがある。確認面上、東壁近くから礫が1点検出されている。



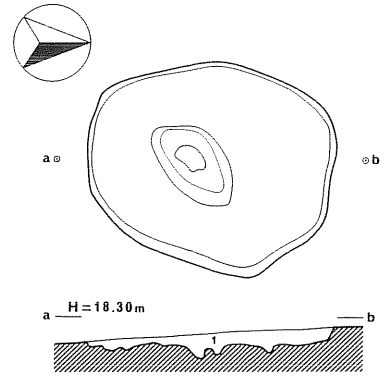
第2号土器埋設遺構



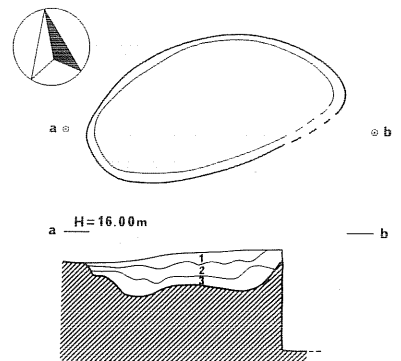
第20号土坑



第1号土器埋設遺構



第21号土坑



第22号土坑



第88図 第1号・第2号土器埋設遺構、第20号～第22号土坑

第1号焼土跡～第8号焼土跡

調査区内の8箇所から焼土の広がりを検出した。縄文時代の遺物包含層である第Ⅱ層中に多く検出されている。第24表にその検出位置・規模・層位等を示す。

第24表 第1号焼土跡～第8号焼土跡

	位置	規模	層位	備考		位置	規模	層位	備考
第1号焼土跡	MF52	60×50cm、 厚い。	Ⅱ～Ⅲ層		第5号焼土跡	MG47	70×30cm、 厚い。	Ⅱ層	第22号土坑と重複
第2号焼土跡	ME54	1m×90cm、 厚い。	Ⅱ～Ⅲ層	第4号土坑と重複	第6号焼土跡	MA54	70×65cm、 厚い。	Ⅲ層	
第3号焼土跡	MF51	30×20cm、 薄い。	Ⅱ層	第4号竪穴住居、 第5号溝と重複	第7号焼土跡	LF58	1m×50cm、 厚い。	Ⅱ層	
第4号焼土跡	MB48	30×30cm、 薄い。	Ⅱ層	第5号溝と重複	第8号焼土跡	MD50	50×40cm、 薄い。	Ⅱ層	第1号竪穴住居跡と重複

遺構内出土の縄文時代中期～後期の遺物

第8号竪穴住居跡出土遺物（第89図-3～7・12・13、図版22）

磨消縄文の施文される土器（3～7）、削器（12）、剥片（13）が出土している。3～7の破片には、磨消縄文が横方向に展開する部位のもの（3・4）、円弧を描く部位のもの（5・6）、縦方向にのびる部位のもの（7）がある。地文の縄文を施文するにはR L撚紐を用いるが、3～5では横位に、6・7では斜位～縦位に回転施文している。削器は縦長の剥片の側縁に、主要剥離面側からの剥離で作った刃縁と、表面側からの剥離で作った刃縁とが設けられている。削器・剥片とも石質は頁岩である。

第9号竪穴住居跡出土遺物（第89図-8～11・14～17、第92図-1・2、図版22、図版23-5・6）

土器片には縄文のみ施された破片（第89図-8・9・11）、磨消縄文が縦方向に展開する部位の破片（10）がある。第92図-1は、土器埋設炉の北西側床面から出土した1/3個体分の土器であるが、口縁上端を幅1.5cm程でナデて無文とし、体部はL Rの撚紐を縦位に回転して全面に斜縄文を施している。部分的に縦位の綾絡文があらわれる。口縁から体部までがほぼ直立する深鉢形の器形をもつ。第92図-2は、炉に使用されていた鉢形土器である。口縁から体部上半までと、底部を欠損した、体部下半の破片である。器面には結節部をもったL Rの撚紐を縦位に回転させて、綾絡文のある斜縄文を施している。第89図-14～17の剥片のうち、15の横長の剥片は、打面の反対側にできた幅広の縁辺部を刃部として使用した痕跡が認められる。いずれの剥片も頁岩を石材としている。

第10号竪穴住居跡出土遺物（第90図、第92図-3、図版23-4、図版24）

第90図-1の土器は外反する口縁部に、列点文を沿わせた沈線で文様を描く土器である。口縁上端から垂直に降ろされる沈線と、その両側を斜行する沈線によって構成される。沈線の両側に施される列点文は、器面に対して直角にあてられた棒状工具によって施文されている。4は頸部に2列の横方向に並ぶ刺突列が施される例である。1および2・5の無文の土器を除いた他の資料は全てL Rの撚紐を縦位に回転して斜縄文が施されている。第92図-3は、炉に使用されていた深鉢形土器である。口縁部と底部を欠失するが体部下半で膨らみ、そこから底部

第4章 寒川Ⅰ遺跡

に向ってすぼまる器形をもつ。器面には結節部をもったLRの撚紐を縦位に回転して綾絡文のある斜縄文を施している。石器には2点の石槍(第90図-12・15)、3点の搔器(11・14・17)がある。12は比較的大きな剥離を両面に施して柳葉形に仕上げた石槍である。基部を欠損する。15は裏面に素材となった剥片の主要剥離面の一部を残す。基部を欠損する。11は素材剥片の1側縁に表面側、主要剥離面側からの剥離を加え、14・17は素材の1側縁に主要剥離面からの剥離を加えて刃部とした搔器である。石質はいずれも頁岩である。

第11号竪穴住居跡出土遺物(第91図-1~9、第92図-5、図版25、図版26-1)

土器片には磨消縄文によって曲線的な構図を描くもの(第91図-1~3)、直線的な構図を描くもの(4~6)、体部に全面縄文が施されるもの(7~9)がある。磨消縄文、体部に全面施される縄文とも、原体にはLRの撚紐が用いられている。第92図-5は炉に使用されていた深鉢形土器である。体部半ばから底部に向って急にすぼまる器形をもつ。器面にはLRの撚紐を縦位斜位に回転し、やや横走気味の斜縄文を施文している。

第12号竪穴住居跡出土遺物(第92図-4、図版26-2)

体部上半に最大径をもち、緩く弯曲しながらすぼまる器形をもつ深鉢形土器である。器面には全面LRの撚紐を縦位に回転して斜縄文を施している。

第17号土坑出土遺物(第92図-7、図版23-2)

深鉢形土器の体部下半から底部にかけての破片である。器面には縦位の撚糸文が施される。胎土に繊維を含む。縄文時代前期中葉から後葉に位置づけられる土器である。

第18号土坑出土遺物(第92図-6、図版26-3、図版27-5)

ややずん胴の深鉢形土器の口縁部破片と体部破片である。地文として1段のLRの撚紐を縦位に回転し無節の縄文が施文される。地文上に描かれる沈線文は大きくX字状に交叉した区画内に楕円形のモチーフで、また口縁部の破片には縦位2段の刺突文が施される。

第20号土坑出土遺物(第91図-10・20、図版25)

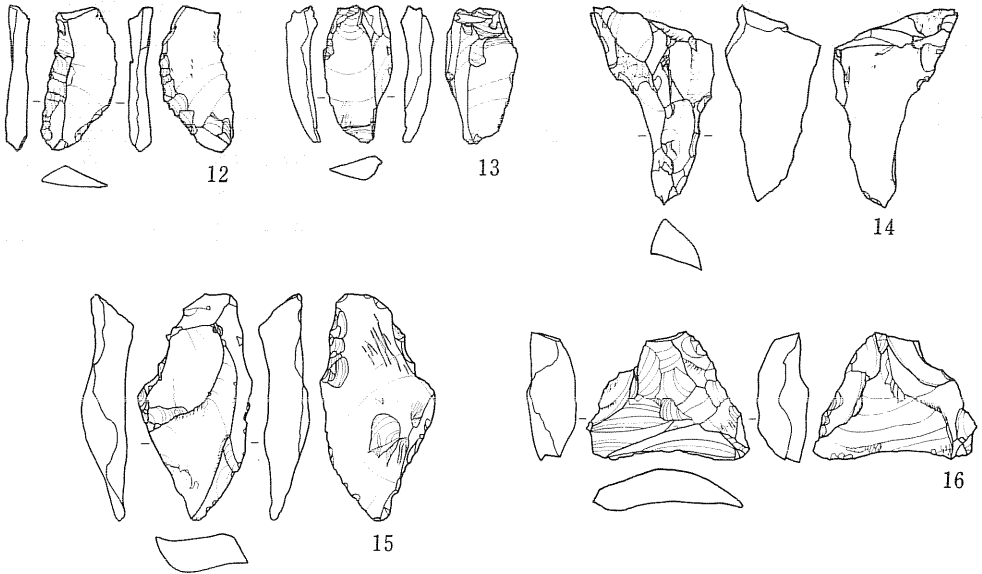
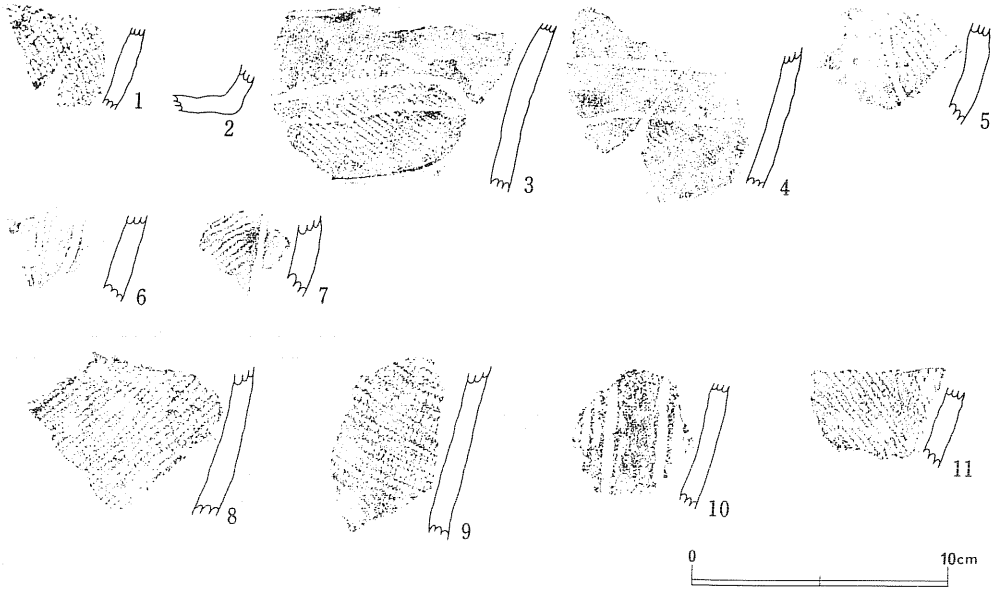
網目状撚糸文が施された口縁部破片(10)と石筥の刃部側折損品(20)が出土している。石筥は石材として頁岩を用いている。

第1号土器埋設遺構出土土器(第93図-5、図版26-4)

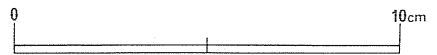
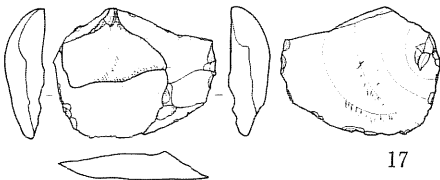
口縁部がやや外反し、体部半ばでいくぶん張り出す深鉢形土器である。口縁は4単位の波状口縁を呈する。体部にはLRの撚紐を縦位に回転した斜縄文が地文として施され、上半に沈線による文様帯が設けられる。沈線による文様は、横位に展開するやや崩れた渦巻文が主なモチーフである。

第2号土器埋設遺構出土土器(第93図-6、図版26-5)

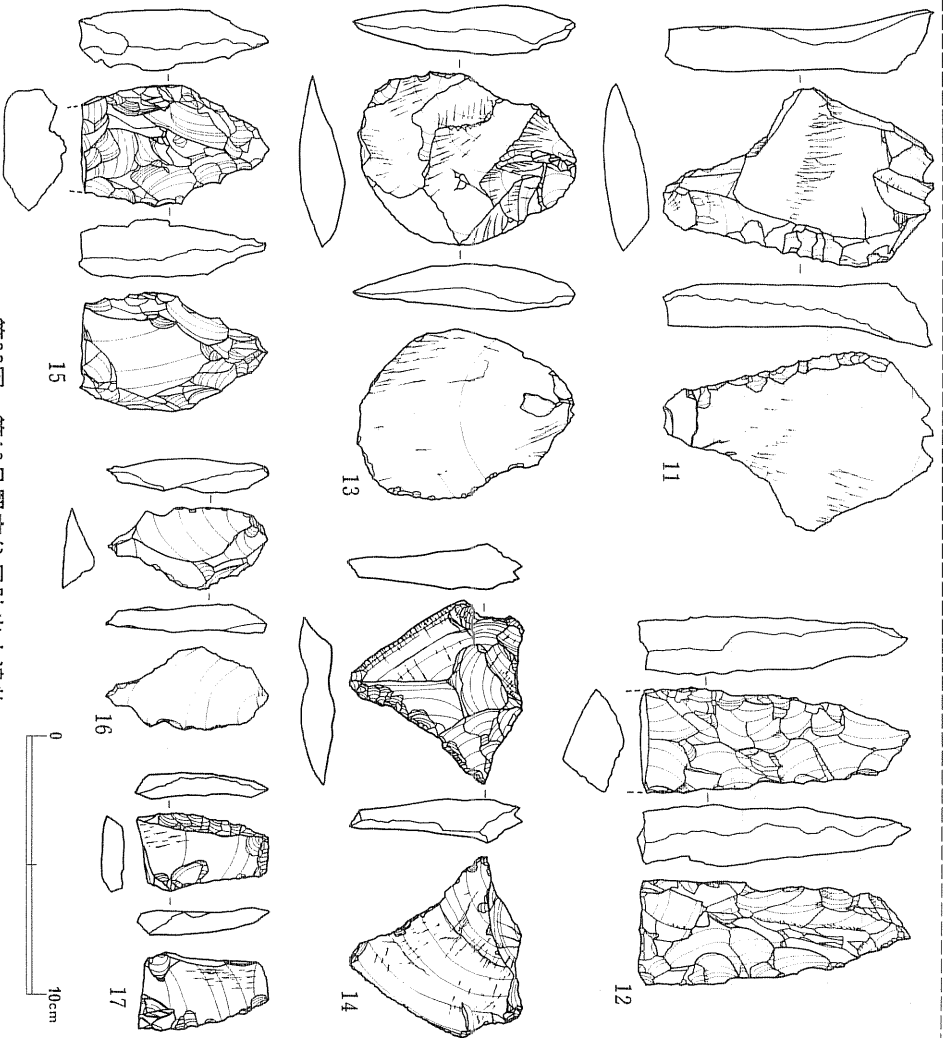
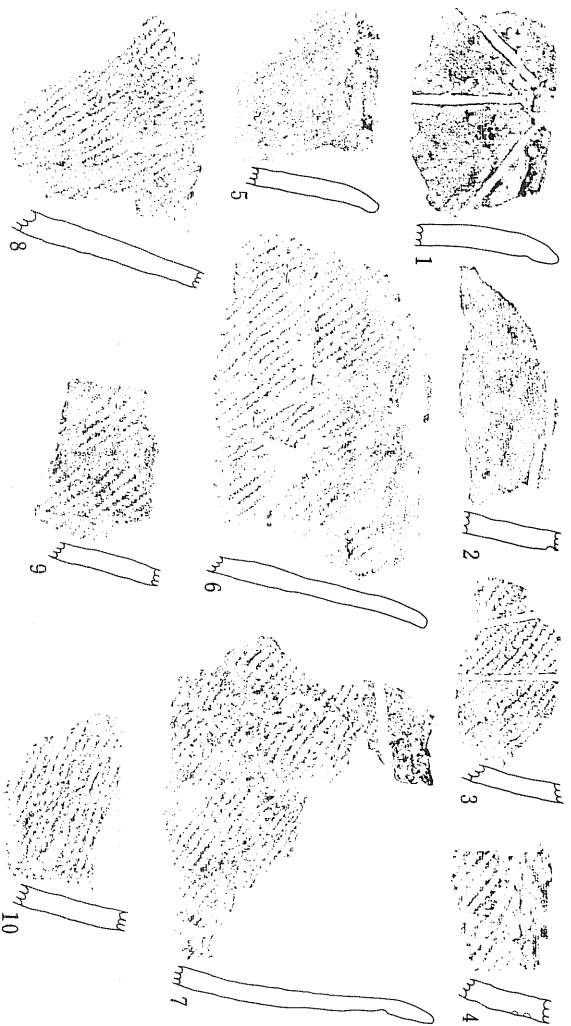
深鉢形土器体部上半の文様帯部分が用いられていた。地文にLRの撚紐を縦位に回転した斜



1・2:第16号土坑
 3~7・12・13:第8号竪穴住居跡
 8~11・14~17:第9号竪穴住居跡



第89図 第8号・9号竪穴住居跡、第16号土坑出土遺物



第90図 第10号竪穴住居跡出土遺物

第2節 検出された遺構と遺物



1~9 ;第11号竖穴住居跡
 10・20 ;第20号土坑
 11~19.21;第2号土墳墓
 22~34 ;第4号土坑

0 10cm

第91図 第11号竖穴住居跡、第4号・第20号土坑、第2号土墳墓出土遺物

縄文を施す。文様帯内には3条の沈線が一組となって横方向に流れるS字状のモチーフが描かれる。

第1号土壙墓出土遺物（第93図-4、図版27-1）

口縁は波状の折り返し口縁である。体部には地文として網目状撚糸文が施される。地文上に描かれる沈線文は、上下から向い合せに描かれる弧線と、その間を蛇行して結ぶ沈線で構成される。口縁の波頂部には4つの刻目が施される。

第2号土壙墓出土遺物（第93図-3、図版25、図版27-2）

第93図-3は口縁部を欠損した深鉢形土器である。体部から底部にかけては緩やかなカーブをもったプロフィールを呈する。沈線による文様は2重の倒卵形に描かれ、さらに中央に先端



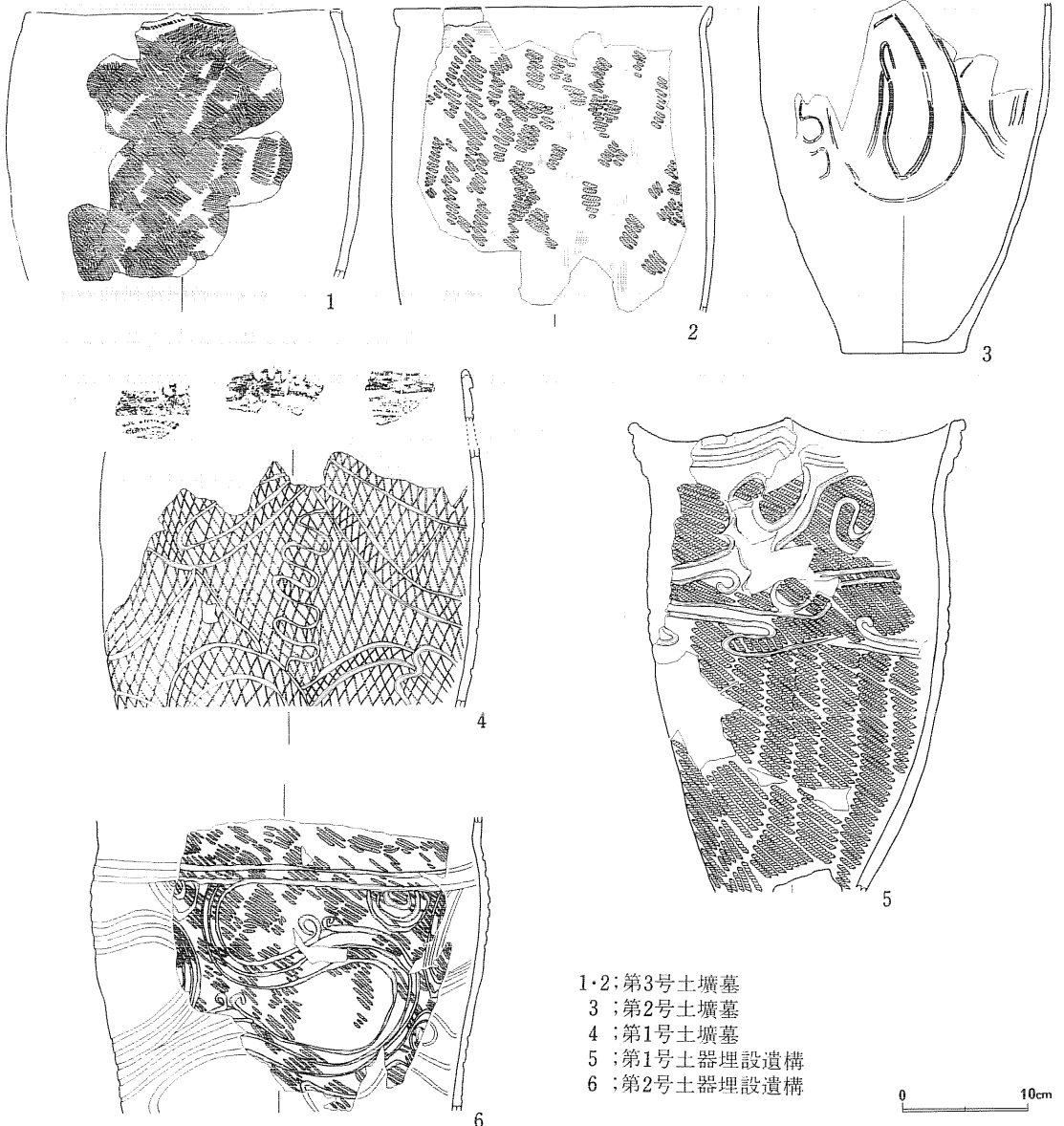
- 1・2; 第9号竪穴住居跡
- 3; 第10号竪穴住居跡
- 4; 第12号竪穴住居跡
- 5; 第11号竪穴住居跡
- 6; 第18号土坑
- 7; 第17号土坑

第92図 第9号～第12号竪穴住居跡出土土器、第17号・第18号土坑出土土器

が交叉する縦位2条の沈線が施される。

第3号土壙墓出土遺物（第93図-1・2、図版27-3・4）

1は波状口縁の深鉢形土器の破片である。波頂部は小さな山形の突起となり、頂部に刻みが入られる。口縁部に沿って撚紐の側面圧痕文が1条巡らされる。器面全体にLRの撚紐を横位、右上-左下の方向で施文した斜縄文が施される。口縁～体部まで緩やかに膨らむプロフィールをもつ。2は折り返し口縁の深鉢形土器の破片である。体部にはLRの撚紐を縦位回転して、まばらな斜縄文を施している。



1・2：第3号土壙墓
 3：第2号土壙墓
 4：第1号土壙墓
 5：第1号土器埋設遺構
 6：第2号土器埋設遺構

第93図 第1号～第3号土壙墓、第1号・第2号土器埋設遺構出土土器

遺構外出土の縄文時代前期～後期の土器

遺構外出土の前期から後期までの土器をⅥ群～Ⅷ群に大分類して記述する。この3つの土器群によって示される時期は、それぞれ第Ⅵ群が前期末葉～中期前葉、第Ⅶ群が中期中葉～中期後葉、第Ⅷ群が後期前葉である。寒川I遺跡では第Ⅵ群土器を出土する遺構が検出されていないが、第Ⅶ群、第Ⅷ群土器についてはそれらを出土する竪穴住居跡、土壌墓等が存在する。

第Ⅵ群土器（第94図-1～18、図版51）

1類 口縁部文様帯に絡糸体側面圧痕文を施文する土器（1～6）である。口唇部の観察できる資料では、L縄文を回転施文するもの（1）、非常に細いL $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right.$ の撚紐を不特定の方向に巻きつけた原体を回転するもの（6）がある。口縁部の絡糸体側面圧痕文はL $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right.$ の撚紐を軸に対して左巻きとしたものを器面に押捺しているのであるが、これについては軸自体をさらに他の軸へ巻いた原体で回転施文している可能性もある。1段の撚紐を軸に巻きつけた絡糸体の回転文では、表わされる縄文は2段撚紐の回転文である単節縄文である。これらをさらに他の軸へ巻きつけた原体の回転文では、前段の軸の太さに規制された短い縦位の単節縄文列が回転方向に並んで表われることになる。この際の原体は2重の螺旋となるが、単に前段の絡糸体側面の圧痕文と異り、1回の回転施文で連続した条を表わすことができ、かつ施文幅に応じた数の条を同時に表わし出すことができる。1～6の資料は破片であるため条の連続性や、同時性を確かめることは難しいが、以上のような回転による施文の可能性は高い。こうして施文される縦位の短縄文列は、口縁に対して平行に巡る場合（4、5）と、斜位のものと同横位のものと同が交錯する場合（1～3、6）とがある。また、6の資料では条の間に器面に対して右下方向からの刺突列が施文されている。口縁部文様帯と体部の境には粘土紐が貼り付けられ（3、4）、その上に半截竹管文列が施文されている例（4、5）もある。体部に施される縄文は、4、5の資料によれば羽状とすることを基調とする。摩滅しており判然としないが、両者ともRL原体を横位、縦位と交互に回転方向を変えて施文したもののようである。

2類 7の資料1点のみであるが、半截竹管を用いて格子目状の文様を施文している。上端はないが、口縁部資料と判断される。

3類 口縁部文様帯を2段の撚紐の側面圧痕文や同じ2段の撚紐を折り曲げた際の先端部の刺突文、さらに粘土紐の貼付文などによって加飾したものである（8、10～12）。口縁上端は波状となる例があり（11、12）、側面圧痕文は口縁の形状に沿って施文されるため回転施文によるものではないことがわかる。原体の種類は8ではL $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right.$ 、10～12ではL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ である。口縁部文様帯内の粘土紐の貼り付けは波頂部から垂直に降ろすもの（12）と、波頂部を二又に分けるように貼るもの（11）とがある。体部との境にも1類同様粘土紐が貼り巡らされ、2段の撚紐を折り曲げた先端部の刺突文が施される。

4類 上記1～3類土器が口縁部の資料であるのに対し、本類は体部の資料である。結束第1種原体の羽状縄文を施すことを特徴とする(9, 13～18)。R $\left\{ \begin{array}{l} 1 \\ 1 \end{array} \right.$ と L $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right.$ の2種類の撚紐を、交叉させて各々折り曲げ、2段の撚紐LRとRLの合体した原体を回転施文している。回転の方向は横位であるが、器面上で原体の位置を180°回転させるため、条同土がX字状に交わって表わされる場合もある(17, 18)。9の資料では口縁部文様帯と体部文様帯の境にある半截竹管文列もその上部にあらわされている。

以上の第I群土器のうち1類土器は前期末の円筒下層d式、3類土器は中期前葉の円筒上層a式に比定され、4類土器はそれらの体部資料である。2類土器にみられる格子目状の半截竹管文は本来円筒下層、円筒上層のいずれにも施されない文様であり、日本海岸づたいに伝わった北陸系の土器と推定される。

第VII群土器(第94図-19～31、第95図、第96図、第97図-1～18、図版52、図版53-1～41)

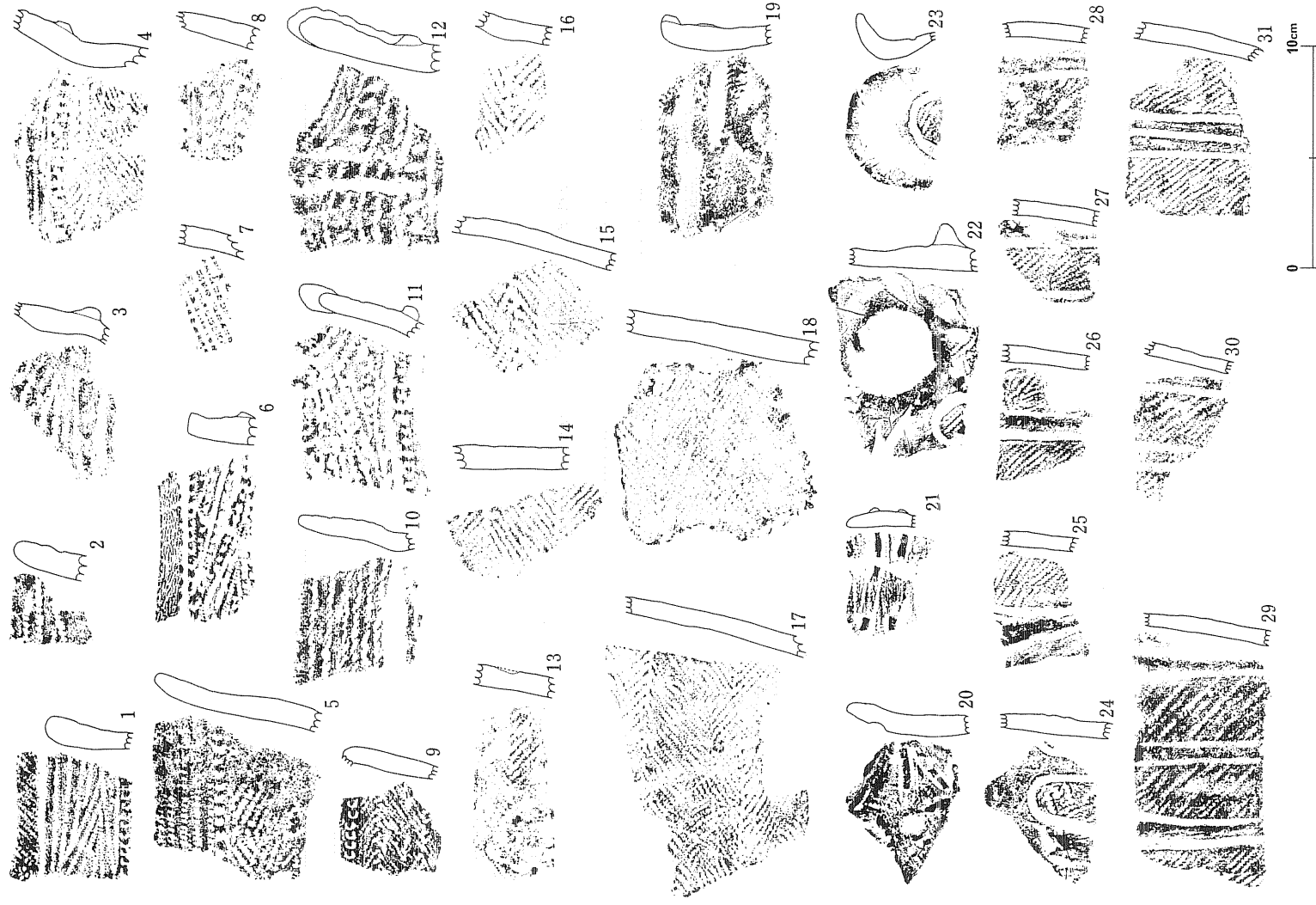
1類 口縁部文様帯に貼り付けられた幅広の粘土紐と、その上に施文される縄文によって特徴づけられる土器である(第94図-19)。粘土紐は口縁上端とその下部に貼り巡らされている。粘土紐上に施文される縄文原体は細いRLの撚紐である。

2類 器面に地文としての縄文を施した後、細い粘土紐を貼り付けるもの(第94図-20, 21)。20, 21の資料とも地文に用いられる縄文はRLの撚紐による。

3類 貼付後よく調整された粘土紐によって口縁部近くでは渦巻文、体部では懸垂文が表わされる土器である(第94図-22～31、第95図-3・4)。貼付けられる粘土紐はその両側に施文される沈線と相俟って隆線化される。22の資料では左巻の渦巻文から隆線が下されている。隆線とともに逆U字形の沈線による懸垂文が描かれる例(22～24)もある。隆線間、沈線による懸垂文の区画内にはLRの撚紐を縦位に回転した縄文が施文されている。

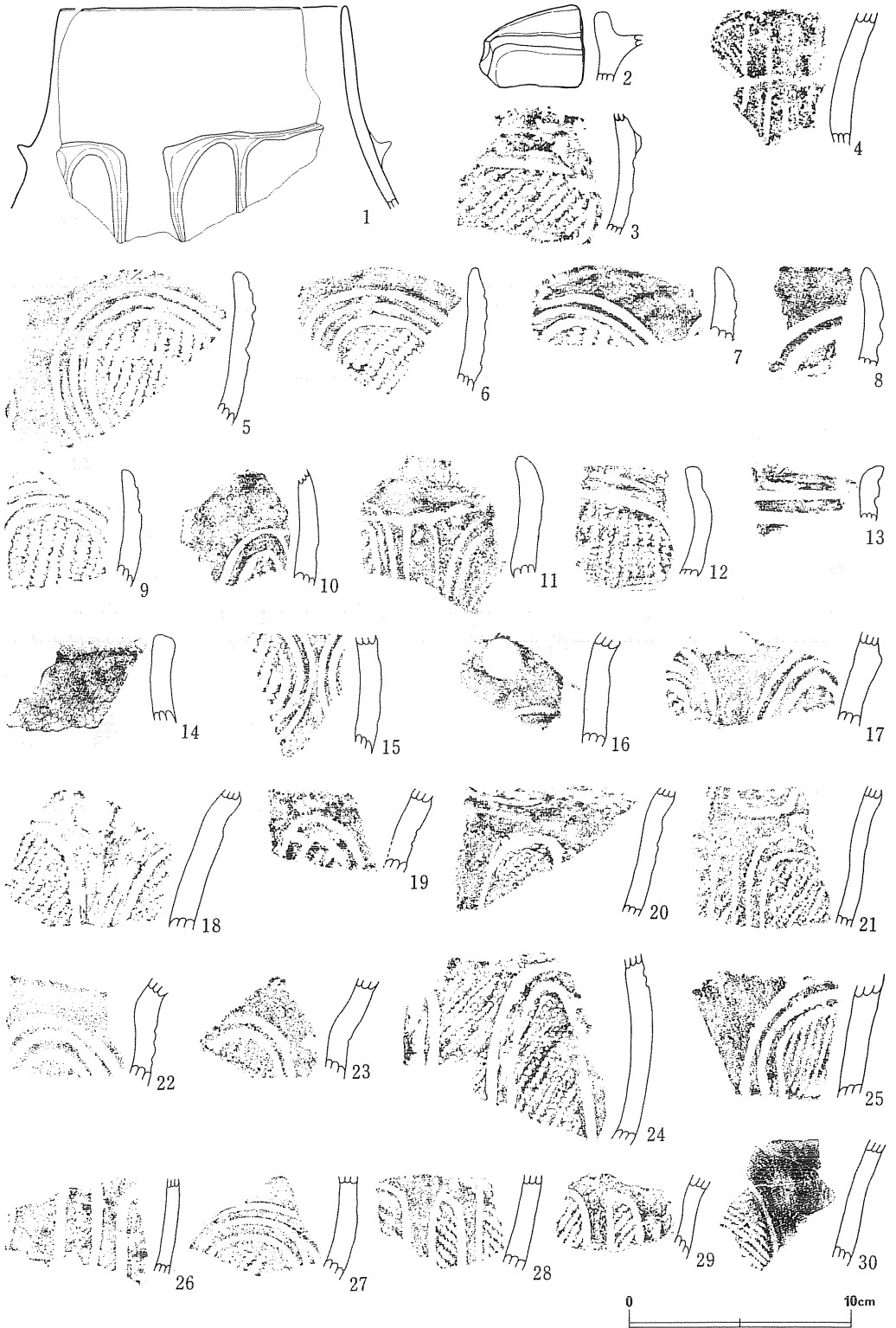
4類 1～3条の沈線によって円形区画文、懸垂区画文を描く土器である(第95図-5～30、第96図-1～34)。地文として縄文が施されるがRL縦位回転のものが圧倒的に多い。口縁部資料(第95図-5～12)によれば、緩い波状口縁のもの(5～7・9)と平縁のもの(8・10～12)とがある。円形ないしは懸垂区画文が並列する上部の無文部分に円形の凹文を施す例(16～18)もある。この凹文は次の5類土器(第97図-8)、6類土器(第97図-15・16)にも施される。

5類 口縁部に無文帯を設け体部との境に刺突列を巡らすことを特徴とする土器である(第97図-1～5・7～13)。刺突列は1列である場合(1・3・5・9)と2列である場合(2・4・8・11・13)があり、さらに沈線と併せて用いられる例(7・10)がある。刺突文をあらわす際の工具は竹管状のものを用いるが、器面に対して垂直に押しあててゆくもの(8～13)、器面に対して右方向から刺突するもの(1・3・5)、左方向から刺突するもの(2・4)がある。体部には縄文を回転施文するだけのものと、縄文施文後沈線による逆U字形の懸垂区画文を描く場合(8～10)がある

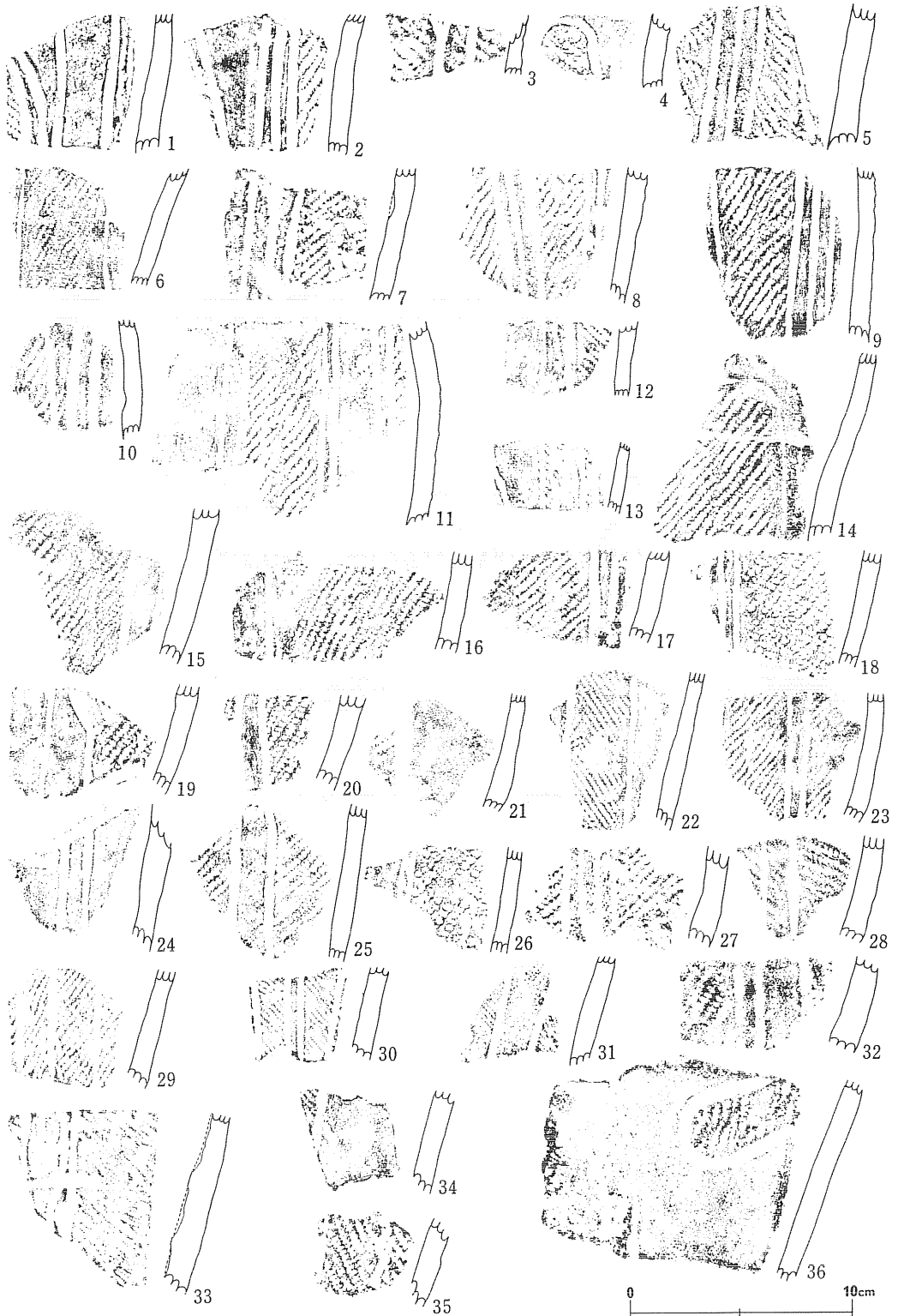


第94図 遺構外出土の縄文土器20

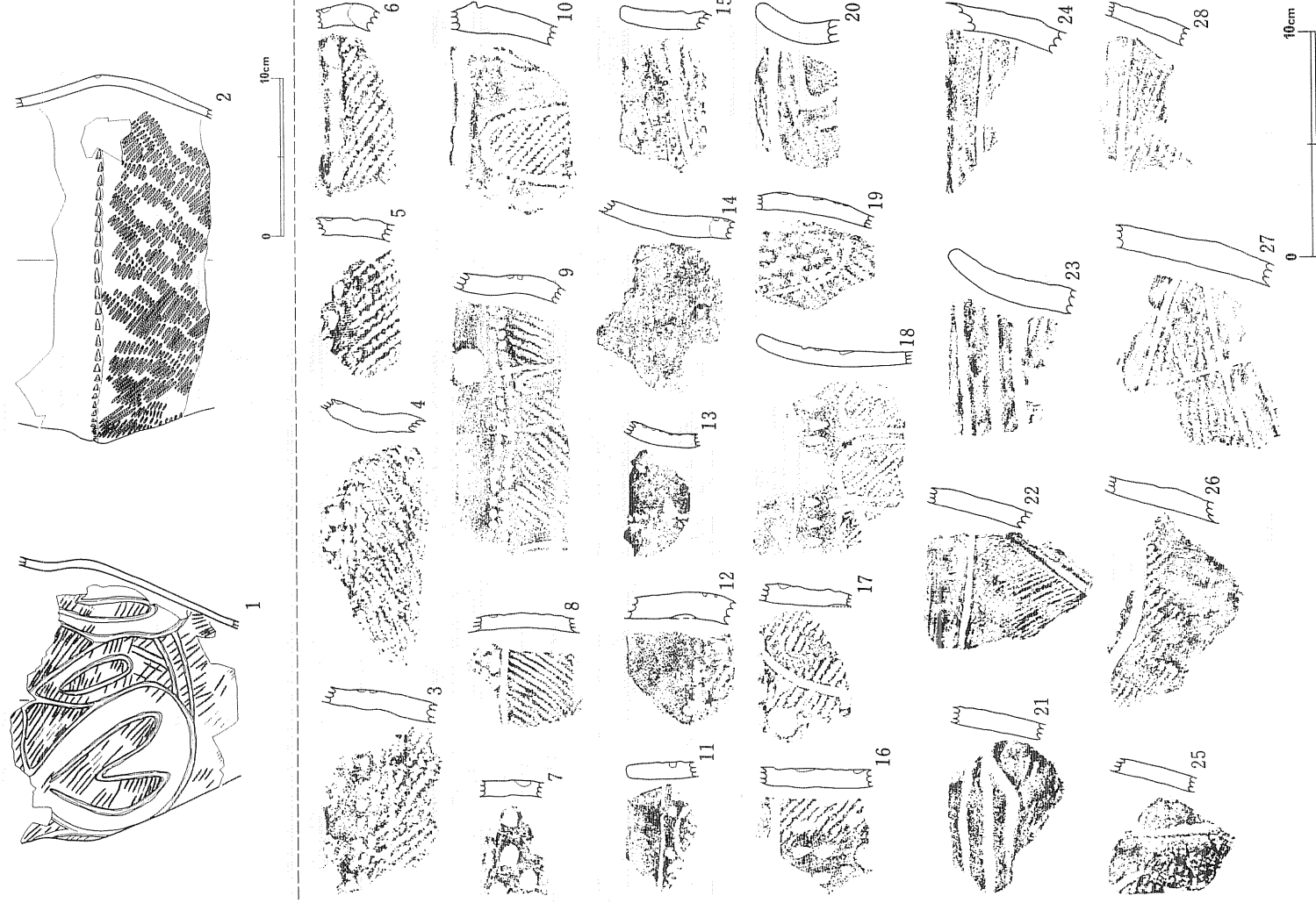
前期～中期



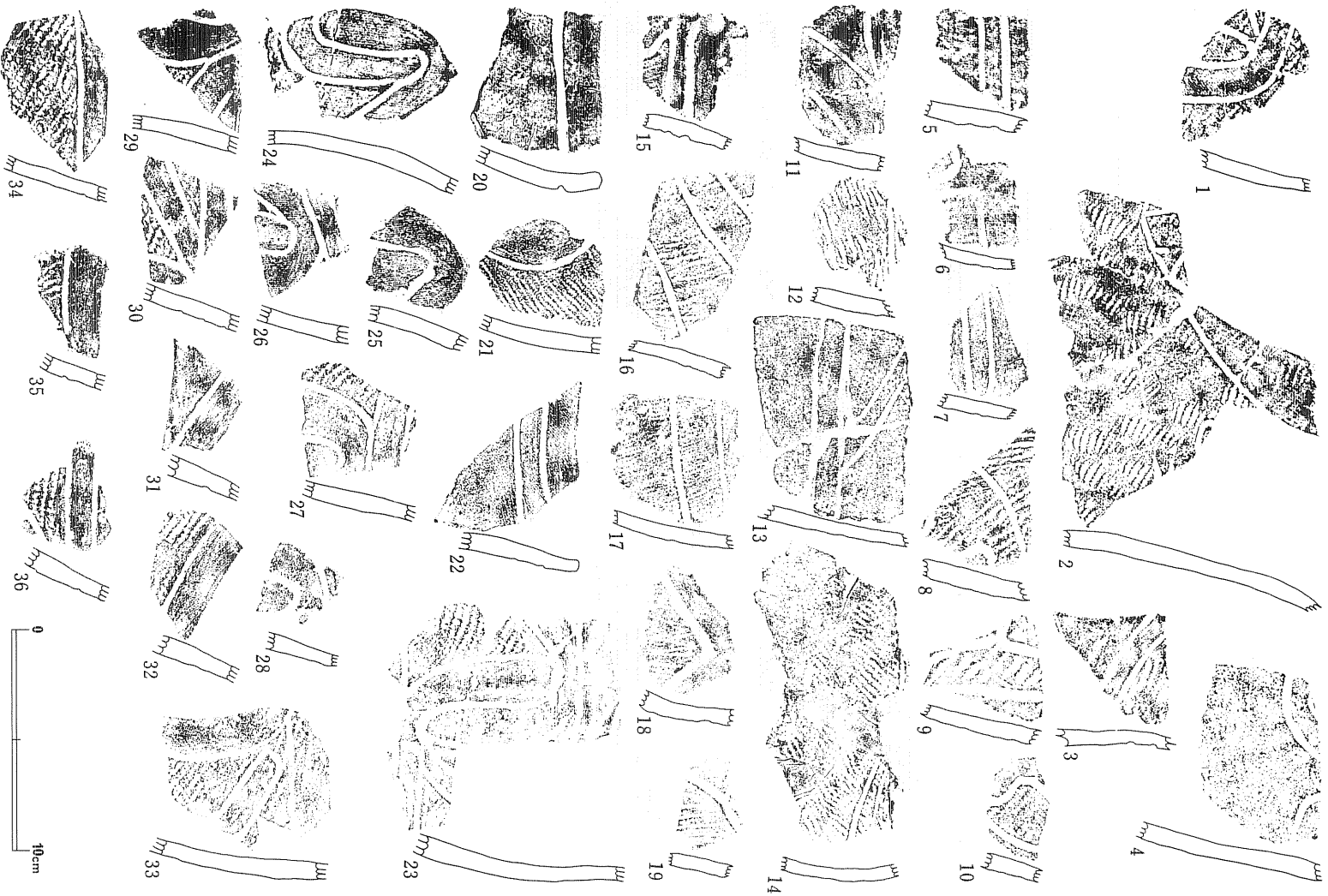
第95図 遺構外出土の縄文土器(21) 中期



第96図 遺構外出土の縄文土器(2) 中期

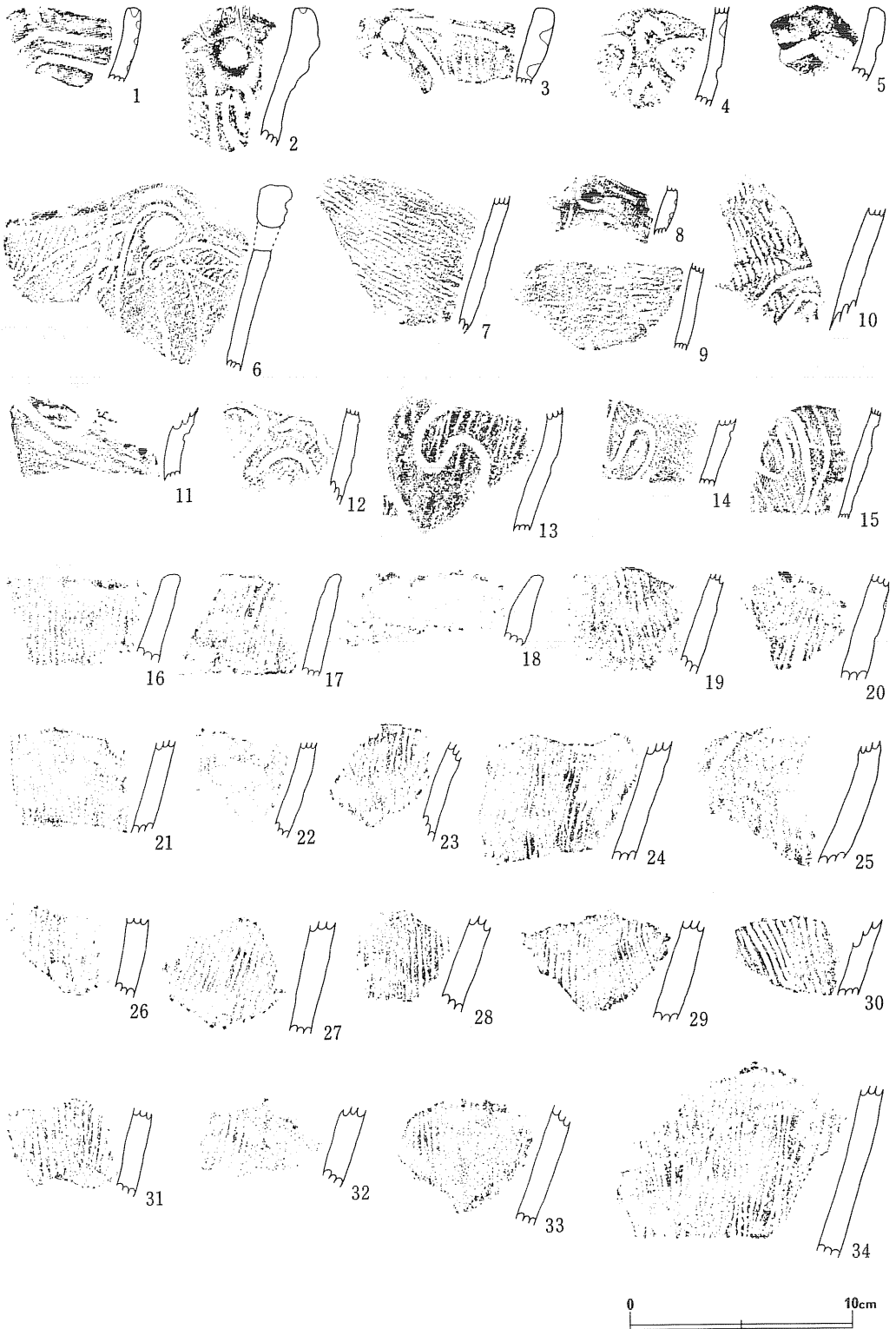


第97図 遺構外出土の縄文土器(23) 中期～後期

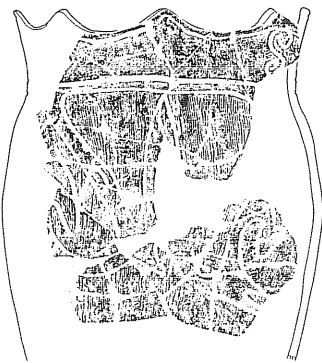
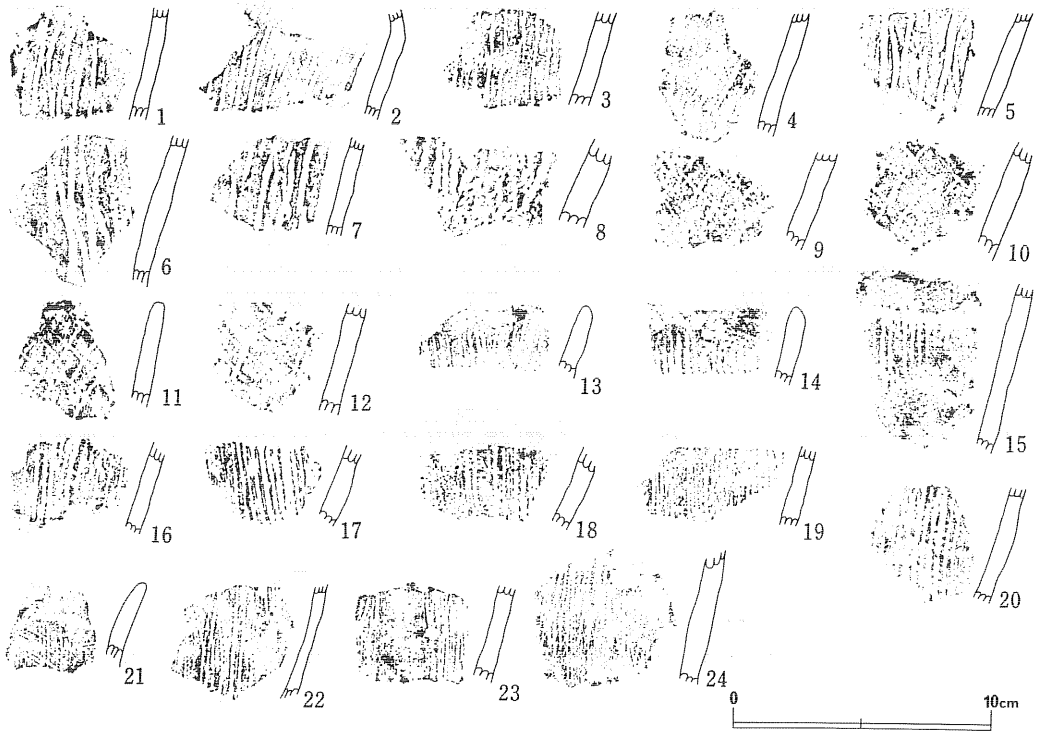


第98図 遺構外出土の縄文土器(24)

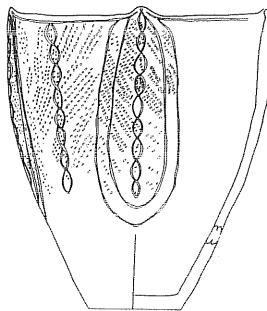
後期



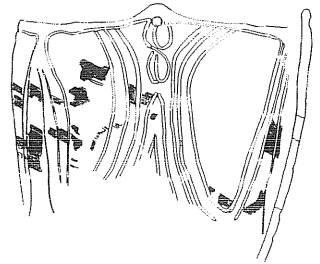
第99図 遺構外出土の縄文土器(25) 後期



若美町・三十刈遺跡



東由利町・片符沢遺跡



秋田市・下堤D遺跡

第100図 遺構外出土の縄文土器(26)およびⅧ群1類関連土器 後期

が、地文として用いられる縄文の原体はL Rの撚紐が用いられ、縦位に回転するもの（1・2・4・5・9・11）と横位に回転するもの（3・7・8）とがある。なお12・13は同一個体であり、口縁部の無文帯と体部との境をめぐる刺突列の他に無文帯を垂直に降りる刺突列が施される例である。6類 沈線による区画文の内または外を刺突文によって充たすことを特徴とする（第97図-6・14-18）。刺突文は5類同様竹管状の工具を用いるが、6では右方向から、他は下方からの施文である。沈線によって描かれる円形区画文内部に充填する例（18）や、懸垂区画文の外側に施す例（16・17）がある。また15・16の資料では刺突文とともに円形の凹文も施されている。地文として用いられる縄文はL Rの撚紐を縦位に回転したもの（15~17）と横位に回転したもの（18）とがある。

7類 部厚い粘土紐の隆起帯によって器面を加飾する土器である（第95図-1・2）。器面は丹念にミガキがかけられている。1の資料では口縁部に幅の広い無文帯があり、体部には隆起帯による懸垂文が施文されている。

8類 幅の広い沈線によって円形や懸垂形以外の区画文を描くもの（第96図-34・36）である。どのような構図で描かれているのかは詳かにし得ない。36の資料では地文の縄文はR Lの撚紐が用いられ区画に沿わない方向で施文されていることから、縄文施文後に沈線を描き外側を擦消したものとわかる。

9類 縦位の綾絡文が施文される土器である（第96図-35）。綾絡文の施文はR Lの撚紐の横位回転による縄文施文後におこなわれている。

以上の第Ⅶ群のうち1類土器は円筒上層c式、2類土器は円筒上層d式、3類土器は大木9b式、4類、6類、7類は大木9c式、5類は中の平Ⅲ式に比定可能である。

第Ⅷ群（第97図-19~28、第98図~第100図、図版53-42~54、図版54、図版55-1）

1類 直線的沈線と曲線的沈線との組み合わせによって文様を描く土器である（第97図-19~28、第98図、第99図-1~15）。いくつか同一個体の破片を含むが、第98図-20~36の資料からは上下限を2条の平行沈線で画した幅広の文様帯中に、卵形の入組部分をもった沈線による文様を描いた土器に復元される。また第99図-1~7は波状口縁をもつ土器の波頂部の資料であるが、2・3・6では波頂部直下に円形の凹文・窩文を施し、それを上端として蕨状沈線文、卵形の楕円形沈線文が描かれている。その他の破片からは部分的ながら三角形の構図に描かれた沈線文（第97図-26）や緩い鋸歯状の懸垂文（第98図-10）などが看取される。地文には縄文が施される例と絡条体回転文が施される例とがある。縄文はL Rの短い撚紐を縦位に回転したもの（第98図-2）や、文様帯の展開方向に縄文の条が沿うようにL R原体を左上-右下の方向で回転したもの（第97図-26）などがあるが、一般に原体の回転は一定の方向性なく行われている。絡縄体回転文は縦位に施されている。

2類 器面全体に絡条体回転文の施される土器である（第99図-16~34、第100図-1~12）。

絡縄体には軸に1段の撚紐を一定方向に巻きつけたもの(第99図-16~34、第100図-1~8)と交叉させて巻きつけたもの(第100図-9~12)がある。前者では平行撚糸文、後者では網目状撚糸文が表わされている。これらの原体は器面上で縦位に回転されており、施文方向が極端に斜めに傾いたり横位になることはないようである。平行撚糸文の施された口縁部資料第99図16~18ではその形状は平縁となる。

3類 2類のうち平行撚糸文の施された土器と類似した効果が表わされるが、櫛歯状工具による条痕文が施された土器である(第100図-13~24)。条痕文の施文方向は縦位が基調であるが、21の資料では縦位に工具をひいた後、斜位方向に重ねて施文することにより部分的ながら格子目状の条痕文を表わしている。

以上の第Ⅷ群は後期前葉に位置づけられるが、1類土器のうち第99図-2・3・6にあるような蕨状の沈線文を描く土器は秋田県内にあっても数少ない資料である。この種の土器と系統上近縁する関係における土器としては若美町三十刈遺跡、秋田市下堤D遺跡、大内町片符沢遺跡出土の資料があげられよう。また第98図中に示した資料は体部の文様帯中に入組文が描かれることから、十腰内Ⅰ式の範疇で理解し得る土器である。2類および3類土器は1類土器の地文と共通する縄文、絡糸体回転文の施文法から、1類土器に伴った粗製土器と見られる。

3、縄文時代晩期終末から弥生時代にかけての遺構と遺物

この時代の遺構として採り上げられるものに土坑1基がある。また他に斜面上に土器の集積する箇所が検出され土器捨場と判断された。

第24号土坑(第110図、図版7-4、図版55-2)

調査区中央からやや南に寄ったMC49グリッドにある。第Ⅲ層で黒褐色土のプランを確認した。平面形態は楕円形と推定されるが、東側半分を第13号竪穴住居跡によって切られているため、全容は不明である。現状での短軸の長さは85cmを測り、深さは約20cmである。長軸はN-43°-Eと推定される。覆土の上層から図版55-2の土器を、中ほどから礫1点が検出された。

図版55-2は台付の浅鉢形に復元される土器である。口縁は平縁で直立気味に立ち上がり、上端が僅かに外側に張り出す。口縁下に幅2cm程の無文帯をはさみ、3条の平行沈線がめぐり、この平行沈線がめぐり部位で大きく屈曲する体部には、3条の沈線によって3段に重層する変形工字文が描かれる。沈線が集まる結節部には1対の低い粘土粒が貼り付けられている。台部との境にも2条の平行沈線がめぐらされている。沈線は概して細く鋭い。

第2号捨場(図版7-5)

調査区の南西MJ・MK45グリッドを中心にした箇所が僅かながら凹んだ谷頭を形成し、暗褐色土中から多量の土器が出土した。その範囲は約2㎡前後である。特にMJ45グリッドにあ

る木根をひき抜いた跡の攪乱穴から多く出土している。土器の出土状態から調査区外西側へものびる可能性がある。

この捨場跡から出土した土器は、変形工字文を主たるモチーフとして文様を描く土器と、口縁部に数条の平行沈線文を描き体部は全面縄文が施される土器、さらにそれらの伴う粗製の甕形土器に分けられる。以上の3つを順に第Ⅸ群、第Ⅹ群、第Ⅺ群土器として記述する。

第Ⅸ群土器………沈線によって変形工字文、波状文が描かれる土器

1類（第102図-1～4、図版56）

平縁の浅鉢形土器に復元される土器である。口縁上端に2～3条の平行沈線がめぐり、沈線間は調整され浮彫的に仕上げられる。口縁上端が肥厚し内側へ向くもの（1・2）と、直立気味に弯曲するもの（3・4）がある。

2類（第101図-3・第102図-5～8・16、図版55-3、図版56）

波状口縁の浅鉢形土器とその破片である。第101図-3は4単位の波頂部をもつ浅鉢形土器に復元される。口縁は大きく外側に開き、頸部で弱く屈曲する。体部はごく僅かな膨らみをもつ。山形の波頂部は2つに分かれる。外面に施文される文様として、口縁直下に2条の平行沈線が口縁の波形に沿ってめぐり、体部には波頂部とその中間に対応する位置で結節部をもった変形工字文が、2条ずつの沈線によって2段に重層して描かれる。結節部には低い粘土粒が貼付されている。この他、変形工字文の結節部に粘土粒の貼付けがなく沈線が反転して描かれる例（第102図-7）や、口縁上端に縄文の施文される例（第102図-8）、2つに分かれた波頂部両端が幾分肥厚し突起化する例(16)などもある。変形工字文を描く沈線は細く、鋭い。

3類（第102図-9～15、図版56）

平縁の鉢形ないしは浅鉢形の土器に復元され、口縁上に突起が付けられる。突起は先端に刻みのある場合（9）と2つに分かれる場合（10～15）がある。体部には3条ずつの沈線によって変形工字文が描かれる例（9）、5条の平行沈線の最下段に粘土粒を貼付け工字文に仕上げた例（11）がある。11の突起頂部には刺突文も施される。沈線はやはり細く鋭く描かれる。

4類（第102図-17～21、図版56）

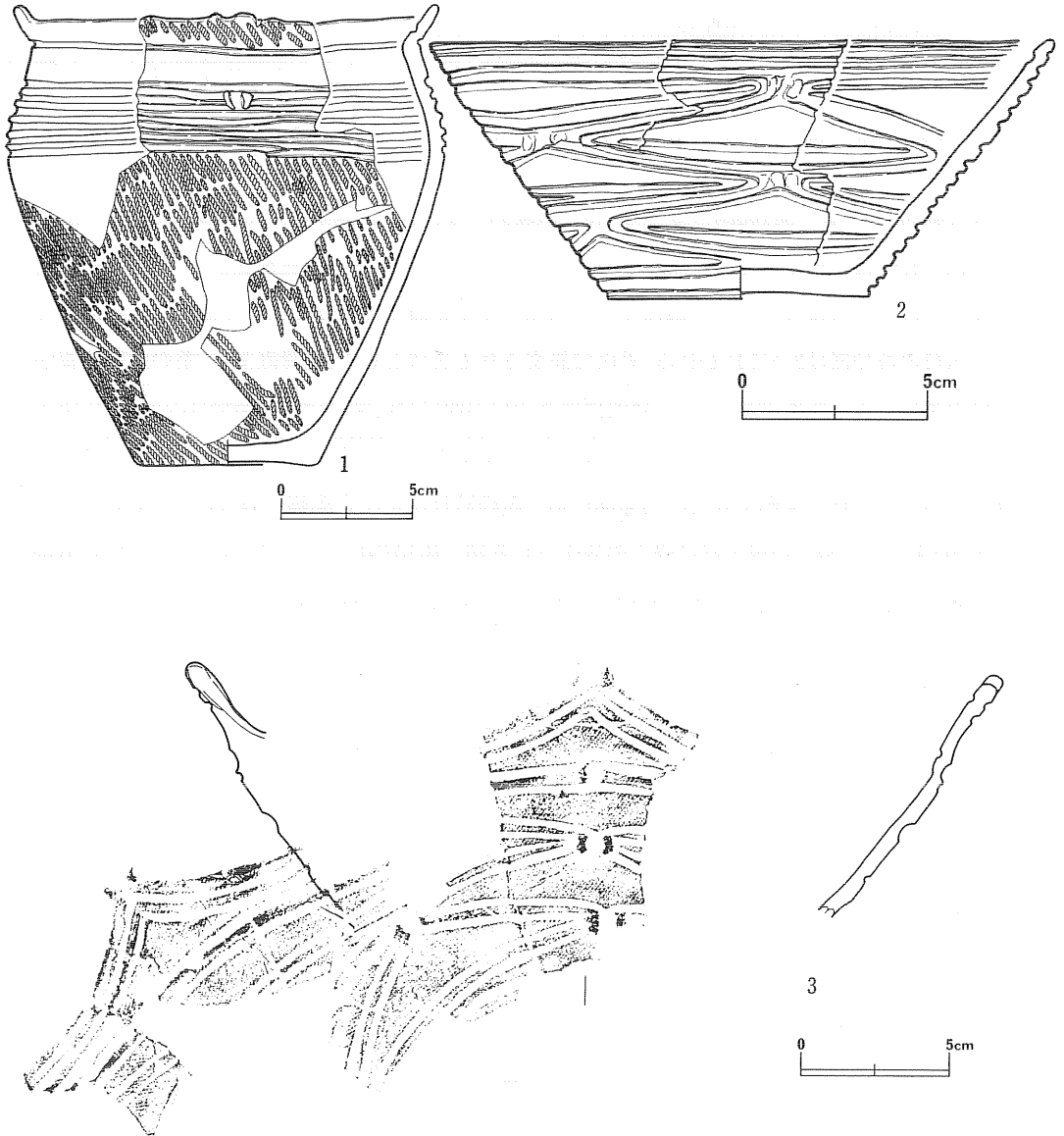
変形工字文を構成する沈線間に刺突文も併せて施される土器である。台部の資料2点（21、23）が含まれる。小破片のため器形は推定し難いが、鉢形と浅鉢形の2つの器形があるようである。23は円形の透し孔もつ台部か、3脚形になる台部と推定される。2～3列の比較的整然と並ぶ刺突列を施文した後、全面に刺突文を充填している。

5類（第102図-22、第103図-1～3、図版56）

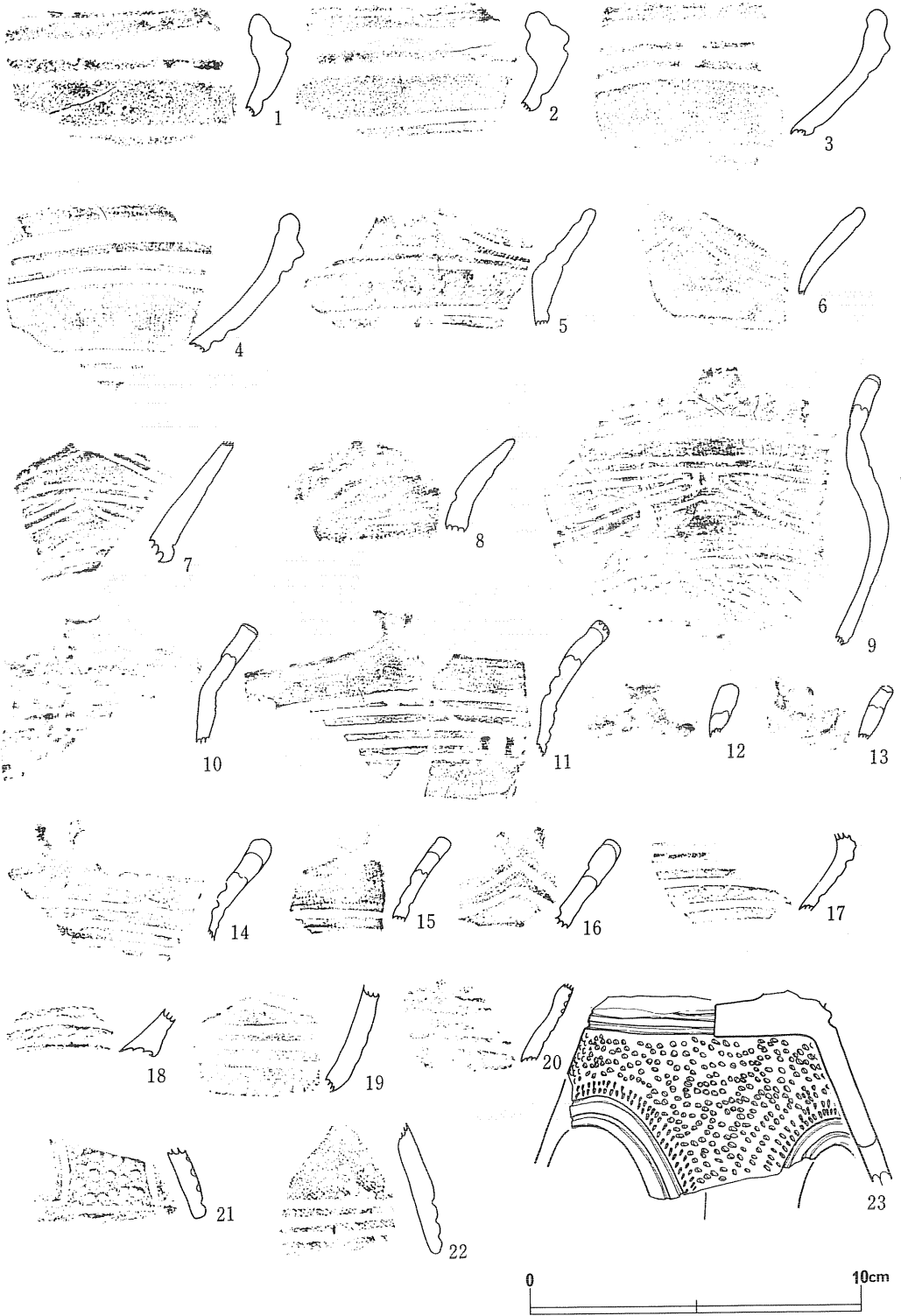
いずれも台部の資料である。3条ずつの沈線が台下端にめぐり、第103図-3は3条ずつの平行沈線が2段に分かれて施文された例である。

6類(第101図-2、第103図-4~9、図版55、図版57)

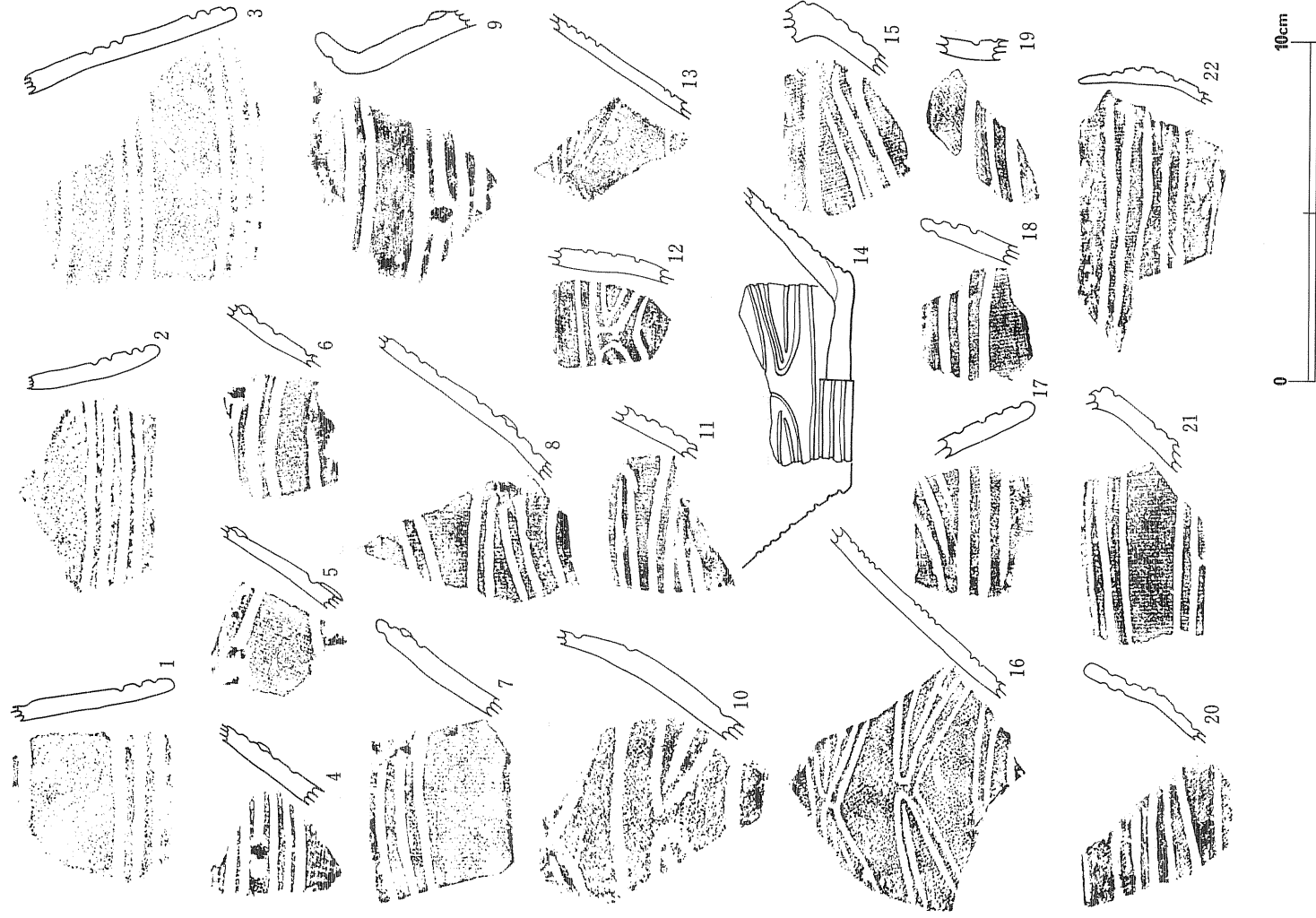
比較的太い沈線で変形工字文を描き、沈線の集まる結節部には一対の粘土粒が貼付けられる。器形は浅鉢形(第101図-2、第103図-4~8)と、口縁上端が「く」の字に屈曲する鉢形(第103図-9)の2種類がある。第101図-2は体部が直線的な平縁の鉢形土器である。体部には変形工字文が2段に重層して描かれている。



第101図 遺構外出土の弥生土器(1)



第102図 遺構外出土の弥生土器(2)



第103図 遺構外出土の弥生土器(3)

7類（第103図-10～15、図版57）

変形工字文が結節部に粘土粒の貼付けをもたず、沈線の反転の繰り返して描かれるものである。第103図-10～15は全て体部の資料である。口縁部資料では2類、3類に含めて記述した資料第102図-7、9がある。2類、3類同様、沈線は細く鋭く描かれる

8類（第103図-16・17、図版57）

波状文が描かれる。16は口縁部が屈曲する浅鉢形土器の体部破片である。17は台部の資料である。いずれも3条1組の沈線で波状文が描かれる。波状文は台部に施文されることの多い文様であるが、浅鉢形土器の体部に施された例としては、宮城県一迫町山王遺跡第Ⅲ層出土土器（註4）に類似のものがある。

9類（第103図-18～22、第104図-1、図版57）

平行沈線、斜線が描かれる土器である。全体では変形工字文が構成されると思われるもの（第103図-18～20）と、平行沈線がめぐりだけのもの（第103図-22、第104図-1）がある。

10類（第104図-2・3、図版57）

波状工字文が描かれる。地文として細かなRL縄文が施文されている。

11類（第104図-4・5、図版57）

壺形土器の肩部の破片である。肩部は緩く下降して、撫肩のプロフィールをもった壺と推定される。4は頸部との屈曲部位に1条、肩に3条の沈線がめぐり。

12類（第104図-6、図版57）

蓋である。中央に2条、外縁近くに1条の同心円文が描かれる。

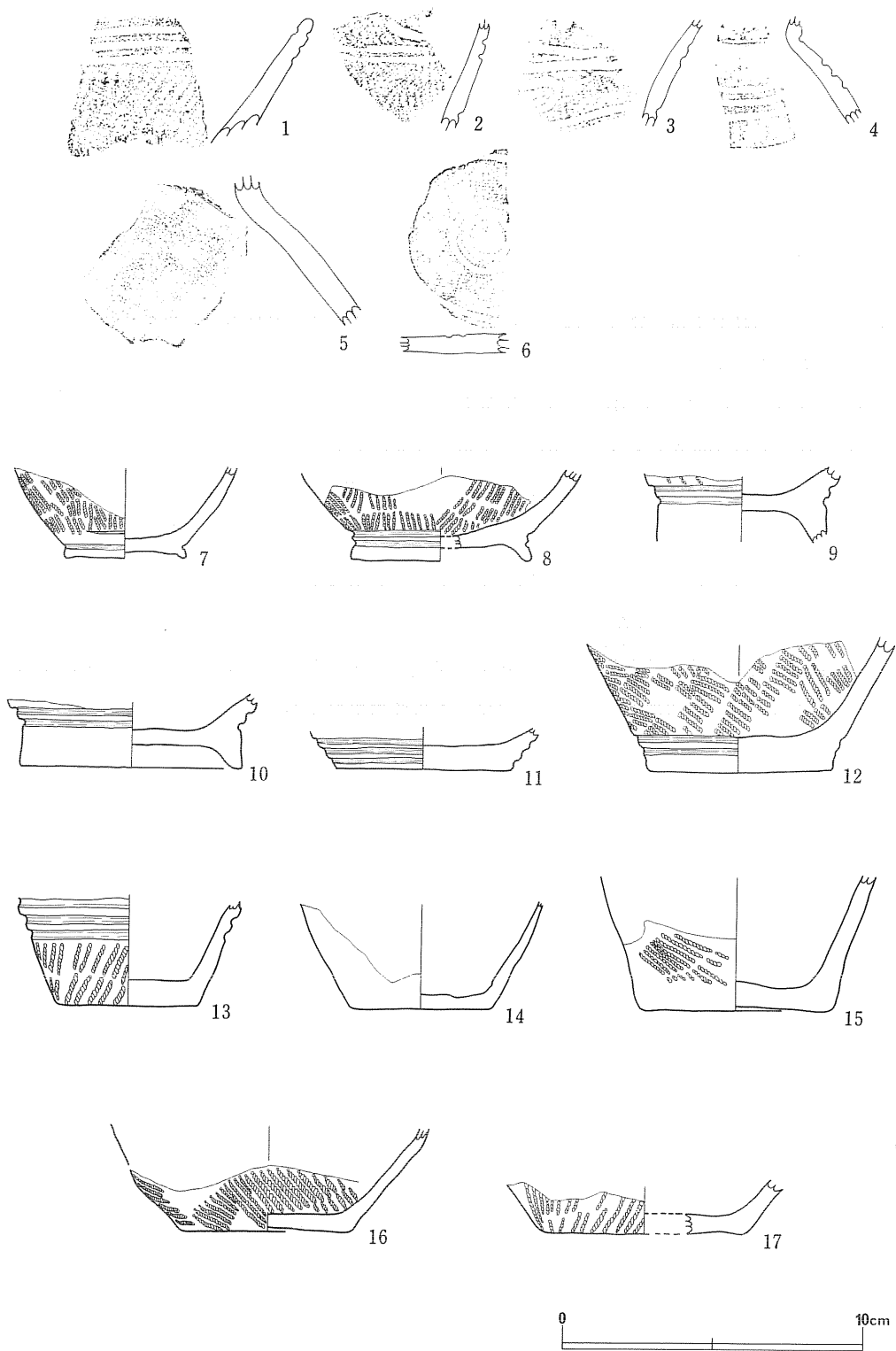
13類（第104図-10、11、14）

第Ⅸ群土器の底部資料である。ごく低い高台がつけられ、高台と底部の境に1～2条の平行沈線がめぐりもの（10）や、底部に2～3条の平行沈線をめぐらすもの（11）がある。

第Ⅹ群土器……口縁～頸部に4～5条の平行沈線を施し、体部以下には全面縄文を施す土器。

1類（第101図-1、第107図-1～10、図版55-3、図版58）

口縁上端が短く「く」の字形に屈曲するか、僅かに直立する鉢形土器である。第101図-1は、口縁上端が屈曲して外側に開き、頸部から体部も緩く「く」の字形に屈曲する鉢形の土器である。口縁上端と体部にはRLの撚紐をやや斜位に回転し、縦走気味の縄文を施文している。また口縁上に扁平なB突起がつけられる。口縁～頸部には幅1.5cm程の無文帯をおいて6条の平行沈線が施されるが、口縁上のB突起の位置に対応して、2条目の沈線に1対の粘土粒が貼付けられている。口縁の内面には1～2条の沈線が巡らされるもの（第101図-1、第107-1～3・5）の他、沈線の施されない第107図-4のような資料もある。第107図-6～10は2類、3類土器の頸部破片の可能性もある。



第104図 遺構外出土の弥生土器(4)

2類 (第107図-11、図版58)

波状口縁の鉢形土器である。口縁直下に1条の沈線がめぐり、口縁の屈曲部に2条の平行沈線がめぐり、頸部には無文帯において4条の平行沈線が施され、上から2条目の沈線に1対の粘土粒が貼付けられる。体部にはR Lの撚紐をやや斜位に転がし、縦走気味の縄文を施す。

3類 (第107図-11・12、図版58)

平縁の浅鉢形土器である。11は頸部で僅かに屈曲し、間に無文帯を挟んだ口縁上端と頸部屈曲部に3条ずつの平行沈線が施されている。体部にはL Rの撚紐を斜位に回転し、横走する縄文を施文している。12は口縁部に5条の平行沈線がひかれ、3条目の沈線に粘土粒を貼付けて結節部を作っている。体部の縄文はR Lの原体による。

4類 (第104図-7~9、12・13・15~17) X群土器の底部である。

XI群土器……口縁部が緩く「く」の字形に屈曲した甕形の土器である。全般に煤状炭化物の付着が目立つ土器である。体部に施される縄文はR Lの撚紐を回転した斜縄文である。縄文の施文を行う前に刷毛目による調整を施す例(第106図-5・10・21)もある。頸部は横位にナデ調整が行われている。口縁部~頸部の特徴から以下の3類に分類される。

1類 (第105図-1~5、図版59) 縄文の施文は体部だけに限られ、口唇部には施されない。

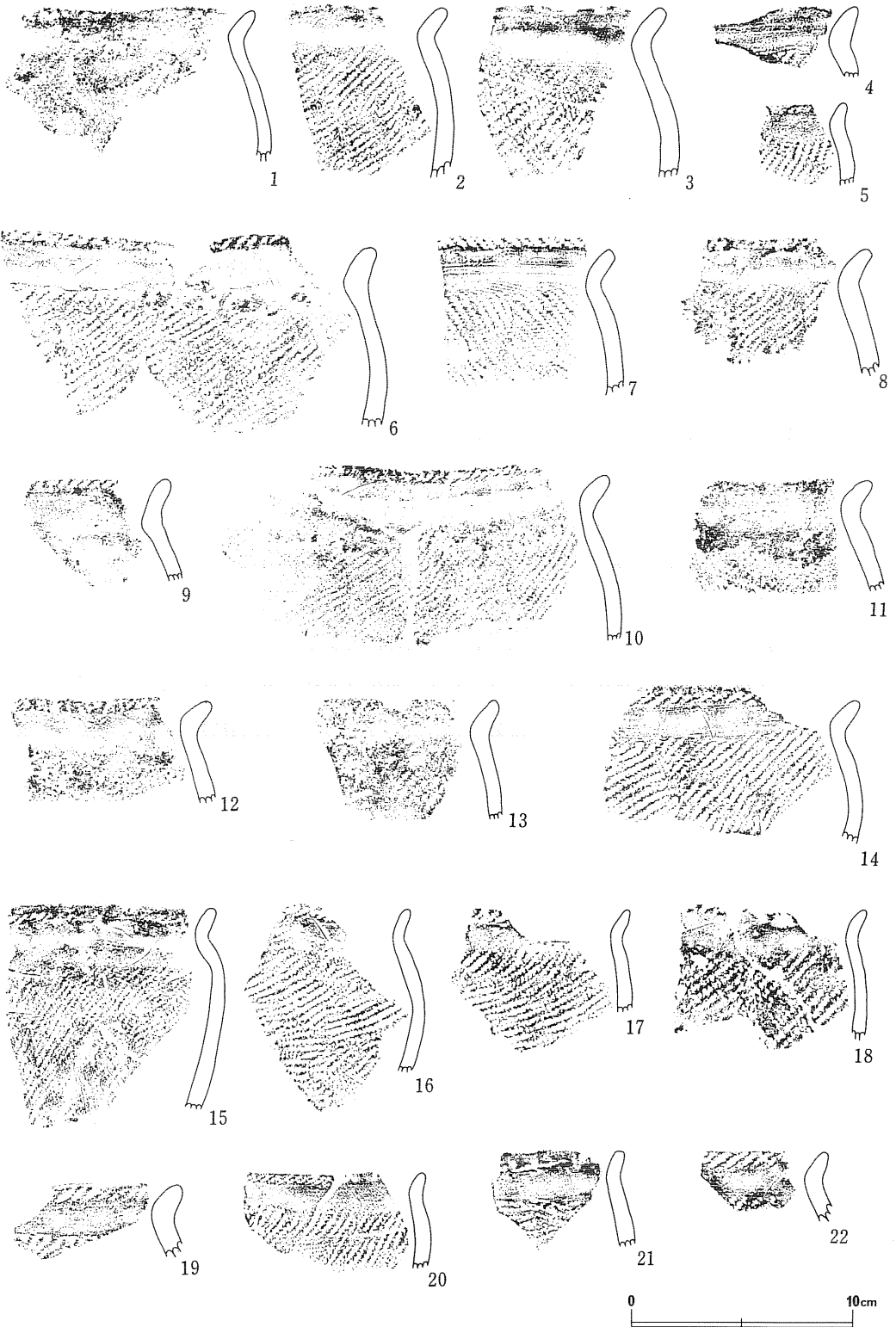
2類 (第105図-6~22、図版59) 体部の他、口唇部にも縄文が施される。

3類 (第106図-1~10、図版60) 口唇部にも縄文が施文され、頸部には2~3条の平行沈線がめぐり、この他、第106図-11~22に第XI群土器の体部資料、底部資料をあげる。また、第104図-14~17は第X群土器の底部資料である。

本遺跡出土の第IX群土器は、匏描沈線によって描かれた変形工字文を特徴とする土器群であり、第X群、第XI群土器は、その出土状態から第IX群土器に伴う土器群として扱われた。

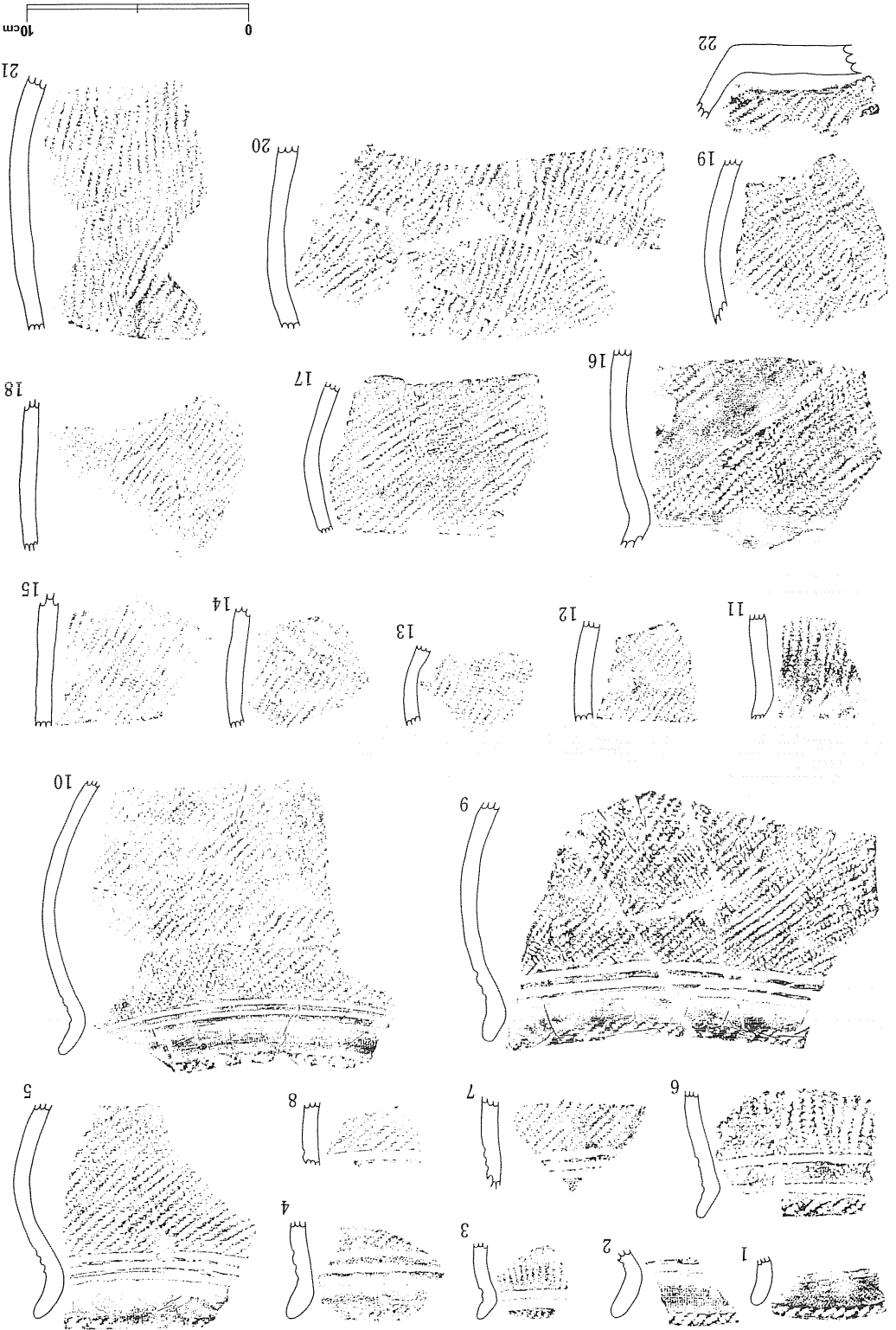
秋田県内で変形工字文によって特徴づけられる土器を出土する遺跡としては、県南部内陸の湯沢市^(註5) 釜田遺跡、増田町平鹿遺跡、^(註6) 県中央部沿岸地域の秋田市地蔵田B遺跡、^(註7) 井川町新間A遺跡^(註8) などがある。これらの遺跡出土の土器は、縄文時代晩期最終末から弥生時代に至るまでの間に位置づけられ、釜田遺跡出土土器を先頭として、平鹿、地蔵田B、新間Aの各遺跡出土土器が^(註9) それに後続すると考えられている。

釜田遺跡出土の土器の特徴は、縄文時代晩期末葉の大洞A式に認められる彫刻的手法によって表わされる工字文と、それよりは新しい様相を示す粘土粒を貼付けた結節部をもつ変形工字文、沈線の反転を繰り返しながら描く変形工字文の3者があることである。波状文の施文される土器、肩部に文様帯をもつ広口の壺形土器は含まれていない。また、平鹿遺跡の出土土器は、釜田遺跡に認められる2種類の変形工字文をそれぞれ施した土器の他、波状文を施文する土器の台部資料が含まれている。地蔵田B遺跡出土土器では粘土粒の貼付けによる結節部のある



第105図 遺構外出土の弥生土器(5)

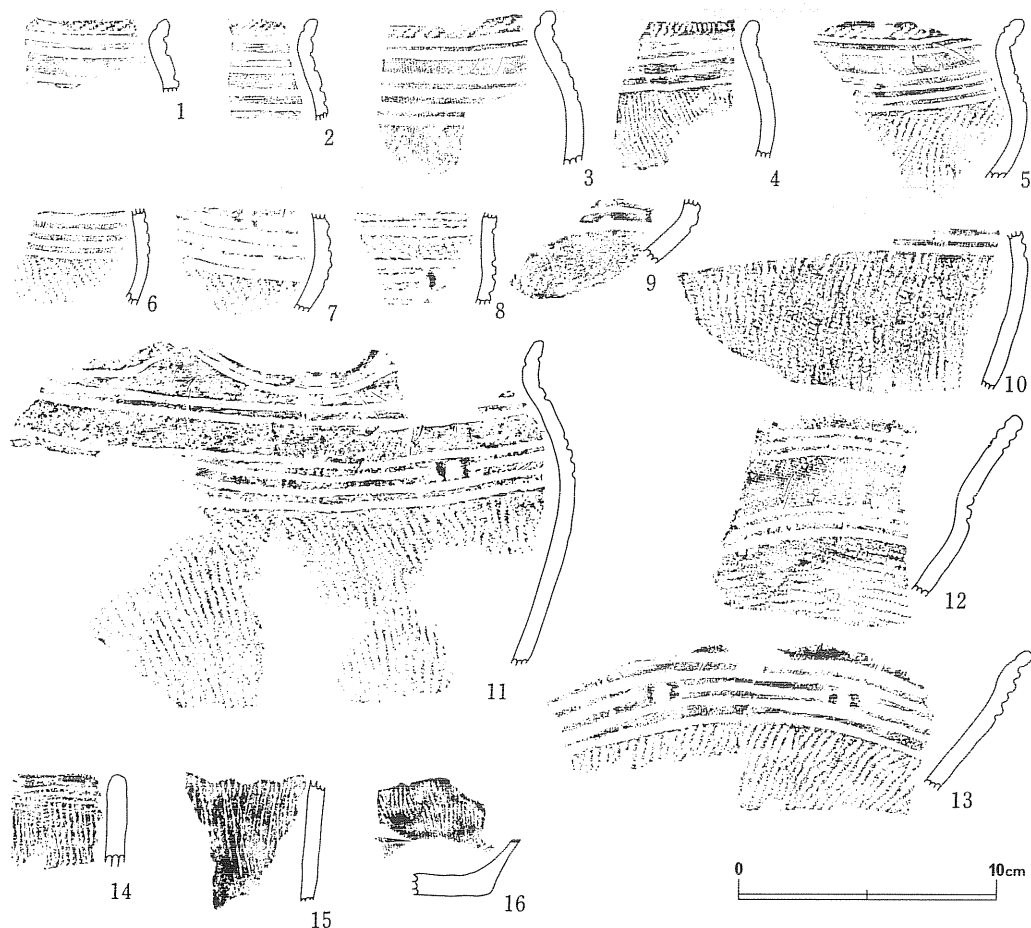
第106図 遺構外出土の弥生土器(6)



第2節 検出された遺構と遺物

変形工字文が主体的で、それに肩部に縦位沈線による区画文などが施された広口壺が伴っている。新間A遺跡の出土土器は、やはり結節部をもつ変形工字文が主となり、地藏田B遺跡に見られる広口壺が存在する。

以上、ごく簡単に見渡しても、各遺跡の土器毎に微妙な差異が認められる。即ち、内陸部の鏡田、平鹿遺跡の場合は、変形工字文全体の中に占める、反転を繰り返す沈線で描く変形工字文の割合が大きく、沿岸地域の地藏田B、新間A遺跡の場合は、粘土粒貼付けの結節部をもつ変形工字文が主体となり、特徴的に広口壺を伴出する。本遺跡の第Ⅸ群土器には2類、3類、7類のように沈線の反転で描かれる変形工字文が含まれるが、これらは2～3条の細描きの沈線で構成されるもので、6類の粘土粒貼付けの結節部をもつ変形工字文から、粘土粒が消失したものと見るべきである。したがって、同じ日本海沿岸地域にあっても、地藏田B、新間A遺跡よりは幾分新しい様相を示すものと考えられる。なお、第Ⅸ群10類の波状工字文の施される土器や、第Ⅹ群土器の存在は、秋田県内でもより青森県側に近い北部地域の様相を示すものといえよう。



第107図 遺構外出土の弥生土器(7)

4、平安時代以降の遺構と遺物

平安時代以降の遺構としては堅穴住居跡1軒、炭焼遺構6基、溝5条、炭窯1基がある。これらの遺構のうち堅穴住居跡は出土した環形土器によって時期を特定することが可能であり、炭窯は実際に使用したとの証言を得ることで現代まで使用されたことが判明している遺構である。また溝のうち1条が平安時代の堅穴住居跡を切っており、他の4条も平安時代以降に構築されたものであろうと判断した。炭焼遺構については縄文時代の土坑を切っているものが1基あるが、他の5基は他時期の遺構との重複関係がない。したがって炭焼遺構については時期不明としなければならないが、土師器片等の平安時代の遺物が含まれていないことや、遺構の構築が第Ⅰ層中から行われていることを考慮すれば、平安時代よりは新しい時期の遺構であると推定される。

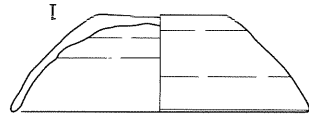
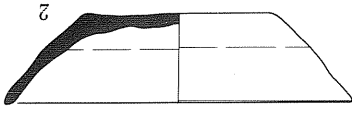
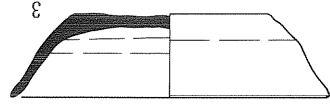
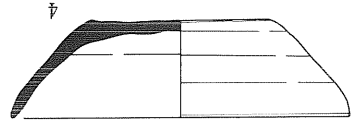
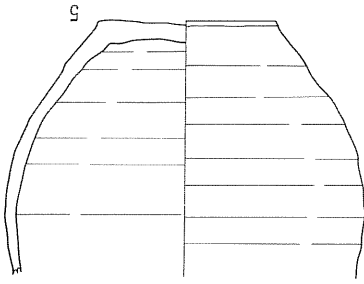
第13号堅穴住居跡（第108図、図版7-6）

調査区のほぼ中央MB～MC・49・50グリッドにある。第Ⅱ層で真黒の黒色土のプランとして確認した。住居跡の西側では第5号住居跡を切り、南側では第5号土坑を切っている。平面形態は方形を呈し、北壁は440cm、東壁は450cm、南壁は460cm、西壁は420cm、面積は20.24m²、深さは40cmである。カマドは南壁のやや西側に付設され、主軸はN-23°-Eを指す。底面は中央部が非常に堅く焼け、小さな凸凹をなす。他は平坦で特に堅い箇所はない。また柱穴らしいピットはなく、焼土を含むピットがP₁～P₅まである。P₁・P₅は径約30cmの凹形で、他の3つのピットよりも焼土は少ない。P₂・P₃は径約50cm、P₄は径約40cmあり、焼土が充填していた。P₃の深さは約15cm、他は10cm内外である。ピットは全て摺鉢形を呈する。カマドの残存状況は悪いが、中央部には甕形土器が倒立して置かれ支脚として用いられていた。

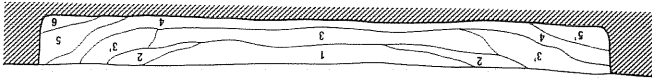
遺物はカマド内や床面西側から土師器の坏が、また住居跡南東隅の床面からは須恵器の坏が3個体検出されている。須恵器の坏3個体のうち1個体は、逆さにして他の1個体にもたれかけた状態である。また、中央焼土面から土師器の破片が検出されている（第108図、図版7-7、図版28）。第108図-1の土師器坏は、口径11.2cm・器高3.7cm・底径4.7cmの大きさをもつ。底部は回転糸切りによる切り離し痕跡を残す。全体的に赤褐色に近い色に焼成されている。5の土師器甕は胴部最大径13.6cm・底径6.7cmの大きさで、胴部上半以上はない。成形は坏と同様、回転台を用いており、底部には回転糸切りの痕跡を残す。やや灰色がかかった褐色に焼成されている。2～4の須恵器坏はそれぞれ口径13.1cm・器高3.4cm・底径7.1cm、口径12.0cm・器高3.2cm・底径7.4cm、口径13.1cm・器高3.4cm・底径7.1cmの大きさがあり、底部は全て回転ヘラ切りの痕跡を残す。灰褐色に焼成されているが、焼き上がりは軟質で脆い。

第108図 第13号竪穴住居跡および出土土器

0 10cm

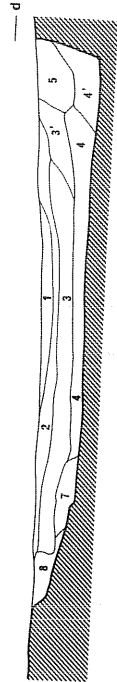
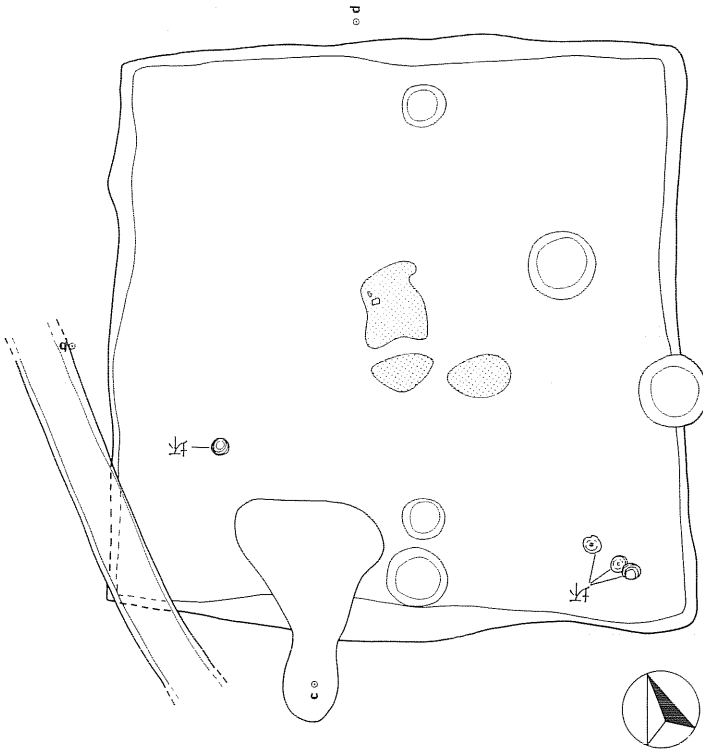


0 2m



b

H=16.90m



H=16.90m

遺構外出土の平安時代遺物（第109図）

調査区内からは第13号竪穴住居跡に伴って出土した遺物の他に、遺構外からも平安時代のも
のと判断される遺物が出土している。1は長さ7.2cm、中央部での径1.8cm、貫孔径4mmの土錘
である。手捏ねによって製作されている。2は泥岩製の角柱状になった砥石である。4つの砥
面には横方向の擦痕が残る。また稜の1つには大きく断面V字形に研ぎ括られた箇所がある。

第1号溝（付図1参照、以下同）

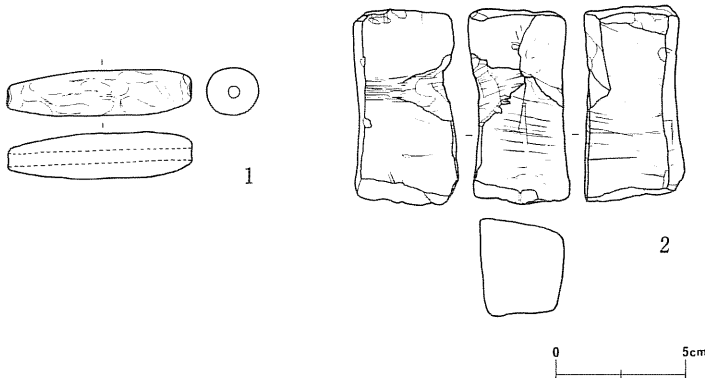
調査区南西端46・47ライングリッドのM Iラインに沿って位置している。断面は緩いU字形
であり、幅は50～60cm、深さは約20cmである。南側は第5号溝によって切られているが、約4
mを確認できる。底面は北から南へ傾斜している。溝の方向は北から西へ若干傾くが、第2号
溝や第4号溝と平行する。覆土は暗褐色をおもな色調としてもつ土である。

第2号溝

調査区の中央西寄りMC48、MD48・49、ME49・50、MF50・51、MG51グリッドにわた
って検出された。断面は緩いU字形であり、幅は20～40cm、深さは10～30cmである。覆土は上
層が黒色土で、下層は黒褐色土である。調査区西端の壁面では耕作土直下の高い位置からの掘
り込みであることが確められた。南側は第5号溝に切られているが、第3号溝とMC48グリ
ッドで1本になる可能性がある。この部分では溝の幅は50cmと広がるが覆土は同質である。底
面は南東に緩く連続した傾斜を示している。

第3号溝（図版7－8）

調査区中央西寄り、MC47～54グリッドを縦断して位置している。断面はU字形であり、幅
は30～40cm、深さは10～20cmである。覆土は黒色土が主体である。本溝は第13号竪穴住居跡を
切っているが、南側では第5号溝に切られている。第2号溝とMC48グリッドで1本になる可



第109図 遺構外出土の平安時代遺物

能性がある。底面は調査区北側の第10号竪穴住居跡付近で最高位となり寒川Ⅱ遺跡との間の沢に臨む斜面へも伸びている。また第5号溝跡の南側の斜面へも緩い連続した傾斜が続いている。

第4号溝

調査区中央東端、L G 48～55グリッドにまたがって検出された。断面は扁平なU字形であり、深さは10cm程しかない。第1号溝、第3号溝とはほぼ平行している。覆土は暗褐色土である。L E 54グリッドを最高位として北と南に連続した傾斜を示している。

第5号溝（図版7-8）

調査区緩斜面の中央谷頭部分を頂点にして台地南縁部に沿って弓なりに巡っている。断面は角のとれたV字形で、幅は30～70cm、深さは最も深い部分で55cmである。遺物は縄文時代のものを出土するが、第3号溝を切っていることから平安時代以降に掘られたことがわかる。覆土は上層から黒色土（7.5Y R 2/1）、黒褐色土（7.5Y R 3/1～10Y R 3/3）と分かれる。底面はL H 45グリッドを最高位として東と西に緩やかに連続した傾斜を示している。

第1号～第7号炭焼遺構（第110図、図版7-9）

調査区内に点在して検出された。確認面は第Ⅱ層上面である。方形を基調とするものと円形を基調とするものの2種類がある。覆土は炭化物が詰り、黒色土中に粒状の炭化物を極端に多く含んだ状態で、底面や立ち上がり面が焼土化したり硬化したりするものはない。こうしたことから伏せ焼きによる炭焼遺構と判断された。第25表に位置・規模等を示す。

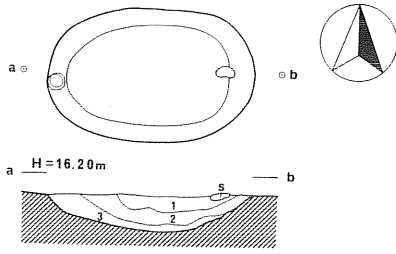
第25表 第1号～第7号炭焼遺構観察表

	位置	規模	形態	備考		位置	規模	形態	備考
第1号炭焼土跡	M F 52	1.1m×10cm、 深さ5cm	隅丸長方形		第5号炭焼遺構	L I 44	80×45cm、 深さ5cm	長方形	
第2号炭焼土跡	M E 54	径50cm、 深さ20cm	円形	底面摺鉢形	第6号炭焼遺構	L J 46	1m×55cm、 深さ10cm	楕円形	
第3号炭焼土跡	M F 51	1m×45cm、 深さ5～10cm	長方形	東側の一部が攪乱	第7号炭焼遺構	L J 42	不明	不明	斜面上にあるためプランは不明
第4号炭焼遺構	M G 50	1.2m×60cm、 深さ5cm	長方形	南西の一部が攪乱					

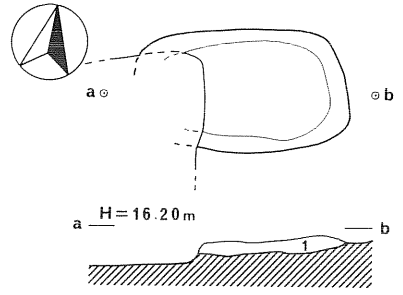
第1号炭焼窯（第111図、図版7-9）

調査区北東L H 55グリッドにある。台地から斜面に移行する地点に構築されている。煙出しと焚口部中央を結ぶ主軸はほぼ南北方向にあり、焚口を斜面下方に設けている。本遺構は攪乱が著しいが、略二等辺三角形を呈する窯体部分と楕円形の作業場から成る。窯体部分の規模は煙出しから焚口部までの長さ約320cm、最大幅160cmであり、作業場では長軸320cm、短軸24cmである。作業場の西側には焚口部を閉塞させるために用いた煉瓦が、東側には鉄先が検出されて

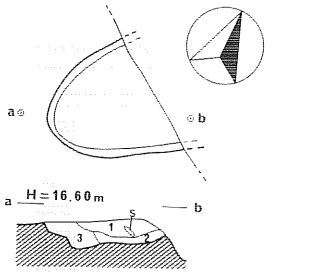
第2節 検出された遺構と遺物



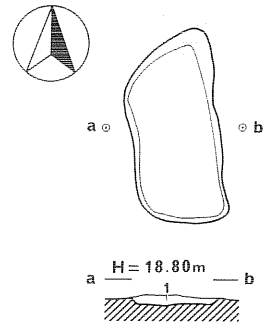
第23号土坑



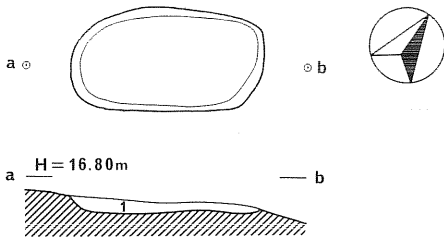
第1号炭焼遺構



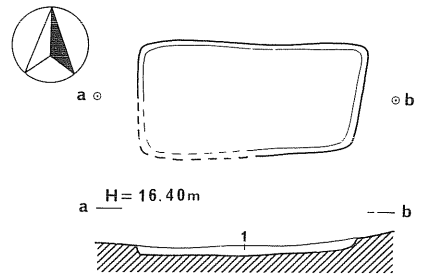
第24号土坑



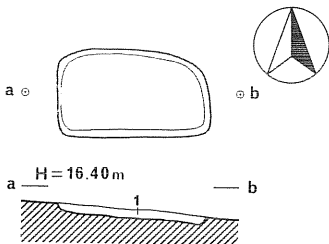
第3号炭焼遺構



第6号炭焼遺構



第4号炭焼遺構



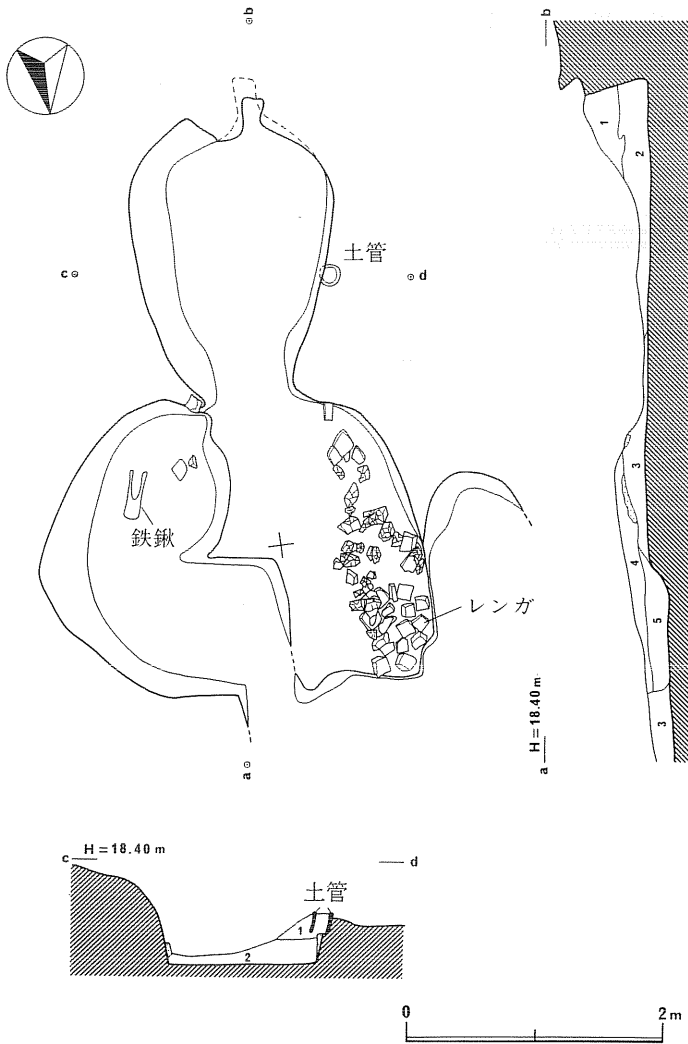
第5号炭焼遺構



第110図 第23号・第24号土坑、第1号・第3号～第6号炭焼遺構

いる。窯体西壁中央で煙突用と思われる土管が検出されている。煙出しは窯体中央で奥壁から30~40cm奥まった部分にある。奥壁の観察から煙出しは底面から天井にかけて焚口方向へ傾斜していることがわかる。底面は平坦で焼き締められ、窯壁は2~3cm程の厚さで赤く焼けている。

寒川Ⅱ遺跡側の南側斜面下部でも本遺構と同じ炭窯が検出されているが、これも含めて遺跡周辺の地権者である多賀谷政夫氏が所有・使用したものであり、大正期から昭和期にかけて操業されたとのことである。本遺構に使用されている煉瓦や土管と同じものが、寒川Ⅱ遺跡側の炭窯でも検出されている。薪材としてはおもに遺跡周辺に自生するクリ材等を用いたとのことである。



第111図 第1号炭焼窯

第3節 まとめ

今回実施された寒川Ⅰ遺跡の調査では、縄文時代早期末葉～前期初頭の堅穴住居跡7軒、土坑16基、土器捨場1箇所、縄文時代前期中葉～後葉の土坑1基、縄文時代中期後葉の堅穴住居跡2軒、縄文時代中期末葉～後期前葉の堅穴住居跡3軒、土器埋設遺構2基、土壙墓3基、土坑3基、縄文時代晩期終末～弥生時代の土坑1基、土器捨場1箇所、平安時代の堅穴住居跡1軒、平安時代以降の炭焼遺構6基、炭焼窯（近現代）1基、溝5条を検出した。他に遺跡の状況から推して、縄文時代前期～後期のいずれかの時期に構築されたと判断できる土坑3基、焼土遺構8基も検出している。

以上のようにきわめて多時期にわたる多様な遺構・遺物が検出され、遺跡の立地する台地は断続的ながらも、長期にわたって利用されてきたことが知られる。各時期毎の遺構・遺物の内容から、その時々の特徴ある遺跡の性格がうかがえる。ここでは、そのうち東北北部でも類例が少なく、ことに堅穴住居跡の検出例としては県内で最も古い時期の例となった、縄文時代早期末葉から前期初頭の遺構と遺物について述べ、まとめたい。

1、第Ⅰ群～第Ⅴ群土器について

前節で第Ⅰ群～第Ⅴ群として扱った土器は、東北北部～北海道南部に分布する縄文時代早期末～前期初頭の縄文尖底土器群(註10)の中で扱われる土器である。前節では表裏面に施される地文の特徴や胎土に含まれる繊維の有無、口縁部形状などによって分類を行ったが、ここではそれら分類された中から、いくつかの特徴をまとめて拾い出してみることとする。

- ①地文として縄文を施す土器には、基本的に、表裏面に縄文を施す土器（Ⅰ群）と、表面には縄文を施すが裏面は指頭圧痕、ナデ調整で無文となる土器（Ⅱ群、Ⅴ群）があること。
- ②縄文原体には0段多条を含む2段正撚り撚紐（RL、LRの両者；Ⅰ群、Ⅱ群A、Ⅳ群B、Ⅴ群A・B）と、1段の撚紐で無節の縄文を表すもの（Ⅰ群H、Ⅱ群B、Ⅴ群D）、撚り戻し（反撚）・撚り合せの原体を用いるもの（Ⅱ群F）、絡条体を回転して施すもの（Ⅱ群D）、結束第1種の原体を用い羽状縄文を施すもの（Ⅴ群C）があること。
- ③原体の撚り方とは別にⅠ群中には1～2箇所の結節部を作って回転した綾絡文（Ⅰ群B・C・D）があり、また縄文原体の側面圧痕文を施すもの（Ⅰ群E）があること。
- ④地文の縄文に併用される他の原体には、篋状工具による浅い沈線文（Ⅰ群G）、押し引き文（Ⅴ群E）があること。

⑤口縁部形状ではやや外反する例が多く、折り返し口縁の例や、1～2本の隆帯を貼付けるものがあること。また口唇部にも縄文を施したり、刺突文を施す例（隆帯を貼付ける土器に限られる）、刻目列を施す例（折り返し口縁の土器に限られる）があること。

⑥条痕文の施されるⅣ群については、条痕文だけが施される土器（Ⅳ群A）と、縄文と併用される土器（Ⅳ群B）があること。

以上のことがⅠ群～Ⅴ群土器の施文上の特徴としてあげられる。

これらの特徴を他の地域での土器と比較すると、Ⅱ群Fとした撚り戻し(反撚)・撚り合せの原体による縄文が施文された土器は、早稲田貝塚第5類土器中(註11)にあり、長七谷地貝塚第1次調査でⅣ群、Ⅶ群土器とされた資料に相当する。また、Ⅴ群Cとした結束第1種の原体による羽状縄文を施す土器は、早稲田貝塚第6類Cとされた土器、および長七谷地貝塚第1次調査のⅢ群、第2次調査の第Ⅲ群土器に相当する。県内では後者に比定される土器として鹿角市案内Ⅱ遺跡出土土器がある。この2つをひき去った残りの土器群のうち、表裏面に縄文を施す土器群は、広い意味での赤御堂式土器や早稲田貝塚第4類(註14)に相当するものであろう。口縁部の隆帯や折り返し口縁の土器は岩手県大槌町崎山弁天遺跡C地点Ⅳ層、Ⅴ層中や、大船渡市関谷洞穴第8層中にも存在する。(註15)
(註16)

東北北部の縄文時代早期末から前期初頭の土器編年は、赤御堂→早稲田貝塚第5類→唐貝地→長七谷地第Ⅲ群の変遷が考えられている。これらの土器型式のうち、唐貝地貝塚出土の土器は、前期最初頭におかれる花積下層式併行の長七谷地第Ⅲ群土器の祖形として位置づけられている。(註18)本遺跡出土土器の中ではⅤ群Aとした胎土に繊維を混入し、表面には0段多条の原体を含む斜縄文を施し、裏面が無文となる土器が相当すると考えられる。(註19)また本遺跡Ⅳ群とした条痕文を地文とする土器は、他の縄文を地文とする土器に比べてきわめて少なく、断片的な資料しか認められない。早稲田貝塚第4類土器や本県岩井堂第4洞窟第7層土器に、縄文と条痕文が併用された土器のあることは既に指摘されている通りである。(註20)したがって条痕文の施される土器がそのまま、東北北部以外の他地域の土器型式に比定されることはないが、ここでは条痕文を施文する手法が他地域の影響のもとに採り入れられた可能性も考慮に入れておきたい。(註21)

以上、寒川Ⅰ遺跡の縄文時代早期末から前期初頭の土器は、東北北部編年の赤御堂式から長七谷地第Ⅲ群までに比定される各型式の土器を含む。量的に最も多いのは赤御堂式に比定されるⅠ群を中心とする土器群である。(註22)

2、トランシェ様石器について

寒川Ⅰ遺跡の縄文時代早期末～前期初頭の時期を特色づける遺物に、トランシェ様石器があ

る。本遺跡出土の剥片石器の中では石筥と並んで出土点数が多く、遺構内から8点、遺構外から31点が出土している。その分布状況を見ると、遺跡の載る台地上に散在しているが、特に台地上南側より多く出土している。この分布傾向は他の石器にも見られ、トランシェ様石器の分布のみが特異であるとは言い難い。

製作技法について考えてみることにする。この石器は第一次加工でできた鋭い縁辺を刃部として使用しているという特徴を有している。出土した39点のうち横長の剥片を利用したものは33点であり、明らかに縦長のそれを上回っている。先の遺構外出土石器の項では刃部に対する第一次剥離の方向について詳述してきたが、利用した剥片の形とその刃部に対する第一次剥離の方向との間に何か関係がなかったろうか。横長の剥片を観察してみると、刃縁方向から第一次剥離を施しているものが大半を占めているようである。刃縁方向から第一次剥離を行っているということは、刃縁に第一次剥離の打点が存在するということではなく、横長剥片を取り出す前の段階における剥離の打点が剥片を取り出したことによって、刃縁方向に消え去ったということの意味しているのである。つまり、横長剥片の場合、第一次剥離の方向と剥片を取り出す際の打撃の方向とは直交する。この技法は、台形・長方形・撥形を問わず用いられており、特定の形態に限定されていないことがわかる。

刃部の作り出しで次に多いのは、縦長・横長剥片を問わず、剥片を折って刃部を作り出すという技法である。この場合、刃部の作り出しは素材剥片を取り出した後に行われており、刃部に第一次剥離面を残しているものではない。刃部の角度は、刃部に第一次剥離面をとどめるものに比較して全体的に大きいようである。

刃部に対する第一次剥離の打点が側縁方向にあるものを見てみると、横長剥片を利用したもののみ出土している。

これらの技法によって作り出された刃部は、直線的ないし丸味を帯びた鋭利なものである。
トランシェは日本語訳で祖型直刃斧(註23)と呼ばれているように、その刃縁が直線的であるという特徴を有している。おそらくトランシェ様石器の場合、刃縁が直線的になるように以上のような技法が用いられたのであろう。

第49図T20は素材剥片を取り出した際の打点が刃縁の一端にあるもので、剥片を取り出した段階においては、刃縁が鋭くなかったと思われるものであるが、背面からの加撃調整によって刃縁は直線的で鋭利なものになっている。このようにトランシェ様石器の中には刃縁を直線的かつ鋭利なものにするために、刃縁のみに二次調整を施しているものもあると考えたい。しかし、刃縁方向から素材を取り出したトランシェ様石器は、そう多くはないと思われる。刃縁が抉れたり、鋭くなかったりして、トランシェ様石器本来のイメージとはかけ離れたものがあり、その点からすると横長剥片を取り出した方が、容易に直線的かつ鋭利な刃縁を得ることができ

たであろう。

トランシェ様石器は、一般に北海道南部から東北北部における縄文時代早期の土器、特に貝殻文土器に特徴的に伴なうとされている。秋田県内においても数例報告されており、今回の寒川Ⅰ遺跡からの出土は新たな資料の追加と言えよう。しかし、本遺跡からは貝殻文土器は出土しておらず、縄文時代早期の土器は表裏縄文のものを主体とする早期末葉の土器である。本遺跡におけるトランシェ様石器は縄文時代早期末葉のものと考えてもよいであろう。

貝殻文土器が主体をなす遺跡の一つ、大館市鳶ヶ長根Ⅳ遺跡から54点に及ぶ多数のトランシェ様石器が出土している。^(註24) 長さは4.7cmのものから9.7cmのものまでであるが、特に5.4cm～8.0cmのものが多いようである。平均値をとってみると、6.7cmという値を得た。これらの数値が貝殻文土器に伴なうトランシェ様石器の特徴であるとは言い難いが一つの参考資料にはなると考えられる。寒川Ⅰ遺跡においてその長さを見てみると、4.2～7.4cmの範囲にあり、特に4.8～6.1cmのものが多いようである。平均値は5.6cmである。鳶ヶ長根Ⅳ遺跡と寒川Ⅰ遺跡の数値には明らかに相違が認められ、特に寒川Ⅰ遺跡には7.5cmを越す長大なものが一点もないのが特徴的である。早期末葉には長大なものが消滅したとも考えられるが、即断は避け、これを寒川Ⅰ遺跡の一特徴にとどめておくことにする。

北海道南部から東北北部におけるトランシェ様石器は縄文時代前期になると消滅すると考えられているが、縄文時代中期の土器が主体をなす神奈川県尾崎遺跡からもおよそ204点出土している。^(註25) 報告では「打製石斧Ⅱ類」と称されているが、石器自体はトランシェ様石器そのものである。刃部は自然面をとどめるものが最も多く142点、第一次加工による剝離面をとどめるものが62点である。利用した剝片を見てみると、縦長の剝片を利用したものが目に付き、縄文時代早期のものとは趣を異にしているようである。ちなみに長さは4.8～13.5cmの範囲にあって173点が6.0～9.9cmの範囲に属し、平均は7.9cmであると言う。巨視的観点で見ると、尾崎遺跡の資料はトランシェ様石器が使用された時期は一時期に限定されず、その分布域も一地域に限定されないということを物語っていると言えよう。

3、縄文時代早期末～前期初頭の竪穴住居跡について

現在まで秋田県内で最も古い時期の竪穴住居跡としえる遺構には、男鹿市小浜沢遺跡の竪穴住居跡とされた1例があり、縄文時代前期前葉に位置づけられている。本遺跡の7軒の竪穴住居跡は、これをさらに遡り、県内では最も古い時期の住居跡例となった。7軒の竪穴住居跡は、前節冒頭にも述べたように、3つのタイプに分かれる。

①平面規模が大きく、楕円形の形態をもち、床面中央部に土坑、壁に沿って柱穴のあるもの。

(第1号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡)

②平面規模は①よりも小さい楕円形の形態をもつもの。

(第2号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡、第7号竪穴住居跡)

③平面規模の小さな円形の形態をもつもの。

(第4号竪穴住居跡)

平面規模、形態の上では以上3つに分けられるが、このうち炉の認められたのは第1号、第3号、第4号、第7号竪穴住居跡の4軒である。第1号、第3号竪穴住居跡については、焼土が認められなかったものの、床面中央部にある土坑内から深鉢形土器の一括破片とともに、火熱によって破碎したものを含む多量のチップが検出されたことから、その土坑が炉の機能を有していたものと推定した。他は床面上または床面を掘り下げた部分で焼土が認められている。また、柱穴の存在が認められたのは、第1号、第3号竪穴住居跡の2軒であり、他は検出されなかった。前節冒頭では、平面形の規模と炉の有無の2つの条件で検討し、7つの遺構を竪穴住居跡としてとり上げたが、より一般的な竪穴住居を想定して、柱穴の有無を検討の条件に加えると第1号竪穴住居跡と第3号竪穴住居跡が残る。

さて、他の遺跡での検出例はどうか、既に報告されている例と比較検討してみることにする。秋田県内では比較し得る例はないが、青森県や北海道には縄文時代早期末～前期初頭の時期の竪穴住居跡が検出された遺跡が何例かある。ここでは、それらの中から青森県八戸市長七谷地遺跡の例についてみる。^(註27)長七谷地遺跡では、貝塚部分を含めて4地点から35軒の竪穴住居跡が検出されている。これらの竪穴住居跡は、早期末葉の赤御堂式期から前期初頭の花積下層式(長七谷地第Ⅲ群)期まで営まれたものとされている。竪穴住居跡のうち、本遺跡第1号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡と同形の楕円形の平面プランをもち、長軸が6mを越える竪穴住居を報告書中から拾い出すと13軒あり^(註28)(青森県教委調査4軒、八戸市教委調査9軒)、赤御堂式期のものが9軒(重複するものを入れると10軒)、早稲田貝塚第5類土器の時期のものが3軒(うち1軒は4軒重複)に分かれる。これらの住居跡はほぼ例外なく壁に沿って小穴が並ぶ壁柱穴をもつ例であり、本遺跡の例とはその点で大きく異なる。炉についてみると焼土の堆積があり、報告者によって地床炉と認められた例は赤御堂式期のものに5軒ある。他の例では炉は検出されていない。しかし、ここで注意されなければならないのは、長七谷地2号遺跡、第4号竪穴住居跡例である。この竪穴住居跡では床面中央から西側部分に寄った箇所^(註29)に130cm×80cmの範囲で焼土の堆積する地床炉があり、その東側に柱穴とは明らかに異なる土坑状のピットが掘り込まれており、灰が詰った状態で検出されている。報告者はこれを地床炉によって生じた灰溜めの性格をもつピットとしている。

竪穴住居跡の床面中央に灰が溜められる土坑状のピットが作られていることに関し、示唆的な仮説が早期の竪穴住居址例をもとに今村啓爾氏によって公表された。^(註30)氏によれば、関東地方

の撚糸文系土器期から北海道・東北の貝殻沈線文系土器期の住居址の間には、隅丸方形のプランを基本とし、しばしば床面中央に方形の掘り込みを有するという構造上の連続性が認められるとし、この掘り込みをあらかじめ尖底土器を立てるために用意された「灰床炉」ではないか、とする。氏のあげた23例の竪穴住居址には、この掘り込みが不整形、楕円形のものが含まれ、掘り込み底面に火熱の痕跡を残していないものの、その埋土中に木炭片を含むものが多い。

この「灰床炉」の仮説を見たあとで、再び長七谷地遺跡の住居跡を見直すと、炉の検出されなかったとされる8軒の住居跡例の中で床面中央に土坑状のピットをもつ例が5軒あることに気づく。ことに早稲田貝塚第5類土器の時期の竪穴住居跡は3例ともこのピットをもっている。2号遺跡第4号住居跡例も加えると、赤御式期、早稲田貝塚第5類土器の時期で3軒づつがこの「灰床炉」の可能性あるピットを有していること(註31)になる。

寒川Ⅰ遺跡の第1号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡についても、通常ならば焼土の痕跡のないピットは単に床面に設けられた土坑として看過してしまうところ、火熱によって破砕されたチップや木炭片の存在から炉の機能を推定した。こうした土坑状のピットを「灰床炉」として考えることにより、寒川Ⅰ遺跡と長七谷地遺跡の竪穴住居跡は柱穴の違いこそあれ、極めて強い類似性を認めることができるようになる。しかもその類似性は今村氏に従えば、北海道・東北地方の貝殻沈線文形土器期まで遡ってみることのできる、縄文時代早期の伝統の中で捉えられるものであるといえる。

4、縄文時代早期末～前期初頭の寒川Ⅰ遺跡の環境と生業

寒川Ⅰ遺跡のある台地が利用され始めた縄文時代早期末～前期初頭の時期は、最終氷期後の気候が温暖化に向う高海水準期にあたり、そのピーク時には現在よりも年平均気温で2～3℃(註32)高く、海水面は2～5m程度上昇していたものと考えられている。また日本海側の砂丘の形成は縄文時代中期以後の海退期を境として開始されたともいわれ、現在、最高位の地点で標高60mを測る能代砂丘も、縄文時代後期頃までに形成された旧期砂丘はきわめて低平である(註34)（第6図参照）。縄文時代前期の頃には砂丘は全く形成されていなかったとする見解もある。このような条件を考慮すると、縄文時代早期末～前期初頭の頃には、日本海汀線が能代砂丘のある位置を越えて、成合台地の西縁まで迫っていたと考えられ、成合台地の南東側の鶴川川低地も内湾に近い状態であったと思われる。したがって、現在寒川Ⅰ遺跡と十二林遺跡の間にある沢も、この時期その開口部付近は日本海汀線と接しており、遺跡はきわめて海の近くに営まれていたということができる。

このような立地にある遺跡例は他の地域にも見出すことができる。

青森県八戸市長七谷地遺跡は現在の太平洋汀線よりも約1.9km離れた、標高12～17mの段丘上

にあり、周辺には日ヶ久保貝塚^(註35)、赤御堂貝塚^(註36)など縄文時代早期後葉の遺跡が多く分布している。また、同じ青森県六ヶ所村早稲田貝塚^(註37)も現在の太平洋汀線から約4.5km離れ、小川原湖に向う標高20mの丘陵南斜面にある。これらの遺跡は、いずれも縄文時代早期末葉～前期初頭にあつては内湾的環境にあつた。長七谷地貝塚ではヤマトシジミ、アサリ、ハマグリなど淡水～汽水域あるいは潮間帯の砂泥中に棲息する貝類に混つて、内湾のスズキ、クロダイなどの小形魚、外洋の回遊魚であるカツオなどの魚骨と、およびそれらを対象とした漁撈活動を示す結合釣針、銚頭などの骨角製品も出土している。

寒川Ⅰ遺跡の今回の調査では、このような直接生業活動を物語る自然遺物の遺存は確認されていない。しかし、漁網の錘りとして用いられたと考えられる小形石錘が住居跡周辺からまともに出土しており、その生業が漁撈活動に多くを負っていたことを示唆している。ちなみに時期はやや下るが米代川対岸の杉沢台遺跡では、縄文時代前期中葉のフラスコ状土坑の貝層中から、ヤマトシジミ、ハマグリ、サルボウなど淡水～汽水域、内湾砂泥、沿岸の砂浜に棲息する貝類遺存体と、サバ、ニシンなど海洋性魚類に混つてウグイ、フナなど淡水魚の魚骨が得られている。本遺跡での漁撈活動も、おそらくは杉沢台遺跡同様、内湾を中心としてそれに注ぐ河川や周辺の潟、時には外洋までも含めた広範囲に行われたものではなかったかと推定される。

縄文時代早期末～前期初頭の気候の温暖化は植生環境の面でも大きな変化をもたらし、この頃を境として東北北部の海岸部も、冷温帯落葉広葉樹林であるブナ林や針葉・広葉の混合樹林^(註39)から、コナラ、クリなどの暖温帯広葉樹林へ交替したといわれる。現在は小舌状台地である寒川Ⅰ遺跡も縄文時代中期以前は、寒川Ⅱ遺跡側と緩い斜面で繋っており、このような南に面した斜面は堅果類を豊富に産していたであろう。植物性の食料資源も充実していたと思われる。また、植物採集が可能な植生環境では、陸性獣を対象とした狩猟活動の可能性も充分考えられるが、本遺跡の石器組成を見ると石鏃の占める割合はきわめて低い。弓矢による捕獲以外の方法が採られたことも考えられ、第1号～第4号のような底面にピットをもつ遺構が陥穴として機能していたとすれば、その可能性は支持できる。ただし、本遺跡にあっては住居跡とこの種の土坑が近接して存在し、遺構配置の点からはその同時性を俄かに肯定できない面もある。あるいはタンパク質の食料資源はその殆どを漁撈活動によって賄うことができ、狩猟に頼る割合は非常に小さかったのだろうか。

縄文時代早期末葉から前期初頭の気候の温暖化は、この地域にも集落を形成して足る程に人口支持力を増強させた。縄文時代早期中葉の貝殻沈線文土器群の時期を東北地方北半部での“縄文文化”の骨格が整った時期と評価し、装身具や土偶など呪術的で人間の精神面に関わりの

深い遺物の増加から、縄文時代前期を超自然的なものに対するイデオロギーの生長期と見る見解がある。^(註41) そうした観点に立てば縄文尖底土器群の盛行する縄文時代早期末葉から前期初頭の時期は、この地域にあっても、縄文時代社会の精神面での生長が指向され、その発達を促す経済的基盤の確立した時期とも映ってくる。土器様式の交替が、その時代背景の様変わりを如実にあらわしている。しかし、寒川Ⅰ遺跡で見られるようなトランシェ様石器の存在や、尖底土器に適応した炉の形態（未だ仮説的な域を出ないとしても）は、貝殻沈線文土器群の時期に完成した骨格そのままを踏襲してきたことをも示していると言えよう。

縄文時代前期前葉の気候温暖化の頂点に達した時期に、トランシェ様石器の消滅、地床炉への淘汰、そして土器の平底化の完成など早期的なものから前期的なものへの脱皮が遂げられたものだろう。寒川Ⅰ遺跡は、そうした転換期直前の、この地方の遺跡の在り方の一端を示すものと言える。

(註1) 児玉 準「三十刈遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和59(1984)年

(註2) 石郷岡誠一「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会
昭和57(1982)年

(註3) 富樫泰時「片沢遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和55(1980)年

(註4) 佐藤信行「青木畑遺跡発掘調査報告書」

(註5) 山下孫継「釜田遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和49年(1974)年
高山憲司・小林克「秋田県における亀ヶ岡文化の展開」『考古風土器』第6号
昭和56(1981)年

(註6) 児玉 準「平鹿遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和58(1983)年

(註7) 菅原俊行「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会
昭和61(1986)年

(註8) 岩見誠夫「半田先生と秋田県の考古学」 昭和56(1981)年

(註9) 児玉 準「男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について」

『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号 秋田県埋蔵文化財センター 昭和62(1987)年

(註10) 岡本 勇「縄文土器の生成から発展へ」『縄文土器大成1 早・前期』講談社 昭和57(1982)年

(註11) 佐藤達夫「早稲田貝塚」『上北考古会報告1』上北考古会 昭和35(1960)年

(註12) 鈴木克彦・大湯卓二「長七谷地貝塚」青森県教育委員会 昭和55(1980)年

早稲田貝塚第5類土器は平底が多いとされている。長七谷地2・7・8号遺跡の調査では尖底土

器に撚り戻しの原体の回転圧痕が施されており、報告者は組紐、0段多糸、撚糸などの原体が施された土器とともに赤御堂式から早稲田貝塚第5類土器への移行期の土器としている。本遺跡では遺構外から7点の尖底底部、底部近くの資料が得られているが、Ⅱ群Fの底部としえる資料は含まれていない。また遺構内出土資料には3点の平底底部資料があるが、口縁部、胴部資料のどれに接合するものか不明である。

村木 淳「長七谷地遺跡発掘調査報告書」八戸市教育委員会 昭和57(1982)年

(註13) 岩見誠夫「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ」秋田県教育委員会 昭和57(1982)年

(註14) 工藤竹久「赤御堂貝塚発掘調査概要報告書」八戸市教育委員会 昭和50(1975)年

(註15) 鈴鹿良一「崎山弁天遺跡」大槌町教育委員会 昭和49(1974)年

(註16) 能谷常正「岩手の土器」岩手県立博物館 昭和57(1982)年

(註17) (註19)に同じ

(註18) 林 謙作「縄文早・前期の土器—北海道南部、東北地方」『縄文土器大成1 早・前期』講談社
昭和57(1982)年

林氏はこの中で、唐貝地貝層の土器に類似の土器として、口縁部に粘土帯の貼付けによって文様帯をつくる崎山弁天の資料をあげている。

(註19) 加藤邦雄氏は、早稲田貝塚第5類土器と長七谷地第Ⅲ群土器の間に、撚糸文を主体とする長七谷地第Ⅳ群6類、整然とした縄文を施文する長七谷地第Ⅳ群C類を介在させて考えている。本遺跡Ⅴ群Aとした土器もこの長七谷地第Ⅳ群C類に近い。

加藤邦雄「縄文尖底土器」『縄文文化の研究3』雄山閣出版株式会社 昭和57年(1982)年

(註20) 熊谷常正「東北地方縄文時代早期後半の様相」『遮光器』8号 昭和49(1974)年

(註21) 東北地方南部では素山Ⅱa、Ⅱb式、日本海沿岸を南下しては極楽寺式土器などを想定する。

(註22) 綾絡文の多用は赤御堂式土器には見られない寒川Ⅰ遺跡独自の要素と思われる。

(註23) 富樫泰時「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』 昭和51(1976)年

(註24) 庄内昭男「国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会

昭和56(1981)年

(註25)「尾崎遺跡」神奈川県教育委員会 昭和52(1977)年

(註26) 熊谷太郎「小浜沢遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和58(1983)年

(註27) 長七谷地遺跡例の他には、青森県八戸市売場遺跡、北海道函館市中野A遺跡などがある。

(註28) (註12)の文献に同じ

(註29) 抽出した竪穴住居跡は以下の通り

八戸市教委報告…1号・2号・4号・5号・9号・10号・12号・13号・14号住居跡(以上2号遺跡)

5号住居跡(8号遺跡)

第4章 寒川Ⅰ遺跡

青森県教委報告…1号・2号・4号住居跡

(註30) 今村啓爾「縄文早期の竪穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」『古代』第80号

昭和60(1985)年

(註31) 普通、赤御堂式土器は尖底、早稲田貝塚第5類土器は平底主体である。平底の土器が使用された時期のこの種の掘り込みについて、今村氏は千葉飛ノ台貝塚の鶴ヶ島台式期の竪穴住居3軒の例をあげ、その可能性が強いとしている。

(註32) 小野忠照「日本考古地学」ニューサイエンス社 昭和55(1980)年

(註33) 工藤英美「能代砂丘について」『能代山本地方史研究』第4号 昭和62(1987)年

(註34) 永瀬福男「古環境の復元」『能代山本地方史研究』第4号 昭和62(1987)年

(註35) 鈴木克彦「日ヶ久保貝塚発掘調査報告書」百石町教育委員会 昭和50(1975)年

(註36) (註14) に同じ

(註37) (註11) に同じ

(註38) 永瀬福男「杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和56(1981)年

(註39) 安田喜憲「環境考古学事始」日本放送出版協会 昭和55(1980)年

(註40) 寒川Ⅱ遺跡での調査所見。縄文時代中期末の第2号竪穴住居跡の南側壁が寒川Ⅰ遺跡との間にある沢の開析によって失われていた。

(註41) 林 謙作「縄文文化の発展と地域性—東北」『日本の考古学Ⅱ』河出書房 昭和40(1965)年

第5章 寒川Ⅱ遺跡 調査の記録

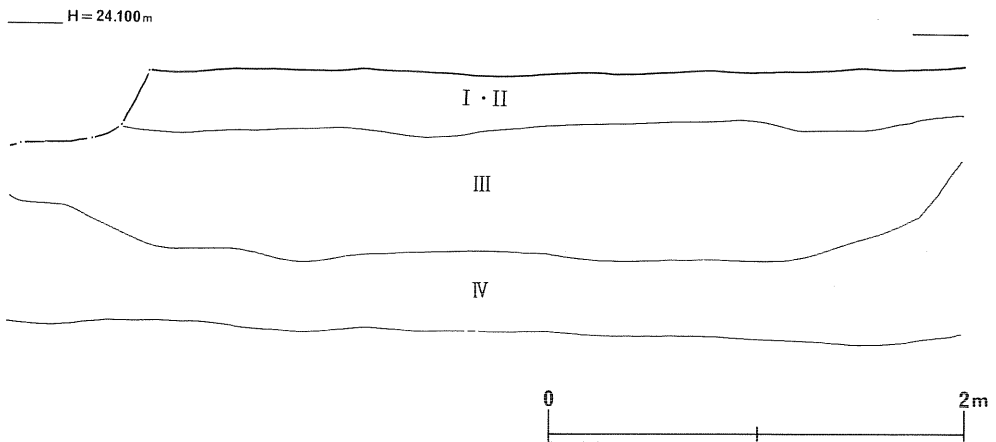
第1節 遺跡の層位

本遺跡の層位も基本的に表土から遺構確認面までがⅠ～Ⅲ層に分けられ、寒川Ⅰ遺跡とほぼ同様に観察された。以下に斜面側の調査区での観察を記述する。

Ⅰ層…10Y R 1/2～3/4黒褐色～暗褐色を呈する。表土層であり、植物根が多く入り、常に攪乱を受け不安定な層である。粘性はなく、孔隙も多い。平安時代の遺物が包含される層でもある。層厚約25cm。

Ⅱ層…10Y R 3/4～4/6暗褐色～褐色を呈する。Ⅰ層と境を接する上部では色調も暗い。上部からⅢ層との境の上約10cm程までの間が暗褐色土で、その下部では褐色土がⅢ層まの間に漸移する。この暗褐色土は比較的粘質もあり、しまっている。平安時代の遺構のある部分では、焼土粒や炭化物粒が多く、また褐色土の含まれる割合が多い。斜面上に立地する平安時代の竪穴住居等の遺構はこのⅡ層を切って構築されていることが、この層中に貼り床されていたことから分った。ただし粗掘作業では平安時代の遺構でも、このⅡ層の下部まで下げなければ明確なプランを把握できなかったものが多い。暗褐色土の下の褐色土中からは縄文時代前期～中期の土器片などが出土している。褐色土は粘性がありキメ細かい。Ⅱ層中程までは部分的に及ぶ植物根も、この褐色土ではほとんど目立たなくなる。層厚は約20cm。

Ⅲ層…10Y R 4/6～5/6褐色～黄褐色を呈する地山、縄文時代のフラスコ状土坑、竪穴住居跡などの確認面である。粘性は強くキメ細かく均質である。



第112図 基本土層図

以上は、斜面下部、第1号竪穴住居付近での基本層位である。斜面の上へ向うに従ってⅠ層、およびⅡ層はその層厚を減じ、付け替え道路部分では、両者合わせて15～20cm程度の厚さしかなくなる。

また、道路北側の畑地に設けられた調査区の北西隅では、人工的な層序が観察された。すなわち表土層は厚さ20cmの耕作土。その下位に厚さ20～30cmの黄褐色土と暗褐色土が粗いブロック状に混合した土。その下位に厚さ50cmの暗褐色～黒褐色土。そしてその下位に本来の地山である黄褐色～灰白色土と続く。この部分では現在の表土（耕作土）は、自然の状態のままの黒ボク土ではなく、旧表土上に黄褐色土を盛土し、その上に客土された土である。自然地形のうねりを整え、耕地に適した地形に改変するためはかなり規模の大きな整地作業が行われているらしい。ブロック状に混合した黄褐色土と褐色土層の下の旧表土は、上水を水はけの悪い粘質土で挟まれているため、かなり湿気を含んだ黒色がかかった土に変化している。また地山面も、上層の湿質土の影響をうけて部分的に灰白色の粘質土に変化している。

この低地へ盛られた土は、道路北側調査区の中央部から削られた土であることが、重機のキャタピラーの痕跡などで分かった。第12図に示す層位は、道路北側調査区中央L148グリッドでの上部削平された状態での層序である。

第2節 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

検出された縄文時代の遺構と遺物は、大きく2つの時期に分かれる。縄文時代前期末～中期初頭を中心とした時期と、中期末～後期初頭を中心とした時期の2時期である。

前期末から中期初頭を中心とした時期に属する遺構には、土器埋設遺構1基、フラスコ状土坑15基がある。フラスコ状土坑の中には遺物を出土していない6基も含まれるが、他の10基との規模や形態の比較、中期末から後期初頭の竪穴住居跡との重複関係から、ほぼ同じ期間のなかで営まれたものと判断した。

中期末から後期初頭の時期の遺構には2軒の竪穴住居跡がある。

前者の時期の遺構は、主に道路北側調査区から付け替え道路部分の調査区までを含めた台地平坦部と、南側斜面調査区の一部緩斜面上、および調査区東側の急斜面への台地縁辺部で検出されている。

また後者の時期の遺構は、南側斜面調査区の一部、寒川Ⅰ遺跡との間の沢へ臨む地点と、東側急斜面への縁辺部の2箇所に分かれて存在する。

以下、各遺構について記述する。

第1号竪穴住居跡（第113図、図版75-1）

〔検出地区〕NB・NC・36～37グリッド。

〔確認状況〕本竪穴住居跡の東側に位置する。第1号製鉄炉周辺の第Ⅱ層を掘り下げてゆく途中、第Ⅱ層上5cm程の褐色土の上面で、黒褐色土の円形プランとして確認した。

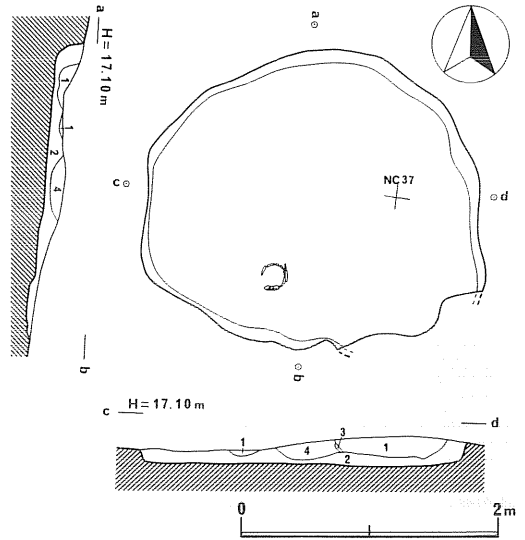
〔形態〕沢に面した南側壁面は崩れており検出できなかった。結果、本来は円形と推定されるが、現状では東西に長い楕円形。

〔規模〕長軸の長さ265cm、短軸の長さ237cm、壁高0～22cm、面積5m²。

〔床面〕ほぼ平坦であるが北側と南側では約6cmのレベルの差がある。あまり堅くしまっていない。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔炉〕住居跡中央部からやや南寄りに土器埋設炉を確認した。しかし、焼土の痕跡は極めて微弱である。埋設土器（第121図-3）の他、石筥、石匙各1点が出土（第125図）。



第113図 第1号竪穴住居跡

第2号竪穴住居跡（第114図、図版75-2・3・4）

〔検出地区〕LJ～MA・40～41グリッド。

〔確認状況〕調査区東側の急斜面に面した台地平坦面の縁辺部で黒褐色土の落ち込みを確認。プラン確認当初、住居跡とは判断できず、土層観察用のベルトを残して掘り下げた結果、土器埋設炉を確認し竪穴住居跡と判明。

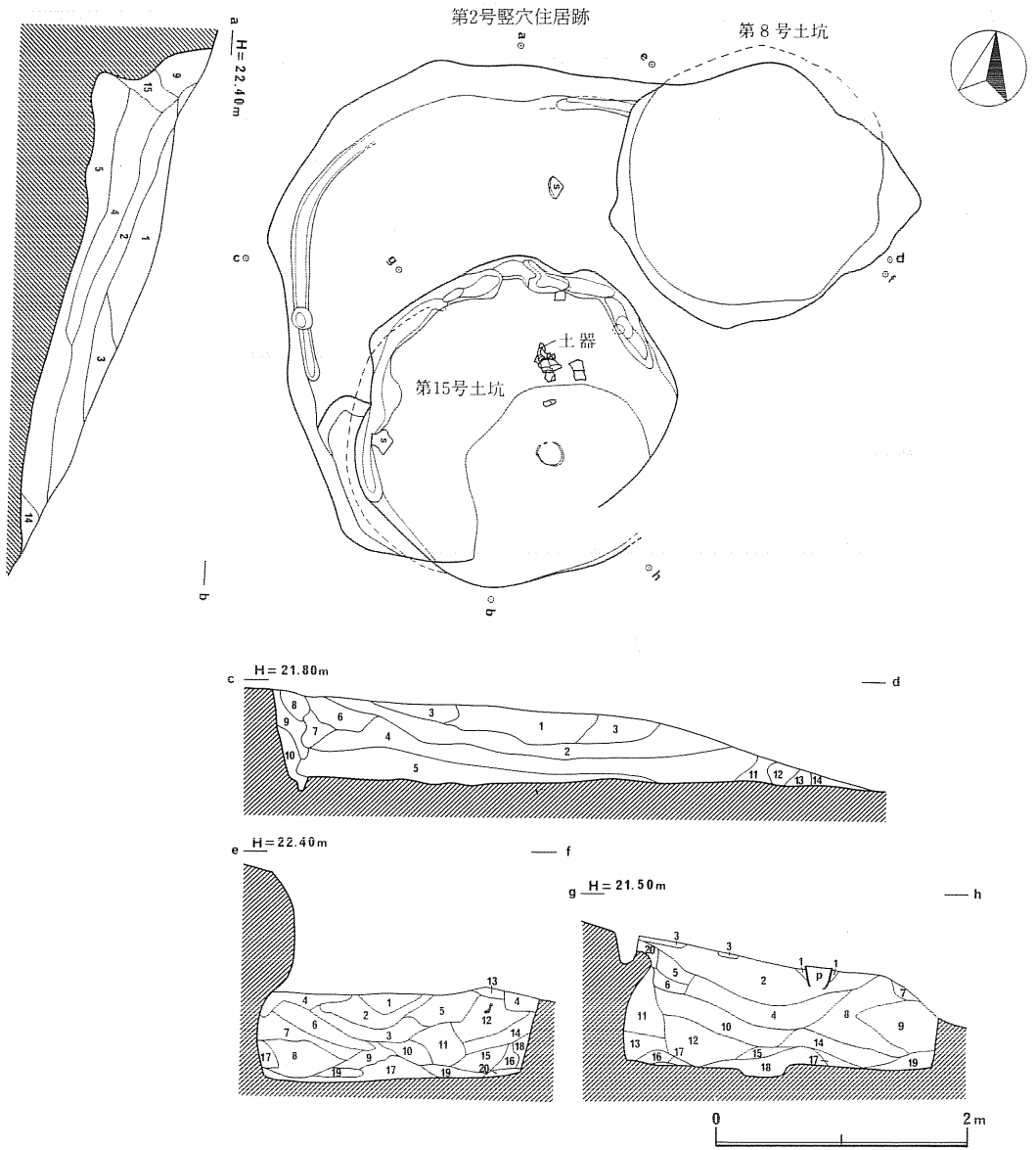
〔形態〕南東側と第8号土坑と重複する部位は、明確な壁面を把握できず、略円形と推定する。

〔規模〕径（推定）480cm、壁高0～96cm、面積（推定）14m²。

〔床面〕第8号土坑と重複する部分では特に何の処置も施していないが、第15号土坑と重複する部分では、褐色土で貼床されている。西側から北側にかけて壁溝が認められる。

〔炉〕第15号土坑上の貼床部分の中央で土器埋設炉を確認。熱の帯び方が激しく、著しく損壊している。炉の周辺から土器片がまとまって出土。

〔備考〕この竪穴住居跡は、第8号、第15号の2基のフラスコ状土坑が埋り切った段階で構築されている。また第15号土坑のプランに沿って周溝が切っており、拡張された2時期の住居の可能性もある。南東側の壁は急斜面の形成時に崩壊したものと推定される。



第114図 第2号竖穴住居跡、第8号・第15号土坑

第1号土坑（第115図、図版75-5）

OA～OB45グリッドに位置し第20号土坑、溝<SD02>の底面で確認した。第20号土坑に切られている。残存する開口部は長軸107cm、短軸88cm、底面は長軸247cm、短軸229cm、深さ168cmである。断面形はフラスコ状で、底面は平坦である。出土遺物は、石匙・石錘・扁平打製石器各1点、北陸系と思われる竹管文を施した土器小片など（第124図、第126図）。

第2号土坑（第115図、図版75-6）

N144グリッドの地山面上で確認した。開口部は長軸144cm、短軸135cm、底面は長軸222cm、短軸214cm、深さは129cmである。断面形はフラスコ状で、底面は平坦である。出土遺物は、石鎌・石篋・扁平打製石器各1点、縄文時代中期初頭の土器など。なお、底面の南東隅に人頭大の石が置かれていた（第122図、第124図、第126図）。

第3号土坑（第115図、図版75-7）

NG42グリッドの地山面上で確認した。開口部の長軸は134cm、短軸121cm、底面は長軸157cm、短軸149cm、深さ137cmである。断面形はフラスコ状、底面は平坦で、東側壁際に長軸85cm、短軸51cm、深さ25cmの楕円形のピットをもつ。出土遺物は扁平打製石器1点など。（第126図）。

第4号土坑（第115図、図版75-8）

MB39グリッドの急斜面直前の縁辺部に位置し、地山面上で黒褐色土の楕円形プランを確認した。急斜面側の開口部が広がっており、この部分で別の遺構との重複の可能性もあるが、切り合い関係は認められず判然としなかった。なお西側では第30号土坑が本遺構を切っている。残存する開口部の長軸223cm、短軸122cm、底面は長軸235cm、短軸160cm、深さは94cmで底面は平坦である。扁平打製石器1点が出土している（第126図）。

第5号土坑（第116図、図版76-1・6）

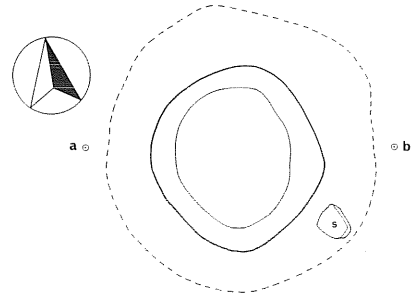
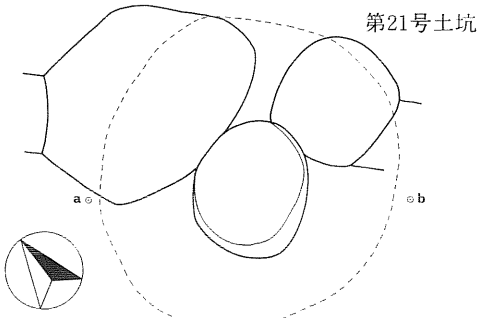
ME～MF42グリッドの緩斜面に位置し、倒木根跡の攪乱部分を掘り下げた結果確認された。開口部は破壊されており不明であるが、残存部は長軸218cm、短軸202cm、底面は長軸266cm、短軸265cmを測り、本遺跡中では最も大きい。断面形は鼓状で、底面は平坦。出土遺物としてはアスファルト付着の石鎌1点、土器片がある（第124図）。

第6号土坑（第116図、図版76-2・3）

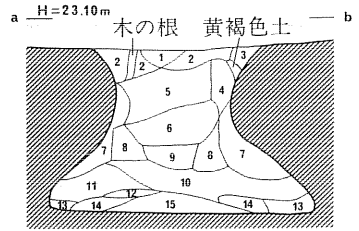
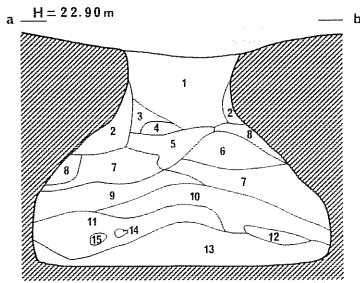
MG43グリッドの道路のすぐ南側に位置し、地山面上で確認した。溝<SD19>によって切

第5章 寒川Ⅱ遺跡

第20号土坑

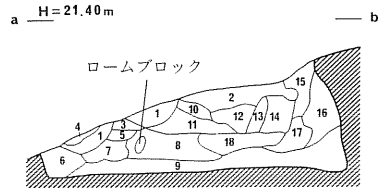
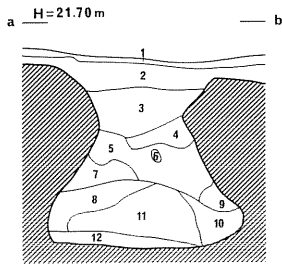
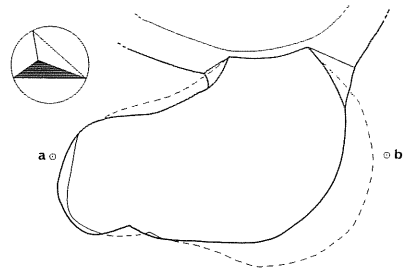
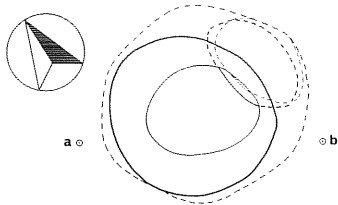


第1号土坑



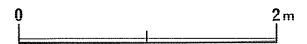
第2号土坑

第1号土坑



第3号土坑

第4号土坑



第115図 第1号～第4号土坑

られている。残存する開口部は長軸174cm、短軸160cm、底面は長軸231cm、短軸208cm、深さは98cmである。上部のかなりの部分が削られているものと判断される。断面形はピーカー状に近く、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

第7号土坑（第116図、図版76-4・6）

ME53グリッドの道路の南側にあり、地山面上で褐色砂質土の円形プランとして確認した。溝<SD54>によって切られている。開口部は長軸112cm、短軸101cm、底面は長軸213cm、短軸203cm、深さは143cmである。断面形はフラスコ状で底面は平坦であるが、やや西側が低くなっている。堆積状況を見ると、底面に黒褐色土、上層に地山の砂質土が堆積し、明らかに人為的に埋められた形跡を残す。近くのフラスコ状土坑を掘り込んだ際の排土が埋められたものと思われる。遺物は底面近くの黒褐色土中に含まれ、石匙2点、磨製石斧1点、土器片等が出土している（第121図、第122図、第125図）。

第8号土坑（第114図）

LJ40・41グリッドの第2号竪穴住居跡床面上で確認した。第2号竪穴住居跡に切られているため、開口部は失われ、深さは71cmしか残存しない。底面は長軸213cm、短軸205cmで平坦である。遺物は出土しなかった。

第9号土坑（第117図）

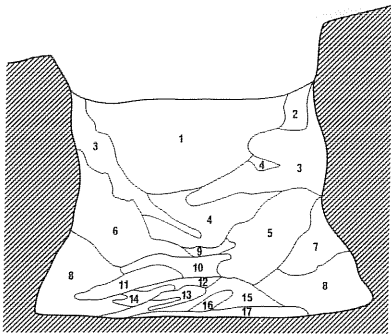
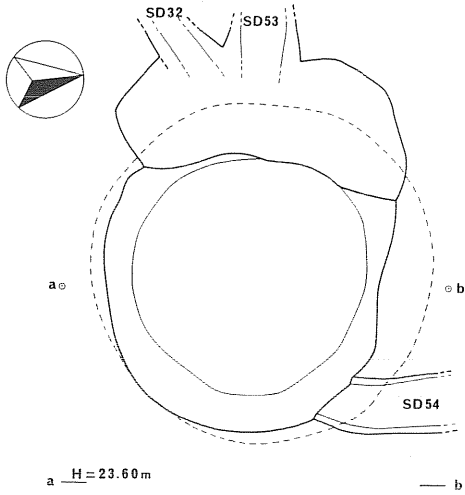
LJグリッドの急斜面直前の縁辺部に位置し、地山面上で確認した。埋土断面の観察により、2基のフラスコ状土坑が重複したものと判明した。開口部はこの2基の土坑の重複と斜面の崩壊によって著しく壊れている。底面の長軸は243cm、短軸239cmで、最も深い箇所では深さ243cmを測る。北側の立ち上りで判断する限り本来断面形はフラスコ状を呈していたものと思われる。底面中央部がやや低くなっている。遺物は出土しなかった。

第10号土坑（第117図）

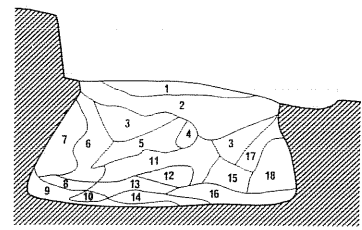
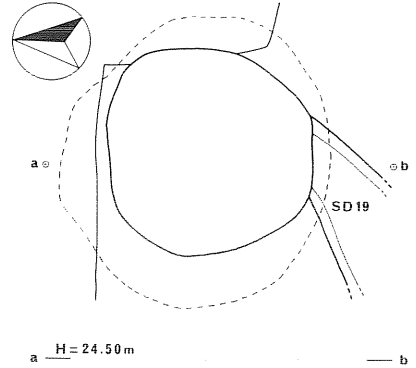
第9号土坑の北東、LJ42グリッドの台地平坦部南東縁に位置し、地山面上で確認した。開口部は長軸146cm、短軸129cm、底面は長軸167cm、短軸149cmで深さは136cmである。断面形はピーカー状で、平坦な底面中央部には径30cm、深さ15cmのピットがある。

第11号土坑（第118図、図版76-5・6）

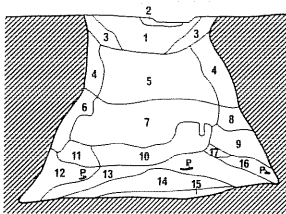
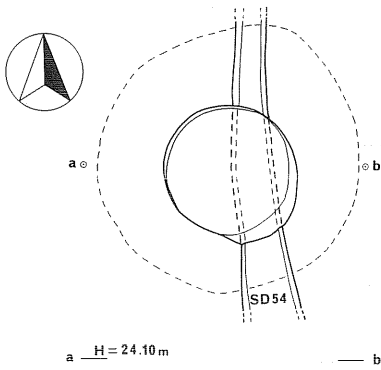
MF43グリッドに位置し、第7号土坑同様地山面上で褐色砂質土の円形プランを確認した。



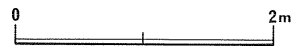
第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑

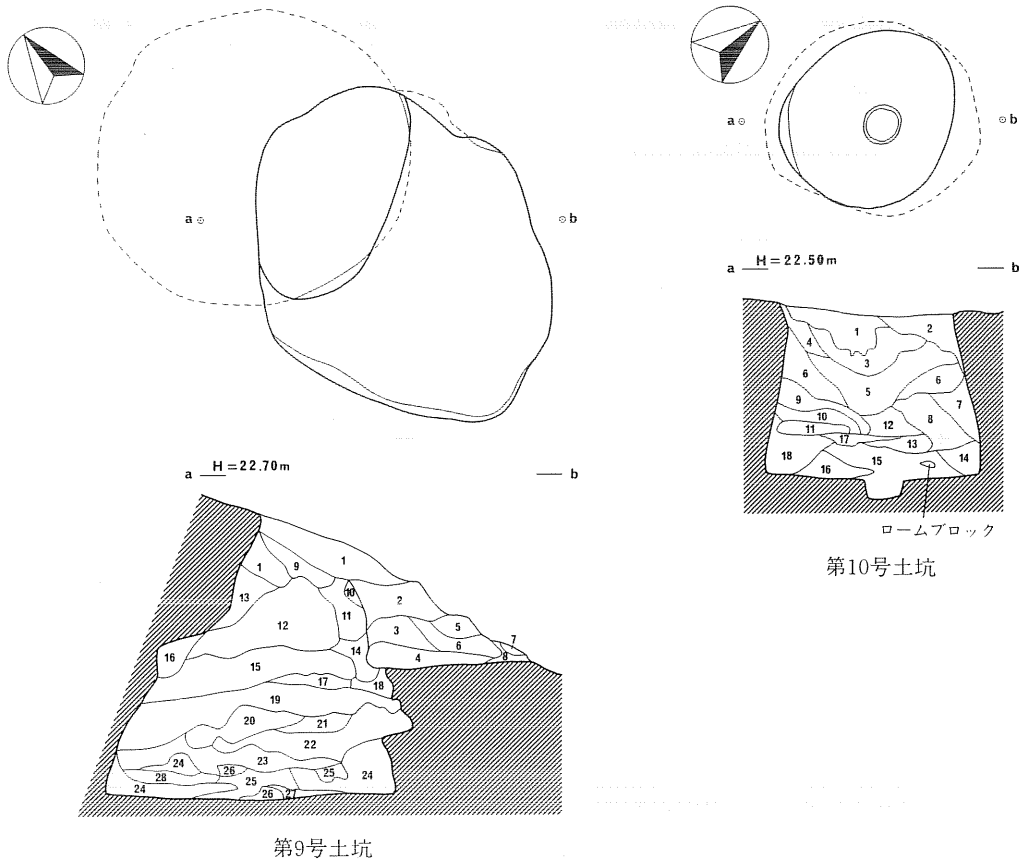


第116图 第5号~第7号土坑

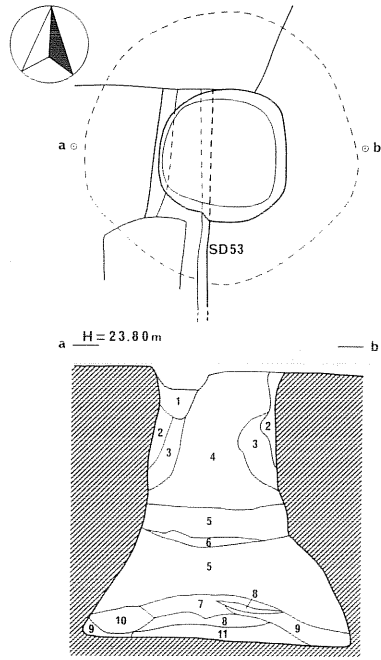
溝<SD53>に切られている。開口部は長軸104cm、短軸100cm、底面の長軸は212cm、短軸209cm、深さ211cmを測る。断面形は非常に頸の長いフラスコ状で、底面は平坦である。埋土の堆積状況からは第7号土坑と同様人為的に埋められたものであることが推察される。遺物は下層の黒褐色土中から磨製石斧1点と土器片が出土している（第125図）。

第12号土坑（第118図）

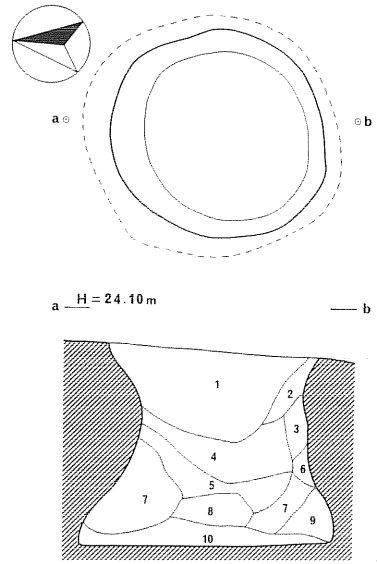
MH43グリッドの道路のすぐ南側に位置し、地山面上で確認した。開口部は長軸176cm、短軸159cm、底面は長軸209cm、短軸192cm、深さ156cmである。断面形はフラスコ状で底面は平坦である。



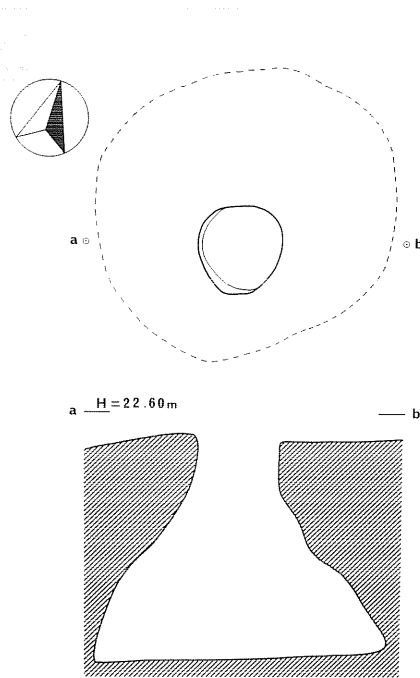
第117図 第9号・第10号土坑



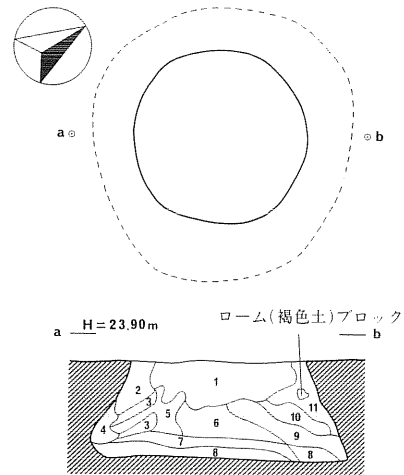
第11号土坑



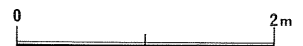
第12号土坑



第13号土坑



第14号土坑

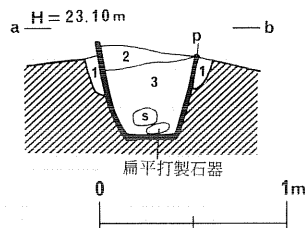
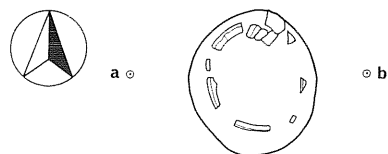


第118図 第11号～第14号土坑

土器片数点が覆土中から出土している。

第13号土坑（第118図）

M A 41グリッドの地山面上で確認した。開口部は長軸70cm、短軸66cmと非常に狭い。埋土断面の観察は行えなかった。底面は長軸243cm、短軸214cm、深さは175cmである。断面形は口の狭いフラスコ状で、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。



第119図 第1号土器埋設遺構

第14号土坑（第118図）

道路の北側、MD～ME 45グリッドに位置し、かなり削平された地山面上で確認した。開口部～頸部は失われていて、深さ79cmしか残存していない。底面は長軸221cm、短軸207cmで平坦である。断面形は本来フラスコ状を呈していたものと思われる。遺物は出土しなかった。

第15号土坑（第114図）

L J～M A 40グリッドの第2号竪穴住居跡の土器埋設炉周辺の貼床部分を半截した結果、フラスコ状土坑と判明した。土器埋設炉はちょうどこの第15号土坑の覆土中央部に設けられている。本遺構の精査は覆土、即ち第2号竪穴住居跡貼り床部分を半截しただけであったが、規模は底面の径が245cm、第2号竪穴住居跡床面からの深さは101cmである。断面形は本来フラスコ状を呈すると思われる。底面は平坦であるが中央部に径40cm、深さ9cmのピットが設けられている。遺物は出土しなかった。

第1号土器埋設遺構（第119図、図版76-7）

付け替え道路部分の調査区N H 44グリッドで検出した。確認面は第Ⅲ層の地山面である。長軸39cm、短軸33cmの楕円形の掘り込み内に、深鉢形土器を正位に埋設している。土器の体部下半は掘り込みの壁面にほぼ密着しているが、上半の周囲には10cm程の隙間があって暗褐色土が充填されている。掘り込みをかけて土器を半截したところ、底部近くに半割された扁平打製石器と自然礫が納められていた。

埋設されていた土器（第121図-2）は4単位の波状口縁をもつ深鉢形土器である。口縁部文様帯には口縁上端の波頂部から粘土紐貼付文を垂下させその間を連絡するようにLRの撚紐の側面圧痕文を数条施している。波頂部から下される粘土紐上および口縁部文様帯と体部の境に文様帯区画文として貼り巡らされる粘土紐上にも同じ原体による側面圧痕列が施文されている。

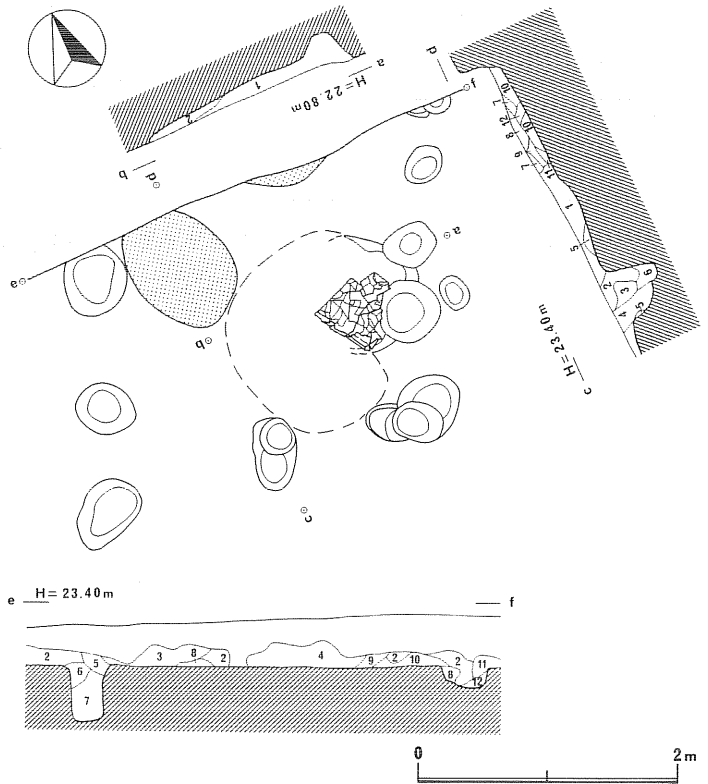
体部にはLRとRLの撚紐を結束第1種によって繋いだ原体を横位に回転施文して、9段にわたって羽状縄文が表わされている。以上の特徴から円筒下層d₂式土器に比定される土器である(第121図)。

OB46グリッド円筒下層d₂式土器出土地点(第120図、図版76-8、図版89)

付け替え道路部分の調査区の西端近くOB46グリッドで円筒下層d₂式に比定される深鉢形土器一個体が出土している。土器は第Ⅱ層下部の暗褐色土中で口縁部を西に向け横倒しに潰れた状態で検出された。土器の周囲径120cm程の範囲(第120図中点線内部)は堅く締った状態であり、その範囲の北西側に隣接して、長軸17cm、短軸82cmの楕円形に焼土化した部分もある。また土器の東側に接して北東-南西方向に並ぶ5箇所のピット列があり、土器の西側2mにもこれと平行する3箇所のピット列がある。以上のことから縄文時代前期の竪穴住居跡であることも充分考えられた。しかし、OB46グリッドを含めて付け替え道路部分の調査区は、全体に表

土から縄文時代の最終的な遺構確認面である第Ⅲ層に至るまでの間が非常に浅く、この円筒下層d₂式土器の出土地点の周囲では、殆どレベルを同じくして第16号~第20号の平安期の土坑が確認されている。土器の東西に並ぶピット列には、覆土中から土師器片を出土している例もある。したがって、調査の時点で観察し得た事実からは、たとえ縄文時代前期の竪穴住居跡であっても、その壁面や覆土の殆どは平安時代を含む後世に攪乱され失われたものと推測する他なかった。こうしたことから、この土器の出土地点については、その出土状況を記録しておくに留めた。(第120図)

土器の体部下半は細かく破



第120図 OB46グリッド円筒下層d₂式土器出土状態

碎されており接合作業の結果図示し得たのは口縁～体上半部までであるが(第121図-2)、口縁部の直径は41cm、器高は60cm以上と推定される大形の土器に復元される。器形は口縁～体部が直線的に下りる平縁の深鉢形土器であるが、口縁部下3.5cmに低い隆帯を貼り付けて文様帯を区画している。口縁部文様帯には $L \begin{cases} r \\ r \end{cases}$ の極めて細い撚紐を軸に対して左巻きに巻き付け、それをさらに他の軸へ巻きつけた絡条体の回転圧痕文が4～5条の筋となって施文されている。2段目の絡条体を作るに際して、1段目の絡条体を軸に巻き付けた方向は、原体の回転が文様体に平行して行われたと仮定した上で左巻きと推定される。口縁の上端と口縁部文様帯を区画する低い隆帯上には、右から左の方向で工具を器面に対して鋭角になるよう押し当てた半截竹管文列が施行される。体部には、RLとLRの撚紐を結束第1種によって繋いだ原体を横位に回転施文して羽状縄文を表わしている。口縁部が平縁であること、文様帯を区画するような屈曲部が器形上認められずただ低い隆帯がその役割を果たしていること、極めて狭い文様帯中に絡条体の回転圧痕文が施されることなどから円筒下層d₁式に比定される土器である(第121図)。

遺構内出土の縄文土器(第121図、第122図、図版89)

第1号竪穴住居跡炉埋設土器(第121図-3、図版89)

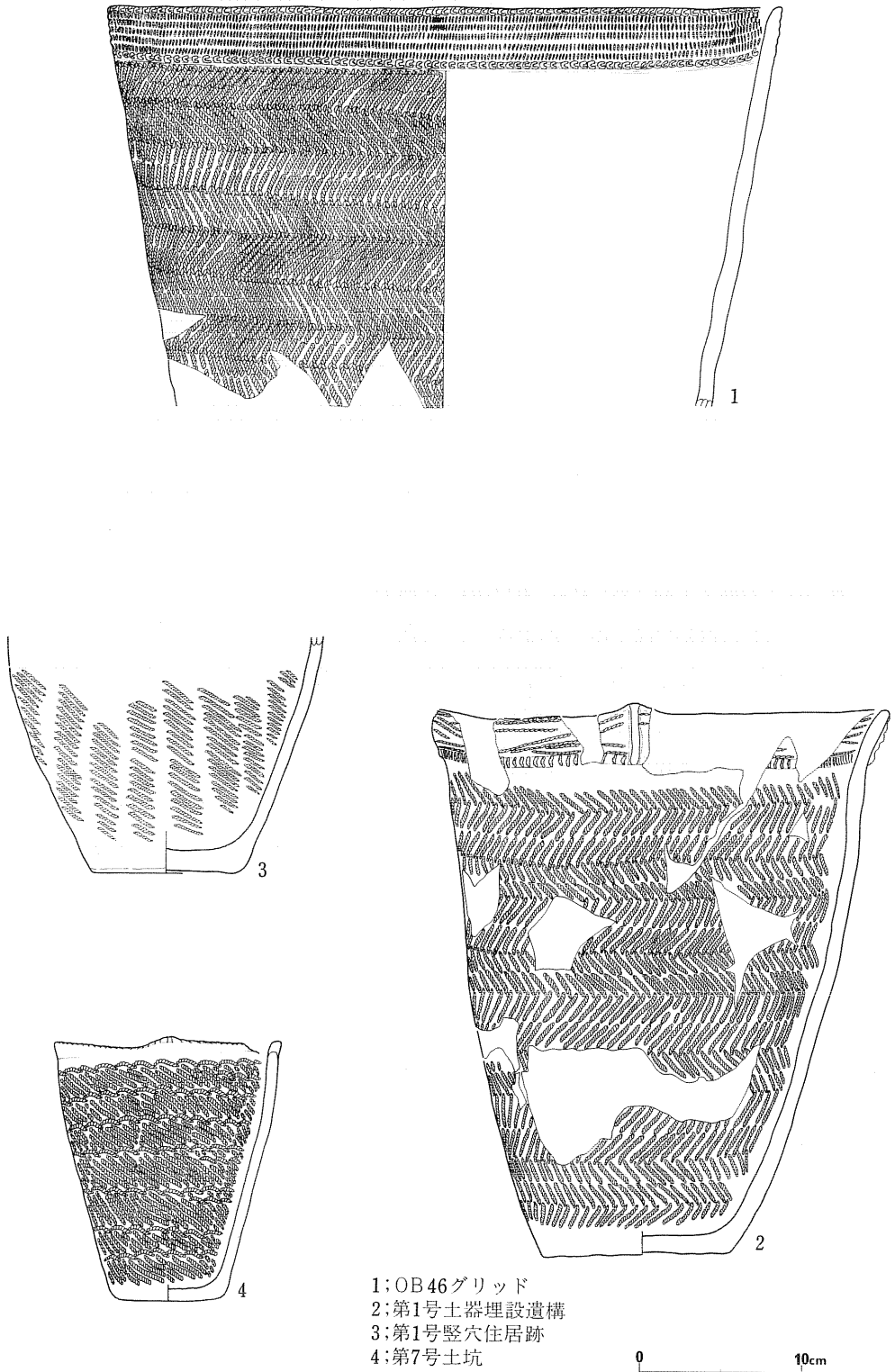
土器埋設炉として使されていた土器である。体部下半～底部しか残っていない。口縁～体部上半を欠いたまま炉に使用されていたものであろう。幅2～3cmの粘土帯を積み上げ成形した痕跡が残っている。器面にはLRの撚紐を縦位に回転施文しているが、原体の撚りは粗く施文も比較的疎らである。胎土にはかなり多量の砂粒が混入されてはいるが焼成は堅緻な仕上がりとなっている。体上半部に緩いカーブをもつ縄文時代中期末～後期初頭の粗製深鉢形土器であろう。

第2号竪穴住居跡炉埋設土器

貼り床部分に炉として埋設されていた土器である。口縁部～体部上半はなく、第1号竪穴住居跡の炉の土器同様口縁部～体部上半は欠失している。検出された体部下半は二次的な火熱のため器面の損傷が激しく、また著しく破砕した状態で復元・図示とも不可能であった。器面に残されている縄文はLRの撚紐を縦位に回転施文したものである。縄文時代中期末～後期初頭の粗製深鉢形土器であろう。

第2号土坑覆土内出土土器(第122図-1～11、図版89)

いずれも覆土の中位～下層にかけて出土した土器である。1は口縁部に2重の螺旋に巻いた絡条体回転圧痕文の文様帯をもつ。絡条体は $R \begin{cases} 1 \\ 1 \end{cases}$ の撚紐を1段目で左巻にしたものが用いられている。2段目の巻き付け方向は施文された文様が限られた小部分でしか観察されないため、不明である。口縁の上端と口縁部文様帯の下には円形の刺突文列が施される。体部にはRLの



1; OB46グリッド
2;第1号土器埋設遺構
3;第1号竖穴住居跡
4;第7号土坑

第121図 遺構内出土縄文土器(1)

撚紐が横位に回転施文されているのが観察される。2は口縁部文様帯に $R \left\{ \begin{array}{l} 1 \\ | \\ 1 \end{array} \right.$ の撚紐を軸に対して右巻きに巻き付けた絡条体の回転圧痕文を施文している。文様帯の下には棒状工具による円形刺突文列が施文される。この刺突文列を境として口縁部と体部は僅かな屈曲をもつ。体部には $R L$ の撚紐を横位に回転している。3～9は同一個体の破片である。口縁部文様帯には $L R$ の撚紐の側面圧痕文が5条の筋として施される。頸部には粘土紐の貼り付けによる低い隆帯がめぐらされ、その上に半截竹管文列が施文される。体部には $R \left\{ \begin{array}{l} 1 \\ | \\ 1 \end{array} \right.$ の撚紐を軸に巻きつけた木目状撚糸文が施文される。この原体は1段の撚紐を2つ折りにした際できる閉じた端を、半截した竹管に挟み込み、開いた両端を竹管を軸としてそれぞれ左巻、右巻として作られており、器面には2つ折りにされた撚紐の閉じた端の圧痕と、「ハ」の字に開いた撚紐の圧痕とがほぼ等間隔に交互にあらわれている。器面上の原体の回転方向は縦位であるが、一部原体の左右の端を逆にして回転した部分も認められる。10・11は羽状縄文の施された体部の破片であるが、 $R L$ と $L R$ の撚紐を結束第2種によって繋いだ原体を横位に回転して羽状縄文をあらわしている。それぞれの撚紐の閉じた端の輪が、その先端で互いに他方の撚紐を結縛するため、結束部の回転圧痕としては上向きと下向きの円弧を連ねたような綾絡文があらわれる。

以上の第2号土坑出土の土器は円筒下層d₁式に比定される。

第7号土坑覆土内出土土器（第121図-4、第122図-12.13、図版89）

第121図-4は覆土の中位から出土した小形の深鉢形土器である。1/2程度しか残存していないが、口縁部は7単位の波頂部をもった波状口縁となるであろう。口縁部は幅1.5cm程の粘土紐を貼り付けて作っているが、撚紐の圧痕列か篋状工具による刻目列が施されている。磨滅していて判然としない。体部には結節を設けた $L R$ の撚紐を横位に回転して、綾絡文のある斜行縄文を施文している。第122図-12.13は同一個体の破片である。口縁部はおそらく4単位の波頂部をもった波状口縁となり、口縁部文様帯と体部との間に屈曲のある深鉢形の器形を呈するであろう。口縁の波頂部からは下端を渦巻（12）、またはやや押し潰して逆T字形（13）に貼り付けた粘土紐の貼付文が施される。貼付文の間、および貼付文上には $L \left\{ \begin{array}{l} r \\ | \\ r \end{array} \right.$ 撚紐を軸に左巻きに巻いた絡条体の側面圧痕文が3～5条押圧されている。口縁の上端と口縁部文様帯の下にも同じ原体の縦位の圧痕列が施文されている。体部には結束第1種により繋がれた $R L$ と $L R$ の撚紐を回転施文した羽状縄文が施文されている。

以上、第7号土坑の覆土中から出土した土器は縄文時代中期前葉円筒上層a式に比定される。

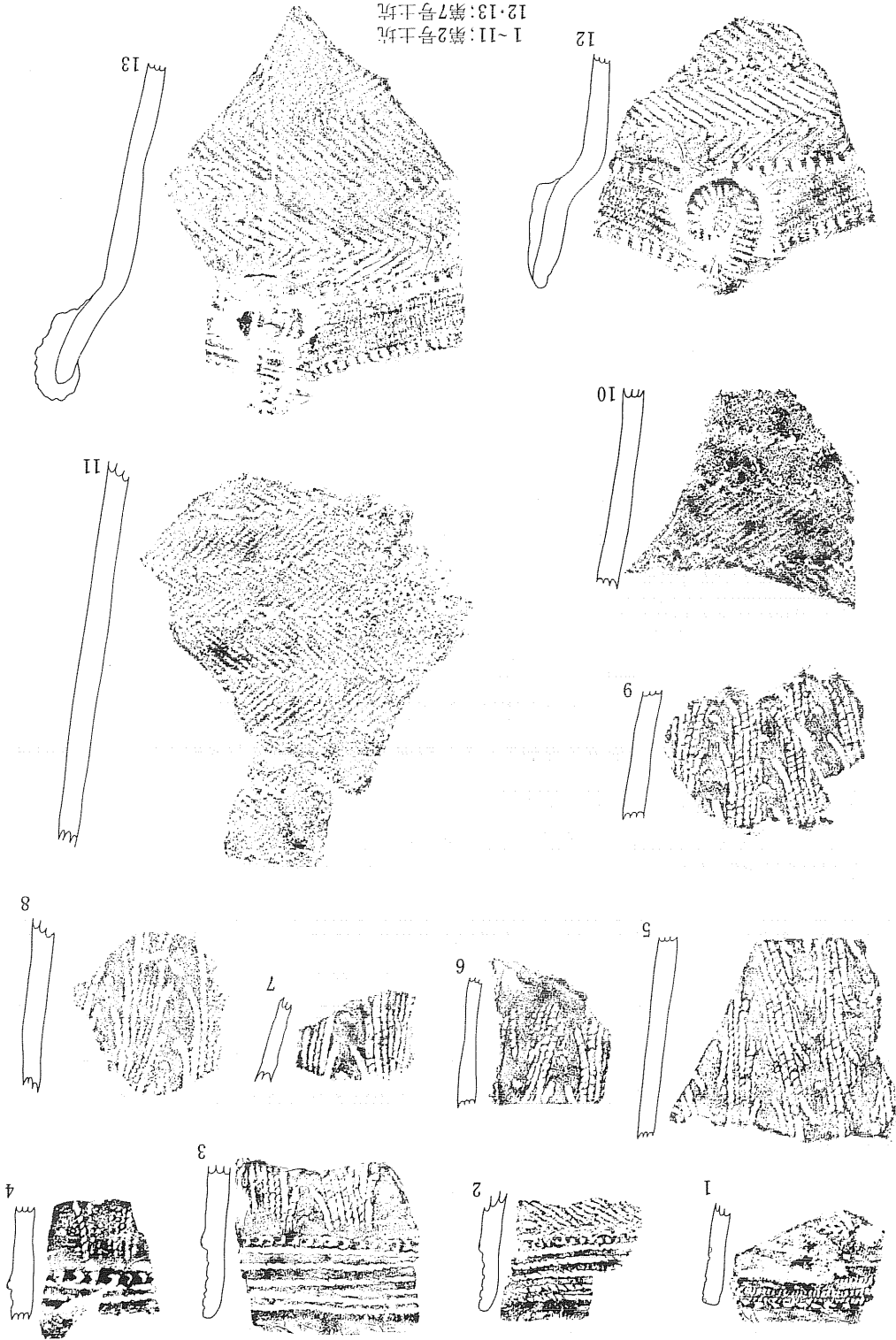
遺構外出土の縄文土器（第123図、図版90-2）

付け替え道路部分の調査区を中心として、縄文時代前期末葉に位置づけられる土器片がいくつか採取されている。

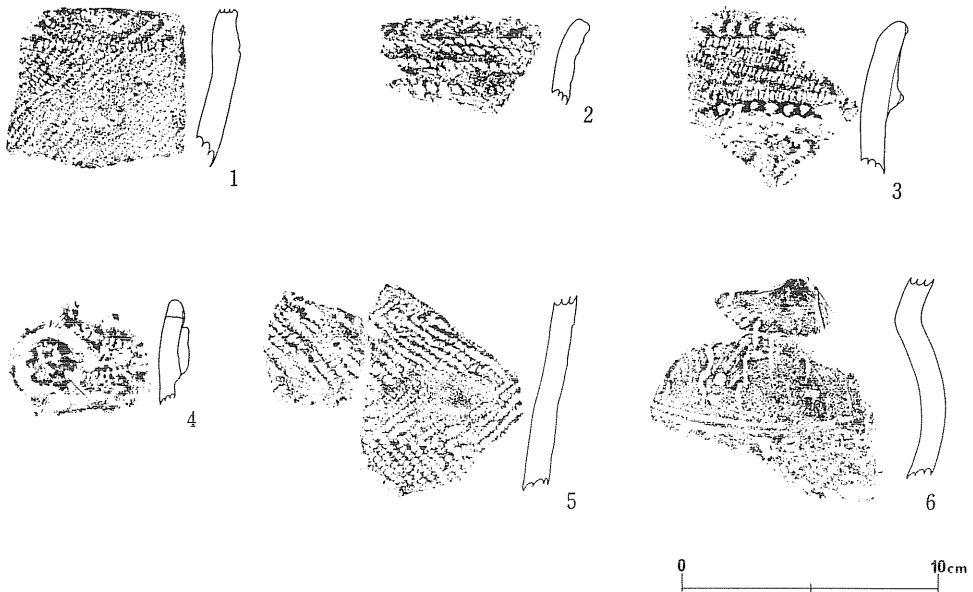
第122図 遺構内出土縄文土器(2)



1-11: 第2号土坑
12-13: 第7号土坑



第123図-1は口縁部と体部の間に屈曲部をもつ鉢形土器の破片である。口縁部文様帯にはL $\left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right.$ の撚紐を軸に対して左巻きに巻きつけた絡条体の側面圧痕文が、左上-右下、右上-左下に3条づつ押圧されている。また同じ原体を口縁と体部との間の屈曲部にも押圧して巡らしている。体部にはL Rの撚紐を横位に回転施文している。2はやや外側に反った鉢形土器の口縁部文様帯の破片である。文様帯中にはL Rの撚紐の側面圧痕文が、5条押圧施文されているのが観察される。3は口縁上端に半截竹管文列、口縁部と体部の境に貼り巡らせた隆帯上には円形の刺突文列を施した鉢形土器の口縁部破片である。隆帯から上の口縁部文様帯の上下にはL $\left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right.$ の撚紐を軸に左巻きに巻きつけた絡条体の側面圧痕文を口縁と平行に1条づつ押圧し、その間にも同じ原体を用いて3条分斜位に施文している。斜位に施す方の絡条体の側面圧痕文は条が揃っていることから、さらに2段目の軸に巻いた原体の回転施文である可能性も強い。4は波状口縁の鉢形土器口縁部破片である。波頂部は二又に分かれ、その下には円形のボタン状貼付文が施される。貼付文の上と周りにはR Lの撚紐の側面圧痕文が施文されている。5は鉢形土器の体部破片である。結束第1種によって繋いだL RとR Lの撚紐を横位に回転施文し、羽状縄文をあらわしている。6は外側に開く口縁部から頸部で大きく屈曲し、球形の体部をもった鉢形土器に復元できるような思われる。頸部から体部上半にかけては結節部を設けたR Lの撚紐を縦位に回転施文し、綾絡文をもった斜行縄文をあらわしている。また綾絡文の間には縦に並んだ2つの円形刺突文が施文されている。体下半部との間には2条の平行沈線が巡らされている。以上のうち、1～3は円筒下層d式、4は円筒上層a式に比定され、5はそのいずれかの体部破片と思われる。6は円筒土器と地域的な分布を異にする前期末から中期初頭の土器であろう。



第123図 遺構外出土縄文土器

遺構内出土の石器（第124図～第126図、図版90-1）

第1号竪穴住居跡内出土石器（第125図-7・8、図版90-1）

石筥、石匙各1点が出土している。7は素材となった剥片の両面を加工した石筥である。素材剥片の表面であった側に稜線が残り、断面形はカマボコ形を呈する。8も素材に両面加工を施した縦形の石匙である。刀部は本体両側縁と撮みと反対側の辺に作り出されている。撮みの反対側の辺では先端部を折断した後に、折断面側から調整剥離を加えて刀部としている。両者とも石材は頁岩である。

第2号竪穴住居跡内出土石器（第124図-8～11、図版90-1）

石鏃2点、部分的な調整剥離を加えた剥片2点が出土している。8の石鏃は素材剥片の周縁に調整剥離を加えて形を整えただけのもので、素材の主要剥離面、表面とも残されている。茎の部分は折損している。10は先端部が折損した平基石鏃である。側縁、基部とも調整剥離を加えて薄く仕上げているが、片面には素材剥片の主要剥離面が部分的ながら残されている。9は縦長剥片の側縁に調整剥離を加えたもの、11は縦長剥片の両側縁を刃縁として使用した結果刃こぼれの認められるものである。8～11とも石材としては頁岩を用いている。

第1号土坑内出土石器（第124図-1～4、第126図-4～6、図版90-1）

石鏃、石槍、石匙、搔器各1点、扁平打製石器3点が出土した。第124図-1は素材の剥片の主要剥離面側から調整剥離を加えて形を整えてゆく途中の石鏃である。素材剥片の表面側の左側縁はほぼ加工が済んでいるが、他には手が施されていない。途中で火の中に投げられたものと推測され、火熱によって表面側の半分が弾けて失われた痕跡を残す。2は縦長の剥片の周縁を加工して作った石槍である。表裏面ともその中央に素材剥片の表面、主要剥離面が残る。基部は着柄を容易にするため薄く仕上げられているが、素材剥片の表面側から加撃して大きな剥離面を作り出した後、この剥離面から素材の表面側へ細かな押圧剥離を施すことにより、燕尾状に形を整えている。3もやはり縦長の剥片を素材に用いた石匙である。撮みを作り出すために施した調整剥離も刃部を作り出すための剥離も極めて粗雑で、素材剥片の周縁を主要剥離面側から鈍角に打ち欠いただけのものである。あるいは石匙の製作工程上にある半製品かもしれない。4は肉厚の剥片の周縁に表裏面から粗い剥離を加えて円形に仕上げた搔器である。図に示す上端がいく分尖らせてあり、断面形でもこの部分から左側縁にかけては鋭角の刃部となっている。以上の製品はいずれも頁岩を素材としている。第126図-4-6の扁平打製石器はいずれも中程で打損した半欠品である。3つとも扁平な楕円礫の1側縁を打ち欠いて鋭角にした部分を使用し、側縁の他、原礫長軸端である図の上部にも、平坦面を作るために打ち欠く作業が行われている。背面側には加工を施していない。4・6の擦面の幅は、各々15mm、25mmまで広がり、側縁に施された剥離の及ぶ深さまでほぼ使い尽された状態が認められる。5の側面は断面が鋭

角のまま、使用された擦面が残されていない。使用されなかったものか、あるいは使用によって摩耗した擦面を新しく加撃して、鋭角の稜を再生した状態のものであろう。4～6とも石材には安山岩質の石が用いられている。

第2号土坑内出土石器（第124図-6・7、第126図-7、図版90-1）

石鏃1点、石筥1点、扁平打製石器1点が出土している。第125図-6は細身の有茎の石鏃である。両面とも丹念に調整剥離を加えて全体を仕上げている。7は縦長の剥片を素材に利用して作られた石筥である。形を整えて同時に刃部を作り出すための加撃は殆ど素材の主要剥離面側からのみ行っており、断面形はカマボコ形を呈する。6・7とも石材として頁岩が用いられている。第126図-7の扁平打製石器は厚手の楕円磔を用いている。擦面は幅3cm、長さ12.5cmで形成されており、剥離の及ぶ深さまで殆ど使い切られている。磔の長軸端は石錘に施すように打ち欠いて凹ませている。石質は安山岩である。

第3号土坑内出土石器（第126図-2）

両面および周縁を打ち欠きながら短冊形に仕上げた扁平打製石器である。一側縁に鋭角の稜が作られてはいるが、使用された痕跡は認められない。石質は砂岩である。

第4号土坑内出土石器（第126図-1）

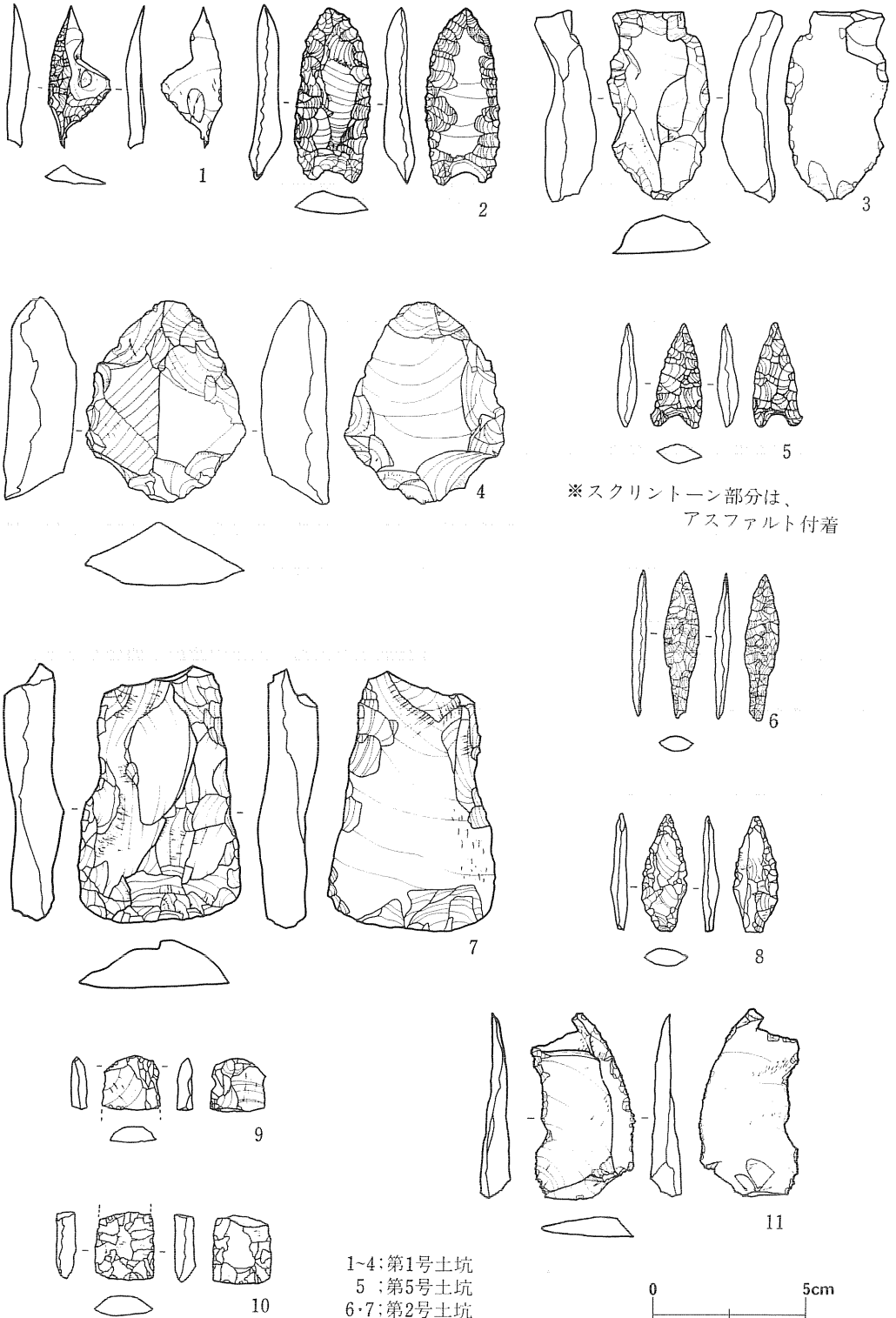
半円形の扁平打製石器1点が出土している。比較的小形の薄手の楕円磔の1側縁を加撃して鋭角の稜を形成している。磔の長軸端も浅く打ち欠いて平坦な面を作っている。石質は安山岩。

第5号土坑内出土石器（第124図-5、図版90-1）

石鏃1点が出土している。基部は片面から比較的大きな剥離を加えて燕尾状に作り上げている。脚部の間から中央部にかけて着柄・固定のためアスファルトの付着した痕跡が認められる。頁岩を石材として製作されている。

第7号土坑内出土石器（第125図-1～5、図版90-1）

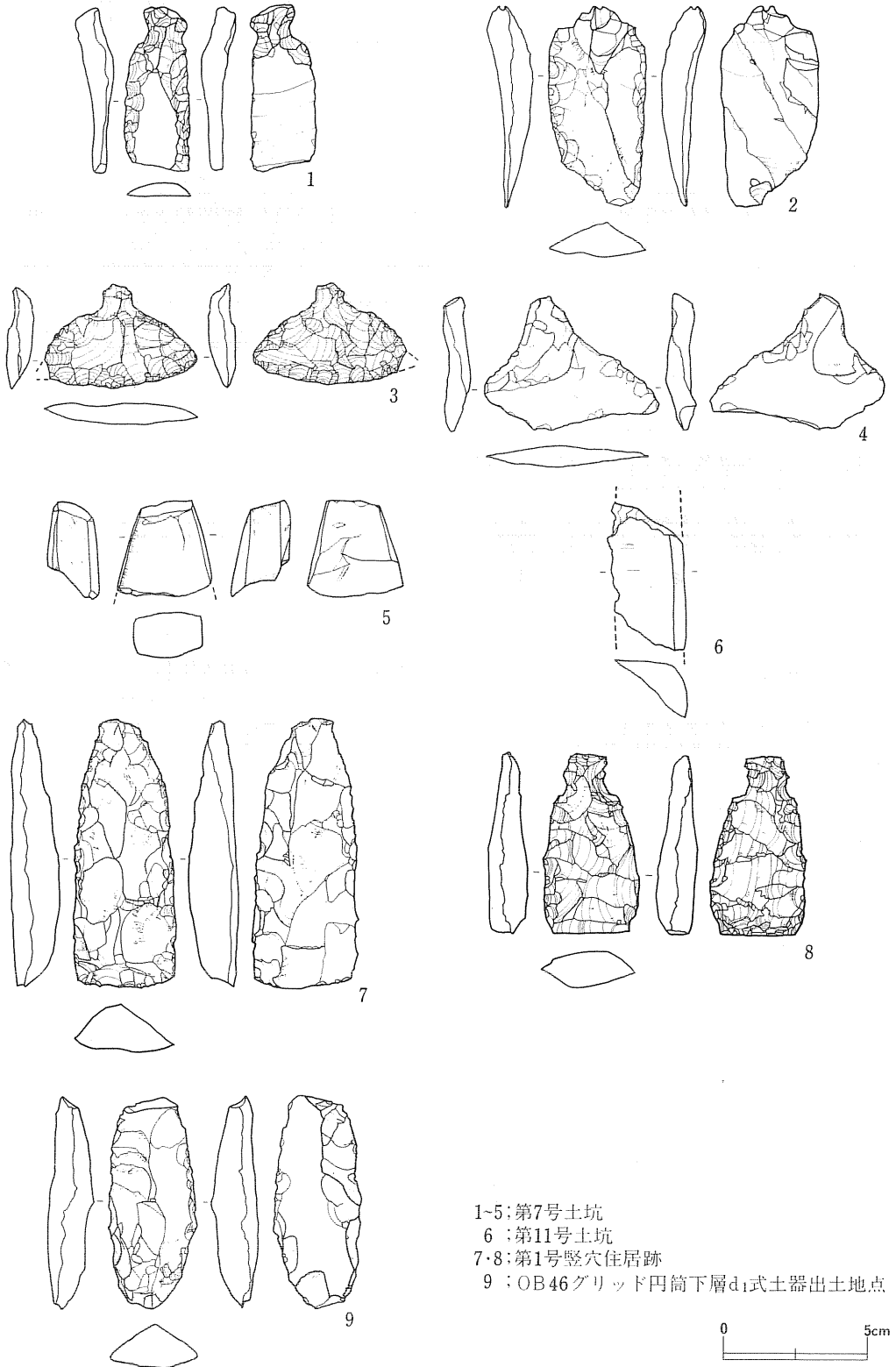
石匙3点、搔器1点、磨製石斧の基部片1点が出土。1は縦長の剥片を素材として用いた縦形の石匙である。素材の主要剥離面側から調整剥離を施して両側縁の刃部を作り出している。撮みの部分は両面から素材の打面近くに剥離を加えて挟り込んでいる。先端部を欠損している。3は両面加工の横形石匙である。本体の左右の端を尖らせ、撮みはその中程に設けられる。4は横長の剥片を素材として粗い剥離を加えて撮みを作り出した横形の石匙である。撮みの部分は素材剥片の両脇から主に表面側へ加撃して作り出している。打面はそのまま残されている。また打面の反対側の辺も第一次剥離のままの鋭角の縁を刃部として用いたようである。2は縦長の剥片の両側縁に主要剥離面側から調整剥離を加えて刃部として搔器である。素材剥片を打ち剥った際の打面は僅かに残されている。以上1～4は、頁岩を石材として用いている。5の磨製石斧の基部は表裏面ならびに両側面、基部上面が磨かれて製作されている。緑色凝灰岩製



※スクリントーン部分は、
アスファルト付着

1-4: 第1号土坑
5 : 第5号土坑
6・7: 第2号土坑
8~11: 第2号竪穴住居跡

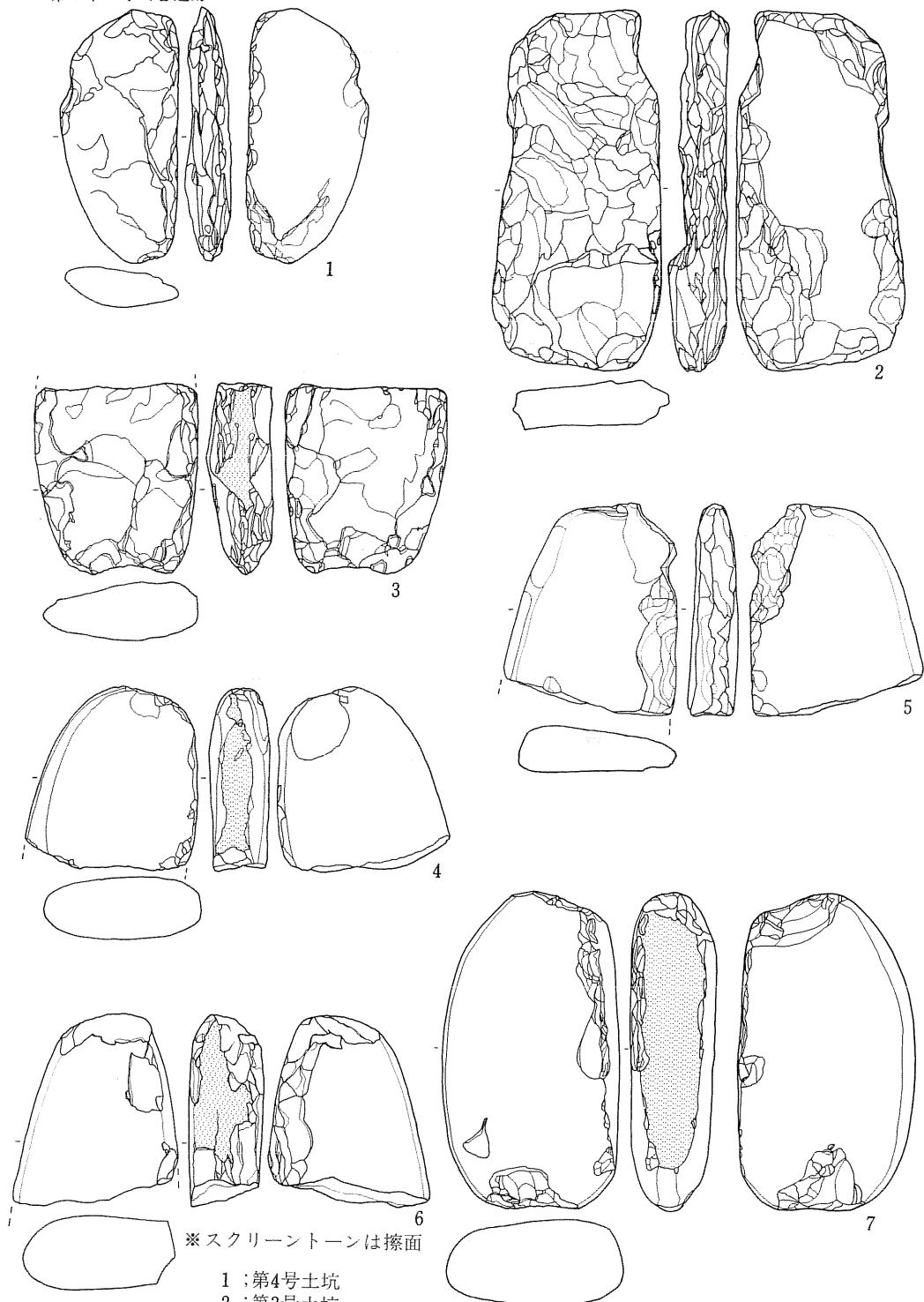
第124図 遺構内出土石器(1)



1-5: 第7号土坑
 6 : 第11号土坑
 7・8: 第1号竖穴住居跡
 9 : OB46グリッド円筒下層d₁式土器出土地点



第125図 遺構内出土石器(2)



- 1 : 第4号土坑
- 2 : 第3号土坑
- 3 : 第1号土器埋設遺構
- 4-6 : 第1号土坑
- 7 : 第2号土坑

第126図 遺構内外出土石器(3)

第11号土坑内出土石器（第125図-6、図版90-1）

磨製石斧の断片1点が出土している。側面での断面形は緩い弧になるよう磨かれている。緑色凝灰岩を石材とする。

第1号土器埋設遺構内出土石器（第126図-3）

第121図-2の土器内に納められていた扁平打製石器の半欠品である。扁平な礫の両面を加撃して形を整えた上で、1側縁に作られた稜の部分进行を擦っている。擦面の幅は1.3~1.7cm。長軸端にも加撃し浅い凹みを設けている。石質は安山岩である。

OB46グリッド円筒下層d式土器出土地点周辺出土石器（第125図-9、図版90-1）

縦長の剥片の周縁に主に主要剥離面側からの剥離を加えることにより製作された石筥である。素材となった剥片の打面は横からの加撃によって除去されている。石材は頁岩である。

遺構外出土の石器（第127図~第129図、図版90-2）

付け替え道路部分の調査区、道路南側斜面の調査区を中心として石器が採集されている。石鏃2点、石槍1点、石匙3点、搔器1点、磨製石斧1点、扁平打製石器7点、石錘6点、凹石1点を数える。

石鏃（第127図-1・2、図版90-2）

1は平基の石鏃で、両面ともていねいに調整が施されている。石質は頁岩である。2は表面に1条の稜線がある縦長の剥片を素材に利用した石鏃である。調整剥離は周縁に加えられるだけで、素材の表面、主要剥離面とも大きく残されている。先端部はいく分磨滅しており、石錘として使用された可能性もある。石材は頁岩を用いている。

石槍（第127図-3、図版90-2）

半欠品である。幅広で長身の柳葉形のものであろう。両面ともていねいに調整が施されているが、調整による剥離面が表裏面に作る稜は磨滅しており、着柄によるものであることが推測される。先端にも磨滅が認められ、石槍の切先とは認め難い点である。おそらく基部の残存品であろう。石材は黒曜石である。

石匙（第127図-4~6、図版90-2）

4・5は縦形石匙である。撮みの作り出しは両面から加撃して行っているが、側縁の調整は主剥離面からのみ加撃して行っている。6は横形の石匙であり、撮みは両面から加撃して作り出されている。表面はほぼ全面にわたって調整され、主要剥離面は縁辺の半周のみ調整されている。4~6とも石材には頁岩を用いている。

搔器（第127図-7、図版90-2）

素材の剥片の両側縁に主要剥離面から加撃することによって刃部を作り出した搔器である。

素材の剥片の打面はそのまま残されている。石材としては頁岩が用いられている。

磨製石斧（第127図-8、図版90-2）

現存長17.7cm、最大幅7.6cm、最大厚3.3cm、重さ771gを測る大形の磨製石斧である。一側縁には打撃痕を有し、基部は斜めに折断して作り出されている。刃部付近の両側縁は磨かれて平坦に仕上げられ、表裏面との間に明瞭な稜を残す。刃部は使用によって刃こぼれを起している。石材には安山岩質の石が使われている。

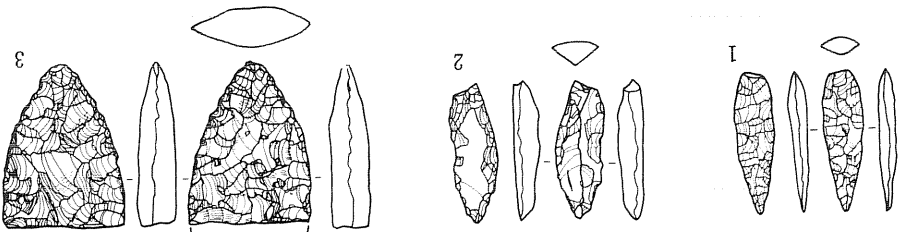
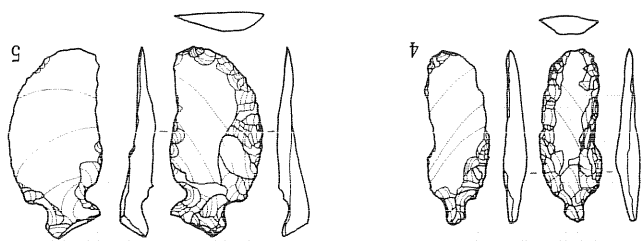
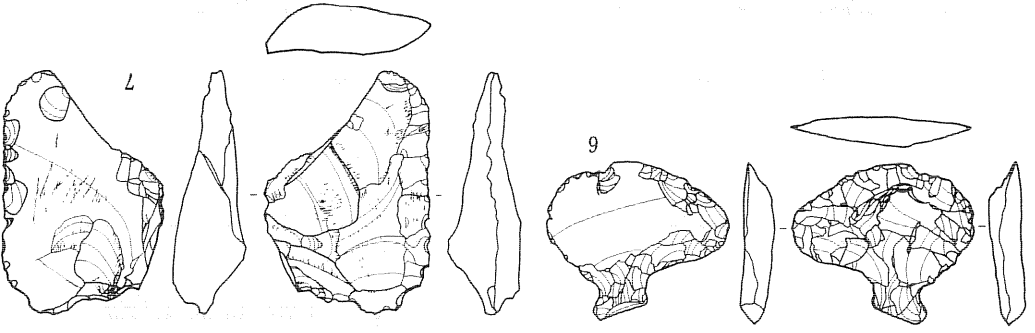
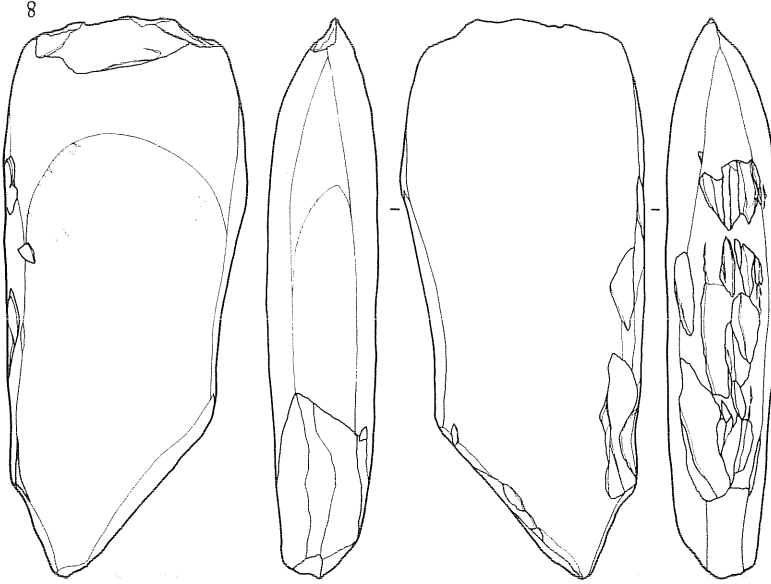
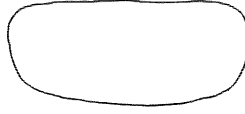
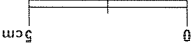
扁平打製石器（第128図-1~7）

a；扁平礫の両面および周縁を加撃して形を整え、一側縁に鋭角の稜または平坦な擦面を形成したもの（2.3）、b；扁平楕円礫の長軸端を加撃し平坦かやや浅い凹面を作り、一側縁に鋭角の稜または平坦な擦面を形成するもの（1.4.5）、c；扁平楕円礫の長軸端に浅い凹面を作るかまたは全く原礫のまま、周縁の一部に擦面だけを作るもの（6.7）と大きく3つに分けられる。このうち、最後に挙げたものは唯単に擦石とするか石錘の側面の擦られたものと解釈すべきとも思うが、擦面の形成部位が原礫の側縁に限られることから、敢えて扁平打製石器の項に分類した。1~7の資料は全て安山岩製であるが、このような分類を通してこの種の石器について言えるのは、扁平打製石器の機能に大きく関わる側縁に設けられる擦面は、使用面でもありかつまた使用面を作り出すための作業面でもあるということ、それに関連して使用面を形成するのに十分な長さ、限定された厚さの楕円礫を素材として用いるか、使用面を形成する以前にそれに見合うような形状に素材を仕上げしておくということ、さらに素材の長軸端は石錘に見られるような結縛可能な凹面または平坦面を設けることなどである。第1の点については例えば1.2の資料のように側縁両面に加撃しての鋭角な稜をつくるものと、4.5のように極めて幅の広い使用面に擦り切られたものがあることから、使用面（擦面）の形成即ち、稜を作り出すための打面の再成であり、鋭角な稜を作ることは即ち、限定された幅の使用面を形成するためのものであることが推定される。また6.7の資料に示されるように素材に扁平な楕円礫を用いる場合は、最初に施される側縁の加工は摩擦による平坦な擦面の形成であり、この段階から前述した打面の再生、使用面の形成（再生）を繰り返したと推定される。さらに両端に設けられる平坦または凹面は、使用面との直接の関わりはないものの、使用対象との摩擦を効率よく行うための補助的な機能をもたせたものと想定しておきたい。

石錘（第129図-1~6）、凹石（第129図-7）

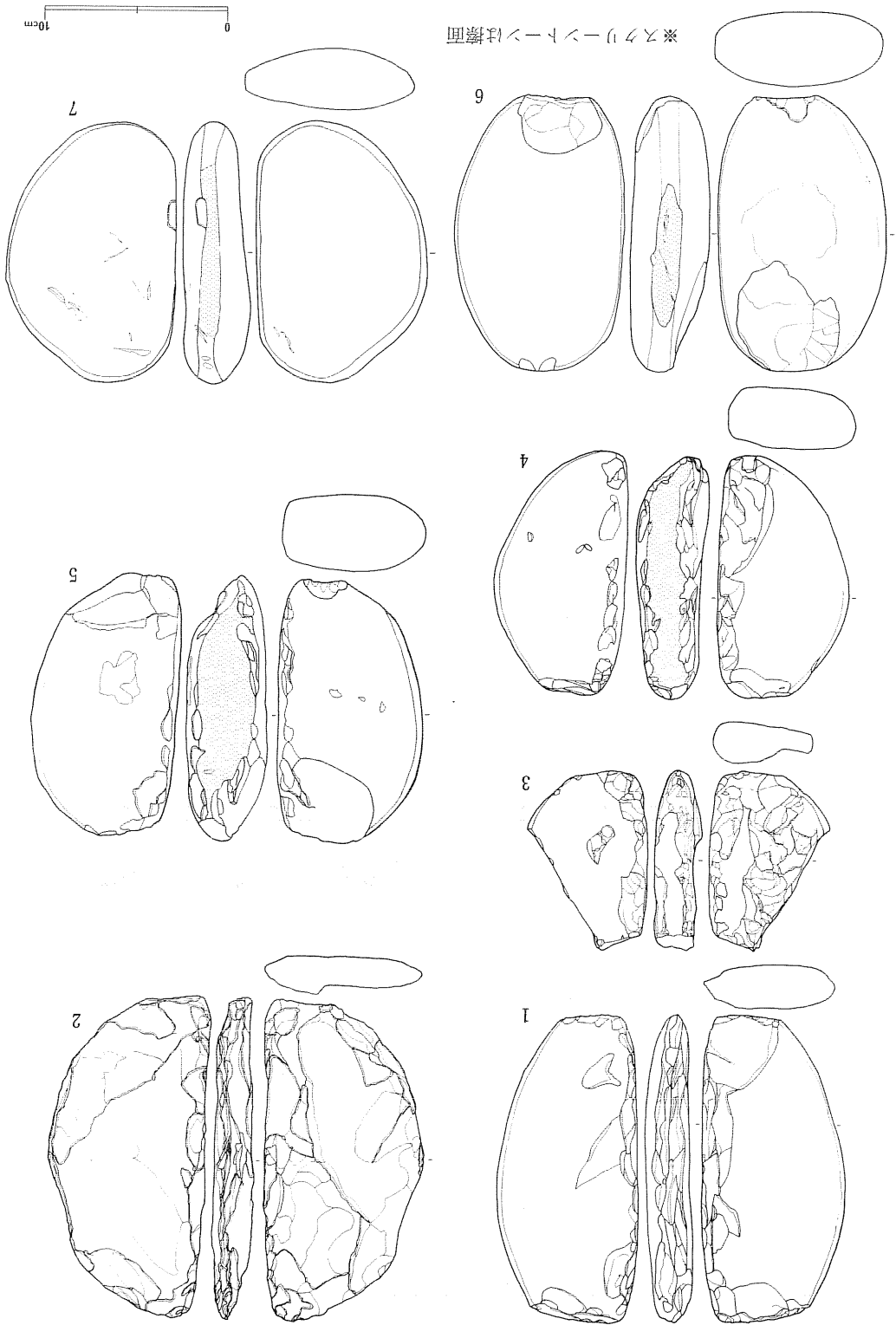
石錘は小形のものと大形のものとに分けられる。先の第4章寒川Ⅰ遺跡での石錘重量の分布に照らせば、前者と後者の境を120g前後におくことができよう。小形のもの（1.2）では長軸の両端を、大形のもの（3~6）では長軸端を打ち欠くものと短軸端を打ち欠くもの（4）がある。また、6の資料は扁平打製石器の擦面を形成する前段階の製品である可能性もある。

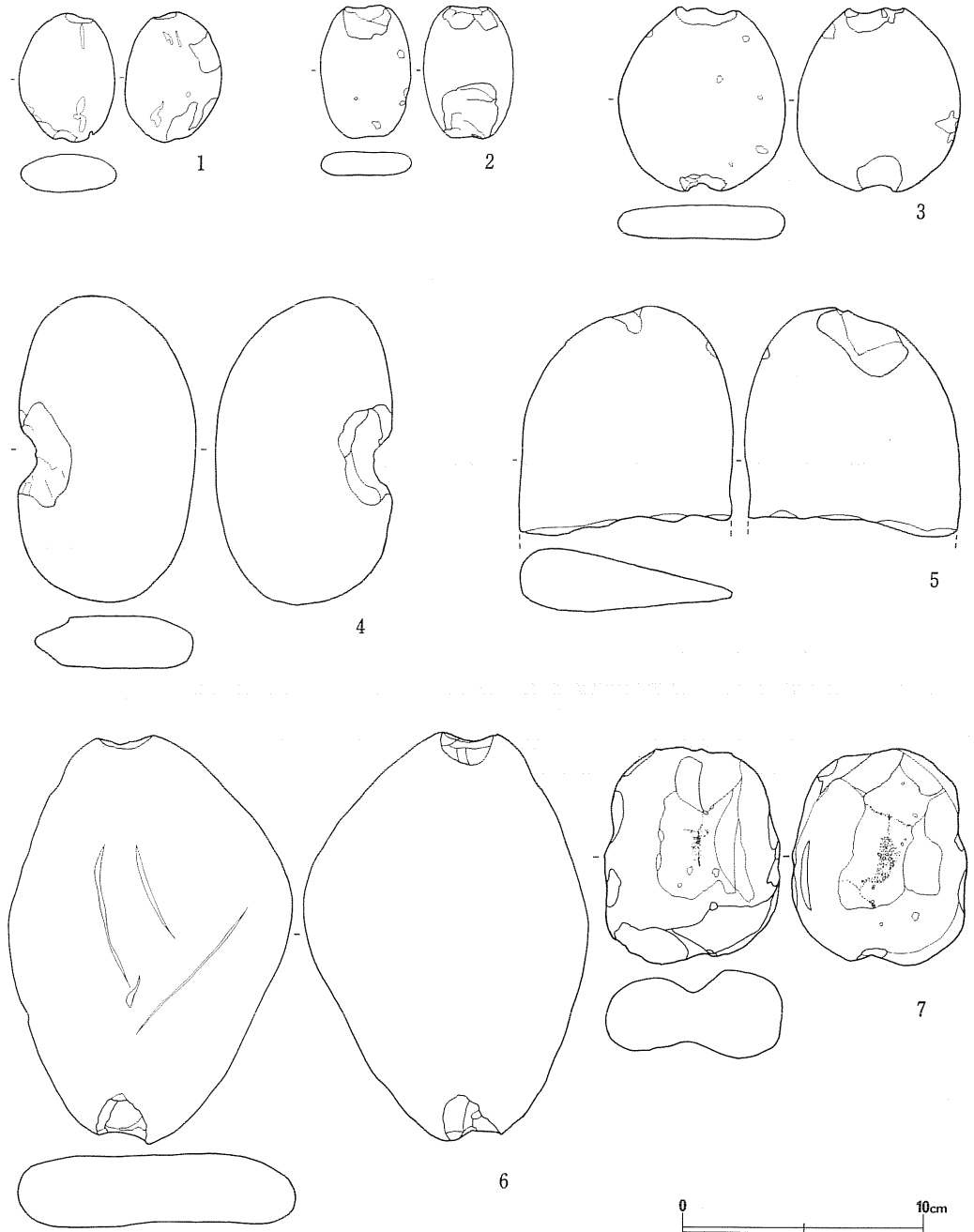
第127図 遺構外出土石器(1)



第2節 検出された遺構と遺物

第128図 遺構外出土石器(2)





第129図 遺構外出土石器(3)

凹石（7）は扁平な礫の周囲をいくつか打撃を加えて平面形を円形に仕上げ、両面中央に深さ5～7mm程の凹みが形成されたものである。

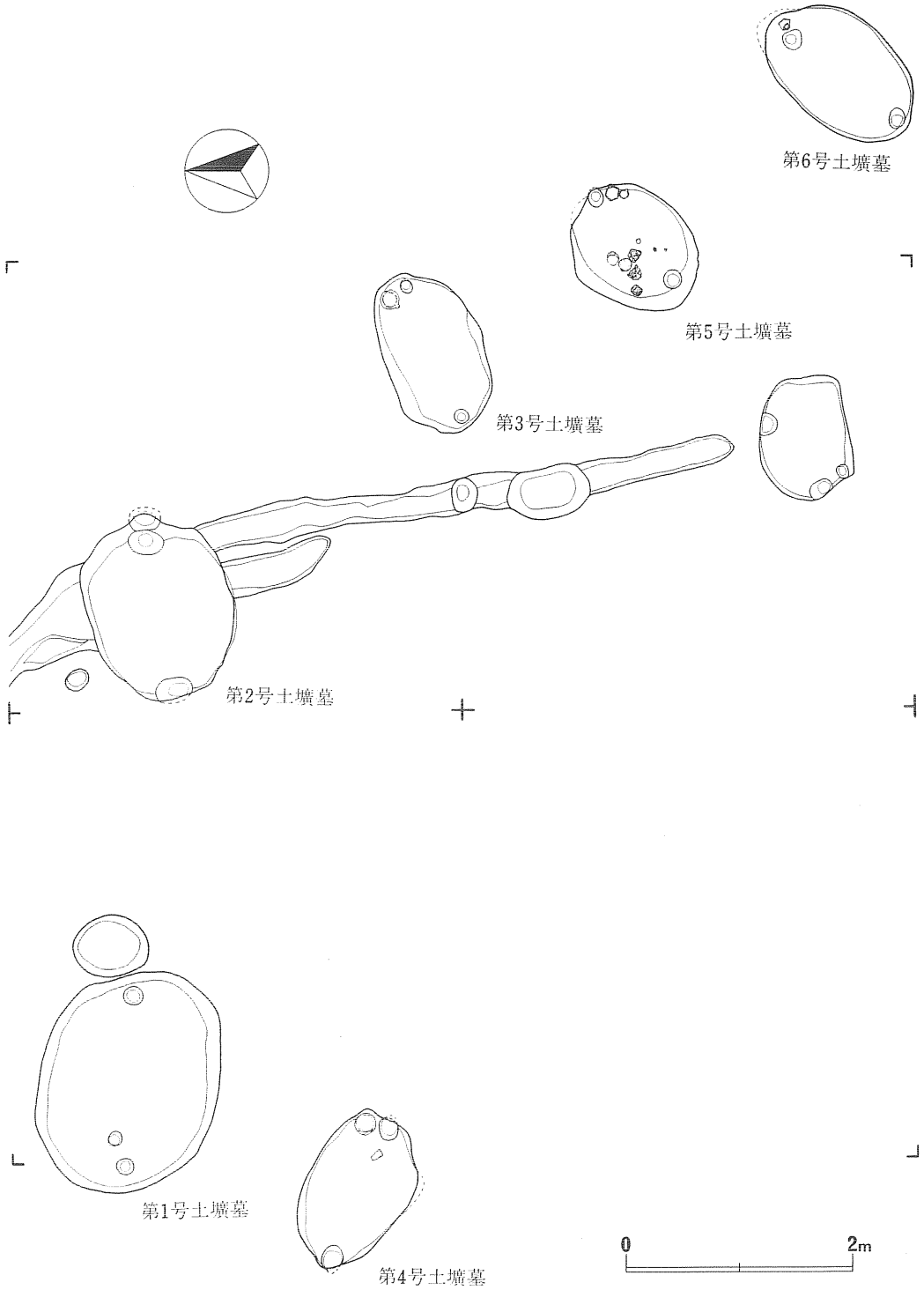
2. 続縄文文化期の遺構と遺物

続縄文文化期の遺構として道路北側調査区の中央からやや北東に寄ったLG51、LH52、LI52の各グリッドで、6基の土壙が検出された。これらの土壙は、遺骸の検出はなかったものの以下にあげるような特徴があり、墓であると判断された。

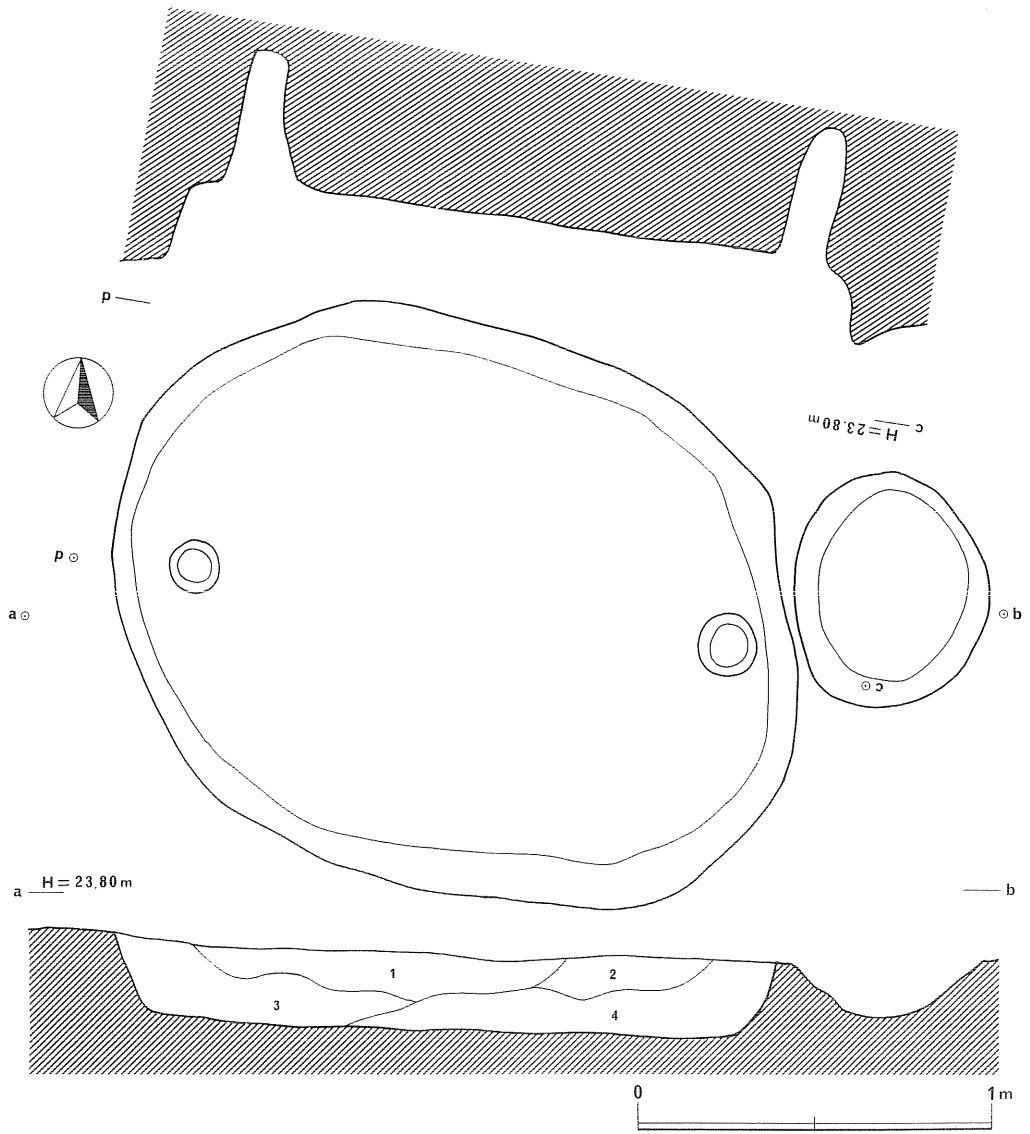
- 1). 土壙の立地する地点の旧地形は南西―北東方向の尾根状に復原され、6基のうち4基までがその長軸を尾根ののびる方向にほぼ沿わせて並列していること。
- 2). 6基とも小判形ないしは楕円形の平面形を有し、一次葬として直接遺体を埋葬するのに十分な規模をもつこと。
- 3). 6基とも長軸端に一对の柱穴様のピットをもち、5基までが一方のピット（北東―東側に設けられたピット）の脇から、正立した状態で埋納された土器を検出していること。
- 4). 遺構の埋土は人為的に埋められた状態と観察されること。

第1点については、土壙の検出された道路北側調査区が開田工事の際に大規模な削平をうけているため、現況から直接に旧地形を読み取ることはできないのであるが、調査時に遺構確認面として把握した第Ⅲ層上面が、付図2に示すような等高線を描いている。これによれば調査区の中央部は調査区北西隅、南東隅よりもそれぞれ80cm、50cm程高い位置にある。また土壙の検出された地点周辺の表土は第112図の基本土層図に示すように20cm前後の厚さしかなく、表土下に直接続く第Ⅲ層上面には、開田工事の際の重機の軌道の痕跡が至るところに認められている。ことに調査区の中央を南北に貫く段差の西側では縄文時代のフラスコ状土坑である第14号土坑の開口部～頸部や、平安時代竪穴住居跡である第18号竪穴住居跡の壁が全て失われてしまう程に削平されており、調査区の北側や道路部分に盛土するため移動された土量は相当量であったことがうかがわれる。したがって整地によって失われた旧地形は、南西―北東方向に背斜軸をもった尾根状に復原できるが、6基の土壙のうちこの背斜軸に直交する形で並列する第2号、第3号、第5号、第6号の4基は、その長軸をほぼ南西―北東方向に向けて配列されている。

次に土壙の形態・規模であるが、長軸の長さは短軸のそれを1.2～1.6倍と上回っており、いずれの平面形も小判形ないしは楕円形であるといえる。長軸の長さは最長の第1号で202cm、最短の第5号でも120cmを測り、直接遺体が埋葬されていたとすれば、伸展あるいは一部屈曲の状態でも十分な長さと考えられる。また確認面からの深さは20～45cmの範囲内にあり、いずれの土壙も上部が削られていることを考慮すれば、土壙上に盛土した高塚を想定しなくとも遺体を覆い尽すに足る深さだったと考えられる。ただ、遺体を屈曲させた場合には伸展させた状態よりも深く土壙を掘っておく必要がある。平面規模の最も大きい第1号と最小の第5号を比較すると後者が前者の約2倍の深さを持ち、この両者の規模が示すように遺体の埋葬姿勢に違いが



第130図 続縄文文化期土壙墓配置



第131図 第1号土墳墓

あった可能性もある。

6基の土墳とも、平面形長軸端下の墳底部に一对の柱穴様ピットが穿たれている。第2号土墳のピットが例外的に浅い他は、深さ20~45cmと土墳それ自体と同程度の深さに掘られている。

このピットは一方が垂直に他方がやや斜めになる傾向があり、第1号、第3号、第4号、第6号では東側にあるピットが、第5号では逆に西側のピットが壙底面からやや外側に向かって掘り込まれている。第1号を除いた5基の土壙では、壙底部東側に設けられたピットの脇から1/2個体～完形の土器が検出されている。比較的大形の第2号、第3号、第4号の各土壙の土器は、埋納用ピットの中に納められたり、底部を壙底部に密着した正立状態で見ついている。壙底部に納められた土器とは別に、第2号、第5号土壙では埋土の上層中からも数個体分の土器が出土している。さらに第2号、第4号土壙では埋土の下層から鉄器が検出されており、第1号を除いた各土壙には副葬品と判断される豊富な内容の遺物が納められている。

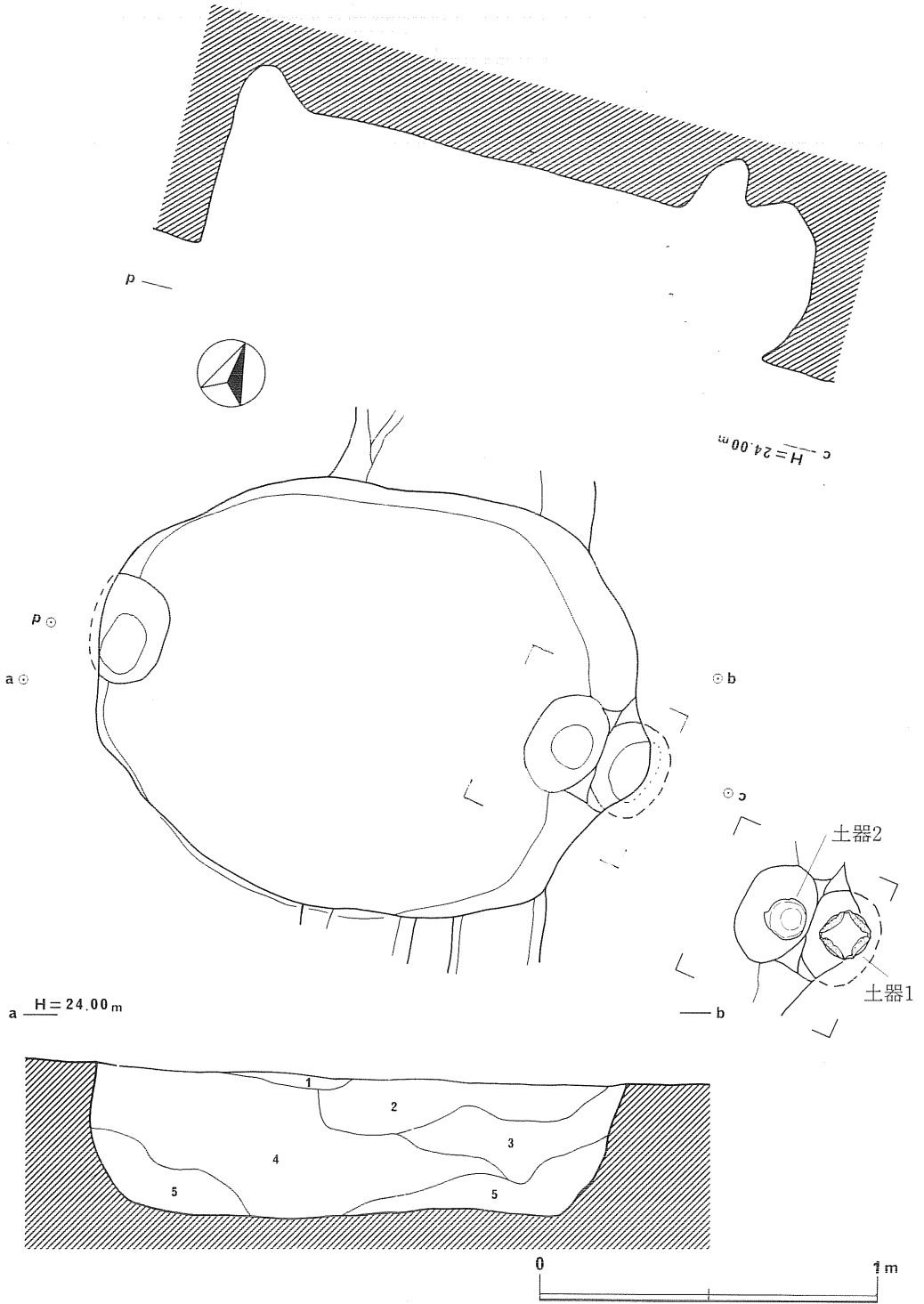
いずれの土壙の埋土も、暗褐色土を主体とした中に黄褐色の地山土の小塊を多く含んでいる。各土壙の埋土とも僅かな色調の違いから数層に分層できるが、遺構が自然に埋った際に認められるようなレンズ状の堆積層や、極端に性質の異なる埋土が互層になった状態は観察されなかった。黄褐色の地山土の小塊が多量に混入されていることを考え合えると、土壙を掘り込んだ際の排土が短い間に人為的に埋め戻された結果を示すものと判断される。また壙底部両端の柱穴様ピットに柱もしくは杭が挿入されたまま埋め戻されていれば、埋土を断ち割った断面にその痕跡があらわれる筈であるが、いずれの土壙もそうした断面は観察されなかった。したがって、土壙を埋め戻す行為は、この柱穴様ピットから柱もしくは杭を抜き去った後に行われたと考えられる。

遺骸の痕跡が検出されなかったことは、土壙すなわち墓壙であることを不完全にしている。しかしながら地形と相応した各土壙の配置、墓とし得る十分な規模、形態、共通する土壙内部の特徴と副葬品と見做し得る遺物の存在、人為的な埋土など、遺骸が検出されなかった点を除けば、これら6基の土壙を墓壙としてとらえ、解釈することを十分に支持すると考えられる。

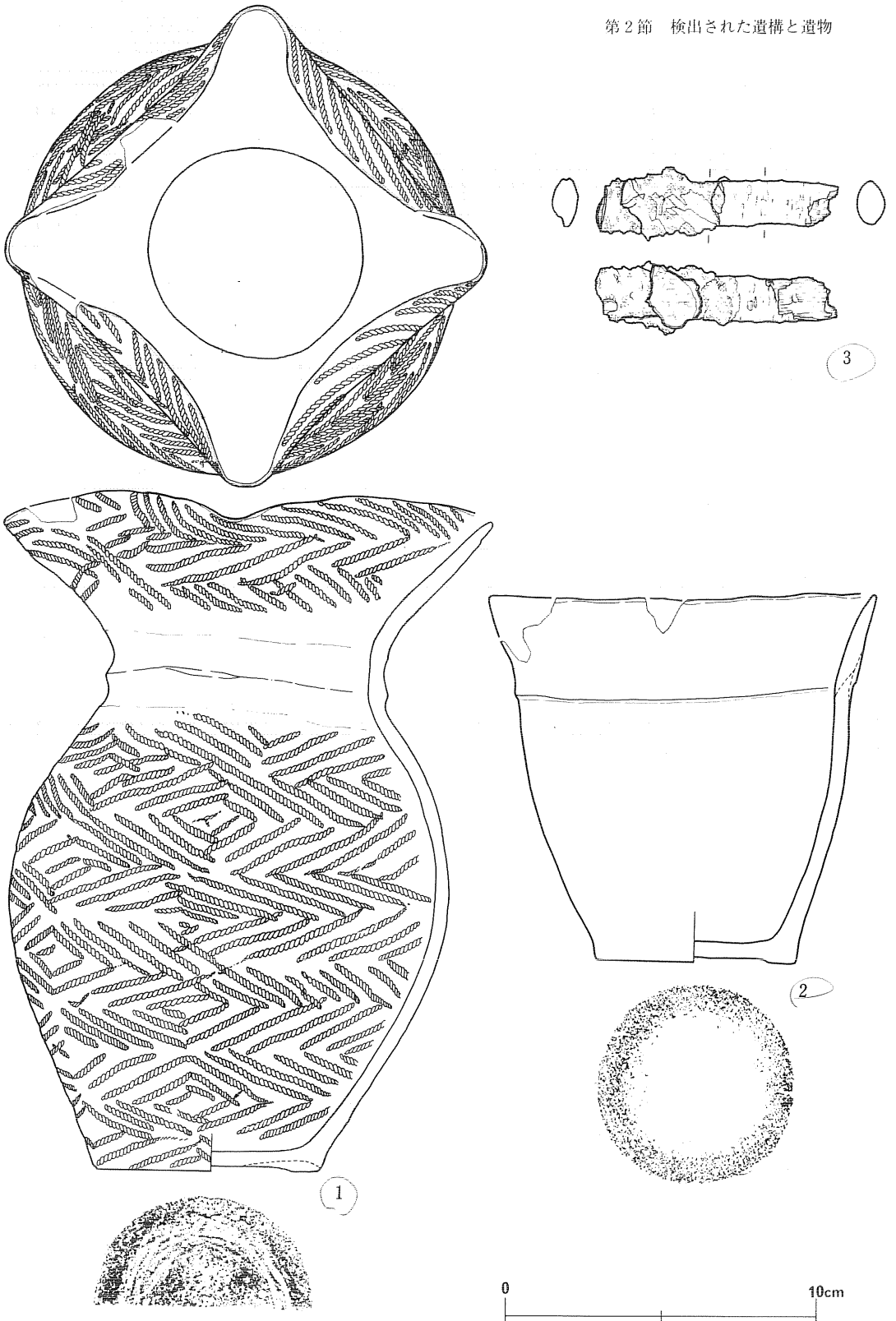
以上、6基の土壙について観察されたことがらを概括的に述べたが、以下では土壙墓として個々の遺構、遺物について詳細を見ることとする。

第1号土壙墓（第131図、図版77-2）

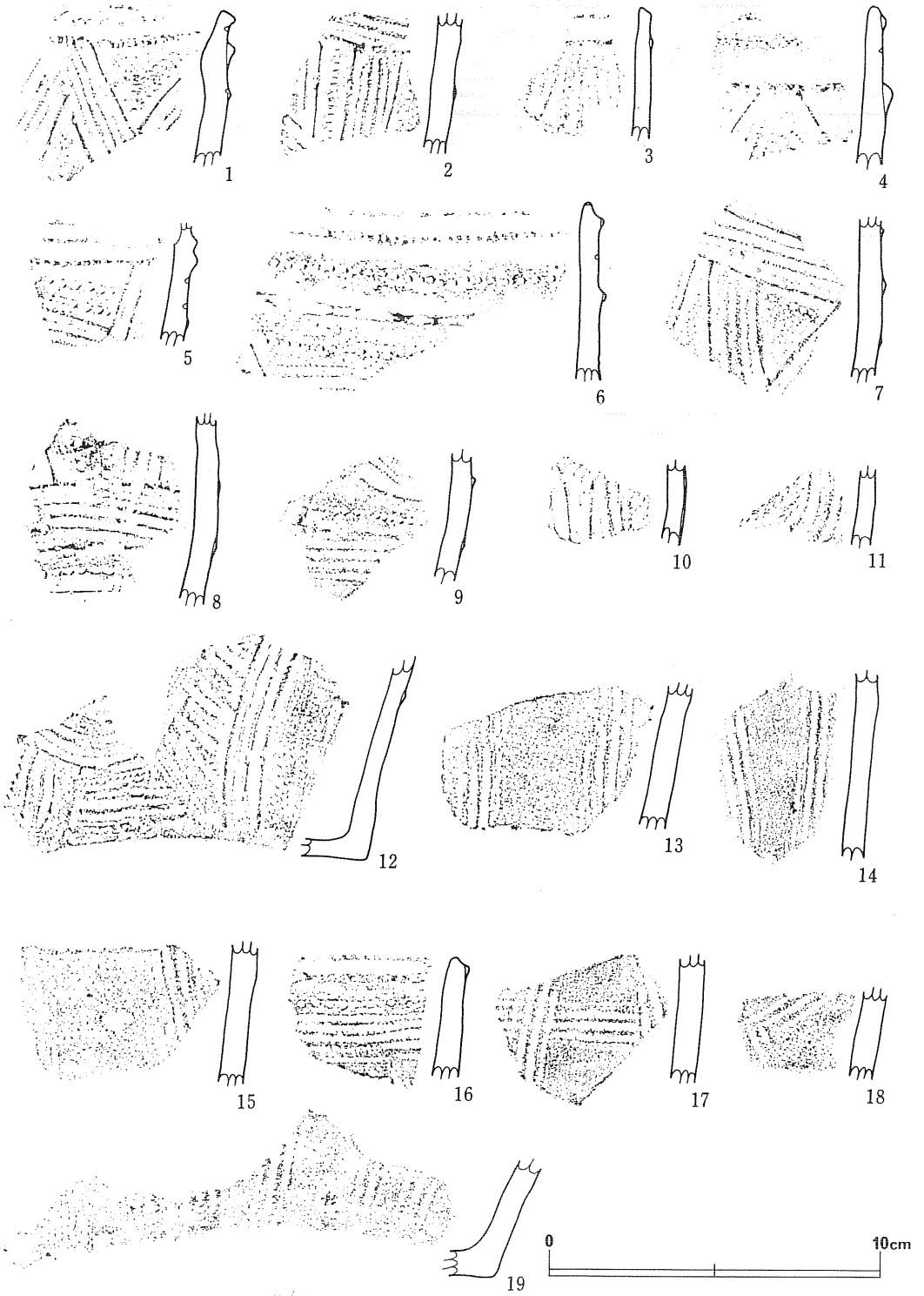
平面規模は最も大きく、長軸の長さ202cm、短軸の長さ160cmの楕円形のプランをもつ。深さは墓壙中央部で確認から23cmと、平面形の大きさに比べて浅い。平面形での長軸はN-23°-Wにあり、この墓壙長軸線から西へ14°ずれた壙底部両端に一对のピットが確認された。東側のピットは16×17(径)×40(深さ)cm、西側は15×16(径)×37cm(深さ)の大きさで掘り込まれている。墓壙内部からの出土遺物はない。埋土も2～3層に分けられただけである。本土壙墓は6基の土壙墓のうち第4号とともに西側に位置し、削平をうける程度も東側の4基より大きかったと思われる。



第132図 第2号土墳墓



第133図 第2号土壌墓出土遺物



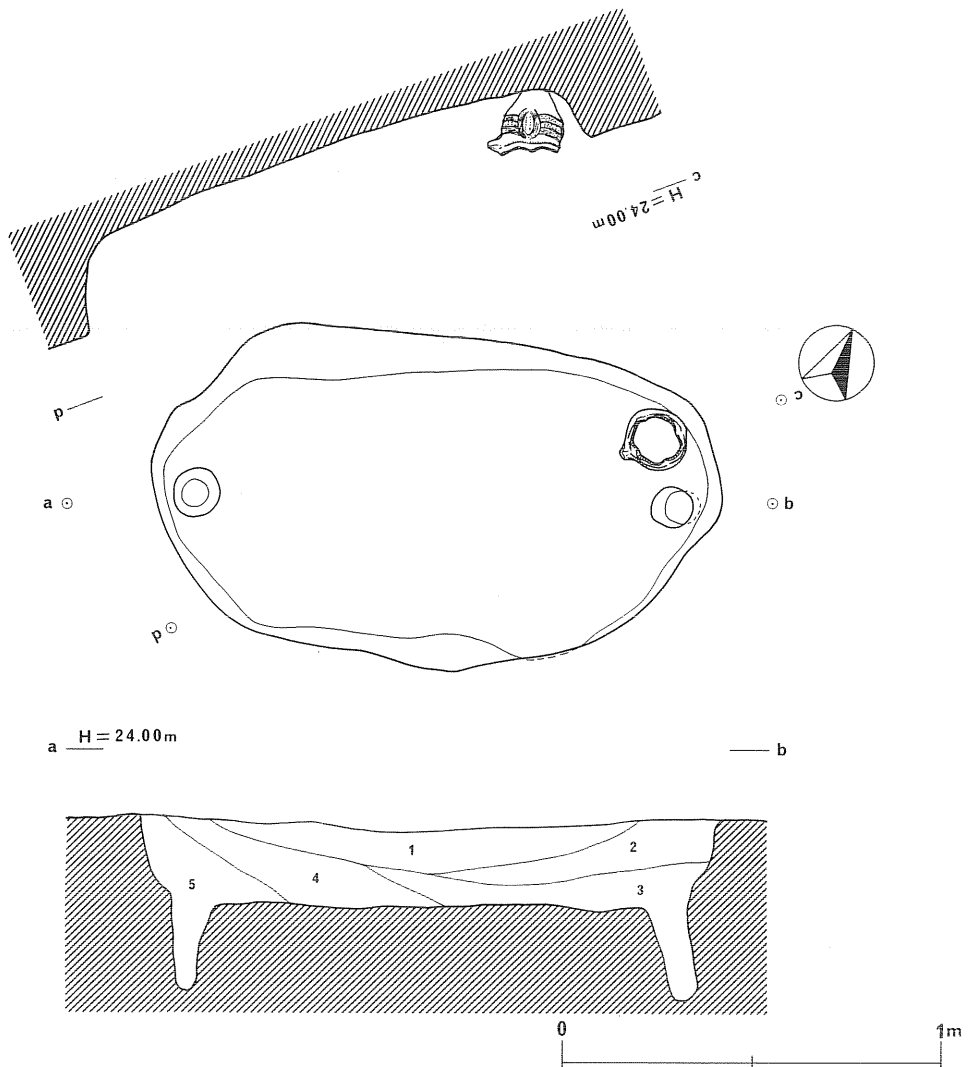
第134图 第2号土壤墓出土土器

第2号土壙墓（第132図～第134図、図版78、図版79、図版91～図版93、巻頭カラー図版3、巻頭カラー図版4-1）

楕円形の平面形をもち、長軸の長さ166cm、短軸の長さ126cmを測る。深さには中央部で44cmである。平面形での長軸方向と壙底部両端に設けられたピットを結ぶ線はほぼ一致し、N-79°-Eを指す。ピットは東側のもので32×22(径)×10(深さ)cm、西側で33×22(径)×10(深さ)cmの規模があり、西側のピットおよび南側の壁の一部は確認面の開口部よりもやや外側に張り出す。また東壁のさらに奥に袋状のピットがあり、その立ち上がりは東壁より10cm奥にある。墓壙内からの出土遺物は第5号土壙墓に次いで多い。埋土の上層、溝〈SD71〉に攪乱された部分からは、数個体分の鉢形土器の破片が出土している。壙底部東側のピット上ならびに袋状ピット内からは無文鉢形土器と壺形土器とが口縁部をつき合わせた状態で検出されている。また墓壙中央からやや西に寄った埋土の下層からは小形の刀子片が出土している。さらに埋土の半分を水に流しながら篩にかけたところ、炭化した木片に混じってクルミの破片が少量検出された。

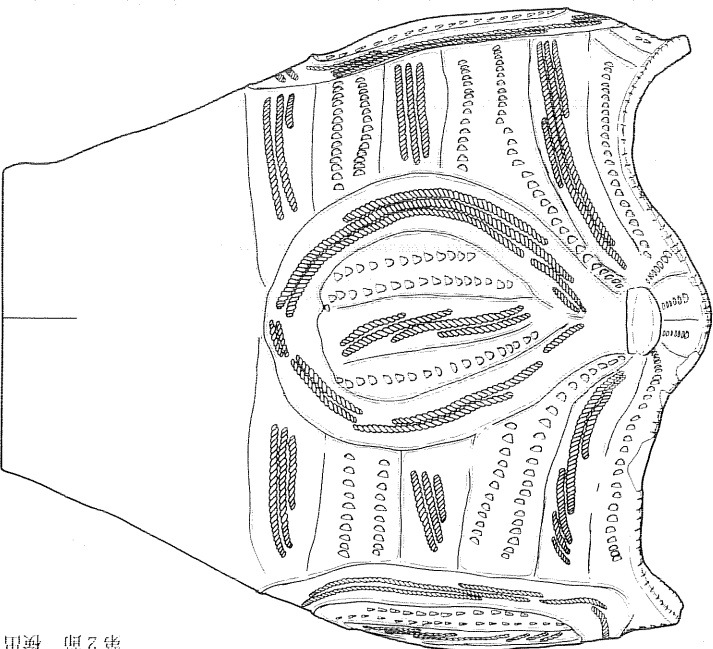
出土した遺物のうち第134図に示した埋土上層出土の土器片は、本来第5号土壙墓同様数個体の完形土器であったと推測される。口唇上に刻目を施し、口縁部の下にも刻目をもった隆起線を貼り巡らし（1・3～6）、微隆起線で区画されたRL0段多条の撚紐による帯縄文と刺突列を体部文様として施す（1～12）。他に微隆起線を伴わない帯縄文と刺突文を組合せた口縁部資料(16)や、微隆起線を伴わない帯縄文を交錯施文した体下半部資料(17・18)もある。壙底部東壁奥の袋状ピットから出土した壺形土器（第133図-1）は器高17.2cm、体部最大径14.2cm、底径7.2cmを測る。頸部から口縁部にかけて大きく開き、体部は弧状の曲線を描いて下りる器形をもつ。口縁部は附加条の縄文を施文した後に折り曲げられて、上面観は四隅に注ぎ口を設けた正方形となる。「く」の字形に屈曲する頸部には粘土紐の貼り付け後、上下を指頭によって調整した断面三角形の突帯がめぐらされている。体部の附加条縄文の施文は、0段のlとrの撚紐を軸として $R \left\{ \begin{array}{l} l \\ l \end{array} \right.$ 、 $L \left\{ \begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right.$ の撚紐を各々左巻き、右巻きとした原体を器面に対して斜位に置き、横位に回転したものである。片方の原体について薬指、中指、人差指の3本の指を器面の1/6施文する毎にずらしながら、一回の施文で半周を回転させている。各々の原体を施文する毎に三段に分かれた同一方向の条が表されるが、 $R \left\{ \begin{array}{l} l \\ l \end{array} \right.$ の撚紐を左巻きにした原体を回転した部分では上下段に共通する条が観察される。土器全体ではこうした方法でそれぞれの原体を半周ずつ螺旋状に回転してゆくため、指をずらして施文する際にできる各段に菱形の構図が表れることになる。土器の底部は底径より2cm前後径の小さい円盤状の粘土板に粘土帯を積み上げていったものと推定され、幾分揚底気味となる。粘土帯を積み上げた縁の部分は一部剥落し、底面中央には焼成時に入った亀裂が認められる。口縁部に設けられた注ぎ口から想定される液体容器の機能は、この亀裂によって果されることがなかったと考えられ、この土器がほとん

ど使用には供されないまま、遺体の副葬用とされたことをうかがわせる。この壺形土器の手前に置かれていた第133図-2の無文鉢形土器は器高12cm、口径(推定)6.5cm、底径6.5cmを測る。口縁部3cm程が外反し、体部の下半で緩く膨らみ、底部近くで垂直におきる器形をもつ。底面は1の壺形土器同様の製作法により、縁の部分が中央より2mm程出た揚底となる。頸部に巡る段は、口縁部と体部の粘土帯を積み上げた痕跡を覆うように外面に貼り付けた粘土を調整した結果で上がったもので、土器内面には粘土帯の接合痕が観察される。器面には口縁部が横位、体部が縦位の調整によって平滑に仕上げられている。埋土の下層から出土した小形の刀子は、桜皮と思われる樹皮を巻いた柄の部分とそれに続く元の部分の破片である(第133図-3)。残存する長さは7.8cmで、元幅1.5cm、柄の部分の幅は1.3~1.4cm、厚さ0.9~1.0cmを測る。柄の部分は断面半円形に削った木片で茎の両面を挟み込み、さらにその上を樹皮で巻いて固定して

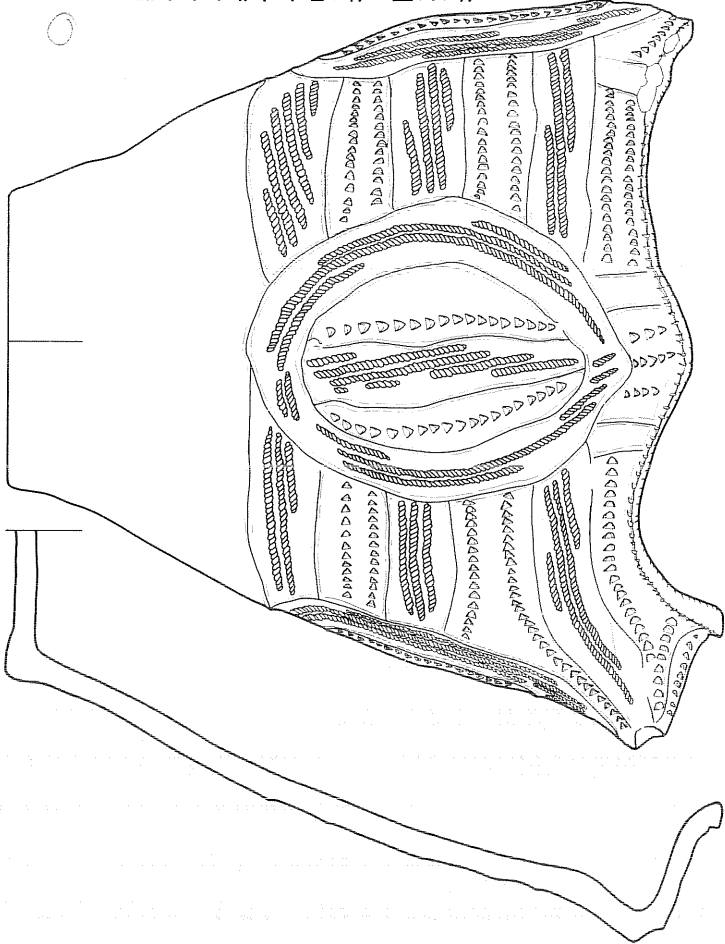


第135図 第3号土墳墓

正面



右側面



第136図 第3号土甕跡出土土器

いる。元の部分は錆によって大きく膨らみ、そこを境として先が5mm程ずれている。この錆の膨張部分に別の関部分だけの資料が接合した(巻頭カラー図版4-1)。おそらく遺体の埋葬時には2本の刀子が重ねて副葬されたものと思われる。他に埋土を洗浄した結果、刀身の断片が採取されている。接合するものはなかったが、それらによって推定されるこの刀子の全長は20cm前後と判断される(図版93)。

第3号土壙墓(第135図、第136図、図版80、図版94、巻頭カラー図版4-2、巻頭カラー図版5)

長軸の長さ150cm、短軸の長さ90cmを測る。長軸と短軸の長さの比が大きい小判形の平面形を呈する。深さは中央部で22cmである。平面体の長軸方向と壙底面のピットを結ぶ線はほぼ一致し、N-77°-Eを指す。ピットは東側のもので10×10(径)×25(深さ)cm、西側のもので13×12(径)×25(深さ)cmの大きさがある。東側のピットの北面が一部袋状に掘り窪めてあり、そこに後背部を埋め込むようにして鉢形土器が埋置されていた。

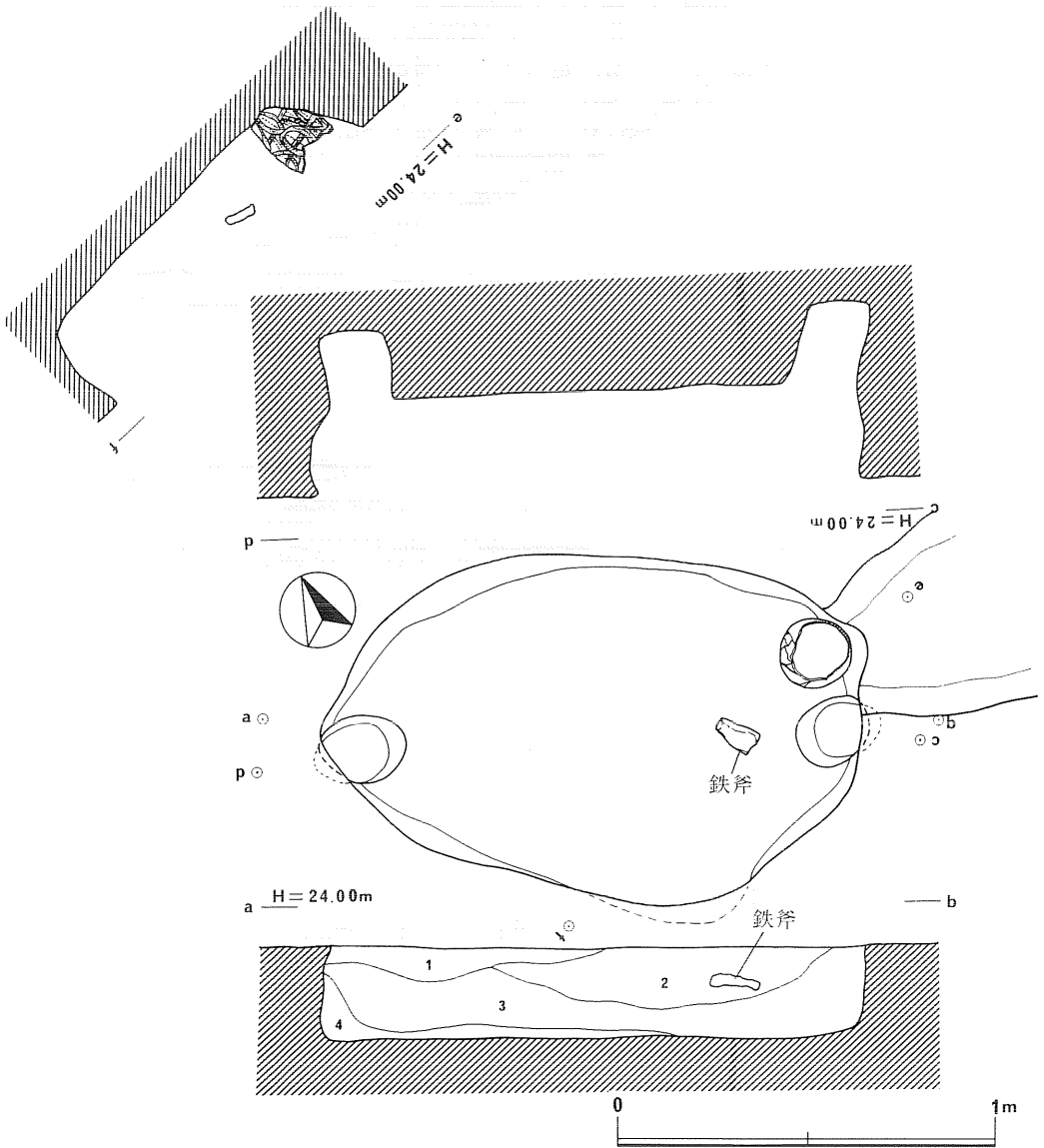
出土した鉢形土器(第136図)は器高19.2cm、口縁部に設けられた袋状の突起の先端から後背部までの差し渡しが20cm、底径8cmを測る。口縁は4単位の波状口縁となる。角ばった口唇の両側には刻目が施される。器高の上部2/3は帯縄文とそれを区画する微隆起線、さらに先端の鋭い工具による刺突列などによって文様帯が構成される。主要なモチーフとなるのは、口縁の波頂部に対応して配置されている微隆起線によって区画された楕円形の帯縄文と、それを横位に連絡する同じく微隆起線で区画された三段の帯縄文である。縄文は0段多条のRLの捻紐を条が展開する方向に対し斜位に置き、指でずらしながら施文している。原体の捻りがRLであるため、横位に展開する条を表すため、原体を施文方向に対して左上-右下の方向に置いて回転している。刺突列を構成する個々の刺突文は工具を器面に対して鋭角にあてて三角形になるよう施文されている。横位の列では右から左の方向へ、縦位の列では下から上へ向っての刺突による。文様帯の下には底部まで縦位の調整によって平滑に仕上げられ、底面はやや揚底気味に作られている。この土器の内面には袋状の突起と反対側に煤状の炭化物が厚く付着しており、その一部は外面にまで及んでいる。

第4号土壙墓(第137図~第139図、図版81、図版95、図版96、巻頭カラー図版6)

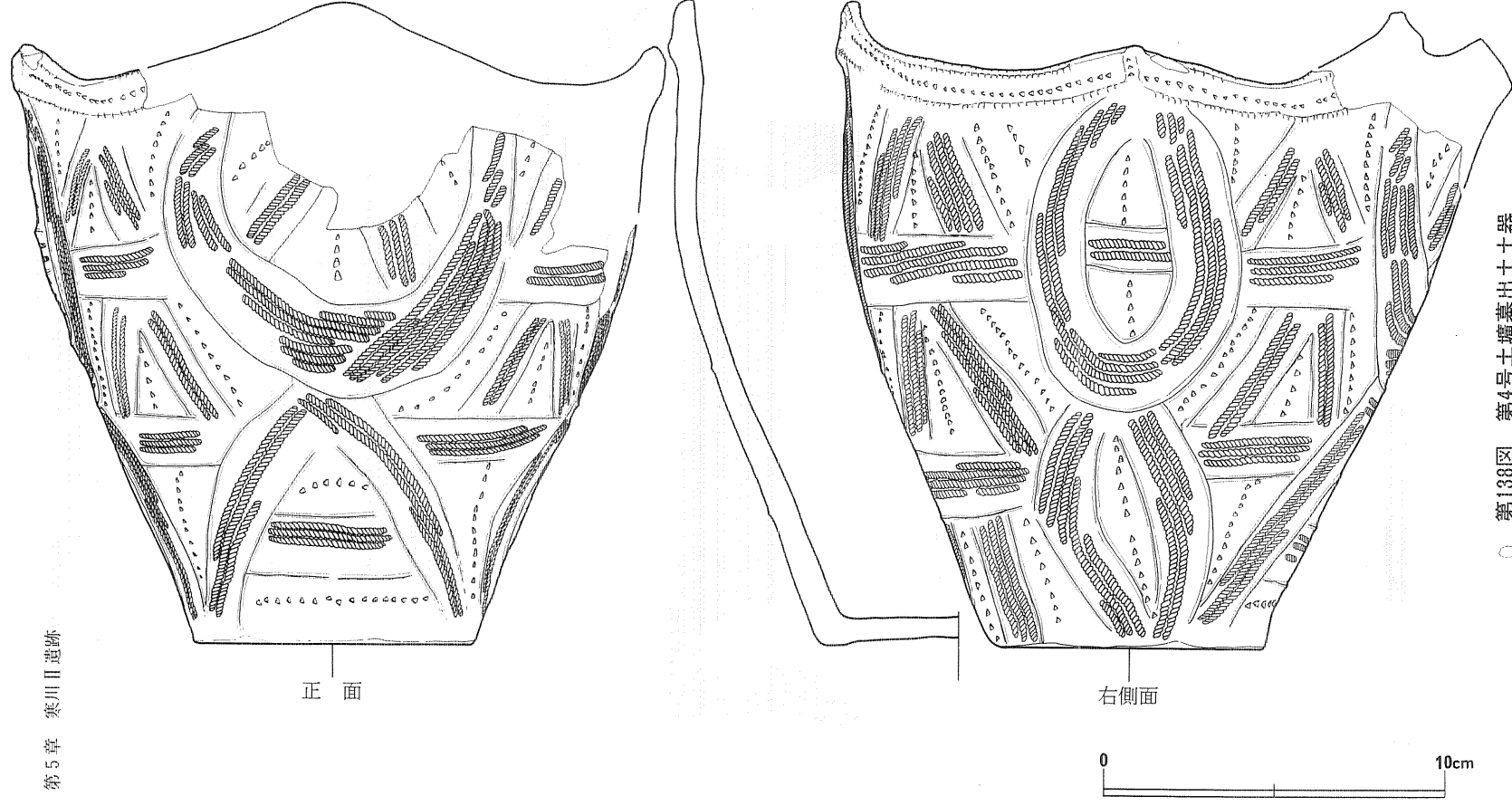
長軸の長さ144cm、短軸の長さ90cmを測り、第3号土壙墓同様小判形の平面形を呈する。深さは中央部で28cmである。壙底部のピットを結んだ線は、平面形の長軸方向と一致し、N-68°-Wを指す。ピットは比較的大きく、東側24×18(径)×21(深さ)cm、西側23×18(径)×18(深さ)cmの大きさがある。副葬された鉢形土器は東側ピットの北脇の壁面をやや掘り窪めた部分に、注口部を幾分上に向けた状態で埋置されていた。注口部分の大半は表土耕作時に失われている。

また、壙底部の両端に設けられたピットを結ぶ線上、壙底面から15cm上位の埋土中から板状鉄斧が出土している。遺体の頭位が副葬された土器の側にあったとすれば、この鉄斧は遺体の胸骨か肋骨、または上腕骨上に置かれていたものと推定される。

東壁際に副葬されていた土器は(第138図)器高19cm、口径(推定)19cm、底径8.3cmを測る。口縁は4単位の波状口縁を呈し、そのうちの一つの波頂部下に注口が設けられている。口唇部は第3号土壙墓出土土器と同様角ばり両側に刻目が施されるが、第3号のものに比較してやや外側を向く傾向にある。口縁の波頂下からは粘土紐がおろされ、口縁下1cm程の部位を巡る隆



第137図 第4号土壙墓

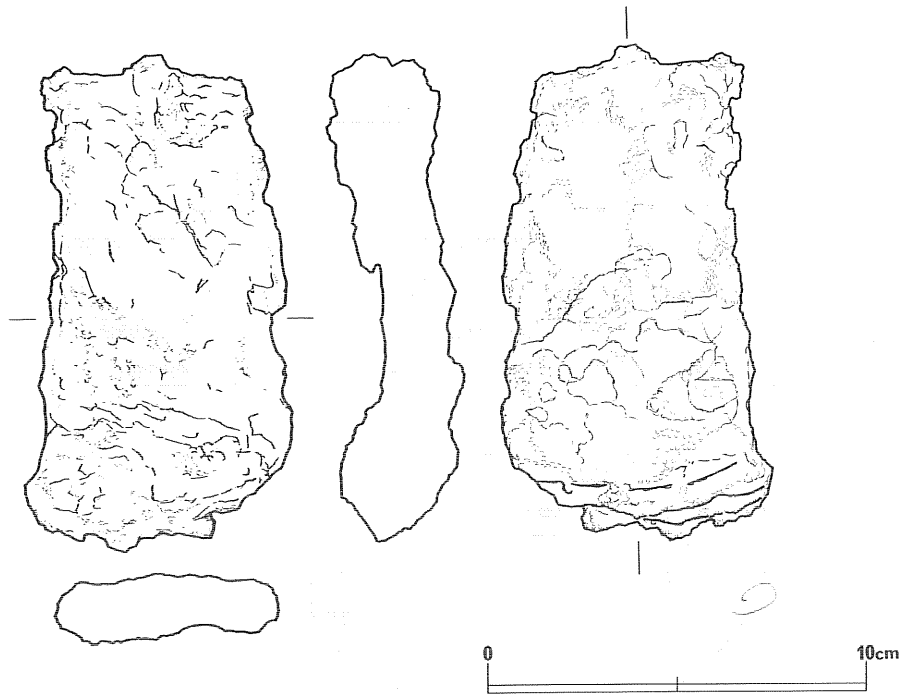


正面

右側面

0 10cm

第138図 第4号土塚墓出土土器

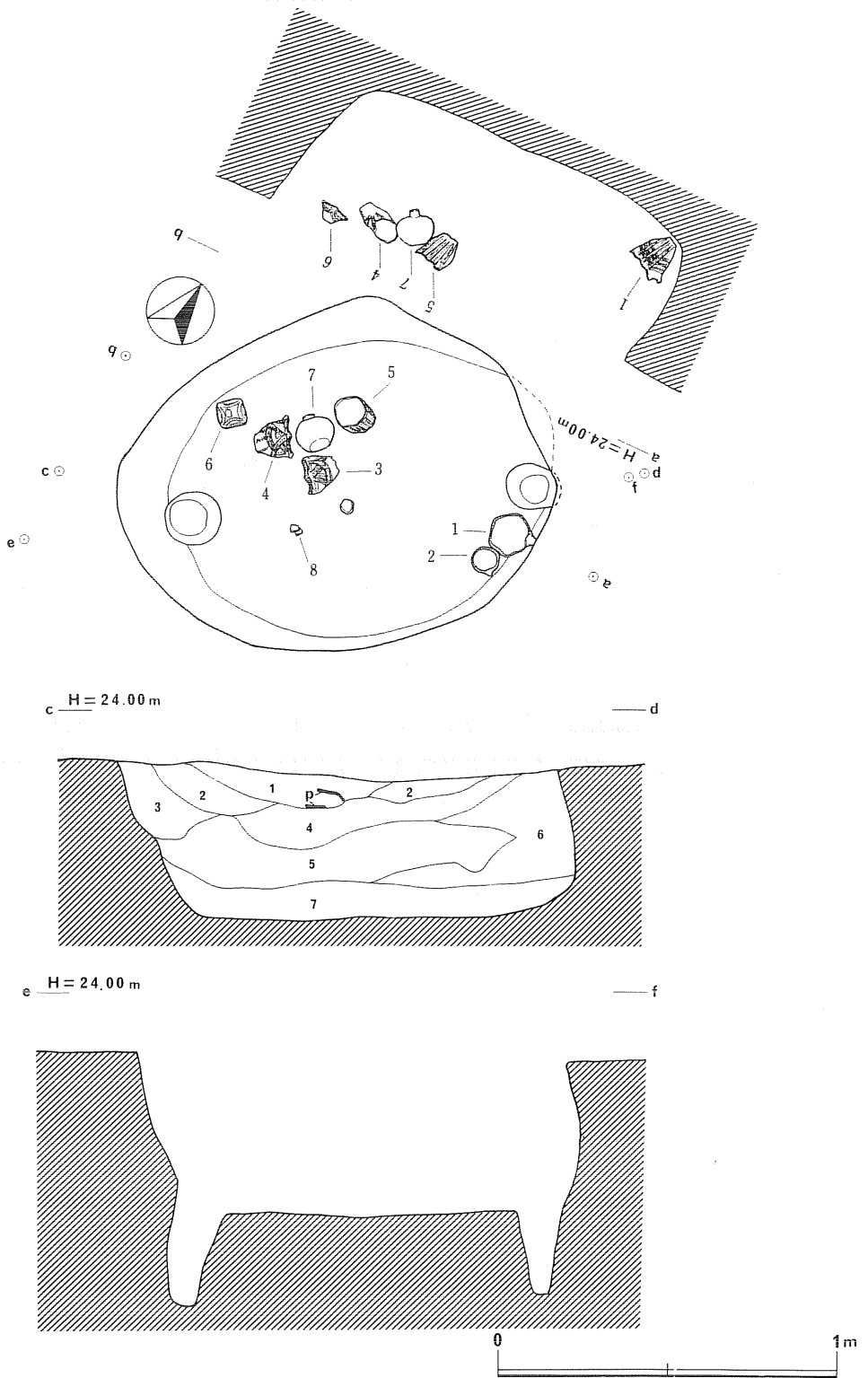


第139図 第4号土墳墓出土鉄斧

線と接続する。この隆線上にも刻目が施されている。体部から底部までは全面微隆起線によって区画された帯縄文とその間に施される刺突列による文様が描かれている。主要なモチーフとなるのは、口縁の波頂部に対応して配置されている楕円形の帯縄文と、それを横位に連絡する2段の帯縄文ならびに逆V字形に配置される帯縄文である。楕円形、横位の他に逆V字形の帯縄文が加わるため、それらの間の空間は横位に展開するものが少なくなる。したがってそうした空間の刺突列は縦位、斜位の1列ずつのものとなり、僅かに注口部下の底部近くで、逆V字形の帯縄文内に2段の横位の刺突列が1列ずつ施されているのみである。底部は揚底気味に作られている。埋土中から出土した板状の鉄斧は基部と刃部に大きな錆が付着しているが、片面には緩い弧を描く刃縁が観察される(図版96)。長さ11cm、基部幅6cm、中央での厚さ1.2cmを測り、重量は310gである。

第5号土墳墓(第140図～第142図、図版82、図版97～図版100、巻頭カラー図版7)

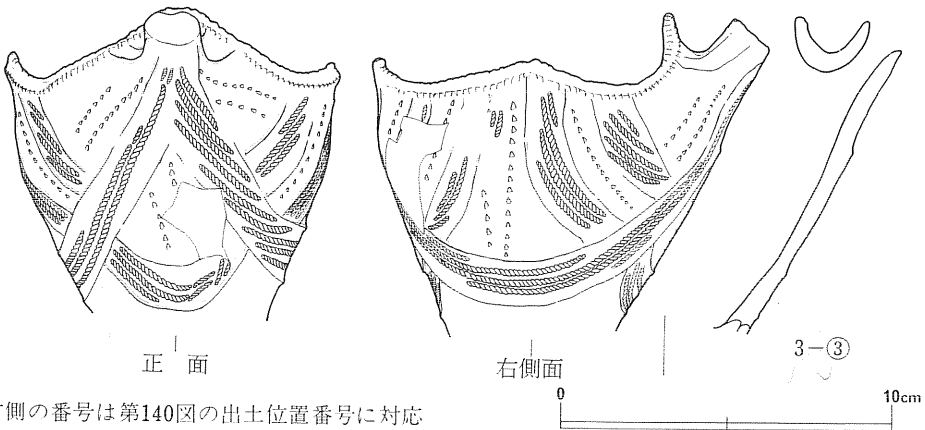
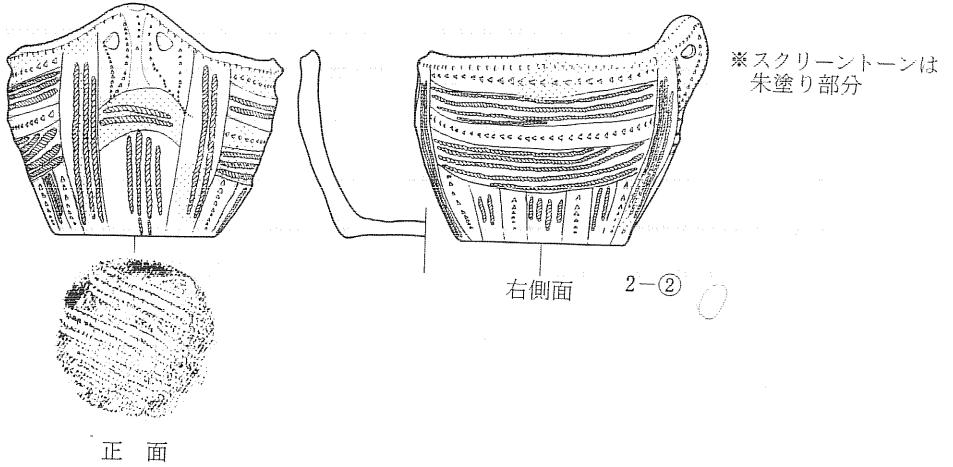
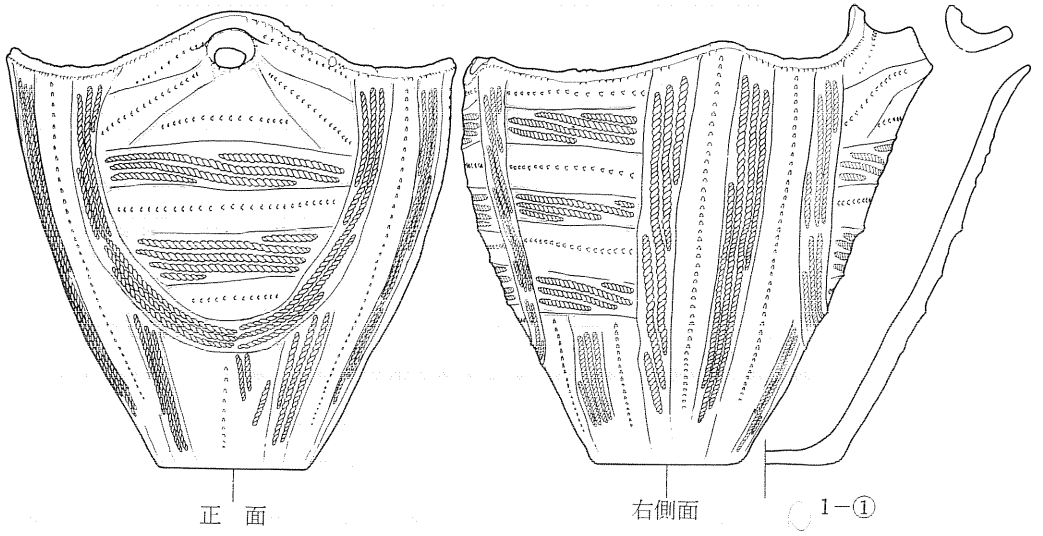
楕円形の平面形をもつ。長軸の長さ127cm、短軸の長さ103cm、深さ94cmを測る。6基の土墳墓の中では、その平面規模は最も小さい。墳底部に設けられたピットを結ぶ線と平面形の長軸方向はほぼ一致し、N-49°-Eを指す。東側のピットは13×16(径)×25(深さ)cm、西側は17×17(径)×27(深さ)cmの大きさがある。東側の壁面は一部開口部よりも外側に掘り窪められてい



第140図 第5号土墳墓

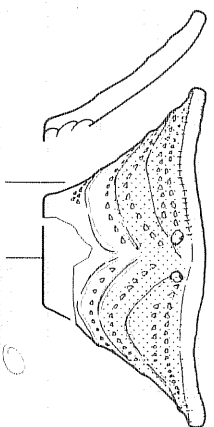
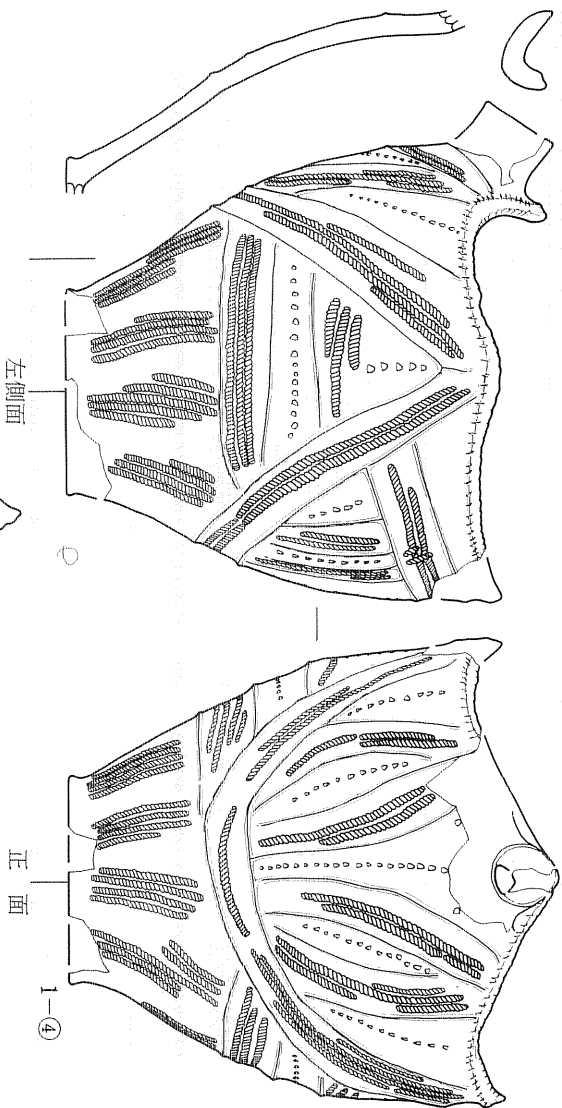
る。壙底部東側のピットの南側には、壁面に接して2個の鉢形土器が各々の注口部、突起を壁面側に向けて埋置されていた。また、墓壙の中央部からやや東側に寄った確認面直下、壙底部から30cm上位の埋土中から鉢形土器3個、無文壺形土器1個、坏形土器1個、小形の手捏ね土器1個の計6個の土器が、横倒しか倒立した状態で出土している。

壙底部に埋置されていた土器のうちよりピットに近い側から出土した土器(第141図-1)は、器高13cm、注口部の先端からの差し渡しが14.3cm、底径4.6cmを測る。口縁部は5単位の波状口縁を呈し、やや外側に向いた口唇の両側には刻目が施されている。口縁～体部～底部まで、微隆起線によって区画された帯縄文と刺突列による文様が描かれる。主要なモチーフとなるのは注口部を中心にした位置とその後背部分に配置されるU字形の帯縄文と、口縁から底部まで垂直におろされた左右両側面2本ずつの帯縄文、およびそれらを横位に連絡する帯縄文である。縄文は0段多条のRLの撚紐が用いられている。刺突列は第3号、第4号土壙墓の土器同様、縦位のもは下から上へ向って、横位のもは右から左の方向に向って刺突されている。底面はほぼ平らに作られている。土器の表面および内面は、全面にわたって煤状の炭化物で覆われている。この土器の脇から出土した小形の鉢形土器(第141図-2)は、器高7.2cm、突起からの差し渡しが9cm、底径5cmを測る。口縁は平縁であるが突起の部分が1.2cm程高く作られている。やや外側に向いた口唇の両側には刻目が施され、突起の上部には円形の刺突文が施されている。突起の側面からは径6mmの貫孔があげられている。微隆起線で区画された帯縄文と刺突列によって構成される文様が口縁～体部～底部まで描かれている。突起の両側の口縁とそれと対応する後背部の口縁から垂直におろされる帯縄文と、それらを緩い弧状に結ぶ横位2段の帯縄文が主要なモチーフになっている。縄文はRL0段多条の撚り紐を用いたものである。刺突列は他と同様、横位のもは右から左の方向へ、縦位のもは下から上へ向って施文されている。底部は平底につくられているが、底面にも体部に用いられたと同じRL0段多条の撚紐による縄文が施されている。土器の内面には底部近くに煤状の炭化物が付着している。また、表面の突起を中心とした部位、およびその側面には朱塗された痕跡が残されている。埋土上層から出土した土器のうち、口縁部を南西側に向け横倒しとなり底部欠失状態で出土した土器(第141図-3)は、現在残る器高10cm、注口部の先端からの差し渡しが12cmを測る。口縁は4単位の波状を呈する。口唇部は外側を向いて、刻目列のうち外側のもはや下において口縁を巡る形となる。体部に描かれる微隆起線によって区画された帯縄文と刺突列による文様は、注口部の下から両側面をまわって対になる位置の波頂部までの達する弧状の帯縄文と、側面の波頂部から2重の八の字形におろされる帯縄文を主要なモチーフとして構成されている。横位の帯縄文がないため、それぞれの帯縄文の間の刺突列も縦位～斜位に施されている。縄文はRL0段多条の撚紐を用いる。この土器の西側で口縁を北東に向け底部を穿孔された状態で出土した土器(第142図-1)

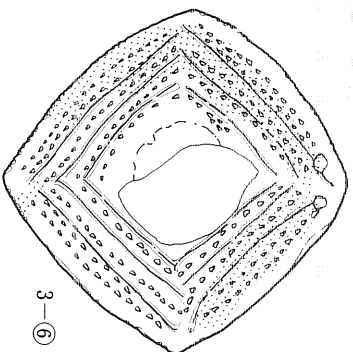


※右側の番号は第140図の出土位置番号に対応

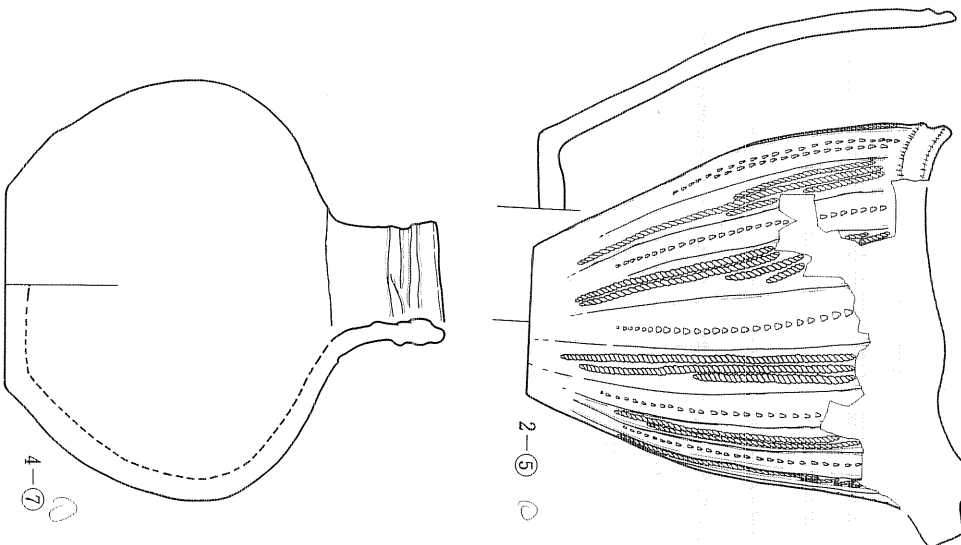
第141図 第5号土壌墓出土土器(1)



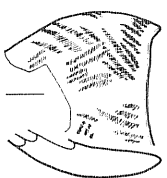
※スクリントーンは朱塗り部分



3-6



4-7



5-8

※右側の番号は第140図の出土位置番号に対応



第142図 第5号土壙墓出土土器(2)

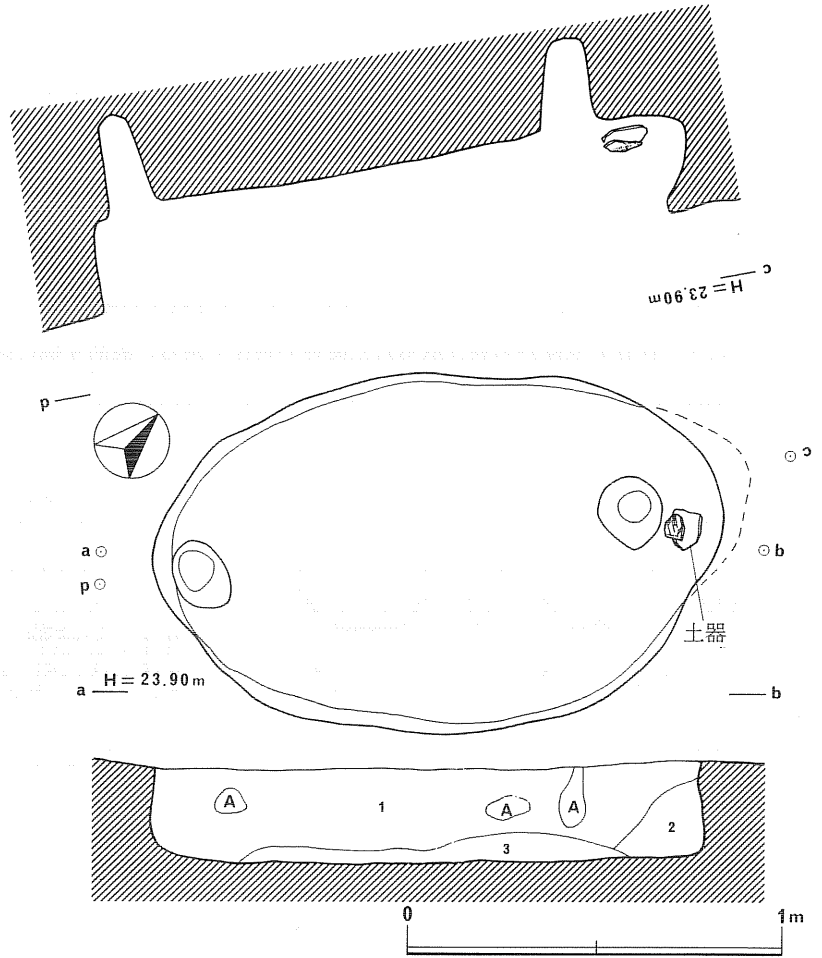
は、器高13.2cm、注口部先端からの差し渡し(推定)13.5cm、底径(推定)5.5cmを測る。口縁は4単位の波状を呈し、口唇部に施される刻目は第141-3と同様、外側のものがやや下におりた形となる。体部に描かれる文様は、側面の波頂部同士を前面、背面の両側を通して結ぶU字形の帯縄文、側面でその両者を横位に連絡する帯縄文、注口部の両側に弧状に向い合わせて配置される2組の帯縄文、背面のU字形区画内に向い合わせに配置される帯縄文とその間を縦位に連絡する4本の帯縄文、以上の微隆起線による区画をもった帯縄文とその間に施される1列ずつの刺突列によって構成される。また体部下半にも4~5条を1単位とした縦位の帯縄文が区画を伴わずに施文されている。使用される縄文原体は0段多条のRLの撚紐である。底部には僅かに外側に張り出させている。第142図-2の土器は、埋土上層出土の土器の中では唯一つ正立した状態で見ついている。口縁部の大半を欠損しているが、残存する器高11cm、口径(推定)およそ10cm、底径3.9cmを測る。口縁は第141-3、4と同様その1箇所注口を設けた4単位の波状に復元できる。口唇部は他の土器に比して薄手に作られ、外面には刻目が施される。この口唇外面の刻目列から7mm下位にはさらにもう1条刻目をもった隆起線が貼り巡らされている。体部の文様は、この隆起線の直下から底部まで続く縦位の帯縄文と刺突列を交互に配置して構成している。使用される縄文原体はRL0段多条の撚紐、刺突は下から上の方向で施文している。第142図-3の坏形土器は、西側の壁から約10cm内側の確認面で底部を上にした倒立状態で出土した。上面観は各辺がやや弯曲する正方形を呈し、その対になる角の差し渡しは9cmを測る。側面は口縁~体部~底部まで緩く外反するプロフィールをもち、器高4.4cm、底径(推定)3cmを測る。口縁部は、上面から見た場合の四隅を波頂部とする4単位の緩い波状口縁を呈する。口唇部は外側を向き、上下の端に刻目が施される。体部には口縁の各辺に沿って弧線を描く3段の微隆起線が貼り巡らされ、その間に4段にわたって横位の刺突列が施される。口縁の波頂部下2箇所焼成前に穿孔された径3~4mmの貫通孔がある。また体部の微隆起帯の間には朱塗りの施された痕跡が残っている。第142図-4の壺形土器は、第141図-3、第142図-1、2の注口付鉢形土器に囲まれた間から、底部を上にし口縁部をやや西側下に向けた倒立状態で出土した。口径3.2cm、器高11.6cm(うち体部の高さ8.6cm)、体部最大径11.2cm、底径5.2cmを測る。口縁部の下には2条の隆帯が彫り出され、頸部と体部の接続部分は彫り込んで段差を設けている。体部の最大径を示す部位はその半ばよりやや上位にあり、したがってプロフィールもやや肩の張ったものになっている。器面全面に横位のミガキ調整が施されているが、全体にゴツゴツした感じに仕上がっている。また口縁部の内面には粘土紐を積み上げた痕跡が残されている。第142図-5の小形の手捏ね土器は墓壙中央の確認面直下から出土した。1/2個体の破片であるが口径3.5cm、残存する器高4cmを測り、緩く膨らむプロフィールをもつ。器面にはL $\left\{ \begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right.$ の撚紐を横位または右上~左下の方向で回転した無節の縄文が施文されている。

第6号土壙墓

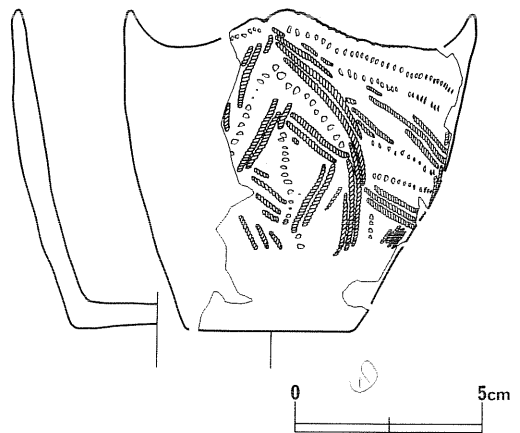
(第143図、第144図、図版83、図版100、巻頭カラー図版8-1)

小判形の平面形をもつ。長軸の長さ153cm、短軸の長さ93cm、深さは23cmを測る。壙底部両端にあるピットと平面形での長軸方向は一致し、 $N-39^{\circ}-E$ を指す。北東側にあるピットは 20×17 (径) $\times 23$ (深さ)cm、南西側のものは 19×13 (径) $\times 26$ (深さ)cmの大きさがある。北東側のピットの奥の壁面は、開口部よりも10cm外側に張り出して立ち上がる。

壙底部北東側のピットの東脇から1/2個体の鉢形土器(第144図)が、口縁を北西へ向け横倒しになった状態で出土した。器高9.2cm、口径(推定)9.5cm、底径(推定)4.3cmを測る。口縁は4単位の波状に復元できる。断面鋭角の口唇上には刻目が施される。体部の文様は、微隆起線を伴わない帯縄文と刺突列によって構成される。0段多条RLの撚紐による帯縄文は口縁の波頂部下で菱形とその外側を囲む形の弧状の構図をとる。帯縄文の間の刺突列は、器面に対してほぼ直



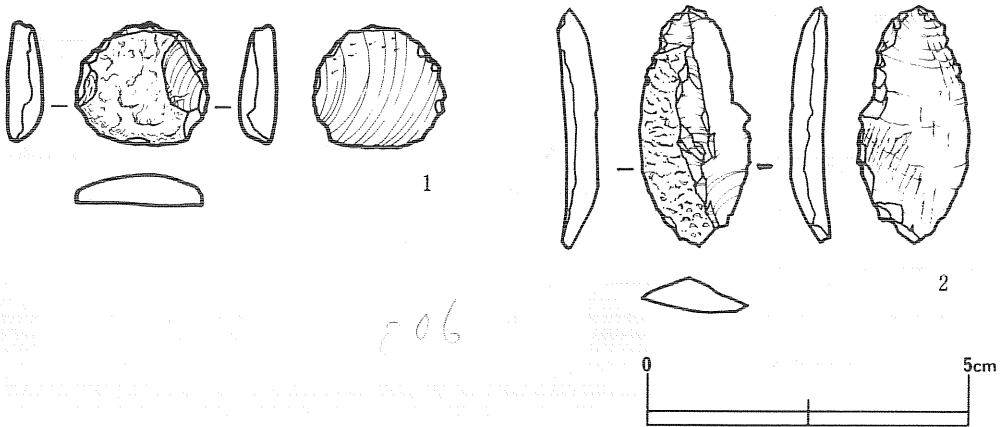
第143図 第6号土壙墓



第144図 第6号土壙墓出土土器

角に工具を当てて施文している。底部から2 cm程の間は横位のケズリ調整がやや深く行われている。

続縄文文化期の遺物は以上の6基の土壙墓内からのものがほとんどであるが、他に土壙墓周辺から2点の黒曜石製の石器が出土している(第145図、図版100)。第145図-1は径2 cm、厚さ0.5 cmの円形搔器である。表面に礫皮を残し、素材剥片の主要剥離面側からの剥離によって全体の形状を円形に仕上げている。図の下側は素材剥片の側縁をそのまま残す。第145図-2は、1と同質の原礫から剥ぎ取られた縦長の剥片である。表面左側に礫皮を残し、表面からの剥離によって右側縁の上半1.8 cm程の間に刃部が作り出されている。



第145図 続縄文文化期土壙墓周辺出土石器

3、平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構として、竪穴住居跡16軒、土坑20基、製鉄炉1基、炭窯3基が検出された。竪穴住居跡は南側に面した斜面上に構築されていたものが3軒あり、他は台地平坦面か、緩斜面上に構築されている。16軒の竪穴住居跡のうち、遺構全体を調査できてその規模や細部の特徴を知り得たのはわずか5軒にすぎない。他は調査区外へ延びていたり、開田時の削平でその壁、床面の大部分を失っていたりして、その限られた部分が記録されただけである。

土坑は西側取付け道路部分の調査区や、斜面上の竪穴住居跡の近辺で多く検出され、主に覆土中からの出土遺物と、縄文時代の遺構、平安時代を下る遺構との重複関係から平安時代の遺構と判断した。特徴的な遺構として土器焼成が行われた遺構、多量の鉄滓が出土した土坑を各々2基ずつ検出した。他、製鉄炉は斜面下部から、炭窯は製鉄炉に対応する斜面上部の位置での検出である。

第3号竪穴住居跡（第146図、図版84-1）

〔検出地区〕OC46グリッド。

〔確認状況〕地山面上で焼土を含む黒褐色土のプランを確認した。

〔平面形〕住居の南側が調査区外にのびているため規模、平面形は不明であるが、北壁は276cmあり、隅丸方形を呈するものと考えられる。床面積は調査部分で2.88㎡である。

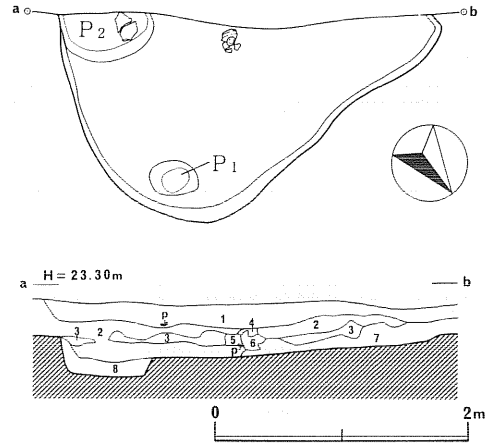
〔壁・壁溝〕北壁の最も深いところで14cmで、緩やかに立ち上がる。壁溝はない。

〔床面〕若干凹凸があり、中央付近が低くなっている。あまりしまっていない。

〔ピット〕P₁；22cm、P₂；14cmの深さでP₂は長軸72cmの土坑状のものである。

〔カマド〕なし。

〔遺物出土状況〕遺物は少量で、床面より10cmほど上から土師器坏、須恵器甕破片が出土した（第174図）。



第146図 第3号竪穴住居跡

第4号竪穴住居跡（第147図、図版84-2）

〔検出地区〕NG・NH44グリッド。

〔確認状況〕地山面上で黒褐色のプランを確認した。

〔平面形〕住居跡の北側が道路下にのびているため全容は不明であるが、西南壁216cm、南東壁297cmで、方形を呈するものと考えられる。調査部分の面積は3.39㎡である。

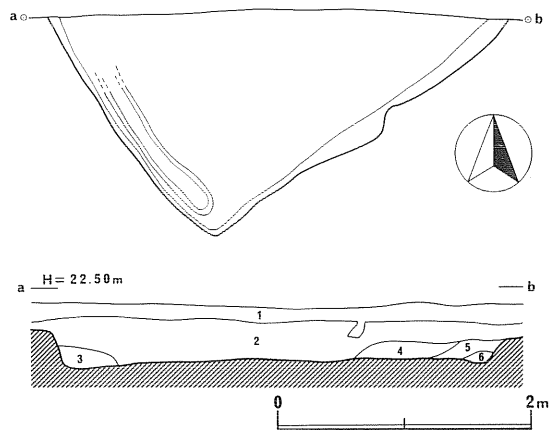
〔壁〕壁高が16～20cmで、わずかに外傾するしっかりした壁である。

〔壁溝〕西南壁の一部に幅20cm、深さ3cmの浅い溝が検出された。

〔床面〕若干凹凸があり全体的に西側へ傾斜する。床面は比較的堅くしまっている。

〔ピット・カマド〕検出されなかった。

〔遺物出土状況〕覆土中から土器片数点出土したのみである。



第147図 第4号竪穴住居跡

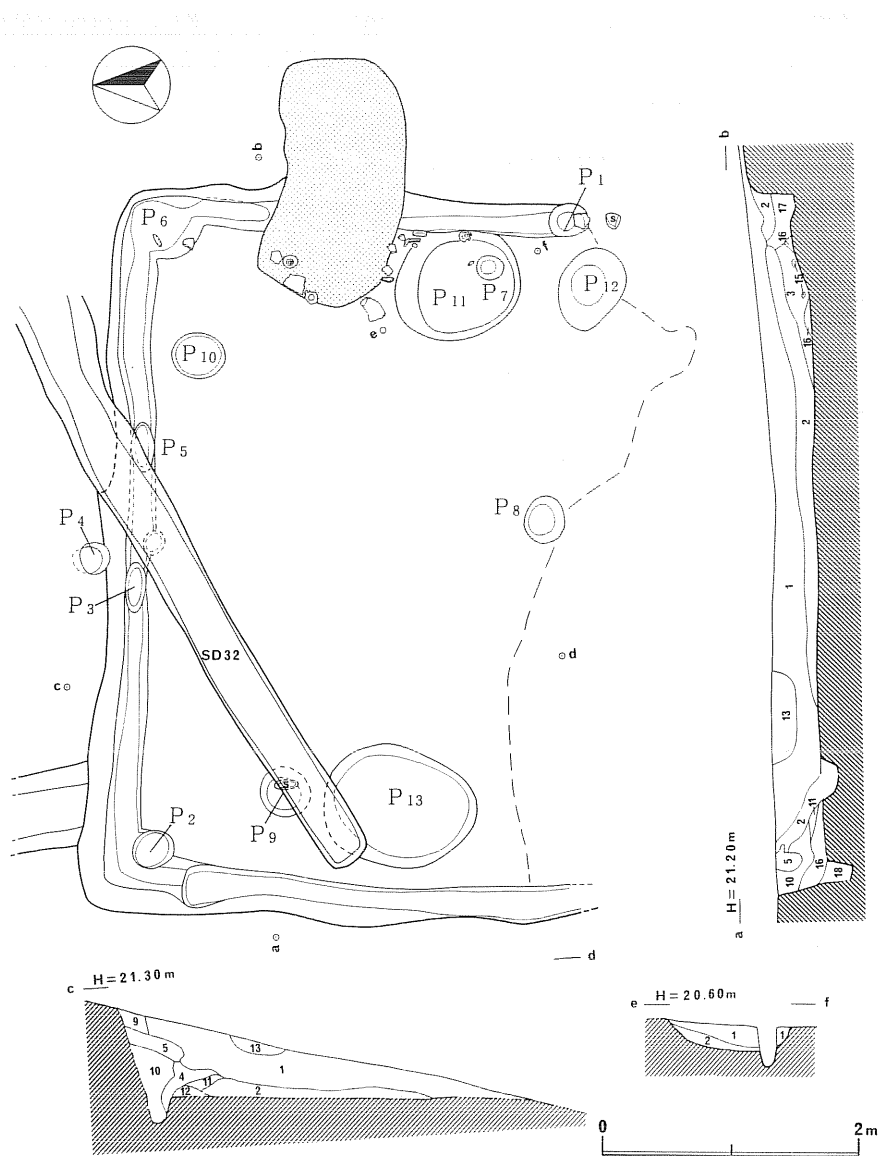
第5号竪穴住居跡（第148図、第149図、図版84-3・4）

〔検出地区〕MH～MJ40グリッド。

〔確認状況〕南側へ傾斜する地山面で、黒褐色土の長方形のプランを確認した。

〔重複〕住居北側で溝〈SD30・32〉と重複している、〈SD30・32〉に切られている。

〔平面形〕住居跡の南側部分が削平を受けて失われている。北壁570cm、東・西壁の残存部はそれぞれ361cm、390cmの規模をもち、恐らく方形を呈するものと考えられる。残存部分の面積は16.52㎡で、軸線方向はE-6°-Sを示す。



第148図 第5号竪穴住居跡

〔壁〕北壁は地山ローム下層の砂層まで掘り込まれていて、深い部分で105cmを測り、ほぼ垂直に近い立ち上がりを呈する。東・西壁も同様にしっかりしている。

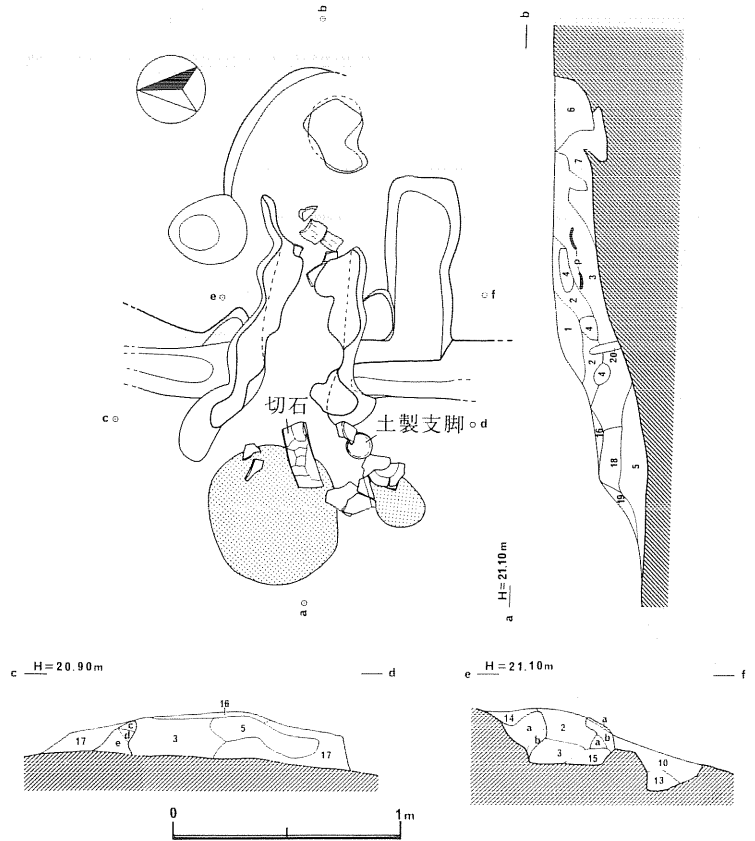
〔壁溝〕カマド部分を除いて、幅15~30cm、深さ6~28cmの溝が東壁、北壁、西壁に掘られている。

〔床面〕平坦で、非常に堅くしまっている。床面は北側1mほどは地山ローム層下の砂質土、中央付近よりやや南側までは地山、それより南側は厚さ3cmほどの黄褐色土の貼床が施されている。

〔ピット〕P₁;24cm、P₂;45cm、P₃;23cm、P₄;32cm、P₅;21cm、P₆;25cm、P₇;31cm、P₈;27cm、P₉;12cm、P₁₀;27cmの深さで、壁溝内のP₂、P₆が主柱穴と考えられる。P₇はP₁₀を切っていた。P₁₁~P₁₃は土坑状のもので、それぞれ27cm、36cm、17cmの深さをもち、すべてこの住居跡に伴うものである。

〔カマド〕住居東壁の北側に、壁面に対してやや南寄りに傾いて設置されている。燃烧部と煙道部からなり、床面から

約20°の角度で壁外の地山を掘り込み、すべて粘土を積み上げて構築されている。全長220cm、最大幅85cmの規模をもつ。燃烧部は床面をわずかに掘りくぼめ、中央部に支脚に転用したと考えられる切石を置く。袖は比較的短く、八の字形に広がり、褐色土と火山灰と思われる粒子の粗い黄褐色土からなる。なお右袖の手前に土製支脚が置かれていたが、袖の芯材としての利用が考えられる。煙道部の天井部分は失われているが、褐色土で構築され、内面が赤褐色に焼けた側壁が残存する。



第149図 第5号竪穴住居跡カマド

煙道部の内側の幅は20～35cmで、緩やかにのぼり、煙出しと思われる浅いピットに至る。

〔遺物出土状況〕カマド周辺に集中していた。P₁₀の確認面とP₁₁底面から土錘が出土した(第171図～第173図)。

第6号竪穴住居跡(第150図、第151図、図版84-5・6)

〔検出地区〕MJ37・38グリッド。

〔確認状況〕傾斜のやや緩くなる南斜面の地山面で、炭化物を多く含む黒褐色土の長方形のプランを確認した。

〔平面形〕住居の南側部分は削平を受けて失われている。北壁226cm、東・西壁の残存部はそれぞれ100cm～113cmで、方形を呈するものと考えられる。残存部分の面積は4.08㎡で、軸線方向はN-86.5°-Eを示す。

〔壁・壁溝〕残存する北壁の最も深い部分で28cmしかなく、やや緩やかな立ち上がりを示す。壁溝なし。

〔床面〕平坦であるが、やや南側へ傾斜する。床面は北側1.3mほどは地山であるが、これより南側は暗褐色土上に3cmほどの黄褐色土が貼床されていて、堅くしまっている。

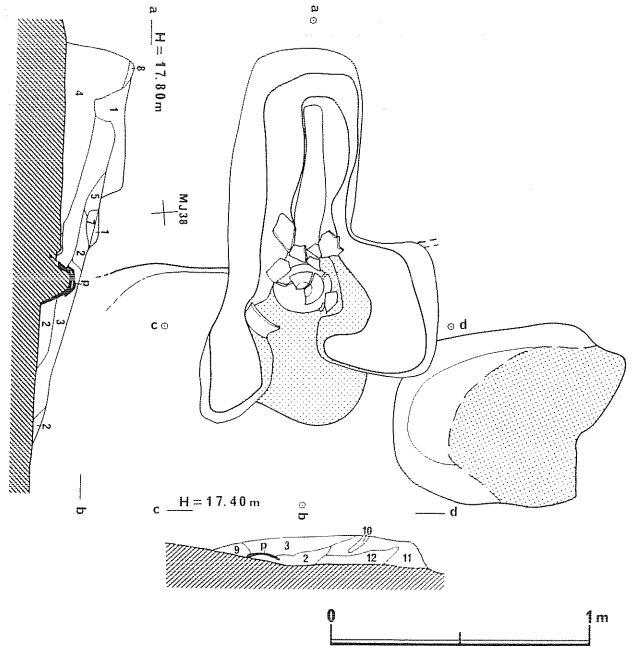
〔ピット〕検出されなかった。

〔カマド〕住居東壁の北側に、壁面に対してやや東寄りに傾いて設置されて、黒褐色土上に細長い馬蹄形の煙道部を確認した。構造的に

は焚き口部、燃烧部、煙出し部からなり、全長148cm、最大幅85cmの規模をもつ。燃烧部の中央に転用支脚として、倒立した甕の底に坏を伏せたものが固定されている。両袖は残存高5～10cmと低く、黒褐色土、褐色土の他に火山灰と思われる黄褐色土の混入が見られた。煙道部は黒褐色土を掘り込んで構築されていて、甕の破片が補強材として使用されている。緩やかに立ち上がる煙道は、煙出しで水平になり、そして急激に立ち上がる。

〔遺物出土状況〕遺物は少なく、主にカマド周辺に集中していた(第174図)。

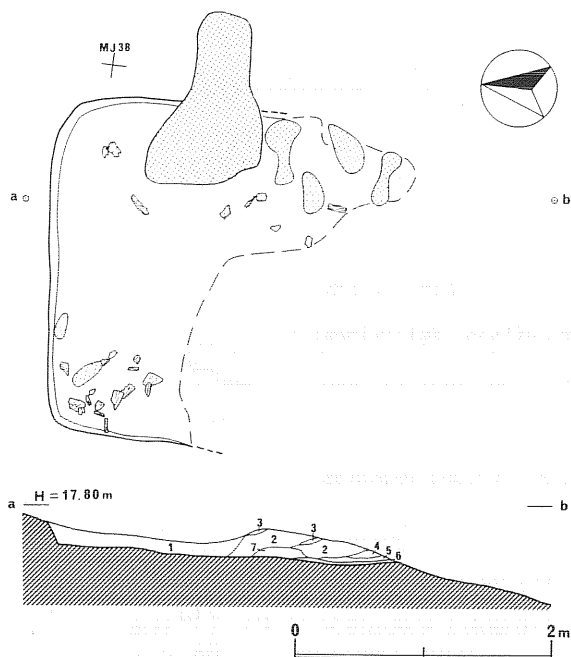
〔備考〕カマド南側の床面上で、焼土とそれを馬蹄形に取り囲む、カマド袖に使用さ



第150図 第6号竪穴住居跡カマド

れていたと同じ火山灰と思われる黄褐色土を検出した。この上面でも焼土が確認されており、カマドに近い施設の存在が考えられる。

本住居跡の床面あるいは覆土中の特に北西側に多量の炭化材を検出した。このことにより本住居跡は焼失家屋と考えられる。



第151図 第6号竪穴住居跡

第7号竪穴住居跡（第152図、第153図、図版84-7・8、図版85-1・2）

〔検出地区〕MD～ME43グリッド。

〔確認状況〕南斜面の地山において、黒褐色土を覆土とする長方形のプランを確認した。住居の南側は削平により失われ、すでに床面が露出していたが、全体は壁溝によって確認することができた。

〔平面形〕方形で西側には張り出しをもつ住居で、規模は東壁364cm、西壁200cm（張り出し部）+211cm、南壁183cm（張り出し部）+358cm、北壁490cmである。面積は12.79㎡で、軸線方向はE-2°-S。

〔壁〕北壁と東・西壁の北側部分しか残存しない。高い所で68cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔壁溝〕カマド部分を除いて、幅13～35cm、深さ10～30cmの溝が全周する。

〔床面〕全体的に平坦であるが、わずかに南側へ傾斜する。床面は中央より北側は地山であるが、南側は貼床されていて、それぞれ強くしまっている。

〔ピット〕P₁；30cm、P₂；26cm、P₃；36cm、P₄；33cm、P₅；34cm、P₆；22cm、P₇；24cm、P₈；21cm、P₉；25cm、P₁₀；12cm、P₁₁；12cmの深さである。P₁～P₉までは壁溝内にあり、P₃・P₄・P₅・P₉が主柱穴と思われる。P₁₀には焼土と伴う土器が含まれていた。

〔カマド〕住居東壁の北側に、壁面に対してやや南寄りに傾いて設置されている。燃焼部と煙

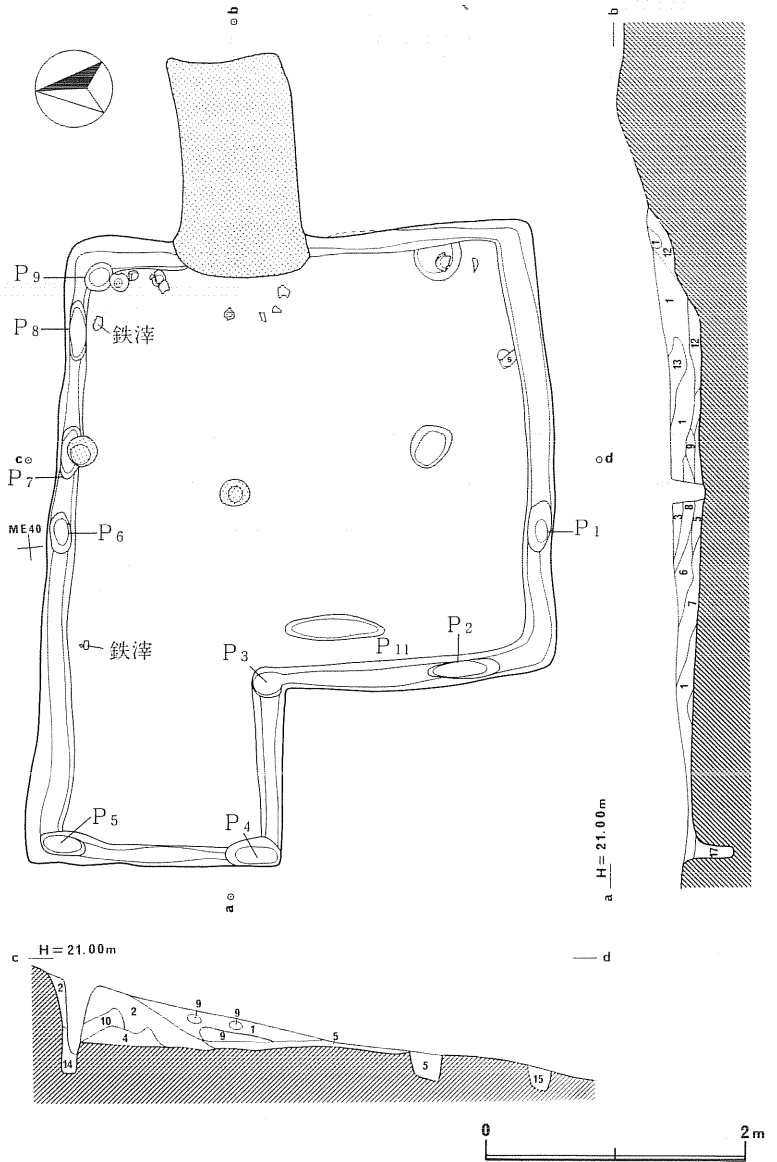
道部からなり、床面から18°の角度で壁外の地山を掘り込み、すべて粘土を積み上げて構築されている。全長193cm、最大幅86cmの規模をもち、カマド全体を住居外に押し出したような趣を呈する。燃烧部には多量の甕の破片(完形1点を含む)が廃棄されたような状態で検出された。燃烧面は長さ102cmもあり、住居外まで延びている。袖は非常に短く、褐色土の他に、甕の破片を芯材として使用している。煙道部は失なわれているが、幅10cmほどの黄褐色土によって構築された両側壁が確認された。この煙道部の両脇には、溝状の凹みが煙道部の底面より低く掘られている。北側は長さ東

壁より74cm、幅12~15cm、深さ40cm、南側は長さ80cm、幅12~18cm、深さ21cmで、それぞれ両袖外側を通り、東壁壁溝に落ち込むようになっている。

この北側溝より25cmほどのぼった所にピットがあり、煙出しと推定される。

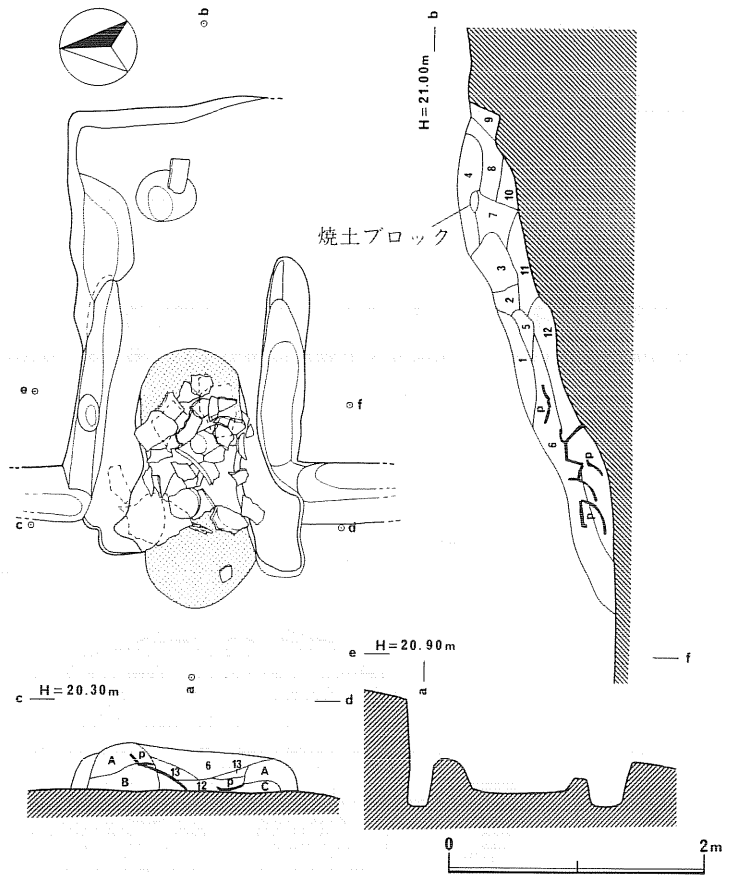
〔遺物出土状況〕北東隅の覆土上層中、南壁に沿ったやや東寄りの床面から伏せられた状態の坏1点ずつが、また北壁側の床面から鉄滓2点が出土した。カマド燃烧部からは複数個体の甕の破片が出土(第175図~第178図)。

〔備考〕カマドの付設される側と反対側に張り出し部をもつ住居跡だが、確認面での観察、土層断面の観察でも覆土の違いは認められなかった。ま



第152図 第7号竪穴住居跡

た、床面の精査でも住居跡内を巡る壁溝は張り出し部まで連続し、竪穴住居跡内とを仕切る溝は検出されなかった。すなわち、張り出し部と竪穴住居跡部には構築の時間差が認められず、かつ使用時においても同一の空間として使用されたであろうことが推測される。この張り出し部は竪穴住居跡構築時にともに地面を掘り込んでつくられており、竪穴住居跡使用時には住居空間の一部として機能していたものと判断される。



第153図 第7号竪穴住居跡カマド

第8号竪穴住居跡 (第154図、図版85-3)

〔検出地区〕MB・MC42グリッド。

〔確認状況〕緩斜面の地山面上で、黒褐色土の方形のプランを確認した。

〔平面形〕東壁406cm、西壁407cm、南壁369cm、北壁412cmの規模をもち、方形を呈する。面積は15.00㎡で、軸線方向はN-84°-Eを示す。

〔壁・壁溝〕北壁は13~19cmの高さがあるが、南壁は4~7cmしか残っていない。全体的に歪みがあり直線的でなく、やや緩やかな立ち上がりを呈す。壁溝なし。

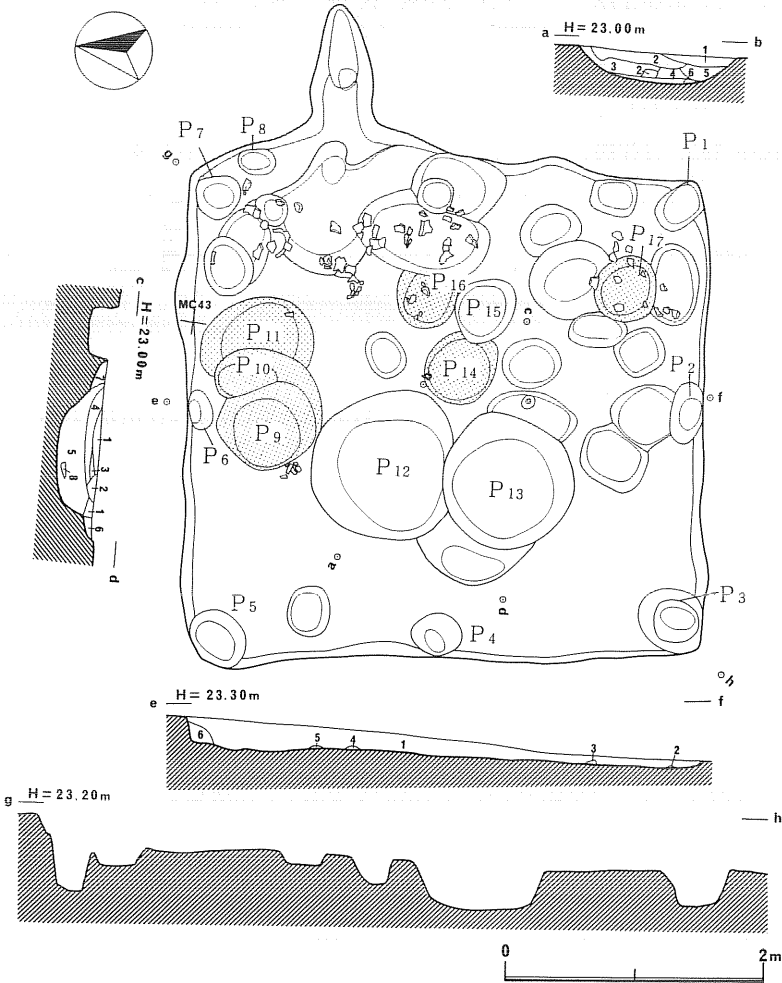
〔床面〕比較的平坦であるが、やや南側へ傾斜する。床面上にピットが多くあるため比較的柔らかい。

〔ピット〕P₁; 32cm、P₂; 41cm、P₃; 32cm、P₄; 33cm、P₅; 32cm、P₆; 40cm、P₇; 37cm、P₈; 41cmの深さで本住居の主柱穴である。床面上には多数の土坑状のピットがあり、P₉; 33cm、P₁₀; 18cm、P₁₁; 11cm、P₁₂; 26cm、P₁₃; 34cm、P₁₄; 25cm、P₁₅; 12cm、P₁₆; 18cm、P₁₇; 23cmの深さで、

主なものとして焼土を含むものP₉、P₁₀、P₁₁、P₁₄、P₁₅、P₁₆、P₁₇と、焼土を含まないものP₁₂、P₁₃に分類できる。またP₁₂には貼床が施されていた。これらのピットの中でP₁₂がP₁₃を、P₉がP₁₀、P₁₁を、P₁₅がP₁₄を切っているなどのかなりの切り合い関係が確認でき、相互の時間差が考えられる。

〔カマド〕住居東壁の北壁の北側に、壁面に対してほぼ直角に設置されている。燃燒部は攪乱によって壊されていて、煙道部だけが残る。煙道部は最大幅50cmで、東壁から煙出しの先端まで9.4cmあり、中央付近で落ち込んでから緩やかに立ち上がる。

〔遺物出土状況〕P₁₅の東側の床面上で皿、東南隅の覆土に比較的まとまった土器片、北壁東寄りの床面で砥石出土。他はカマド周辺に集中する（第178～第181図）。



第154図 第8号竪穴住居跡

第9号竪穴住居跡（第155図）

〔検出地区〕 M A・M B45グリッド。

〔確認状況〕 地山面で、中央付近に多量の焼土を含む黒褐色土のプランを確認した。

〔重複〕 溝くS D86)に切られている。

〔平面形〕 住居跡の西側は床面と同じレベルまで地山が削平されていて、また南側は道路下にのびているため、東・北壁の一部分がわかるにすぎない。調査部分の規模は東壁250cm、北壁228cmで、隅丸方形を呈すると考えられる。面積は6.56㎡である。

〔壁・壁溝〕 東壁17cm、北壁10cmで、緩やかにたちあがる。壁溝なし。

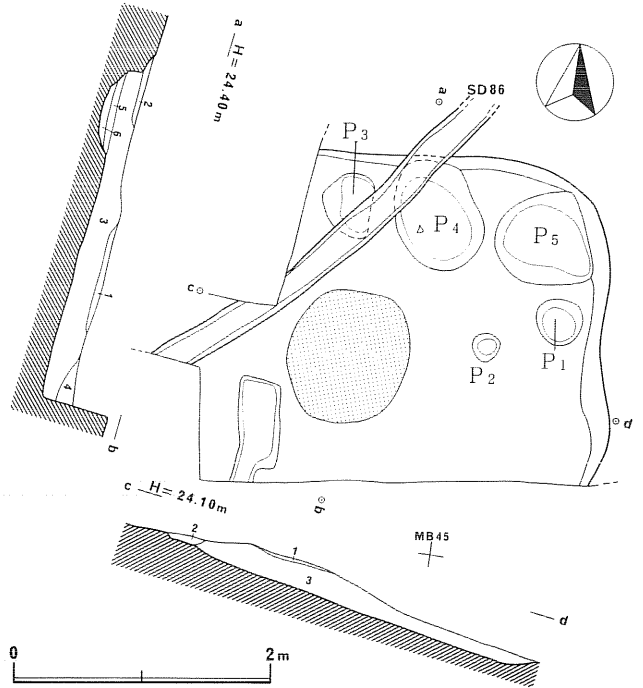
〔床面〕 平坦で、あまりしまっていない。

〔ピット〕 P₁；13cm、P₂；22cm、P₃；12cm、P₄；14cm、P₅；26cmの深さである。

〔カマド〕 なし

〔遺物出土状況〕 P₄より土器片が出土した。

〔備考〕 確認面での焼土は厚さ5cmほどのもので床面とは不連続であり、本住居跡とは関連しない。



第155図 第9号竪穴住居跡

第10号竪穴住居跡（第156図、図版85-4）

〔検出地区〕 L H45・46、L I45・46グリッド。

〔確認状況〕 東側へ緩やかに傾斜する地山面で黒褐色土のプランを確認した。

〔平面形〕 住居跡の南側が道路下にのびているため規模、平面形は不明であるが、調査区内では北西壁347cm、北東壁265cm、西南壁120cmで、隅丸方形を呈するものと考えられる。調査部分の床面積は5.88㎡である。

〔壁・壁溝〕 西南壁が一番高く38cmで、やや緩やかに立ちあがる。壁溝なし。

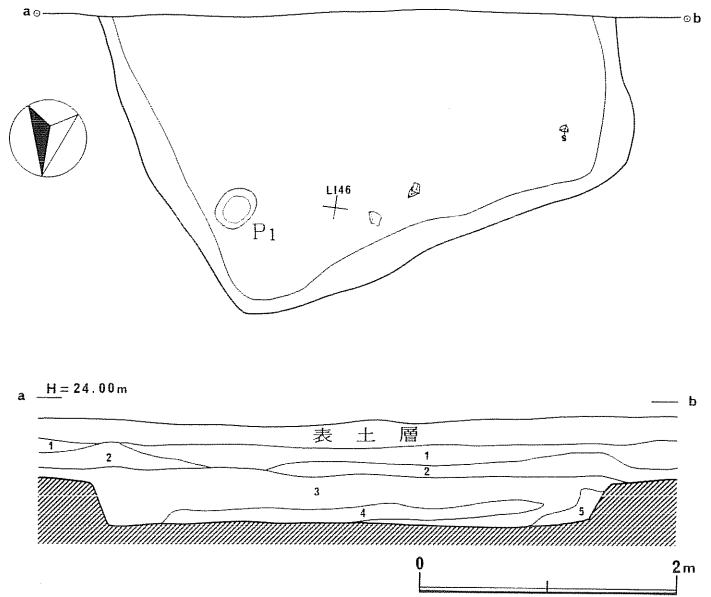
〔床面〕 平坦であるが、踏み固められた様子はない。

〔ピット〕P₁；10cmの深さで、
他には検出されなかった。

〔カマド〕なし。

〔遺物出土状況〕

覆土から土器片がわずかに出
した程度である。



第156図 第10号竪穴住居跡

第11号竪穴住居跡（第157図）

〔検出地区〕L T 45・46、M A 46グリッド。

〔確認状況〕道路北側調査区南西隅の地山面が落ち込む際の部分で、黒褐色土の方形プランを確認。ただし、南側壁の付近は風倒木痕によって攪乱されており、他にくらべて明瞭ではなかった。

〔平面形〕東壁338cm、西壁390cm、南壁390cmの規模をもち、東西にやや長い長方形を呈する。面積は11.93m²である。

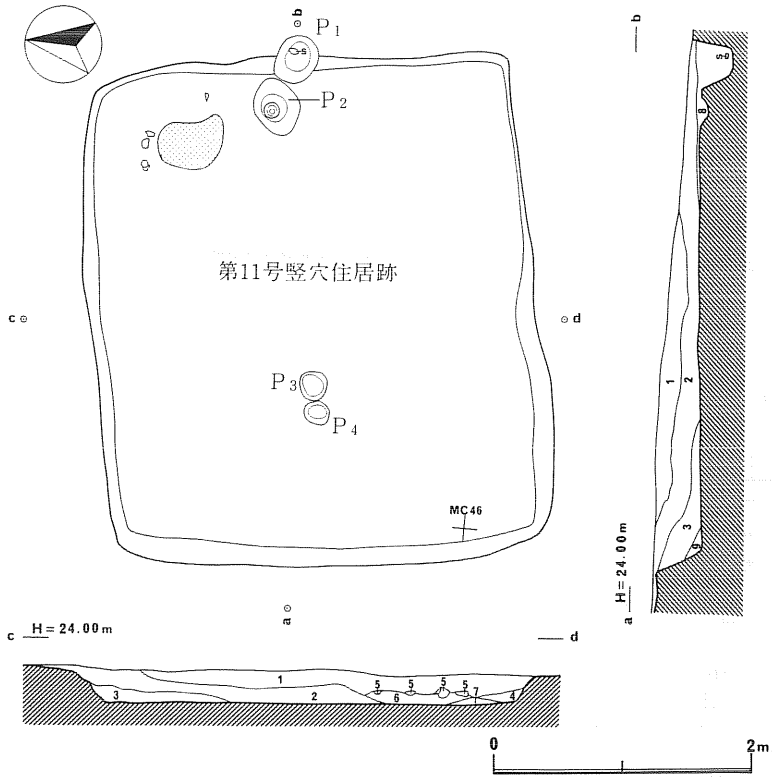
〔壁・壁溝〕西壁は37～38cmであるが、東壁は調査区南東隅の落ち込み際に位置しているため、5～7cmしか残っていない。壁溝が設けられていないことから、壁面の傾斜は全体的にやや緩やかな立ち上がりを示す。

〔床面〕ほぼ平坦で、中央付近は堅くしまっている。

〔ピット〕P₁；26cm、P₂；10cm、P₃；35cm、P₄；17cmの深さであり、P₁以外支柱穴と思われるものは検出できなかった。

〔カマド〕北東隅の床面上に赤化した焼土を検出した。

〔遺物出土状況〕P₂から坏、焼土の北側で鉄滓が出土した（第181図）。



第157図 第11号竪穴住居跡

第12号竪穴住居跡（第158図、図版85－5）

〔検出地区〕 LH49、L148・50グリッド。

〔確認状況〕 地山面上で、焼土、炭化物を含む黒褐色土のプランを確認した。ただし後世の耕地造成、畑の畝等による攪乱が激しく、すでに床面が露出している部分もあった。

〔平面形〕 東南壁437cm、西北壁421cm、南西壁406cm、北西壁428cmの規模をもち、方形を呈する。面積は15.40㎡。

〔壁〕 最も高い所で10cmほどではっきりしない。東南壁は攪乱によってほとんど残っていない。

〔壁溝〕 東南壁を除いて幅8～30cm、深さ5～8cmの浅い溝が構築されている。東南壁にも恐らくあったものと思われる。

〔床面〕 攪乱によって壊されている部分が多いが、残っている部分をみると平坦で堅くしまっている。

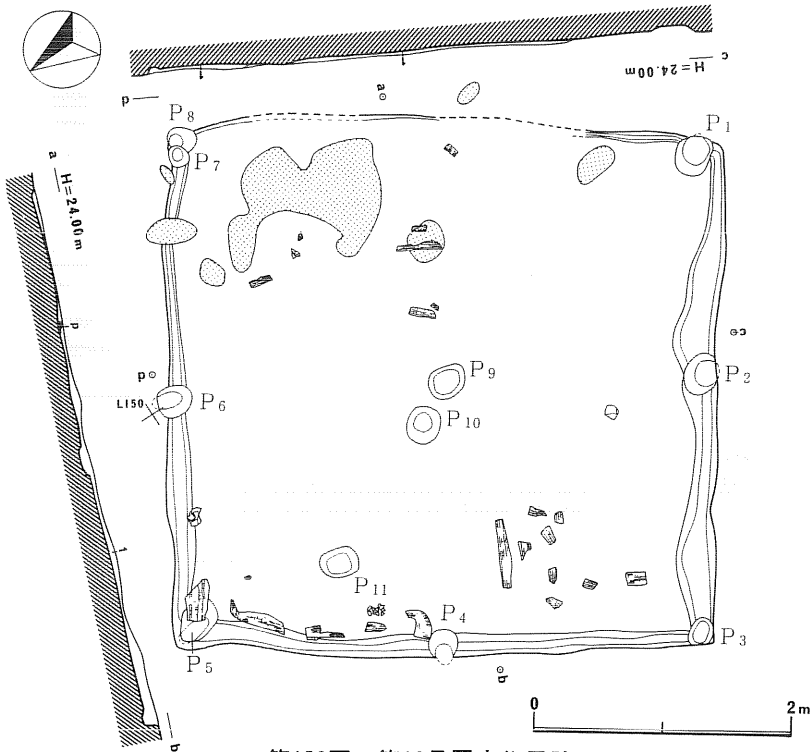
〔柱穴〕 P₁；21cm、P₂；35cm、P₃；20cm、P₄；32cm、P₅；26cm、P₆；16cm、P₇；20cm、P₈；10

cm、P₉；35cm、P₁₀；36cm、P₁₁；19cmの深さで、このうちP₁～P₈までが主柱穴である。

〔カマド〕 検出されなかったが、焼土の分布状態からみて、東南壁の北側に設置されていたと思われる。

〔遺物検出状況〕 P₆から鉄製品破片、床面から坏2点が出土（第181図）。

〔備考〕 本住居跡内の壁溝内近くに炭化材が多くみられたことから焼失家屋と考えられる。



第158図 第12号竪穴住居跡

第13号竪穴住居跡（第159図、図版85－6）

〔検出地区〕 L F～L G 49グリッド。

〔確認状況〕 地山面で、焼土、炭化物をふくむ黒褐色土のプランを確認した。

〔平面形〕 住居の東側半分ほどが調査区外にのびているため全容は不明であるが、調査区内での西北壁が366cm、南西壁207cm、北東壁277cmあり、方形を呈するものと考えられる。調査部分での面積は8.68㎡である。

〔壁〕 西北壁で34～50cmの高さがあり、ほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。

〔壁溝〕 西北、南西壁の一部に幅10～20cm、深さ5～10cmの溝が検出された。

〔床面〕 平坦で堅くしまっている。

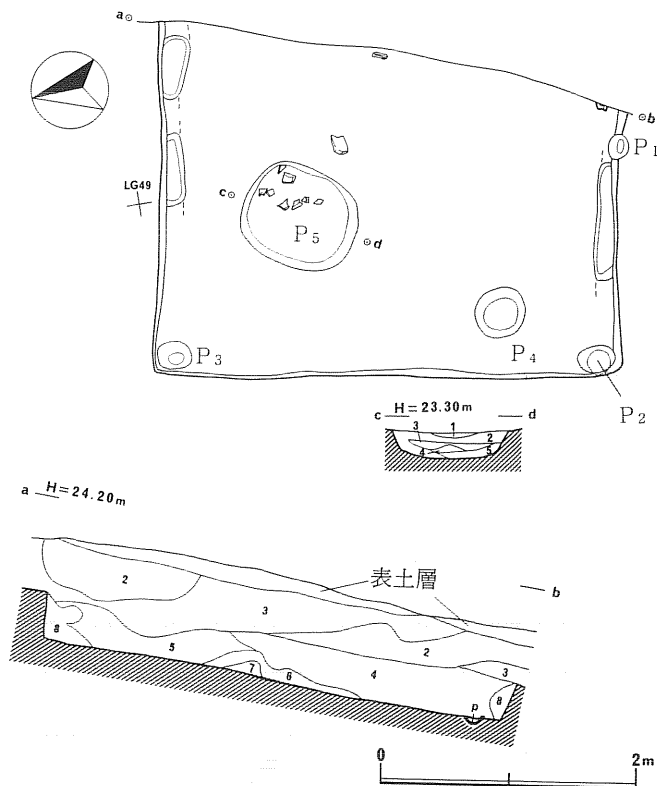
〔ピット〕 P₁；8cm、P₂；40cm、P₃；28cm、P₄；16cmの深さで、P₂、P₃が主柱穴である。P₃は

深さ23cmの土坑状のもので土器片がまとまって出土した。

〔カマド〕なし。

〔遺物出土状況〕

遺物は少なく、床面から坏、覆土中から黒曜石の小さな剥片が少量出土した。またP₅から土師器片がいく分まとまって出土した(第181図、第184図、第185図)。



第159図 第13号竪穴住居跡

第14号竪穴住居跡(第160図、図版85-7)

〔検出地区〕LE52、LF51・52グリッド。

〔確認状況〕地山面上で、焼土、炭化物を含んだ黒褐色土のプランを確認する。

〔平面形〕住居東側が調査地区外にのびているため、規模、平面形不明であるが、北西壁が406cmあり、方形を呈するものと考えられる。調査部分での面積は8.70m²である。

〔壁〕西北壁で24cm、ほぼ垂直に立ち上がるしっかりしたものである。

〔壁溝〕北東壁の一部をのぞいて幅15~20cm、深さ5~10cmの溝がめぐる。

〔床面〕平坦で堅くなっている。

〔ピット〕支柱穴と考えられるピットは確認できなかった。P₁~P₆は土坑状のもので、P₁;34cm、P₂;12cm、P₃;30cm、P₄;17cm、P₅;22cm、P₆;10cmの深さがある。これらのピットは相互に切り合っていて、P₁が一番新しく、次にP₃、P₄、P₅の順である。またP₂はP₄を切っている。

〔カマド〕なし。

〔遺物出土状況〕覆土中には土器片が少量含まれていた。北西壁上面で砥石、P₆から土器片がまとまって出土した(第181図、第184図)。

第15号竪穴住居跡（第161図、図版85-8、図版86-1・2）

〔検出地区〕L J 53・54、MA 53・54グリッド。

〔確認状況〕北側へ緩傾斜する地山面で、黒褐色土の方形のプランを確認した。

〔重複〕溝〈SD71〉に切られていて、床面も掘り込まれていた。

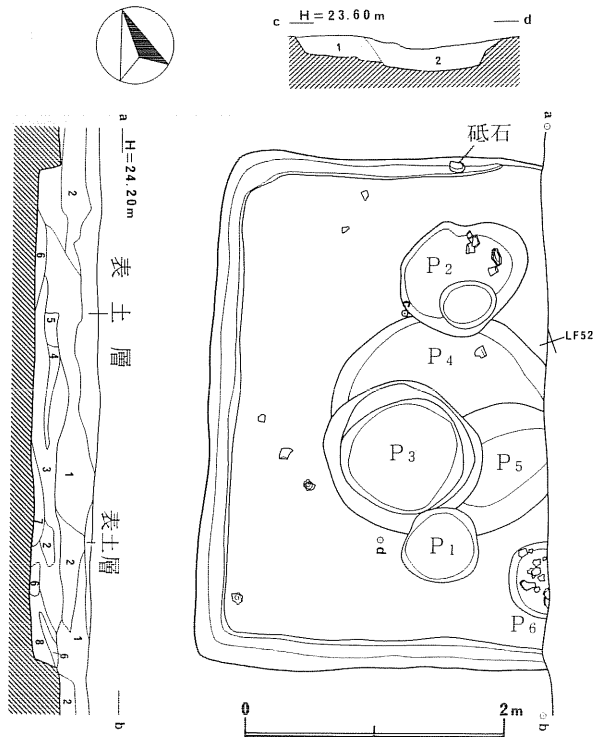
〔平面形〕東壁436cm、西壁432cm、南壁423cm、北壁406cmで、やや歪んだ方形を呈する。面積は17.05㎡で、軸線方向はE-15°-Sを示す。

〔壁〕床面まで深い部分でも10cmに満たないためはっきりしない。特にカマド西側は立ち上がりを確認できなかった。

〔壁溝〕西壁の一部分と北壁に幅10~17cm、深さ4~6cmの浅い溝が検出された。

〔床面〕やや北側に傾斜するが、平坦で堅くしまっている。

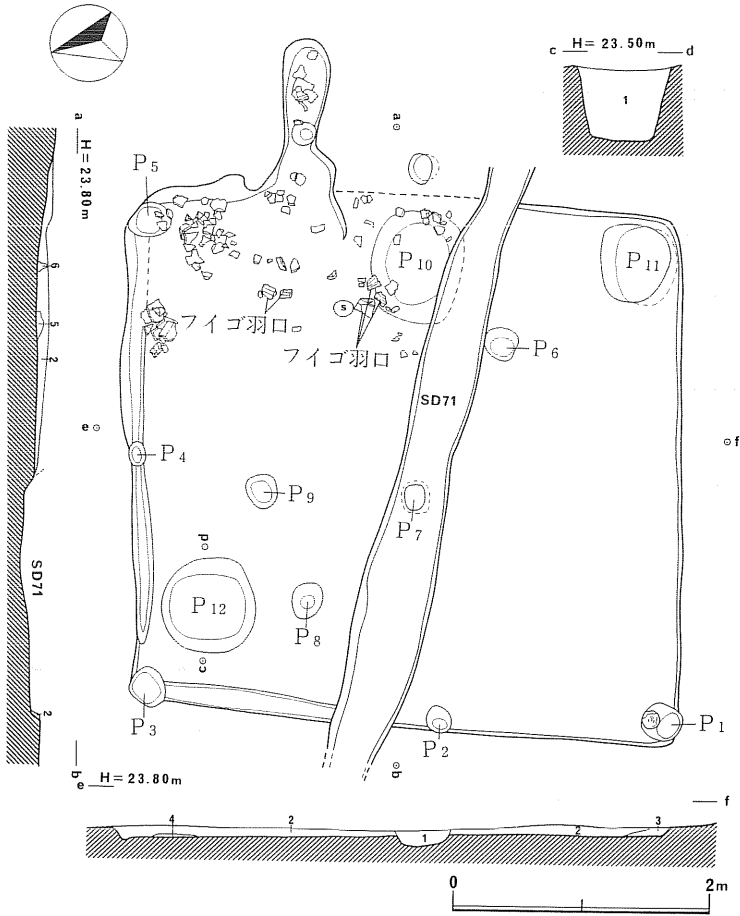
〔ピット〕P₁；49cm、P₂；22cm、P₃；18cm、P₄；18cm、P₅；29cm、P₆；11cm、P₇；55cm、P₈；19cm、P₉；11cmの深さで、P₁~P₅が主柱穴である。これらに対応する南東コーナー部、東・南壁の中央部には検出できなかった。P₁₀、P₁₁、P₁₂は、それぞれ58cm、47cm、58cmの深さを持つ土坑状のもので一度に埋められた形跡を持つ。P₁₂の底面には土器片が廃棄されたような状態でまよって検出された。



第160図 第14号竪穴住居跡

〔カマド〕住居東壁の北側に、壁面に対してほぼ直角に設置されているが、上面の削平により大部分が失われていて、煙道部だけが残る。煙道部は最大幅45cm、長さは東壁より110cmで、中央部のピットの他は平坦である。

〔遺物出土状況〕P₁の床面上で坏、その他はカマド周辺に集中し、カマド北側と北壁近くで甕の破片が、焚き口部と思われる所と、P₁₀の確認面で靴の羽口が出土した（第182図～第185図）。



第161図 第15号竪穴住居跡

第16号竪穴住居跡（第162図）

〔検出地区〕MC 53・54グリッド。

〔確認状況〕天地返し、削平を受けた地山面上で、南東隅のコーナー部とその延長上の東南壁の一部が確認され、また北側に遺物を伴った焼土があったことより住居跡と判断した。

〔平面形〕南東のコーナー部しか確認できず、また住居の西側が調査区外にのびているため、規模、平面形は不明である。

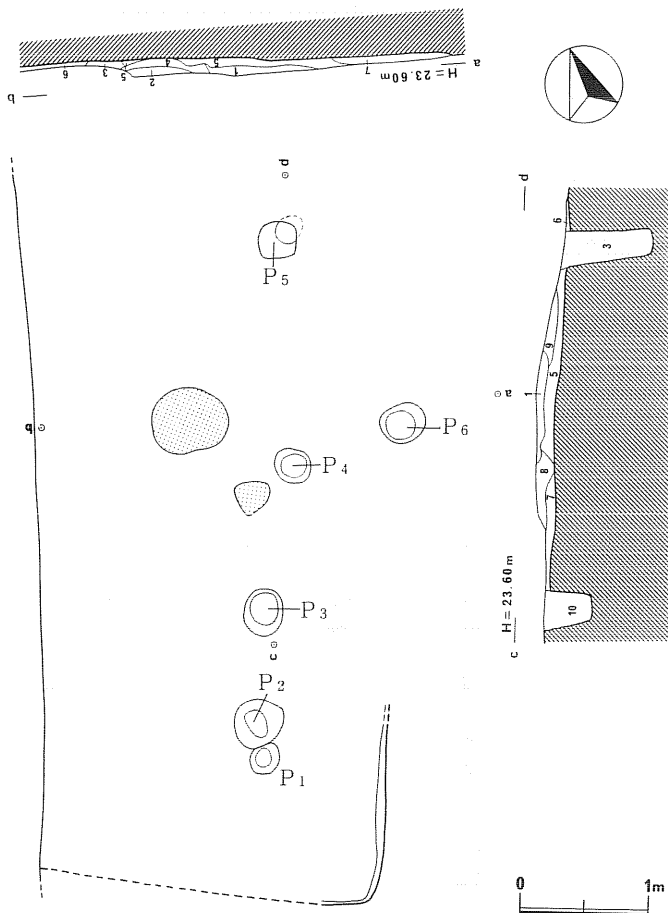
〔壁・壁溝〕わずかしが残存せず不明である。壁溝なし。

〔床面〕平坦で北側へやや傾斜する。あまりしまっていない。

〔ピット〕P₁；43cm、P₂；44cm、P₃；34cm、P₄；23cm、P₅；65cm、P₆；15cmと深い。これらが本住居跡の柱穴であるか否か、竪穴住居跡のプランが明確でないため、判断できない。

〔カマド〕北東隅に遺物を伴う焼土があったが、カマドかどうかは不明。

〔遺物出土状況〕北東隅から土師器坏、甕の破片がまとめて出土（第186図）。



第162図 第16号竪穴住居跡

第17号竪穴住居跡（第163図）。

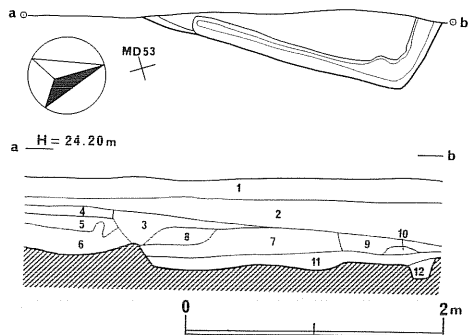
〔検出地区〕MC～MD53グリッド。

〔確認状況〕地山面で、住居跡のコーナー部と思われる黒褐色土のプランを確認した。

〔平面形〕住居跡の大部分が調査区外にのび、コーナー部しか調査できなかった。規模、平面形は不明である。

〔壁〕8～20cmの高さがあり、やや緩やかな立ち上がりを呈する。

〔壁溝〕北東壁の一部でできるが、幅10～15cm、深さ10cmの溝が確認された。



第163図 第17号竪穴住居跡

〔床面〕凹凸があり、あまりしまっていない。

〔ピット・カマド・遺物〕いずれも検出されなかった。

第18号竪穴住居跡（第164図）

〔検出地区〕MB51・MC51グリッド。

〔確認状況〕かなり削平された地山面上で、ピット、壁溝及び焼土が確認され、住居跡と判断した。

〔平面形〕ピット、壁溝の位置から推定して、東南壁360cm、北東壁329cmで、方形を呈するものと考えられる。

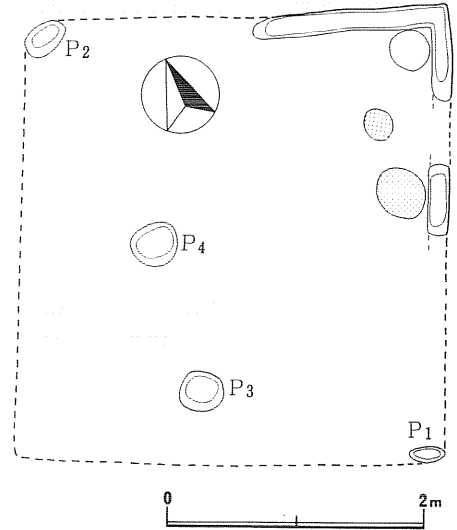
〔壁・壁溝〕壁はまったく残存しない。東南、北東壁の一部に壁溝が検出された。

〔床面〕削平されているため不明である。

〔柱穴〕P₁;15cm、P₂;26cm、P₃;15cm、P₄;33cmの深さで、P₁・P₂が住居跡のコーナー部の主柱穴と考えられる。

〔カマド〕北東隅に焼土が確認された。

〔遺物出土状況〕特に本住居跡に伴うと判断される遺物の出土はなかった。



第164図 第18号竪穴住居跡

第16号土坑（第165図）。

〔検出地区〕OC46・47グリッド。

〔確認状況〕地山である第Ⅲ層上面で焼土を含む黒褐色土の円形プランを確認した。

〔規模・形態〕道路下に北側の一部がのびているため全容は不明。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸底に近い。東西の径115cm、中央部の深さが36cmである。

〔遺物出土状況〕覆土断面観察のため、道路側の調査区際壁面を精査した結果、覆土第2層（遺跡基本層位第Ⅱ層）中から土師器坏の小片を出土した。

第17号土坑（第165図、図版87-5）

〔検出地区〕OB～OC46グリッド。

〔確認状況〕地山面で焼土を含む黒褐色土の楕円形プランを確認した。

〔規模・形態〕北側の一部が道路下にのびている。壁は緩やかに立ち上がり底面は平坦である。平面形は長軸推定191cmの楕円形である。深さは43cmで、断面形は鍋底形となる。

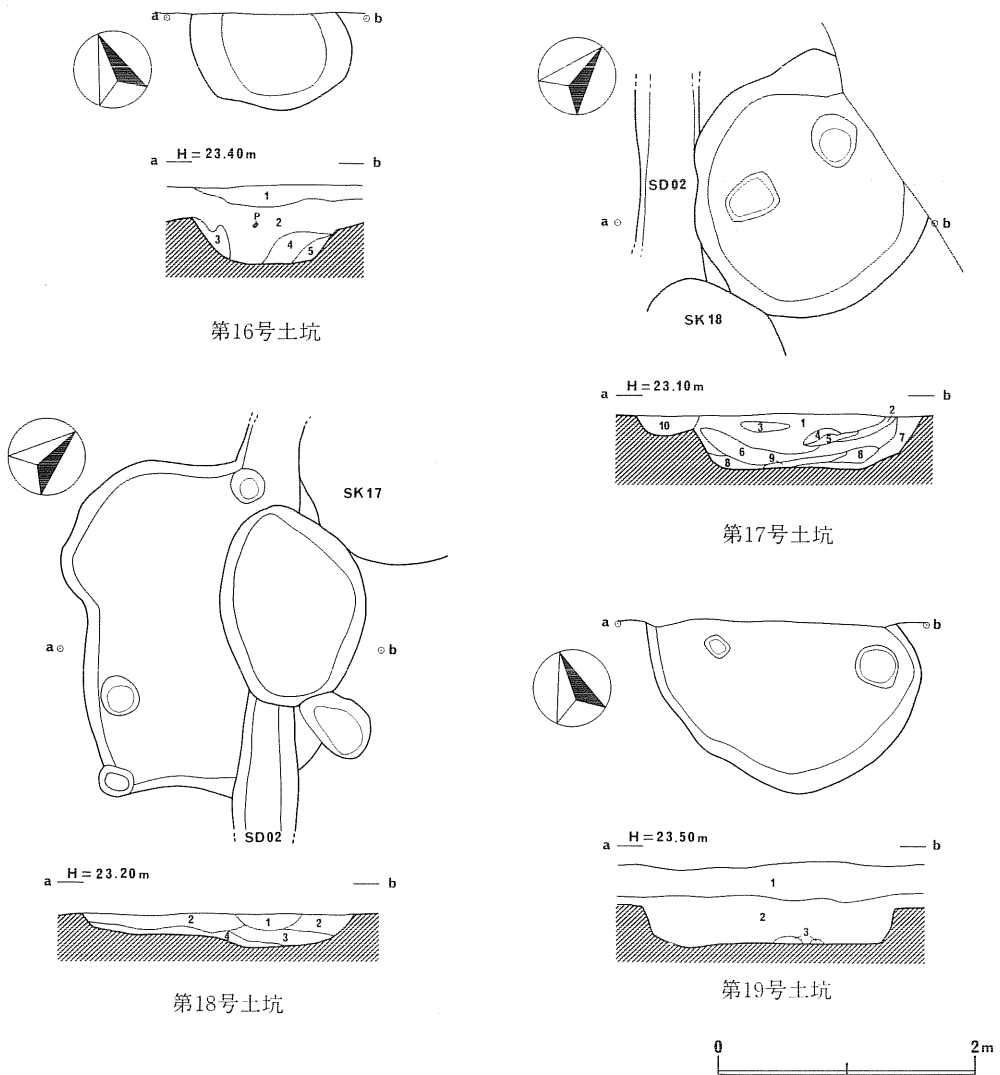
〔備考〕底面に長軸42cmの楕円形の平面形をもち深さが10cmのピットと、長軸40cmのやや台形に似た平面形で深さが15cmのピットがある。断面の観察により溝〈SD02〉よりも古いことが判明した。覆土の中程にレンズ状に堆積したまとまった量の焼土が認められた。

第18号土坑（第165図、図版87-6）

〔検出地区〕OB45・46、OC46グリッド。

〔確認状況〕地山面で溝〈SD02〉に切られ、焼土を含む黒褐色土の不定形のプランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は北西-南東に長い隅丸方形である。長軸は254cm、直交する短軸は217



第165図 第16号～第19号土坑

cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い鍋底状を呈する。北東側の底面は南西側よりも10cm程度低くなっている。確認面からの深さは、最も深いところで26cm、浅いところで12cm程を測る。

〔備考〕溝〈SD02〉によって切られている。底面の壁際に4つのピットがあるが、遺構の周辺にも多数のピットがあり、本遺構と直接的な関連をもつものかどうか判然としなかった。

第19号土坑（第165図、図版87-7）

〔検出地区〕NJ45・46、OA45・46グリッド。

〔確認状況〕地山面で焼土を含む黒褐色土の隅丸方形と推定されるプランを検出した。

〔規模・形態〕各辺の中点を結ぶ長軸推定172cm、短軸推定168cmの隅丸方形になると思われる。北東側の隅は道路下までのびており、全体を明らかにし得なかった。深さは中央部で30cmで、壁の立ち上がりは急である。底面は平坦である。

〔遺物出土状況〕底面近くの覆土中から1/2個体分の須恵器坏が出土した（第186図-4）。

〔備考〕底面に深さ11cmと15cmのピットがある。

第20号土坑（第166図、図版87-8）

〔検出地区〕OA～OB45グリッド。

〔確認状況〕地山面で溝〈SD02〉に切られた暗～黒褐色土の落ち込みを検出した。他の遺構（第1号土坑）と重複していたため確認時のプランの形状を明確には把握できなかった。

〔規模・形態〕平面形は長軸175cm、短軸135cmの楕円形で、断面は中央部で最も深い摺鉢形である。中央部の深さは53cmである。

〔遺物出土状況〕中央付近の底面から15cm程浮いた状態で、4個体分の土師器坏と扁平打製石器がまとまって出土。扁平打製石器は南側に隣接し本遺構によって切られている第1号土坑の覆土中に由来するものと判断された（第186図-3・5・8）。

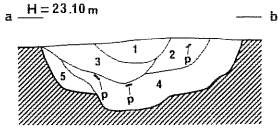
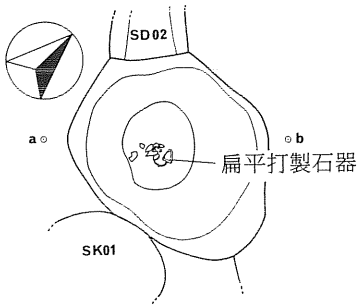
〔備考〕本遺構は縄文時代前期の第1号土坑を切り、平安時代よりも新しい溝〈SD02〉によって切られている。

第21号土坑（第166図）

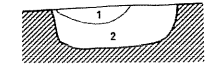
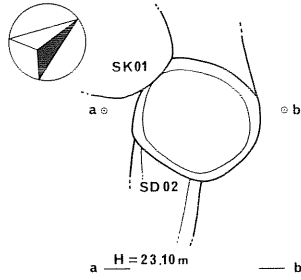
〔検出地区〕OA45グリッド。

〔確認状況〕地山面で溝〈SD02〉に切られた、黒褐色土の楕円形のプランを確認した。

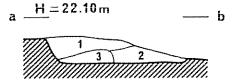
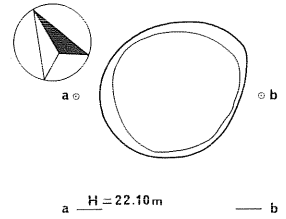
〔規模・形態〕平面形は長軸97cm、短軸89cmの楕円形を呈し、断面形は深さ32cmの鍋底状となる、壁面の立ち上りは比較的急である。



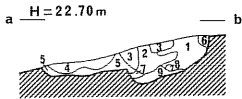
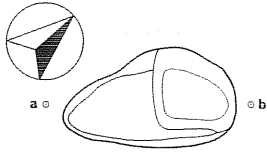
第20号土坑



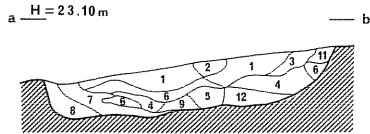
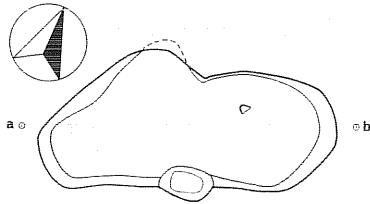
第21号土坑



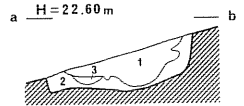
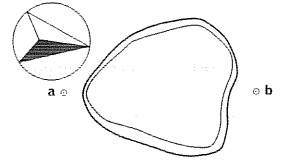
第22号土坑



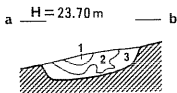
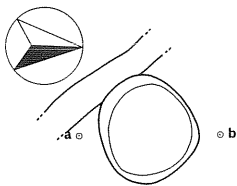
第23号土坑



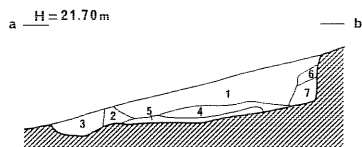
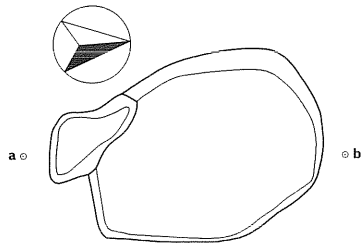
第24号土坑



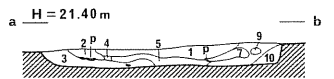
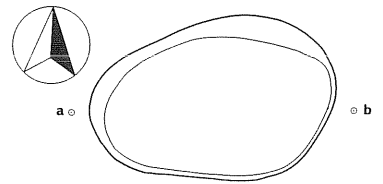
第25号土坑



第26号土坑



第28号土坑



第29号土坑



第166图 第20号~第26号·第28号·第29号土坑

〔備考〕本遺構は第1号土坑を切り、溝〈S D 02〉によって切られている。

第22号土坑（第166図、図版88-1）

〔検出地区〕NH44グリッド。

〔確認状況〕地山面で、黒褐色土の楕円形のプランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は長軸122cm、短軸104cmの楕円形、北側は深さ20cmで壁面が残存するが、南側では削平されて4cm程度を測るに過ぎない。

第23号土坑（第166図）

〔検出地区〕NC42グリッド。

〔確認状況〕地山面で、暗～黒褐色土の楕円形のプランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は南西側でややすぼまる楕円形を呈する。長軸135cm、短軸77cmを測る。斜面上にあるため北側の壁は28cm程残るが、南側では9cm程しか残っていない。

〔遺物出土状況〕覆土中から土師器の小片を出土している。

第24号土坑（第166図）

〔検出地区〕NB42グリッド。

〔確認状況〕地山面で焼土、炭化物を含む暗褐色土のいびつな楕円形プランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は長軸232cm、短軸107cmの形の整わない楕円形である。壁は急に立ち上がり、底面は凹凸があって南西側に傾斜する。深さは37cmである。

〔遺物出土状況〕覆土中に土師器の小片が含まれていた。

第25号土坑（第166図）

〔検出地区〕NA41・42グリッド。

〔確認状況〕地山面で暗褐色土のプランを確認した。

〔規模・形態〕平面形はいびつな円形で長軸115cm、短軸106cmを測る。北側の壁の残存の状態がよく深さ30cmである。南側は浅く19cm程を測る。

〔遺物出土状況〕土師器の小片が出土している。

第26号土坑（第166図）

〔検出地区〕MI43グリッド。

〔確認状況〕地山面で暗褐色土の略円形のプランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は径80cm程の略円形で、深さが15cm前後の鍋底状断面形を呈する。底面は平坦で南側へいく分傾斜する。壁の立ち上がりは急である。

第27号土坑（第167図・土器焼成遺構、図版88-2）

〔検出地区〕MF40グリッド。

〔確認状況〕地山面で略台形の黒褐色土プランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は南北に長く南側で狭くなる略台形に似た形状を示す。断面形は鍋底状を呈する。壁の立ち上がりは全体的に急であるが、北壁は南壁よりもやや緩い。規模は長軸201cm、短軸174cm、深さは北側の壁で37cm、南側で21cmを測る。

〔遺物出土状況〕北側の覆土中に土師器坏、甕の破片が含まれていた。

〔備考〕南側の底面、壁面に堅く焼土化した範囲を認めた。ちょうど土坑プランが狭くなるあたりから焼土化し、一部壁外まで連続する。土師器片はこの南側の部分よりも焼土化していない北側の覆土中に多く含まれている。火床面を形成すること、形態から土器焼成遺構の可能性があると判断した。南側壁が焼土化した例としては他に第31号土坑がある。

第28号土坑（第166図）

〔検出地区〕ME～MF40グリッド。

〔確認状況〕地山面で暗褐色土の楕円形プランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は長軸187cm、短軸146cmの楕円形、深さは北側で35cm、南側で15cmである。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦であるが若干南側へ傾斜する。

〔備考〕南側に長さ90cm幅50cm前後の落ち込みがあるが、本遺構とは直接関連しない。

第29号土坑（第166図）

〔検出地区〕ME40グリッド。

〔確認状況〕地山面で焼土を含んだ黒褐色土の楕円形のプランを確認した。

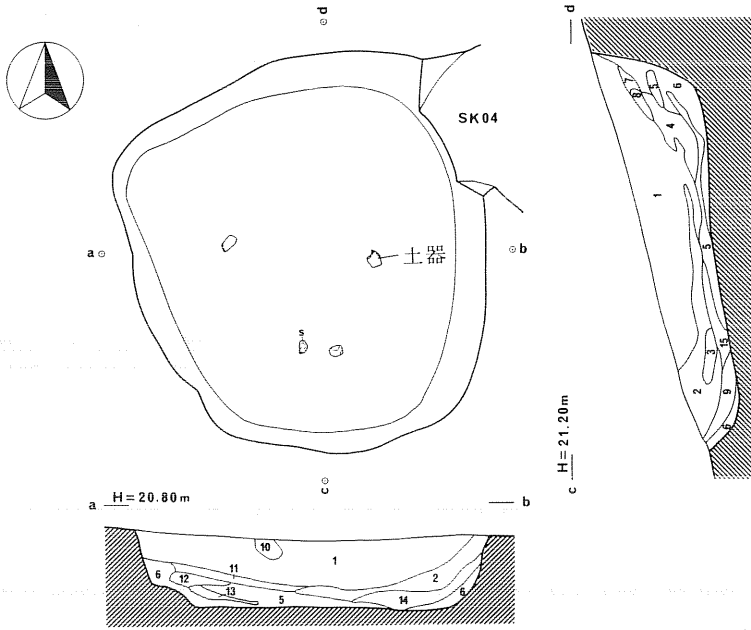
〔規模・形態〕平面形は長軸188cm、短軸130cmの楕円形で、深さが12～18cmの浅い鍋底状の断面形を呈する。

〔遺物出土状況〕西側の覆土中、焼土に混じって土師器甕の破片が出土した（第186図-11）。

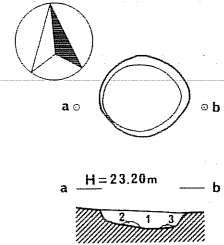
〔備考〕西側の覆土中には焼土のレンズ状堆積が認められる。

第30号土坑（第167図）

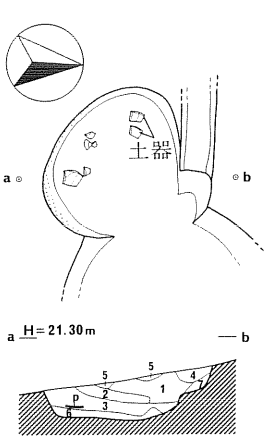
〔検出地区〕MB38・39、MC39グリッド。



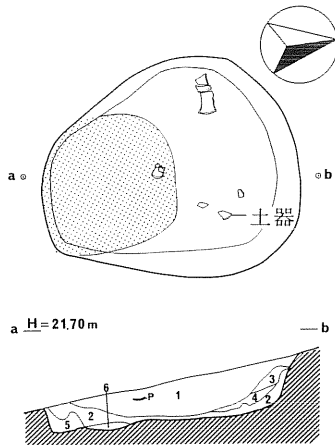
第30号土坑



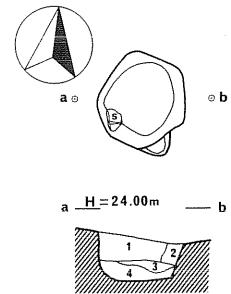
第32号土坑



第31号土坑



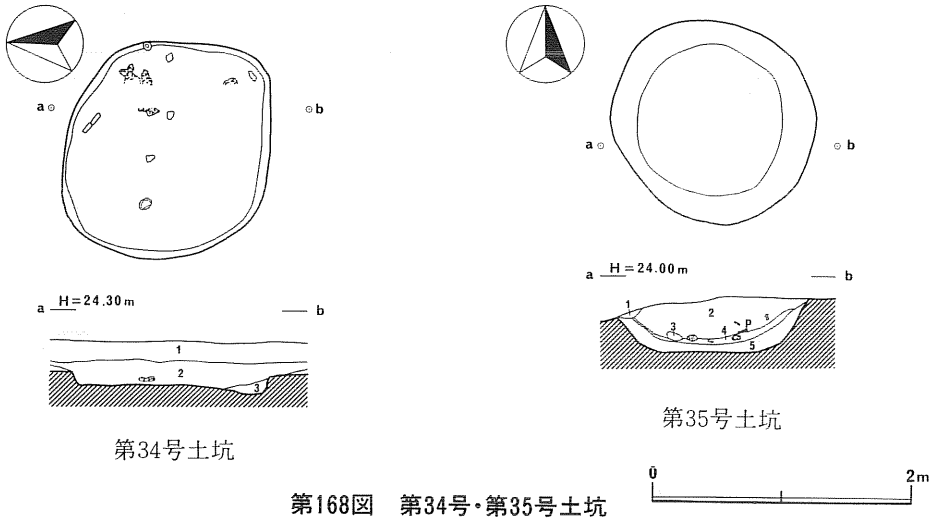
第27号土坑



第33号土坑



第167図 第27号・第30号～第33号土坑



第168図 第34号・第35号土坑

〔確認状況〕地山面で焼土を含む黒褐色土のプランを確認した。第4号土坑と重複しておりこれを切った状態で確認された。

〔規模・形態〕平面形は長軸311cm、短軸278cmの楕円形である。壁は南側で42cm、北側で75cmを測り急激に立ち上がる。底面はほぼ平坦で南側へ傾斜する。

〔遺物出土状況〕底面近くの覆土中から須恵器坏（第186図-10）、甕、壺の破片が出土している。

〔備考〕北西側の壁が第4号土坑を切っている。

第31号土坑（第167図、土器焼成遺構）

〔検出地区〕MC39 グリッド。

〔確認状況〕地山面で楕円形のプランを確認した。土坑の北側は第7号竪穴住居跡カマド煙道部の北側からのびる溝状の落ち込みによって切られ、東側には倒木痕による攪乱によって壊されている。確認面にあらわれたプランの大半は暗褐色土が占めるが、南側の輪郭には帯状の焼土が認められた。

〔規模・形態〕平面形は長軸推定126cmの楕円形を呈すると思われる。壁はやや急な角度で立ち上がるが北壁の傾斜は南壁よりも緩い。深さは23～33cm程である。

〔遺物出土状況〕南西側の覆土中から土師器甕（第186図-12・13）と坏の破片が出土した。

〔備考〕坑底面よりも南側壁で著しく焼土化している。焼土化の程度は第27号土坑に至らないが、同様の性格をもつ土器焼成遺構と判断した。

第32号土坑（第167図）

[検出地区] M B 42グリッド。

[確認状況] 地山面で黒褐色土の略円形プランを確認した。

[規模・形態] 平面形は径67cm程の円形で、断面形は深さが9～13cmの浅い鍋底状を呈する。

[備考] 覆土中に炭化物が混入する。溝< S D 20 >によって南西側の壁の一部が切られている。

第33号土坑（第167図、図版88-3）

[検出地区] L J 50・51グリッド。

[確認状況] 地山面で黒褐色土の楕円形プランを確認した。

[規模・形態] 平面形は長軸165cm、短軸151cmの楕円形で、断面形は深さが44cmの鍋底状を呈する。底面は平坦で壁面はゆるやかに立ち上がる。

[遺構出土状況] 底面から10cm程上位に多量の鉄滓を含む炭化物層があり、土師器坏の小片も含まれていた。確認面でも鉄滓が出土しておりこの中には楕形鉄滓もある。

第34号土坑（第168図、図版88-4）

[検出地区] L I 48グリッド。

[確認状況] 地山面で黒褐色土の楕円形プランを確認した。

[規模・形態] 平面形は長軸170cm、短軸158cmの楕円形である。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

[遺構出土状況] 覆土内および底面から楕形のものを含む鉄滓と、土師器坏の破片(第186図-9)が出土した。

[備考] 本遺構はレーダー探査によってその存在が判明した遺構である（巻頭カラー図版12）。レーダー探査は、遺構の存在が予想される区域L H・L I 48～49グリッドの表土を残し、50cm間隔に組んだ方眼上を発振器によって探査するという方法で行った。その結果、L I 48グリッドとL H 48グリッドをかけるライン上で、地山面の落ち込みがC R T上に青色の縞となっており、強く反応する赤色の点（レーダー探査画面中、矢印部分）も認められた。この赤色の点は遺構精査を行った結果、楕形鉄滓の一部が反応したものと判明した。

第35号土坑（第168図）

[検出地区] L I 53グリッド。

[確認状況] 地山面で黒褐色土の略円形プランを確認した。

[規模・形態] 平面形は径72cmの略円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。径に比較して深さが

あり、36cmを測る。断面形は鍋底状を呈する。

〔遺構出土状況〕第4層から土師器坏の破片が出土した。

〔備考〕南西壁際、底面から20cm上のところで径16cm程の自然石が出土している。

以上の土坑には覆土内、底面などから土師器片を出土しなくても、平安時代より新しいと判断される溝によって切られているために本項で扱われたものを含んでいる。土師器の坏、甕などの破片を出土した土坑では、その遺物の内容から見て竪穴住居跡とほぼ同時期に構築、使用されたものであることがわかる。

またこれらの土坑の中には、その機能に特徴的なものを認めることのできる例が2種類ある。

(註1)

1つは土器焼成遺構とした第27号土坑、第31号土坑であり、他は多量の鉄滓を出土した第33号土坑、第34号土坑である。

(註2)

(註3)

県内で須恵器以外の土師器を焼成した遺構としては能代市サシトリ台遺跡、秋田市野形遺跡(註4)、雄物川町足田門田遺跡などに報告例がある。また隣県では北上市比久尼沢遺跡(註5)に例がある。本遺跡で検出された第27号土坑の特徴である台形に似た平面形は、比久尼沢遺跡の第1号焼土遺構として報告された遺構に共通する点である。またサシトリ台遺跡の6号竪穴遺構と報告されるものでも共通するが、底面に傾斜をもつ点も同じである。

また鉄滓を多量に出土した第33号、第34号土坑では炭化物も同じく出土している。鉄滓の出土、特に碗形鉄滓が含まれる点と考え合わせると小鍛冶に関連した遺構ではないかと推定される。いずれも今後類例の検討が必要である。

第1号炭焼窯（第169図、図版87-1・3）

〔検出地区〕MJ43グリッド。

〔確認状況〕地山面で焼土を多量に含む柄鏡状のプランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は円形の窯体に張り出しのついた柄鏡形である。張り出しの部分を通る長軸は推定で160cmの長さがあり、それと直交する窯体の幅は85cmである。深さは張り出し部分では10cm、窯体中央で37cm前後である。底面は凹凸があり、張り出し部から窯体に向かっていくらか傾斜する。

〔備考〕焼土は壁面から覆土下層まで連続してあり、この焼土に混じってにぶい黄色の灰も認められた。焼土と灰の下には非常に細かく砕けた炭化物の層が認められた。

第2号炭焼窯（第169図、図版87-1・2）

[検出地区] M J 43グリッド。

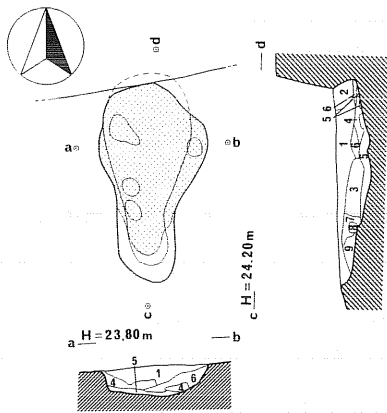
[確認状況] 地山面で焼土を多量に含む円形を2つ合わせたようなプランを確認した。

[規模・形態] 平面形は中央でくびれる楕円形である。長軸221cm、短軸90cmを測る。深さは南側で21cm、北側で40cmである。壁はほぼ垂直に近く、底面は平坦で北側が若干低くなる。

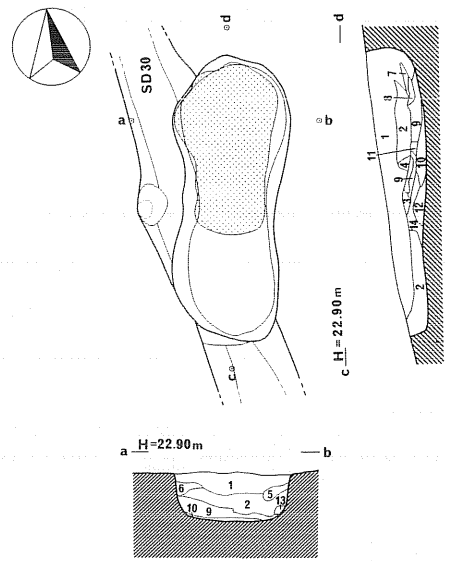
[備考] 覆土の下層に焼土層と炭化物層があり、前者が後者を覆っている。灰の検出はない。

第3号炭焼窯（第169図、図版87-4）

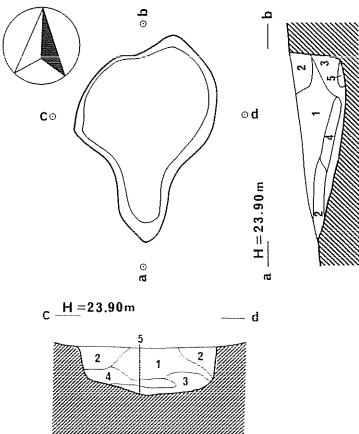
[検出地区] M I 43グリッド。



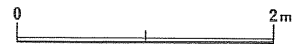
第1号炭焼窯



第2号炭焼窯



第3号炭焼窯



第169図 第1号～第3号炭焼窯

[確認状況] 地山面で焼土を含んだ円形の張り出しのあるプランを確認した。

[規模・形態] 平面形は円形に張り出し部のついた柄鏡状を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は北側に傾斜する。円形の窯体部と張り出し部をかけた長軸が151cm、直交する窯体の幅は108cmである。張り出し部の深さは11cm、窯体部では40cmである。

[備考] 焼土、炭化物とも他の2基に比べ少ない。焼土は張り出し部と窯体の連結部に若干、炭化物層は窯体北側に僅かに認められたに過ぎない。

以上の炭焼窯には伴出遺物がなく、厳密には時期を特定できないが、第1号製鉄炉や第33号土坑、第34号土坑など小鍛冶関連遺構の存在と合わせて本項で取り扱った。

第1号製鉄炉（第170図、図版86-3-7）

[検出区] NB36・37グリッド。

[確認状態] 重機による表土除去のうち、炉本体の地上部分を焼土のプランとして検出した。焼土は本体炉壁部分で、赤色、黄色、青色（環元色）の各々の色調の土が重層した状態である。

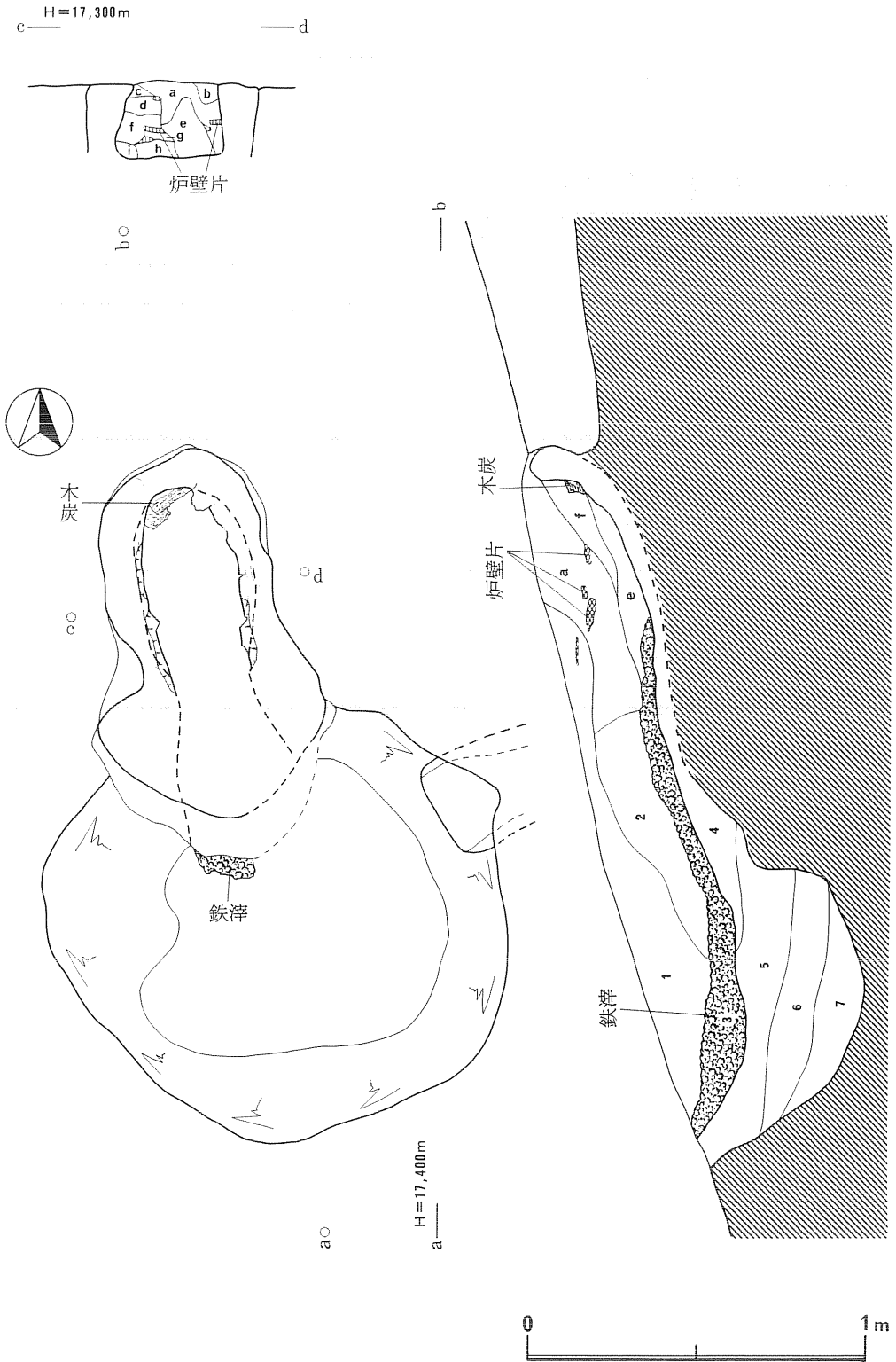
[規模・形態] 炉の本体はガラス質に硬化した炉壁の外周で、長さ72cm、幅50cmの「U」字形を呈する。本体の前部は褐色～黄褐色の粘土塊が長さ50cm、幅70cmで湯道を覆っている。炉壁は炉底からの計測で20cmの高さで残っており、湯道を覆う粘土塊は最も厚い箇所15cmを測る。炉の前庭部には径135cm、深さが63cmの土坑が掘られている。土坑の断面形はほぼ摺鉢形といってよいが、立ち上がり面の北東部1箇所1箇所に開口部径30cm、奥行42cmのピットが付設されている。

[炉壁] 炉壁は上部がやや内傾し、炉底にゆくにしがたで僅かづつ広がる断面形を示す。本体、炉の前部湯道部分を覆う黄褐色土の粘土塊と同質の粘土と積み上げて作っている。表面は、環元色のガラス質青紫色を呈するが、外側にむかうに従い、赤褐色（5Y R4/6）、灰色（10Y R4/1）、浅黄橙色（10Y R8/4）、橙（5Y R6/8）と漸移する。

[覆土・炉底] 本体炉底の湯道に近い部分から、厚さ7～8cmの鉄滓層が多量の炭の破片を混じえながら、前庭部の土坑内覆土中まで続いている。鉄滓はガサガサした感じの鍛冶滓に近いもので、所謂アメ状の流出滓は含まれていない。覆土には天井部～本体上部の炉壁が崩れ破片となって混じっている。褐色～暗褐色を呈する土である。

[遺物] 鉄滓の他、土師器坏の底部（第186図-2）が出土している。炉の前庭部にある土坑覆土の鉄滓層中から出土した。

[備考] 本製鉄炉の東側5m程に、径1m前後の円形の土坑を連続して掘ったような大きな凹みがある。東西の差し渡しは6m程ある。掘り込みは地山の粘質土で留まり、さらに下位の砂層までは行われていない。製鉄炉を構築する際に使用した粘土の採掘坑の可能性がある。



第170図 第1号製鉄炉

平安時代の遺構内出土遺物

第5号竪穴住居跡内出土遺物（第171図～第173図、図版101）

土師器坏（第171図－1～4、図版101）

1～3は約2/3程度残存する個体、4は口縁部を欠失した体部～底部の個体である。いずれも成形はロクロ水挽きによる。底部の切り離しは回転糸切りによるが、右方向に回転する粘土塊に左巻きに巻きつけた糸によって切り離している。切り離し後の底部の調整は行われていない。口縁～底部のカーブが直線的になるもの（1・4）と、膨らみをもって降りるもの（2・3）がある。2の坏は器壁が3mm前後しかなく、焼成色調が明褐色となっている。他が5～6mm程の器厚をもち灰褐色～褐色の色調を呈するのと対照的なつくりの土器である。

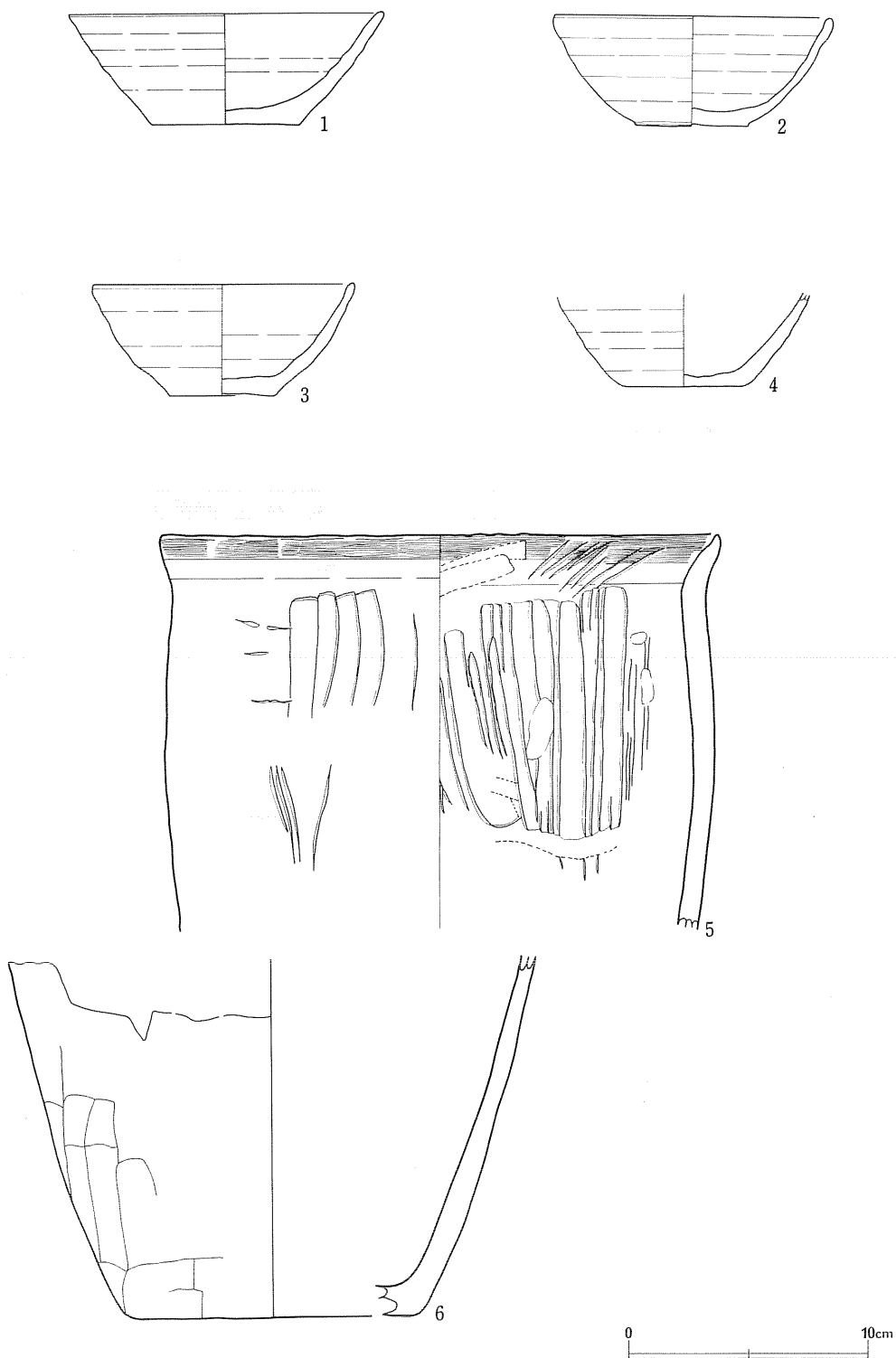
土師器甕（第171図5・6、第172図、第173図1～5、図版101）

口径20cmを超える比較的大形の甕と、15cm以下の小形の甕とがある。成形後回転台上で調整をうけたものと、回転台を用いず口縁部は横位のナデ、体部は縦位のケズリ調整を行うものがある。口縁部のナデは指頭を使い指の痕跡が明瞭に残されるような例もある。

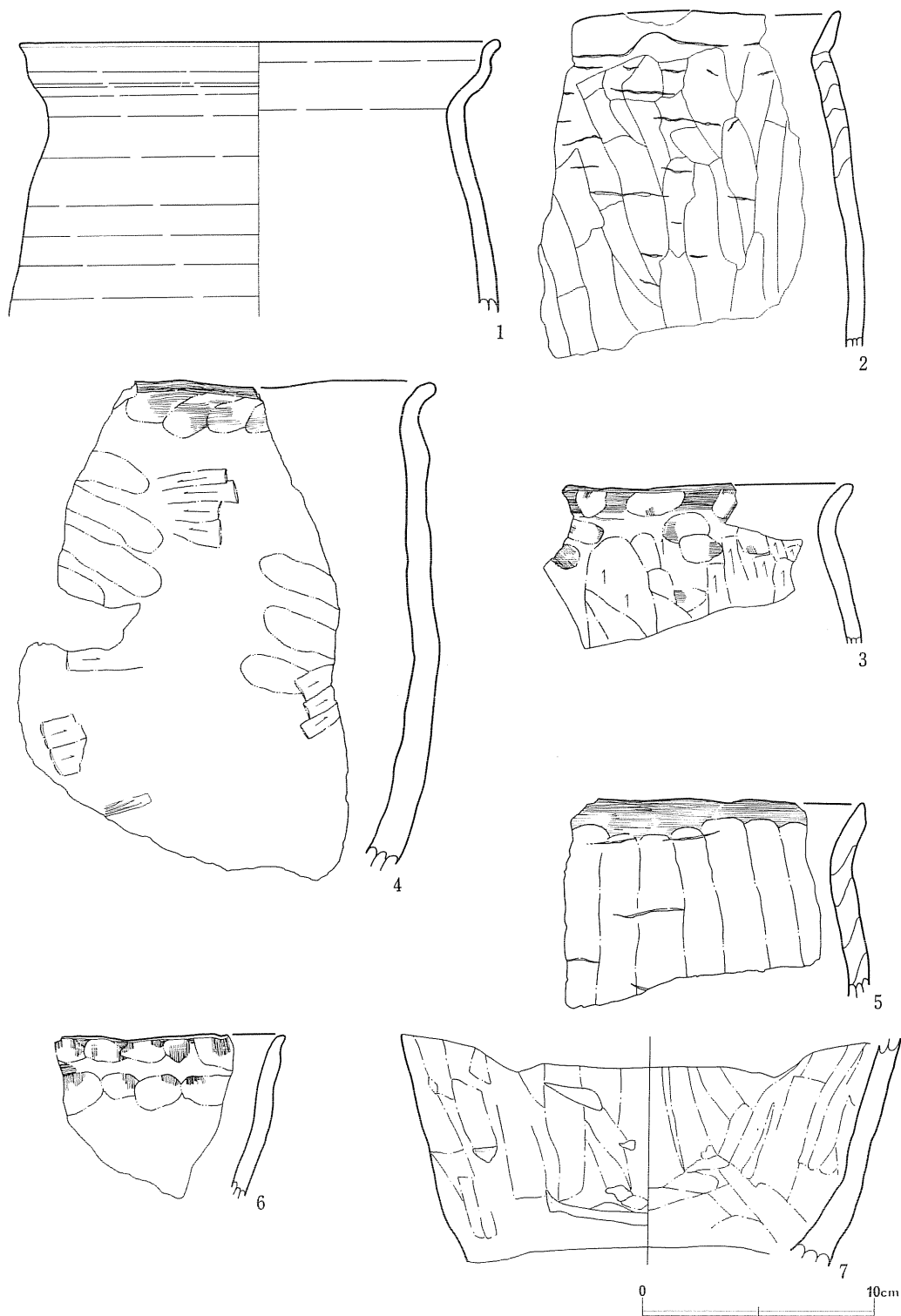
第171図－5は口縁部の内外面を指頭（親指と人差指）で挟み込み横位ナデ調整を行っている。外面は下から上へのケズリ調整を行うが、調整の単位はさ程明確ではない。成形時の粘土紐の継ぎ目が僅かながら観察されるが、それによれば粘土紐は太さ12～15mm程度のものを用いている。体部内面は指頭による横位のナデを施した後、篋状の工具によって縦位のナデ（器面上の砂粒の移動がない）を何度も繰り返している。内面での粘土紐の継ぎ目は丹念に行われた調整で全く観察されない。第171図－6甕底部では、底部周縁に横位のケズリ調整を施し、体部下半は幅の広いケズリ調整を縦位に行っている。第172図－1は内外面とも回転台による器面調整を行い、同時に口縁部を「く」の字形に作り出している。成形時の粘土紐の継ぎ目は観察できないが、接合した破片によれば口縁～頸部は体部に接合された1本の粘土紐を挽き出して作られたものようである。第172図2～6は口縁部を指頭によって横位にナデ、体部以下をケズリ調整と指頭のナデ調整によって仕上げている。頸部を「く」の字形に外反させるにあたっては、指頭を断続的に押しあてている。2の器面に残されて粘土紐の接合痕からは、やはり11～12mm程度の比較的小さい粘土紐を継ぎ合わせることによって成形したことが窺える。第173図－1は水挽きによって成形していった小形土器である。底部は一旦回転糸切りによって切り離した後、厚さ10mm程度の粘土板を貼り付けて接合している（図版101）。他に第173図－5の甕では胎土中に混入されていた靦が土器の焼成によって抜け落ちた痕跡を残している。口縁部外面では1粒、内面では3粒の靦痕が認められる（図版101）。

土製品（第173図－6・7、図版101）。

2点の土錘が出土している。6の1点は大形のもので外面に先端の鋭利な篋状工具によって



第171図 第5号竪穴住居跡出土遺物(1)

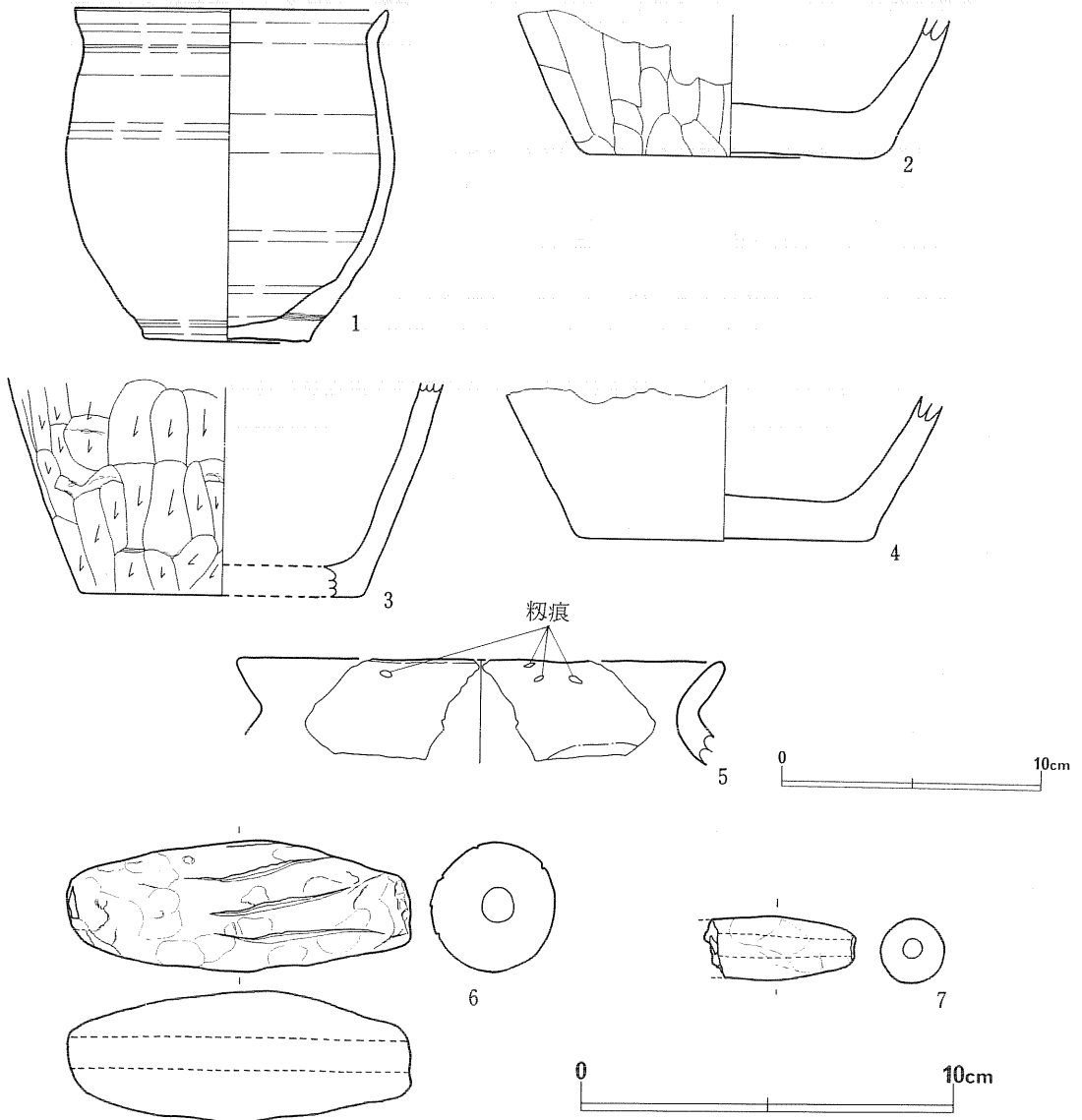


第172図 第5号竪穴住居跡出土遺物(2)

5条の沈線を施している。製作にあたっては径8mm程の棒に粘土塊を巻き付け、それを握りながら成形したようである。握った際に残された凹凸がそのままに残される。7の小形の土錘は成形後ナデ調整を行って表面を比較的平滑に仕上げている。

第3号竪穴住居跡内出土遺物（第174図-1、図版101）

調整時に器面にあてた工具の痕跡が、7～8mmおきに筋となって残る土師器坏である。底部は成形された口縁～体部を一旦切り離した後に、再度回転台上の粘土塊に接着し改めて回転糸切りによって切り離している。底部内面には接着痕を調整した凹凸が残されている。回転糸切



第173図 第5号竪穴住居跡出土遺物(3)

りは右回転する粘土塊に左巻きに巻きつけた糸によって行われたものである。灰褐色を呈する。

第6号竪穴住居跡内出土遺物（第174図-2～8、図版101、図版102）

土師器坏（第174図-2～4、図版101、図版102）

口縁～体部のカーブが膨らみをもって降りるもの（2・4）と外反するものがある。底部の切り離しは右回転する回転台で左巻きに巻きつけた糸によってなされたものである。褐色～明褐色を呈する。4はカマド内で6の甕とともに支脚として用いられていた坏である。

土師器甕（第174図-5～8、図版102）

体部～底部の破片5・6は外面を上から下へのケズリ調整、内面をナデ調整によって仕上げている。底部には木葉痕が残される。7・8の口縁～体部の破片は外反する口縁の内外を指頭によってナデ調整し、その後体部のケズリ調整を下から上へ行っている。体部内面は摩滅し判然としないが、微かにナデ調整を行った擦痕が残る。

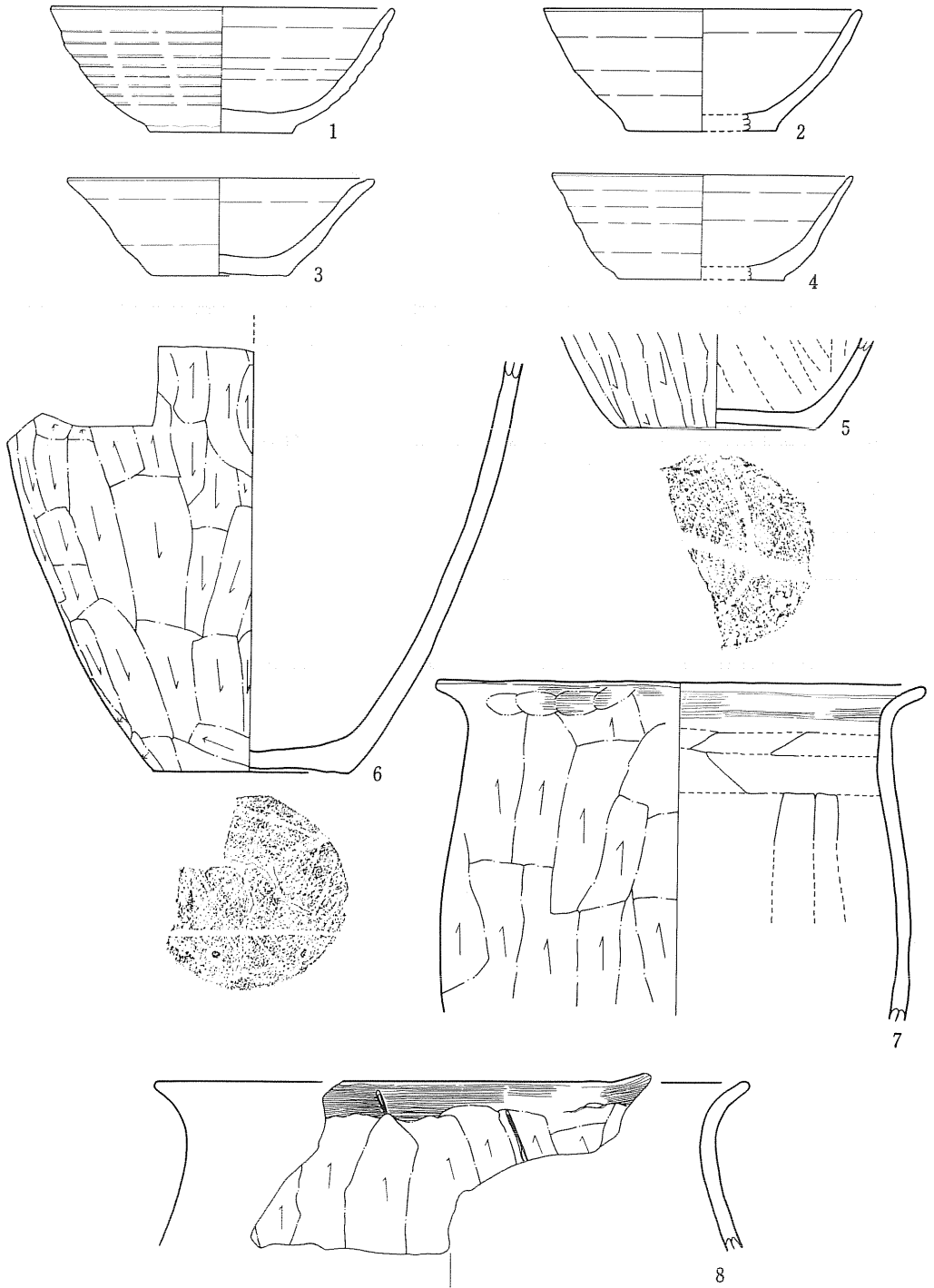
第7号竪穴住居跡内出土遺物（第175図～第178図1・2、図版102、図版103）

土師器坏・皿（第175図-1～6、図版102）

1は覆土の上位から出土した。他の坏に比べて器高があり体部のカーブも大きく膨らむ。底部にはやや外側へ張り出した高台が付けられる。高台の調整は土器を倒立させて行っており、底面には回転糸切り痕を消すように残された篋状工具の痕跡が渦巻状に認められる。口縁部1箇所成形後、器をゆがませて作り出した片口部が作られ、その部分に黒色の煤が吸着している。外面には褐色を呈するが、内面には黒色処理が施されている。2の底面は口径の約1/3ときわめて小さく、体部下半で最も膨らむ。3に器壁の厚さが2mmと極く薄いものである。6の皿は坏の体下半～底部を再利用したものであろう。底部の切り離しは2・4～6とも右回転する粘土塊に左巻きに巻きつけた回転糸切りによる。色調は3が明褐色を呈する他は2・4～6とも灰褐色である。

土師器甕（第175図-7～第177図、図版102、図版103）

第175図-7はロクロ水挽きによって成形・調整され、外面に明瞭な稜線が残る。底部近くで10mm前後の厚さを測る他は概して薄く作られており、頸部の屈曲部では4mm程度の厚さしかない。8は口縁上端を指頭で挟み込んでナデ調整すると同時に垂直に立ち上がらせている。頸部から体部上半までは指頭による粗いナデ、それ以下を上から下へのケズリによって調整している。内面は口縁～頸部が横位のナデ調整、それ以下が縦位のナデ調整でいずれも指頭によるものである。9は丸味をもった口縁部をやや外反させて、指頭による横位のナデ調整を施し、その後頸部～体部にかけて下から上へのケズリ調整を行っている。内面は篋状工具による横位のナデ調整が行われ、ところどころ工具の動きを止めた痕跡が認められている。第176図-1・2はほぼ同じ形の小形の甕である。頸部の屈曲部には指頭を断続的に押しあてた痕跡が残る。



1 : 第3号竖穴住居跡
2-8: 第6号竖穴住居跡

第174図 第3号・第6号竖穴住居跡出土遺物

体部の調整も指頭によるナデ調整である。底部のみが篋状工具によって平滑に仕上げられている。3は球形に近い体部をもつ甕である。口縁上端は指頭による横位のナデとともに垂直に立ち上がらせている。頸部には粗い指頭のナデ調整を行い、体部は上から下へのケズリ調整で仕上げている。底部には成形時に敷かれた砂粒の痕跡が残る。内面では口縁～頸部が横位のナデ、体部が斜位、縦位がナデを施している。明瞭な工具の痕跡が残らないことから指頭によるものと判断される。4および第177図-1は大形、長胴という点以外は、殆んど1・2と同様の製作技法によって作られている。内外面とも調整には指頭によるナデを主体とし、一部にケズリを加えている。頸部には指頭の圧痕列が並び、内面でははっきりした稜線が残される。第177図-2～4の底部破片のうち4の底面は砂粒の痕跡が残されている。

土製支脚（第178図-1、図版103）

カマド右袖部から出土した。計7本の粘土紐を継ぎ合わせて作っている。全体を成形した後で使用時に破裂しないためのV字形の切れ込みを2箇所施している。

須恵器甕破片（第178図-2）

住居跡中央部覆土中から出土した。外面はタタキ目残り、内面は指頭によるナデが施される。胎土は青灰色、表面は暗褐色に焼成されている。

第8号竪穴住居跡内出土遺物（第178図-3～第181図、図版103、図版104）

土師器坏・皿（第178図-3・4、図版103）

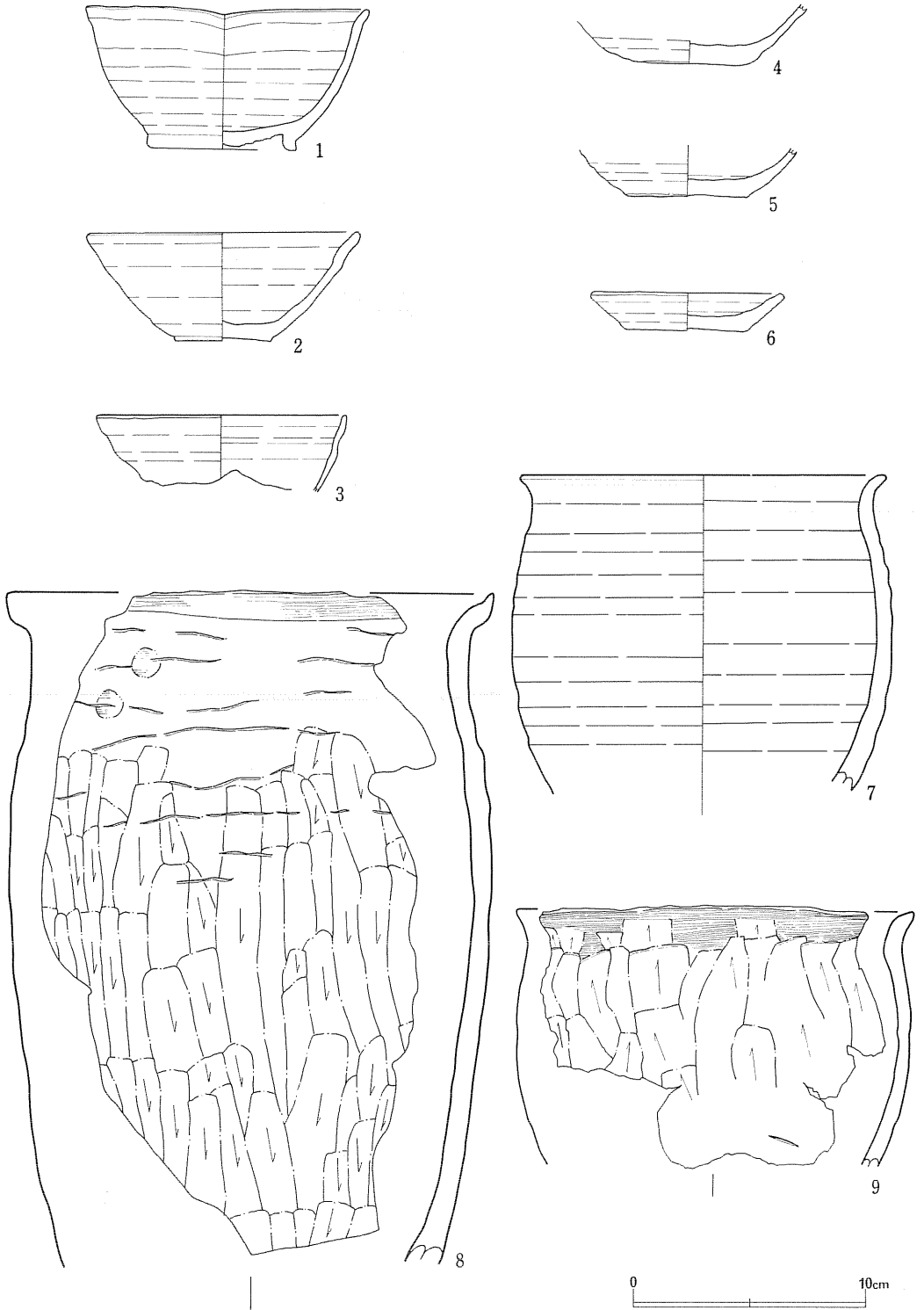
3の皿は坏に比較しやや厚手に製作されている。口縁から底部までの間は直線的に開くが、底部はさらに厚さを増して垂直に立ち上がる。底部の切り離しは右回転、右巻の糸掛けによる回転糸切りによる。4の坏は底部の切り離し後、周縁にナデ調整を施している。右回転する回転台から切り離されている。

土師器甕（第178図-5～第181図-5、図版103、図版104）

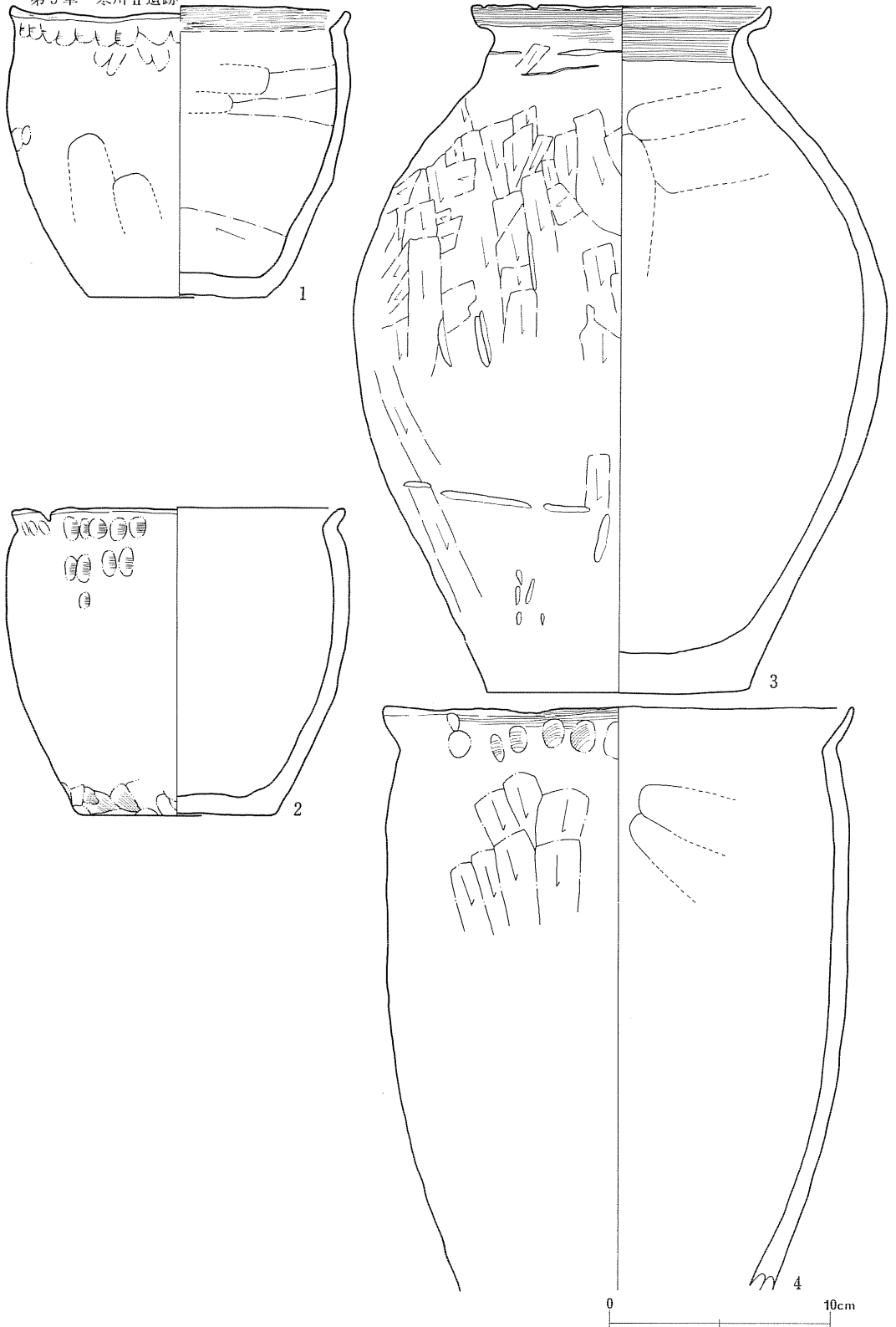
第178図-5の口縁～体部上半は成形後回転台上で調整され、これとは別に成形された体部下半と接合後タタキ目が施されている。6～8は体部下半の破片であるが、内面には鈎形のあて具痕が残る。体部下半～底部は砲弾形になるものと思われる。その他の甕は口縁部に指頭による横位のナデを施し、体部上半では下から上、下半では上から下のケズリ調整を施している。口縁部が比較的大きく外反するもの（第179図-1～3・7・8、第181図-2・3）と、短かく直立するもの（第179図-6、第181図-1・4・5）とがある。この他、ロクロ水挽成形による小形の甕（第179図-9）もある。

第11号竪穴住居跡内出土遺物（第181図-6・7、図版104）

6は口縁～体部上半が直線的に開き体部下半で緩く膨らむ坏である。底径が口径の約1/3と小さい。器面はこの二次的な火熱によってところどころ剥落している。底部は回転糸切りによ



第175図 第7号竪穴住居跡出土遺物(1)



第176図 第7号竖穴住居跡出土遺物(2)

って切り離されているが、摩滅が著しく回転方向、糸掛けの方向は判然としない。色調は明褐色を呈する。7は口縁～体部下半まで直線的におり、底部近くで垂直に立ち上がる坏である。底部の切り離しは右回転、左巻きの糸掛けによる回転糸切りである。色調は灰褐色を呈する。

第12号竪穴住居跡内出土遺物（第181図－8・9、図版104）

8・9とも体部下半で膨らむ坏である。口縁部がやや直線的に開く傾向にある。底部は右回転左巻き糸掛けの回転糸切りによって切り離されている。色調は両者とも褐色～明褐色を呈する。

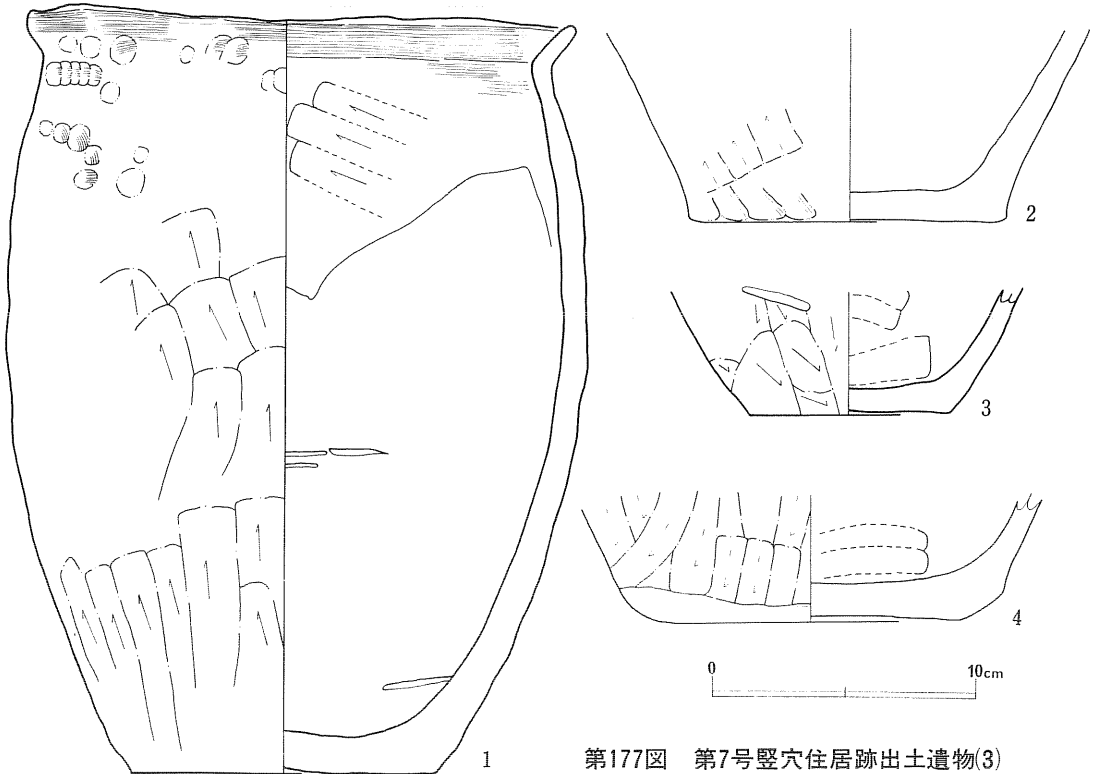
第13号竪穴住居跡内出土遺物（第181図－10・11、第184図－7、第185図－1・3、図版104）

土師器坏（第181図－10・11、図版104）

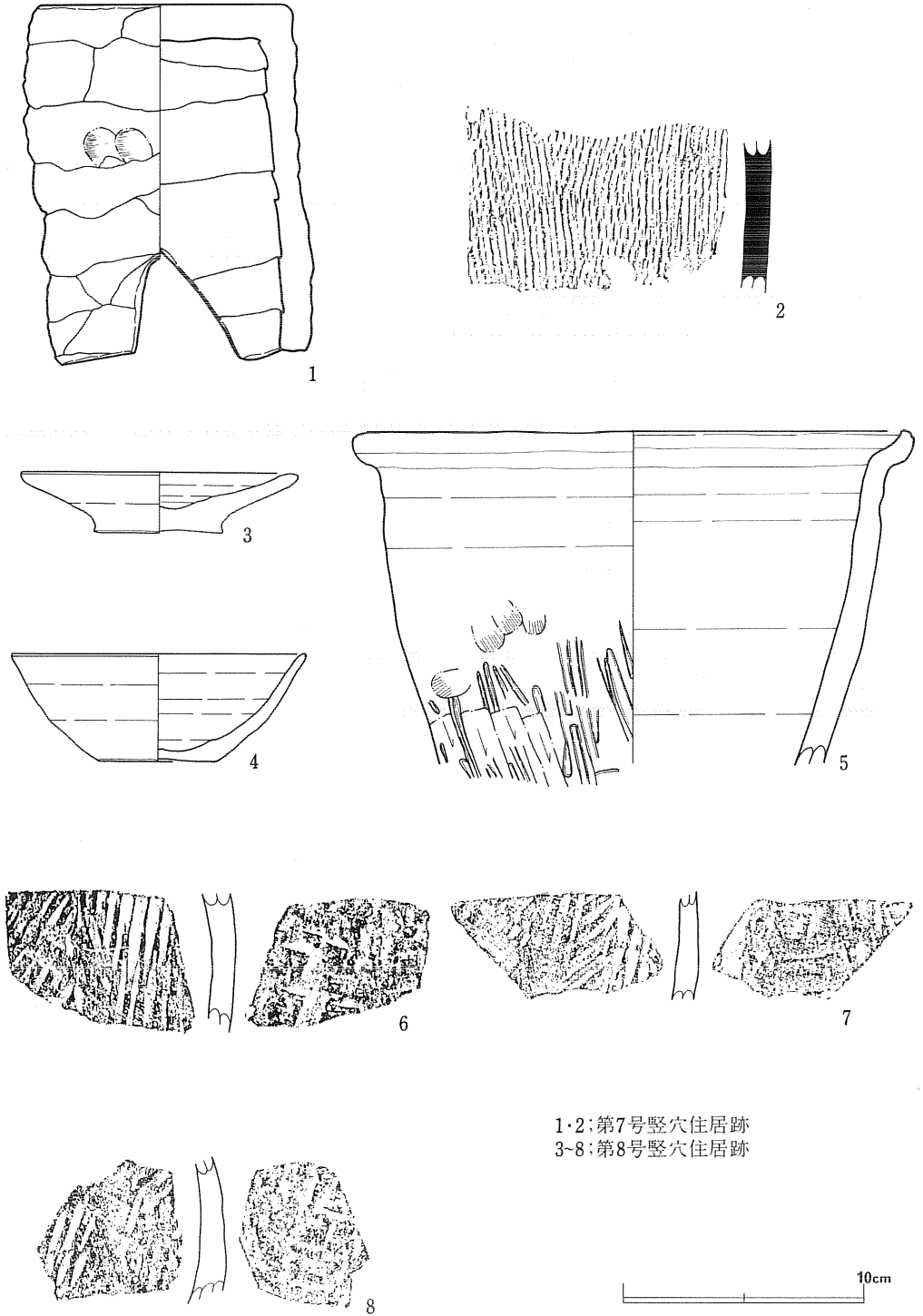
10は口縁～体部上半まで直線的におり、体下半部が膨らむ器形をもつ。体部に数条の稜が明瞭に残されている。底面は右回転、左巻きの糸掛けの回転糸切りにより、切り離されている。色調は暗褐色～褐色を呈する。11は口縁～体部が緩い弧を描いておる坏である。色調は褐色を呈する。

土師器甕（第184図－7、第185図－1・3）

第184図-7は口縁部の大きく開く器形をもつ。口縁部には横位のナデ調整が施され、頸部の屈曲部から体部にかけては縦位のケズリ調整が行われる。第185図-1は口縁部でナデ調整、体部以下で表裏面とも刷毛目調整が施されている。刷毛目調整は表面で縦位、裏面で横位の方向をとる。

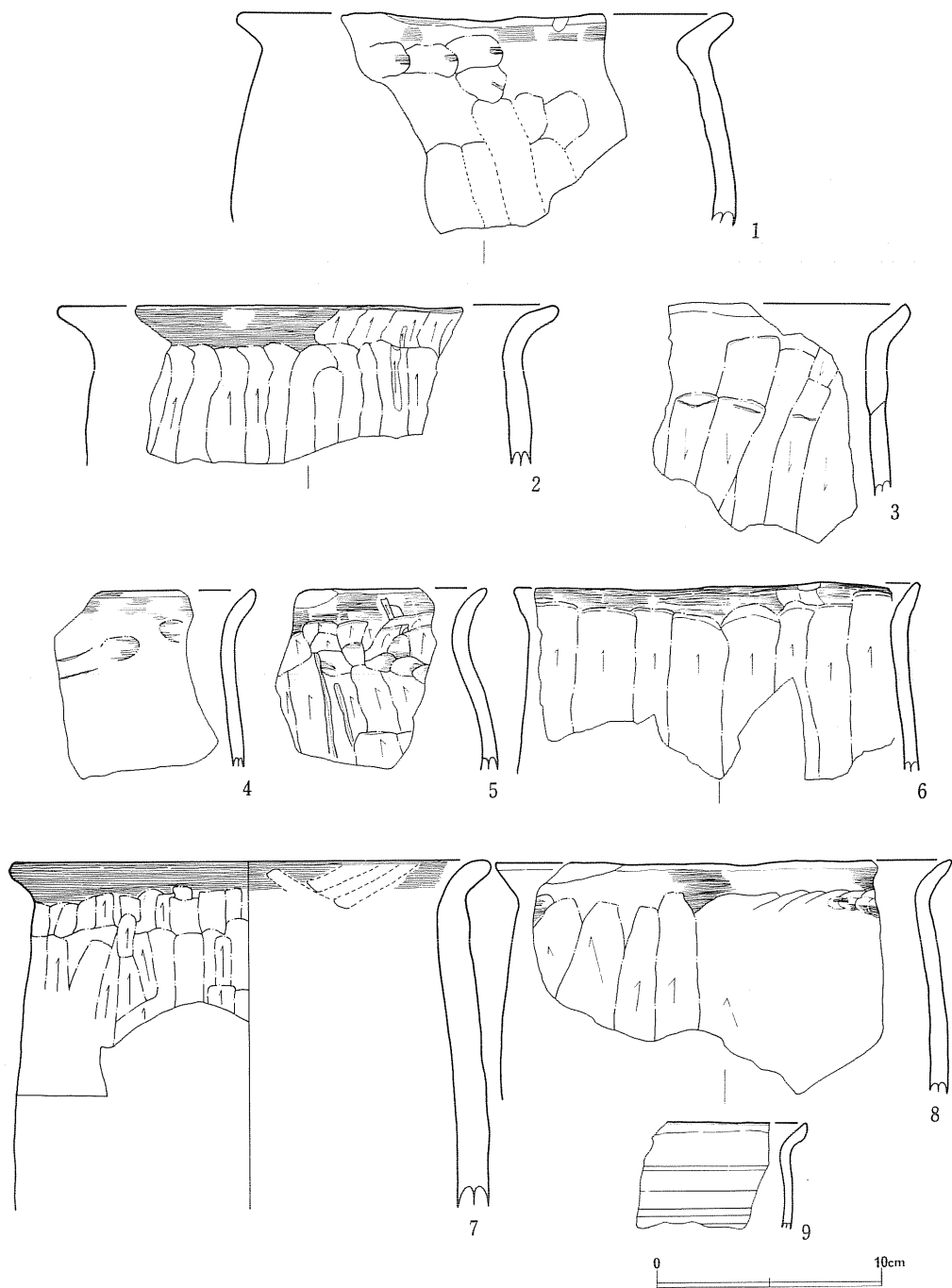


第177図 第7号竪穴住居跡出土遺物(3)

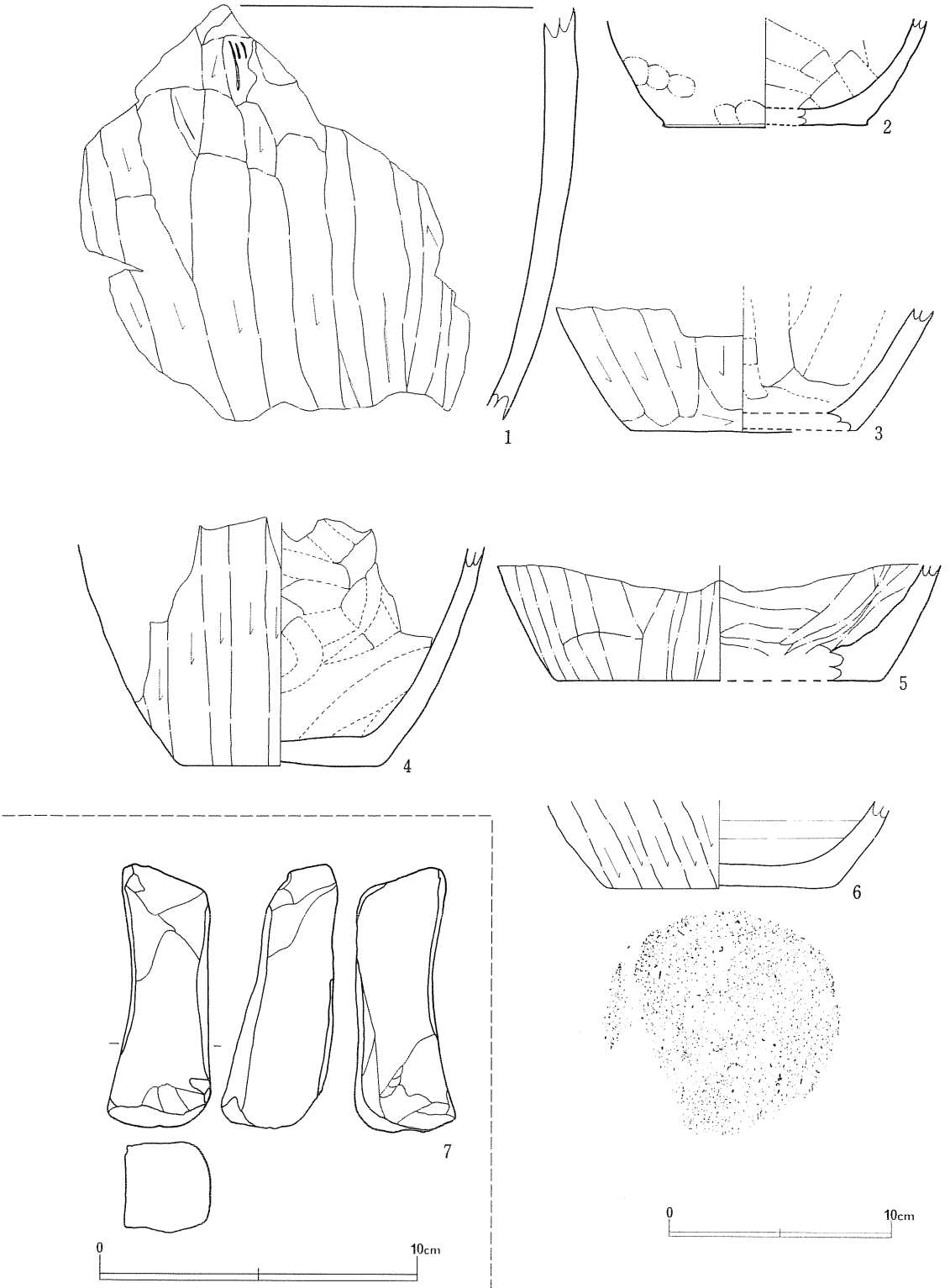


1・2:第7号竖穴住居跡
3-8:第8号竖穴住居跡

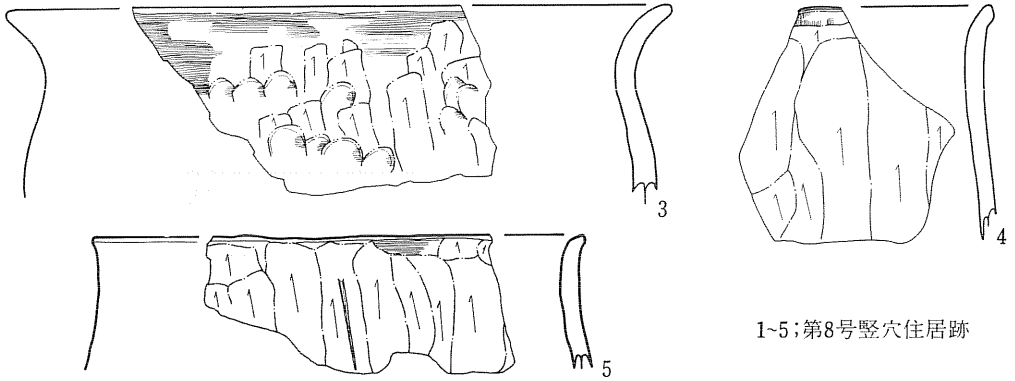
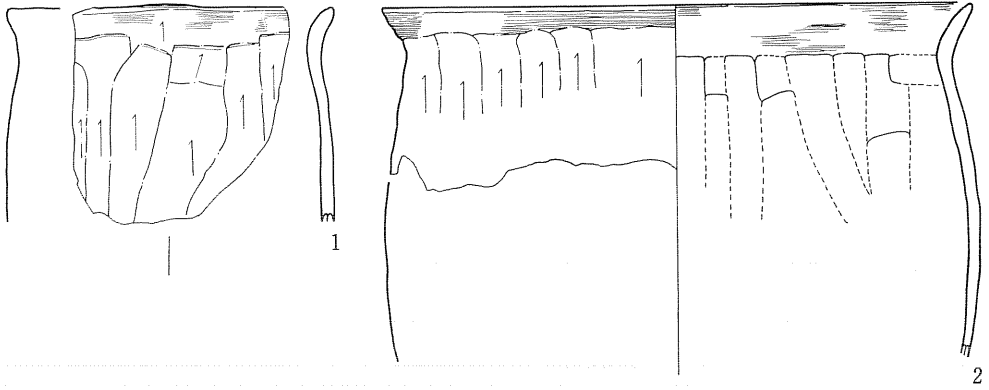
第178図 第7号竖穴住居跡出土遺物(4)・第8号竖穴住居跡出土遺物(1)



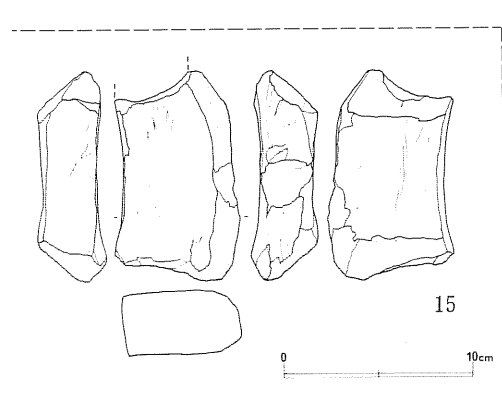
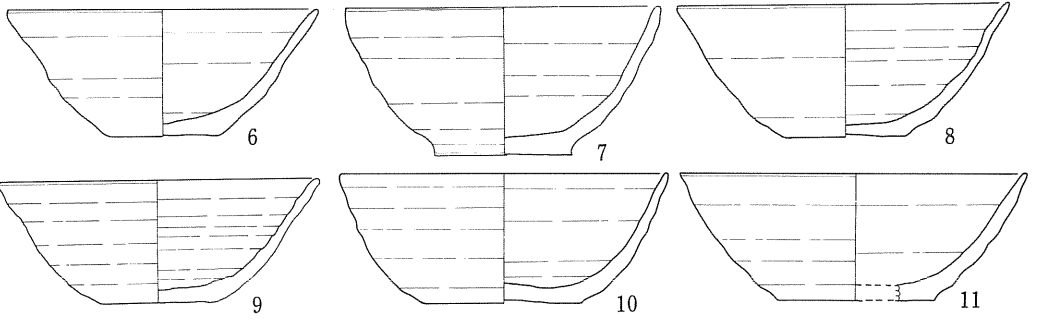
第179図 第8号竪穴住居跡出土遺物(2)



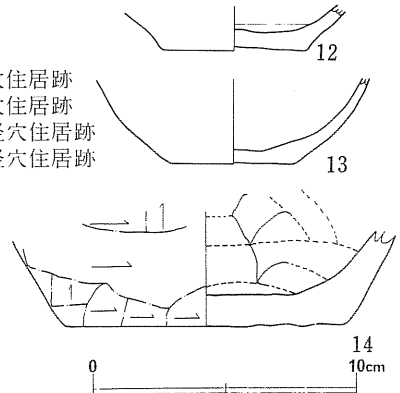
第180図 第8号竪穴住居跡出土遺物(3)



1~5;第8号竖穴住居跡



6・7;第11号竖穴住居跡
8・9;第12号竖穴住居跡
10・11;第13号竖穴住居跡
12~15;第14号竖穴住居跡



第181図 第8号竖穴住居跡土遺物(4)、第11号~第14号竖穴住居跡出土遺物

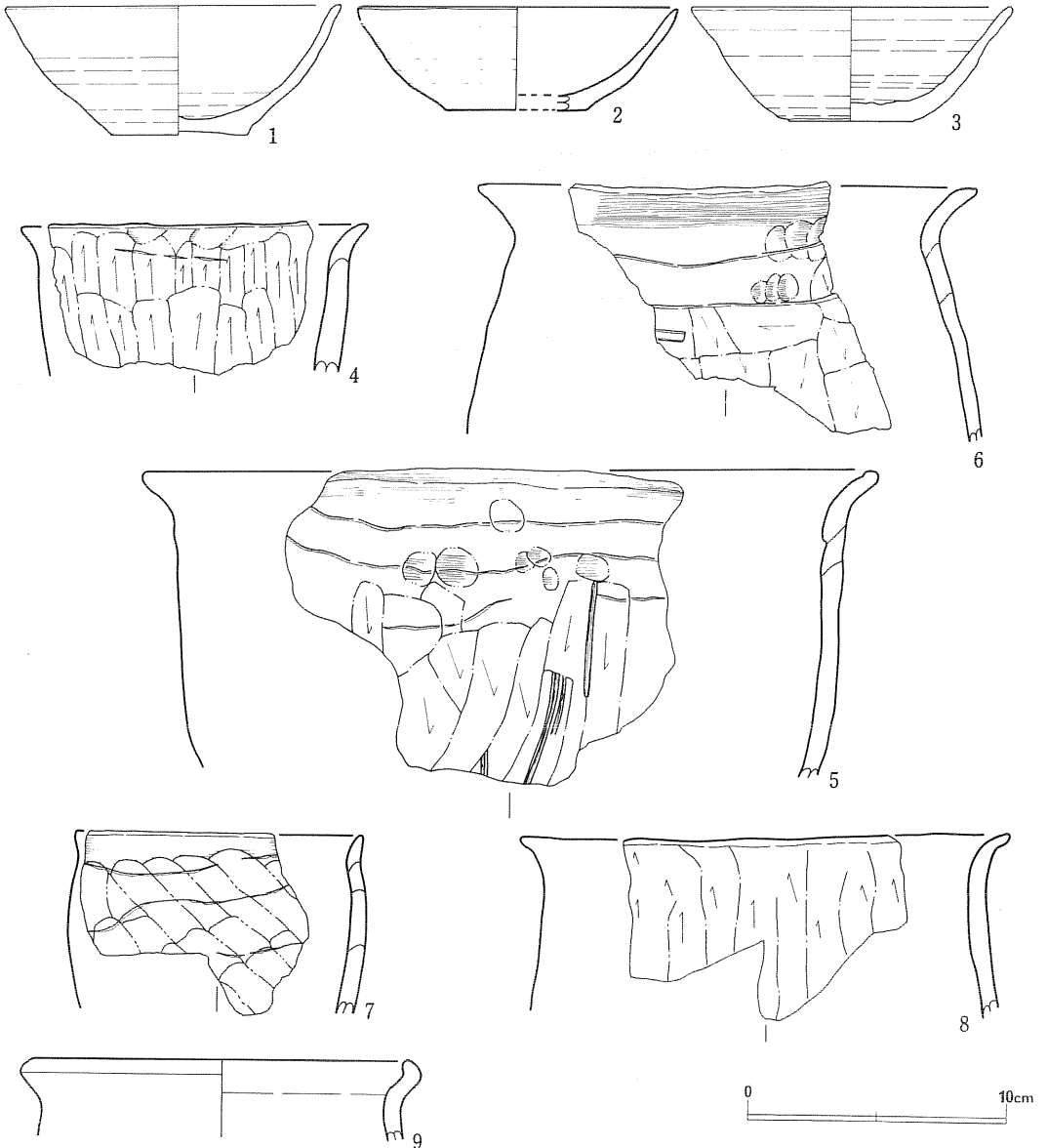
第14号竪穴住居跡内出土遺物（第181図-12~15、第184図-4~6）

土師器坏（第181図-12・13）

いずれも体部下半~底部の破片である。12は暗褐色、13は灰褐色を呈する。底部の切り離しは12が右回転、左糸掛けによる回転糸切りによる。13は摩滅が著しく不明。

土師器甕（第181図-14、184図-4~6）

口縁部を含む資料には、口縁近くで横位にナデ調整し（第184図-4・6）、体部以下を縦位にケズリ調整するもの（第184図-6）と、口縁~体部まで回転台を用いてナデるもの（第184

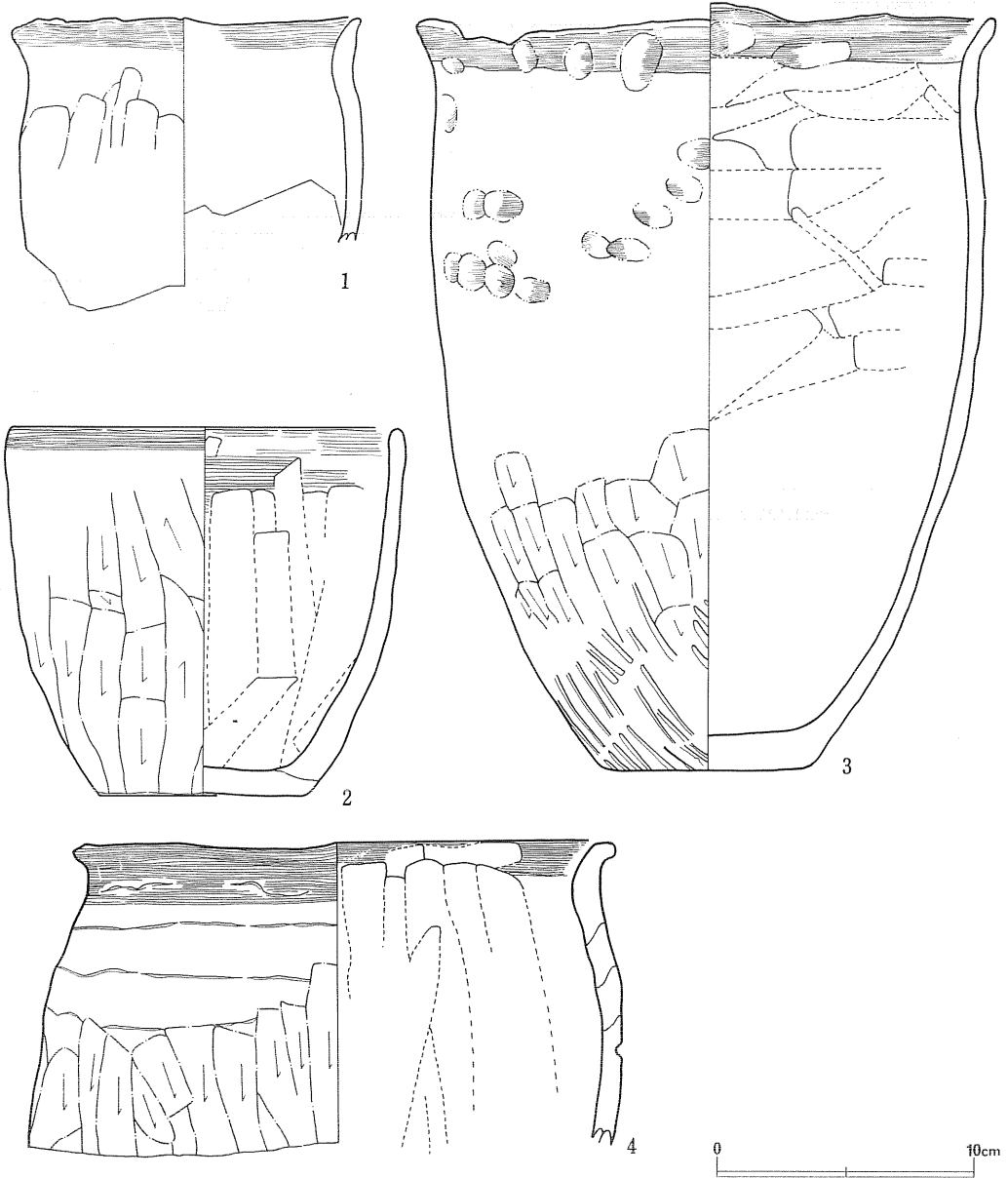


第182図 第15号竪穴住居跡出土遺物(1)

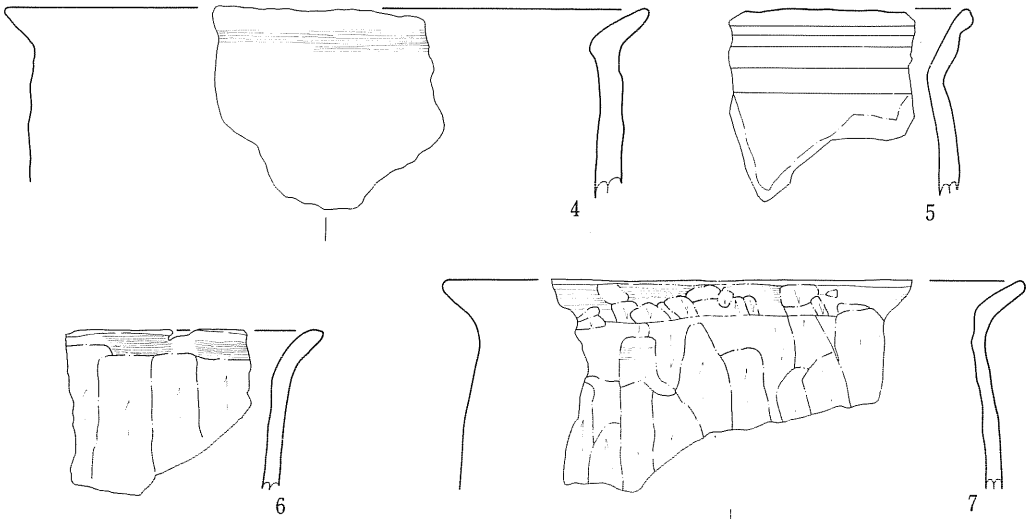
図-5)とがある。第181図-14の底部近くの資料では表面に横位のケズリ調整が認められ、底面には成形時に敷かれた砂粒の痕跡が残されている。

砥石 (第181図-15)

凝灰岩製の砥石である。表裏面と一方の側面を主な砥面として使用している。表裏面には刃物の切先で搔いたような傷が残されている。側面のうち広い砥面に作られていない側でも、刃物をあてた痕跡が筋となって残る。



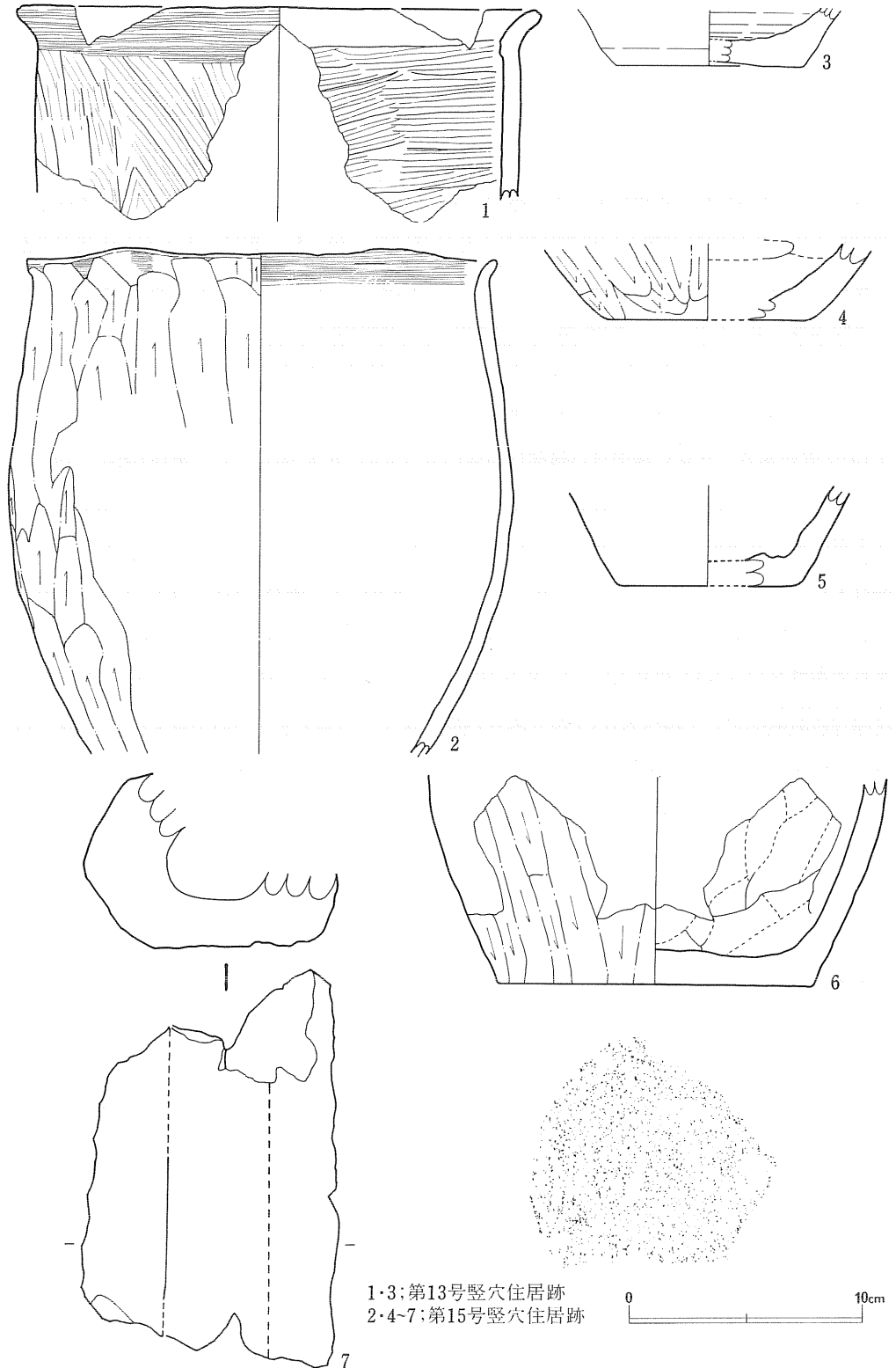
第183図 第15号竪穴住居跡出土遺物(2)



1-3: 第15号竖穴住居跡
4-6: 第14号竖穴住居跡
7: 第13号竖穴住居跡

0 10cm

第184図 第13号～第15号竖穴住居跡出土遺物(3)



1・3; 第13号竖穴住居跡
2・4-7; 第15号竖穴住居跡

第185図 第13号・第15号竖穴住居跡出土遺物(4)

第15号竪穴住居跡内出土遺物（第182図～第185図、図版104、図版105、図版106）

土師器坏（第182図-1～3、図版104、図版105）

1は住居跡柱穴P₁上から出土した。体部中央で僅かに膨らみ、体下半部で緩く屈曲する器形をもつ。底面の切り離しは右回転、左巻きの糸掛けによる回転糸切りによる。色調は明褐色である。2・3はいずれも灰褐色を呈する破片である。2はやや器高が低いが、1とほぼ同様の器形を示す。3は口縁が僅かに外側に反り、体下部で緩く膨らむ。底径が小さく、体部下半から底部へは緩い屈曲をもって連続する。2・3とも摩滅しており、底部の切り離し法は不明。

土師器甕（第182図-4～第185図-6、図版105、図版106）

口径が15cm以下の小形の甕には、回転台を用いて器面調整を行うもの（第182図-9）、口縁を横位にナデ調整し、体部は縦位のケズリ調整かナデ調整するもの（第182図-4・7、第183図-1・2）の2者がある。さらに後者は口縁部に屈曲のあるもの（第182図-4・7、第181図-1）と、口縁～体部にかけてほぼ直立するもの（第183図-3）の2通りの器形がある。口径が15cmを超える大形の甕の器面調整には、回転台を用いるもの（第184図-5）と、口縁直下から縦位のケズリ調整を行うもの（第182図-8、第185図-2）、口縁は横位のナデ調整、体部は縦位のケズリ調整を行うもの（第182図-5・6、第183図-3・4、第184図-2～4・6）がある。他に体部下半にタタキ目の調整を行うもの（第183図-3、第184図-1）がある。他の住居跡出土の資料同様、口縁～体部の調整法について見た場合、小形の甕と大形の甕とで共通するのは回転台を用いる若干例と口縁部横位ナデ、体部縦位ケズリ調整例の2通りである。本竪穴住居跡でも後者例が最も多い。

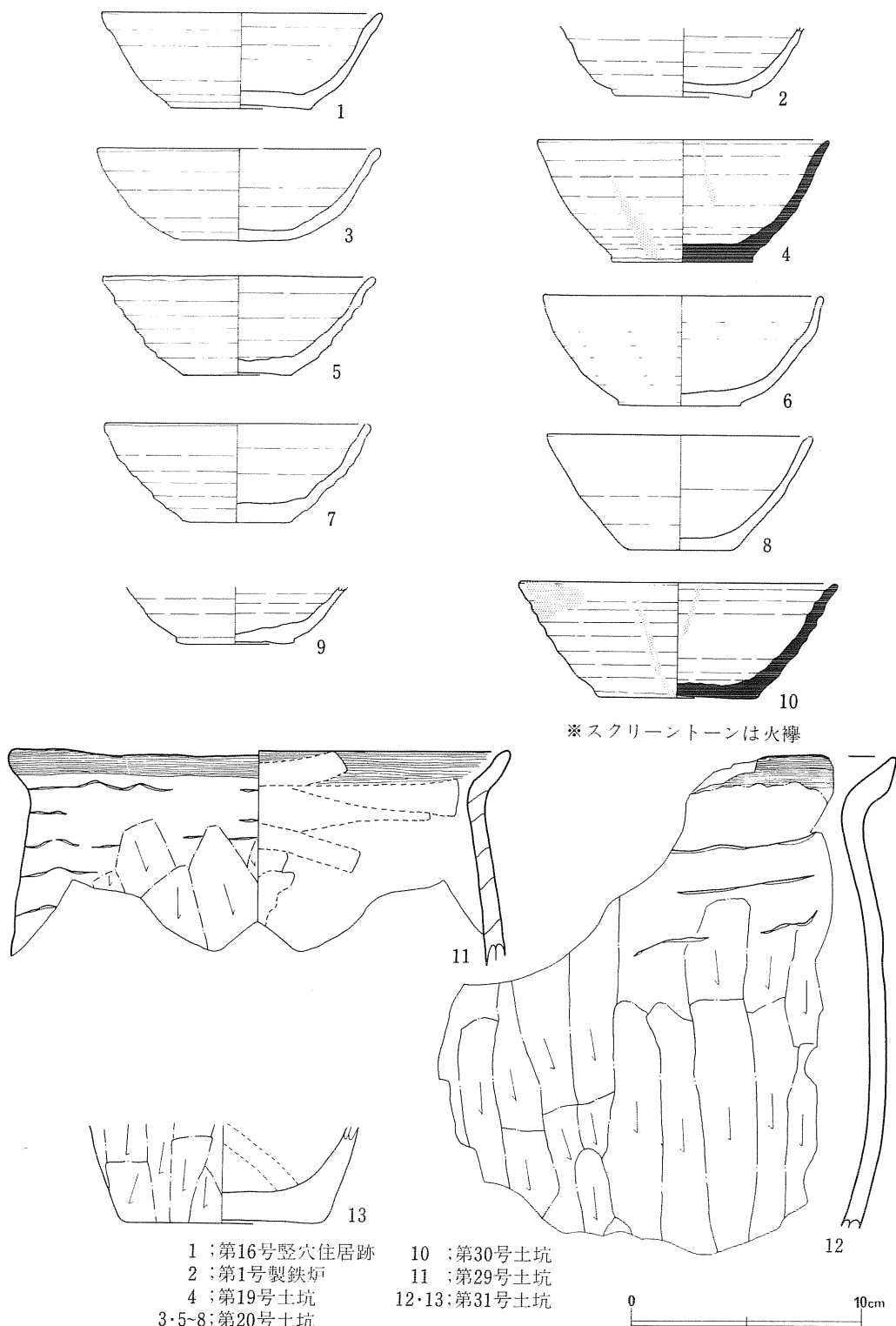
第183図-3は、口径22.5cm、器高30cm、底径8.1cmを測る。口縁部の内外面は指頭による横位のナデ調整が施される。体部上半は外面で指頭による粗いナデ、内面で篋状工具による粗いナデ調整が行われている。内面の口縁部横位調整の部分と体部の篋状工具でのナデ調整部分の境は1条の稜線となって巡る。体部下半の外面はケズリ調整を上から下への方向で施した後、底部をかけてタタキ目が施されており、口唇上にはこれと対応して甕を倒立させた時の潰れた痕跡が残っている。

第184図-1は、口径22.5cm、器高推定34cmを測る。口縁部から体部上半までは回転台端を使用して器面調整が行われるが、体部下半から底部にかけてはタタキ目が施されている。器形は所謂砲弾形を呈するが、体部の中央で僅かながらくびれる。このくびれ部分で内面の調整が回転台を使用したものから縦位の篋状工具によるナデ調整へ交替してるため、別々に製作された口縁～体部上半と体部下半～底部がこの部位で接合して1個体の甕に製作されたものと考えられる。

第185図-6の甕の底部資料では底面に砂粒の痕跡が残されている。

轆羽口（第185図-7、図版106）

カマド内から出土した。二次的な火熱によって非常に脆くなっている。胴径推定10cm、内径



- 1 ; 第16号竪穴住居跡 10 ; 第30号土坑
 2 ; 第1号製鉄炉 11 ; 第29号土坑
 4 ; 第19号土坑
 3・5-8 ; 第20号土坑
 9 ; 第34号土坑
 12・13 ; 第31号土坑

第186図 平安時代土坑内出土遺物

推定4.2cmを測る。胴部の側面には幅4.5cmの平坦な面が作られている。

第16号竪穴住居跡内出土遺物（第186図－1、図版106）

口縁下に低い段をもつ土師器坏である。体部下半で膨らむ。破片のため底部の切り離しは不明である。灰褐色を呈する。

第1号製鉄炉前庭部土坑内出土遺物（第186図－2、図版106）

口縁部を欠損するが、体部下半に緩い膨らみをもつ土師器坏である。底部の切り離しは右回転、左巻きの糸掛けの糸切りによる。灰褐色を呈する。

第19号土坑内出土遺物（第186図－4、図版106）

体部の中程で最も膨らみ、底部近くでごく短かく垂直に立ち上る須恵器坏である。底部の切り離しは右回転、左巻き糸掛けの回転糸切りによる。全体に灰色を呈するが、内外面に火襷による黒色の斑文が認められる。

第20号土坑内出土遺物（第186図－3・5～8、図版106）

3は口縁部から底部まで緩い弧を描いておりの器形をもつ。また、5は体下半部に緩い膨らみをもち、6・7は体上半部で屈曲して下りる。8も体部に屈曲をもつが、6・7に比べてその部位は下になる。8を除いて底部の切り離しは、右回転、左巻きの糸掛けの回転糸りによる。8については磨滅しており不明。色調は、3が赤褐色、5・7が灰褐色～暗褐色、6・8が明赤褐色を呈する。

第29号土坑内出土遺物（第186図－11）

口縁部内外面に指頭による横位のナデ調整、体部に上から下へのケズリ調整を施した土師器甕である。ケズリ調整の行われていない部位では粘土紐を積み上げた痕跡が明瞭に残る。

第30号土坑内出土遺物（第186図－10）

口縁～底部までほぼ直線的に降りる須恵器坏である。破片のため底部の切り離し法は不明。灰色を呈する。

第31号土坑内出土遺物（第186図－12・13）

12は口縁部に指頭による横位のナデ調整、体部に縦位のケズリ調整を施した土師器甕である。口縁部の横位のナデはほぼ垂直に近く立ち上がる口縁部外面と、内面に限られる。体部のケズリの方向は上から下である。12は小形の土師器甕破片である。外面に上から下へのケズリ調整が施される。

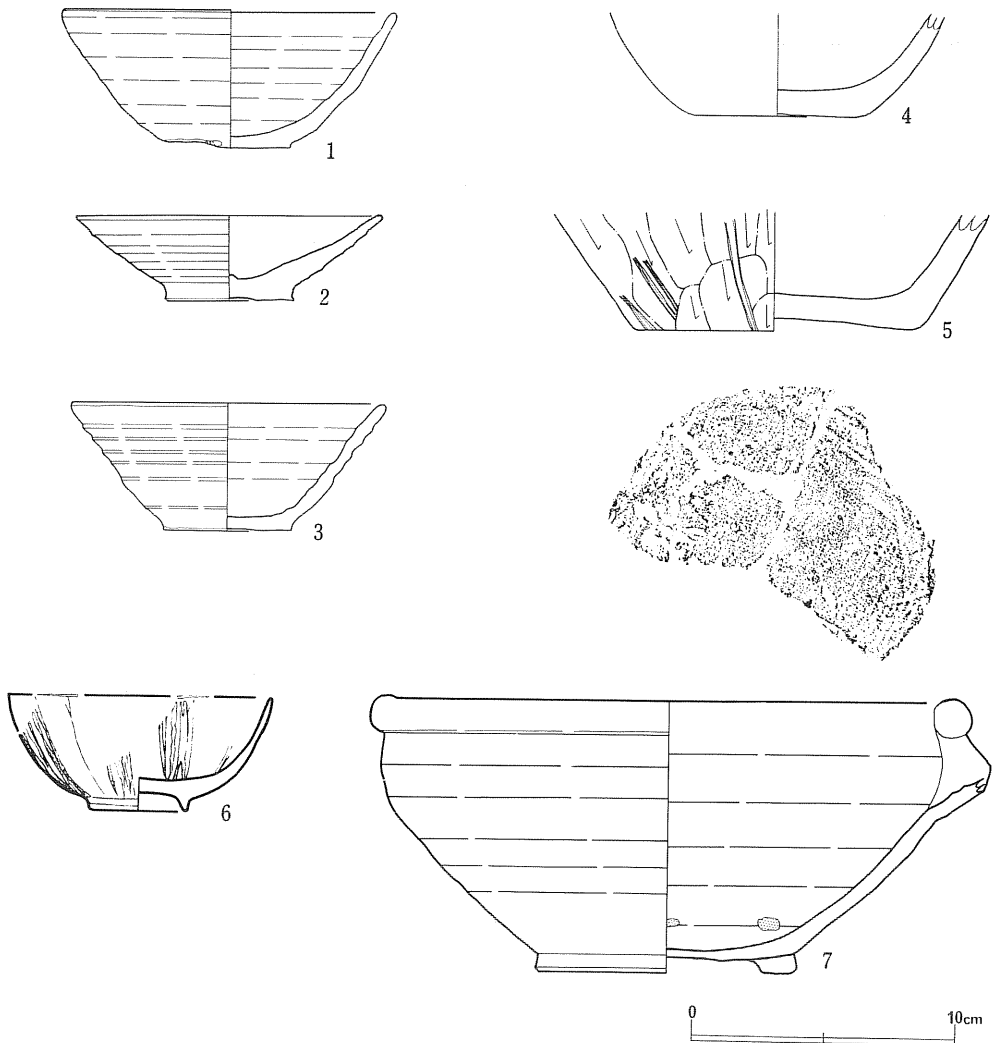
第34号土坑内出土遺物（第186図－9、図版106）

口縁～体上半部を欠損するが、体部下半に緩い膨らみをもつ土師器坏である。磨滅が著しく底部の切り離し法は不明。灰褐色を呈する。

遺構外出土の平安時代の遺物（第187図-1～5、図版106）

土師器坏、皿（第187図1～3、図版106）

1は口縁部から僅かに弯曲しながらおりの器形をもつ。底面の切り離しは右回転、左巻きの糸掛けによる回転糸切りによる。焼成時に重ね焼きされた結果、体部上半は褐色、下半部は暗灰色を呈する。3は体部下半で緩く膨む器形をもつ。器面調整に工具を用いた結果、器面には僅かながら段差をもった稜があらわれている。底部の切り離しは破片であるため不明。2の皿は口縁～体下半部が直線的に開き、底部で短く立ち上がる器形をもつ。器面調整時の稜が残る。底部の切り離しは右回転、左巻糸掛けの回転糸切りによる。類似した皿は第8号竪穴住居跡からも出土しているが、より肉厚の器壁をもつ。



第187図 平安時代以降の遺構外出土遺物

土師器甕（第187図-4・5）

いずれも底部の破片である。5の外側は上から下へのケズリ調整が施され、底面の外周には砂粒の痕跡が残されている。

4、平安時代を降る遺構と遺物

平安時代よりも新しい時期の遺構、遺物として溝、土坑、陶磁器が検出されている。

溝は道路北側の調査区で2条、南側斜面調査区で7条、付け替え道路部分の調査区で2条検出された（付図2）。これらのうち道路北側調査区の溝〈SD86〉は南側斜面調査区の溝〈SD32〉と連絡するものであろうことが、配置図を作成した時点で推定された。また溝〈SD53〉と溝〈SD54〉は確認時には別々の遺構として検出されたのであるが、覆土を掘り上げた結果底面のレベルが相方とも同じ高さにあること、どちらも第5号土坑を切ることなどからこれも連続したものであると判断された。したがって、調査区全体では9条に集約される。これらの溝と縄文時代土坑、平安時代竪穴住居跡、同炭窯との切り合いの関係は以下の通りである。なお、いずれの例も溝が他の遺構を切っている。

溝〈SD71〉－（第15号竪穴住居跡、第2号土墳墓）、溝〈SD86〉－第3号竪穴住居跡

溝〈SD02〉－（第1号土坑、第2号土坑、第18号土坑、第19号土坑、第21号土坑）

溝〈SD31〉 \ 溝〈SD32〉 \
 第5号竪穴住居跡、溝〈SD53〉－（第5号土坑、第7号土坑、第11号土坑）
 溝〈SD32〉 / 溝〈SD54〉 /

溝〈SD19〉－第6号土坑、溝〈SD31〉－第2号炭窯

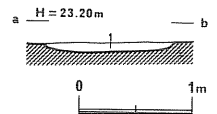
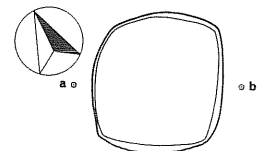
第36号土坑（第188図）

[検出地区] MB55グリッド。

[確認状況] 地山面上で炭化物の多量に混入した黒褐色土の略方形プランを確認。

[規模・形態] 各々の辺の中点を結んだ長軸126cm、短軸116cmの略方形の平面形をもつ。壁はゆるやかに立ち上がる。深さは8cm程で底面は中央部へ向ってゆるく傾斜する。

[備考] 覆土に多量の炭化物を含み、壁面の一部は僅かに焼土化していた。伴出遺物はなかったのであるが、形態や覆土の状況が寒川Ⅰ遺跡で7基確認されている伏焼による炭焼遺構と酷似している。隣接した調査地での検出例であり、その構築、使用時期は同じと判断した。



第188図 第36号土坑

その他、遺物としてND41グリッドから第187図-6・7に示す陶磁器が出土した。6は染付けの茶碗、7は高台付の片口鉢である（図版106）。

第3節 まとめ

今回行われた寒川Ⅱ遺跡の調査では、縄文時代前期末から中期初頭のフラスコ状土坑15基、同時期の土器埋設遺構1基、縄文時代中期末～後期初頭に位置づけられる竪穴住居跡2軒、続縄文文化期の土壙墓6基、平安時代の竪穴住居跡16軒、同時代と判断された土坑20基（土器焼成遺構2基を含む）、製鉄炉1基、炭焼窯3基、平安時代以降の溝9条、土坑1基を検出した。以下では縄文時代の遺構、続縄文文化期の土壙墓と出土遺物、平安時代の遺構について考察を加えまとめる。

1-1 縄文時代の遺構について

縄文時代前期末～中期初頭と判断された15基のフラスコ状土坑は、遺跡内における構築場所によって大きく3つのグループに分類することができる。

- I、調査区西側の比較的平坦な場所に単独で構築されているもの（第1号土坑、第2号土坑、第3号土坑）。
- II、調査区中央の緩斜面上に密集して構築されているもの（第5号土坑、第6号土坑、第7号土坑、第11号土坑、第12号土坑、第14号土坑）。
- III、調査区東側の急斜面直前の縁辺部に密集して構築されているもの（第4号土坑、第8号土坑、第9号土坑、第10号土坑、第13号土坑、第15号土坑）。

これらのグループについて、(1)I、IIは埋土中に遺物を含むが、IIIは全く含まないこと、(2)IIに明らかに人為的に埋められたものが2基（第6号土坑、第7号土坑）含まれること、(3)土坑状のピット、柱穴様のピットをもつものが、IおよびIIIに1基ずつあること（第3号土坑、第10号土坑）、などの特徴がある。こうした特徴にも示される各グループの差異は「フラスコ状土坑の性格、単位集団のフラスコ状土坑所有の問題、単位集団の数、定住期間」^(註6)と密接な関係にあるものと考えられる。調査区内ではこの時期の竪穴住居跡は検出されなかったが、第1号土器埋設遺構、OB46グリッドでの円筒下層d₁式土器の完形個体の出土から、調査区外北西側に住居跡群の存在が予想される。そうした場合、この3グループのフラスコ状土坑は住居跡群の外側の台地縁辺部に群集する形となり、フラスコ状土坑の立地パターンを分析した永瀬福男氏分類のAパターン^(註7)に属することとなる。

またこの15基の底面径を検討してみると（開口部径、深さ、形態も含めて比較する必要があるが、削平、攪乱によって上部が失われているものが多いため底面径だけに限定する）、15基のうち4基を除いてほぼ200～230cm前後の規模を示す。これについて时期的な多少の異同はあるが、^(註8)周辺の遺跡から検出されたフラスコ状土坑の底面径をみても、杉沢台遺跡は160cm

前後、200cm以上の2グループからなり、館下Ⅰ遺跡はばらつくが150cm前後と200cm前後が多い。^(註9)腹鞍の沢遺跡は200～230cmが多く、^(註10)萱刈沢貝塚は200cm前後が半数以上を占める。また大畑台遺跡も200cm前後が圧倒的に多いことに気付く。^(註11)以上のことから少なくとも縄文時代前期～中期の秋田県北部の海岸性遺跡にあっては、フラスコ状土坑に規模の上での規則性があったことがうかがわれる。海岸性遺跡の立地する台地の基盤は砂礫を多量に含む潟層が構成し、フラスコ状土坑などの遺構はその上部にのる砂～シルト質土を掘り込んで作られる。こうした地質の特性が、フラスコ状土坑がその機能を果たすためにとられた特殊な形態と相俟って、その大きさに制限を加えたものとも考えられる。^(註12)

緩斜面下部と台地縁辺部で検出された2軒の竪穴住居跡（第1号竪穴住居跡、第2号竪穴住居跡）は縄文時代中期末～後期初頭に位置づけられたが、今回の調査区内で見える限り、他の遺構を伴わず各々単独に営まれたように見える。しかし、寒川Ⅰ遺跡側では縄文時代中期後葉の竪穴住居跡3軒、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡2軒、土壙墓3基などが検出されている。これらの遺構の存在を考え合わせると寒川Ⅱ遺跡の台地縁辺ないし斜面下部は間に沢を挟んでいるが、寒川Ⅰ遺跡の台地上面とともに、縄文時代中期後葉までの期間継続して営まれた生活域の一部であったことが理解される。第2号竪穴住居跡の南東側壁が沢に臨む急崖で削られていたことから、寒川Ⅰ遺跡側と寒川Ⅱ遺跡側を隔てる小谷が本格的に開析を始めたのは縄文時代後期以後と考えられる。縄文時代後期前葉の頃までは寒川Ⅰ遺跡の立地する舌状台地も未だ形成されておらず、寒川Ⅰ遺跡と寒川Ⅱ遺跡は緩い斜面で繋っていたことであろう。寒川Ⅱ遺跡で見つかった2軒の竪穴住居跡は寒川Ⅰ遺跡の遺構群とともに、この緩斜面から南側の台地平坦部をその生活域に含んでいたものと考えられる。

2、続縄文文化の土壙墓と出土遺物について

2-1 土壙墓

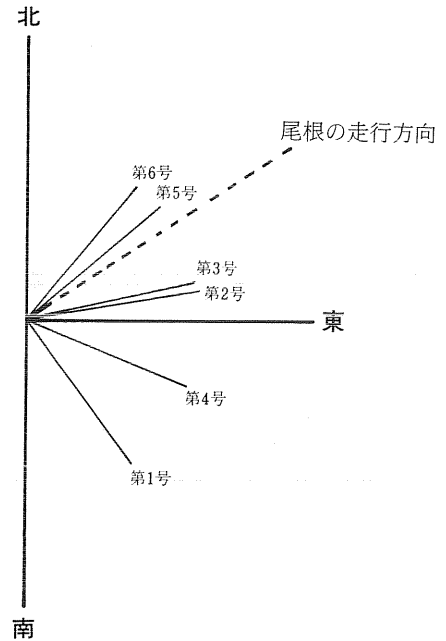
既に第2節-2で土壙墓の特徴を列記した中にも記したが、続縄文文化期の6基の土壙墓は北東-南西方向へ伸びる尾根状の地形上に立地する。続縄文文化期の土壙墓が丘陵の突端が尾根上に立地する例は北海道内に例があり、^(註13)本遺跡の場合もこれと共通する。6基の土壙墓のうち4基までが、尾根ののびる方向に直交して1列に並び、その長軸をほぼ尾根ののびる方向に沿わせている。いずれも墓壙内での頭位方向を遺骸から直接知ることはできなかったが、壙底面に埋置された土器の存在から、各土壙墓とも東寄りの部位をその方向と見て差し支えないように思われる。第188図に墓壙長軸端のピットを結んだ線での推定頭位を示す。

土壙墓の立地する北東-南西方向の尾根状の地形は、北東側で狭く、南西側で広い。6基の土壙墓のうち並列する4基に限っていえば、第188図に示されるように、尾根の北側に位置す

る第2号、第3号と、南側に位置する第5号、第6号は尾根の収斂する北東方向へ、各々の位置からの頭位を向けている。すなわちこの4基については地形に即応した配置をとっていたものと判断される。

第1号土壙墓を除いた5基からは、遺体とともに副葬されたと考えられる土器が見つまっている。このうち第2号土壙墓にあるような、墓壙長軸端の一方の側壁に袋状のピットを設け土器を納める例は恵庭市柏木B遺跡第36号土壙墓や、余市町天内山第6号墓壙でも確認されている。他に、時期は降るものの千歳市ウサクマイ遺跡にも類似の例がある。また、第5号土壙墓や第2号土壙墓に見られるような土壙埋土の上層にも土器が検出される例は、柏木B遺跡第202号土壙墓、第218号土壙墓、松前町白坂第4地点1号ピット、4号ピット、函館市西桔梗E遺跡墓壙で確認されている。ただし柏木B遺跡第202号土壙墓、第218号土壙墓と白坂第4地点4号ピット例は、壙内に河原石を入れた積石墓形式のものである。また江別市坊主山I・1号墳も壙口部から底部を穿孔した例を含む2点の注口土器が出土し副葬品であるとされ、西桔梗E遺跡墓壙の壙口部出土土器2点も底部穿孔されている。本遺跡でも第5号土壙墓埋土上層出土土器のうち第141図-3と第142図-1の注口土器は底部を欠損、穿孔した状態で見つまっている。第3号～第5号土壙墓のように小判形、楕円形墓壙の壙底面長軸端に正立状態の土器が置かれる例としては柏木B遺跡第435号土壙墓例がある。以上見ただけでも、本遺跡の土壙墓の副葬土器埋納の方法は、北海道内の検出例と共通する。

土壙の形態の点では本遺跡の場合、全例が小判形ないしは楕円形で、北海道での検出例と共通する（柏木B遺跡第9号、第35号、第36号、第48号、第60号、第78号、第241号、第435号土壙墓、西桔梗E遺跡墓壙、江別市町村農場Ⅷ T-f, T. 61など）。また本遺跡の土壙墓は全例とも壙底部長軸端に1対の柱穴様ピットが設けられるが、北海道内の例でも1対もしくは2対の柱穴様ピットが設けられる例が柏木B遺跡第35号、第36号、第52号、第241号（以上1対）、第78号土壙墓、西桔梗E遺跡墓壙、町村農場Ⅷ T-f, T. 61（以上2対）などに認められる。この柱穴様ピットについては、本遺跡の場合、第5号土壙墓が逆になるのを除いた他は東側のピットが幾分内傾し、西側のものが垂直になるという傾向を認めたが、このような片側の



第189図 続縄文文化期土壙墓推定頭位

ピットがやや内傾する例（本遺跡ではことに第3号、第4号、第6号土壙墓で顕著である）も、柏木B遺跡第35号土壙墓、西桔梗E₂遺跡土壙墓の実測図からうかがえる。

本遺跡の土壙規墓は長軸の長さ120～200cm、短軸の長さ90～160cm、深さ22～45cmであり、西桔梗E₂遺跡墓壙（長径155cm、短径146cm、深さ45cm）、柏木B遺跡第35号土壙墓（長径144cm、短径123cm、深さ101cm）、同第78号土壙墓（長径167cm、短径153cm、深さ62cm）^(註22)などの北海道内事例とはほぼ同じと見て良い。深さについては本遺跡の場合、かなり大きな削平によって壙口部を失っているが、一応比較できる範囲にあると見て良いであろう。なお本遺跡の場合、形態と深さについては第26表に示されるような傾向がうかがえる。すなわち、平面規模（面積）の特に大きな第1号土壙墓を除くと、〈短軸の長さ／長軸の長さ〉の値が小さい小判形の土壙（第3号土壙墓、第4号土壙墓、第6号土壙墓）が浅く、その値の大きい楕円形の土壙（第2号土壙墓、第5号土壙墓）は深い。これと同じようなことは柏木B遺跡で比較的深い土壙（第35号、第78号）などに混って、細長くきわめて浅い土壙（第48号土壙；長径164cm、短径80cm、深さ12cm）の存在することからもうかがわれ、平面形での規模、形態と深さとの間に相関する関係があるように思われる。

本遺跡での土壙墓の立地、副葬土器の埋納法、形態、特徴、規模などについては、以上のように北海道の事例に類例を求めることができ、総じてほぼ同じと見られる。ただし、北海道の例では、平面形が円形を基調とし、壙内に河原石を積み上げた積石墓形式のものが多く、これまで類例として採りあげてきた楕円形プランの柱穴様ピットをもつものは数の上ではむしろ少ないようである。^(註23)こうした傾向は道央部で強く、柱穴様ピットをもつ墓壙は道南部に特徴的とされる。^(註24)

1遺跡から見つかった数としては少ないが、本遺跡の土壙墓は北海道から本州北部の続縄文文化後期（後北C₂式期）の特徴的な在り方を示し、その中でもより南部の地域色が特徴的にあらわれた例といえよう。

北海道の続縄文文化の土壙墓の本州側での類例として採りあげられたものに、盛岡市永福寺山遺跡例がある。^(註25)『天内山』の報告によれば、土壙墓状のピットは7基あり、プランは楕円形で長径1.6m～2m、短径1.5m前後の規模があるとされ、ピット外に柱穴状の小孔が密集する例として記述されている。規模の点では本遺跡例や北海道内での楕円形プランのものと大差ない。

第26表 寒川Ⅱ遺跡続縄文文化期土壙墓計測表

	A. 長軸の長さ (cm)	B. 短軸の長さ (cm)	B/A	深さ (cm)		A. 長軸の長さ (cm)	B. 短軸の長さ (cm)	B/A	深さ (cm)
第1号土壙墓	202	160	0.79	23	第4号土壙墓	144	90	0.62	28
第2号土壙墓	166	126	0.75	44	第5号土壙墓	127	103	0.81	45
第3号土壙墓	150	90	0.60	22	第6号土壙墓	153	93	0.60	27

また写真で見ると、細部の特徴を除いた全体の形状は本遺跡第2号土壙墓に似ている。永福寺山遺跡の他には、東北地方で後北式土器が遺構に伴った例としては多賀城市山王遺跡があるが、特に墓壙であるとはされていない。^(註26)

ところで、壙底部に1対以上の柱穴様ピットをもつ土壙墓例に対して、屍を入れる小屋がけが施されたという推定が、かつて北海道の事例からなされている。^(註27) 柱穴様ピットの機能を類推しての仮説であるが、本遺跡ではこの推定が正しいとしても、上屋の存在をそれ以上に確められる痕跡が認められなかったことは前節で述べた通りである。また、第2号土壙墓に見られたように、楕円形土壙墓の壙底部長軸の一端に正立して置かれた土器の下部でこの柱穴様ピットが位置する例は、柏木B遺跡第241号土壙墓でも確められている。遺体を安置しておくような施設が設けられていたとしても、儀礼の期間の過ぎた後土壙を埋め戻すにあたって施設の撤去がなされたとも推定される。なお、構造的には壙底部に1対の柱穴様ピットが設けられる「二柱構造」の土壙墓は、関東地方古墳時代終末期の土壙墓や、同じ関東地方中世墓域群の中にも存在する。^(註28) また楕円形土壙墓の外側の長軸線上に1対の柱穴様ピットをもつ例は、北海道縄文時代晩期の環状土籬の中にもある。^(註29) 土壙墓の形式としてこの「二柱構造」のものは、各時代各地域に存在するようである。^(註30) 続縄文文化における「二柱構造」の土壙墓がどのような系譜をもって辿れるのか、興味深い問題である。

2-2 出土土器

続縄文文化期の土壙墓内に副葬された遺物のうち、主体となるのは土器である。それらは後北式に属する土器と、それ以外の土器とに分けられる。

後北式土器は副葬遺物を検出した5基の土壙墓全てから出土している。4～5単位の波状口縁を呈する注口または袋状の突起を設けた鉢形土器が主体である。描かれる文様は微隆起線で区画した0段多条の撚紐による帯縄文と先端の鋭い工具による刺突列で構成され、帯縄文は弧状、U字状、逆V字状などのモチーフをとる。このような特徴は北海道内の資料と全く一致し、^(註31) 一般的な段階の後北C₂式土器として扱えられる。ただし、第2号土壙墓の埋土上層から出土した口縁部資料（第134図-16）と体部下半資料（第134図-17・18）、第6号土壙墓出土土器（第144図）は帯縄文が微隆起線を伴わずに施文される。帯縄文の間に施文され刺突も器面に対して直角に施され、後北C₂式土器の刺突が器面に対して鋭角に施文されて三角形を呈するのとは対照的に、円形の形状をもって施文されている。また第6号土壙墓出土の土器は口唇部が断面三角形となり後北C₂式の場合と趣きを異にする。以上のような特徴から、この3点の資料は後北D式に比定される可能性がある。

後北式以外の土器では、第2号土壙墓の壺形土器（第133図-1）と無文鉢形土器（第133図

— 2)、第5号土壙墓出土の壺形土器(第142図— 4)、手捏ね土器(第142図— 5)がある。

第133図— 1の土器の体部に施される菱形の構図をもった撚糸文は、軸繩に対して異方向に撚り紐を巻きつけた附加条の原体を、指をずらしながら施文することによって表わされている。附加条の原体は器面に軸繩の痕跡が表われないことから、0段のrと1の撚り紐(むしろ繊維束とも言える)に、 $L \begin{Bmatrix} r \\ r \end{Bmatrix}$ と $R \begin{Bmatrix} l \\ l \end{Bmatrix}$ の撚り紐を結縛する方向— rの軸繩に対しては右に、1の軸繩に対しては左—で巻いた原体と判断した。この原体をそれぞれ平行に施文した場合には、2段のRL、LRの原体を平行に回転すると同様の効果で、羽状の撚糸文が器面にあらわされることになる。附加条の原体の作り方に差があるかもしれないが、関東地方の十王台式土器にはこの種の羽状の附加条繩文が体部の文様として施される例があるようである。^(註32)また青森県九艘泊岩陰遺跡の壺形土器や、^(註33)北海道松前町白坂遺跡、^(註34)瀬棚町南川遺跡の資料も基本的には、この種の羽状撚糸文が施されている。また、北海道七飯町聖山遺跡の資料はこの種の羽状撚糸文と交互刺突文が併用されているが、この土器の場合はその原体は「不均等撚り合せの繩」であるとされている。^(註36)

ところで秋田県内では従来大館、鹿角、小坂地区に後北式土器を出土する遺跡が多く、現在ではこの地域だけで6箇所の遺跡が知られている。それらの遺跡から出土している後北式土器は、主にC₂式土器であるが、この後北C₂式土器と層的にきわめて近接して出土するとされる1群の土器(小坂X式)の中にも、羽状に施文された撚糸文の壺がある。^(註37)小坂X式土器については細かくはいくつかの型式に細分されるものが含まれるようだが、^(註38)撚糸文あるいは条間のあいた繩文が施文されることがそれらを包括する特徴であると理解してよいであろう。設定者である奥山潤氏は、この1群の土器は既に弥生期を脱した文化的系統の異なるもので、弥生後期の土器や土師器の北上を拒んだのもこの種の土器や、江別Ⅲ、Ⅳ(後北C₁、D)式土器などの異質の文化であったとしている。^(註39)

この第2号土壙出土の土器(第133図— 1)については、以上にあげたような小坂X式土器、九艘泊岩陰遺跡出土の土器など、東北地方北部から北海道南部まで分布する土器群の1資料であると理解したい。そして、その時期を特定するとすれば、九艘泊資料に与えられているような十王台式併行の弥生時代終末かその直後の時期におけるのではないかと思われる。

なお、この土器の撚糸文施文に使われる指をずらしながらの施文法は、続縄文文化期の特殊繩文の施文技法に通じるものと思われる。^(註40)

第133図— 2の無文鉢形土器は、揚底の特徴、頸部の段差を作る隆起線の貼り付けなど、第133図— 1の壺形土器と共通する要素も多い。この土器と似た特徴をもった土器に、山形県寒河江市石田遺跡出土の土器がある。^(註41)石田遺跡例では頸部のくびれがきつく、口縁の外反する程度がやや大きい。頸部に僅かな段差を設ける特徴はよく似ている。ところで石田遺跡例では口縁

部に菱形を重ねた沈線文が描かれ、体部には条間のあいた縄文が帯状に施文されている。この口縁部に菱形を重ねた沈線文が描かれる例は、小坂町カラミ山出土土器(註42)や大岱Ⅲ遺跡出土土器(註43)に類例があり、前者は小坂X式土器に包括されるX₁式土器の特徴として注意されている。(註44)

第5号土壙墓埋土上層出土の壺形土器は一見縄文時代晩期終末の大洞A、A'式期の壺形土器に酷似しているが、仕上がりがゴツゴツした感じになる大きい幅のミガキ調整が施されること、厚手に作られ重量感があることなどは大洞A、A'式期の土器には見られない特徴である。この種の壺形土器の類例には、先にあげた石田遺跡例や、秋田県横手市手取清水遺跡例(註45)があげられる。(註46)

本州北部まで南下して分布する後北C₂式土器が、本州のどの土器に伴うのかという問題では盛岡市永福寺山遺跡の例についての議論がある。本遺跡では永福寺山遺跡で出土した塩釜式に比定されるような古式土師器は、破片でも検出されなかった。しかし弥生時代の最終末かそれをやや降る時期におくことのできる土器との相伴関係は、第2号土壙墓に明らかである。新潟県内越遺跡では畿内第V様式に相伴する可能性が大きいとされる後北C₁式土器が見つまっている。(註47) また、宮城県内では後北C₂式土器と北大式土器南下の時期が4世紀～5世紀に求められている。(註48) 以上のようなことを勘案すれば、後北C₁式からC₂式の南下の時期はある幅をもって考えられる必要があると思われるが、本遺跡の場合、およそ4世紀～5世紀代におくことが可能であろう。

2-3 第4号土壙墓出土鉄斧について

第4号土壙から出土した鉄斧は、平柄の板状鉄斧であるが、これに類する北海道内の資料として、余市町フゴッペ洞窟出土とされる資料がある。(註49) 示された実測図によれば、長さ9.1cm、幅6.2cm、厚さ1.4cmで、本遺跡のものよりやや短い。伴出した土器は、後北式、北大式、十和田式のいずれかであるとされる。

古墳時代の短冊形鉄斧を分類された古瀬清秀氏に従うと本遺跡の鉄斧は小形のグループに属し、あげられた資料のうちでは千葉・大日山古墳例(長さ11.1cm×刃部幅5.2cm)とほぼ同じ大きさである。形態の上では大日山古墳のものは側縁部が弧状に反り、本遺跡の例は古瀬氏の言う縦長台形に近い。古瀬氏によれば、古墳時代の短冊形鉄斧の初現は3世紀末から4世紀初頭とされ、小形短冊鉄斧は東日本で5世紀前半頃まで存続するといわれる。(註50)

本遺跡出土の鉄斧は、後北C₂式土器とともに副葬された続縄文文化期の鉄斧であり、古墳文化の短冊形鉄斧とどのような系統上の繋りをもつものかは、さらに様々な検討が必要である。ここでは一応、古瀬氏によって示された、古墳時代小形短冊形鉄斧のもつ年代の幅に、先の土器の年代が大きく矛盾しないことだけを確認しておきたい。

3、平安時代の竪穴住居跡について

竪穴住居跡は16軒検出したが、削平、攪乱され、あるいは調査区外にその一部がのびている住居が多く、全体の規模、平面形のわかるものはわずか5棟に過ぎない。そこでここでは本遺跡における特徴的なものを抽出して述べることにする。

3-1 カマドについて

16棟の竪穴住居跡のなかで、カマドの付設が確認されているのは第5号・第6号・第7号・第8号・第11号・第12号竪穴住居跡の6棟だけである。この6棟のカマドの位置をみると、軸線方向が多小異なるものの、すべて東壁の北側に構築されている。これは明らかに風向の影響によるもので、この遺跡の立地条件（南側に沢をもった沿岸部の台地上に立地する）と深い係わりをもつ。実際調査期間内でも、特に荒天時には必ず沢から西風が吹き上げてきたことが確認できた。この6棟のカマドの中で斜面に構築された第7号竪穴住居跡のカマドが注目される。このカマドの特徴は、カマド全体を住居外に押し出したような趣を呈し、煙道部の両脇に長さ80cm程の溝状の凹みを伴うことである。この凹みは煙道部の底面より深く掘られ、また断面の観察による限り煙道部掘り方を充填したものではないことを確認した。このカマドは燃焼部自体住居外に突き出していて、煙道部もかなり奥まった所にある。本体部分が従来のカマドと異なり住居内には収容し切れていない。そのためカマド・煙道を覆う上部構造が必要となり、煙道両側に掘られた溝状の凹みに沿って、住居の壁に付設した上屋が構築されていたことが想定される。この種の溝状の凹みについては県内では類例をみないが、青森県の永野遺跡(註51)と太平遺跡(註52)に近似したものが検出されている。また宮城県(註53)の宮前遺跡では煙出しの両側に対になった柱穴が2個検出され、煙出しに伴う上部構造のための柱の存在を推定している。以上のような例もあり、カマドに付随する上部構造の存在は確実視できる。

3-2 張り出しをもつ住居について

第7号竪穴住居跡は西側に張り出しをもつ住居であるが、竪穴覆土の観察や張り出し部分には壁溝がないことから、構築時から張り出しを備えた構造であったと考えられる。県内では張り出しをもつ住居跡の例は非常に少なく、管見にふれたものでは、鹿角市飛鳥平遺跡 S I 009、(註55)同北の林 I 遺跡 S I 018の2例しかない。また中世と思われる張り出しのある竪穴遺構は、鹿角市小平遺跡(註56)、小豆沢館(註57)、一本杉遺跡(註58)、乳牛平遺跡(註59)、妻の神Ⅲ遺跡(註60)、大館市館コ遺跡(註61)、比内町谷地中「館」遺跡等県北に数多く見られるが、形態的に大きな違いがある。張り出し部の機能については、出入口、物置的一角等考えられるが、出入口とすれば階段、スロープ、壁溝を必要としないかわりに床面が踏み固められている等の形跡を残す。八森町土井遺跡でははっきり出入口とわかる階段状の遺構が検出されたが、本遺跡のこの張り出し部では出入口とするような確証は得られなかった。従って部屋として見たほうがより妥当と考える。いずれ斜面上に構築さ

第5章 寒川Ⅱ遺跡

- (註5) 稲野裕介・稲野彰子「比久尼沢遺跡」北上市教育委員会 昭和59(1984)年
- (註6) 永瀬福男・熊谷太郎「腹巻の沢遺跡発掘調査報告書」P.140 秋田県教育委員会 昭和57(1982)年
- (註7) 永瀬福男「秋田県内におけるフラスコ状ピットについて」『秋田地方史論集』
- (註8) 永瀬福男・熊谷太郎「杉沢台遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和56(1981)年
- (註9) 岩見誠夫・永瀬福男「館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和54(1979)年
- (註10) (註6)に同じ
- (註11) 鍋倉勝夫他「萱刈沢貝塚発掘調査報告書」八竜町教育委員会 昭和54(1979)年
- (註12) 磯村朝次郎・児玉準「大畑台遺跡発掘調査報告書」日本鉱業株式会社船川製油所 昭和56(1981)年
- (註13) 後藤寿一「石狩国江別町に於ける堅穴様墳墓について」『考古学雑誌』25-5
- 「石狩国江別町遺跡略図」中に、8箇所の堅穴様墳墓密集地点が図示されている。略図から判断すると幅100~200m程、長さ500~700m程でのびる尾根状の地形上に4箇所の密集地点がある。
- (註14) 木村英明「柏木B遺跡」恵庭市教育委員会 昭和56(1981)年
- (註15) 峰山敏他『天内山』余市町教育委員会 昭和46(1971)年
- (註16) 菊池徹夫他「鳥柵舞」 昭和50(1975)年
- (註17) (註14)に同じ
- (註18) 久保泰他「白坂」松前町教育委員会 昭和59(1984)年
- (註19) 千代肇「西桔梗」函館圏開発事業団 昭和49(1974)年
- (註20) (註15)『天内山』P23の記述中にあるが、原典にはあっていない。
- (註21) (註13)に同じ
- (註22) (註14)の文献中、実測図からの実測値
- (註23) 柏木B遺跡では隅丸方形、楕円形のプランのものが23例であるのに対し、円形の積石墓型式のものは57例を数える。
- (註24) 大沼忠春氏の御教示による。
- (註25) (註15)『天内山』P26の記述中にある。他に永福寺山遺跡のピットについての記述は以下の文献に記載されている。
- 武田良夫「岩手県における弥生式土器について」『考古風土記』第3号P18 昭和53(1978)年
- 佐藤信行「東北地方の後北式化」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編P278 昭和56(1981)年
- (註26) 高倉敏明「山王・高崎遺跡発掘調査概報」多賀城市教育委員会 昭和56(1981)年
- (註27) (註13)中、次のように記述されている。

「…柱穴を遺すものは恐らく、墓壙の中に更に柱を立てて小屋を作り、そこへ屍を葬ったものだろう。…」

- (註28) 田中新史「古墳時代終末期の地域色」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学考古学会 昭和60(1985)年
田中氏はこの中で「二柱構造」墓塚の初現として、東海地方弥生時代中期の方形周溝墓主体部をあげている。
- (註29) 水野順敏「茨城県谷和原村洞坂畑遺跡」日本窯業史研究所 昭和54(1979)年
- (註30) 青柳文吉「美々4遺跡」「美沢川流域の遺跡群」北海道埋蔵文化財センター 昭和58(1983)年
- (註31) 大沼忠春氏の御教示による。
- (註32) 山内清男「日本先史土器図譜」図版3-1の上器、先史考古学会 昭和42(1967)年
- (註33) 江坂輝弥他「青森県九艘泊岩陰遺跡調査報告書」『石器時代』第7号 昭和40(1965)年
- (註34) (註18)に同じ
- (註35) 高橋和樹「瀬棚南川遺跡」瀬棚町教育委員会 昭和51(1976)年
- (註36) 石本省三「聖山」七飯町教育委員会 昭和54(1979)年
「不均等撚り合せの縄」の先端の回転圧痕を奥山潤氏は結縄帯と表現している。また青森県内の鳥海山式土器資料中に表わされる「結節回転文」もこれと同じ原体によるものであろう。
奥山潤・安保彰「小坂X₁式土器(訂正追加)及び後北B式併行土器」『考古学雑誌』第51巻4号 昭和41(1966)年
鈴木克彦「青森県の弥生時代終末期の土器」『考古風土記』第3号 昭和53(1978)年
- (註37) 小坂X式は主に小坂町の大谷地、内ノ岱、カラミ山の各遺跡出土の土器によって型式設定されている。前2者が小坂X₁式、後1者が小坂X₂式と分けられている。
奥山潤・安保彰「十和田湖南西部(小坂鉦山)の弥生式文化とその後続形態(下)」
『考古学雑誌』第49巻3号 昭和38(1963)年
- (註38) 奥山潤「秋田県北半部弥生文化終末後の土器序説」『秋田考古学』23号 昭和38(1963)年
第Ⅰ図-ⅢCの杉ノ沢出土とされる壺形土器、太目の東状燃糸文、交錯燃糸文を平滑な器面に施文する、と記述されている。
- (註39) (註37)の文献で述べられている。また小坂X式と併行関係におく鳥海山式土器の内容を交互刺突文系土器として把えて天王山式併行とおき、九艘泊遺跡資料を十王台式併行として、従来燃糸文系土器としてその総体を把握していた鳥海山式土器のメルクマールの変更とその細分の可能性を説く論がある。したがってその場合でも小坂X式は弥生時代後期から終末期のあたりまでのいくつかの型式を含むことになろう。
岡田康博「青森県内の弥生時代終末期の土器について」『遺址』第4号 昭和59(1984)年
- (註40) 千代 肇「道南地方の土器」『縄文文化の研究10』
- (註41) 阿部義平氏の御教示による。
加藤稔・佐藤嘉広他「最上川流域の弥生土器集成・資料」『山形考古』第4巻第1号

第5章 寒川Ⅱ遺跡

山形考古学会 昭和61(1986)年

(註42) (註38)の文献第Ⅲ図-3

(註43) 永瀬福男・熊谷太郎・小林克「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ」秋田県教育委員会
昭和59(1984)年

(註44) 小坂X₁式とされた土器が、比較的まとまった資料であるのに対し、X₂式としてとり挙げられた資料は極めて断片的である。X₁式とX₂式の形態上の際立った相違点は特に述べられていないが、後者が揚底となることが指摘されている(註37)。

(註45) (註41)に同じ

(註46) 大和久震平「手取清水遺跡発掘調査報告書」横手市教育委員会 昭和59(1974)年

(註47) 伊東信雄「土師器時代」『水沢市史1』昭和49(1974)年

(註48) 佐藤信行「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究』1 清文堂 昭和59(1984)年

(註49) 宇田川洋編「河野広道ノート」考古編 北海道出版企画センター 昭和56(1981)年

(註50) 古瀬清秀「古墳時代鉄製工具の研究」『考古学雑誌』第60巻2号 昭和49(1974)年

(註51) 遠藤正夫「永野遺跡発掘調査報告書」青森県教育委員会 昭和55(1980)年
土師第6号竪穴住居跡カマド

(註52) 北林八洲晴「大平遺跡発掘調査報告書」青森県教育委員会 昭和55(1980)年
H-1号竪穴住居跡カマド、H-30号竪穴住居跡カマド
ただしこれらは掘り方としている。

(註53) 「宮前遺跡」宮城県教育委員会 昭和58(1983)年 第42号住居跡

(註54) 橋本高史「飛鳥平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』秋田県教育委員会
張り出し部を増築している。 昭和57(1982)年

(註55) 岩見誠夫「北の林Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』秋田県教育委員会
張り出し部分には壁溝の間仕切りがある。 昭和57(1982)年

(註56) 庄内昭男「小平遺跡発掘調査報告書」鹿角市教育委員会 昭和54(1979)年

(註57) 桜田隆 「小豆沢館」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』秋田県教育委員会
昭和57(1982)年

(註58) 桜田隆 「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』秋田県教育委員会
昭和58(1983)年

(註59) 児玉準 「乳牛平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』秋田県教育委員会
昭和59(1984)年

(註60) 桜田隆 「妻の神Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ』秋田県教育委員会
昭和59(1984)年

(註61) 奥山潤 「大館市片山館コ発掘調査報告書第一次」大館市史編さん委員会 昭和48(1973)年

(註62) 高山憲司「谷地中「館」遺跡発掘調査報告書」比内町教育委員会 昭和53(1978)年

(註63) (註51) に同じ

(註64) 桜田隆 「土井遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和59(1984)年

(註65) (註8) に同じ

(註66) 加藤孝 「大館遺跡発掘調査報告書」能代市教育委員会 昭和53(1978)年

(註67) (註6) に同じ

(註68) 柴田陽一郎「上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和59(1984)年

(註69) 熊谷太郎・児玉準「上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書」秋田県教育委員会

昭和61(1986)年

(註70) 児玉準 「三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 昭和59(1984)年

(註71) (註27) に同じ

(註72) 秋元信夫「高市向館跡発掘調査報告書」鹿角市教育委員会 昭和57(1982)年

第17号竪穴住居跡中央の円形のピット

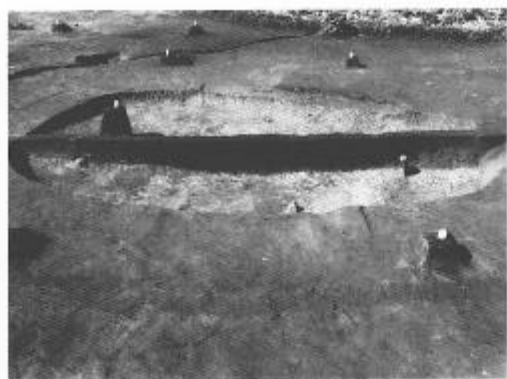


1.遺跡全景 (南→)

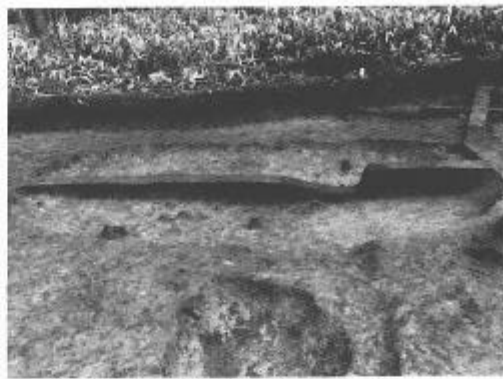


図版1

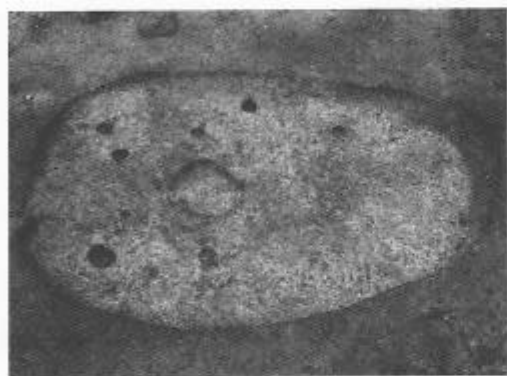
2.寒川I・II遺跡の位置 (東→)



1. 第1号竖穴住居跡 (東→)



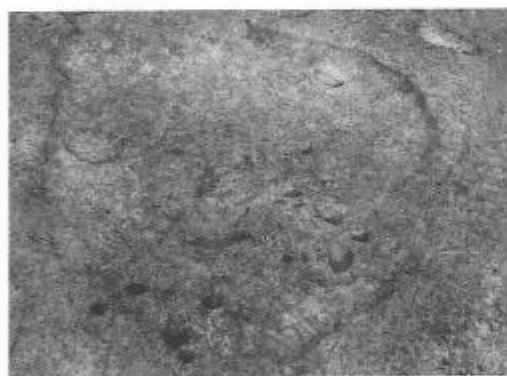
5. 第4号竖穴住居跡 (東→)



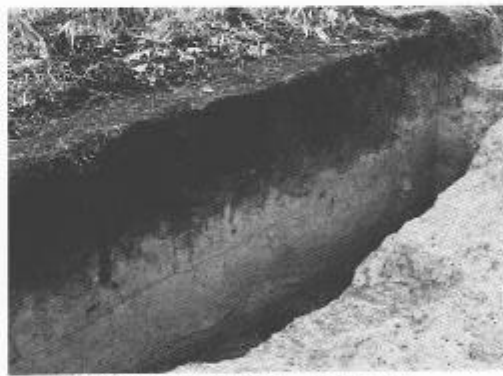
2. 第1号竖穴住居跡 (東→)



6. 第5号竖穴住居跡 (南西→)



3. 第1号竖穴住居跡 (南→)



7. 第6号竖穴住居跡 (南東→)



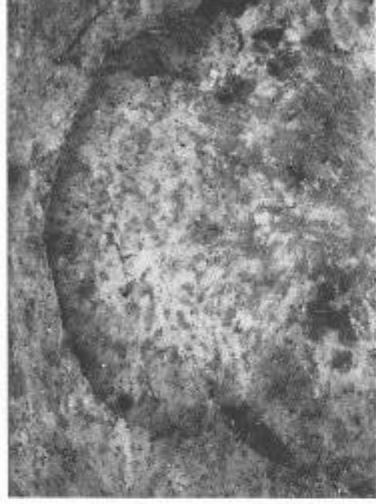
4. 第3号竖穴住居跡 (南→)



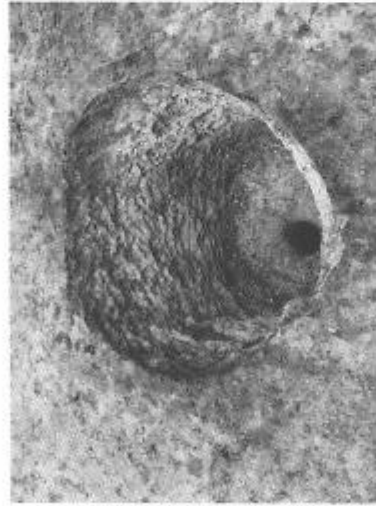
8. 第7号竖穴住居跡 (南西→)



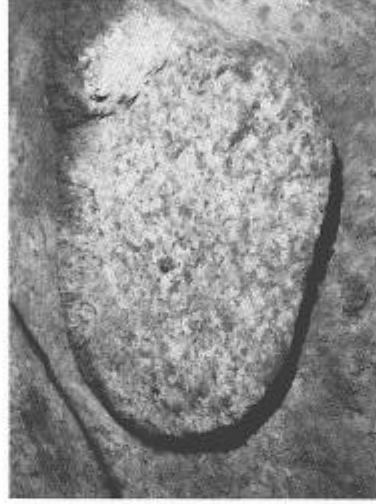
1. 第1号土坑 (西→)



5. 第5号土坑 (北→)



2. 第2号土坑 (西→)



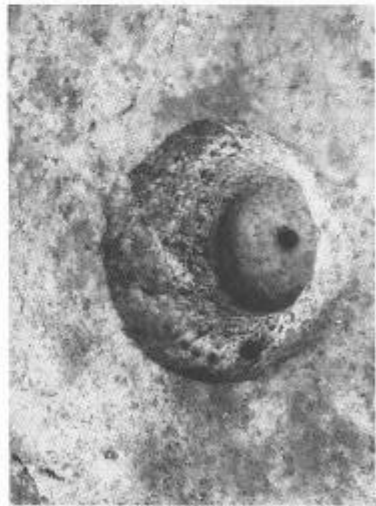
6. 第6号土坑 (東→)



3. 第3号土坑 (南西→)



7. 第10号土坑 (南→)



4. 第4号土坑 (北東→)



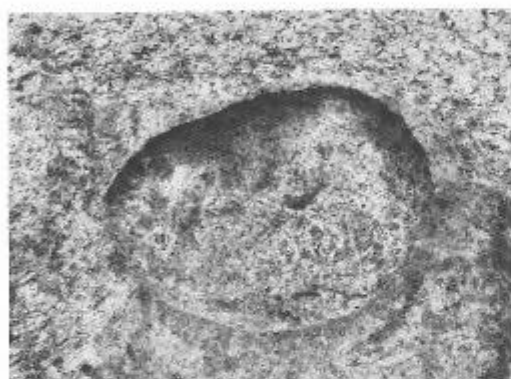
8. 第9号土坑と周辺の遺物 (南東→)



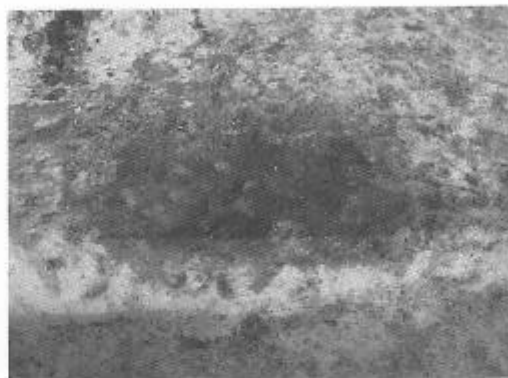
1. 第11号土坑 (北東→)



5. 第1号捨場 (南→)



2. 第12号土坑 (北→)



6. 第16号土坑 (西→)



3. 第14号土坑 (南西→)



7. 第17号土坑 (北東→)

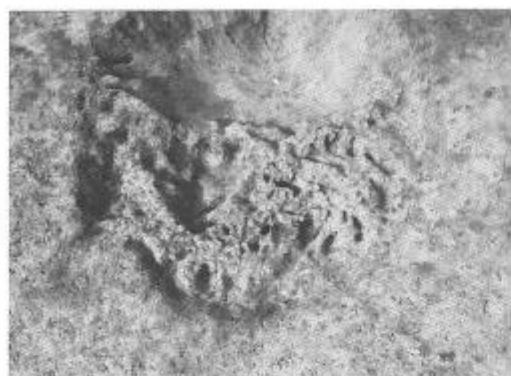


図版4

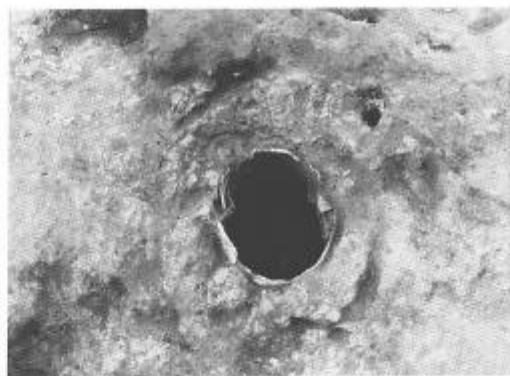
4. MF49グリッド遺物出土状況 (東→)



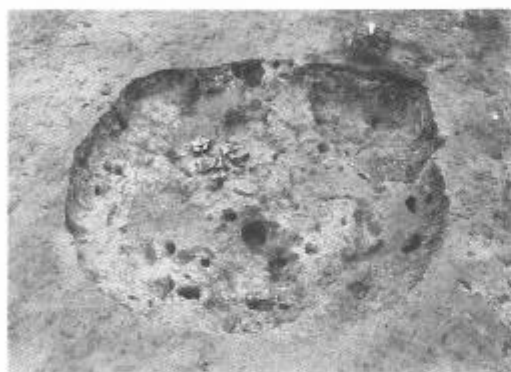
8. MB48グリッド遺物出土状況 (南→)



1. 第8号竖穴住居跡 (南東→)



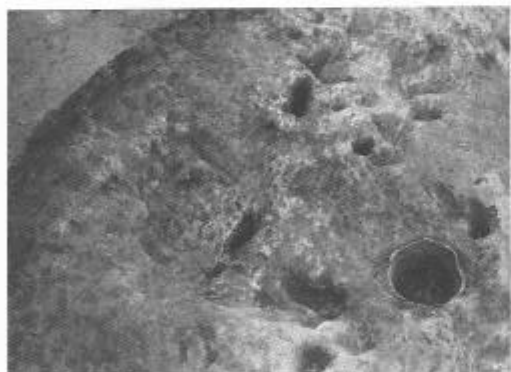
5. 第10号竖穴住居跡炉 (南→)



2. 第9号竖穴住居跡 (南東→)



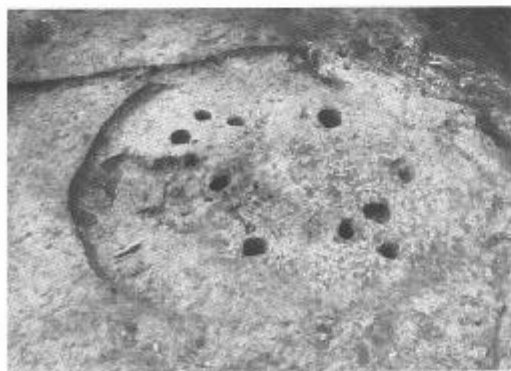
6. 第10号竖穴住居跡炉 (西→)



3. 第9号竖穴住居跡炉 (東→)



7. 第11号竖穴住居跡 (北東→)



4. 第10号竖穴住居跡 (東→)



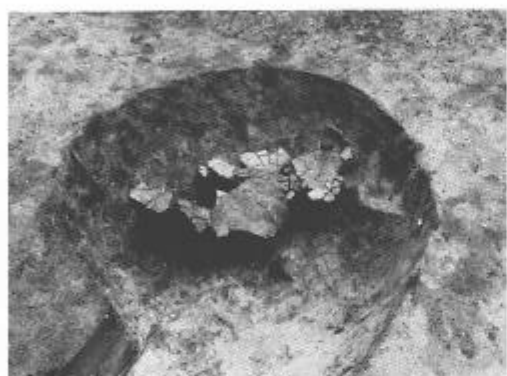
8. 第11号竖穴住居跡炉(西→)



1. 第18号土坑 (南→)



5. 第1号土器埋設遺構 (南東→)



2. 第1号土壇墓 (南→)



6. 第2号土器埋設遺構 (南→)



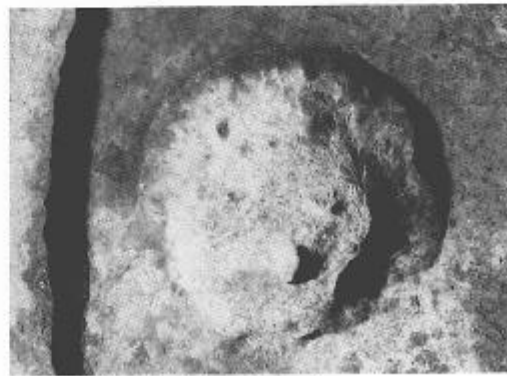
3. 第2号土壇墓 (西→)



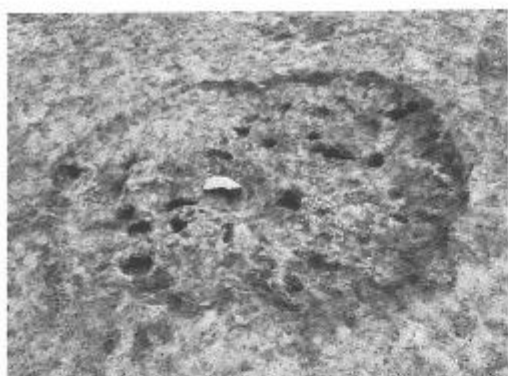
7. 第19号土坑 (西→)



4. 第3号土壇墓 (南西→)



8. 第20号土坑 (西→)



1. 第21号土坑 (東→)



6. 第13号竖穴住居跡 (南→)



2. 第22号土坑 (南西→)



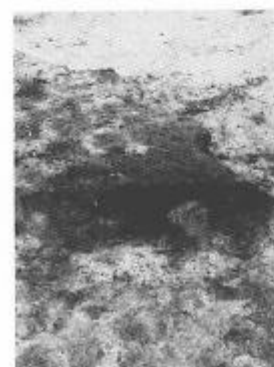
7. 第13号竖穴住居跡遺物出土状況(北→)



3. 第23号土坑 (南→)



8. 第3号・第5号溝 (北西→)



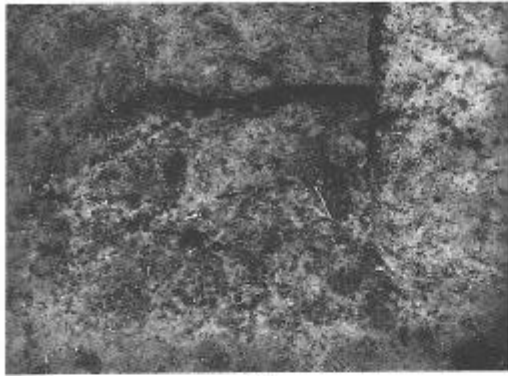
4. 第24号土坑 (南→)



5. 第2号捨場 (東→)



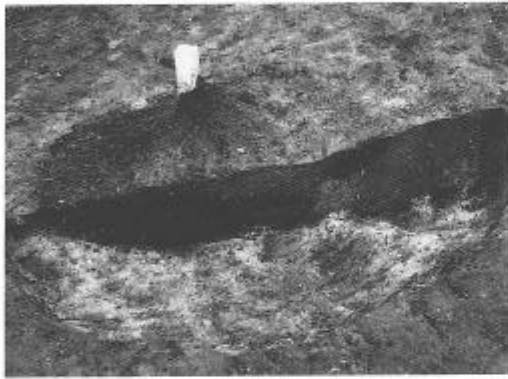
9. 第1号炭焼窯 (東→)



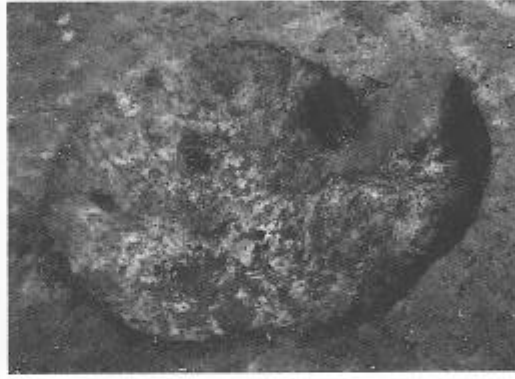
1号



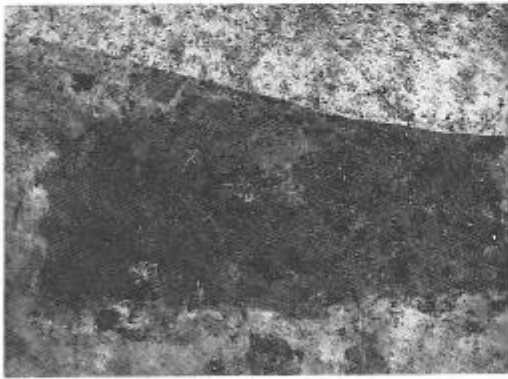
3号



2号



2号



4号



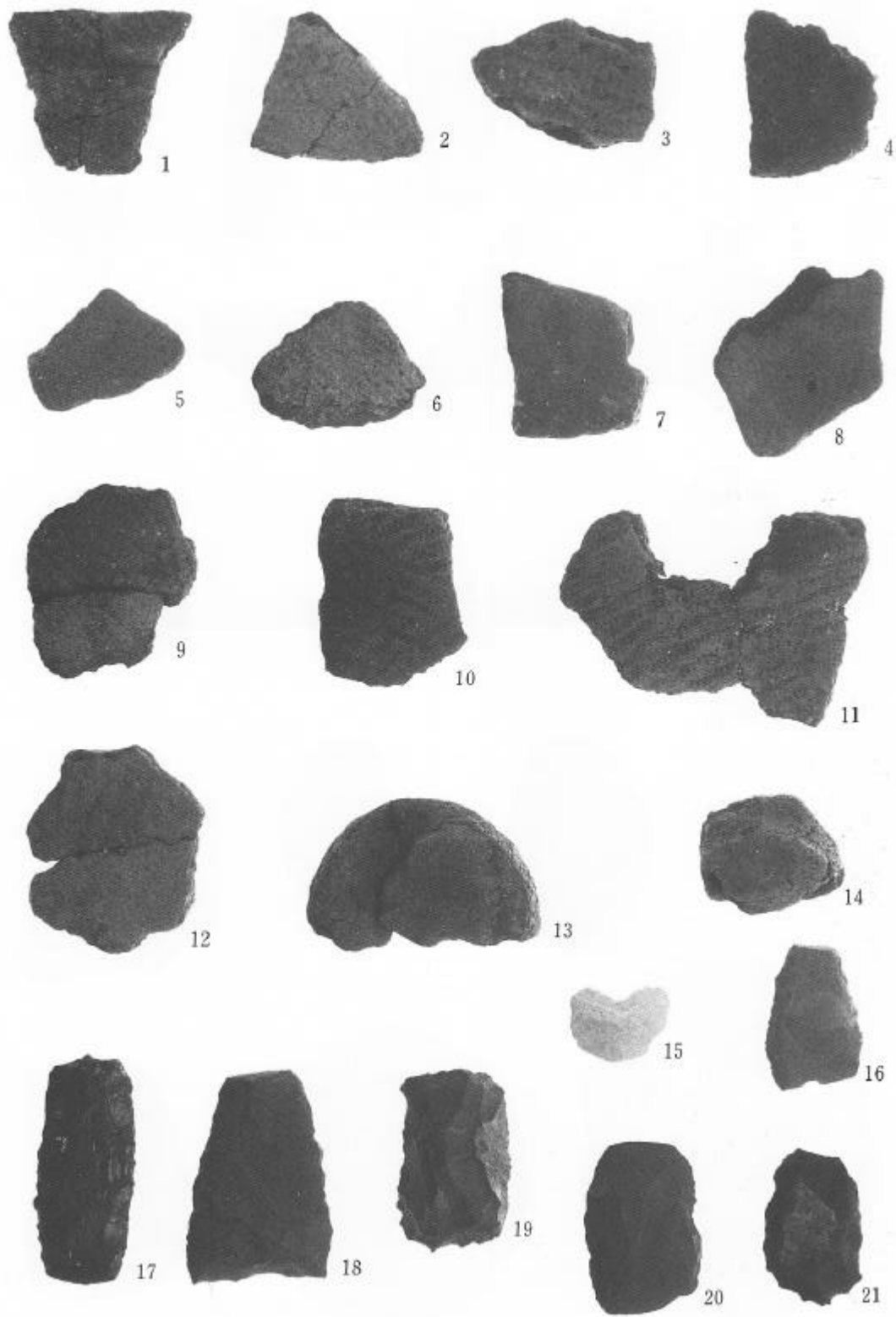
5号

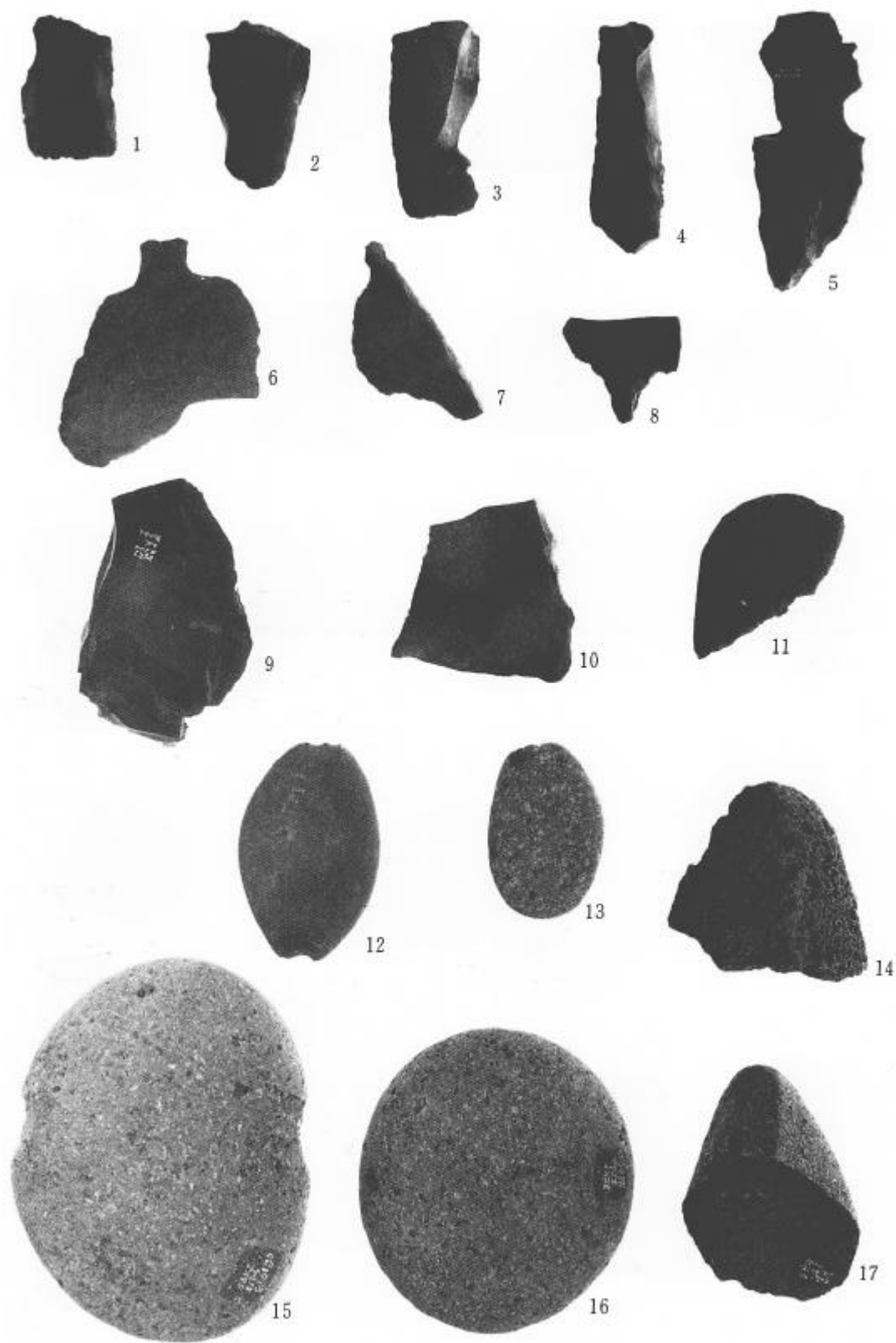


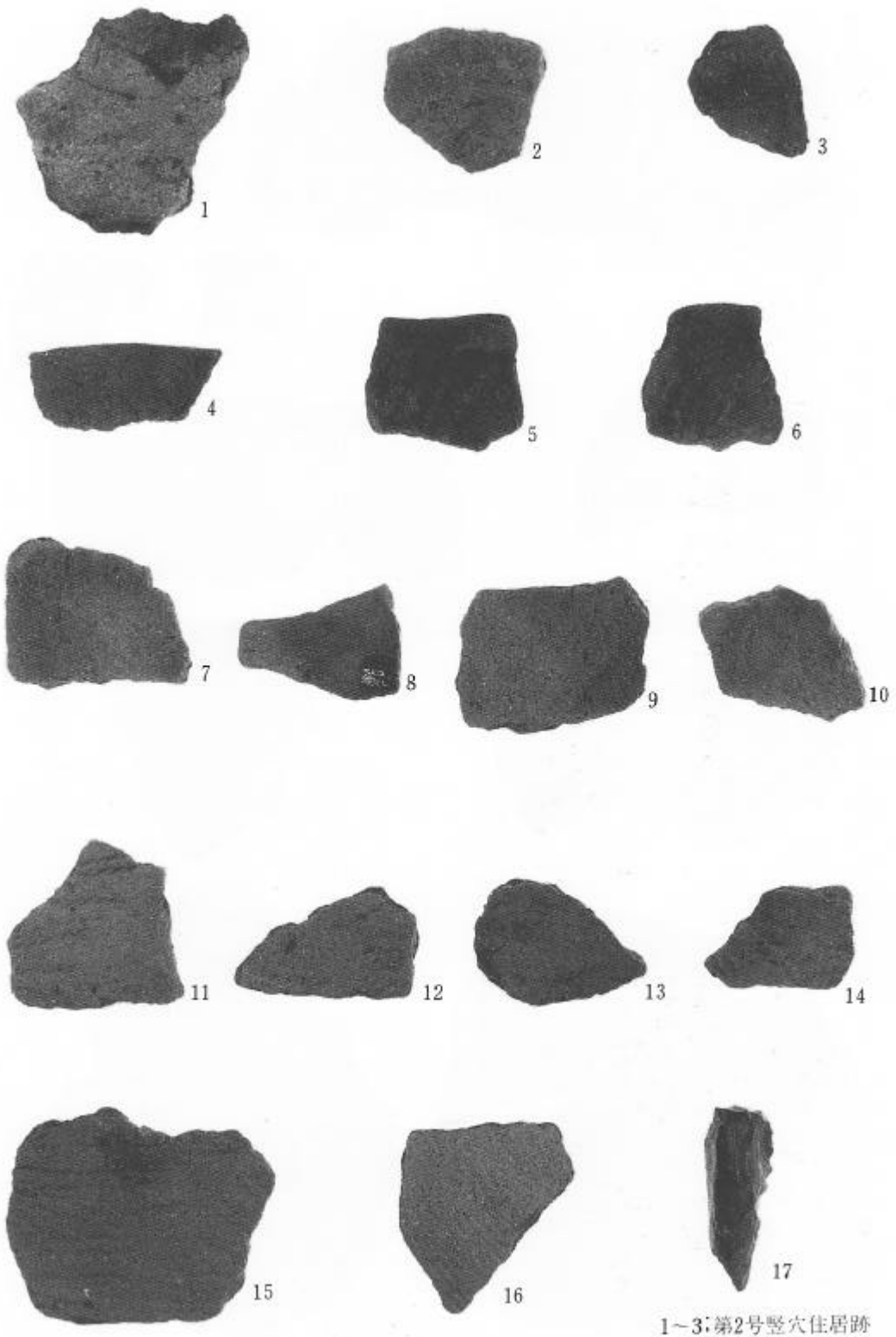
6号



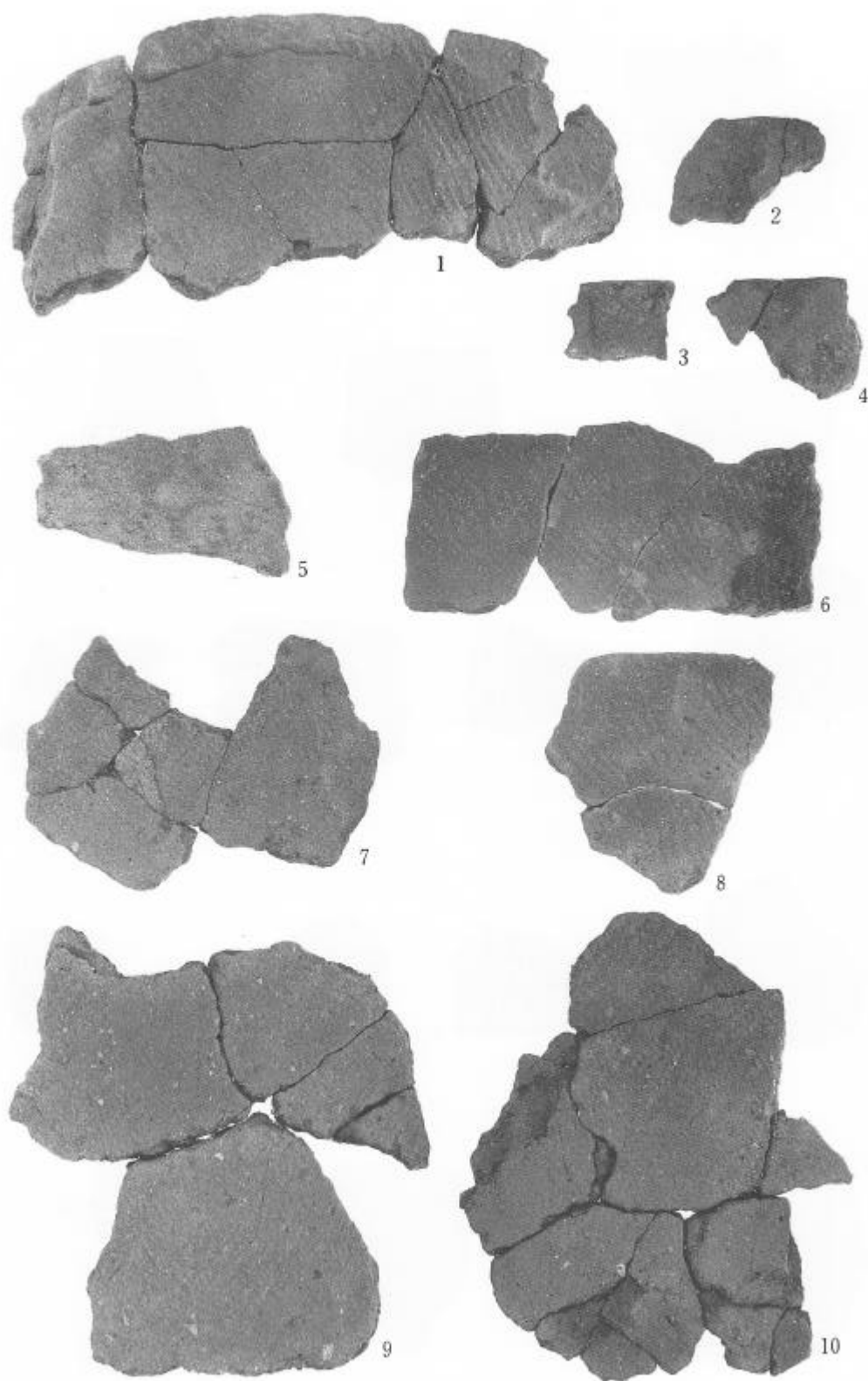
6号

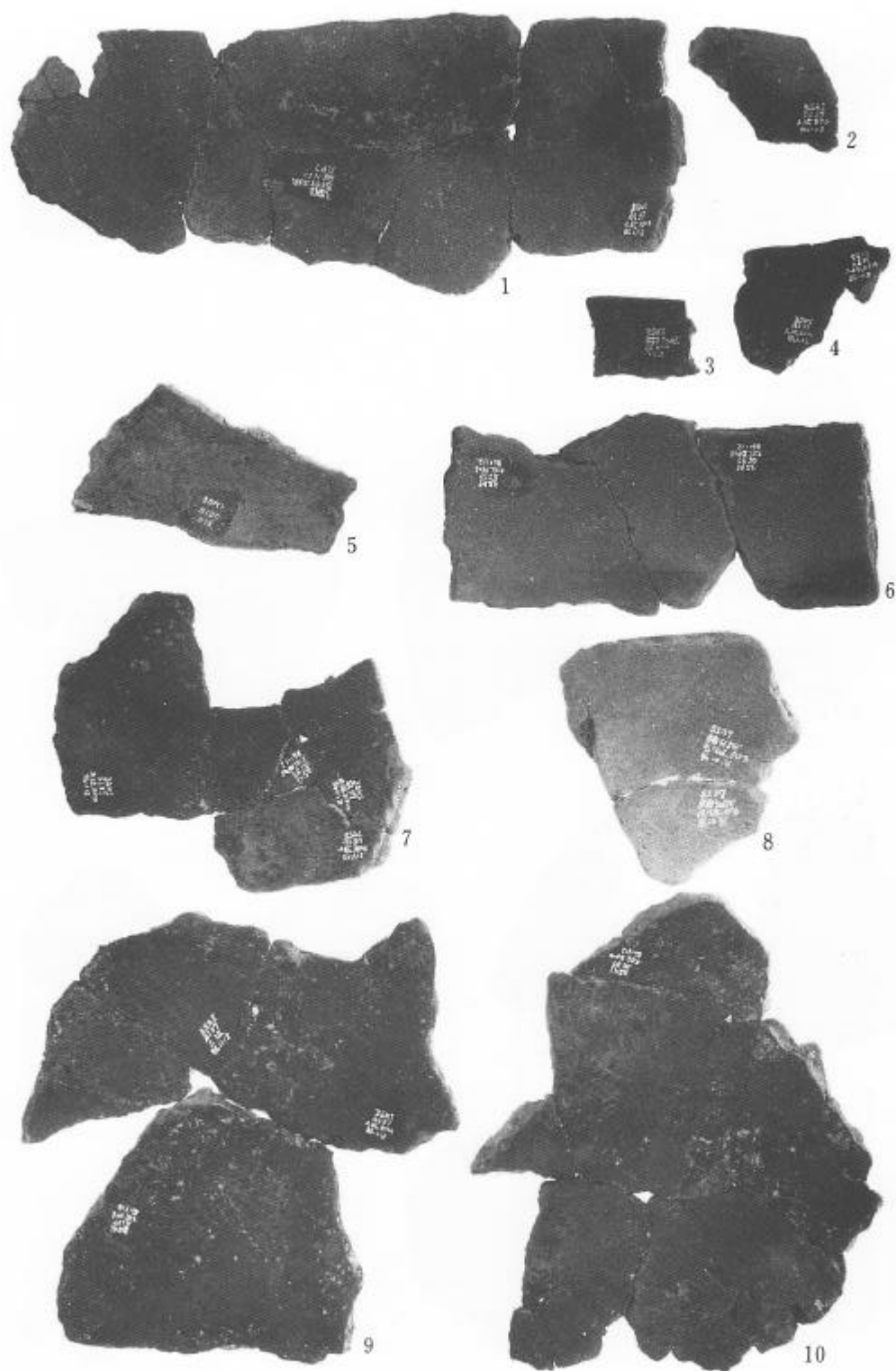


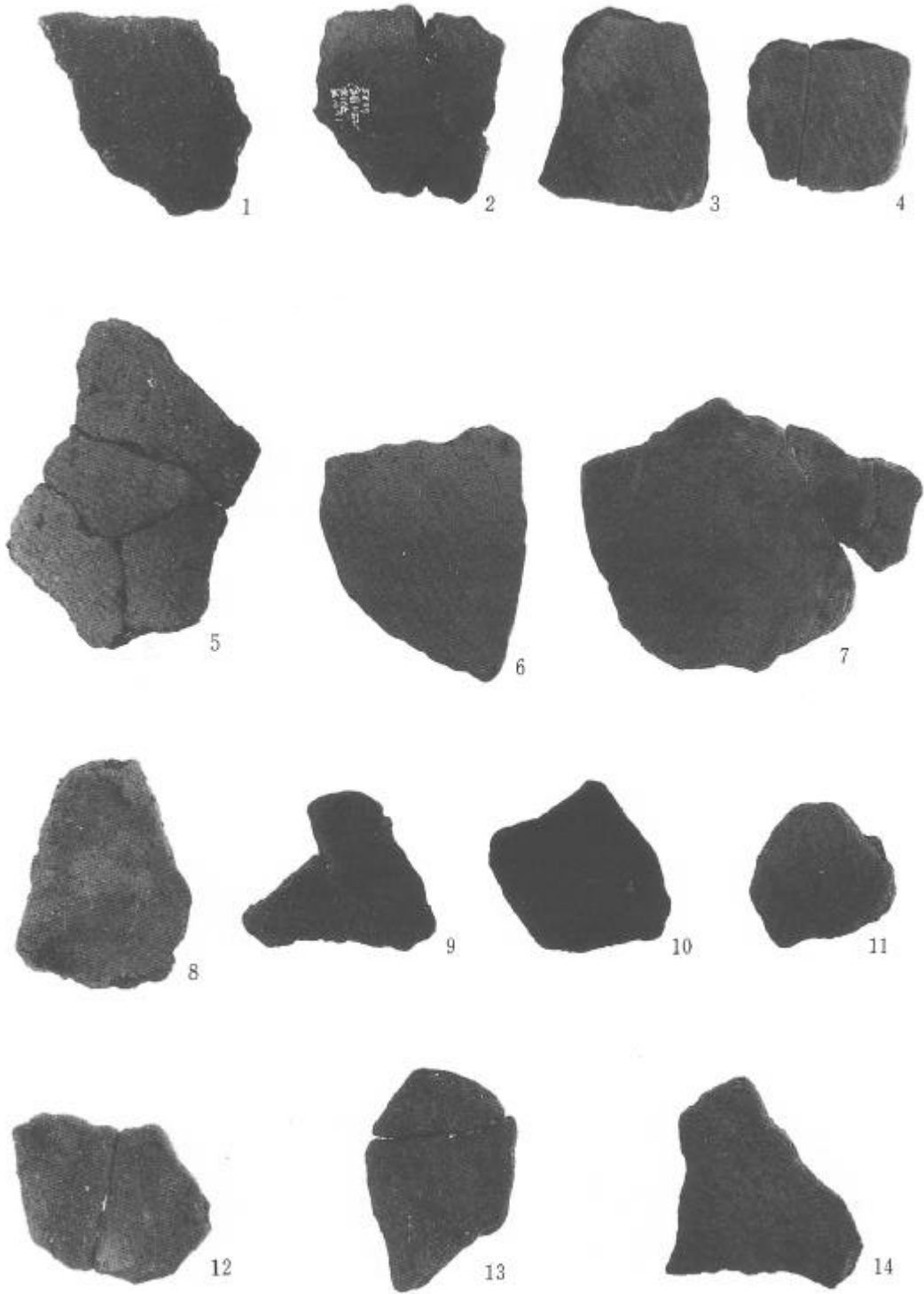


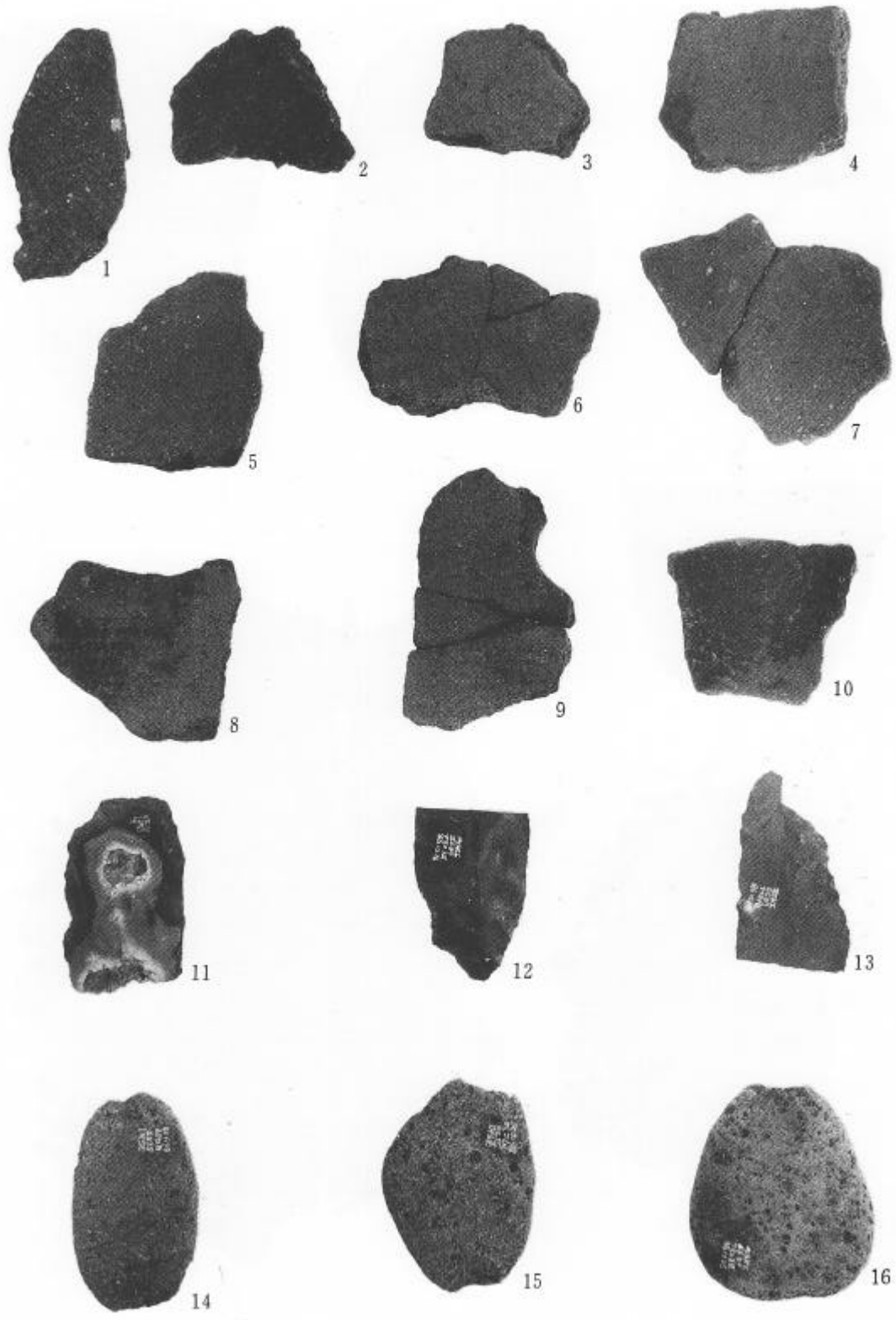


1~3;第2号竖穴住居跡
4~17;第3号竖穴住居跡



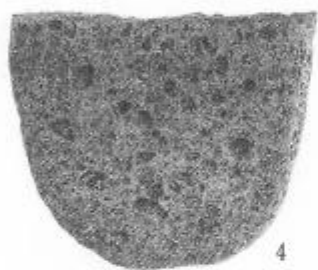


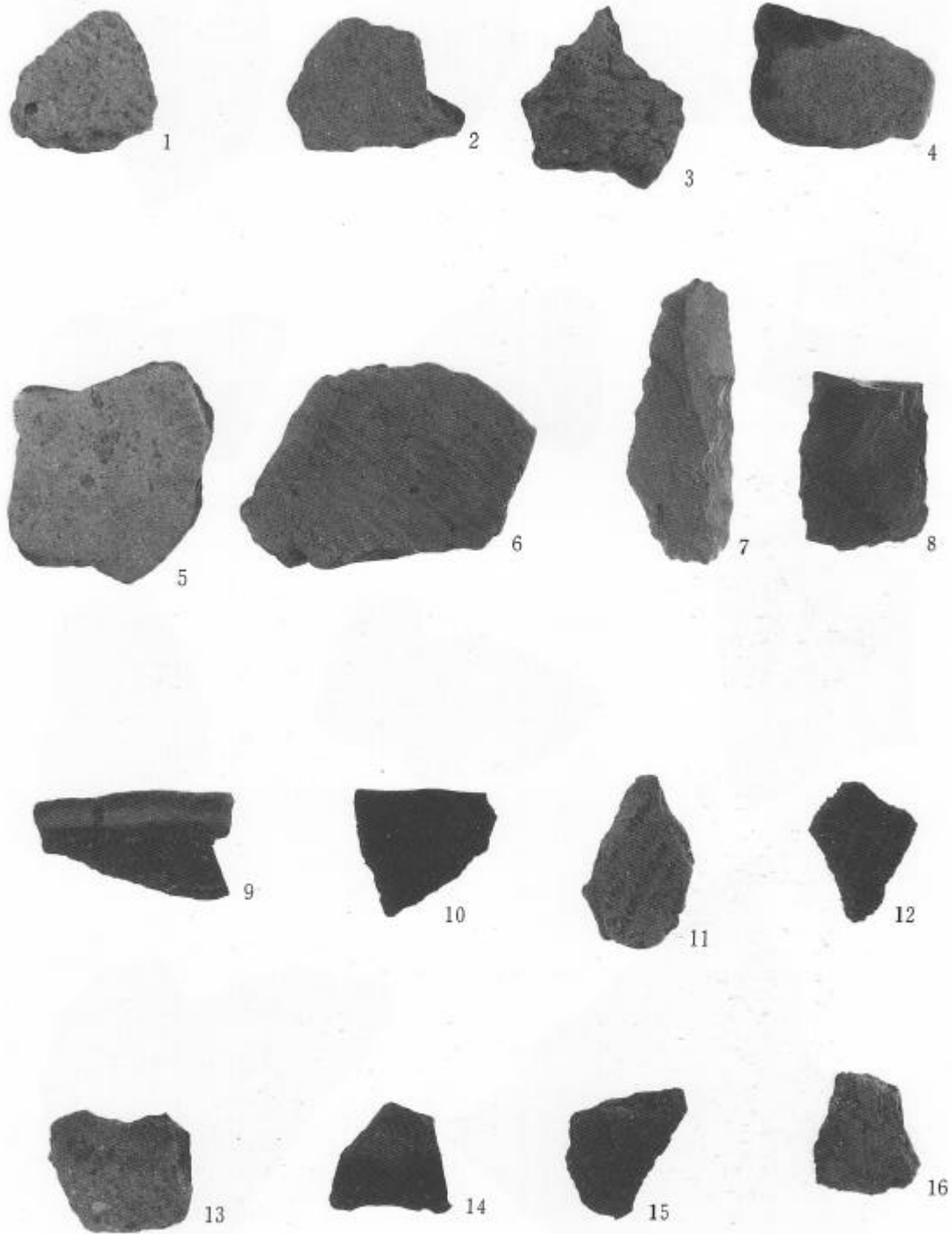




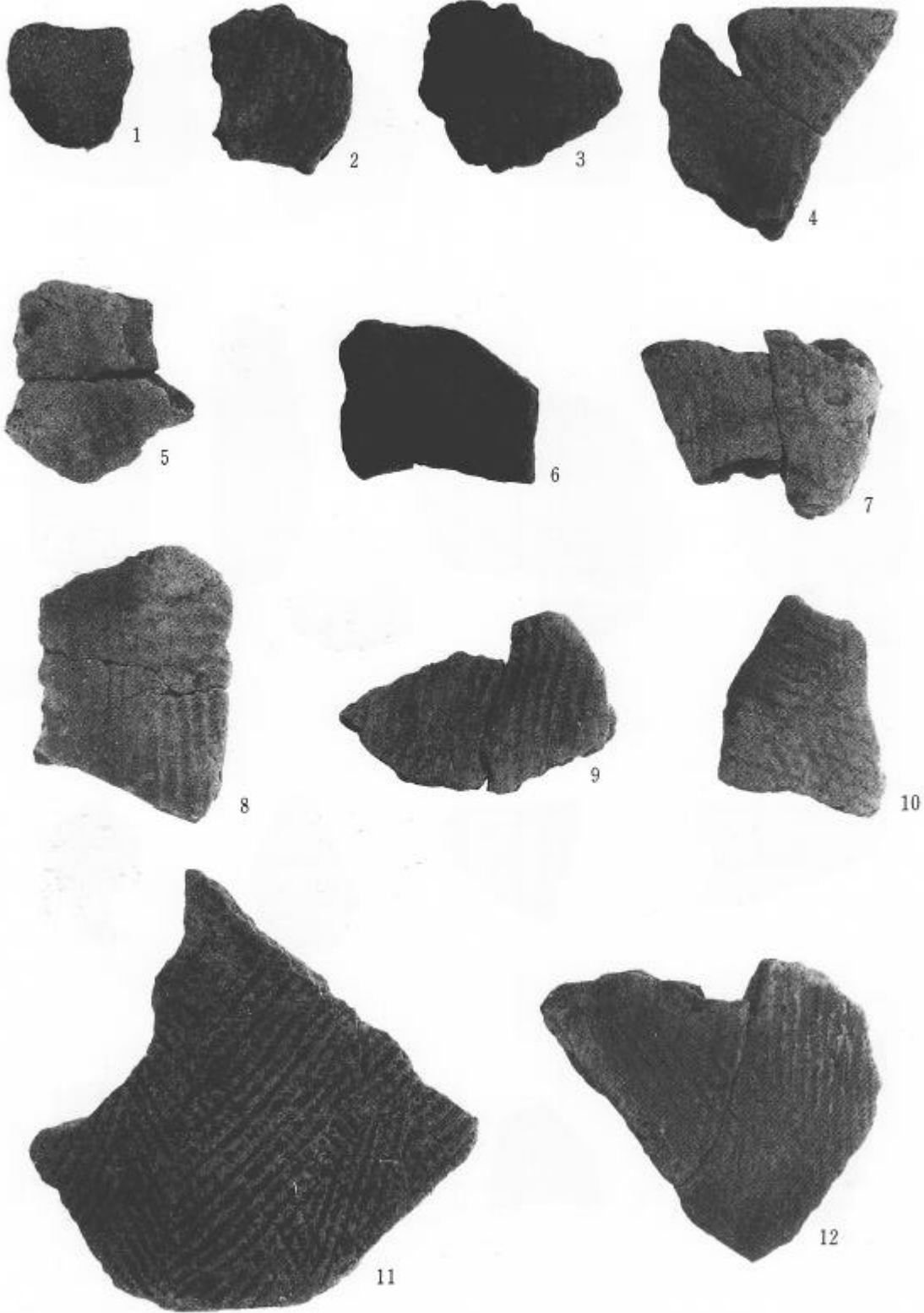
図版15

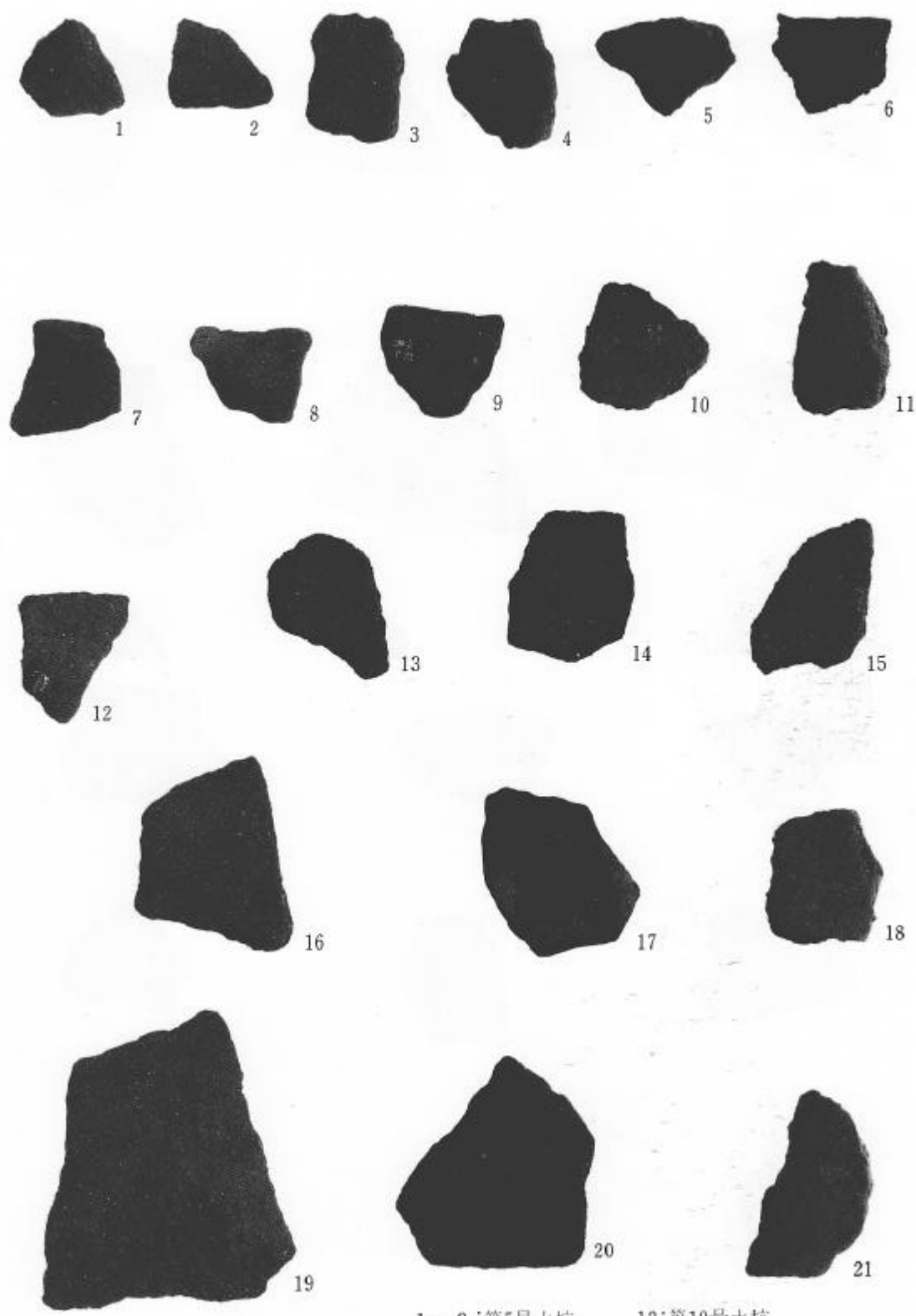
第4号竖穴住居跡出土遺物(3) 表面



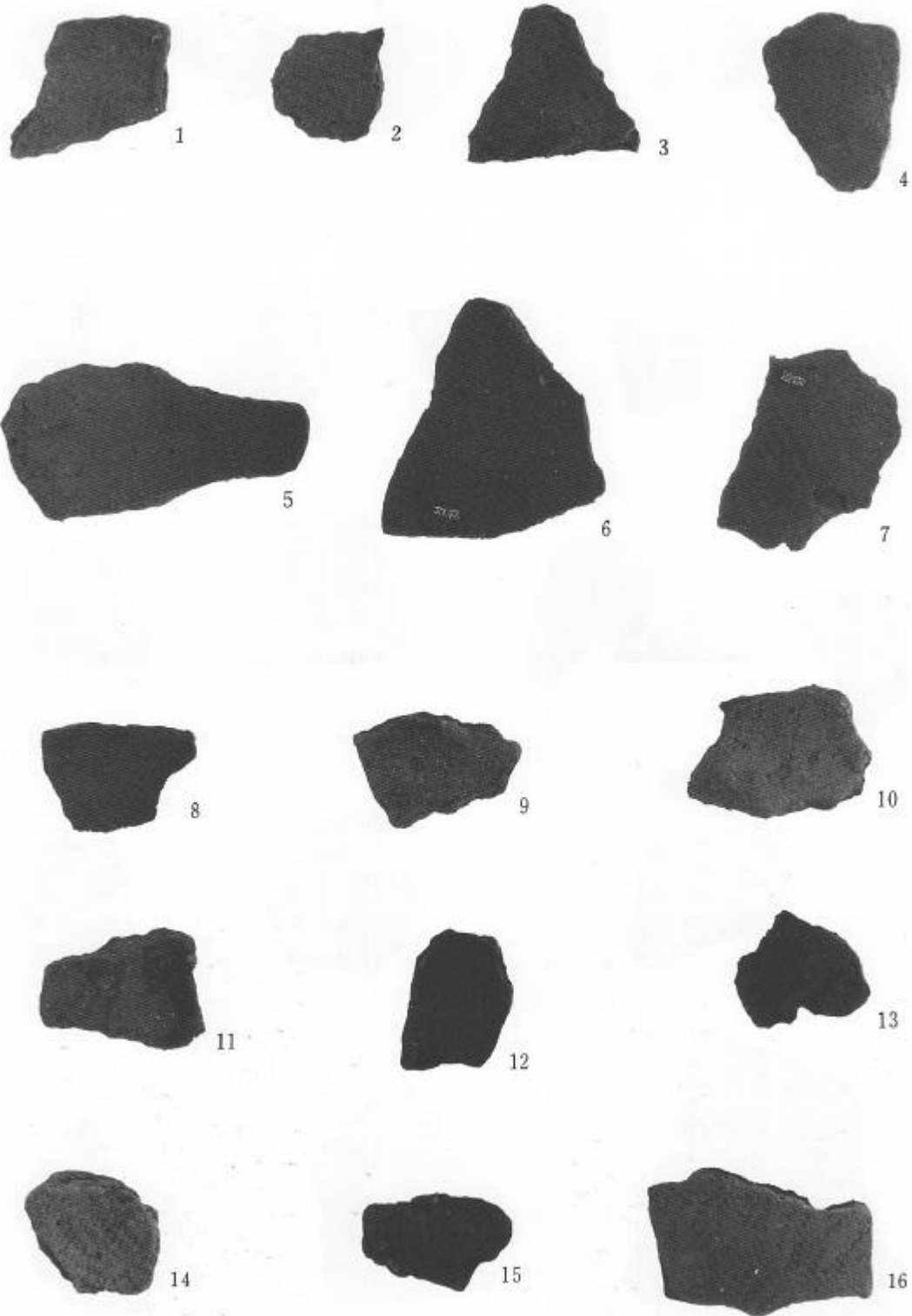


1~8:第5号竖穴住居跡
9~16:第6号竖穴住居跡

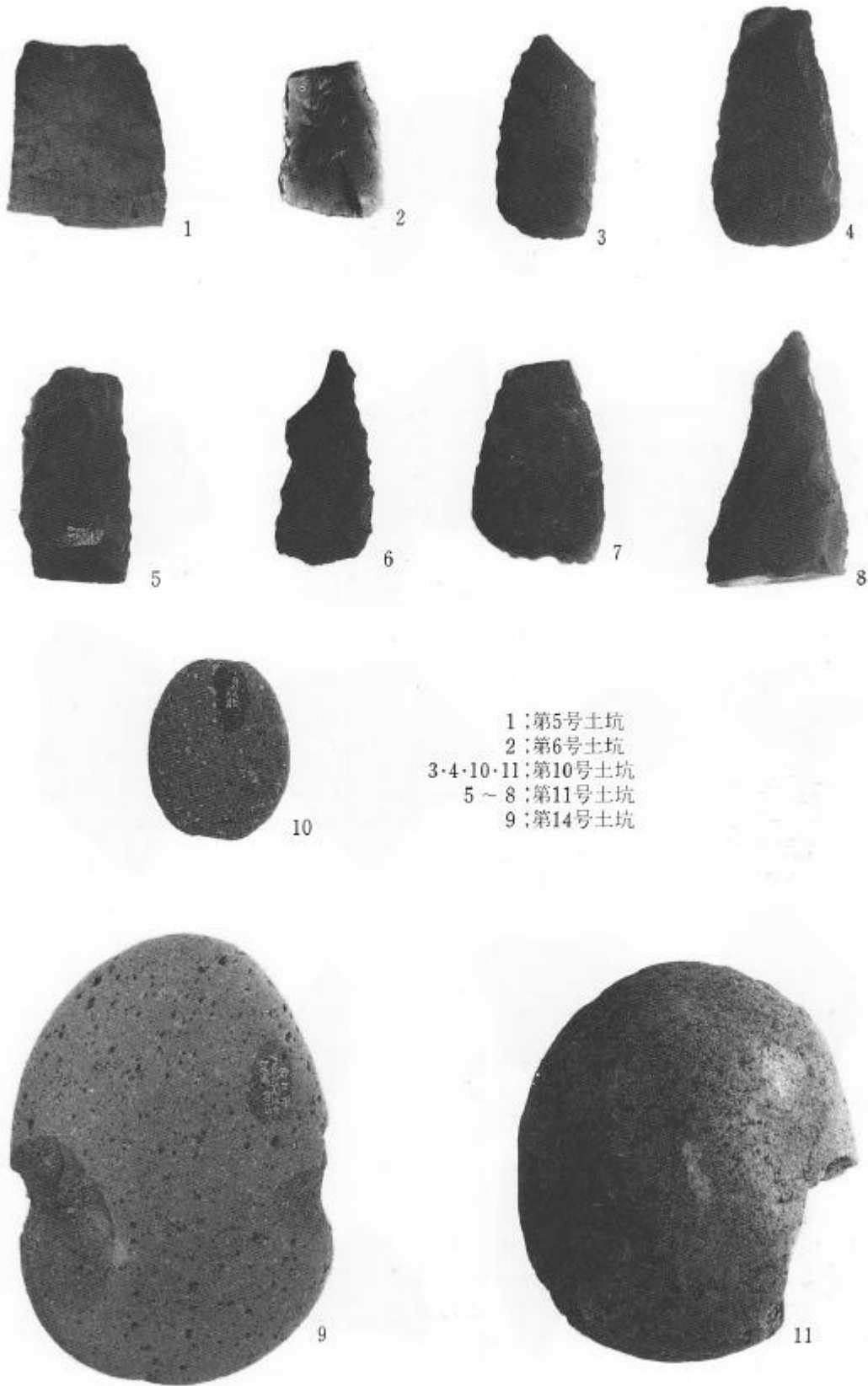




1 ~ 2 : 第5号土坑 12 : 第10号土坑
3 ~ 6 : 第8号土坑 13 ~ 21 : 第11号土坑
7 ~ 11 : 第9号土坑

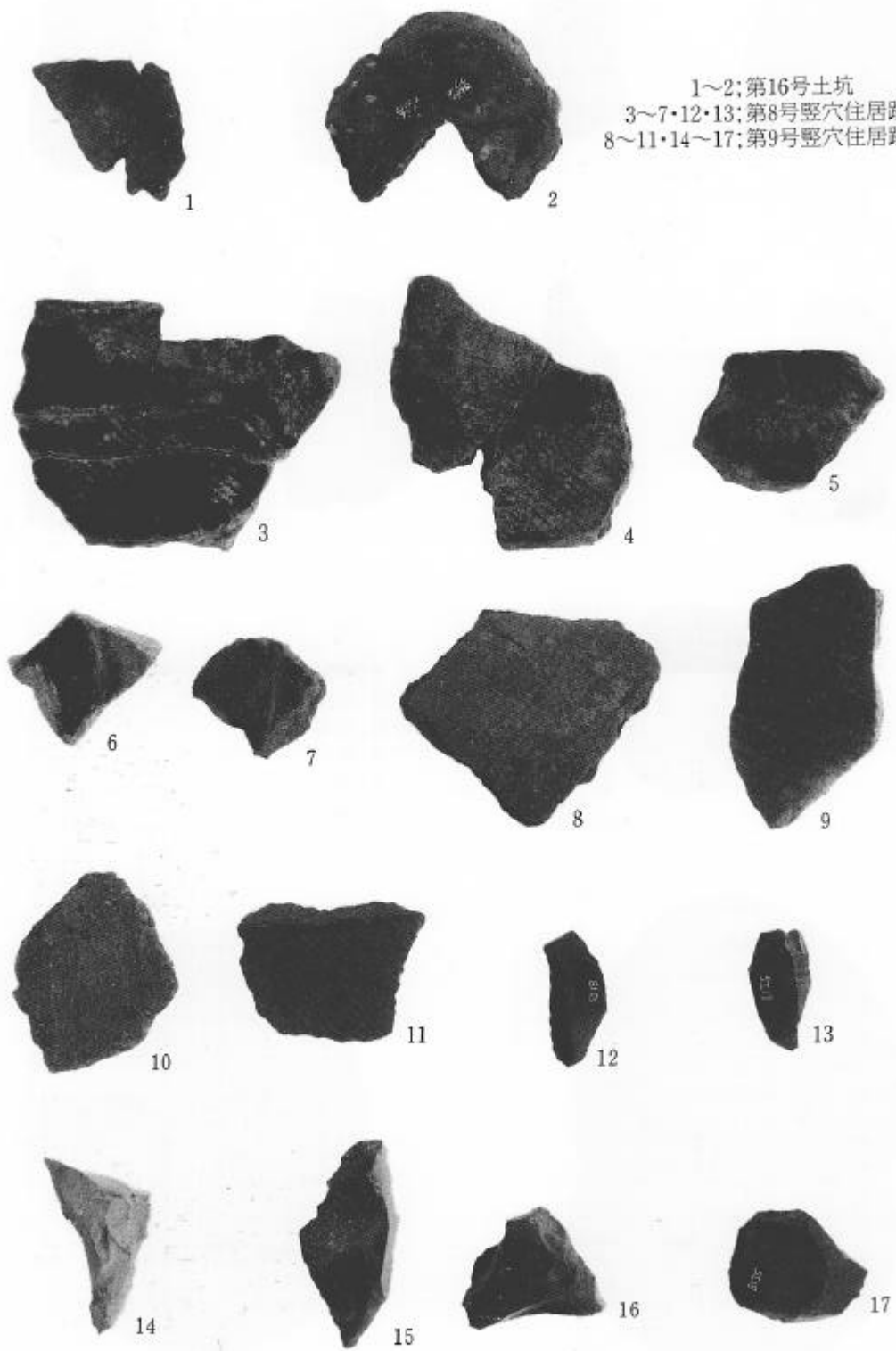


1 ~ 7 ; 第7号竖穴住居跡
8 ~ 15 ; 第12号土坑
16 ; 第14号土坑



図版21

第5号・第6号・第10号・第11号・第14号土坑出土遺物 表面





1. 第2号竖穴住居跡出土遺物



2. 第17号土坑出土遺物



3. 第1号土器埋設遺構蓋石



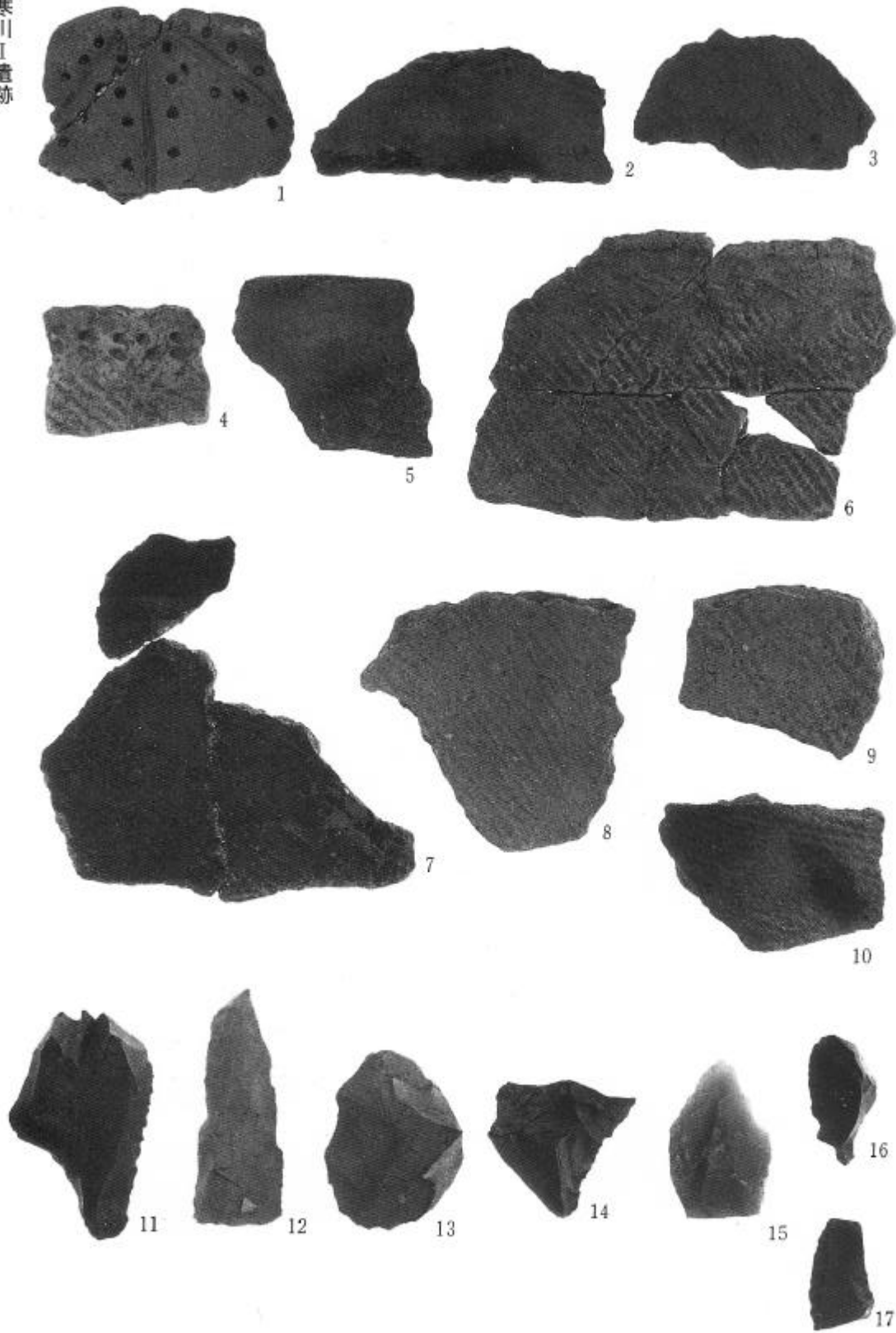
4. 第10号竖穴住居跡出土遺物(1)

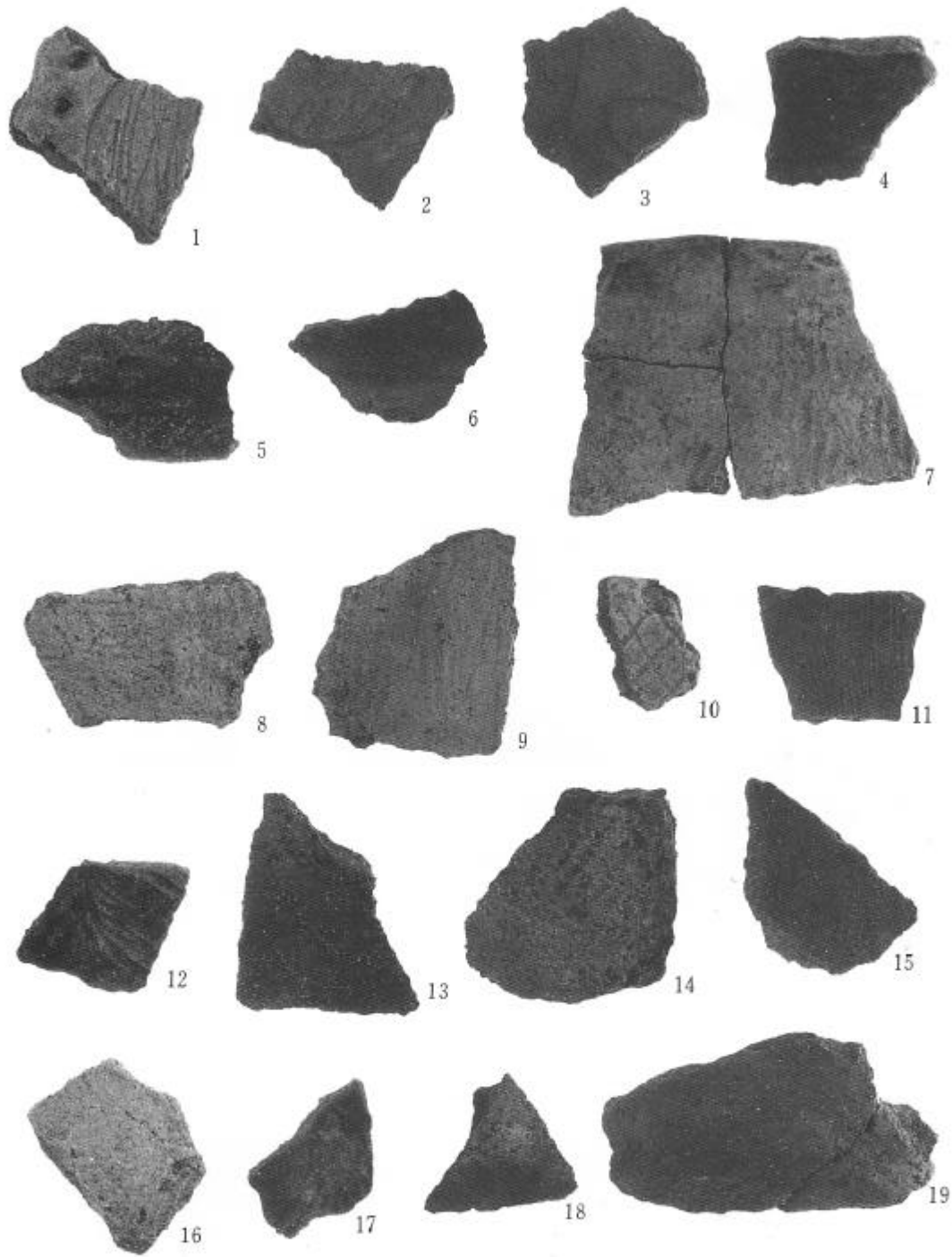


5. 第9号竖穴住居跡出土遺物(2)



6. 第9号竖穴住居跡出土遺物(3)





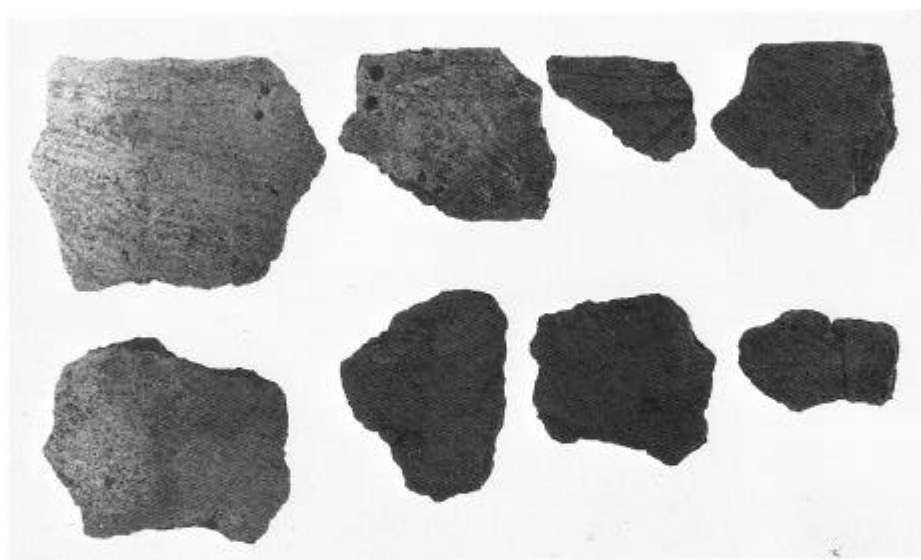
1 ~ 9 : 第11号竖穴住居跡
10 · 20 : 第20号土坑
11 ~ 19 : 第2号土壙墓



1. 第11号竖穴住居跡出土遺物



2. 第12号竖穴住居跡出土遺物



3. 第18号土坑出土遺物1)



4. 第1号土器埋設遺構・土器



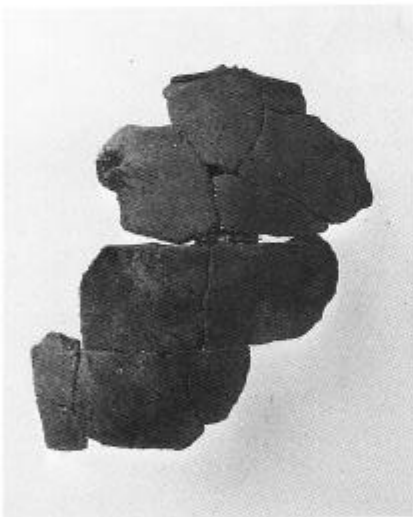
5. 第2号土器埋設遺構・土器



1. 第1号土壙墓出土遺物



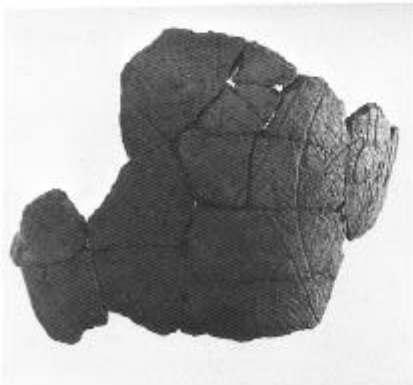
2. 第2号土壙墓出土遺物



3. 第3号土壙墓出土遺物(1)



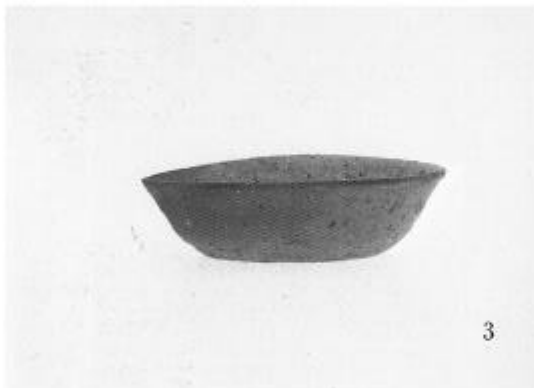
4. 第3号土壙墓出土遺物(2)

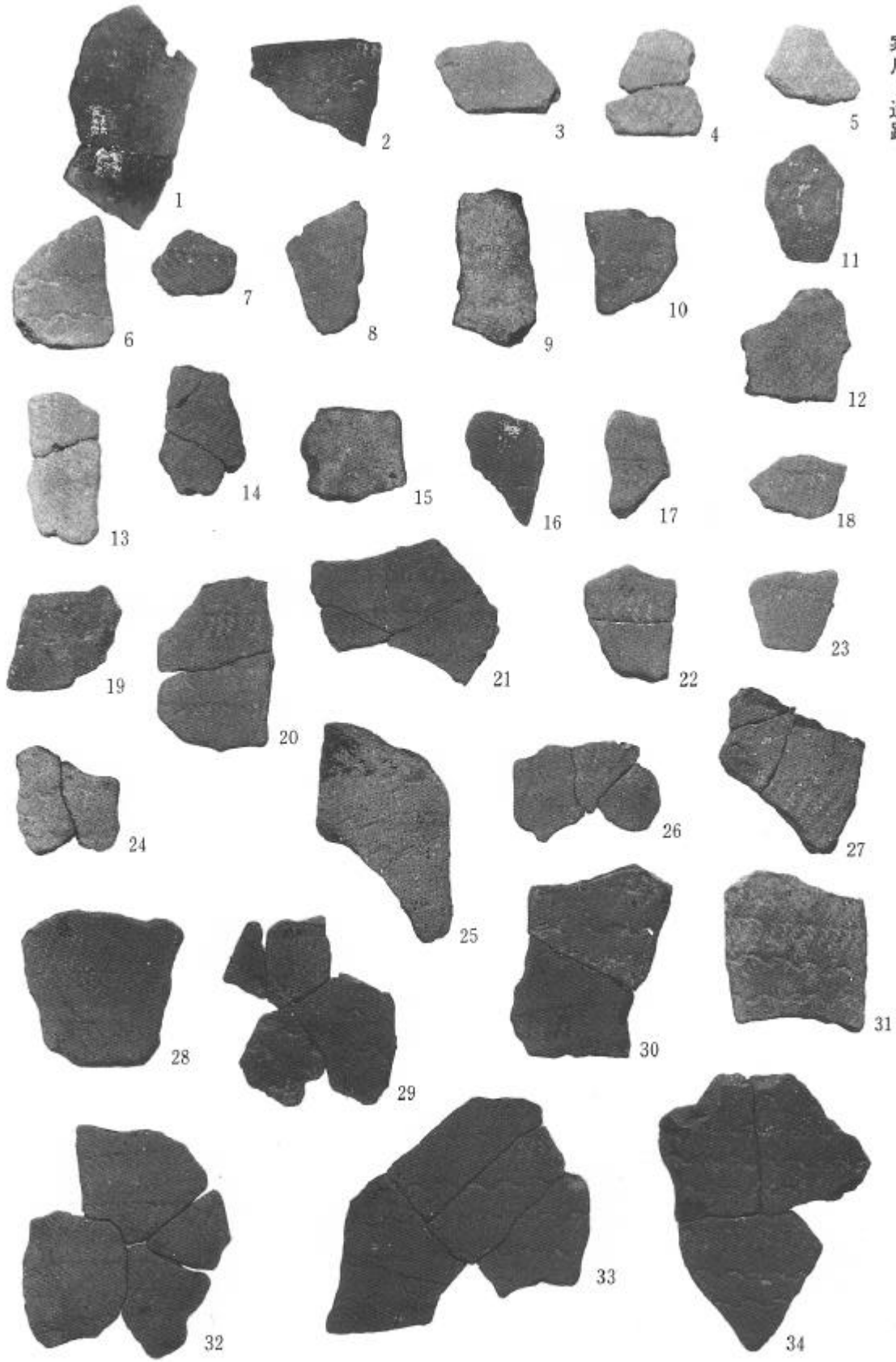


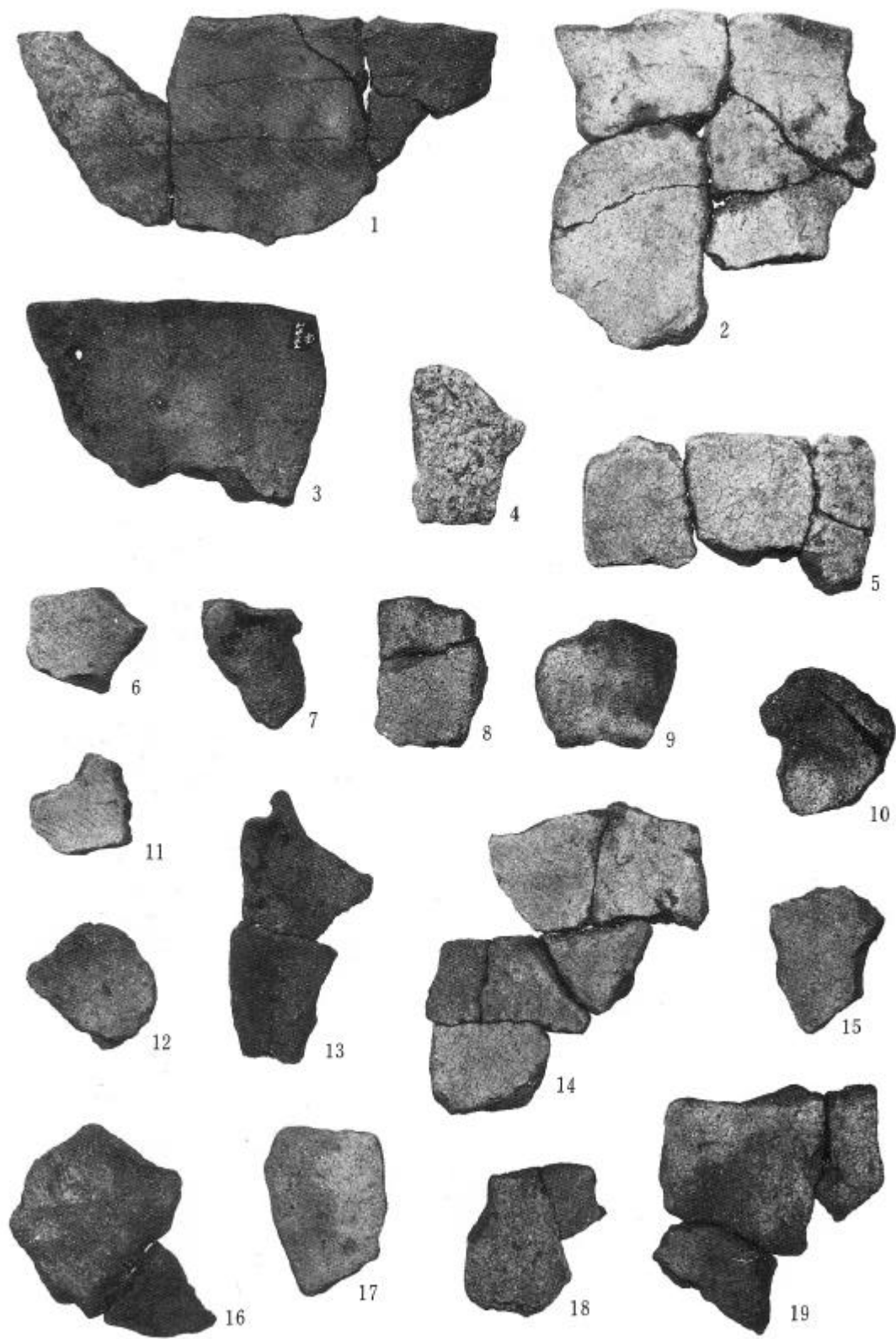
図版27 5. 第18号土坑出土遺物(2)

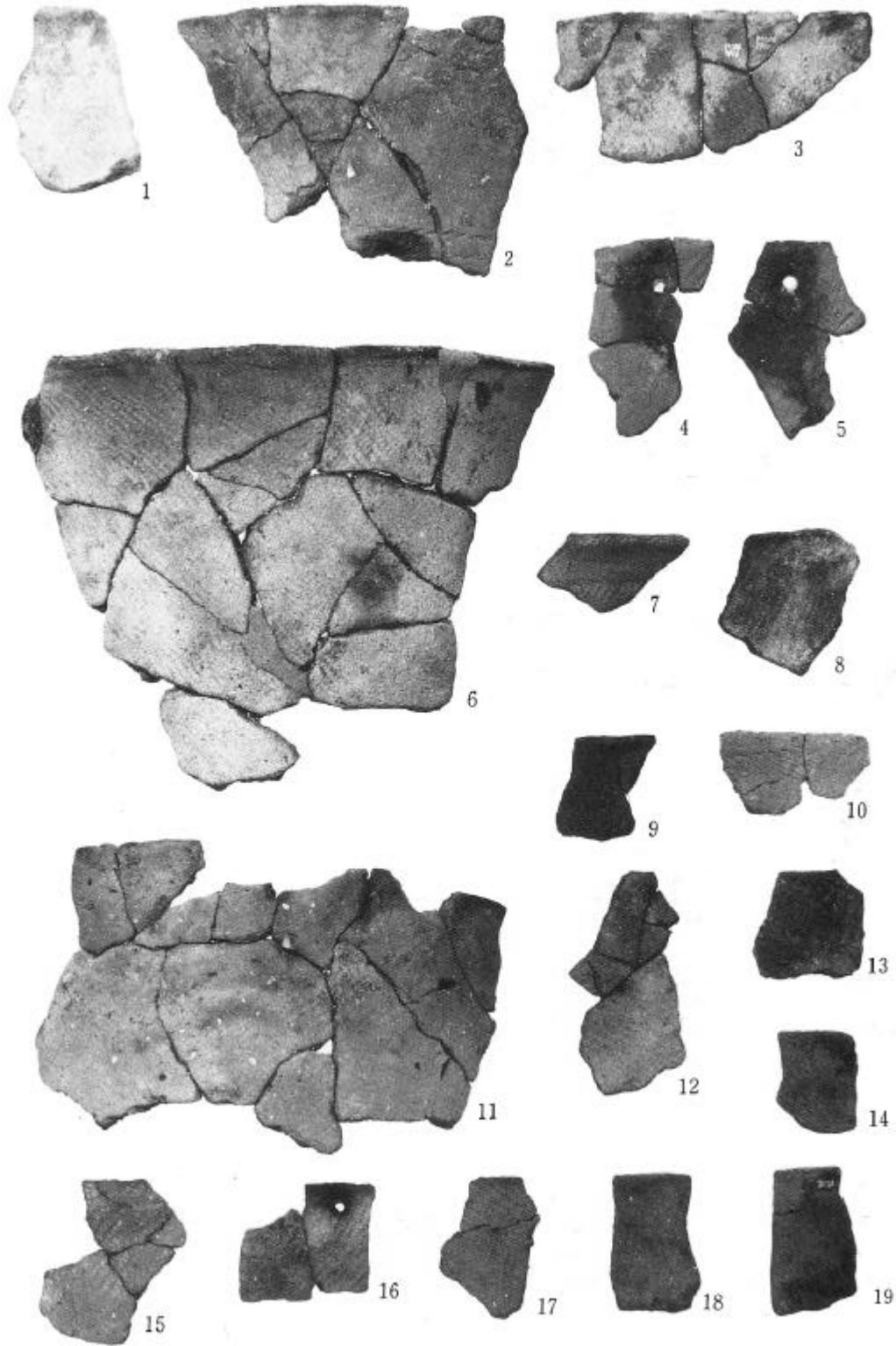


6. MB48グリッド出土土器



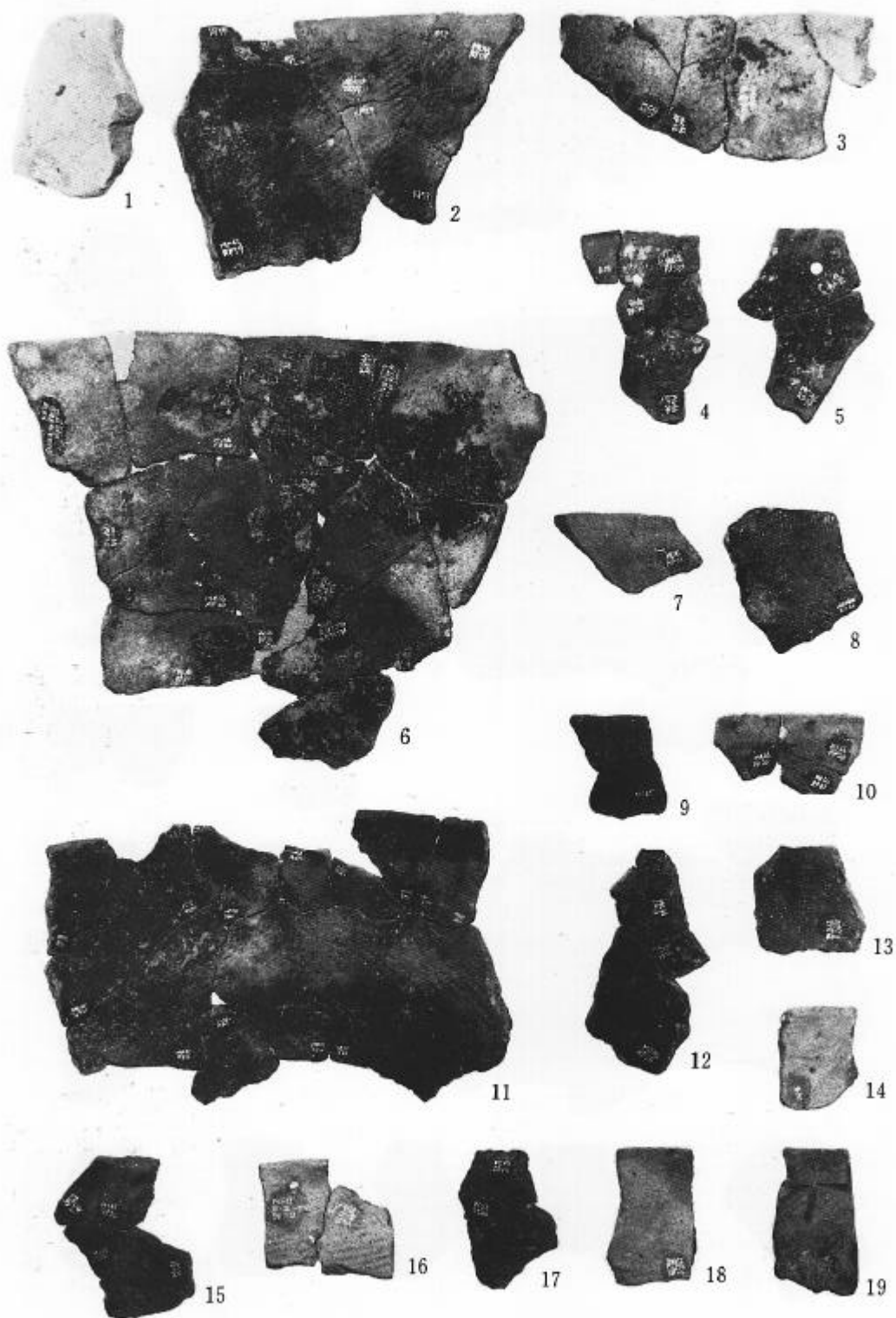






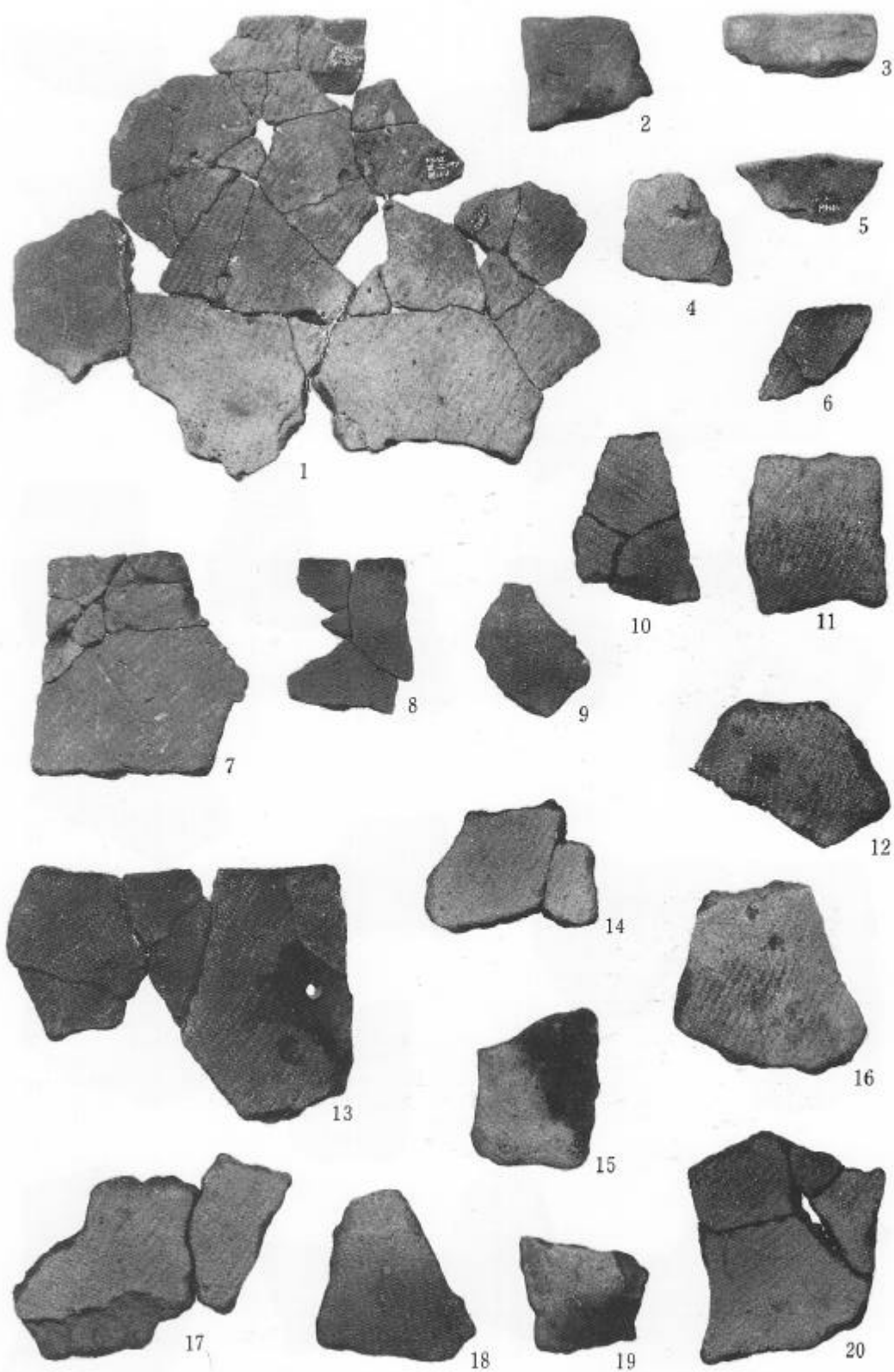
図版31

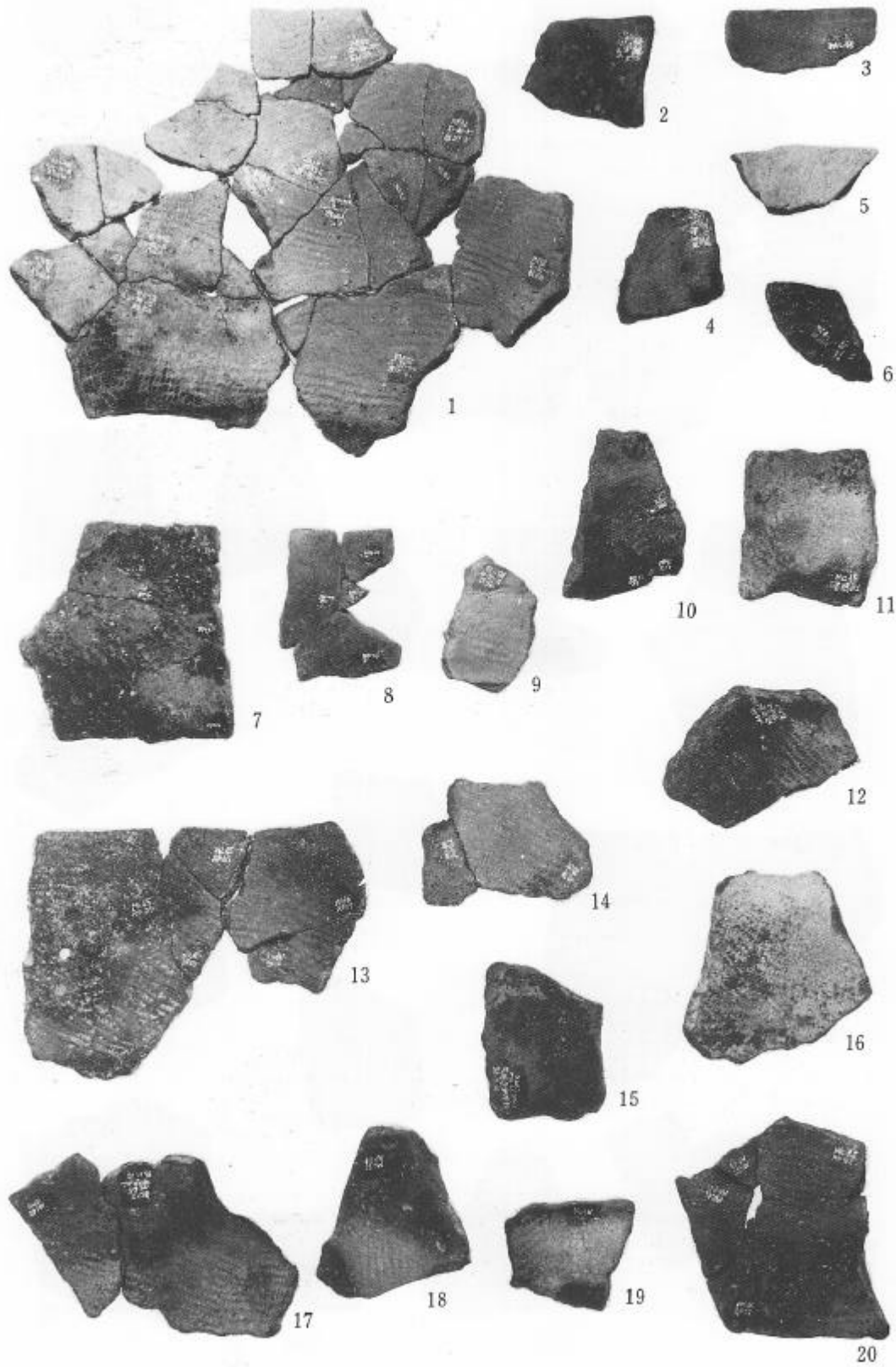
遺構外出土の縄文土器(3) 早期～前期 表面

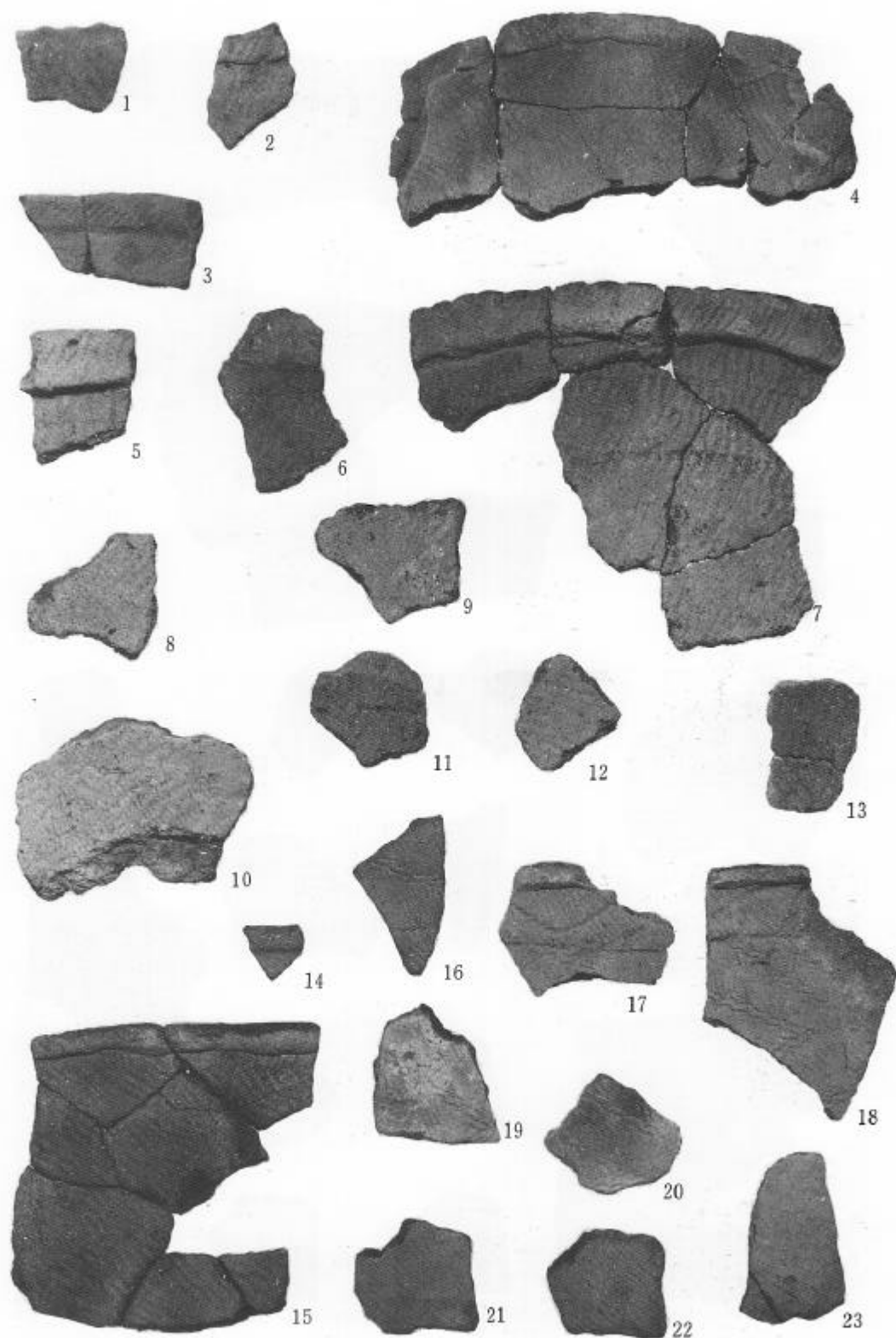


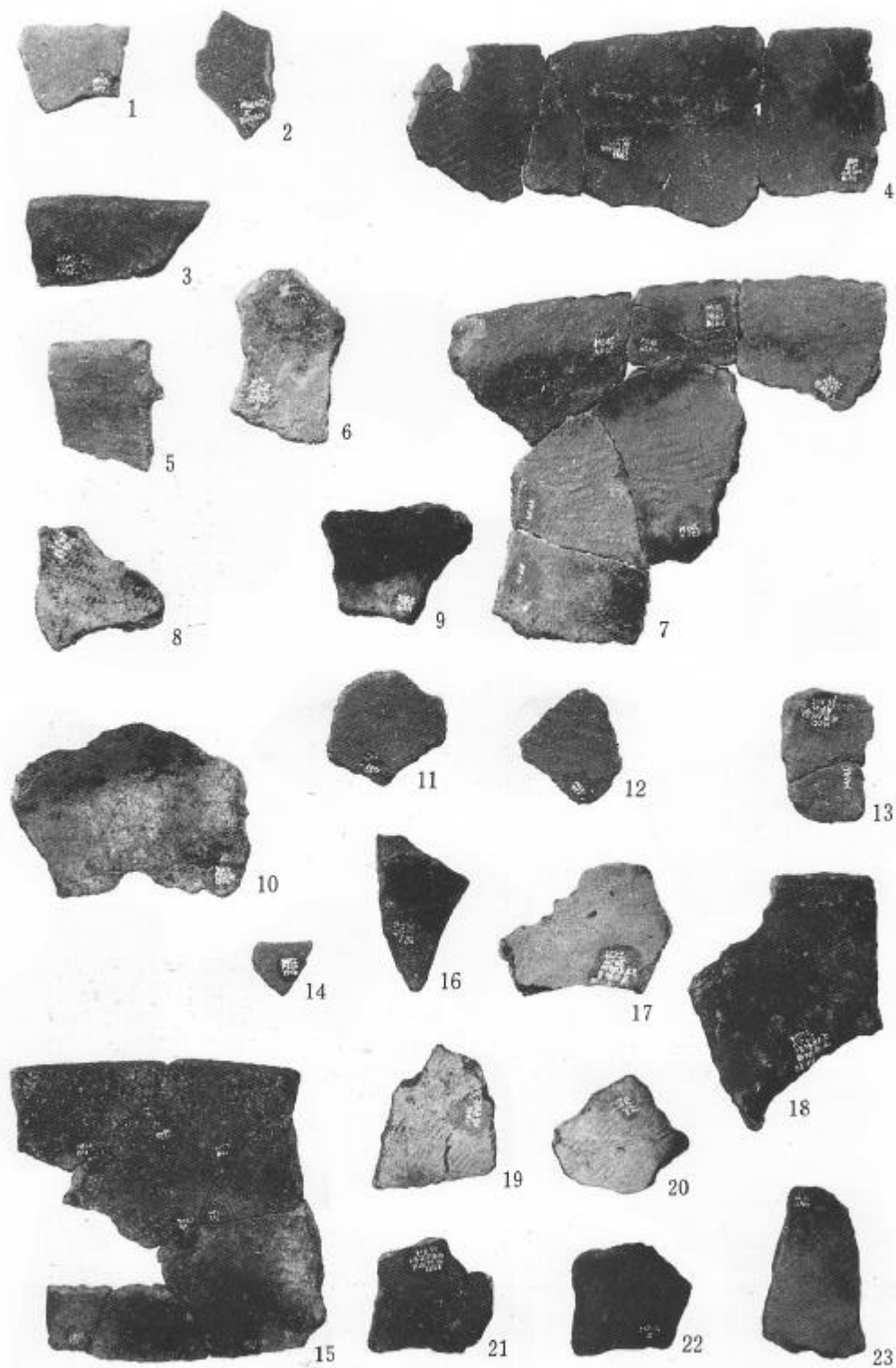
図版32

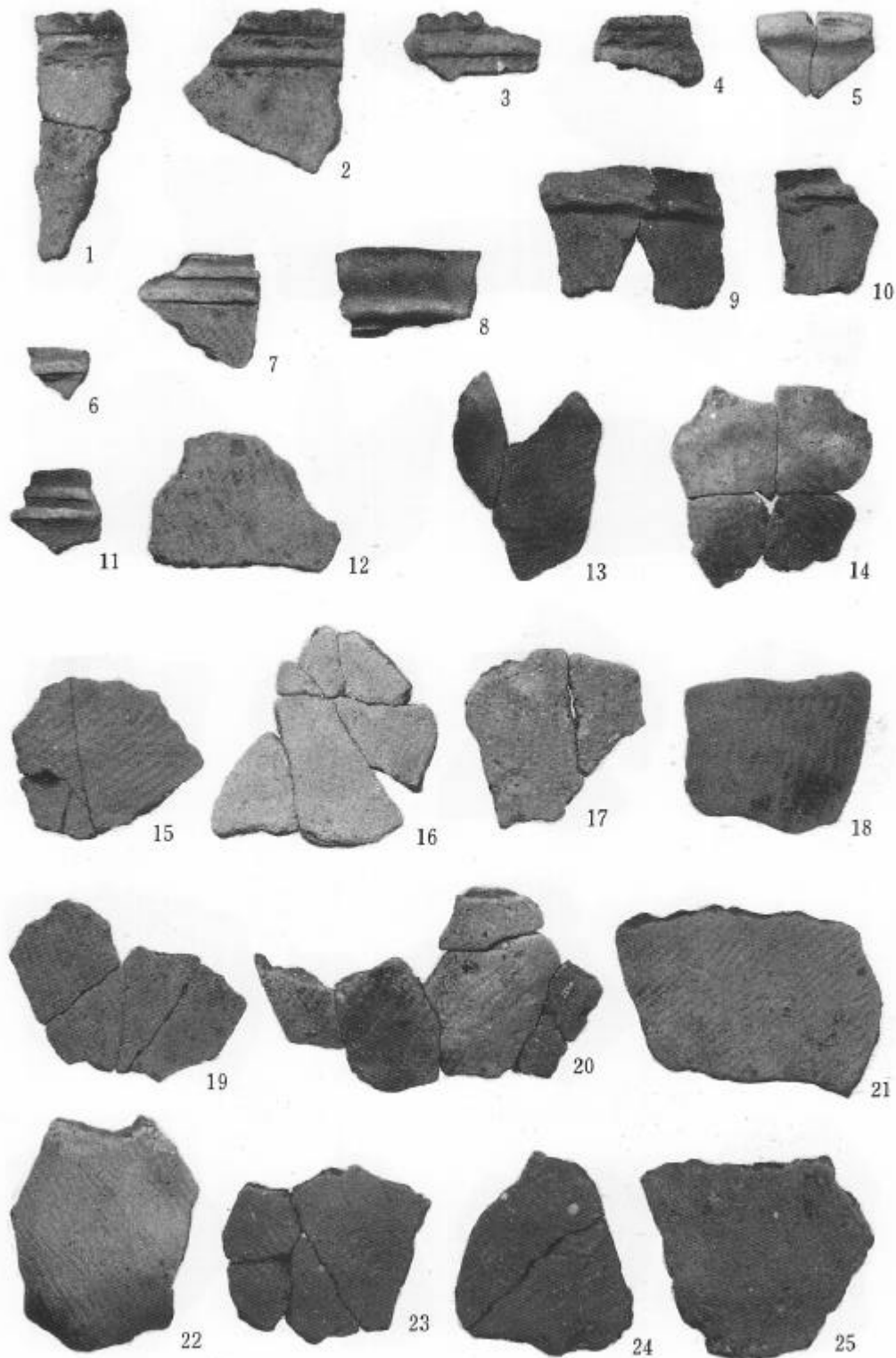
遺構外出土の縄文土器(3) 早期～前期 裏面





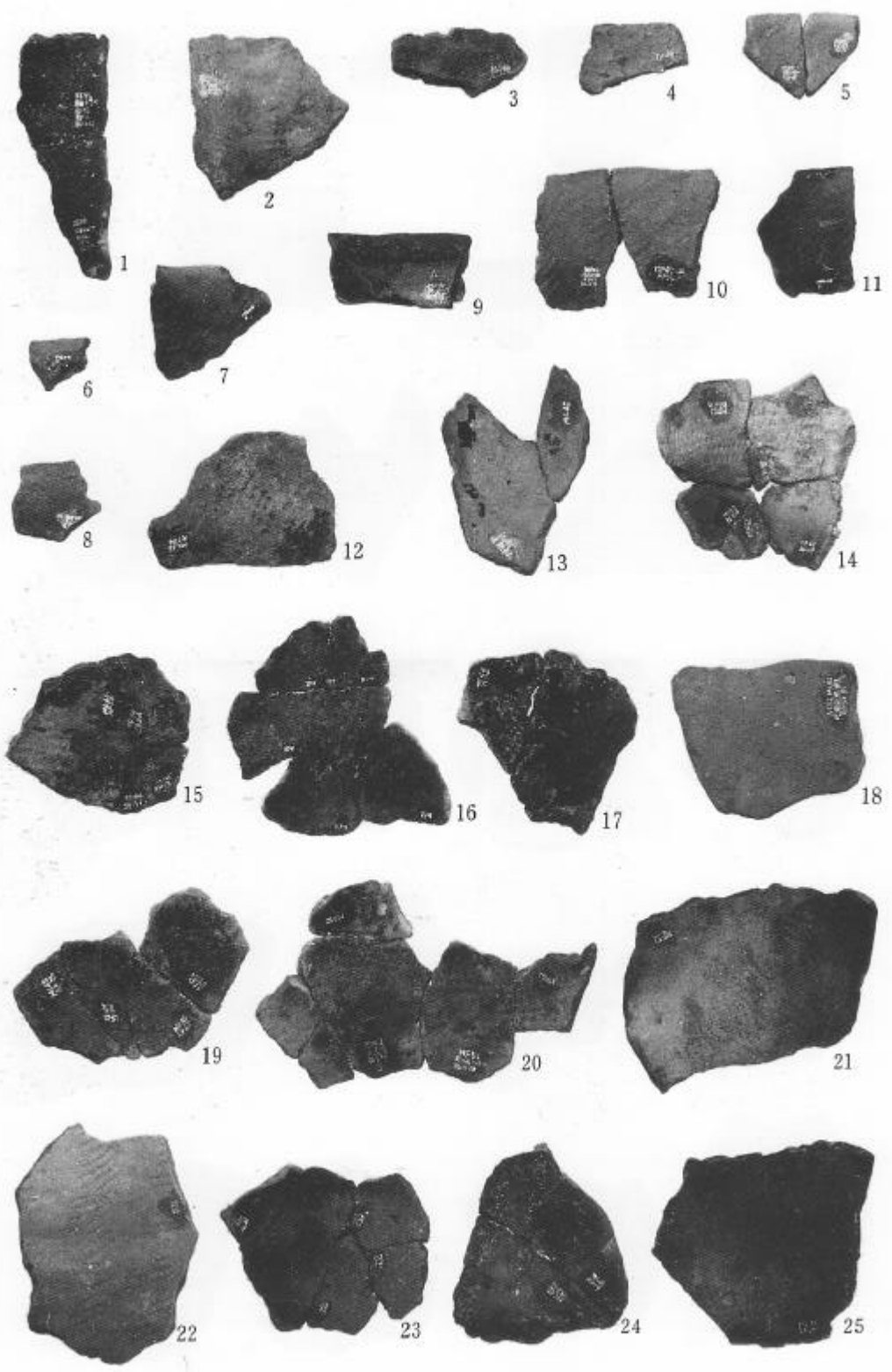


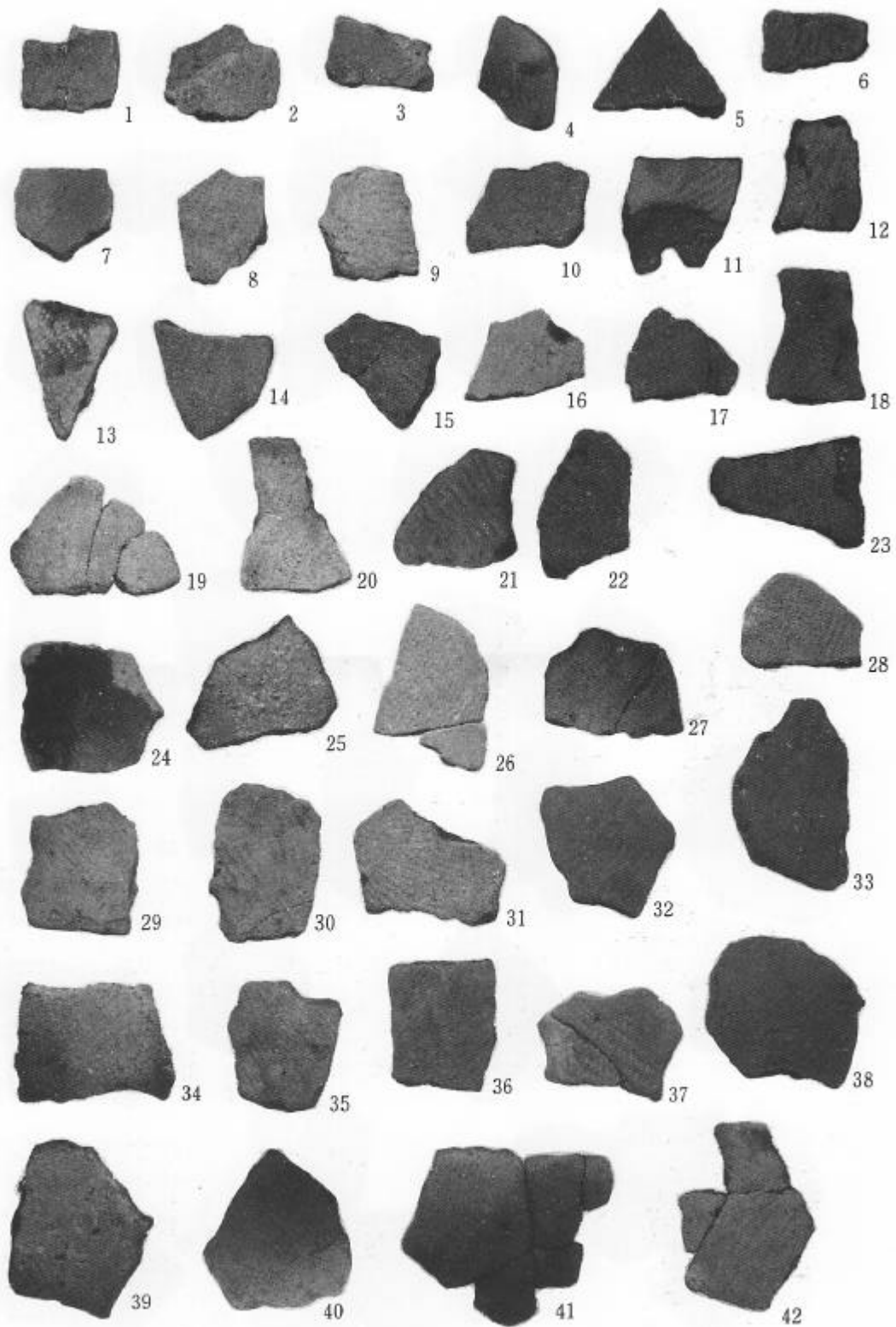


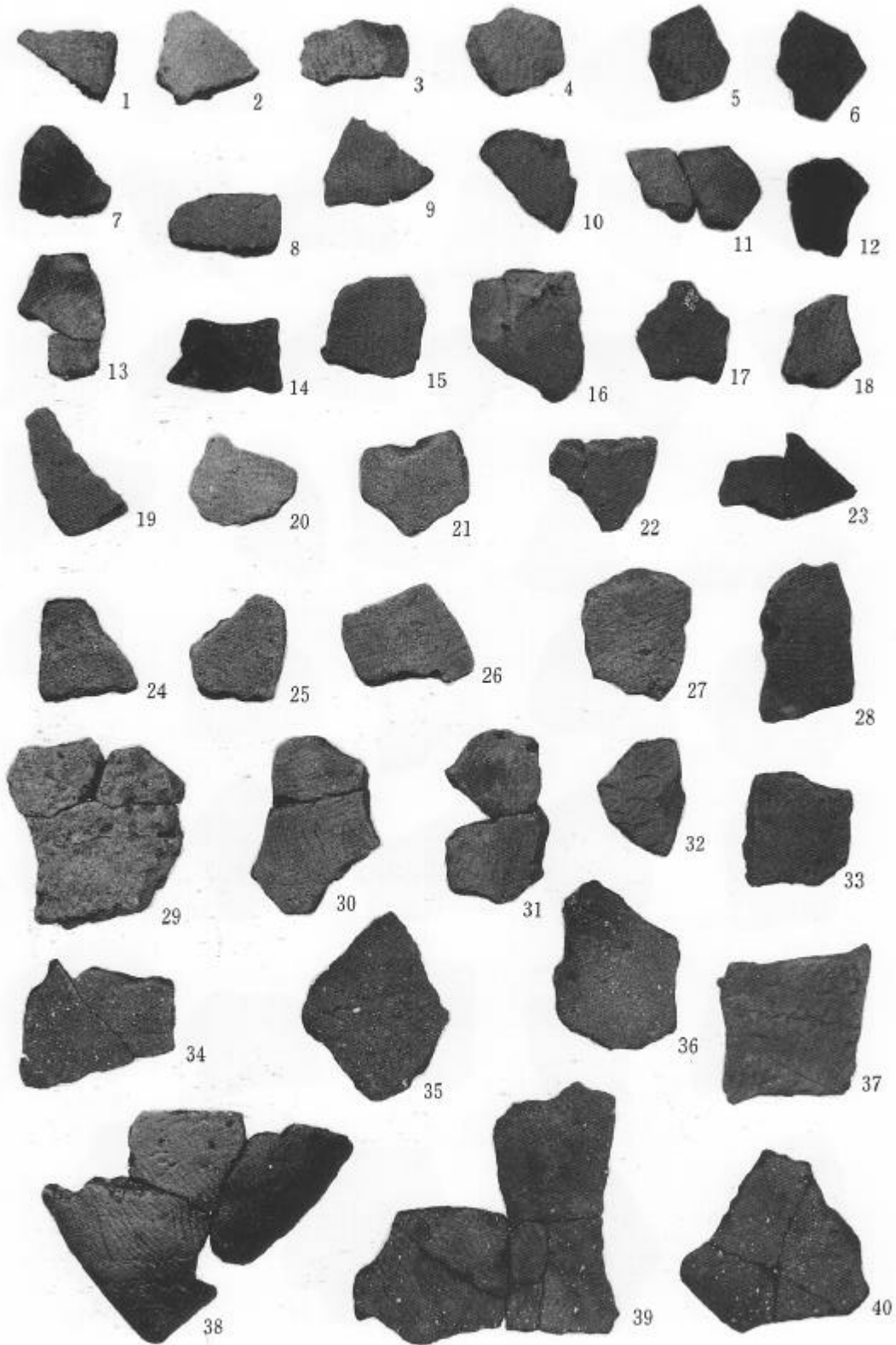


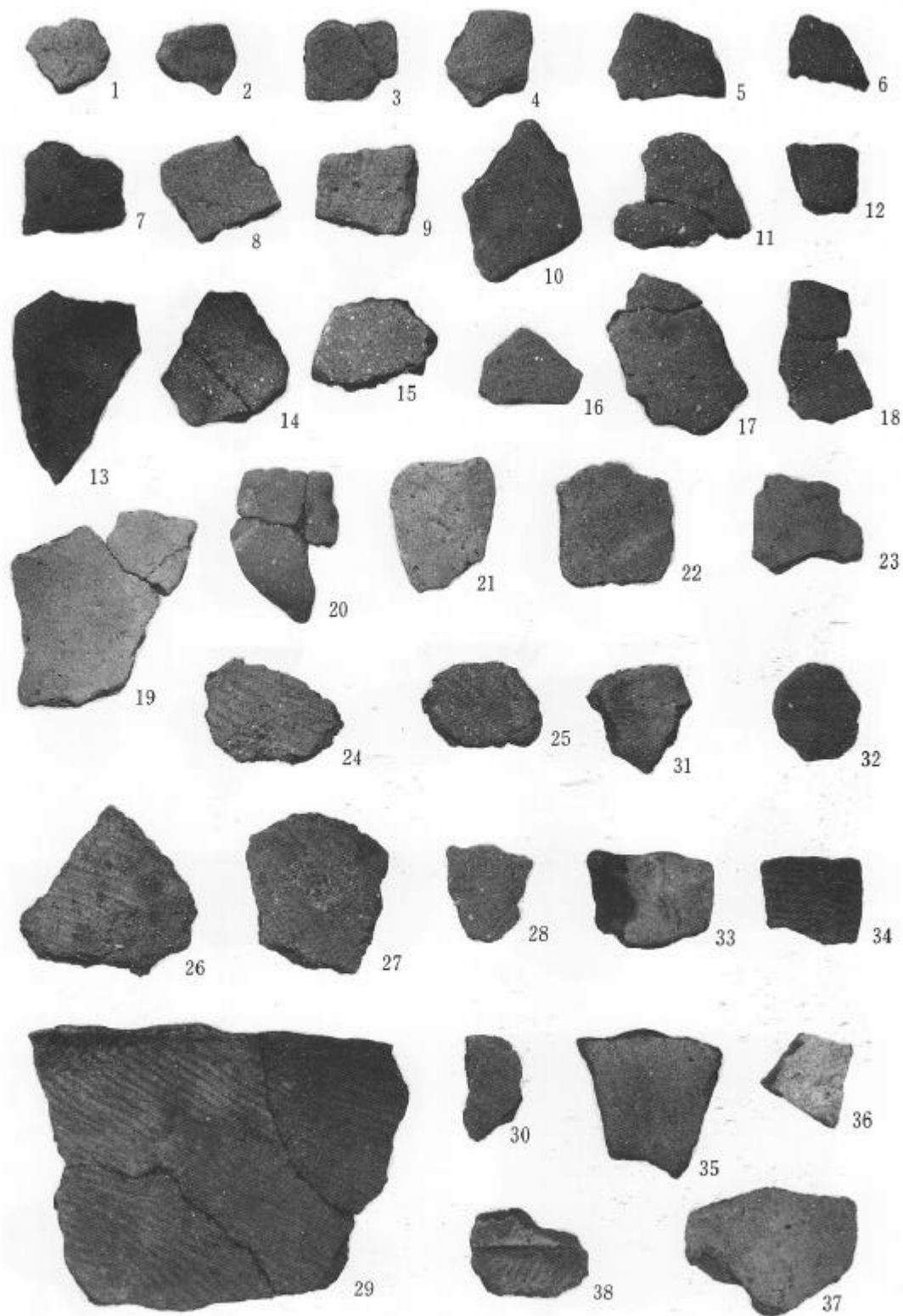
図版37

遺構外出土の縄文土器(6) 早期～前期 表面



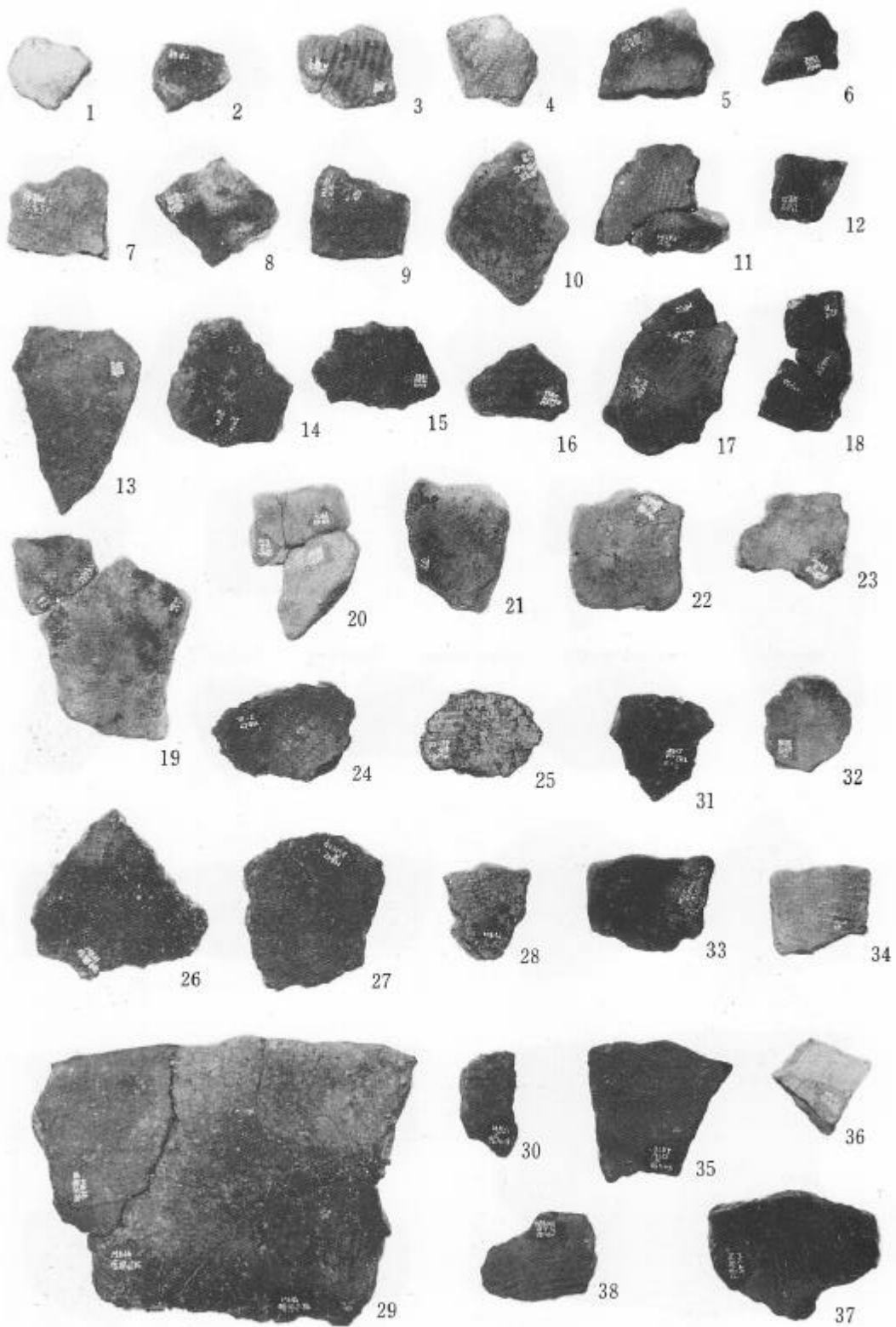


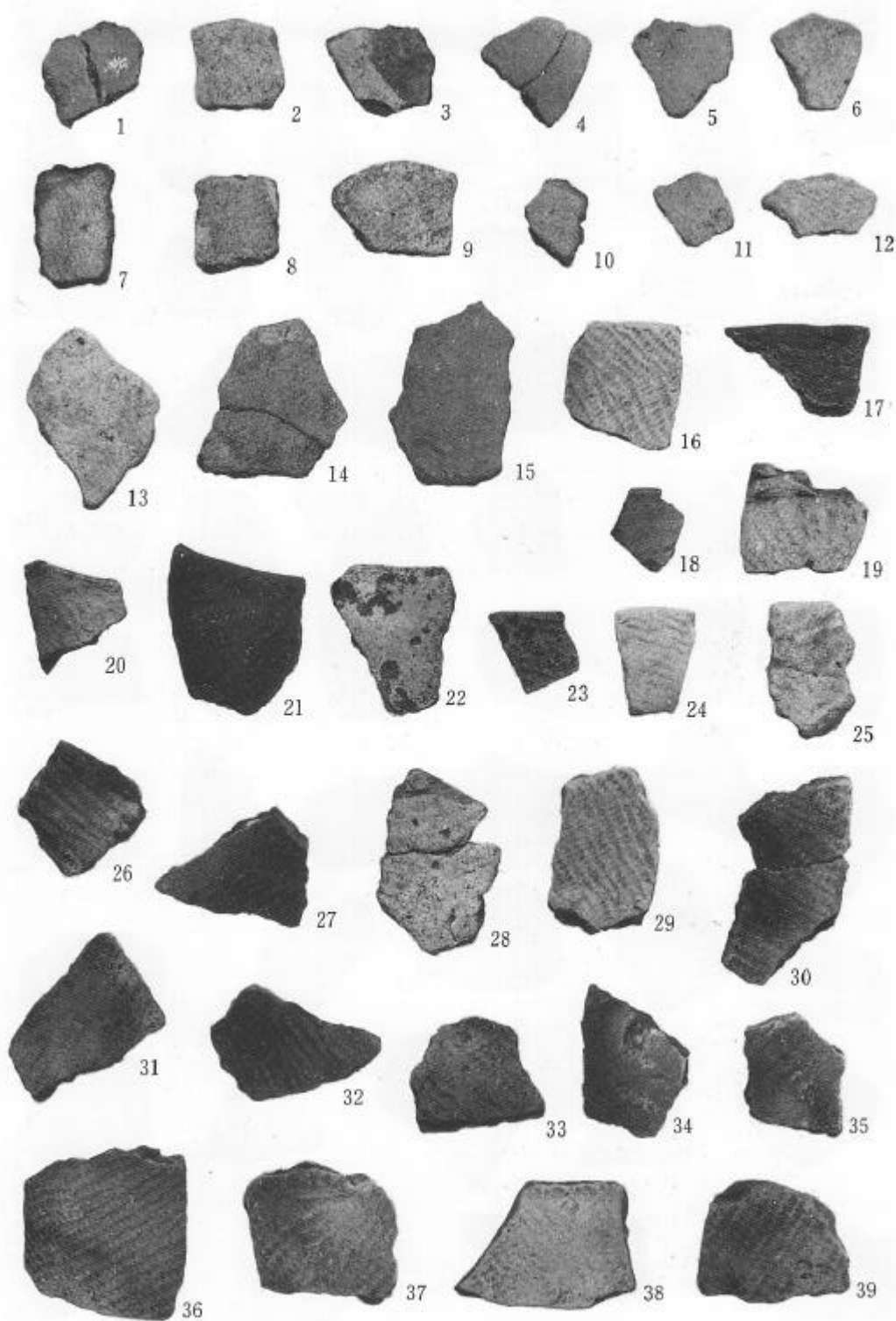




図版41

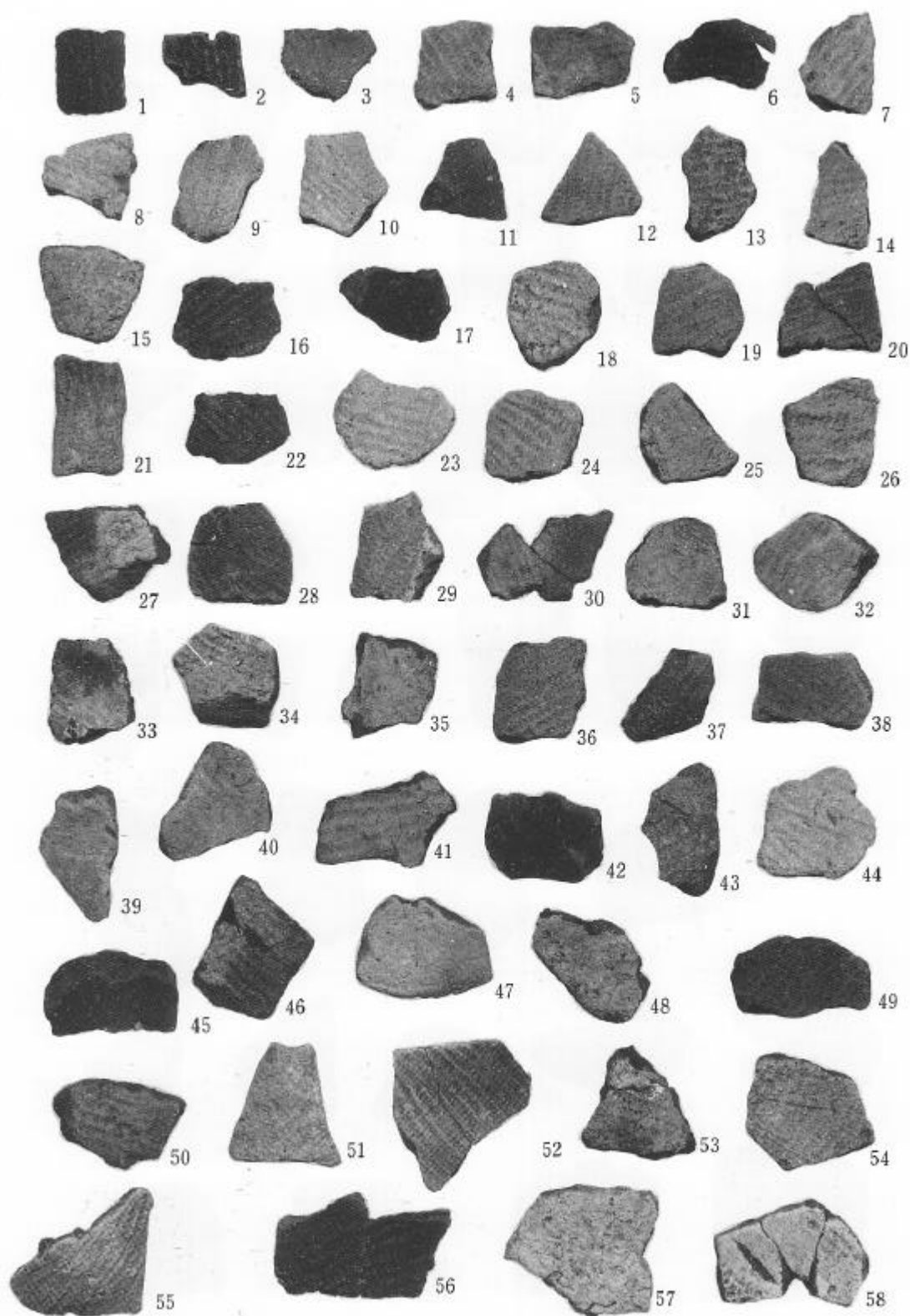
遺構外出土の縄文土器(9) 早期～前期 表面





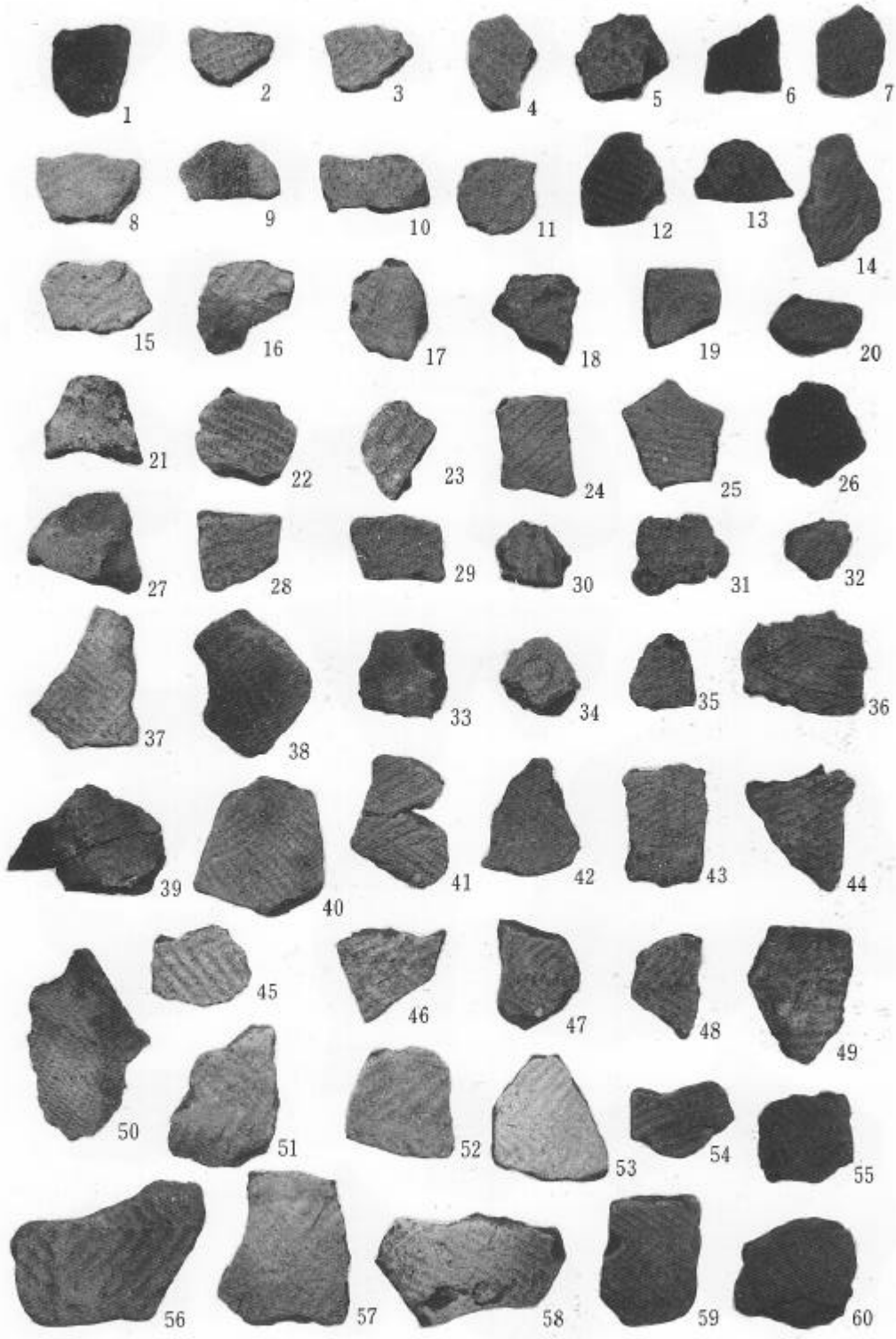
図版43

遺構外出土の縄文土器(10) 早期～前期 表面



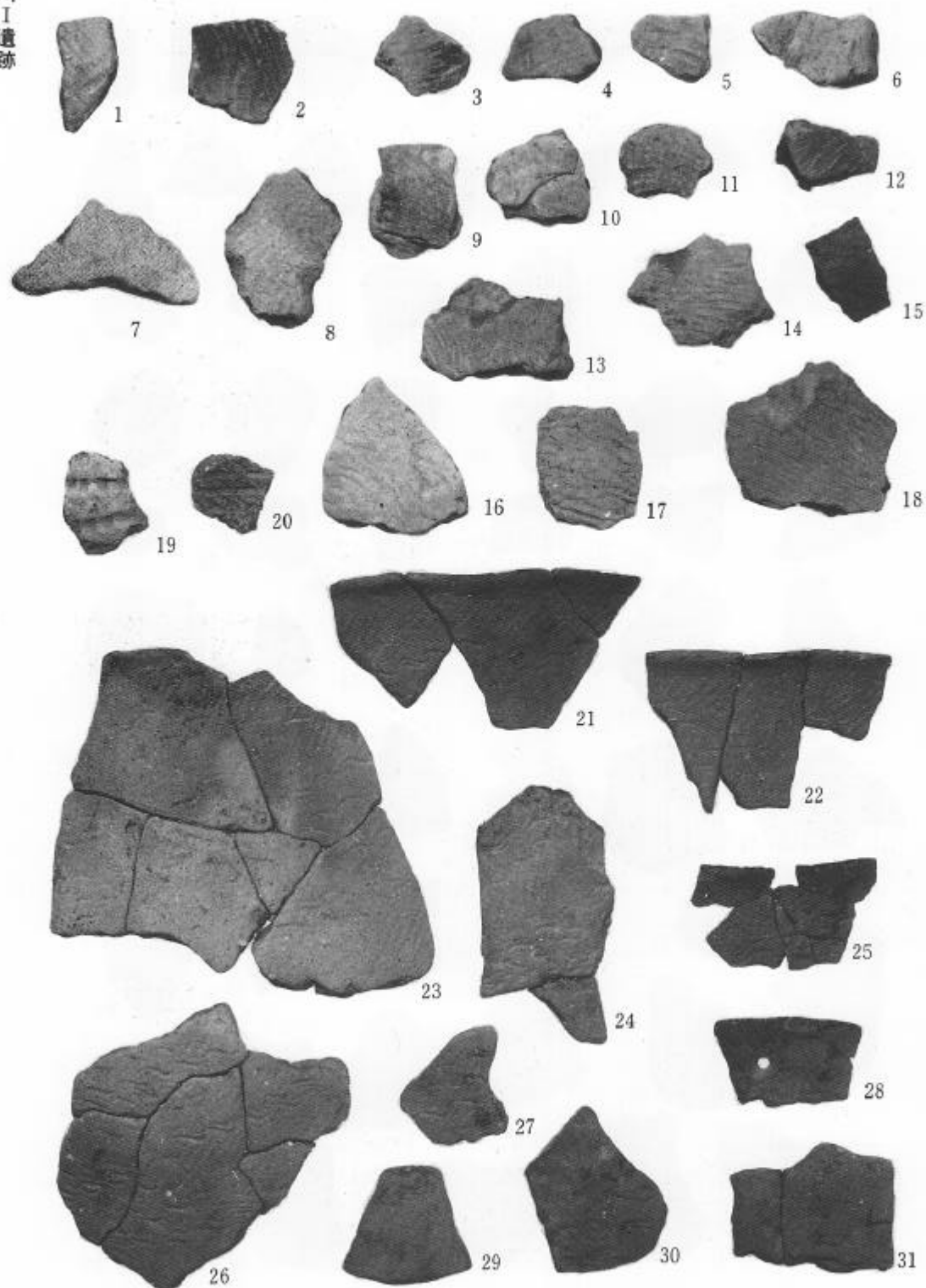
図版44

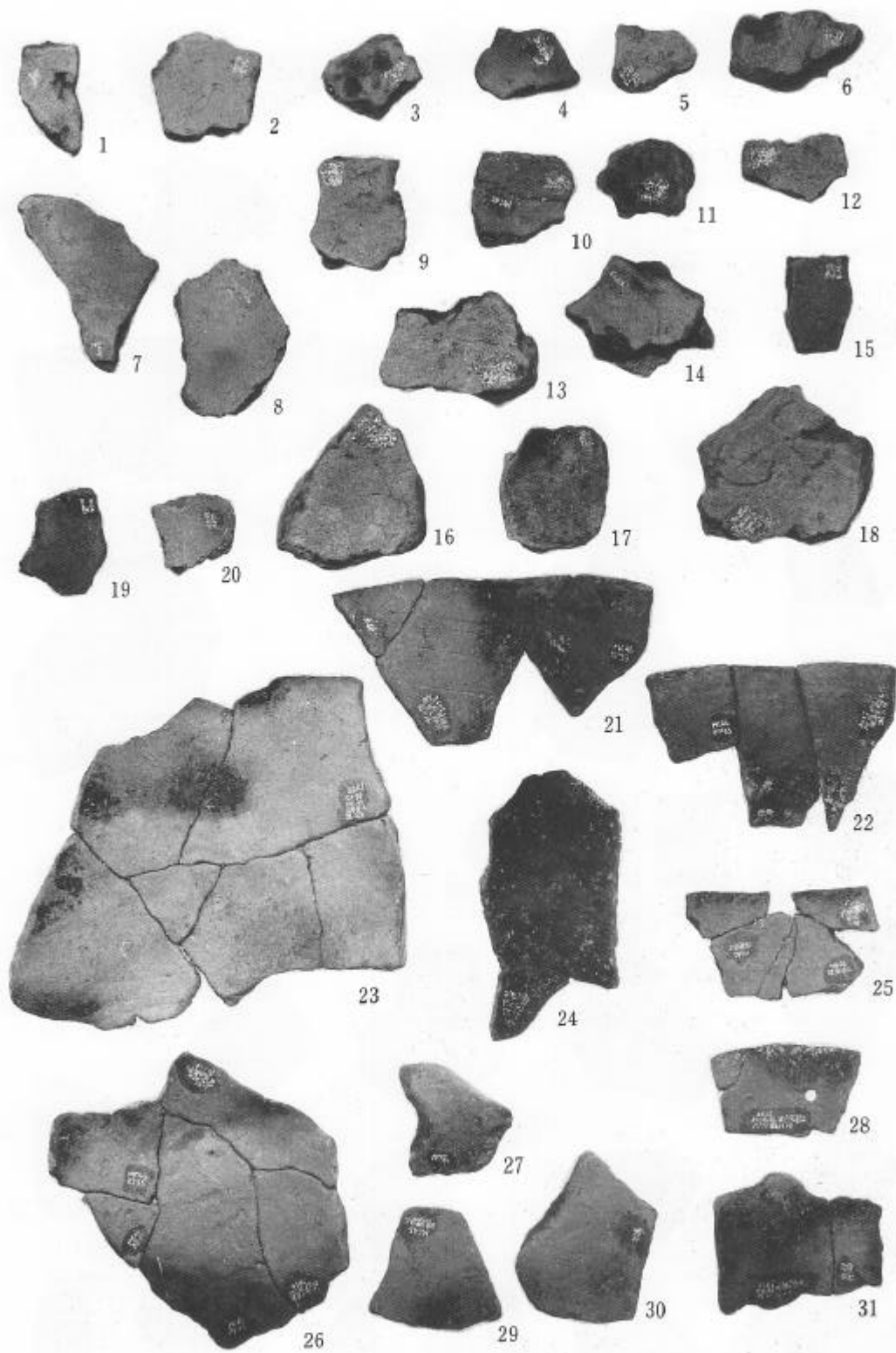
遺構外出土の縄文土器(1) 早期～前期 表面



図版45

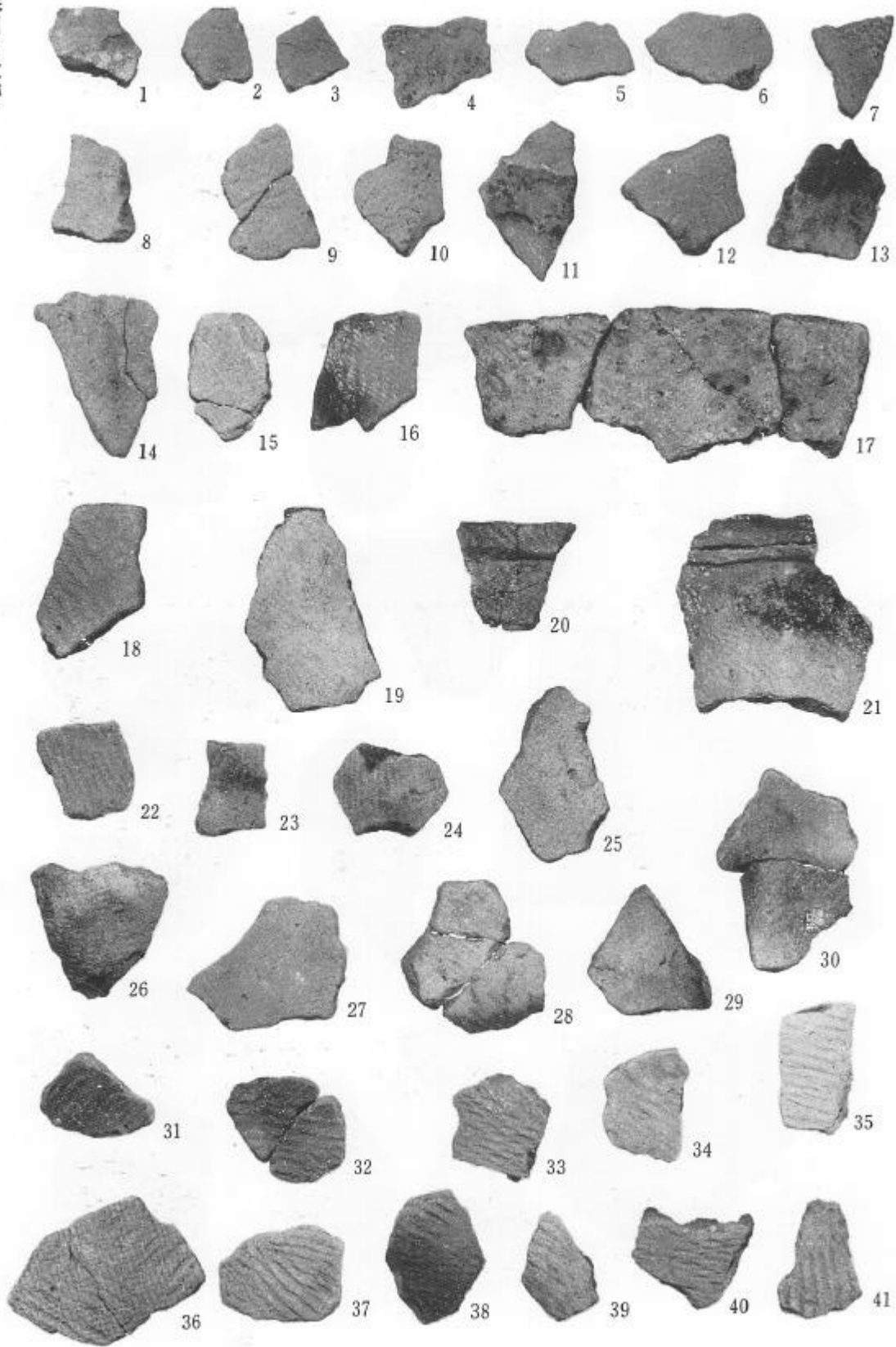
遺構外出土の縄文土器(12) 早期～前期 表面

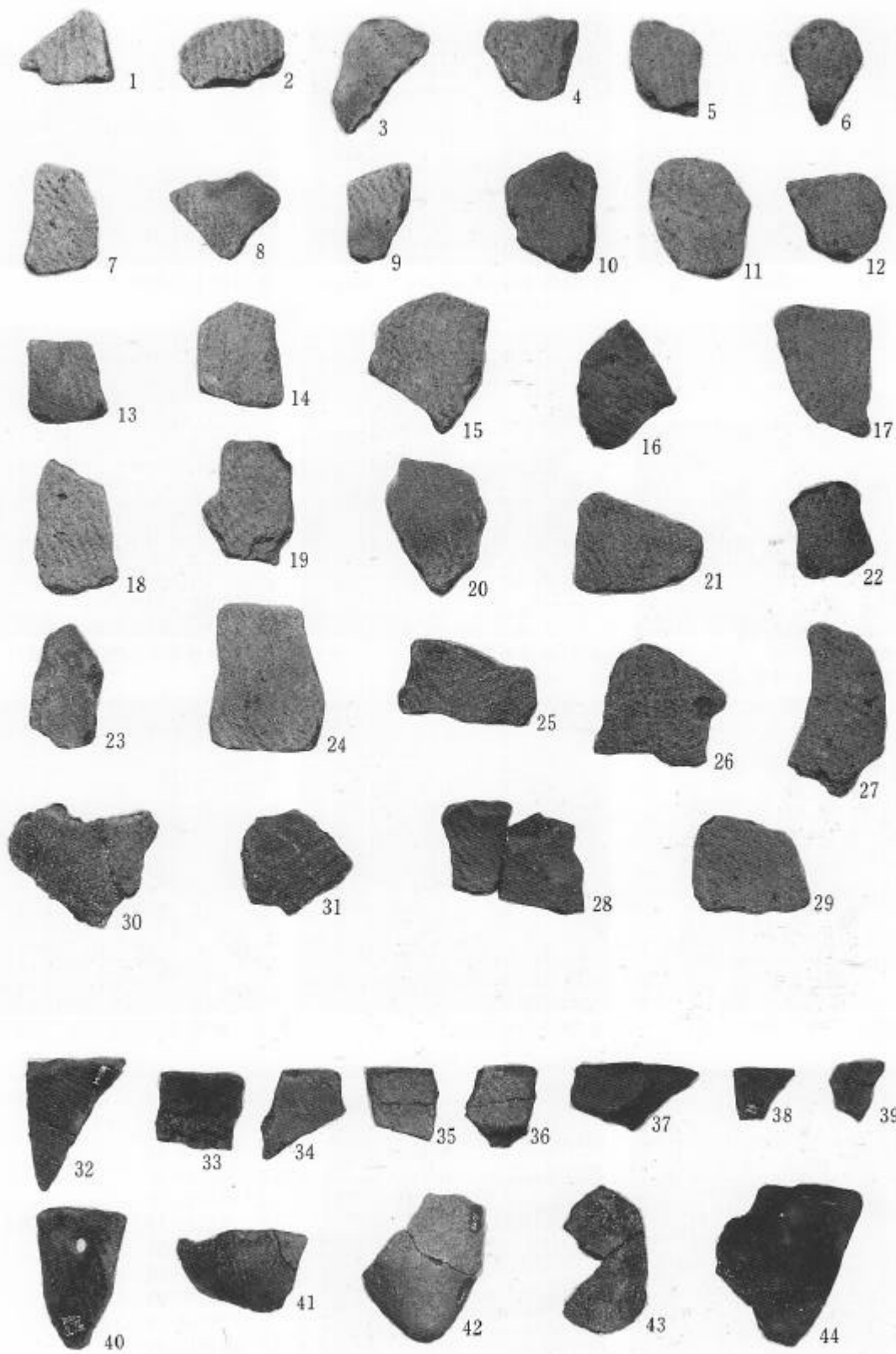




図版47

遺構外出土の縄文土器(13) 早期～前期 表面





図版49

遺構外出土の縄文土器15 早期～前期 表面



1. 粘土紐貼付の隆帯



2. 隆帯・撚紐側面圧痕文・綾格文



3. 口唇上の刺突文



4. 折返し口縁・
口唇上の撚紐側面圧痕文



5. 口縁部の押引文



6. 0段多条LR撚紐の縄文



7. 反撚り(LL)の縄文



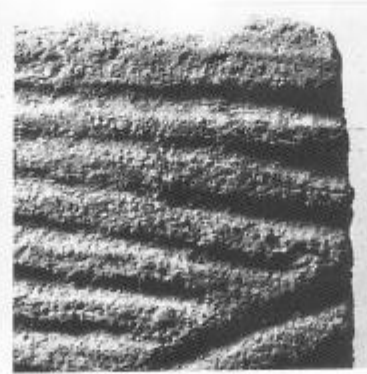
8. 撚り合せの縄文



9. LR撚紐の先端回転・綾格文



10. 絡条体(L, Rの2本組)
回転文

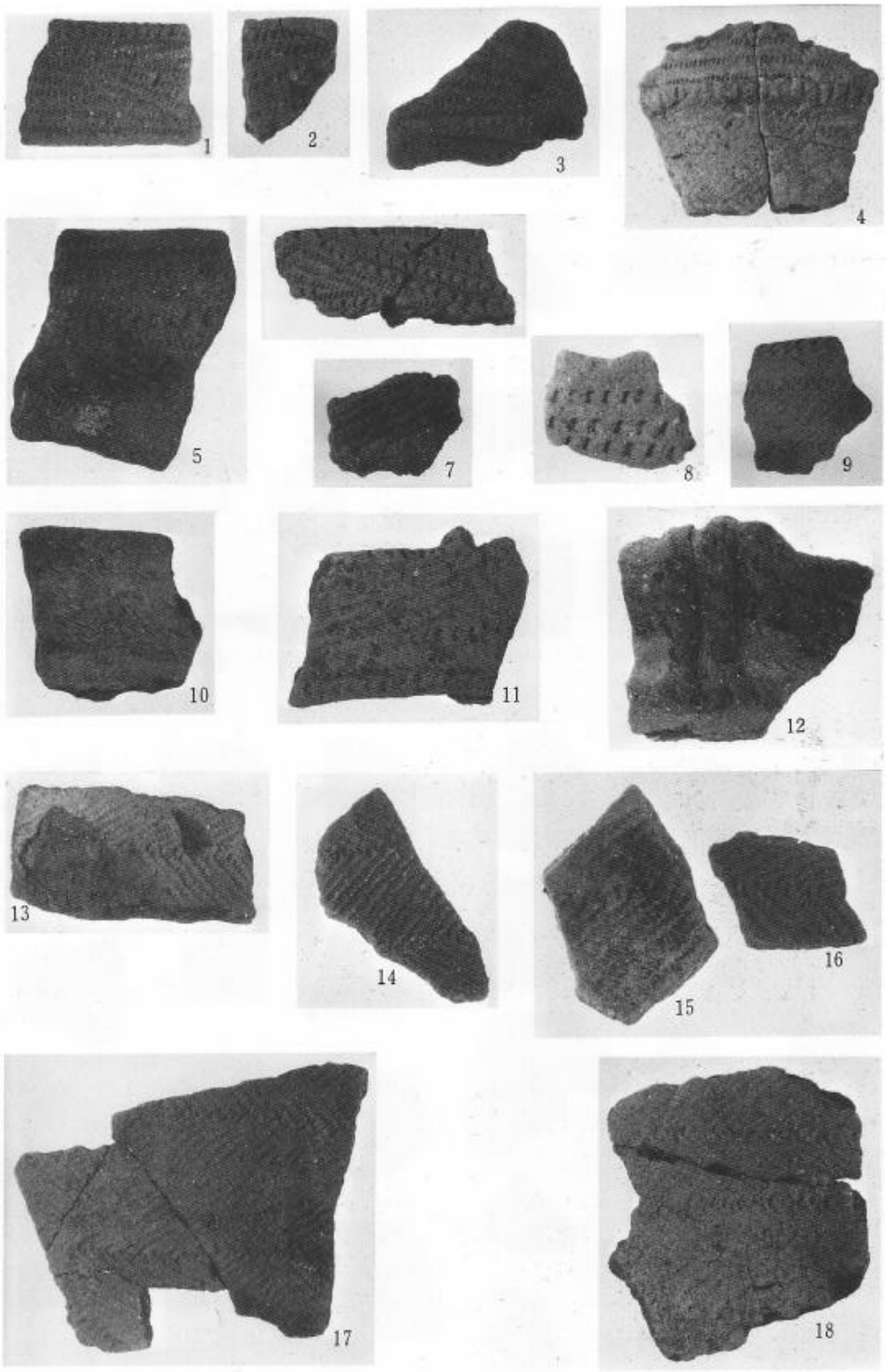


11. 条痕文

対応は以下のとおり ※撚り合せ原体

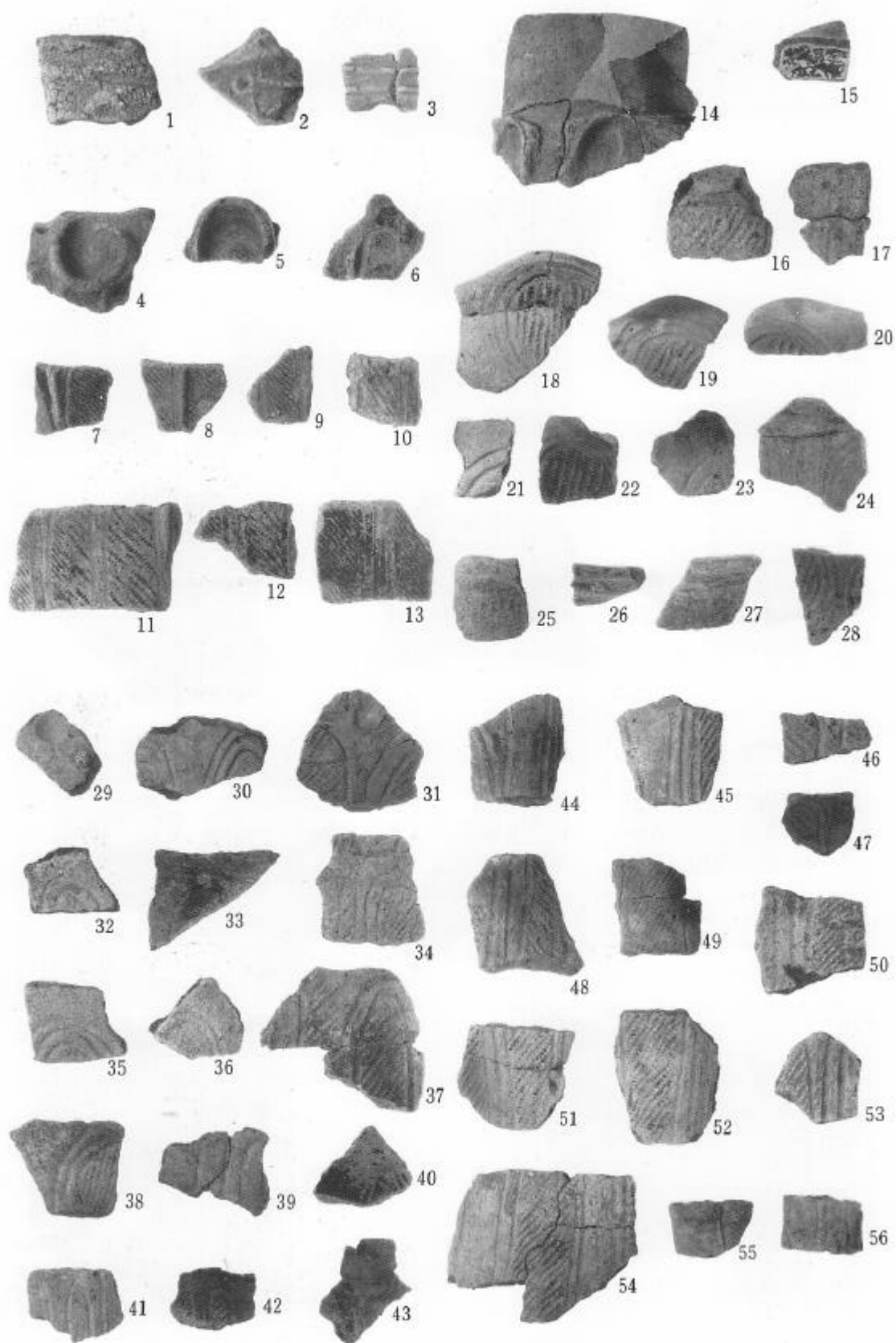
1. 図版37-7
2. 図版35-18
3. 図版37-3
4. 図版35-7
5. 図版43-19
6. 図版43-31
7. 図版49-16
8. 図版49-24
9. 図版46-26
10. 図版49-30
11. 図版41-34

$$R \left\{ \begin{array}{l} L \left(\begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right) \\ L \left(\begin{array}{l} r \\ r \end{array} \right) \\ R \left(\begin{array}{l} l \\ l \end{array} \right) \\ R \left(\begin{array}{l} l \\ l \end{array} \right) \end{array} \right.$$



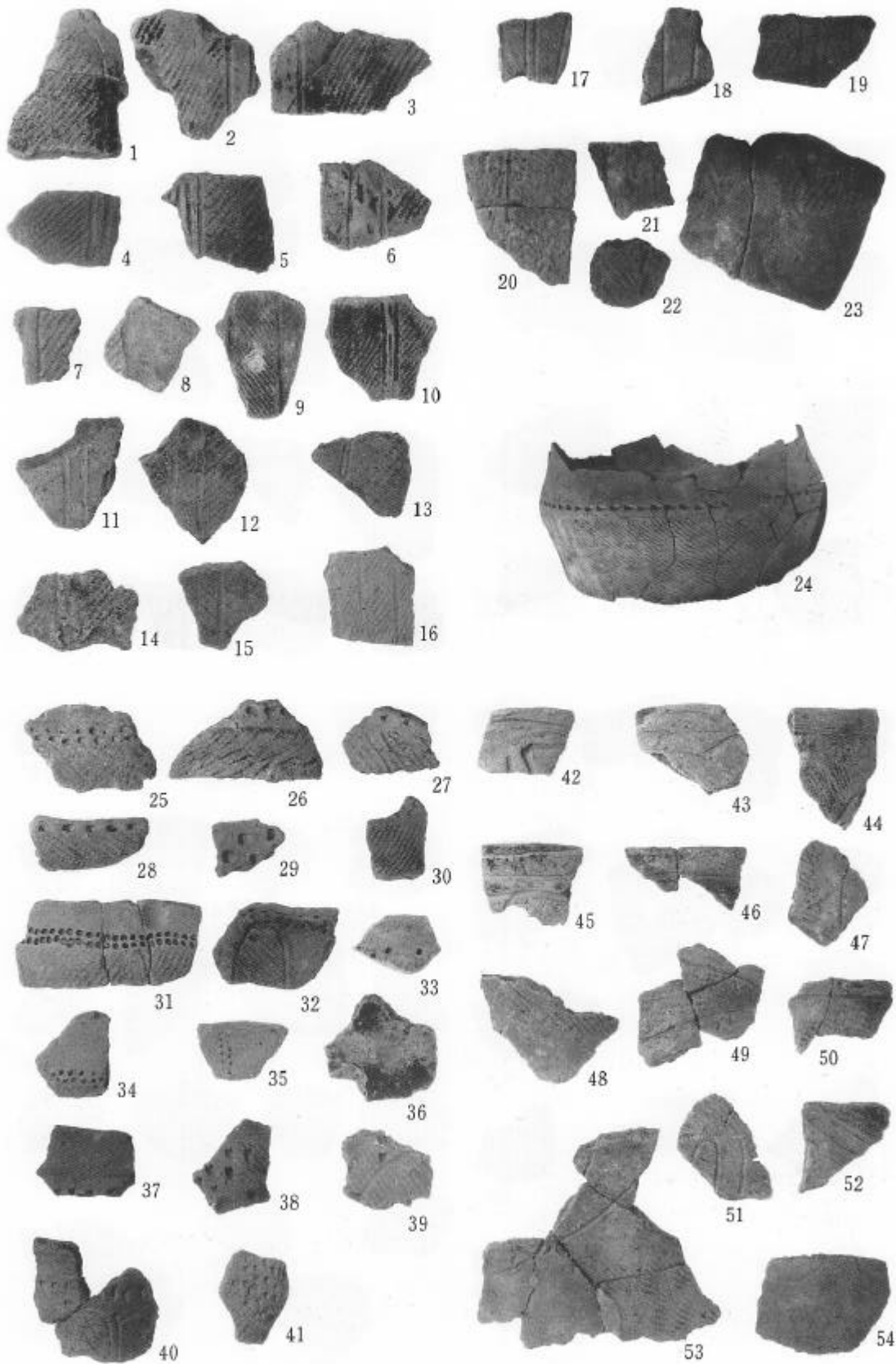
図版51

遺構外出土の縄文土器(16) 前期・中期



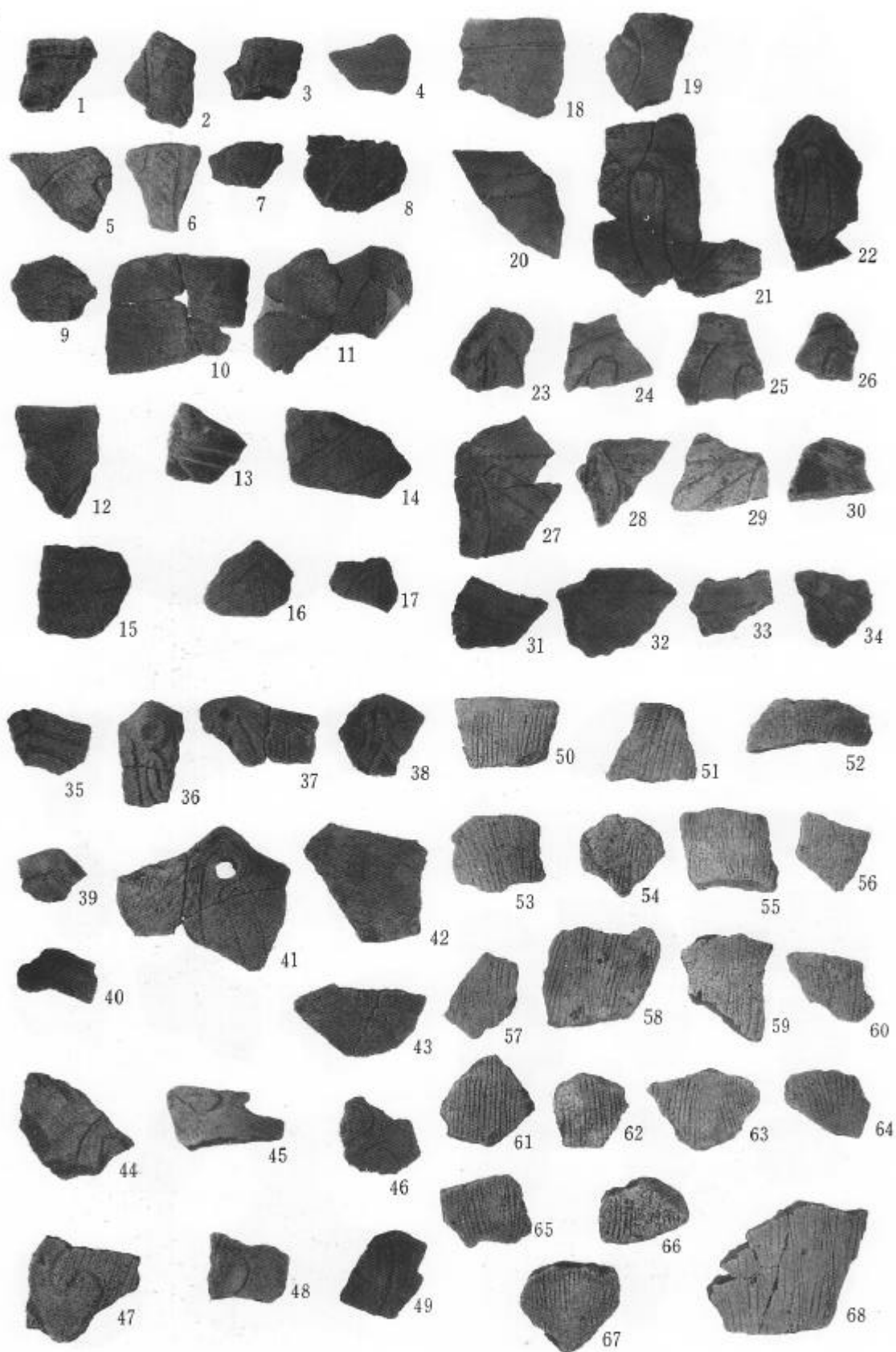
図版52

遺構外出土の縄文土器(17) 中期



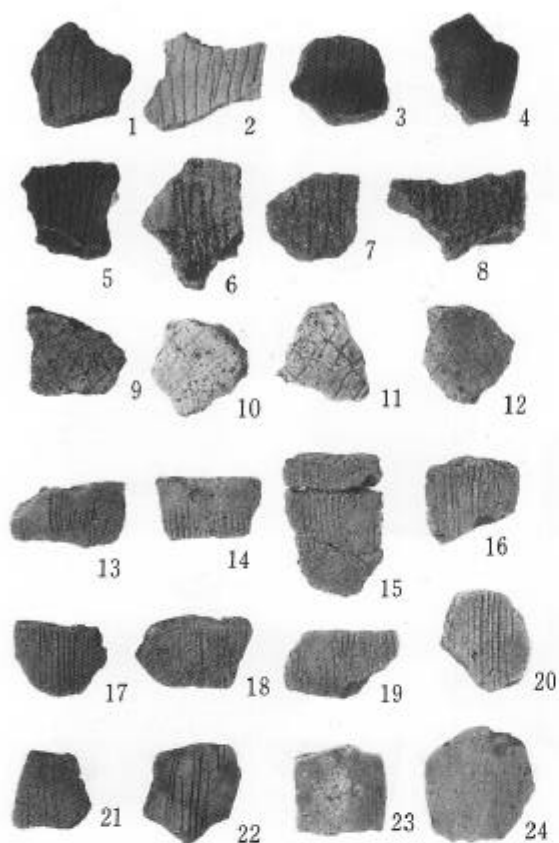
図版53

遺構外出土の縄文土器(18) 中期・後期



図版54

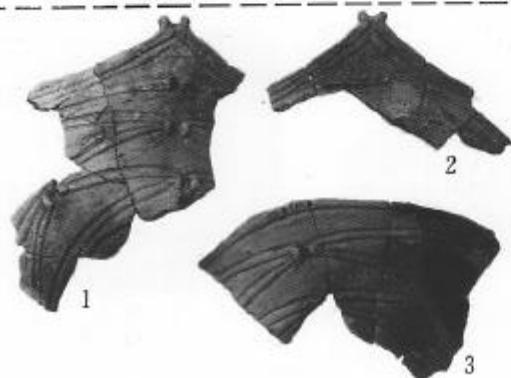
遺構外出土の縄文土器(19) 後期



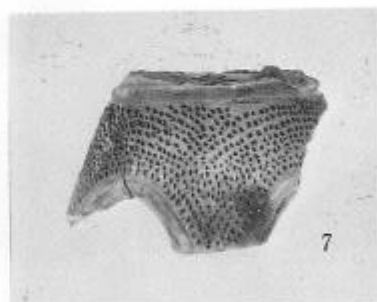
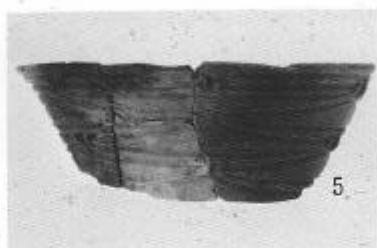
1. 遺構外出土の縄文土器(20) 後期

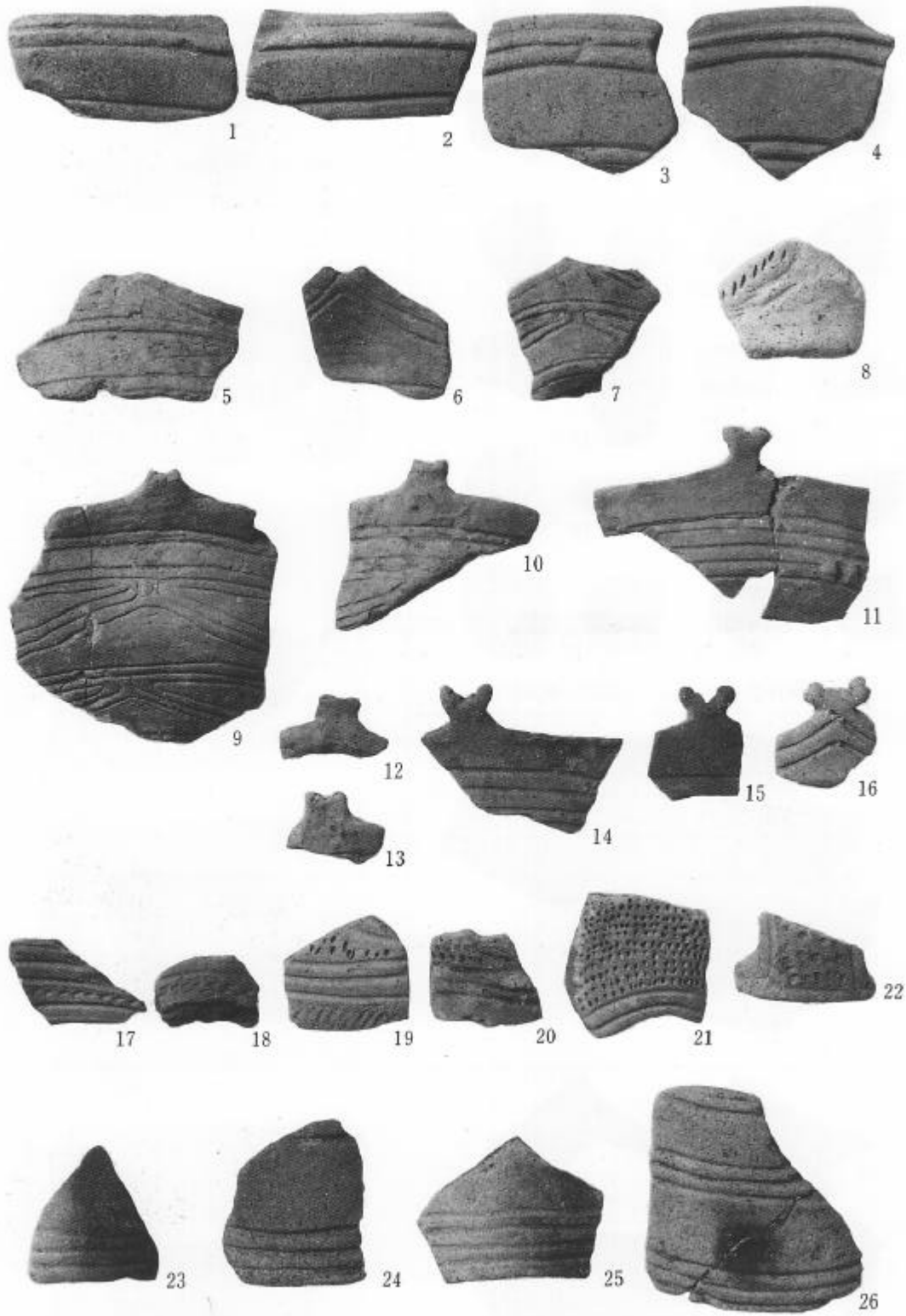


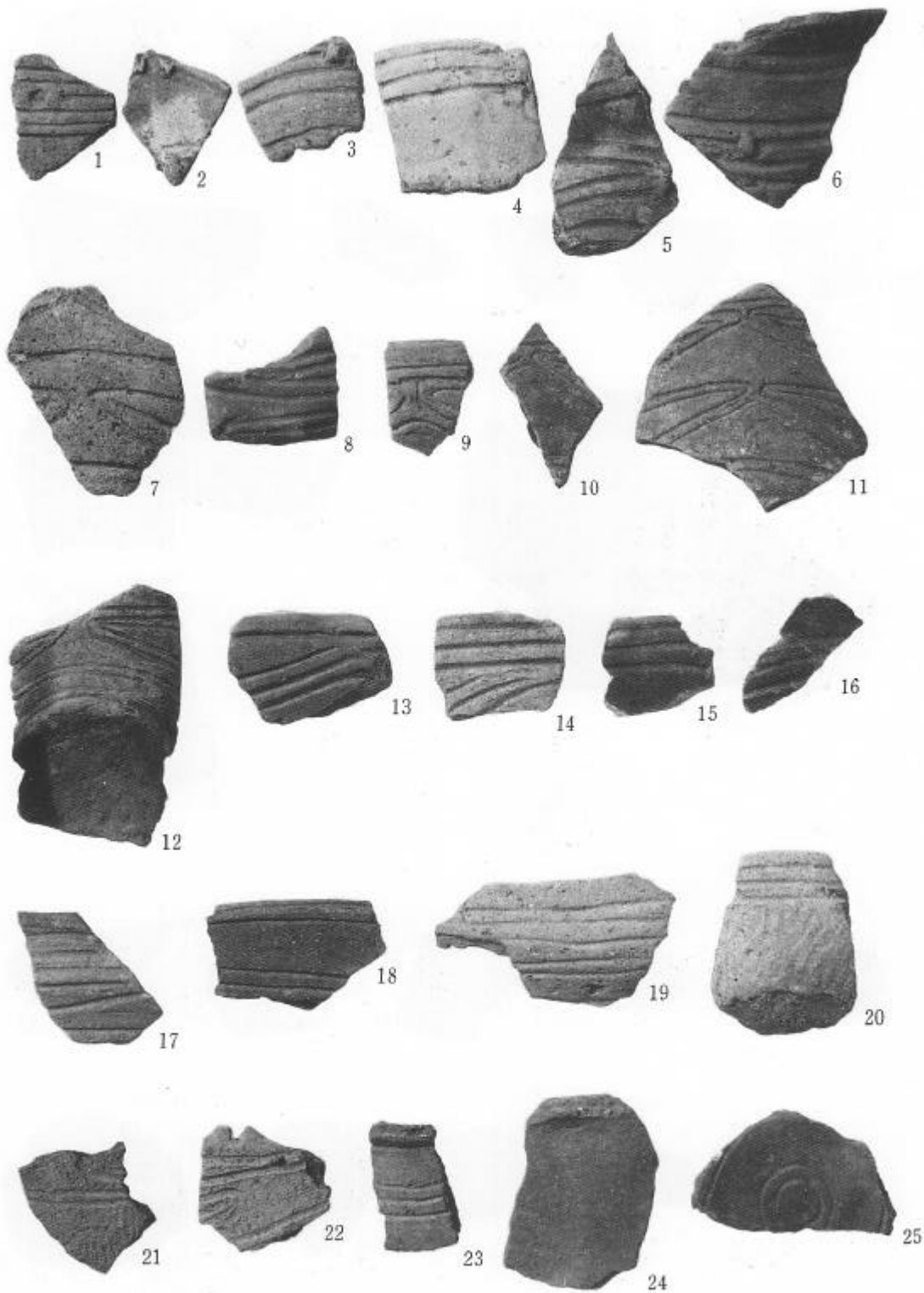
2. 24号土坑出土土器

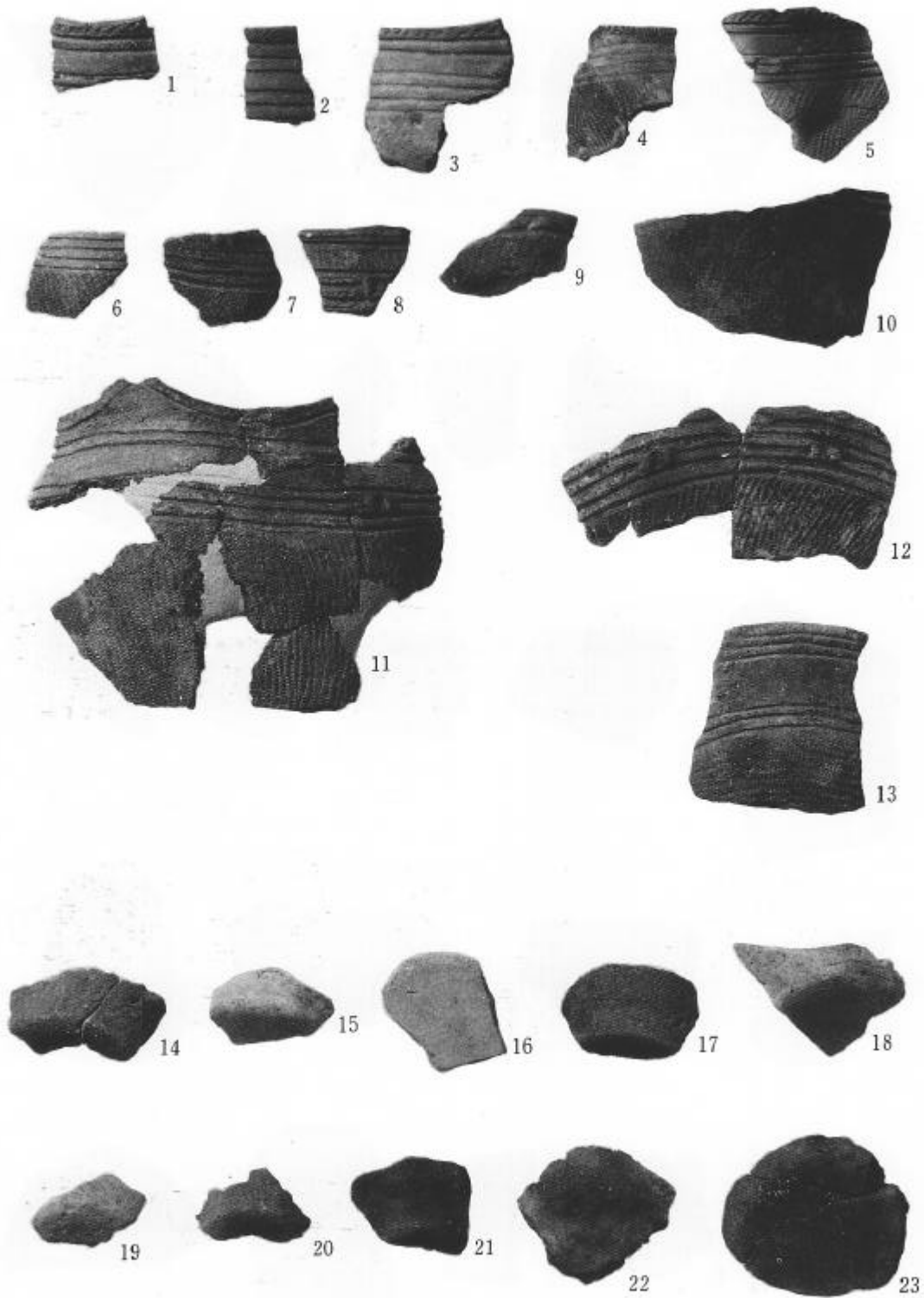


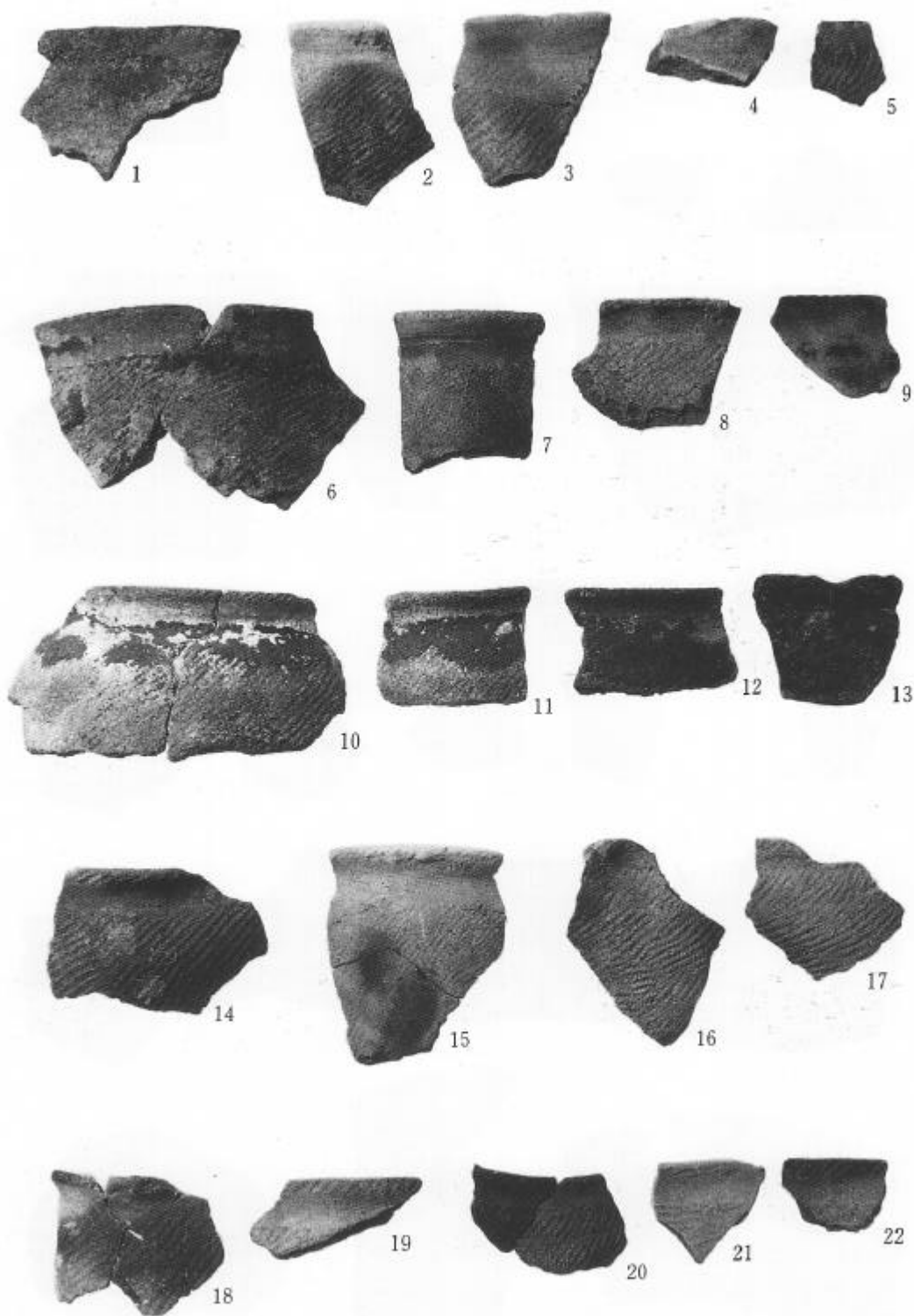
3. 遺構外出土の弥生土器(1)

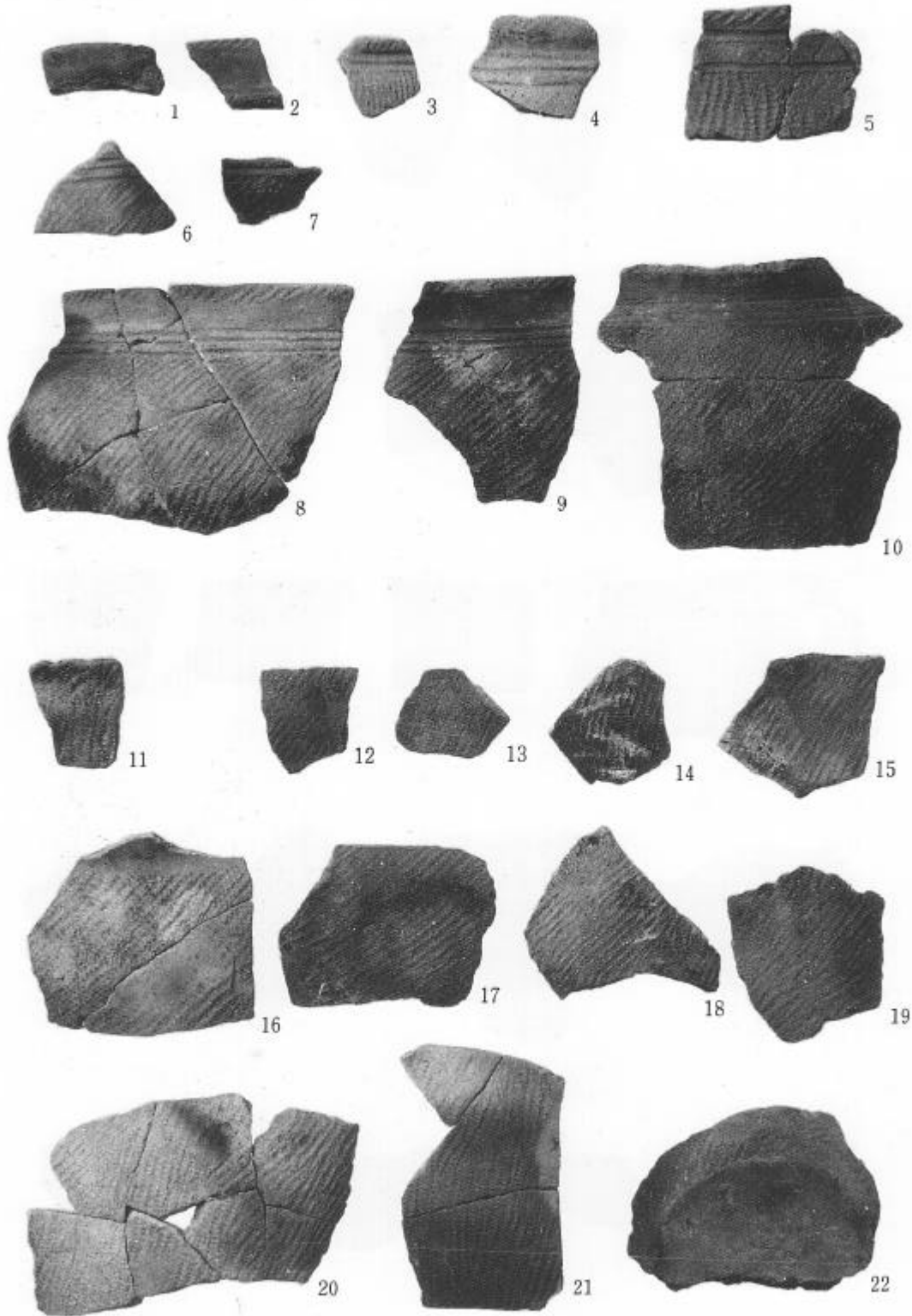


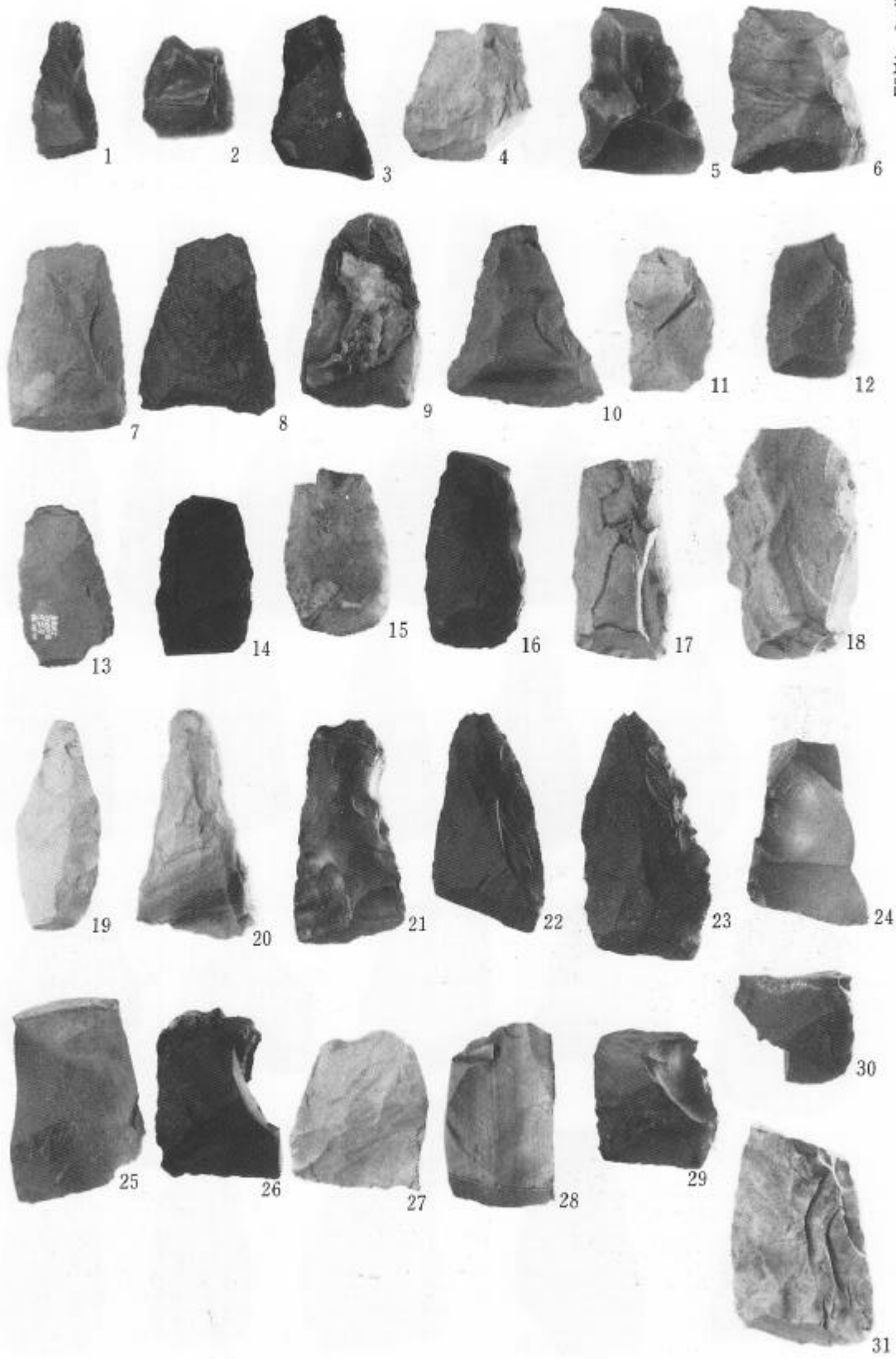






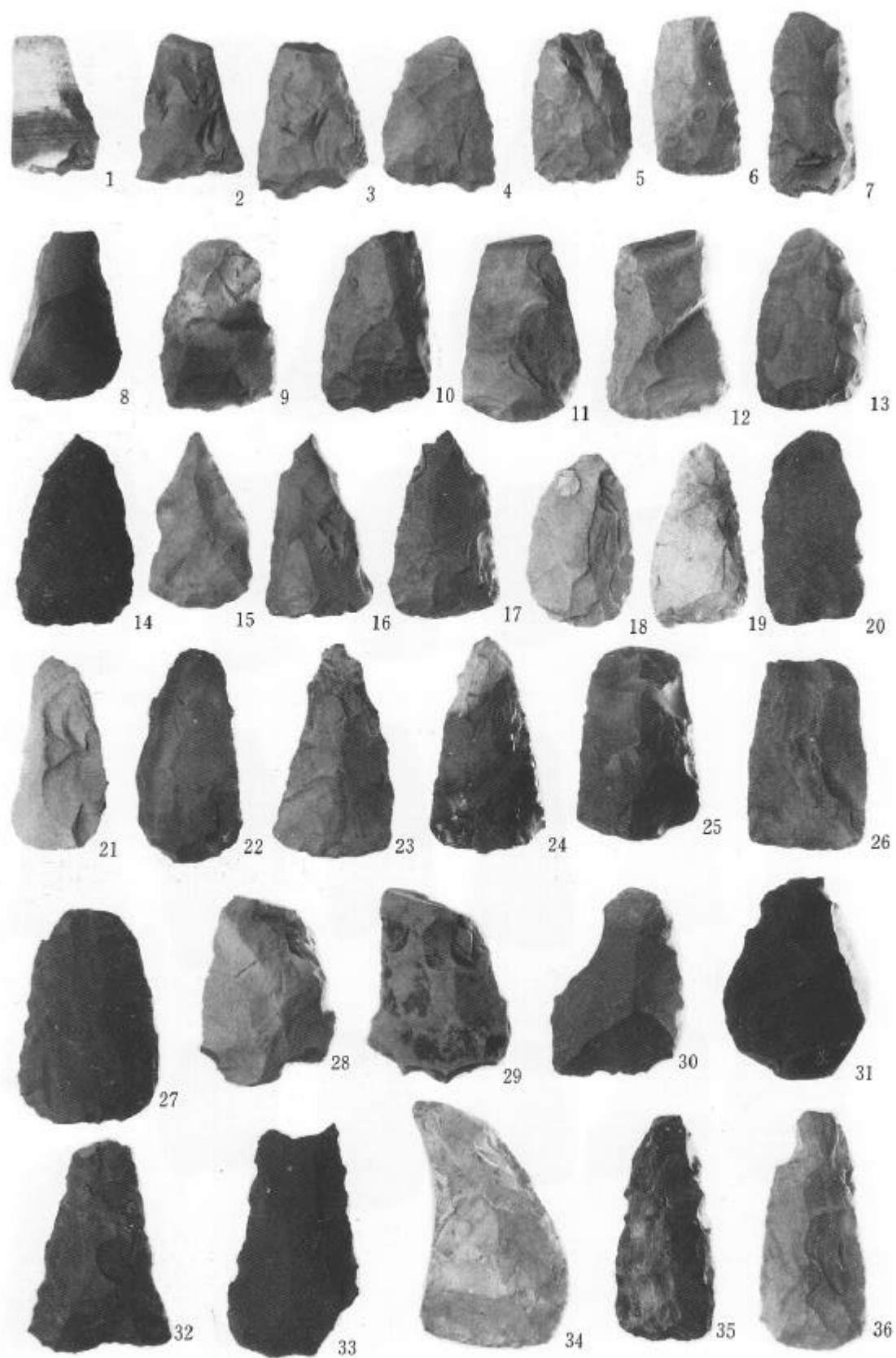


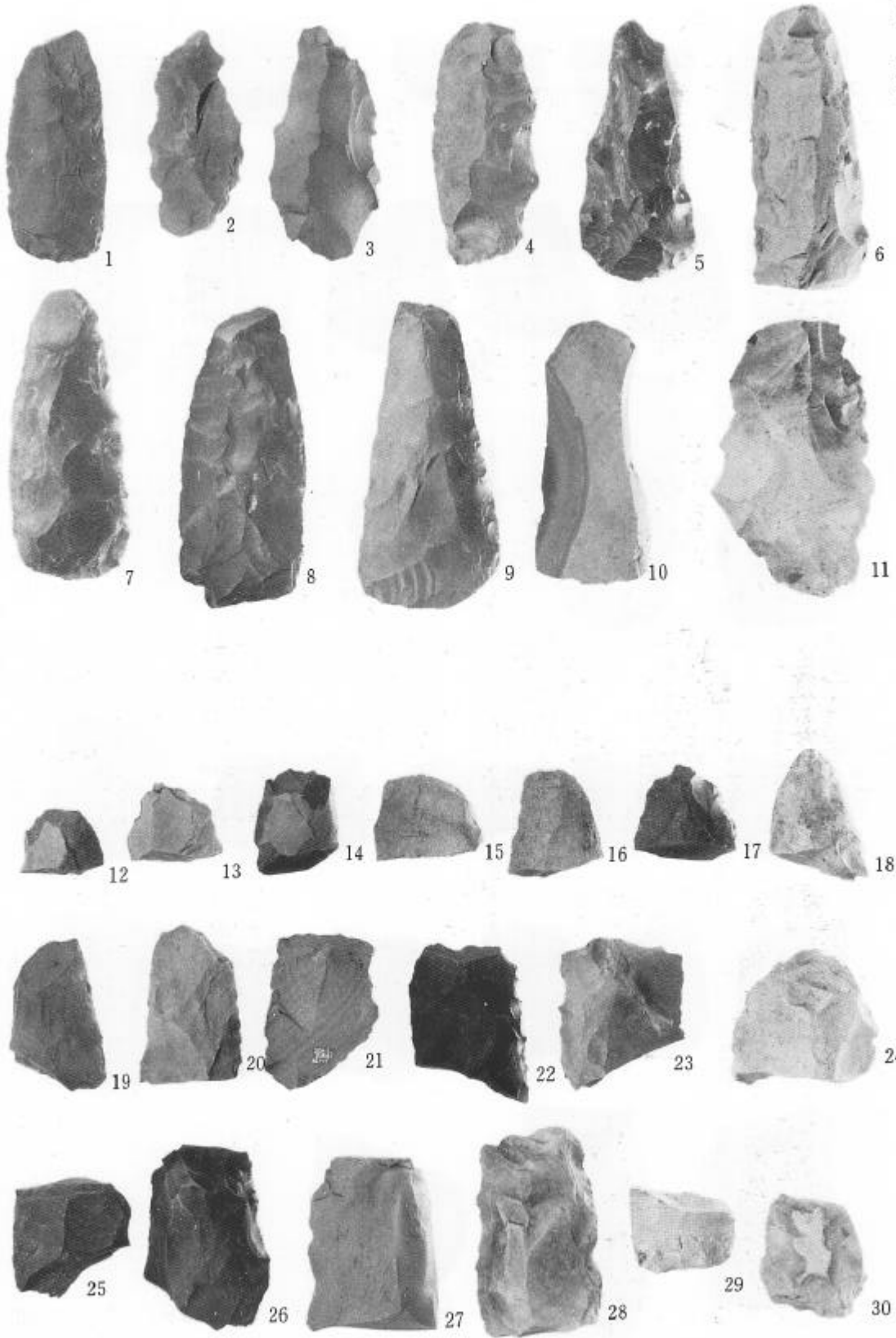


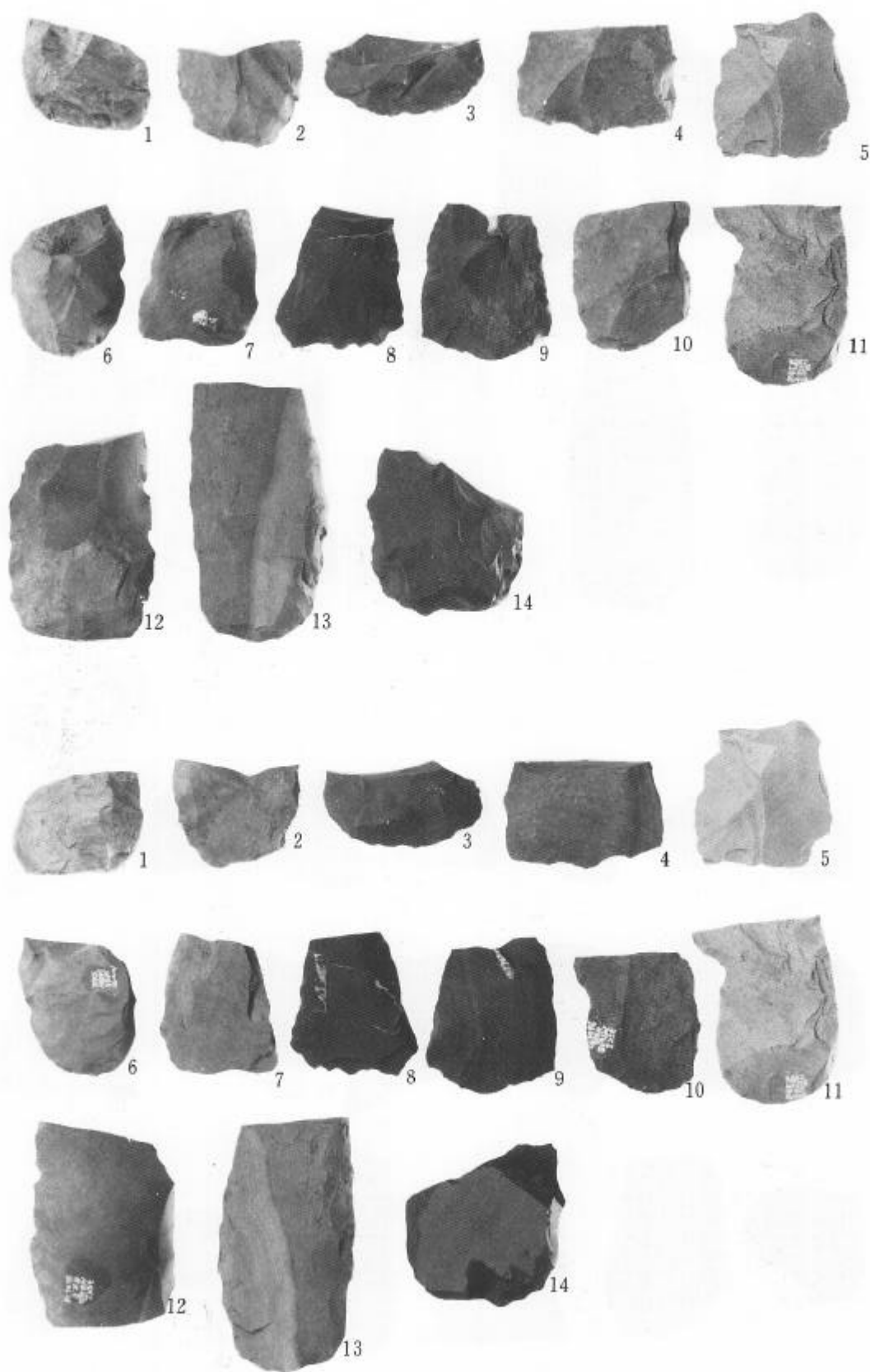


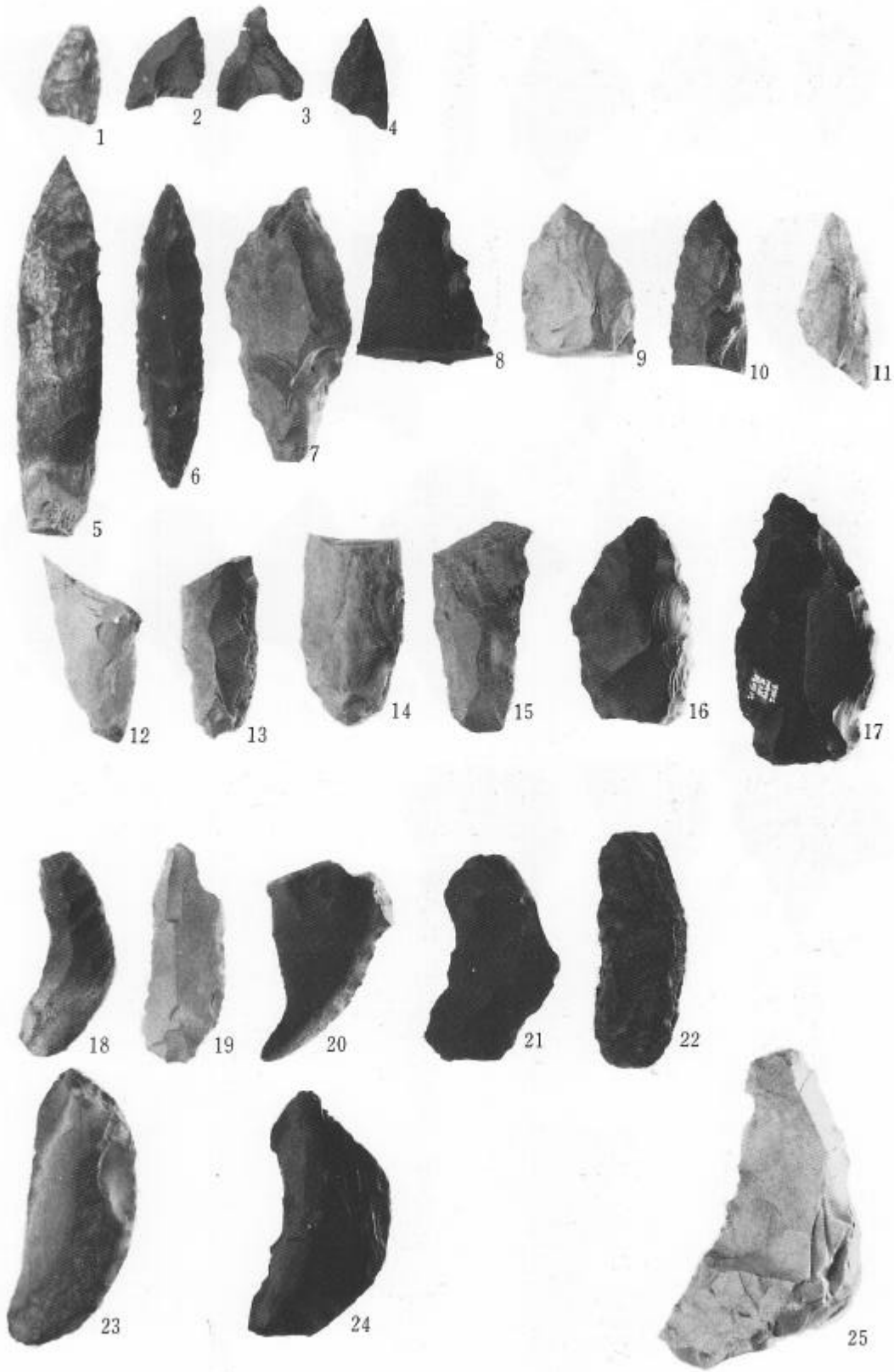
図版61

遺構外出土の石器(1) トランシェ様石器





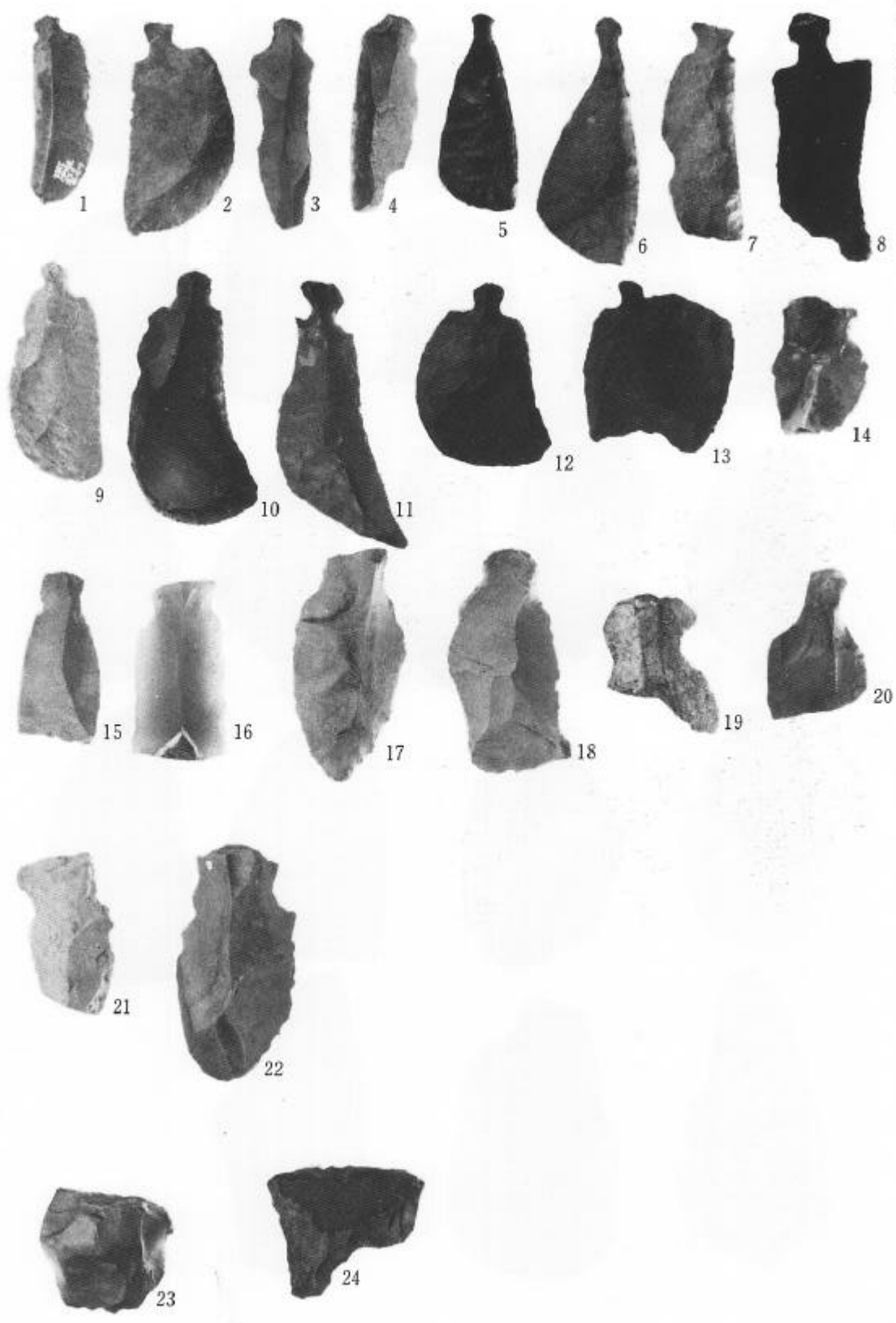


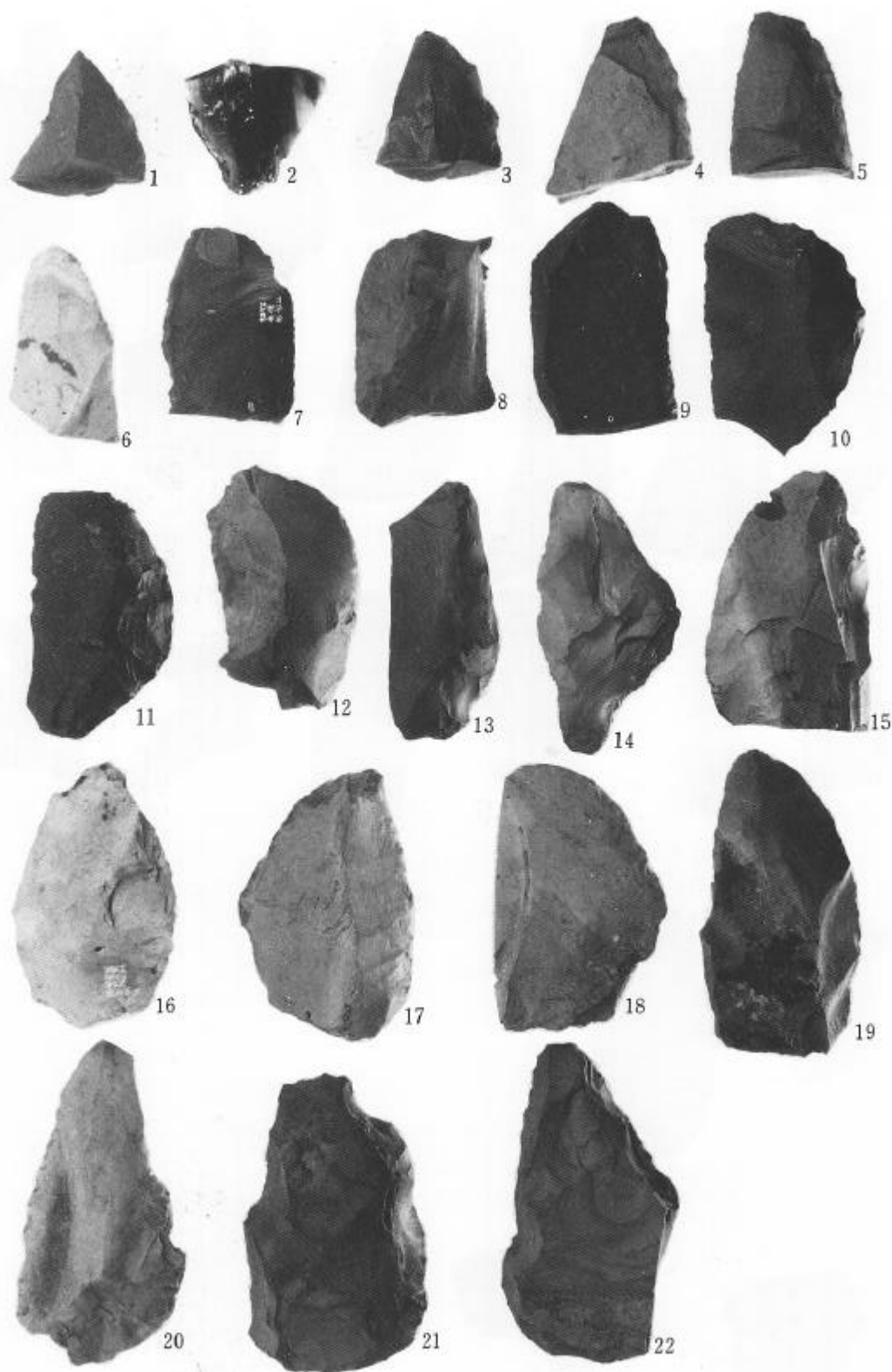


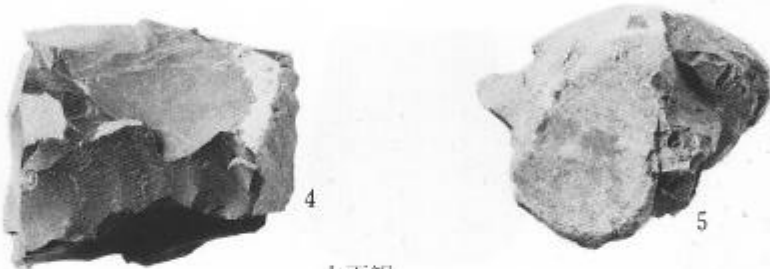
図版65

遺構外出土の石器(5) 石鏃・石槍・削器







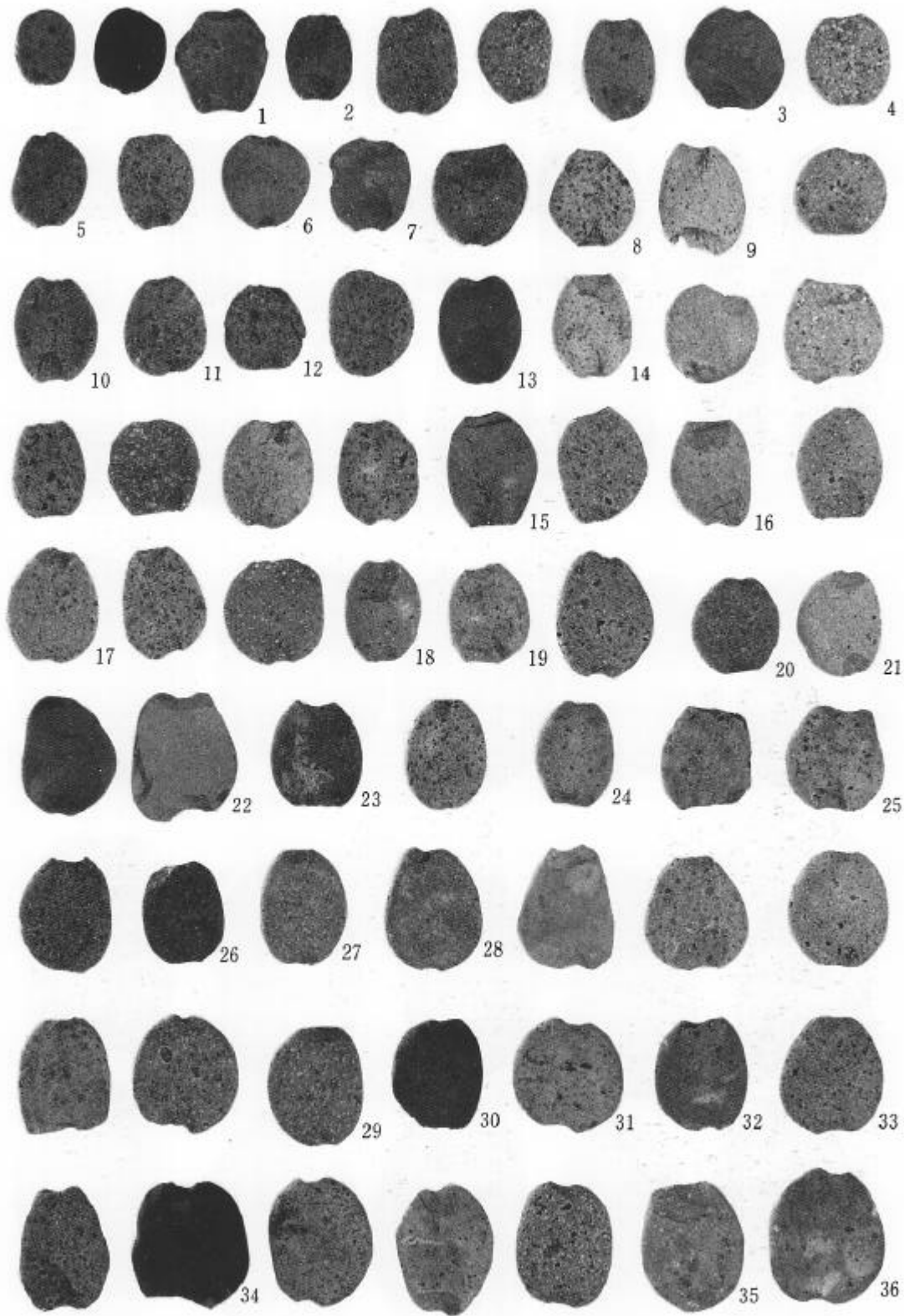


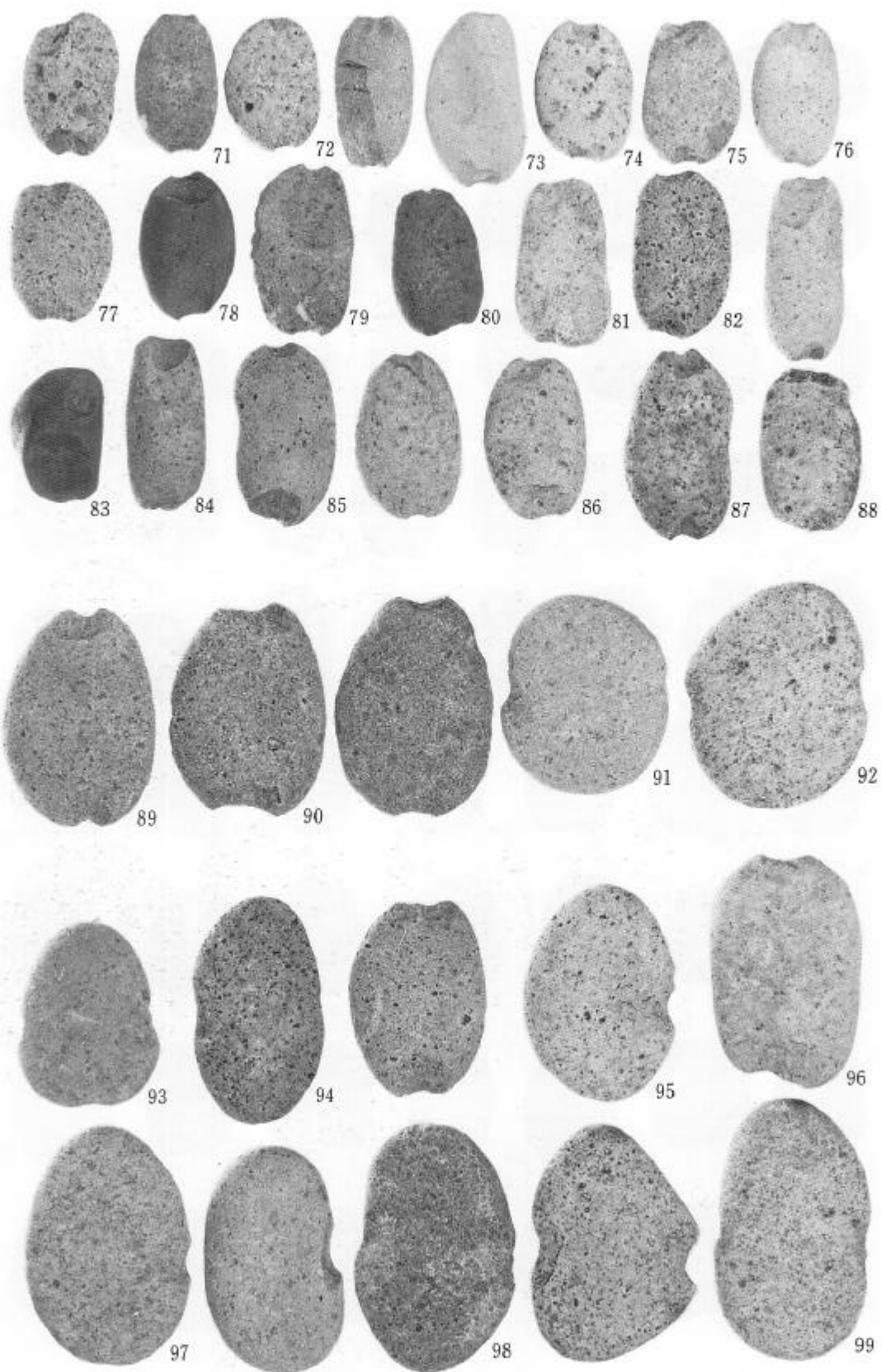
上面観

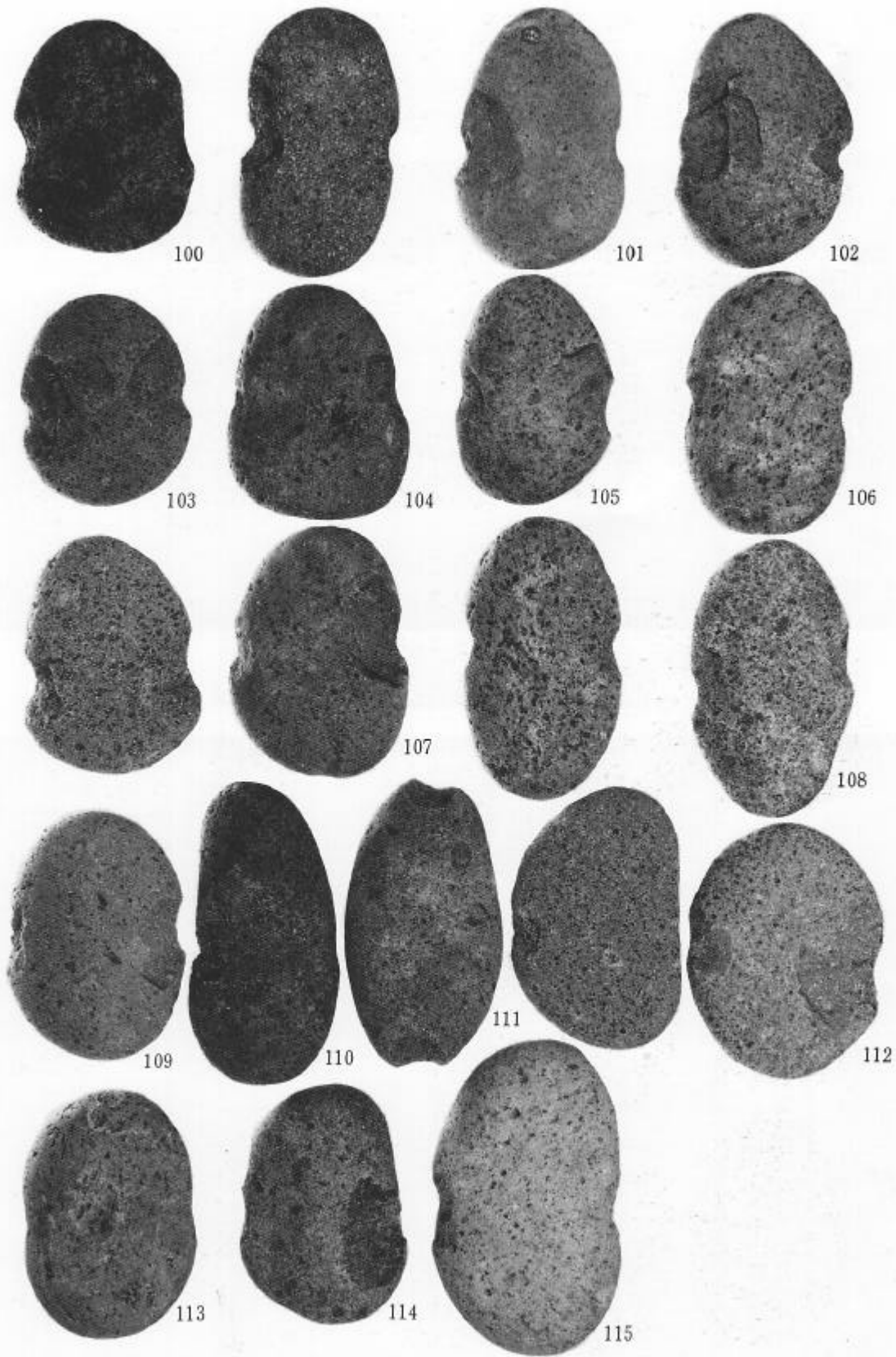


側面観









図版73

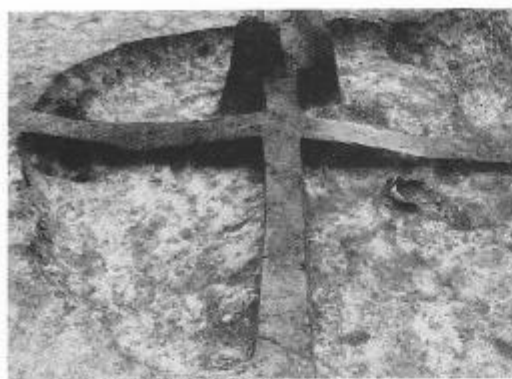
遺構外出土の石器(13) 石錘



1. 道路北側調査区全景 (北→)



2. 付替え道路部分 (西→)



1. 第1号竖穴住居跡 (西→)



2. 第2号竖穴住居跡土層 (北→)



3. 第2号竖穴住居跡 (北→)



4. 第2号竖穴住居跡床面下の土坑 (西→)



5. 第1号土坑 (西→)



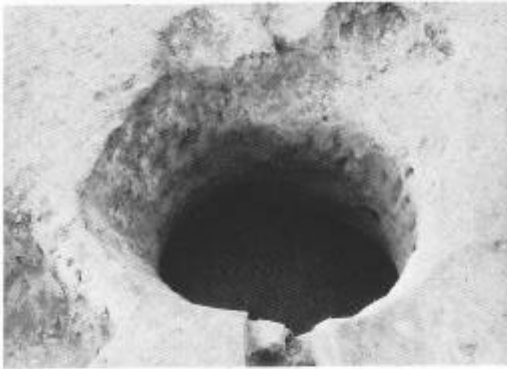
6. 第2号土坑 (北→)



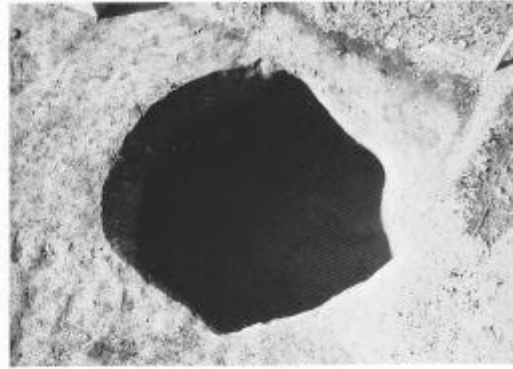
7. 第3号土坑 (西→)



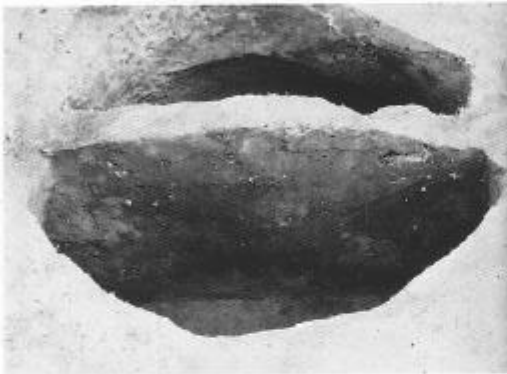
8. 第4号土坑 (東→)



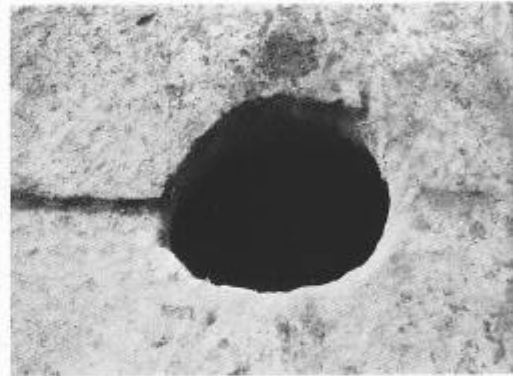
1. 第5号土坑 (東→)



2. 第6号土坑 (南東→)



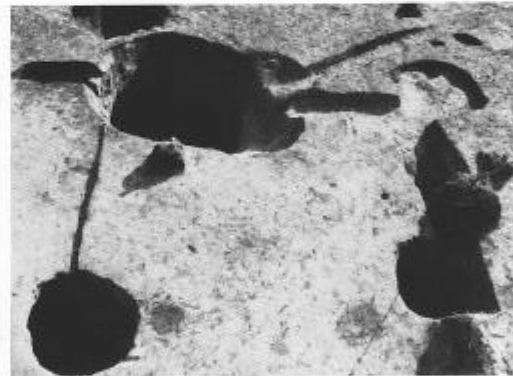
3. 第6号土坑土層 (南→)



4. 第7号土坑 (東→)



5. 第11号土坑 (東→)



6. 第5号・第7号・第11号土坑 (北→)



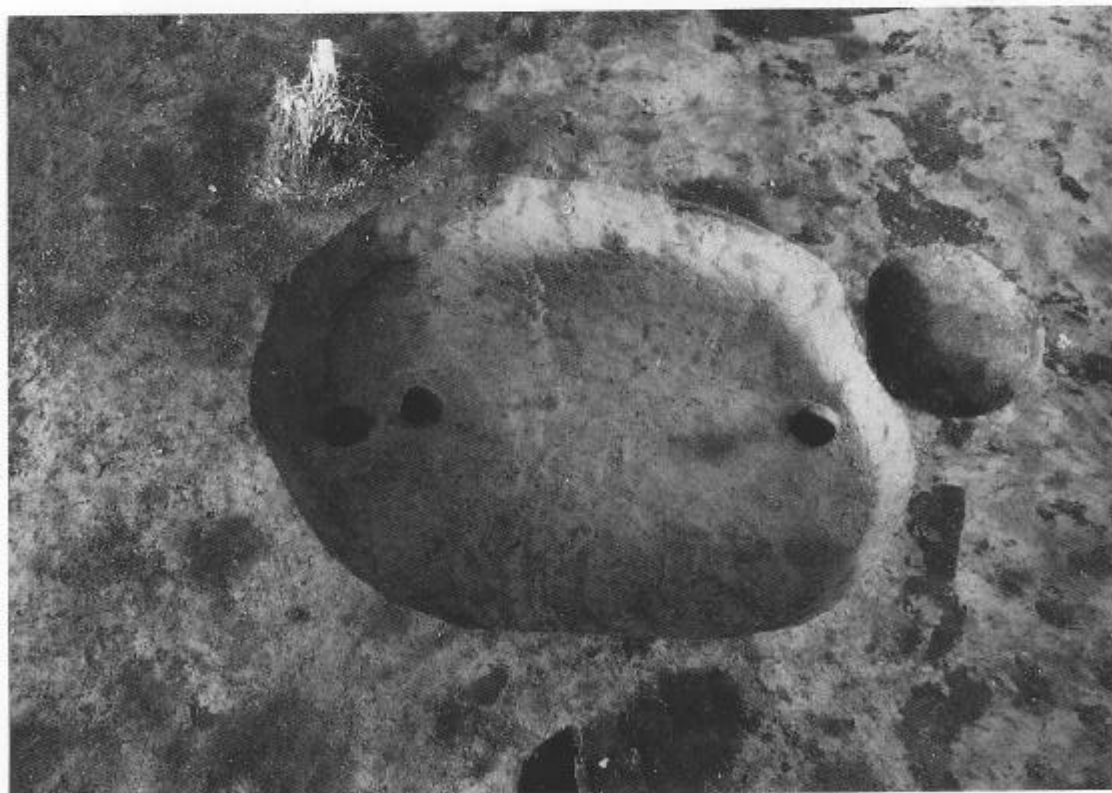
7. 第1号土器埋設遺構 (西→)



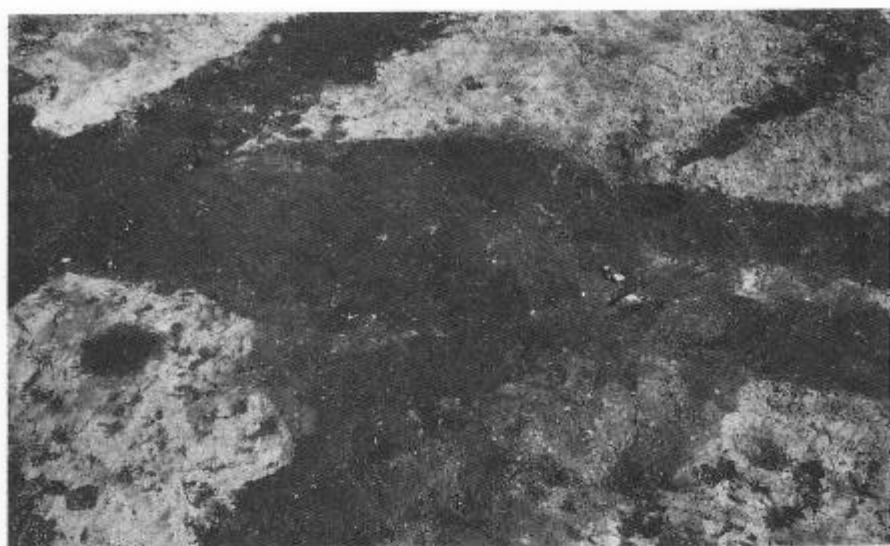
8. OB46グリッド円筒下層d₁式土器
出土地点 (北東→)



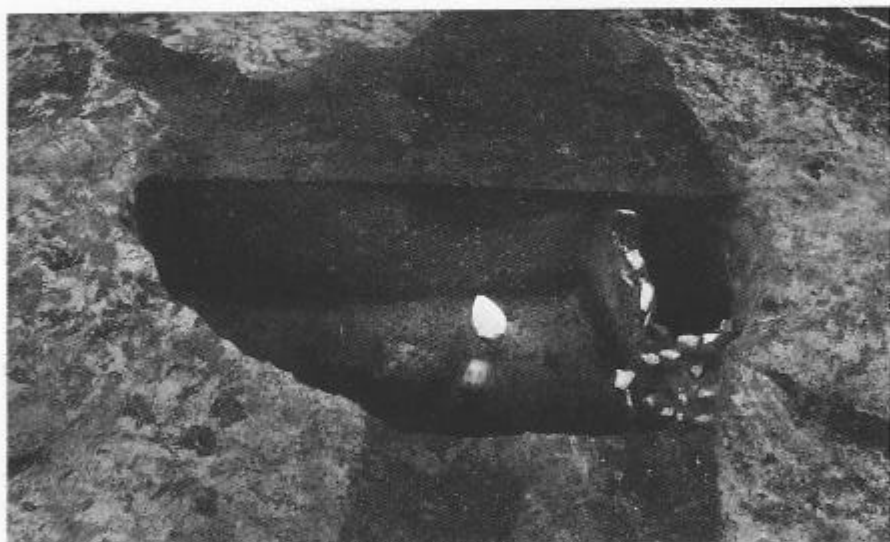
1. 縄文文化土壙墓の配置 (南西→)



2. 第1号土壙墓 (南→)



1. 第2号土壙墓確認状況 (西→)



2. 第2号土壙墓埋土堆積状況 (南→)



3. 第2号土壙墓埋土内遺物出土状況 (南→)



1. 第2号土壙墓埋土内遺物出土状況 (南→)



2. 第2号土壙墓東壁土器出土状況 (西→)



3. 第2号土壙墓完掘状況 (南→)



1. 第3号土墳墓確認状況（南西→）



2. 第3号土墳墓完掘状況（南→）



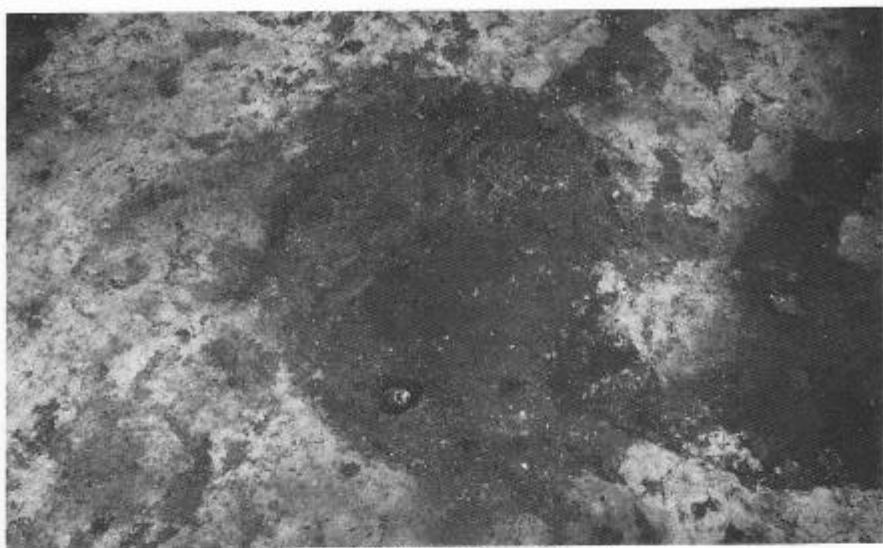
3. 第3号土墳墓東壁土器出土状況（南→）



1. 第4号土墳墓完掘状況 (南西→)



2. 第4号土墳墓東壁土器、鉄斧出土状況 (西→)



1. 第5号土壙墓確認状況（南西→）



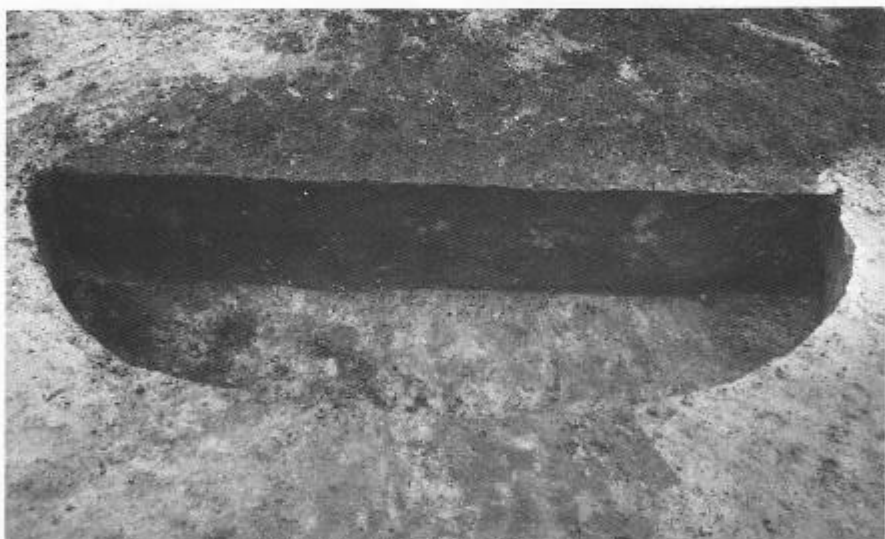
2. 第5号土壙墓埋土堆積状況（南東→）



3. 第5号土壙墓遺物出土状況（西→）



1. 第6号土壙墓確認状況(西→)



2. 第6号土壙墓埋土堆積状況(南東→)



3. 第6号土壙墓完掘状況(北西→)



1. 第3号竖穴住居跡 (北→)



2. 第4号竖穴住居跡 (北→)



3. 第5号竖穴住居跡 (西→)



4. 第5号竖穴住居跡カマド (西→)



5. 第6号竖穴住居跡 (西→)



6. 第6号竖穴住居跡カマド (西→)



7. 第7号竖穴住居跡 (西→)



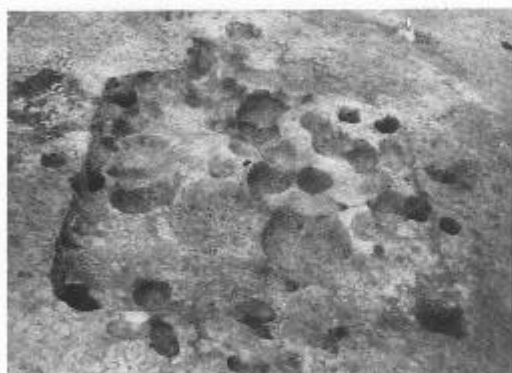
8. 第7号竖穴住居跡カマド (西→)



1. 第7号竖穴住居跡カマド覆土断面
(西→)



2. 第7号竖穴住居跡土師器皿出土状況
(南西→)



3. 第8号竖穴住居跡 (西→)



4. 第10号竖穴住居跡 (北東→)



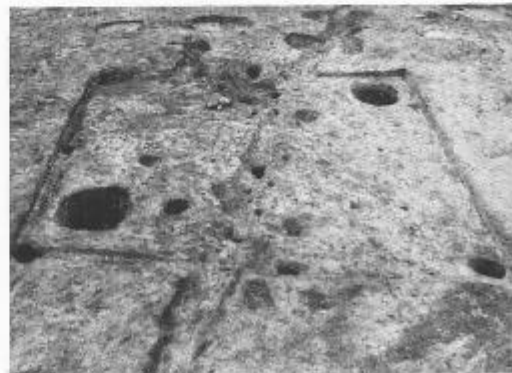
5. 第12号竖穴住居跡 (北西→)



6. 第13号竖穴住居跡 (西→)



7. 第14号竖穴住居跡 (西→)



8. 第15号竖穴住居跡 (西→)



1. 第15号竖穴住居跡カマド (西→)



2. 第15号竖穴住居跡土師器坏出土状況 (北東→)



3. 第1号製鉄炉確認状況 (南→)



4. 第1号製鉄炉前庭部土坑覆土断面 (東→)



5. 第1号製鉄炉完掘状況 (南→)



6. 第1号製鉄炉(炉)壁(南→)



7. 第1号製鉄炉(炉)壁(西→)



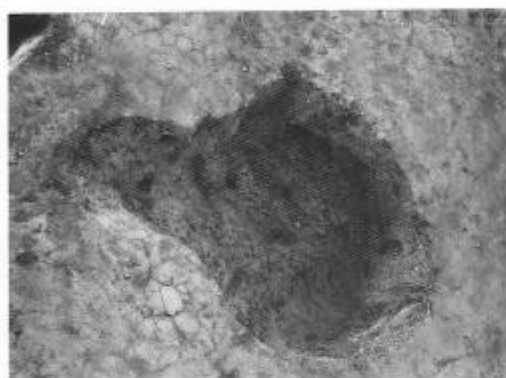
8. 粘土採掘坑 (南→)



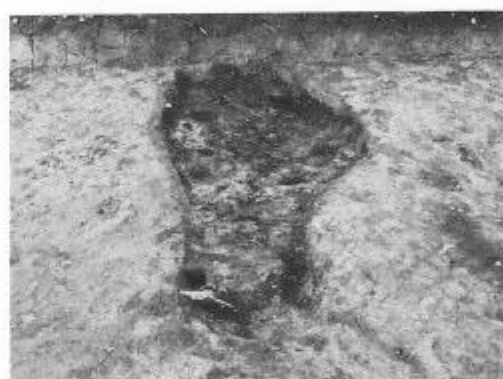
1. 第1号~第3号炭烧窯 (北→)



2. 第2号炭烧窯 (南→)



3. 第1号炭烧窯 (東→)



4. 第3号炭烧窯 (南→)



5. 第17号土坑 (北西→)



6. 第18号土坑 (北西→)



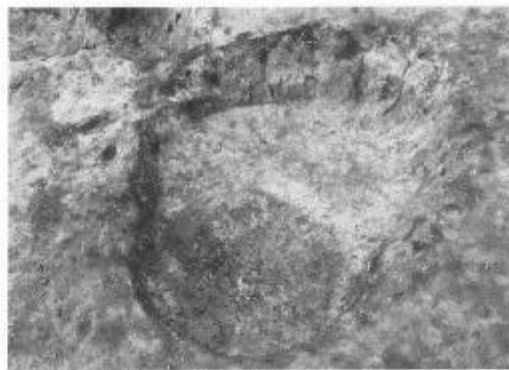
7. 第19号土坑 (南→)



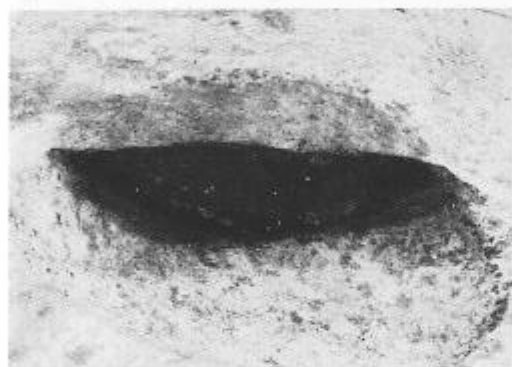
8. 第20号土坑 (西→)



1. 第22号土坑 (北→)



2. 第27号土坑 (南→)



3. 第33号土坑覆土断面 (北→)



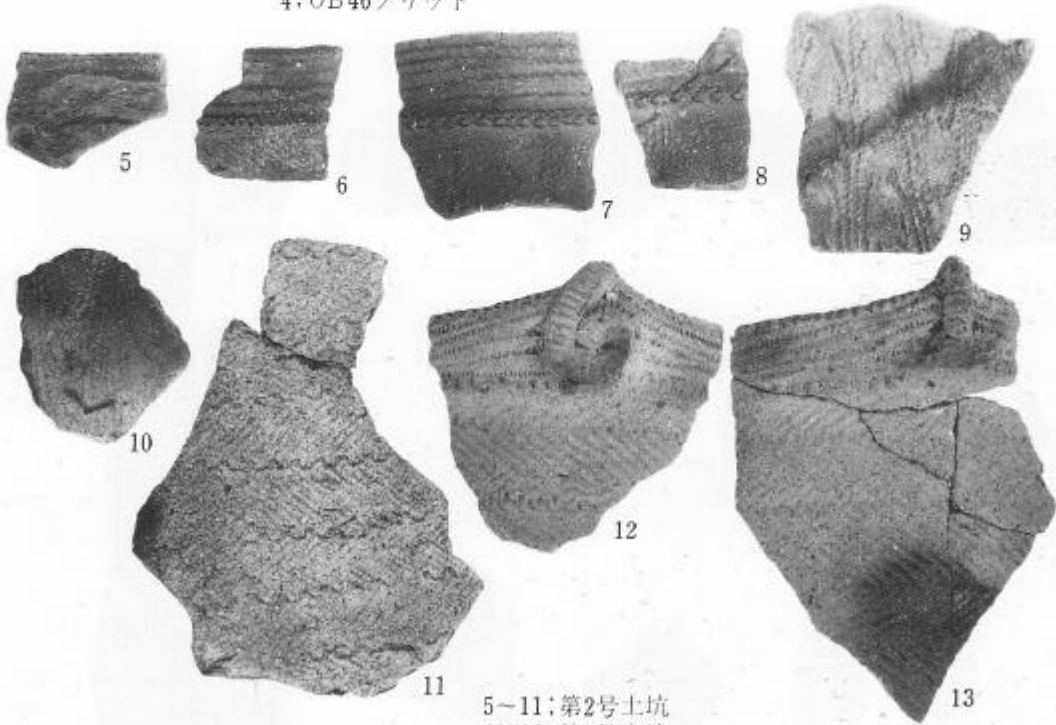
4. 第34号土坑(レーダー探査地区)確認状況 (西→)



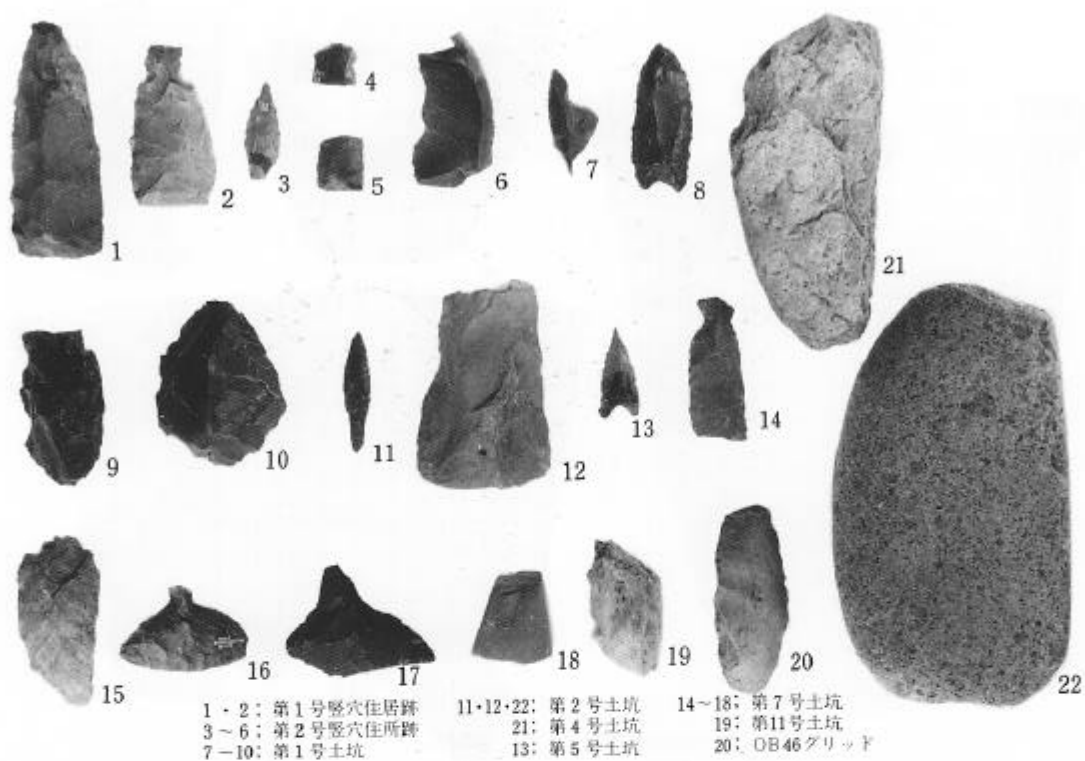
5. 斜面側調査区南東部 (南西→)



1: 第1号土器埋設遺構
 2: 第1号竪穴住居跡
 3: 第7号土坑
 4: OB46グリッド

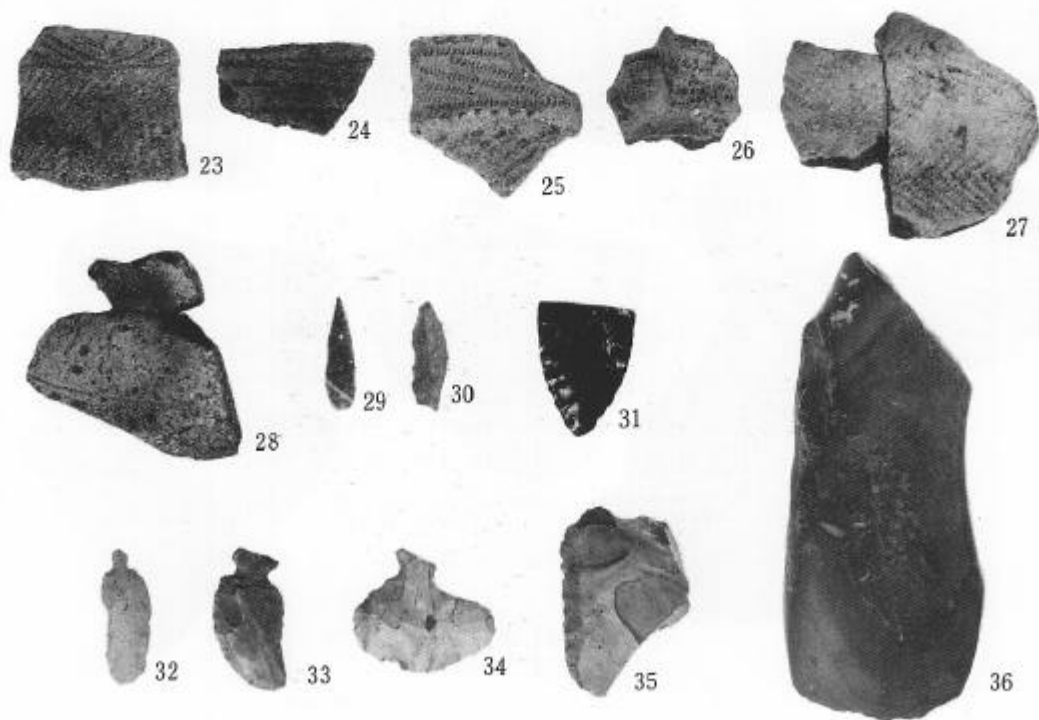


5-11: 第2号土坑
 12・13: 第7号土坑

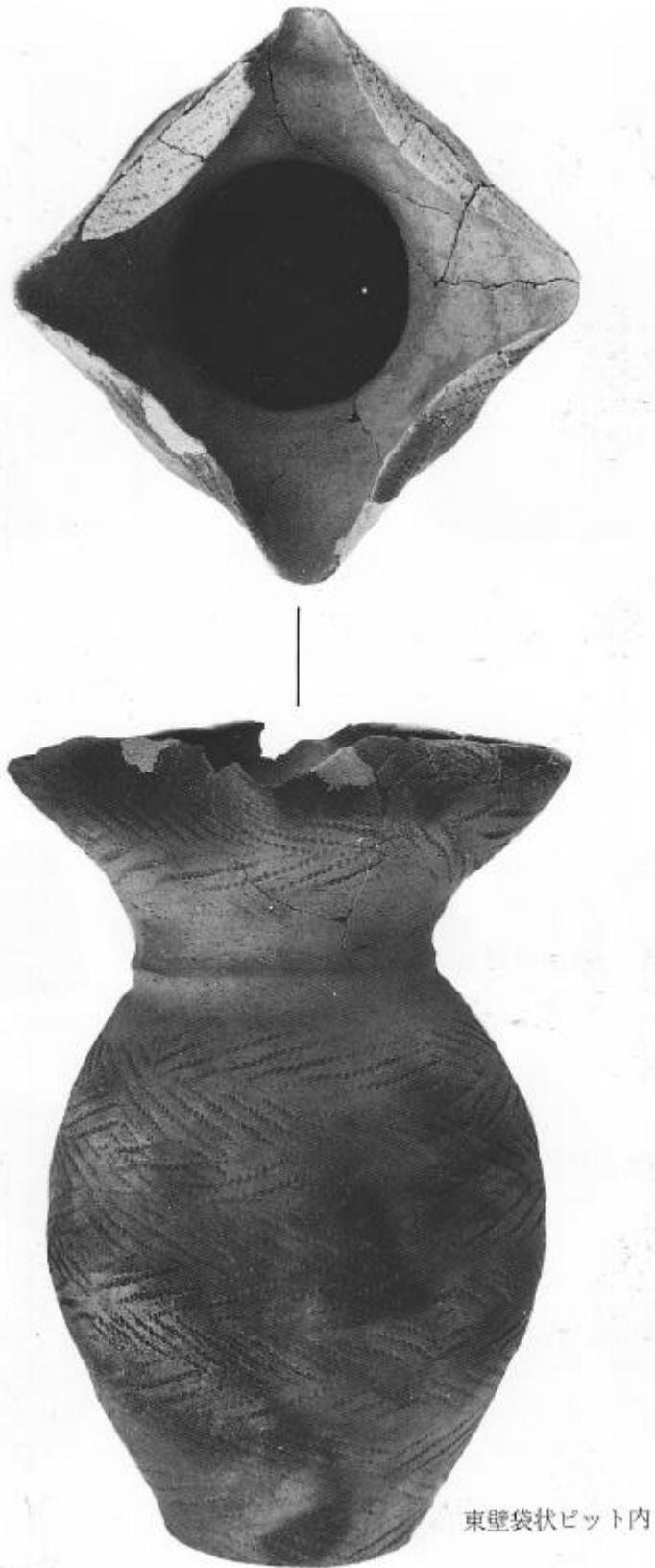


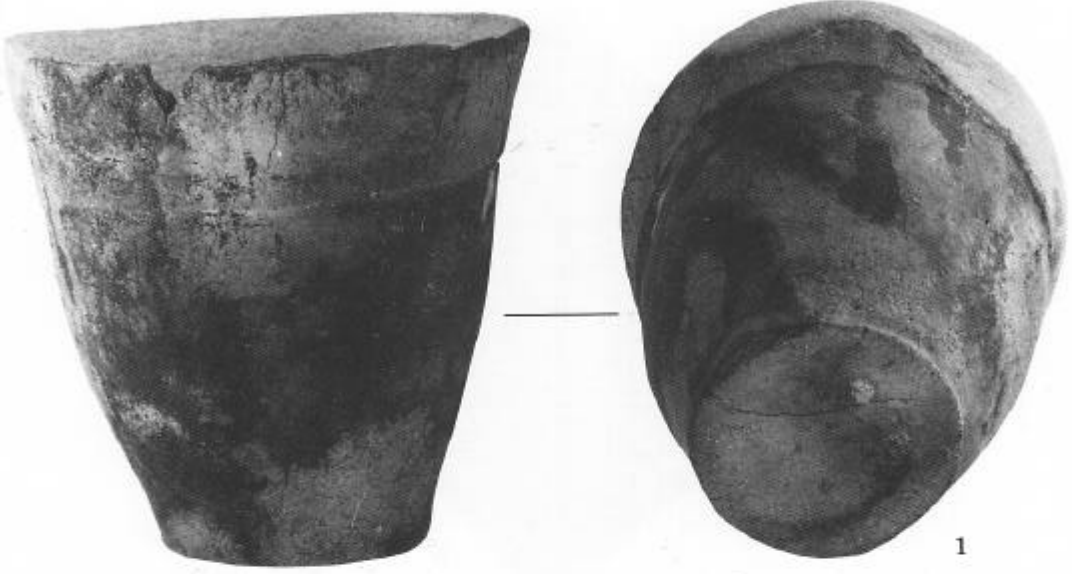
1・2：第1号竪穴住居跡
 3～6：第2号竪穴住所跡
 7～10：第1号土坑
 11・12・22：第2号土坑
 21：第4号土坑
 13：第5号土坑
 14～18：第7号土坑
 19：第11号土坑
 20：OB46ドリッド

1. 遺構内出土石器

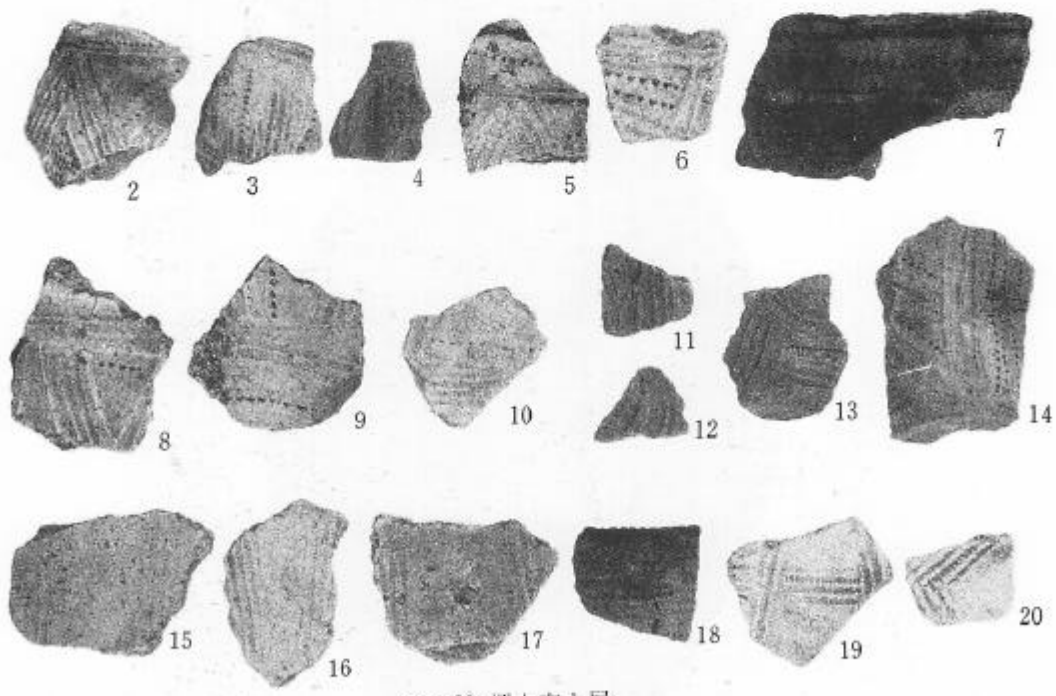


2. 遺構外出土縄文土器・石器

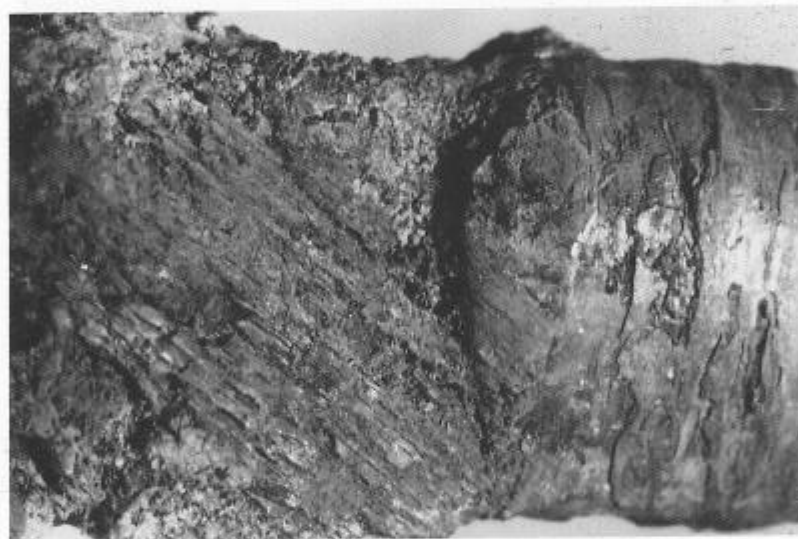




1:東壁際ピット上



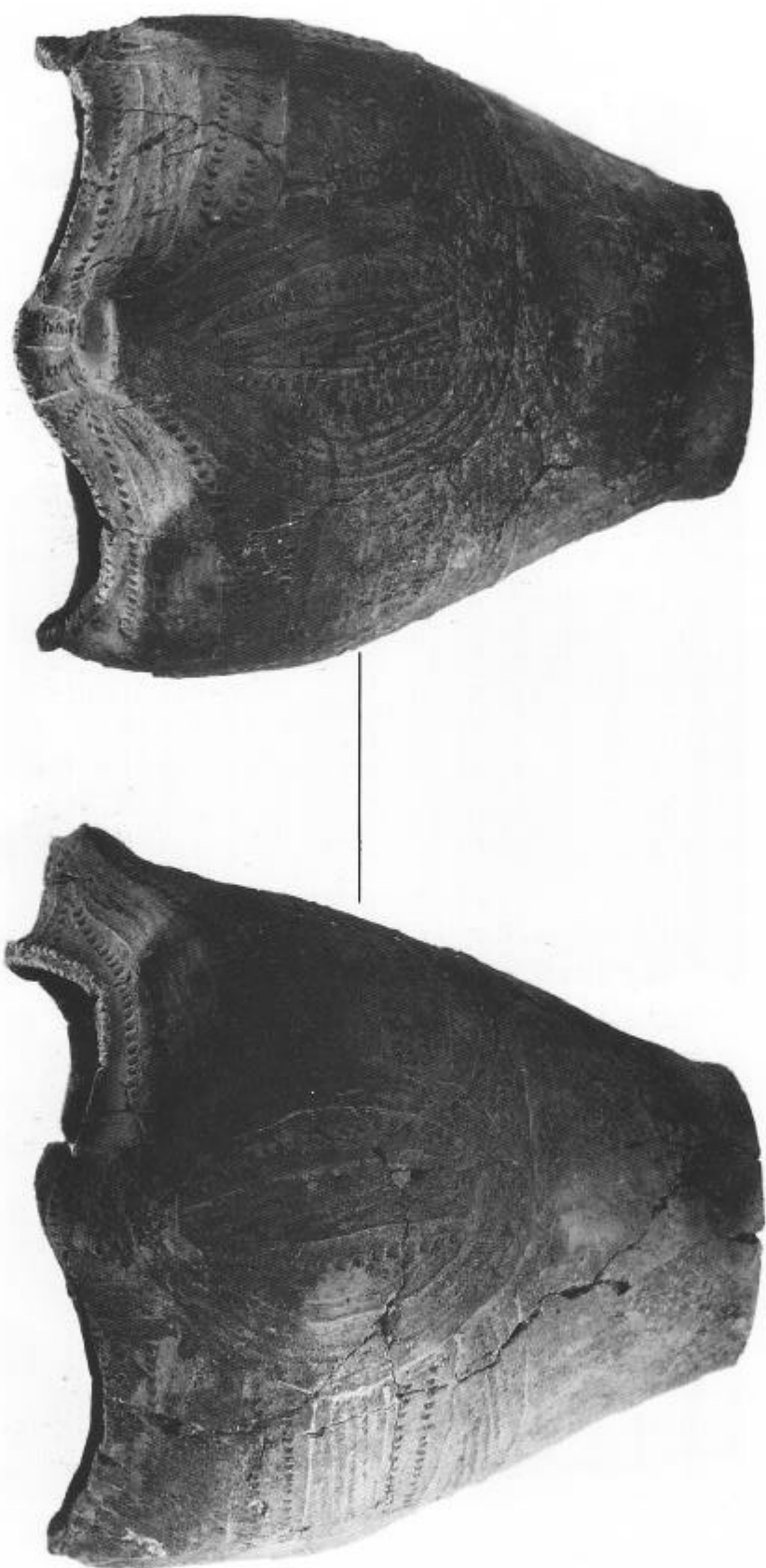
2~20:埋土内上層



刃部分拡大

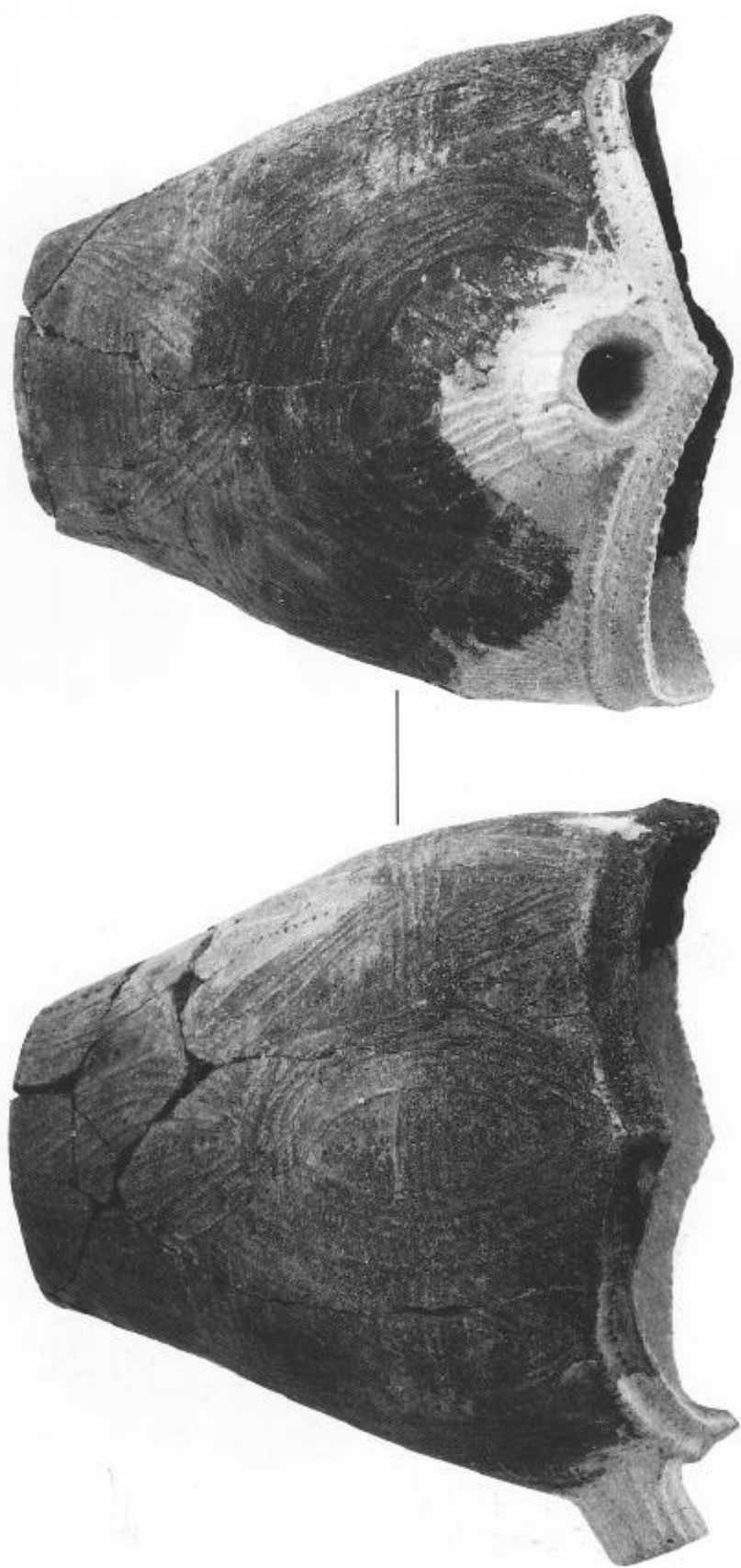


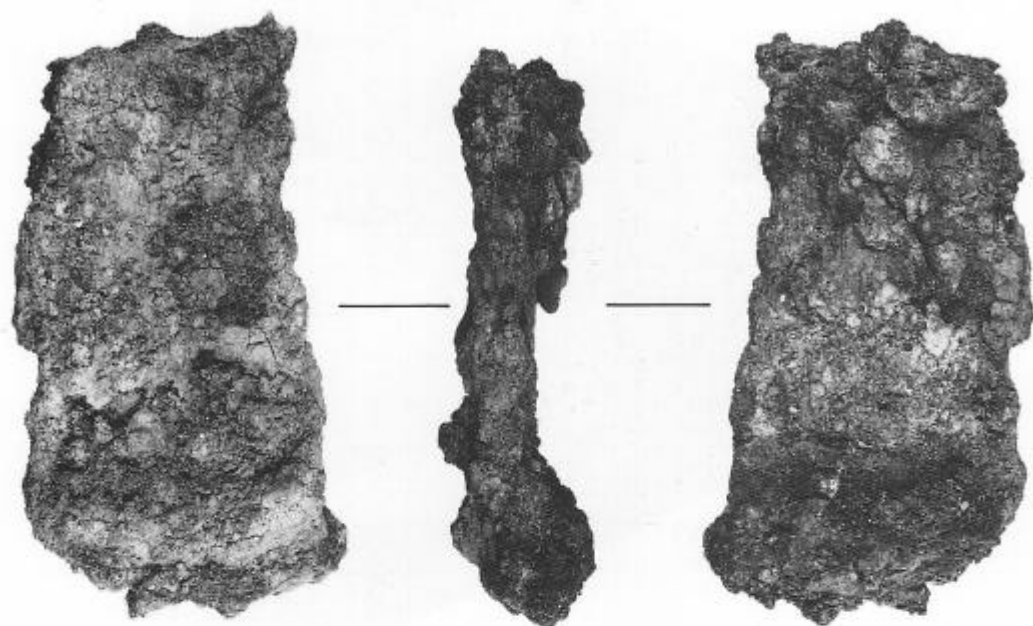
柄部分拡大



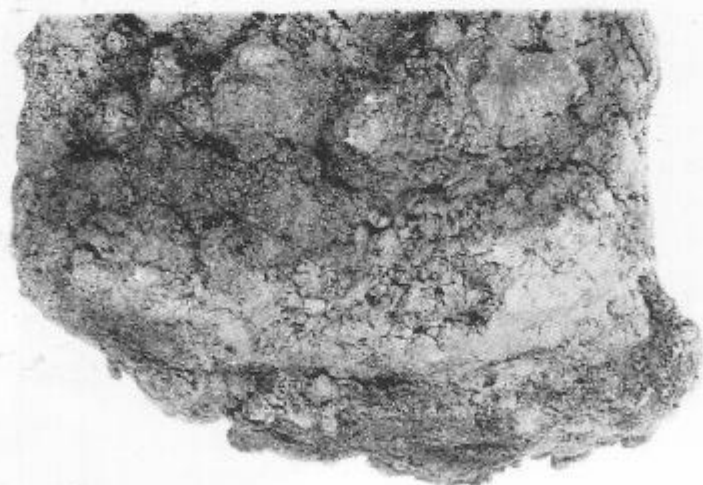
図版94

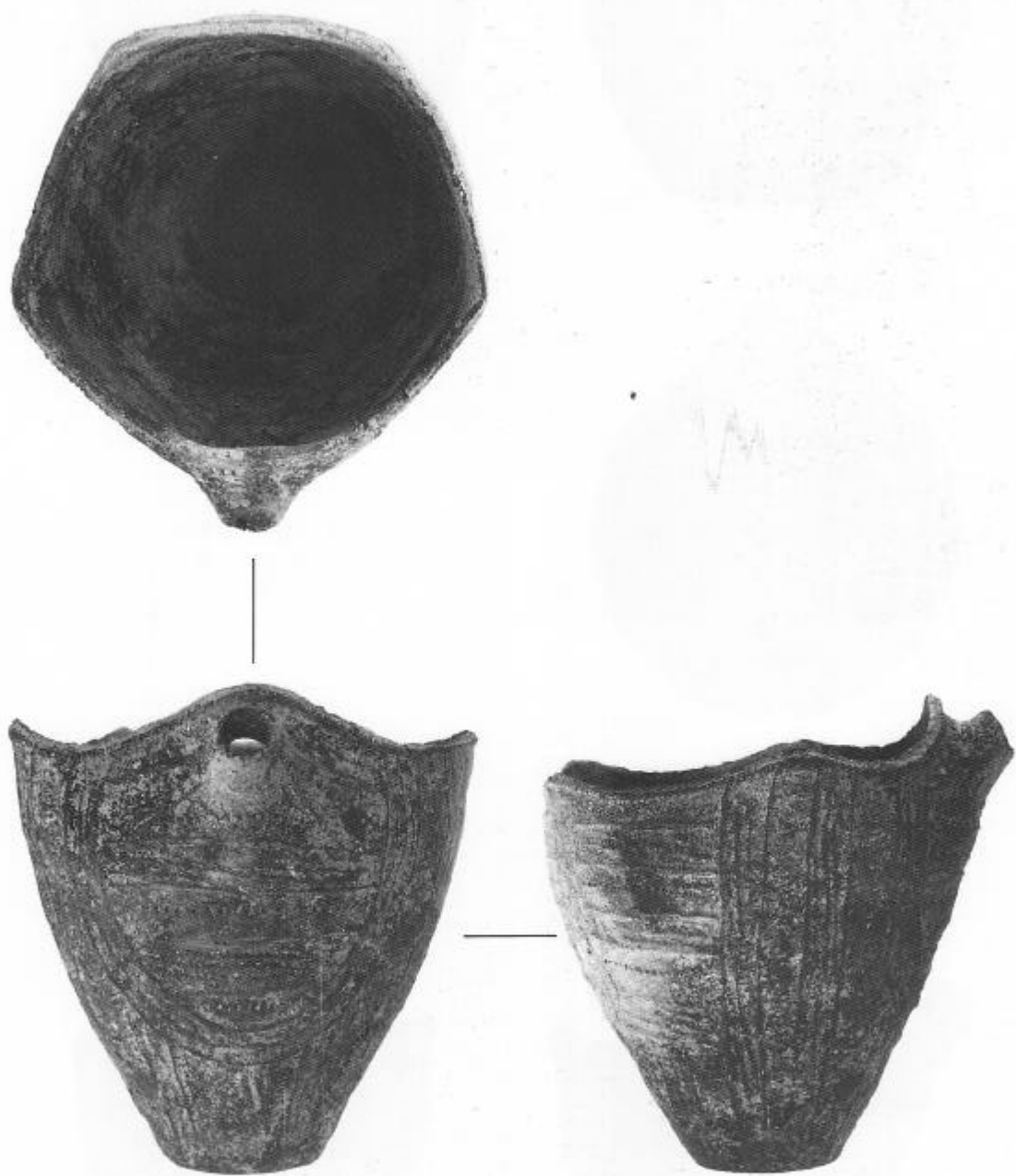
第3号土壙墓出土土器

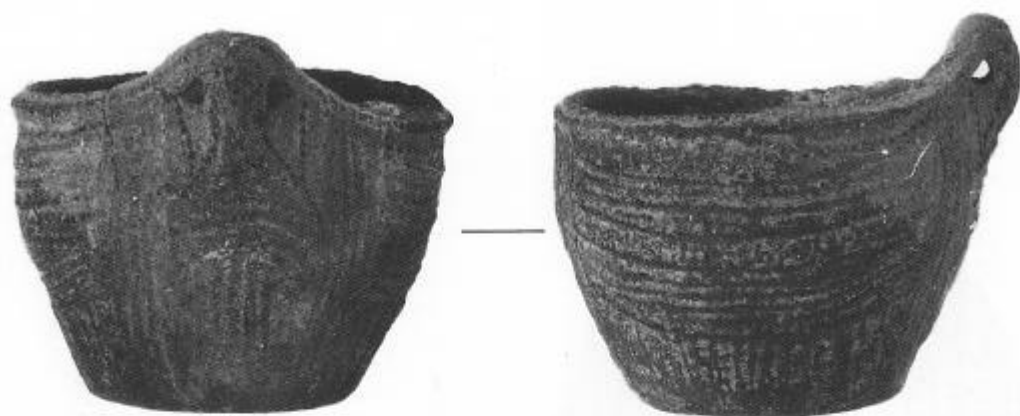




刃部拡大





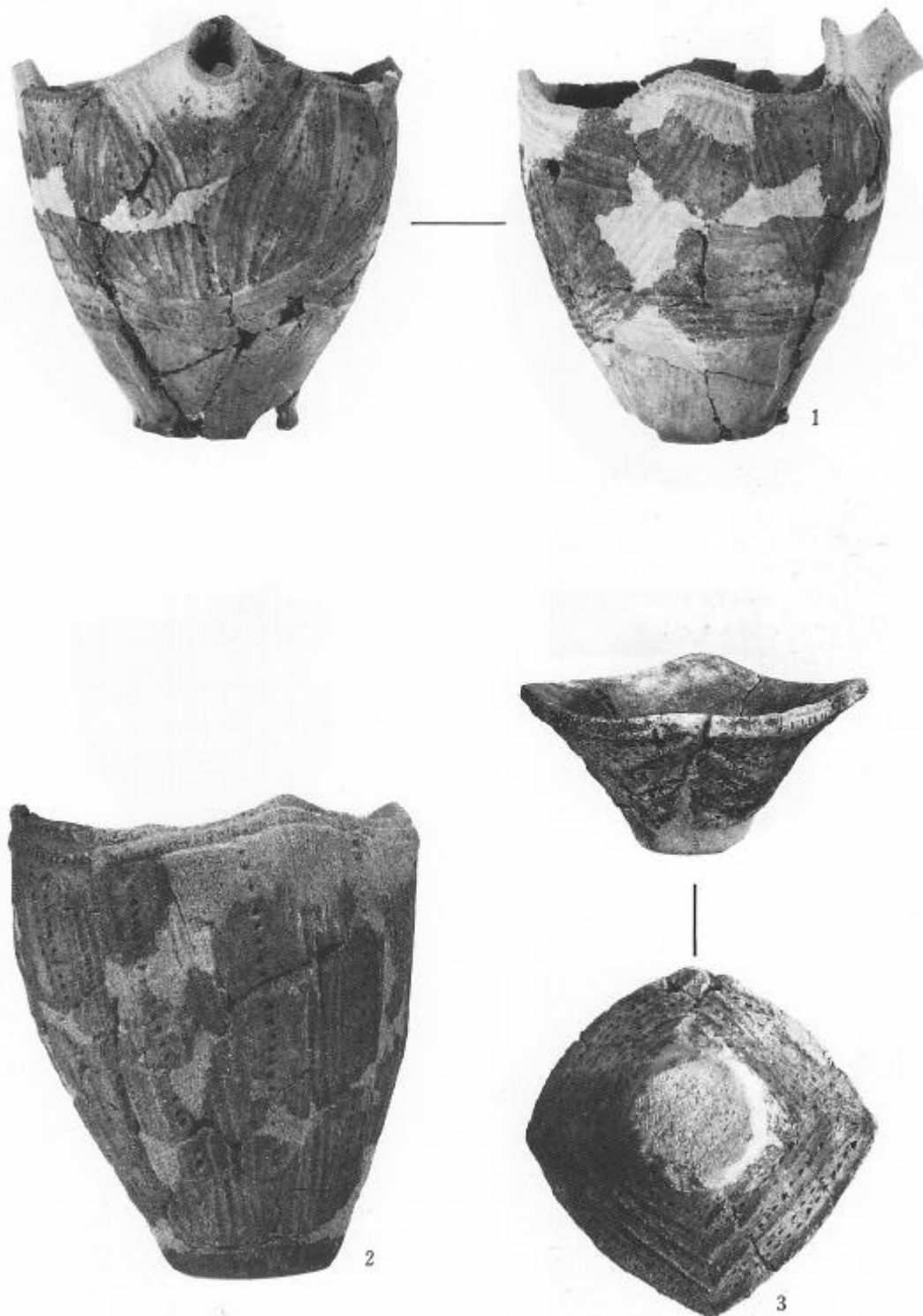


1

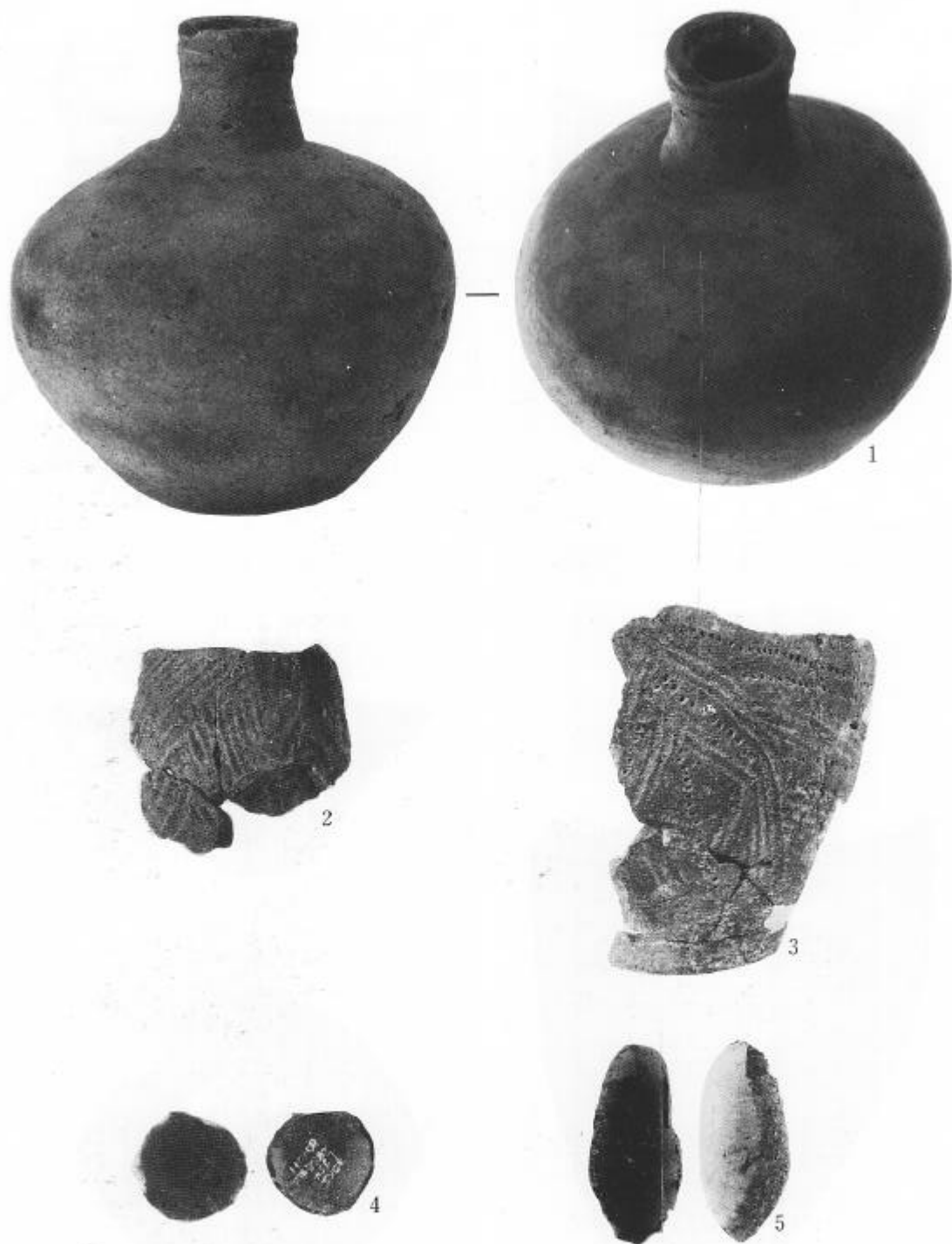
1: 城底部東壁際
2: 埋土内上層



2

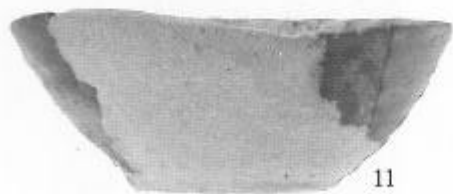
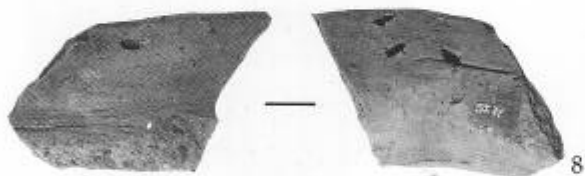
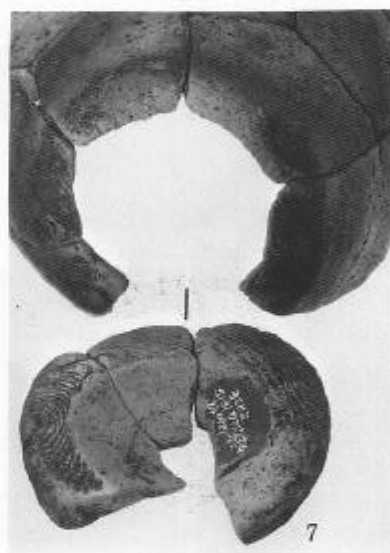
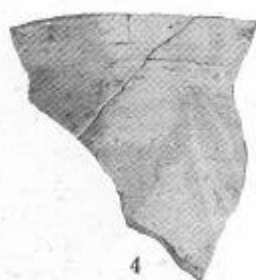


1~3; 埋土内上層



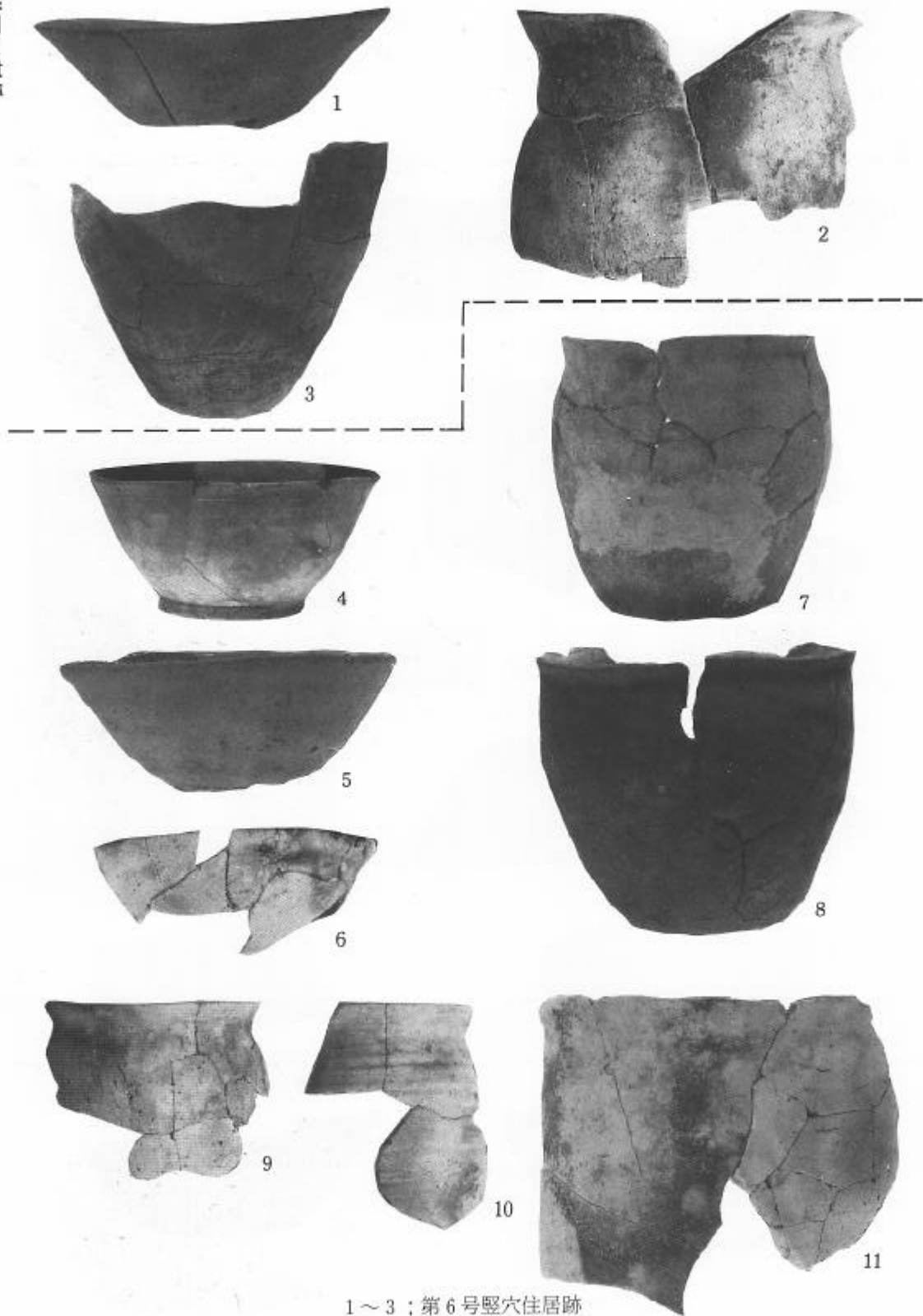
1・2 ; 第5号土壙墓埋土内上層
3 ; 第6号土壙墓東壁壙底部
4・5 ; 土壙墓周辺

図版100 第5号土壙墓出土土器(4)、第6号土壙墓出土土器、統縄文文化期土壙墓周辺出土石器

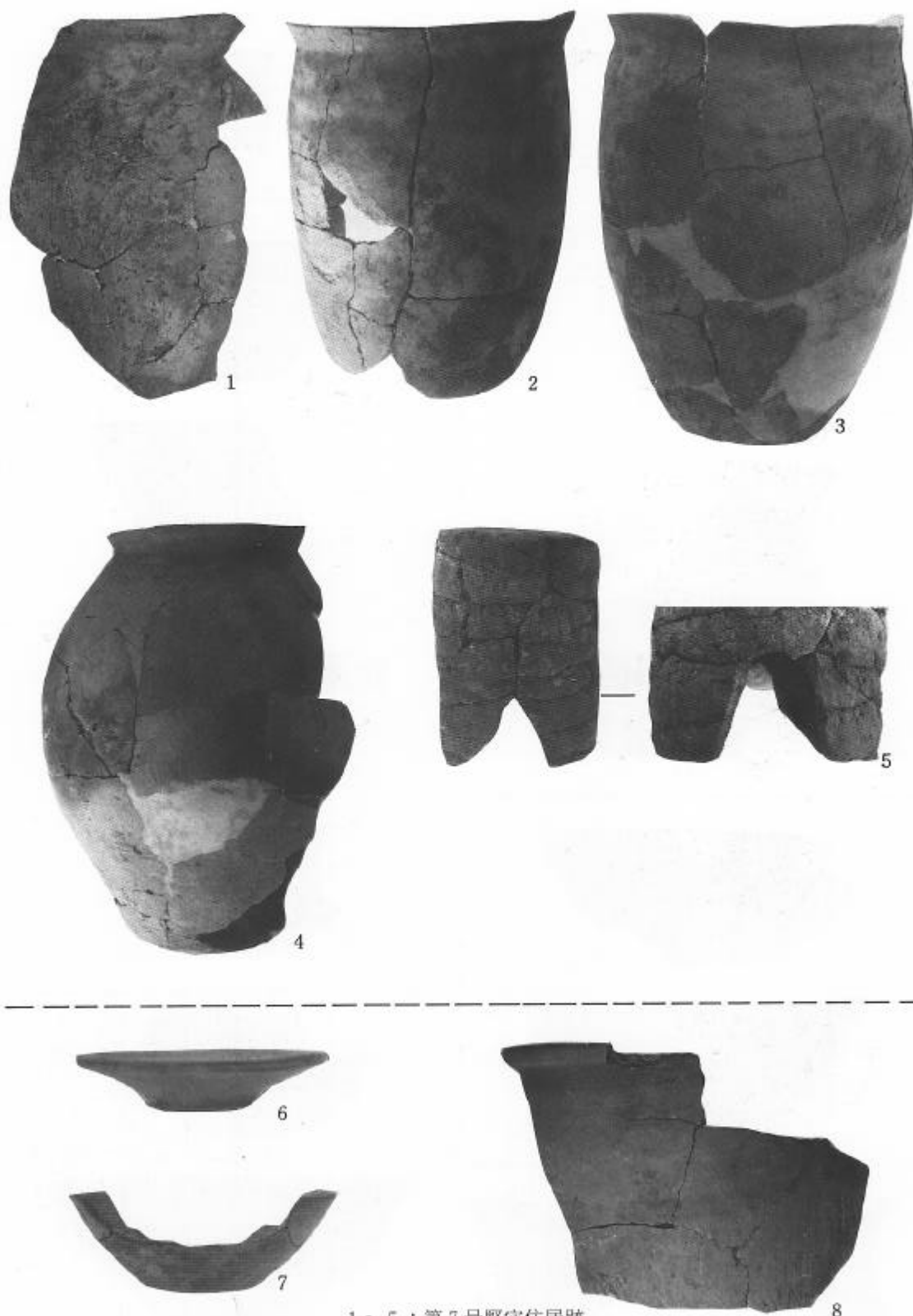


1 ; 第3号豎穴住居跡
2 ~ 10 ; 第5号豎穴住居跡
11・12 ; 第6号豎穴住居跡

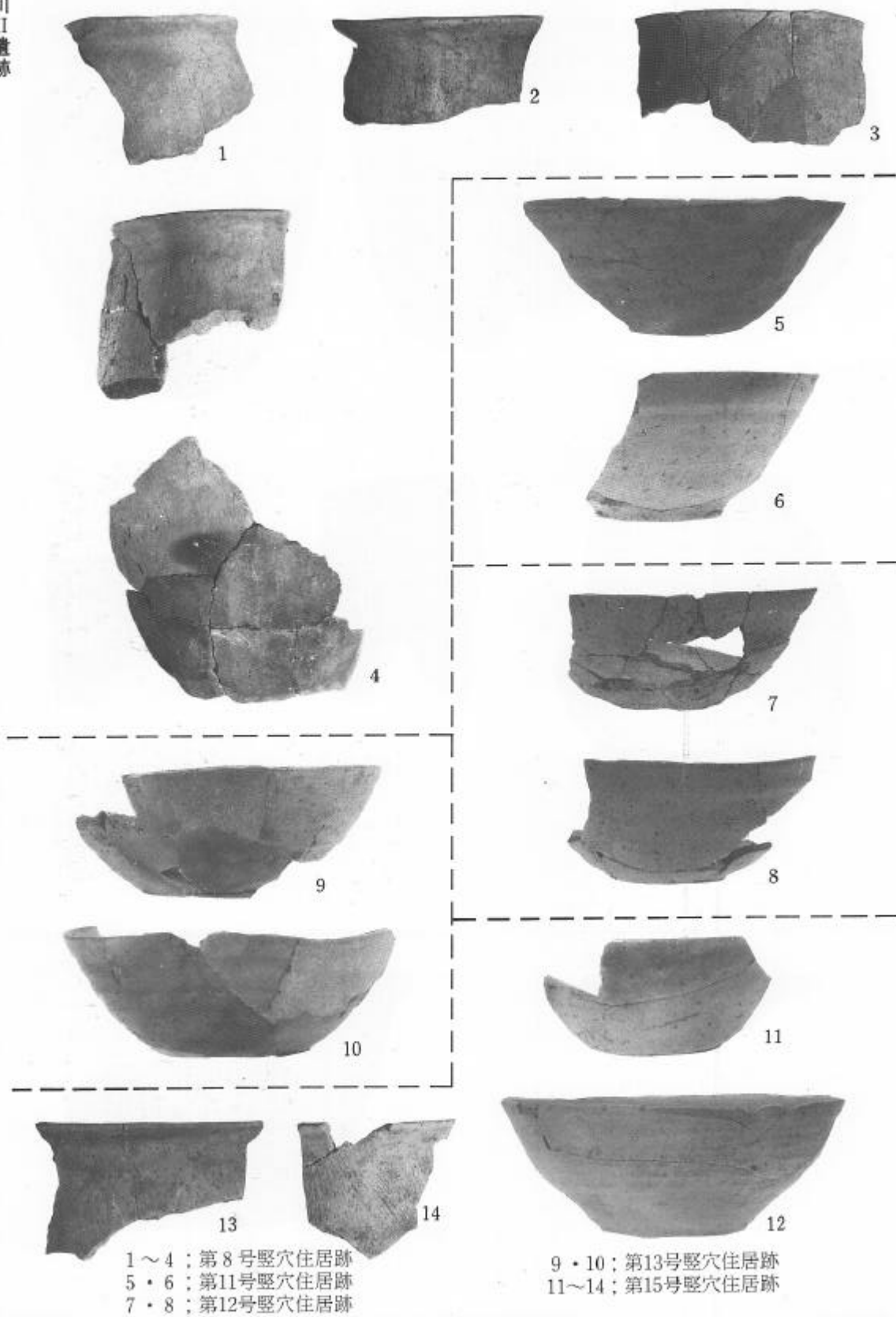
平安時代遺構内出土遺物(1)



1～3；第6号豎穴住居跡
4～7；第7号豎穴住居跡

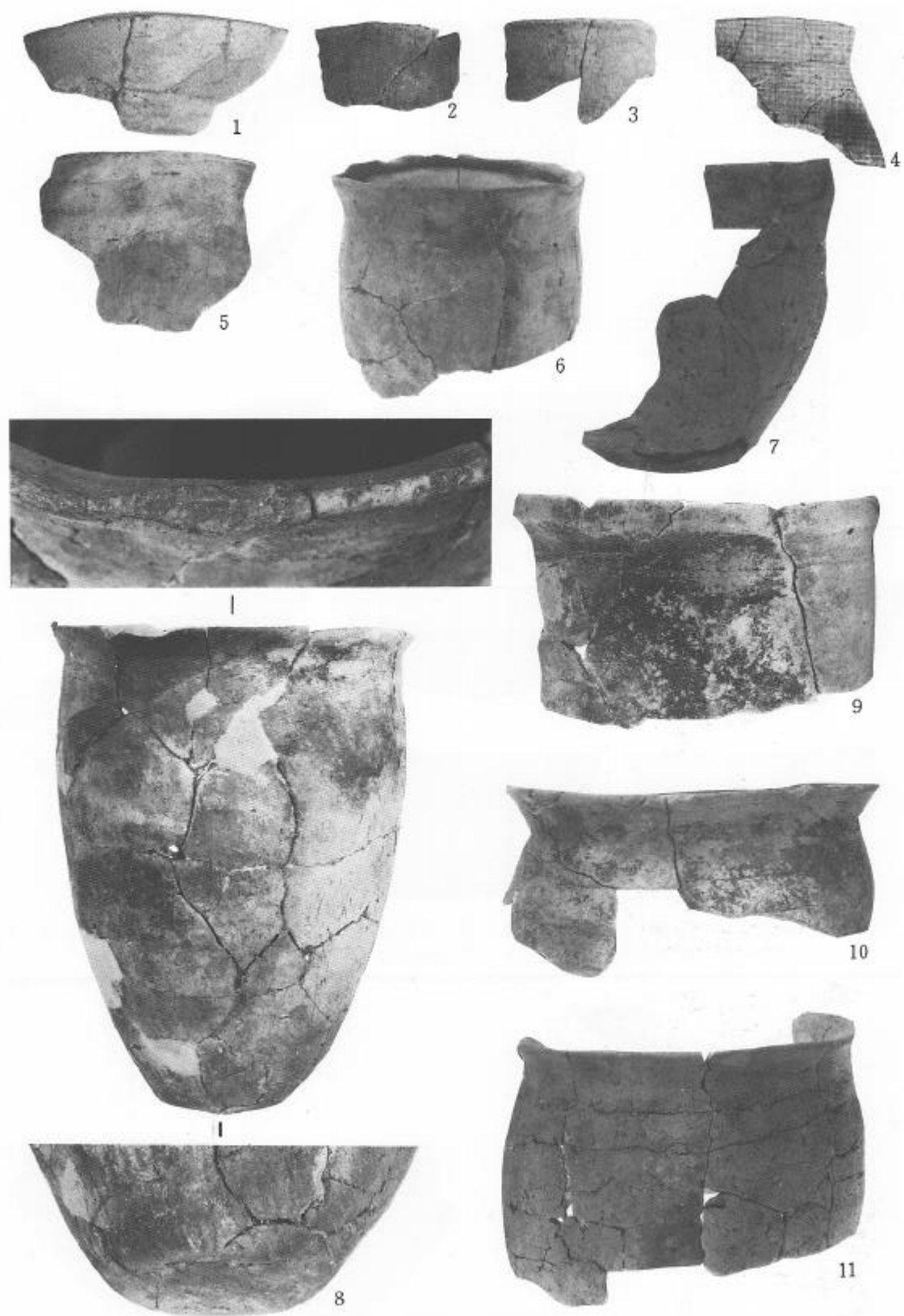


1～5：第7号竖穴住居跡
6～8：第8号竖穴住居跡



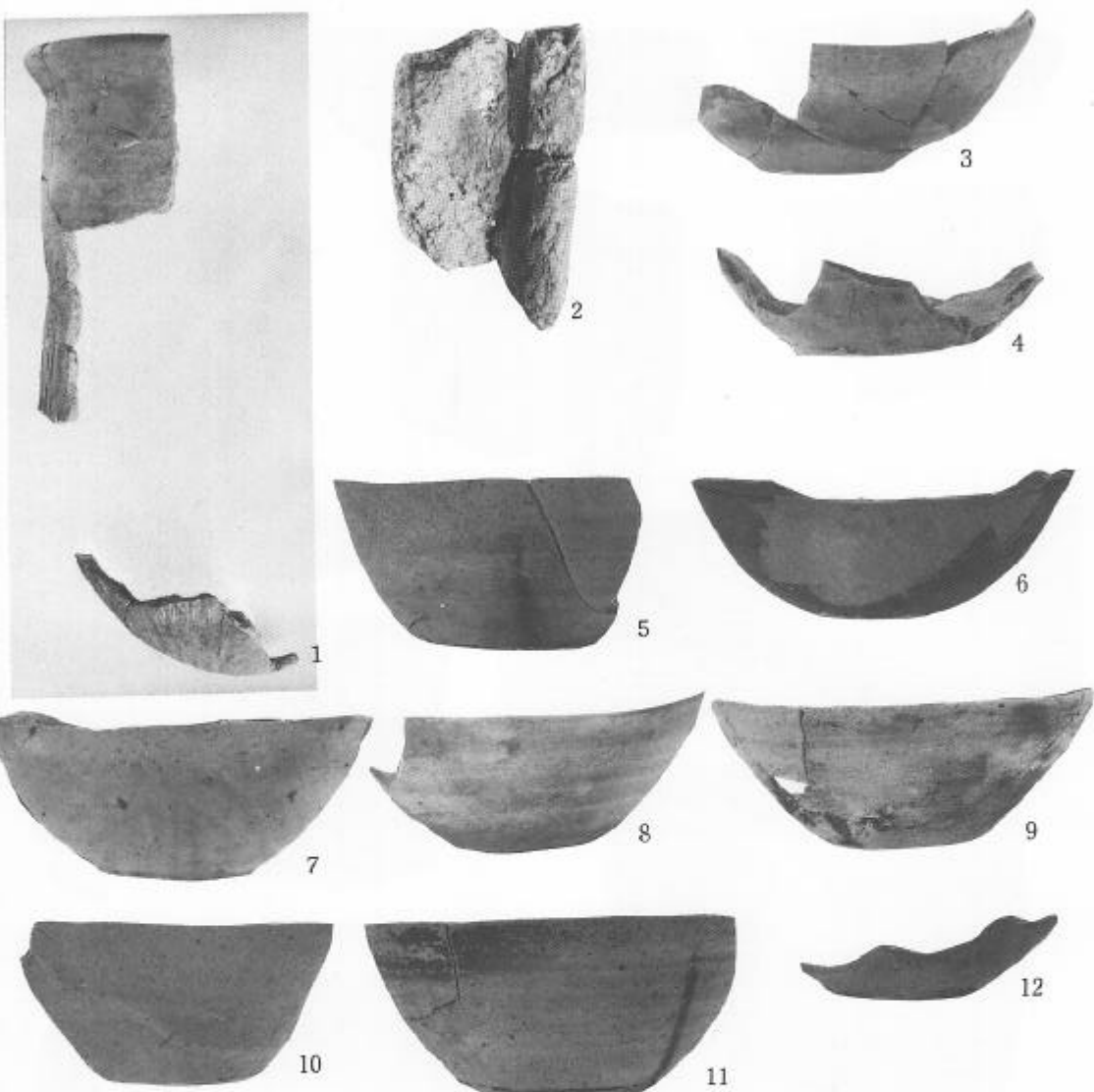
1～4；第8号竖穴住居跡
5・6；第11号竖穴住居跡
7・8；第12号竖穴住居跡

9・10；第13号竖穴住居跡
11～14；第15号竖穴住居跡



1~11：第15号竪穴住居跡

平安時代遺構内出土遺物(5)



1・2；第15号竖穴住居跡 4；第1号製鉄炉 6～10；第20号土坑 11；第30号土坑
 3；第16号竖穴住居跡 5；第19号土坑 12；第34号土坑



13～16；遺構外

別 編 自然科学的分析

分析試料

第1章～第3章の分析の対象とした試料は、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡から採取された土壌試料8点である（試料表）。

試料表

遺跡名	試料番号	HM	LM	屈	P	W	備考
寒川Ⅰ	1	○	○	○			基本層序内（地山層）
	2	○	○	○			〃
	3				○		縄文早期（S I 37）
	4				○		縄文中期（S I 21）
	5					○	縄文早期（S I 37）
寒川Ⅱ	1	○	○	○			基本層序内（地山層）
	2				○		続縄文（S K 79）
	3				○		平安（S I 77）

○；分析試料. HM；重鉍物分析. LM；軽鉍物分析.

屈；屈折率測定. P；花粉分析. W；材同定

また、第4章の¹⁴C年代測定の試料は寒川Ⅰ遺跡から1点、寒川Ⅱ遺跡から2点を選んだ。第5章は本編第5章第2節－2の続縄文時代の第4号土壙墓出土鉄斧について行ったものである。

第1章テフラ分析

1 分析の目的と方法

本分析は、寒川Ⅰ遺跡から採取された2点および寒川Ⅱ遺跡から採取された1点の鉱物組成および屈折率測定を行ない、岩石記載的特徴を明らかにすることにある。

分析方法は、以下のとおりである。最初に試料約40gを秤量後、超音波洗浄と湿式の篩別を行なって1/16mm以下の粘土分を除去する。実体鏡下で観察後、1/4～1/8mmの粒子を篩別してテトラプロモエタン（比重2.96）によって重液分離を行なう。鉱物の同定には偏光顕微鏡下で行ない、重鉱物、軽鉱物各々250粒以上を同定して重鉱物組成、軽鉱物組成とした。さらに斜方輝石を手選別後、新井（1972）の方法によって屈折率の測定を行なった。

2 分析結果

実体鏡下での観察の結果、いずれの試料にも風成砂（砂丘砂）起源の表面の濁った石英等が多く認められた。これに対して一般にテフラの指標とされる火山ガラス、スコリア、火山ガラスが付着した斑晶鉱物、自形の斑晶鉱物等は非常に少なく、わずかに暗灰色スコリアと自形の斑晶鉱物が認められるにすぎなかった。従ってこれらの試料の母材は砂丘砂の可能性が大きい。

試料の軽鉱物組成を図1・2に、重鉱物組成を図3・4に示した。試料間で大きな違いは認められなかった。まず軽鉱物組成をみることにする。火山ガラスはいずれの試料にも含まれているが、その量は非常に少ない。火山ガラスの形態は透明の軽石型である。試料の大部分は同定不能の岩片や風化した石英等の鉱物である。これらの他に石英（高温型を含む）や長石が含まれている。重鉱物は、量の多い順に斜方輝石、磁鉄鉱、単斜輝石、角閃石で、ジルコンもごくわずかに認められた。これらのうち重鉱物の大部分（60～70%）を占める斜方輝石には、自形の斑晶も含まれている。

さらに詳しい特徴を知るために屈折率の測定の対象としては、自形の斑晶が認められテフラ起源の可能性が大きい斜方輝石を選んだ。測定結果（モード）を表に示す。rangeはおそらく様々な起源をもつ斜方輝石が混在している砂丘砂を反映してか、いずれの試料でもかなり値がばらついていた(1.704～1.722)。モードをみると、いずれの試料も1.710から1.716の間にあり、試料間で大きな差は認められなかった。

3 考察

1) 示標テフラとの対比

寒川Ⅰ遺跡の地山層（寒川Ⅰ遺跡、試料番号1）および寒川Ⅱ遺跡の地山層（寒川Ⅱ遺跡、

試料番号 1) には、ごく少量のスコリアと自形の斜方輝石が認められたが、従来知られている示標テフラ層に対比できるような火山噴出物は認められなかった。具体的なテフラに関する資料が手もとにないので具体的なことは言えないが、スコリア層や自然の斜方輝石は、男鹿半島西部の一ノ目潟等の単成火山群あるいは寒風山火山からのテフラに由来している可能性はないだろうか。藤岡 (1959) によれば、寒風山起源の溶岩流が40m 段丘を被っている。この40m 段丘はもっとも広く分布している (藤岡、1959) ことから、潟西段丘に相当すると考えられる。潟西層団地研究グループ (1983) は、男鹿半島北東部潟西地域の層序学的研究を行ない、下位より順に先鮪川層、安田層、潟西層、橋本段丘構成層、寒風山火山噴出物そして砂丘砂と記載している。安田層中には含まれるピンクタフ (北里、1975. Okada, 1971. 白石ほか、1981) が約9~13万年前に北海道の洞爺カルデラから噴出した洞爺火山灰 (Toya, 町田ほか、1984) に対比される (町田、新井、宮内、1984) ことから、寒風山の火山活動は第四紀後期であろう。また山頂部に火口地形が読みとれることから、テフラの噴出が比較的新しい時代にも行なわれている可能性がある。また目潟火山群起源のテフラも、寒風山起源の溶岩流同様に40m 段丘を被っている (藤岡、1959) ことから、第四紀後期のうち比較的新しい年代に噴出している可能性が挙げられる。これらの火山に由来するテフラの層序、噴火年代、分布等の詳細な調査が待たれる。なお、南方の鳥海火山起源のテフラのうち、広域に分布するようなテフラ層は今のところ知られていない。

また能代市上ノ山Ⅱ遺跡の平安時代の竪穴住居跡の埋土から約800~900年前に朝鮮半島の白頭火山から噴出した白頭山-苦小牧火山灰 (B-T m; 町田ほか、1981) が発見されており (新井、1986)、今回採取された寒川Ⅰ遺跡のカマド内の試料 (寒川Ⅰ遺跡、試料番号 2) との対応関係を検討した。しかし今回の試料中には、B-T m に特徴的に含まれている透明のバブル型や軽石型ガラスやアルカリ長石は発見できなかった。鉱物組成等の特徴から、地山層と同じように砂丘砂起源の土壌と考えられる。

4 おわりに

今回の分析では示標テフラ層を発見することができなかった、当地域には次のべるようなテフラが見つかる可能性がある。最近前期旧石器時代について学界での話題となっているので、ここでは第四期後期のテフラ全体について記載する。なお、各テフラの岩石記載的特徴については、町田ほか、(1984) や Arai et al. (1986) 等の文献を参照されたい。

1. 十和田湖の a テフラ (Y o - a ; 町田ほか、1981) : A D. 915年
2. 白頭山-苦小牧火山灰 (B-T m ; 町田ほか、1981) : 11~12世紀
3. 鬼界アカホヤ火山灰 (K-A h ; 町田・新井、1978) : 約6,300年前
4. 十和田八戸テフラ (T o - H p ; 東北地方第四紀研究グループ、1969. 早川、1983)

: 10,000~13,000年前

5. 始良T n 火山灰 (AT ; 町田・新井, 1976) : 21,000~22,000年前

6. 阿蘇4 火山灰 (Aso - 4 ; 町田ほか, 1985) : 約70,000年前

7. 洞爺火山灰 (Toya ; 町田ほか, 1984) : 約90,000~130,000年前

これらのうち上位2枚については、すでに秋田県内においても分布が知られている。K-A hについては、最近米沢盆地や吾妻山中で対比される可能性があるテフラが発見されており(早田・新井, 未発表)、このテフラが当地域まで分布している可能性は否定できない。T o - H Pのうち当地域に分布する可能性のあるものは、八戸火砕流堆積物とそれに伴う洪水の堆積物である。とくに前者は、青森県南部(津軽~上北地方)を広く被っているほか、脊稜山脈山地の盆地内にも堆積している。層相および分布形態から、かなり流動速度の大きいtypeの火砕流であったと考えられる(早田・藤田, 未発表)。ATは、青森県西津軽郡出来島において厚さ3mmの純層(白色微細粒火山ガラス層)で発見されている(辻・遠藤, 1978)ほか、日本海秋田沖でも発見されている(Machida and Arai, 1983)。このことから当地域ではATが純層で発見される可能性もある。以上のテフラは考古学に直接関係する。

次に述べるAso - 4とToyaの2枚は、特に前期旧石器時代を主とする考古学的研究に重要であるほか、地形発達史等に大いに役立つテフラである。Aso - 4については、建設省国土地理院高沢信司技官より成合付近で発見されているとの御教示をいただいた。またToyaは、安田層中の鍵層で従来ピンクタフ(北里, 1975. Okada, 1979. 白石ほか, 1981)と呼ばれているテフラに対比される(町田ほか, 1984)。前述のようにこれら以外にも、目潟火山群起源のテフラや寒風山起源のテフラの堆積も確認できるかも知れない。

示標テフラをつかって遺物や遺構の新旧関係、層序対比、時代、年代などの研究を行うためには、まず広い地域で野外調査を行ないできるだけテフラの保存状態が良い露頭で、肉眼あるいは、テフラ分析によるテフラの層位を把握した上で、テフラ層位を組み立てなければならない。そして基本層序を踏まえた後、遺物や遺構との層序関係をとらえ、風成堆積物や泥炭層等の堆積状態の良好な地点を選んで連続的(たとえば5cm毎)に試料採取し、分析されることが望ましい。

引用文献

新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究—、
第四紀研究, 11, p. 254~269.

別編 自然化学的分析

新井房夫(1986) 能代市上ノ山Ⅱ遺跡の火山灰分析結果について, 上ノ山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書, 秋田県文化財調査報告第137集, P. 99~P100.

Arai F., Machida H., Okumura K., Miyauchi T., Soda T. and Yamagata K. (1986) Catalog for late Quaternary maker - tephra in Japan II - Tephra occurring in Northwest Honshu and Hokkaido - Geogr.Rept.Tokyo Metropol. Univ.,21,223-250.

藤岡一男(1959) 5万分の1地質図幅「戸賀・船川」, 同説明書, 地質調査所, P61

湯西層団体研究グループ(1983) 男鹿半島北東部湯西地域における湯西層, 地球科学, 37, P69~80.

北里 洋(1975) 男鹿半島上部新生界の地質および年代, 東北大地質古生物研報, 75, P17~49.

町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰一始良T n火山灰の発見とその意義一, 科学, 46, P339-347.

町田 洋・新井房夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ一アカホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, P143-163.

Machida H. and Arai F. (1983) Extensive ash falls in and around the Sea of Japan from large late Quaternary eruptions. Jour. Volcanol. Geoth. Res., 18, 151-164.

町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981) 日本海を渡ってきたテフラ, 科学, 51, P.562-569

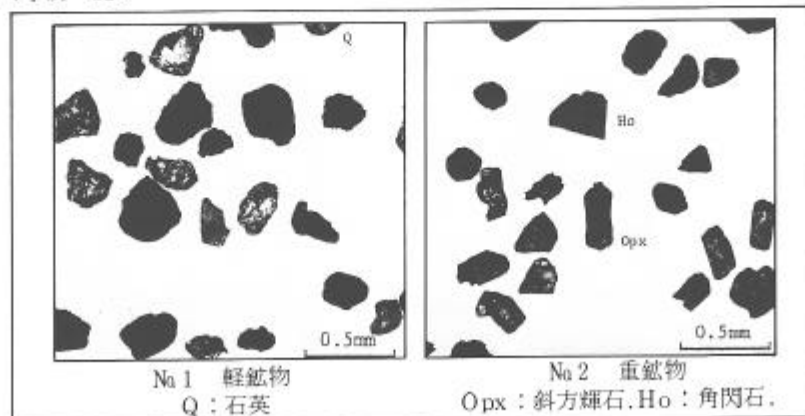
町田 洋・新井房夫・百瀬 頁(1985) 阿蘇4火山灰一分布の広域性と後期更新世示標層としての意義一, 火山, 第2集, 30, P.49-70.

Okada Y. (1979) Stratigraphy and Ostracoda from Late Cenozoic Strata of Oga Peninsula, Akita Prefecture. Trans.Proc. Palaeont. Soc. Japan, N.S., 115, P.143-173

白石建雄・湯西層団体研究グループ(1981) 男鹿半島における安田層の分布と安田期の構造運動について, 秋田大学教育学部紀要, 31, P.60-73.

辻 誠一郎・遠藤邦彦(1978) 津軽半島西海岸の第四系に関する新発見, 日本大学文理学部自然科学研究所紀要, 13, P.69-72.

町田 洋・新井房夫・宮内崇裕(1984) 北日本を広くおおむる洞爺火山灰, 日本第四紀学会講演要旨集, 14, P.81-82.



図版1 寒川Ⅱ遺跡試料の軽・重鉱物顕微鏡写真

表1 寒川 I 遺跡テフラ試料の屈折率測定結果

試料番号	斜方輝石の屈折率 (γ)
1	1.710~1.714
2	1.710~1.713

表2 寒川 II 遺跡テフラ試料の屈折率測定結果

試料番号	斜方輝石の屈折率 (γ)
1	1.712~1.716

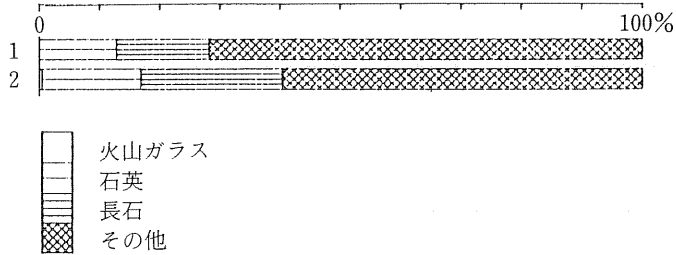


図1 寒川 I 遺跡試料の軽鉱物組成

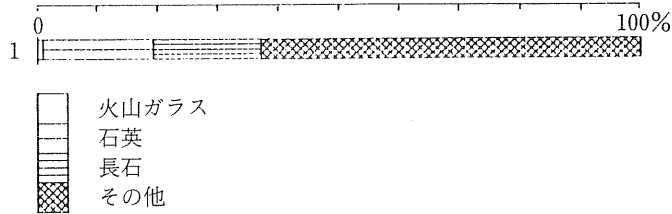


図2 寒川 II 遺跡試料の軽鉱物組成

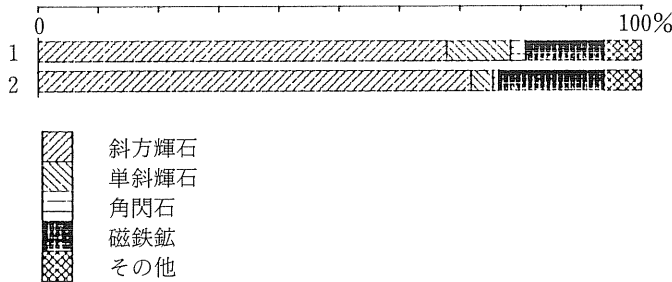


図3 寒川 I 遺跡試料の重鉱物組成

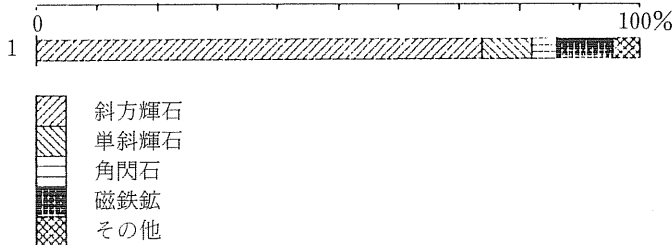


図4 寒川 II 遺跡試料の重鉱物組成

第2章 花粉分析

第1節 寒川Ⅰ遺跡

1 目的

寒川Ⅰ遺跡は、秋田県能代市の南部、米代川の左岸から八竜町まで日本海沿岸に南北に連なる台地上に位置する。今回の調査は、寒川Ⅰ遺跡の縄文時代早期と縄文時代中期とされる遺構内の堆積土の花粉分析を行ない、その植生を推定することを目的とした。

2 試料

試料は、寒川Ⅰ遺跡のS I 37土坑内2層（試料3）、S I 21炉内（試料4）から採取された2点で、試料の土質はローム粒子の混じるシルトである。

3 分析方法

花粉、孢子化石の抽出方法は、以下に示す方法で行なった。

1) 秤量

試料をポリエチレン製ビーカーに各15g秤量する。

2) HF（フッ化水素）処理

本処理は、試料中のケイ酸質の溶解と、試料の泥化を目的とする。

①試料に48% HFを20ml加えて、振とう式ホットプレートで60分間加熱攪拌する。

②処理後、試料を50mlの遠沈管に移しかえ、遠心分離（1500回転）し、上澄み液を捨てる。

③蒸留水を加え、攪拌し、遠心分離を行ない上澄み液を捨て処理液を取り除く（以下、水洗とする）。この作業を2回行なう。

3) 重液分離

本処理は試料中の花粉、孢子化石などの有機物を、比重の違いを利用して分離する。

花粉・孢子化石の比重は1.3～1.8以下で、鉱物質は2以上である。

①ZnBr₂（臭化亜鉛）を10%塩酸（HCl）に溶かし、比重を2.2に調整する。その重液を、HF処理の終わった残渣に20ml加えて、よく攪拌する。

②遠心分離器により、800回転で15分間、続けて2500回転で10分間遠心分離する。

③遠心分離後の浮上物を別の遠沈管に移し、蒸留水を加え比重を下げ、遠心分離する。

④水洗を3回行なう。

4) アセトリシス処理

エルドマン（1934）が考案した方法で、植物遺体中のセルロースを加水分解する。

① CH_3COOH （氷酢酸）10mlを加えよく攪拌し、残渣の脱水を行なう。遠心分離する。上澄み液を捨てる。

② 残渣に、 $(\text{CH}_3\text{CO})_2\text{O}$ （無水酢酸）9部に H_2SO_4 （濃硫酸）1部を混入した醋化液を10ml加え、ウォーターバスで5分間湯せんする。冷却後遠心分離し、上澄み液を捨てる。

③ 水洗を3回行なう。

5) KOH処理

腐植酸の溶解を目的とする。

① 10% KOH（水酸化カリウム）を10ml加え、ウォーターバスで15分間湯せんする。

② 水洗を3回行なう。

6) 封入

分析処理後の残渣をマイクロピペットで花粉・胞子数を調整し、グリセリンゼリーで封入し検鏡した（グリセリンゼリーは、屈折率が1.43で、北米やわが国でよく使われる封入剤である）。

7) 検鏡

検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての種類（Taxa）およびその個数を計数した。

4 結果

2点の試料から検出された花粉・胞子化石は4種類と少なく、またその個数も少なかった（表2）。さらに、その化石の保存状態は悪く、外膜が壊れていた。このような分析結果は、関東地方のローム台地上の花粉分析結果と類似する。原因としては、堆積時あるいは堆積後の経年変化により酸化分解したものと考えられる。また、花粉、胞子が、熱に弱いことを考慮すると試料4のS121炉内の試料から花粉・胞子化石がほとんど検出されないのは、そこで使用されていた火により分解した結果とも考えられる。

第2節 寒川Ⅱ遺跡

1 目的

寒川Ⅱ遺跡は、寒川Ⅰ遺跡の北側の湧水のある小沢をはさんで位置する。寒川Ⅱ遺跡内で発掘された縄文時代と平安時代とされる遺構内の堆積土を花粉分析と行ない古植生を推定することを目的とした。

2 試料

試料は寒川Ⅱ遺跡のS K 79後北C₂式土器（試料2）、S I 77埋土（試料3）から採取された2点で、土質はともにローム粒子の混じるシルトである。

3 分析方法

分析方法は、前述した寒川Ⅰ遺跡と同じ。

なお、結果の表示で複数の種類（T a x a）をハイフオンで結んだものは、種類の区別が明確でないものである。

4 結果

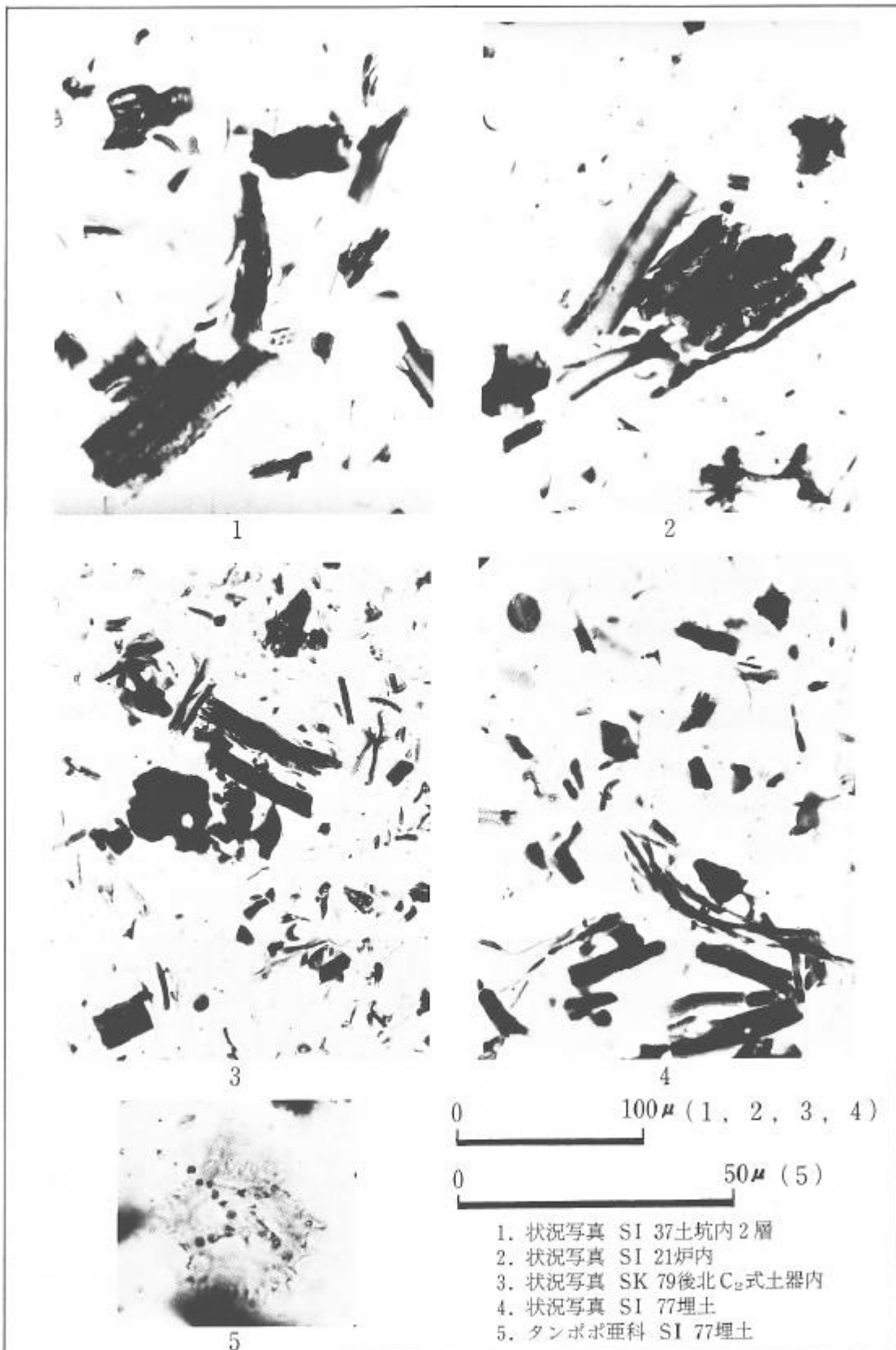
2点の試料から、樹木花粉8種類、草本花粉6種類、シダ類孢子1種類が検出されたが、その個数は少なく、その化石のほとんどの膜が壊れていた。また、化石数は少なかったが、その産状は試料2と3では明らかに異なっており、試料2の方が種類数及び個数が多く検出された。このような結果は花粉化石の保存状態より、酸化分解した結果であると考えられ、古植生を推定することは困難である。試料2と3の花粉・孢子化石の違いは、試料3が土器内の埋土であること、堆積環境の違いなどが原因としてあげられる。

表3 寒川Ⅰ遺跡試料花粉分析結果

試料番号	試料番号	
	3	4
ツガ属	—	1
コナラ亜属	1	—
イネ科	1	—
カヤツリグサ科	1	—
不明花粉	1	—
他のシダ類孢子	1	—
樹木花粉	1	1
草本花粉	2	0
不明花粉	1	0
シダ類孢子	1	0
総花粉・孢子	5	1

表4 寒川Ⅱ遺跡試料花粉分析結果

試料番号	試料番号	
	2	3
スギ属	1	—
ハンノキ属	—	2
コナラ亜属	1	—
クリ属	15	2
ニレ属—ケヤキ属	5	—
エノキ属—ムクノキ属	1	—
カエデ属	1	—
トチノキ属	1	1
イネ科	15	—
カラマツソウ属	6	—
セリ科	1	—
ヨモギ属	6	1
キク亜科	—	1
タンポポ亜科	1	—
不明花粉	3	—
他のシダ類孢子	2	—
樹木花粉	25	5
草本花粉	29	2
不明花粉	3	0
シダ類孢子	2	0
総花粉・孢子	59	7



図版2

第3章 炭化材同定

1 試料

試料は1点(No. 5)で、縄文時代早期のものとされるS 137住居址の土坑内から検出されたものである。試料の性格などは不明である。

2 方法

試料を乾燥させたのち、木口、柾目、板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版(図版3)も作成した。

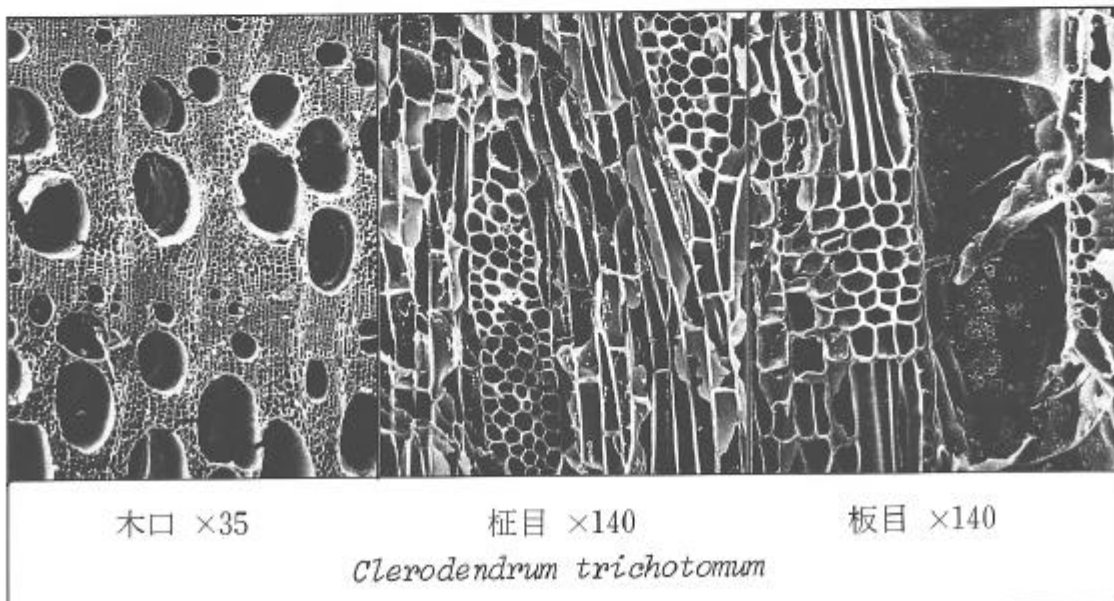
3 結果

試料は、クサギ(*Clerodendrum trichotomum*)と同定された。主な解剖学的特徴は次のようなものである。

環孔材で孔圏部は3~4列、孔圏外でやや急に管径を減じのち年輪界に向かって漸減する。大道管は管壁厚は中庸、横断面では楕円形、ほとんど単独、小道管は管壁はやや厚く、横断面では楕円形~多角形、単独および2~4個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1~6細胞幅、50細胞高を越えることもある。

柔組織は周囲状、翼状~連合翼状およびターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

クサギは北海道南西部以南の全土に自生するクマツヅラ科の落葉低木で、庭木としても植栽される。その名の示すように葉に悪臭がある。材は軽軟で、用途は特に知られていない。



図版3

第4章 ^{14}C 年代測定

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1987年 2月13日

秋田県埋蔵文化財センター殿

1986年12月3日に受領致しました試料についての ^{14}C 年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で、標準偏差 (one sigma) に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限とする年代値 (B・P) のみを表示してあります。また試料の、 β 線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modern と表示し、 $\sigma^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

Code	No.	試料	B. P. 年代(1950年よりの年数)
Ga K	13141	Charcoal from Noshiro, Akita. 3SK I -SI37 (寒川 I 遺跡第4号竪穴住居跡) 861108	5470 \pm 130 3520 B. C.
Ga K	13142	Charcoal from Noshiro, Akita. 3SK II -SN14 (寒川 II 遺跡第1号製鉄炉) 861105	1280 \pm 90 A. D. 670
Ga K	13143	Charcoal from Noshiro, Akita. 3SK II -SK65 (寒川 II 遺跡第14号土坑)	4610 \pm 90 2660 B. C.

以上

木越邦彦

第5章 寒川II遺跡出土鉄器の金属学的解析結果について

岩手県立博物館 赤沼 英男

寒川II遺跡において検出された6基の土壙墓は、その形態ならびに共伴した土器によって4～5世紀代に相当する続縄文時代のものと推定されている。これらの土壙からは土器の他に刀子と鉄斧が出土しているが、本遺跡の性格からすれば、鉄製品は北方からもたらされた可能性も考えられる。しかしながら同時期における東北地方北部より出土した鉄器の調査例はまだ1例もない。鉄器の流通経路についても全く不明であることから、これらの鉄製品の金属学的解析は4～5世紀代の東北地方北部における鉄文化の流入を検討するうえできわめて重要である。

このたび、秋田県埋蔵文化財センターの依頼により鉄斧の金属学的解析を行う機会に恵まれた。他地域より出土した同時期における鉄製品との比較検討の問題がまだ残されているが、以下に鉄斧の解析結果を報告する。

1、調査試料および方法

図1に試料鉄器を示す。表面は土砂および赤錆層に覆われているが磁性は強く残存状態は良好と判断される。

金属学的解析には図1、A部より採取した微小な錆片(0.3g)を用いた。採取した試料は2分し、一方を樹脂に埋め込み研磨して組織観察に、他方を化学成分分析に供した。組織観察はもとの鋼の結晶組織が推定できる領域と非金属介在物の状態を十分に確認できる領域を中心に金属顕微鏡を用いて行なった。さらに代表的な非金属介在物については、E P M A (エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー)で組成を分析した。なお、試料の研磨に際しては、試料中の化学成分の溶出を防止するため、水を一切使用しない方法を用いた。

化学成分分析試料は、双眼実体顕微鏡下で赤錆部分をそぎ落とし、メタルおよび黒錆部分をその分析対象とした。分析はICP法(結合誘導プラズマ法)によった。

2、調査結果ならびに考察

採取した錆片のマクロ組織を図2に示す。白色部はメタル、暗灰色部は黒錆(マグネタイト、 Fe_3O_4)である。赤錆(水酸化鉄、 $FeOOH$)はマクロ組織内にほとんど認められず、残存状態は比較的良好である。

図3-aは図1領域A部のミクロ組織であるが、内部に白色の結晶が認められる。図3-aの枠線部分を高倍率で観察したものが図3-bである。微細な細線から島状結晶であることがわかる。

これは銹化前の健全な状態におけるパーライト層中のフェライトが失われ、セメントイトのみが残っている組織と推定される。この網目状をした島状組織全体をもとの健全な鋼におけるパーライト相、島状組織で囲まれる黒錆部分をフェライト相とし、銹化による結晶膨張を無視すれば炭素含有量は0.1~0.2%、フェライト結晶の大きさは25~30 μ 程度となる。以上の観察結果を総合すればこの板状鉄斧の基部はパーライト変態点以上の高温領域からゆるやかに冷却された軟鋼によって構成されていたものと推定される。

(註2)

なお、採取した錆片の観察結果のみからは韓国公州市土壙墓から出土した鍛造鉄斧のように硬軟の合わせ鍛えが行われているかどうかについては言及できない。

次に使用原料ならびに鋼精錬法について検討する。表1に鉄斧の化学成分分析値を示す。鉄は銹化の過程で酸素と水素分を増すいっぽう鉄分の含有量は減少するため、もとの健全な鋼の化学組成を推定するためには対Fe比をとって検討する必要がある。表1には上段に分析値を、下段に対Fe比を示している。鉍石の指標元素であるCu、Mn、Pはいずれも0.004%以下と低レベルにあるが、また砂鉄の指標元素であるTiも0.0864%ときわめて低いことから砂鉄の使用は考えにくい。この分析値のみから断定することはできないが、始発原料は鉍石が有力である。いっぽうSiは0.0125%であり、この分析値から予想される鋼中の珪酸塩介在物量は0.03~0.04%程度となる。分析値のみを限りきわめて清純な鋼が使用されていたものと考えられる。

表1 寒川Ⅱ遺跡出土鉄斧の化学成分分析値(%)

T・Fe	Cu	Ti	Mn	P	Si
40.24	0.0019	0.0408	0.0092	0.0126	0.0059
	0.0040	0.8640	0.0195	0.0267	0.0125

図4-a₂およびb₂はそれぞれ灰色粒状化合物、黒色ガラス相(図4-b₁に指示)のE P M Aによる定性分析結果であるが、前者からはFeが、後者ではほかにSi・Ca・Al・Kが強く検出されている。この分析結果からこの介在物は、灰色粒状化合物ウスタイト(FeO)およびCaO-SiO₂-Al₂O₃-K₂O系のガラス質珪酸塩から構成されている。鋼精錬過程で脱炭剤として鉍石粉を、また造滓材として石灰質系の物質を使用した時の生成物と考えられる。磁鉄鉍を始発原料とし、製錬によって得られた鉄素材を鉄石粉により精錬して0.1~0.2% Cの軟鋼をつくる。こうして得られた清純な鋼を使用して鉄斧の基部は作られたのであろう。

以上の調査結果から寒川出土鉄斧は鋼石を始発原料としていることが明らかとなった。また鋼の精錬法もその介在物組成から、韓国公州市土壙墓出土鉄斧、富の原遺跡出土鉄戈、および

(註3)

稲荷山鉄剣等の鉄製品とほぼ同じであると考えられる。こうした点をふまえれば寒川出土鉄斧

(註4)

も一応南の鉄文化がもたらしたものと考えられるが、4～5世紀代の鉄器の金属学的調査例がきわめて少なく、また同時期における北方の調査例が皆無である現状において、本鉄斧の流通経路を言及することは困難である。

今後、同時期における日本列島の鉄の解析を行なっていく中で明らかにすべき問題であろう。

引用文献

- (註1) 児玉 準・小林 克・利部 修・三嶋隆儀 1987『寒川Ⅱ遺跡の続縄文文化土壌墓について』
日本考古学協会第53回総会研究発表要旨
- (註2) 佐々木 稔・大槻 孝・村田朋美・稲本 勇・佐藤栄次・伊藤 叡 1981『古刀・古斧の金属学的研究(1)』 たたら研究 24
- (註3) 佐々木 稔・村田朋美・伊藤 薫 1985『富の原遺跡出土鉄戈鍔片の金属学的解析結果』
富の原遺跡群確認調査概報Ⅳ・長崎県大村市教育委員会
- (註4) 佐々木 稔・村田朋美 1985『古墳出土鉄器の材質と地金の製法』 「季刊考古学」8, 27～
33 東京・雄山閣出版

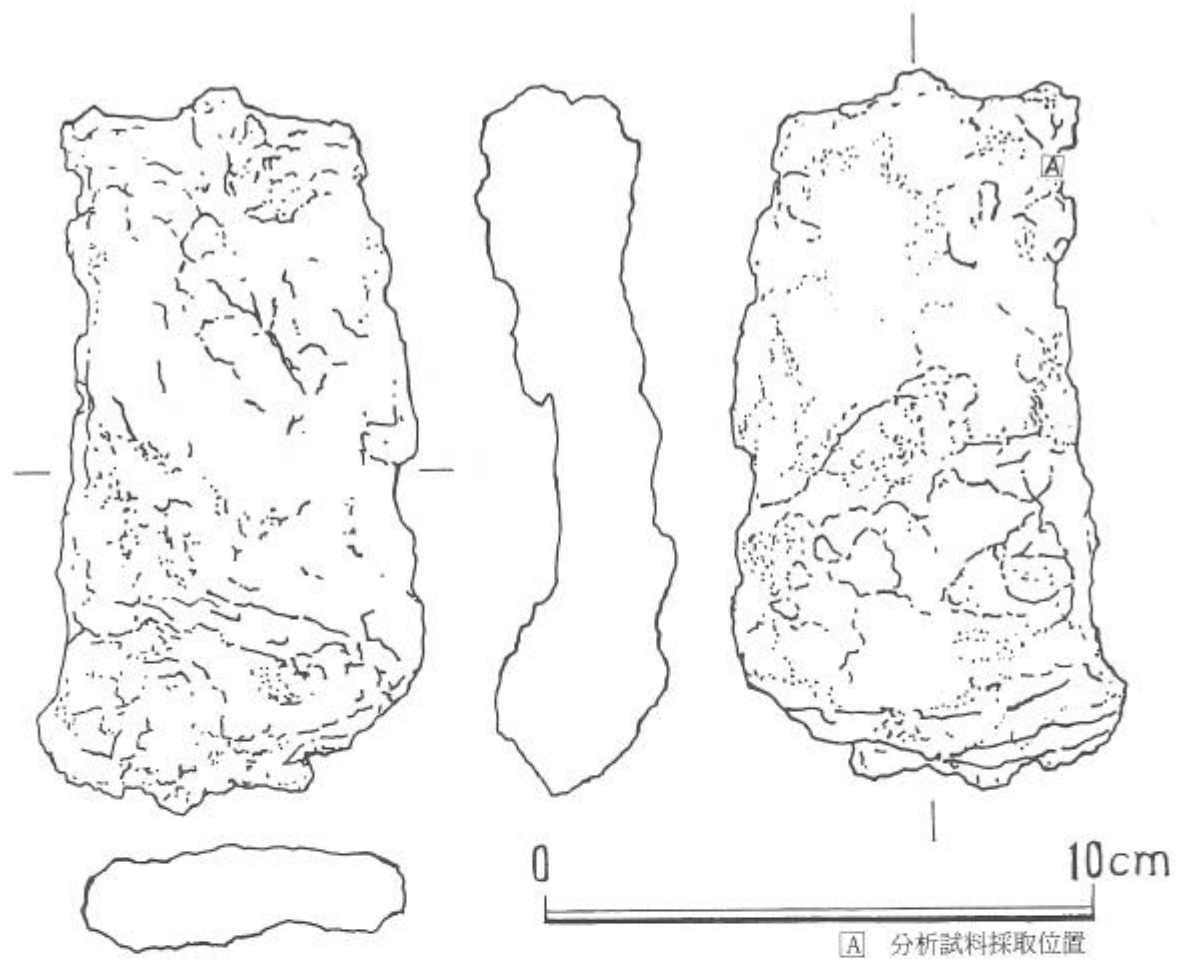


図1 第4号土墳墓出土鉄斧

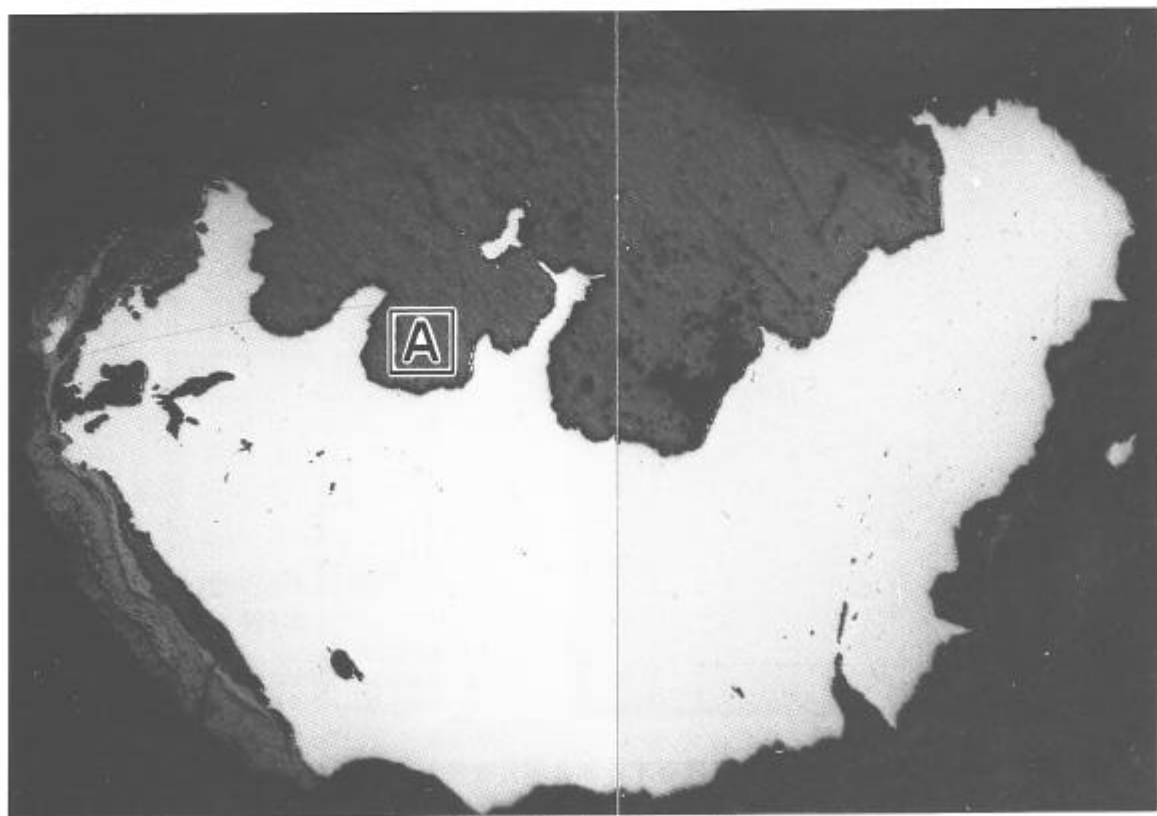
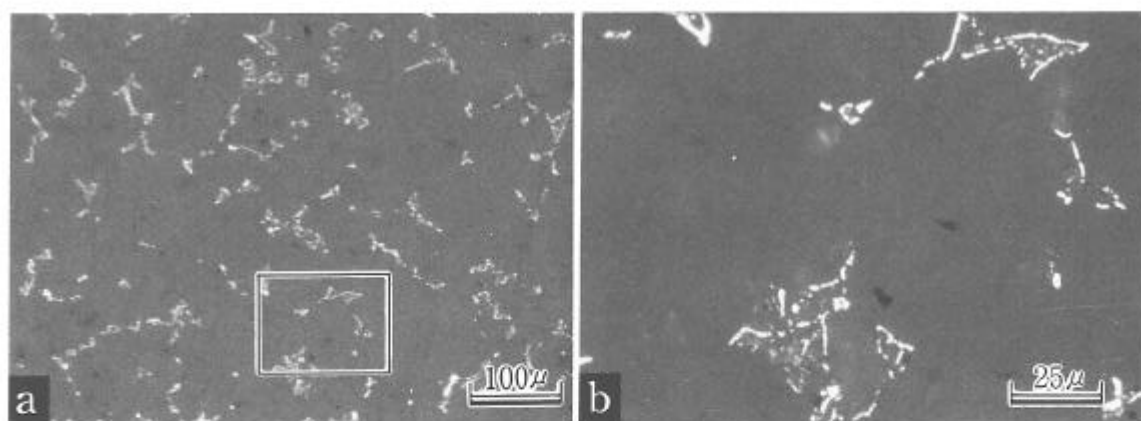


図2 鋳片のマクロ組織



bはaの枠線部分を拡大

図3 図2領域Aのマイクロ組織

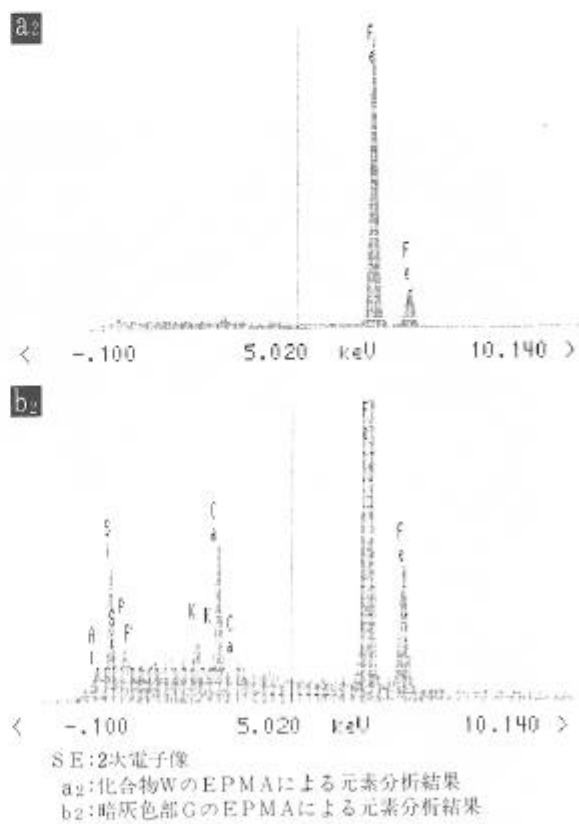
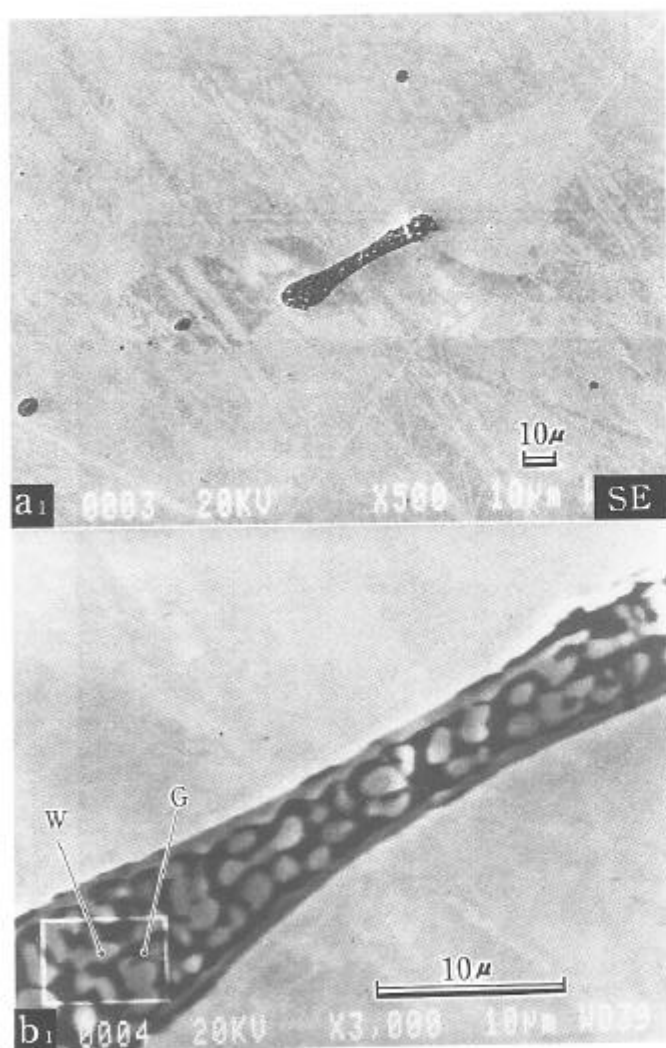
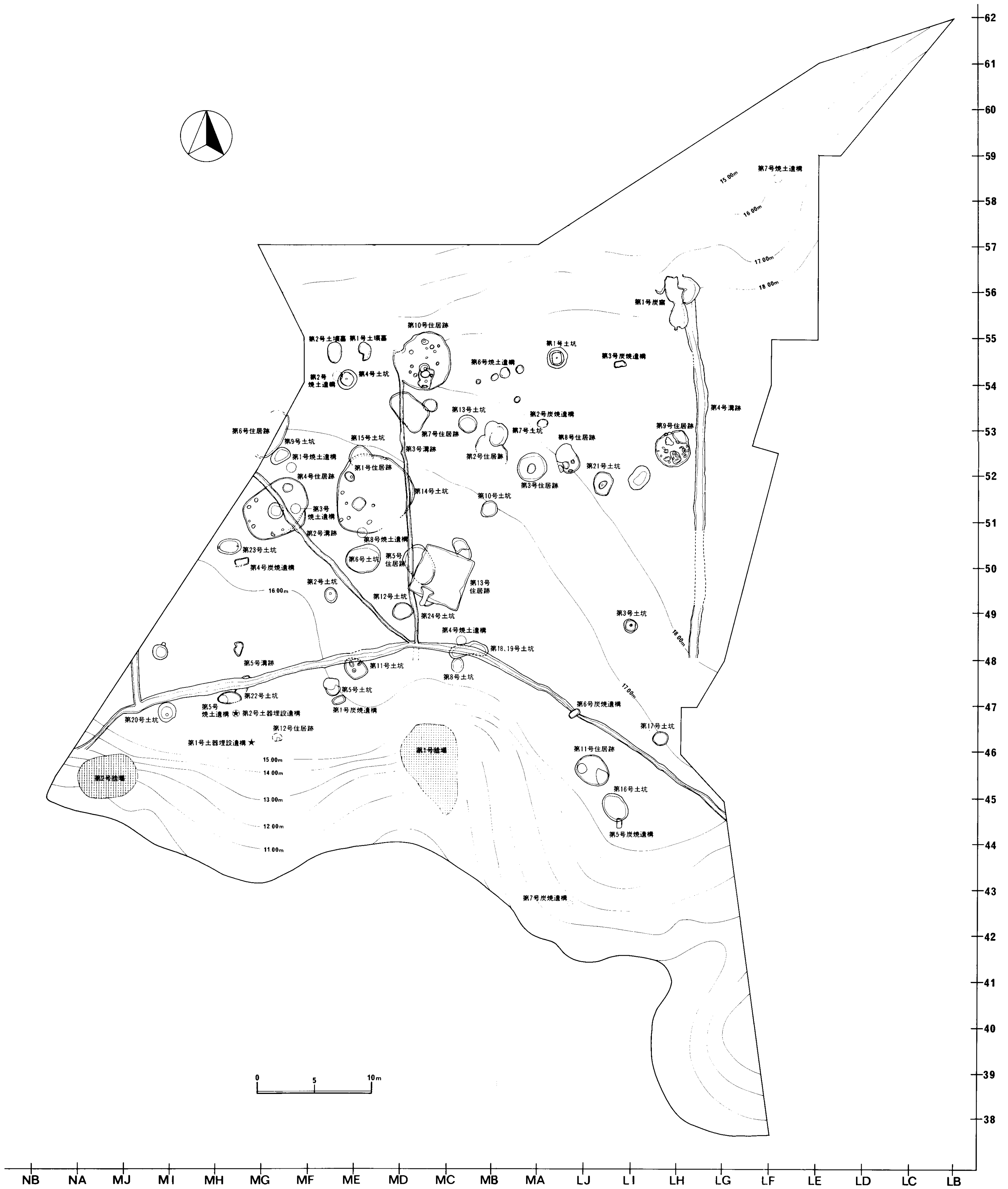


図4 メタル中に残存する非金属介在物とEPMAによる分析



付図1 寒川I遺跡遺構配置図



付図2 寒川II遺跡遺構配置図